THE CENTRAL REVIEW

中央公論

秋季特別號

第四十二年 第十號 第四百七十七號


秋の洋服と帽子は
今秋ロンドンの流行新柄生地が豐富に入荷致しました。型に、柄に、不斷の努力を續けつゝある弊店洋服部は、常に流行に魁する事を誇りと致して居ります。從て必ず御氣に召す樣調進し得ると存じます。
洋服の價値は共に調和する帽子に依て一層增すもので御座います。今秋歐米流行の新型帽が全部到着いたしました。是非御高覽を御待ち致します。
英　國、バタースビー、クリスティー、グリーン、ムーア
米　國、ステットソン、ハードマン、ノックス
伊太利、ボルサリノ
佛　國、モッサント
松屋呉服店
◇東京銀座◇

▲所謂「大系本」の名を以て、出版界に超然獨往の權威と聲譽とを擅にする「日本文學大系」の第三期事業茲に、獨立の一叢書として現はる。

豫約募集

校註國歌大系

內容見本 申込規定 進呈

監修

文學博士 尾上八郎
文學博士 和田萬吉
文學博士 上田萬年
內田貢
文學博士 藤井乙男
文學博士 藤村作
文學博士 笹川種郎
文學博士 三上參次
文學博士 新村出
文學博士 關根正直

編輯及校註

東京女子高等師範學校講師 文學士 石川佐久太郎
東洋大學教授 文學士 長連恆
日本大學教授 文學士 沼波守
東京女子高等師範學校教授 金子彥二郎
東京高等師範學校教授 玉井幸助
東京帝國大學文學部助教授兼司書官 文學士 植松安
法政大學教授 文學士 野村宗朔
國學院大學教授 文學士 山崎麓
學習院教授 文學士 山岸德平
中央大學講師 文學士 增子懷永
東京女子高等師範學校教授 第一高等學校教授 文學士 佐伯常麿

▲勅撰二十一代集を全部收載するは固より、萬葉集、古代歌謠、郢曲、准勅撰集、歌合及び中古近古の家集等を悉く網羅すると共に、散逸殆ど一堂に蒐集し難き近代歌聖の家集全部を編成して、新味更に一段を加へたるは、他に類例なき最大特色にして、寔に是れ間然する所なき國歌の大系である。

▲各卷擔當專攻學者の評釋詳密懇切、校訂校正嚴確、印刷鮮明、用紙柔靱、裝幀堅牢高雅、＝是れ既に我が「大系本」に對する定評

校註國歌大系全卷目錄

第一卷　古歌謠集　記紀歌謠
歌　琴歌譜　神樂歌　催馬樂　東遊歌　風
俗歌　夜須禮歌　田歌　梁塵秘抄　今樣　雜藝
（唯心房集今樣　異本今樣その他）
（五節間郢曲その他）　讃歎　和讃　教化
順次往生講式歌謠　和漢朗詠集　新撰朗詠
集　朗詠要集　宴曲　興福寺延年舞唱歌　山
王七社權現船謠　閑吟集　小歌

第二卷　萬葉集

第三卷　八代集上　古今和歌集
後撰和歌集　拾遺和歌集　後拾遺和歌集

第四卷　八代集下　金葉和歌集
詞華和歌集　千載和歌集　新古今和歌集

第五卷　十三代集一　新勅撰和
歌集　續後撰和歌集　續古今和歌集　續拾
遺和歌集

第六卷　十三代集二　新後撰和
歌集　玉葉和歌集　續千載和歌集

第七卷　十三代集三　續後拾遺
和歌集　風雅和歌集　新千載和歌集

第八卷　十三代集四　新拾遺和
歌集　新後拾遺和歌集　新續古今和歌集

第九卷　撰集・歌合　新葉和歌集
古今和歌六帖　續詞和歌集　在民部卿家歌
合　寛平后宮歌合　亭子院歌合　天德内裏
歌合　高陽院歌合

第十卷　御集・六家集上　崇德

第十一卷　六家集下
[illegible]天皇御集　長秋詠藻（俊成）　拾玉集（慈圓）
月清集（良經）
山家集（西行）　拾遺愚草員外（定家）　壬
二集（家隆）

第十二卷　三十六人集・六女集
三十六人集（三十六歌仙歌集）　六女集（清少
納言集　紫式部集　小馬命婦集　加賀保憲
女集　經信卿母集　俊成卿女集）

第十三卷　中古諸家集　大江千里集
曾丹集（曾禰好忠）　藤原公任集　惠慶法師
集　和泉式部集　赤染衞門集　源經信集
散木奇歌集（源俊頼）　左京大夫顯輔集
藤原清輔集　建禮門院右京大夫集

第十四卷　近古諸家集　源三位賴政
集　平忠度集　鴨長明集　金槐集（源實朝）
式子内親王集　金好法師集　草庵集（頓阿）
李花集（宗良親王）　慕景集（太田道灌）　衆
妙集（細川幽齋）　擧白集（木下勝俊）　黄葉
集（烏丸光廣）　草山集（深草元政）

第十五卷　近代諸家集一　晩花集
（下河邊長流）　戸田茂睡歌集　漫吟集（契沖）
春葉集（荷田春滿）　賀茂翁家集　垂雲和歌
集（澄月）　杉の下枝（荷田蒼生子）　六帖詠
草（小澤蘆庵）　魚彦歌集（楫取魚彦）

第十六卷　近代諸家集二　佐保川
（鵜殿よの子）　散りのこり（弓屋倭文子）　筑
波子歌集（土岐筑波子）　鈴屋舍歌集（本居宣長）

第十七卷　近代諸家集三
[illegible]
（村田春海）　[illegible]
錦木和歌集（賀茂季鷹）　[illegible]
葉集（本居大平）　三草集（松平定信）　良齋
屋集（本居春庭）

第十八卷　近代諸家集四　桂園一
枝（香川景樹）　良寛歌集（良寛和尚）　泊々
舍集（清水濱臣）　守部歌集（橘守部）　月
桂一枝（柳原安子）　浦の汐貝（熊谷直好）
海士の囀（足代弘訓）　晋清水（神山魚貫）

第十九卷　近代諸家集五　柳園家
集（海野遊翁）　柳園詠草（石川依平）　山齋
歌集（鹿持雅澄）　檍園集（中島廣足）　千々
廼舍歌集（千種有功）　草徑集（大隈言道）
柿園詠草（加納諸平）　空谷傳聲集（釋幽眞）
亮々遺稿（木下幸文）

第二十卷　明治初期諸家集　調鶴集
（井上文雄）　平賀元義歌集　落葉集（福田行
雄）　野雁歌集（安藤野雁）　志濃夫廼舍歌
集（橘曙覽）　しのぶぐさ（八田知紀）　海士
の刈藻（大田垣蓮月）　由良室集（僧辨玉）
向陵集（野村望東尼）

第二十一卷　作者部類・索引一
總目錄　作者部類　索引

第二十二卷　索引二

第二十三卷　索引三

▲豫約申込十月廿八日限

規略

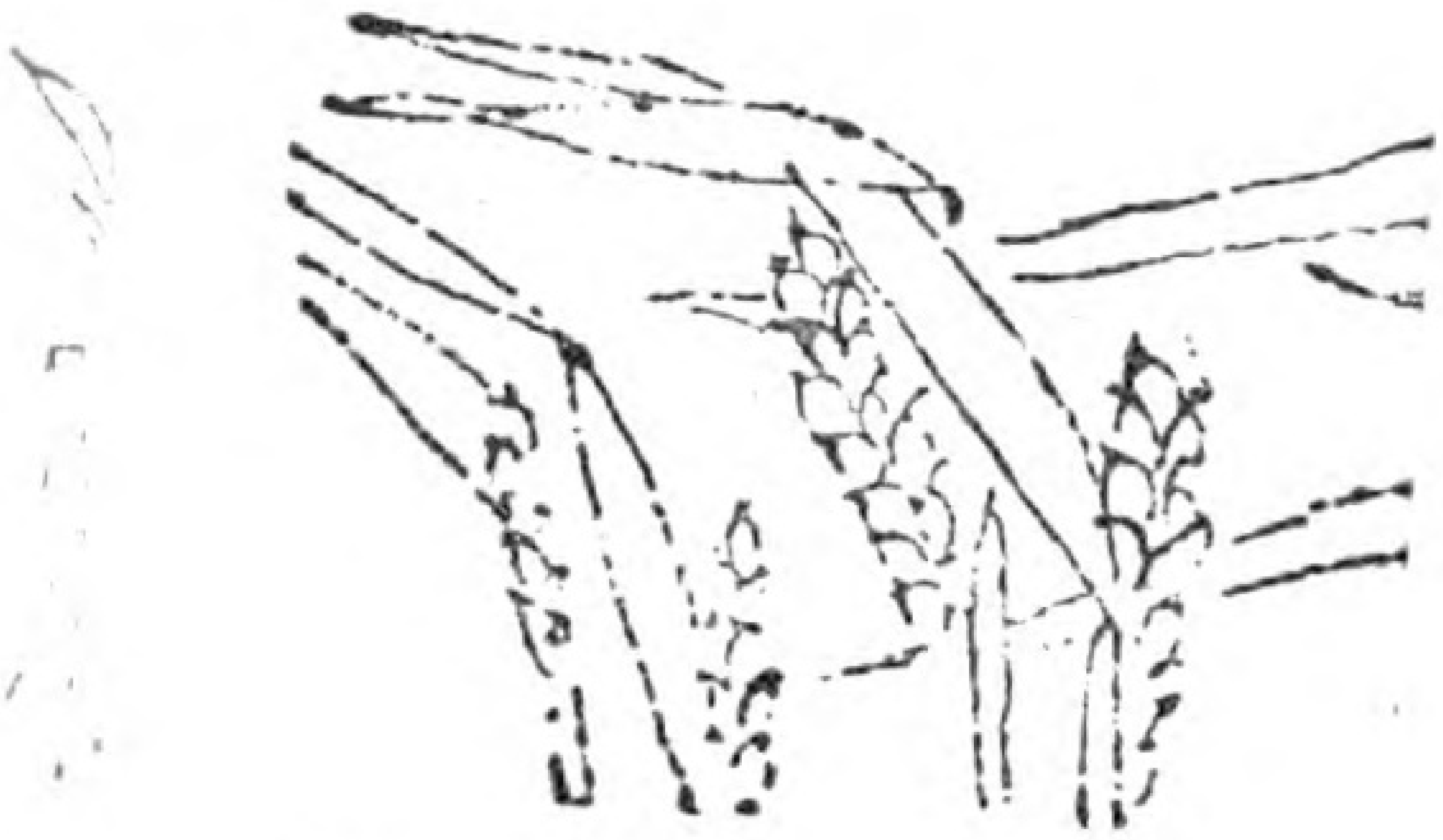
▲申込金四圓▲毎月拂込金參圓八拾錢▲一時拂
金八拾五圓▲外に送料を要す▲送本十二月より
毎月一冊二十三ヶ月完了

體裁

▲四六判天金總布製極美本
▲全部九ポイント活字組
▲紙數平均九百頁

▲申込所　東京市麹町區
内幸町一ノ六　（振替東京五三二九八）
電話銀座（57）｛七八三番　二一八八番
三六八六番

國民圖書株式會社



お前(日本)は支那に何を望むか

▼説苑

雲



躍り上つて喜ぶ

彼は丸善の萬年筆を差し上げて躍り上つて喜んでゐます。型と云ひ書き具合と云ひ少しも間然する處のない氣持のイヽ出來具合に思はず歡喜を禁じ得なかつたからです。やがて彼は其耐久力に一驚し、更に使へば使ふ程書きよくなる丸善の萬年筆獨特の精巧さに再驚する事でせう。

オノト萬年筆　七圓五十錢以上

アテナ萬年筆　三圓五十錢

萬年筆用**アテナインキ**　三十五錢

送料各十八錢（カタログ進呈）

¥1.80

古銘刀の切味がある

バレーには廣光の銘刀の切味がある、とは吾學界の世界的權威者が科學的に實證する處だが、僕の體驗から云つても正に相違ない。此の切味を見よ。一段と男振が上つたわい

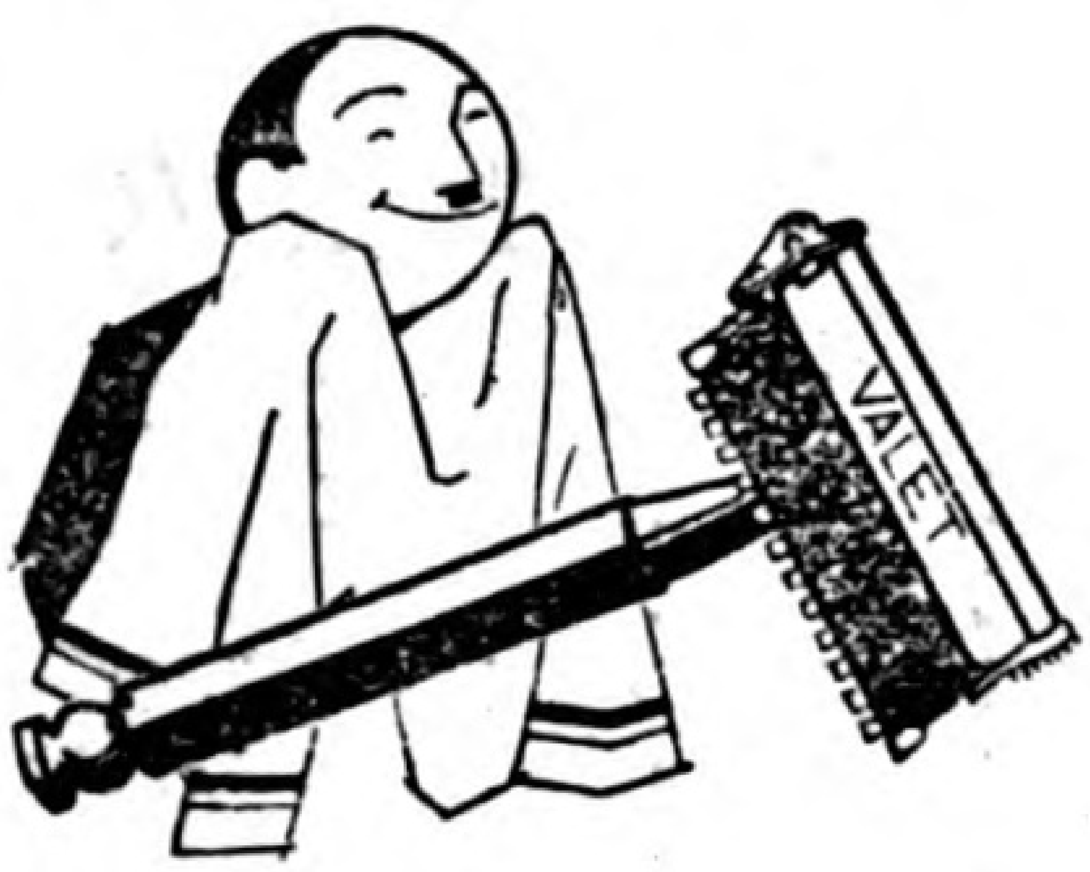
研ぐ時は研器となり剃る時は剃刀となり一枚の刄が半年もの使用に耐へる

バレー自働研安全剃刀

C型九十九號　一圓八十錢　送料十八錢

其他三圓八十錢・五圓五十錢・十三圓五十錢・以上などあります。（カタログ進呈）

賣捌店　著名百貨店洋物雜貨金物店等



"VALET"

東京市日本橋區通三丁目

大阪　神戸　京都　名古屋　**丸善株式會社**　横濱　福岡　仙臺　札幌

東京＝神田・三田・早稲田・丸ビル



きのこ

小杉放庵筆

芥川龍之介全集編纂につき謹告

今回芥川龍之介全集を編纂致しますについて俳句歌書翰其他を汎く蒐集致したいので、それ等の材料御所持の方は左記條項御承知の上どうか私達に一時御貸し願ひたいと存じます。尚此旨御心當りの向へも御傳達願へると幸甚です。

一 御郵送は至急に願ひます。
一 材料は凡て肉筆を希望します。
一 書翰は御差支の部分は公刊の際削除しても宜しうございます。
一 取捨選擇は私達に御一任願ひます。
一 御貸與の品は複寫の上順次書留郵便で御返送致します。
一 御送附は東京市神田區南神保町十六番地岩波書店內佐佐木茂索宛に願ひます。

昭和二年九月

芥川龍之介全集編纂同人（いろは順）

小穴隆一　久米正雄
谷崎潤一郎　小島政二郎
恒藤恭　佐藤春夫
室生犀星　佐佐木茂索
宇野浩二　菊池寛
久保田万太郎



石黒忠悳



阪正臣



田中光顯



金子堅太郎

大帝美談

日本人たる者は何人も必ず讀め！

修身齊家の龜鑑！子々孫々傳家の寶典!!

四六判八百四十頁、上製函入美裝

▲大帝御靈筆を始め口繪十六頁 ▲東西四十二大畫伯の挿繪

▲直宮三内親王殿下の御歌 ▲一木宮内大臣の題字

▲總理大臣、内務大臣、文部大臣、帝室編修官長の序文

大犧牲！此大著とキング本誌と

二冊で特價壹圓

增刷不可能！買損ねぬやう直ぐ書店へ申込あれ！



島畫伯裝幀●
波模様背金文字＝

臨時帝室編修官長 三上参次
伯爵 坊城俊良
元典侍 千種任子
海軍中將 松村龍雄
元典侍 小倉文子
元侍從武官 上田兵吉
東京美術學校長 正木直彦
元命婦 西西子
陸軍中將 長岡外史
宮中顧問官 日根野要吉郎
宮中顧問官 新山莊輔
海軍大將 有馬良橘
男爵 田健治郎
元命婦 生源寺伊佐雄
宮中顧問官 吉田要作
前總理大臣 高橋是清
貴族院議員 藪篤麿
陸軍大將 本郷房太郎
元掌侍 吉田鉦子
宮中顧問官 長崎省吾
明治神宮宮司 一戸兵衛
元命婦 樹下定江
子爵 後藤新平
宮中顧問官 日野西資博
公爵 德川家達
米國文學神學博士 グリフィス

東京本郷
大日本雄辯會講談社
（振替東京三九三〇）



昭和二年

中央公論

十月一日發行

秋季特別號

第四十二年第十號

第四百七十七號

府縣會議員選擧に際して

今度の府縣會議員の選擧に際して君は如何云ふ態度を取るかと云ふ質問を最近屢々各地の讀者から受ける。細かく云ふと之等の質問の內容は頗る多岐に亘り一樣にお答へすることは出來ない。無論各政黨に對しての質問もあれば旣成政黨に關する疑義もある。併し中に就き一番多いのは何故に現政府與黨たる政友會が斯く世間の評判がわるいのかと云ふ質問であつた。依て私はこゝに政友會に對する私一個の態度を忌憚なく告白して讀者の參考に供しようと思ふ。取捨は固より諸君の自由である。

私自身は次の二つの理由に依り、政友會に屬する候補者には斷じて投票しないと云ふ決心をかためて居る。第一は府縣會議員の選擧に成功さして直に來年の總選擧に臨ましむるときは政友會は必ずや勢に乘じて益々幾多の罪惡を重ぬべきを以てであり、第二は土臺私は永く政友會に天下を取らしておくに堪へぬからである。

右の點をモ少し詳かに述べて見よう。

第一に何故に私は永く政友會に天下を握らして置きたくないかと云ふに、政友會は昔もさうであつたが今度は更に一層甚しく、政權の維持擴張の爲には何物も顧みぬといふ在來の特色を發揮して居るからである。何を以て斯く云ふやなどと訊くだけが野暮。見よ、彼等は政權を握るや否や（一）直に地方官の更迭・滿鐵首腦部の入替等各方面の人事に不當の干涉を恣にして早く已に橫暴專擅の素地を作つて居るではないか。その上（二）何の救濟だ彼の補償だと云つては公金を有力筋に振り蒔いて暗に選擧の時の後援を約せしめ、（三）場合に依ては之と交換に自黨に多額の寄附を內密に提供せしめて居ると云ふ噂もある。何處に國家の大事を托して安心し得る餘地が見出せるか。

何よりも私の懸念に堪へざるは、飽くなき黨內有象無象の專恣橫行を制御する力が不幸にして田中總裁に缺けて居ることである。久し振りで政權にあり付いた末輩の輕卒が、貧乏人が俄に思はぬ大金を手に入れた時のやうに、愚にもつかぬ過失を犯すのは深く咎め難しとしても、せめて總裁並に之を取り卷く最高幹部に國家の利害を達觀し大局の正しき打算に基いて十分統制の功を收むる能力がなくては、到底我々國民は安心して彼等の切り盛りに天下を任せることは出來ぬのである。而して田中大將は最近歷代の首相中この點に於て最も影の薄い手腕の

危まる政治家ではないか。

次に今度の府縣會議員選擧に成功したくないと云ふにも細かく云へば二つの理由がある。一つは之に勝てば彼等は必ず目前の成功に眩惑してその戰法の如何に國家を害するやに反省するを怠るべきを以てである。政友會内閣が今次の選擧を當て込んで如何に地方の有志家に阿ねつて居るかは、最近新に掲ぐる所の各種の政策施設を調べれば分る。彼等の所謂積極政策も要するに此秋の選擧までと高を括る人もあるが、假令一時でも大衆を犧牲にして少數有産者に阿ねるはそれ自身許し難く、一たび此手で成功した者は次にまた必要に應じ元老貴族の歡心を迎へんとして何事をし出かすか分らない。モ一つには來年の總選擧が心配になる。乃ちこゝにも同じ戰法が繰返さるるは疑なく、且又今次の選擧に政府のお蔭で當選の榮を得たものは得たり賢しと喜んで政友會の走狗となり公然醜穢なる誘惑を更に大衆の上に試みるに相違ない。さすれば其結果は、益々政友會の横暴を助けて國家の利益は著しく損傷され且つ折角醒めかけた國民の良心は再び麻痺して復もや政治道德の水準を大に低下することになるだらう。斯く考へて見ると、目前の利害から云つても遠い將來の得失の論としても、今度の選擧には何としても政友會に勝たしたくない。今度の選擧は府縣會議員の選擧だ、その勝敗は直に内閣の運命に關するのではない、負けても政友會はその儘大任に留つて來年まで緩つくり反省するの餘裕はある。それ丈け私の胸の中には無理にも今度は負かして見たいやうな願望が強烈に動いて居るのである。

斯く云ふたからとて私は無茶苦茶に政友會に反感を表せんとするものではない。私の氣分をいへば政友會と同じ程度に民政黨も嫌ひだ。只茲に特に政友會を問題にする所以は彼が現に政權を握つて居るからである。現に政權を握つて居るものは兎角大なる過誤を犯し易いが、又同時に政治の現實なる過失から反省する途も備つて居る（野黨は單純なる批評の立場に居り現實の政治を積極的に左右するの地位には居ない）。私の特に政友會を責むるに強きは、實は彼が速に政黨本來の使命に反省せんことを冀ふからに外ならぬ。政權の獲得維持並に擴張の爲に手段を擇ばざりしは舊式のやり方だ。やがて滅び行く政界の有象無象は之でも摑めよう。併し新興民衆の目醒めたる魂を永く將來に引き附けようと思ふなら、全然心掛を改めて出直して來い。いゝことをさへするのなら我々は誰にでも一票を投ずるの用意がある。

再び繰り返して云ふ、私は政友會所屬の候補者に投票しないことが、眞に國家の政治を革正する所以だと差當り考をきめて居る。併しこの結論を讀者に強ゆる心算は私に毛頭ない。心ある人は私の論旨を通觀して、必ずや自家の態度をきめる上に何等か參考になる點を見出さるるであらう。

中央公論



杉森孝次郎氏に與へて氏の機能主義社會の志向と構造と實現の工夫とを論ず

第四十二年第十號
秋季特別號
第四百七十七號

田中王堂

親愛なる杉森君足下

一

わたくしはあなたの近業『社會學』に就いてわたくしの意見を公表することにいたしました。ついては、わたくしの見地からあなたの所論の細目に亙つてそれぞれ鑑賞と批判とを開陳するに先だち、この書の窮極志向に對してわたくしの一

般態度を言明して置くことが便利であるのみならず、一緊要事であると信ずるのであります。さうすると、わたくしの一般態度を決定する材料として、この書がわたくしに愬へる其れの窮極志向は何んでありますか。

現代生活には確かに其れの深奥處に一大疾患が内在して居ります。そして、其れが今日に於ける殆どあらゆる種の缺陷の醱母となつて居るのであります。やゝもすれば世人が非難し、若しくは、嫌惡する意味で、近世文明の特徴なるものを指摘する時、若しそこに眞に彼等の非難に相當する事實の存在することがあるならば、其等の事實はこの疾患が異なる機會に於て發動し、偶ま異なる形態と傳彩とを取つたのに過ぎないのであります。其の根本疾患とは他ではありません。其れは現代に流行する一種の二元觀であります。人間の經驗、若しくは、生活の考察に於て、作用として始めて成立するものを、本質として存在するものと、兎角、想像するのがこの二元觀であります。絶えずはたらき、飛躍し、創造する人間の經驗、若しくは、生活が意義と材料、即ち、樣式と內質とより組織されると言つても、此等は其れの活動が理智に依つて觀照される瞬間に於てのみ、圖式的に其れにまで現はるゝに過ぎません。されば、便宜上人間の經驗、即ち、生活を組織するものとして相關的にして依立的なる其等の二側面のあることが假定されるにしても、わたくし共の理會をして甚しく其の眞相より遠ざからしめないためには、兩者の役割はどこどこまでも動的に、作用的に識別されなければならないのに、其等を靜的に、本質的に分離して了ふのがこの二元觀であります。

わたくしがかういふ風に、かういふ言葉で、現代人の心の中に內在する二元觀の性質を説明したゞけでは、其れが何故に現代生活の最大疾患となり得るかに想到しない讀者も尠なくないでありませう。然し、わたくしは驚くべき程度に强く、汎く現代人の多數者の感じ方、考へ方、乃至、行ひ方が自他の血緣と關係とを辨ぜず、徒らに互ひに反目しつゝある固陋なる理想主義と輕浮なる經驗主義との二暴君の分割し、專制するところとなつて居るのは儼として現代生活のはたらきと改造とに取つて損害であり、そして、其等の二暴君はこの二元觀を母とし、彼女に依つて產出され、哺育された双生

見であることを知悉するが故に、わたくしは何等の躊躇するところなく、この二元觀を以て現代生活の最大疾患と斷ずる者であります、斷ぜざるを得ない者であります。

實に、今日、實行的にと等しく理論的に、又、個人生活と、社會生活と、そして、國際生活とに於て、最も顯著に、且つ、最も執拗に近世文明の明敏なる運用を妨げ、其れの活潑なる進捗を遮つて居るものは理想主義、及び、其れの一變形たる神秘主義と經驗主義、及び其れの一變形たる唯物主義とに他ありません。

如何なる時代に於ても、大體さうでありましたが、特に近世に於ては、理論や、教訓よりも生活そのものの方が、自覺としてではなく衝動としてではあるが、確かに、遙かに賢くありました、尠なくとも正しくありました。固より衝動でありますから、其れの動きに依つて暗示される意味と方向とを醇化することに依つて、其れのはたらきを統一し、其れの力を節約するところの或る忠告と指導とを必要としました。然し、實際に忠告者となり、指導者となつた人々は、固陋なる理想主義の感化の下に神秘主義者となつて居つたものか、經驗主義の主張に迎合して唯物主義者となつて居つたものかでありました。わたくしのこの觀察は理論的にはたらいた人々にも、實行的にはたらいた人々にも等しく當て嵌るのであるが特に悲劇的の意味を以て、一層適切に實行的にはたらいた人々に當て嵌るのであります。こゝには其の煩を避けて、ただ理論的にはたらいた人々の中でも人口に膾炙されて居る者の名を擧げて見ても、カアライル、トルストイ、マジニ、ハックスレエ、クリッフォード、バックル、ニチイエ等がありますが、此等の孰づれの一人が能く神秘主義者か唯物主義者かの範疇を脱して居ますか。科學的たることを標榜したカアル・マアクスの學說さへ多分に神秘主義と唯物主義との沒批判的な混合物から成り立つて居るではありませんか。

然し、現代に於て見出される害惡なるものの大部分は、畢竟するに、人間がおのれの生活の事件を考察し、評價するのに、一方に於て、神秘主義的であると同時に、他方に於て、唯物主義的であるところの二元觀から化釀されたのでありま

すから、理論的にでも、實行的にでも、其等を除去することに從事しながら、神祕主義、若しくは、唯物主義の世界に關踏して、其れを爲して居る生活改造者の思想、若しくは、行爲は、一つの現存する害惡を除去しようとして新たに他に其れに等しき、若しくは、其れにも優る害惡を化醸することを免かれません。人類の最後の幸福は眞理に依つてのみ建立されるのですが、彼等は眞理の代はりに教訓を以て其の目的を成就しようと努めて居るのであります。

さうすると、今日の文化の程度では、洋の東西を問はず、稀有の現象ではあるが、こゝに一人の生活批評家があつて、一層高き、廣き、そして、自由なる見地より在來の經驗主義と理想主義とに超越しながら、其等の本來の志向に隨つて改釋することに依つて、其等の高次的の融合を結果し、總べて理想的なものは一つとして自然的の基礎の上に立たないものはなく、總べて自然的なものは一つとして理想的にまで發展せずして止むものはない、理想と自然とは總べての種の經驗が必然に具備する自己支持の側面と自己發展の側面とに分析的に賦與された名稱であるといふ理會を以て、人間文化の經過と、機構と、所産とを考察し、解釋しようとして居るならば、わたくしは彼れに尠なくとも人生批評家としての基礎的資格を許すのであります。そして、あなたは斯かる稀有な一人であります。

あなたが理想主義、現實主義の超越者、即ち、其等の高次的融合者として優に人生批評家としての基礎的資格を有たることは、幫襯にこの書の到るところにわたくしの逢著するところでありますが、わたくしは之れが證左の極めて有力なものとして、

『しかしながら、功利と藝術とは、根本に於て一元だ。功利主義は進歩的藝術主義だ。藝術主義は瞬間的功利主義だ。豫期される藝術が功利だ、實現される功利が藝術だ。進歩は現實の成長だ。それゆへに、功利主義を肯定しない藝術主義は惡だ。それは、藝術主義自身として充分に善なるものではない。』(頁一二九—一三〇)

を、更らに一層有力なものとして、

『人間が人間であることをやめない限り、いかなる唯物史觀的眞理もつひに唯心史觀を完成するための一努力以外のものではない。』(小記頁二一二)

を擧げるだけで十分であると思ひます。

わたくしの理會するところに隨へば、あなたの機能主義社會は理想主義、經驗主義を超越すると同時に、其等を高次的に融合して得た最も自然な、最も自由な、そして、最も合理的な感じ方と、考へ方と、行ひ方とを運用して、現代文化の明示と暗示とに隨つて、素直に、聰明に、(わたくし共の努力にて結果し得る限りに於て、)現代生活の配合を改整し、其れの部分部分の價値を改價して實現される社會狀態であります。そして、この社會學の窮極志向がさういふ社會狀態を促進するのにあるならば、其れに對するわたくしの一般態度としては、わたくしは何等の保留するところなく全然の同意を、贊意を表白するに盡されます。されば、あなたの考察や推理の細目に就いて、若しわたくしが反對を宣し、疑惑を狹み、乃至、訂正を試みることがあるならば、其ればあなたの機能主義が確實に其の本來の目的を達成し得んがために、其れをして一層機能主義的たらしめようとするわたくしの微意に他ならないのであります。

二

若し久しく衒學に依つて衒學化され、記誦之學に依つて記誦化されて來た讀者にして卒然この『社會學』の一卷に接するならば、社會學が學として成立するためには須らくこれこれの體裁を具ふべきであるとする彼れの幼稚な、固定した先入主よりの豫斷から、先づ彼れは其れを掌上に載せて其れの餘りに小冊なるに驚き、次に其れを開いて其れの項目の數の餘りに貧寒なるに驚き、最後に、其れを通讀するに及んで、更らにそこに取り入れられた項目の選擇に關する不細心と其等の一々に關する敍述や、議論の餘りに粗鬆にして、且つ、或るものに偏倚するのに驚くでありませう。然し、斯くの

如きは畢竟するに、彼れが未だ偉大なる書物、若しくは、偉大なる教師に親炙したことのないためにこの一つがあれば他にどれほど缺けるところがあつても一つの學は優に成立する、其れに反して、他にどれだけのものを具へても、この一つが缺けては到底一つの學を組織し得ないと言はなければならないものが果して何んであるかを確認するに至らず、隨つて、漫然、現に流行の社會學の形式に依つて將來の社會學の構造を律しようとする情操に過ぎないのであります。斯くの如き單純な、そして、低級な標準からしては、何故に永久にプレトォの對話がアリストォトルの學説より學として優れた價値を有つかを鑑別することは出來ません。學の成立に必須とされる條件は極めて嚴重に限られて居りますが、其れを一つの形態にまで體現する氣分と樣式とは無限に自由であり、變化質に富んだものであります。されば、わたくし共が學問の一分野に於て、或る程度の獨創力を有つた一人の學者の新たに著書を公にしたと聞いた時に、わたくし共は、當然其の限りに於て、其の著がいろいろの點に於て從來の類書と異なることのあるべきを期待しなければなりません。嶄新性は新たに生れ出づるものゝ卓越性を形造る一つの缺くべからざる成分であります。

それでは、其れの外形に於ては世間の流行の社會學と相違することの大なるに拘はらず、あなたの著書をして嚴密な意味で學の本質を完全に具へさして居るものは何んでありますか。わたくしからすれば、其れは最も正しき、そして、蘊蓄ある意味で、其れが豫言的であることであります。全編が豫言的の情熱と豫言的の知見とに滿ちて居ることであります。

豫言的といふ言葉は古い言葉ではあるが、其れの意義はこれより新たに發揮されなければならない言葉であります。わたくしの理會するところに隨へば、或る思想が豫言的であると言へば、其れは現存の傾向の中に生活を組織する總べての要素を認識し、其傾向の指示に隨つて、其等の要素の各に正當なる意義と價値とを賦與した後、全體として出來得るだけ幸福なる狀態を齎らすやうに（人間の努力の能くする限り、）主觀的選擇によつて其等の結合と方角と支配し、觀念的に其の結果を實驗することであります。豫言的といふことをこのやうに解釋すると、（そして、現代文化の理想に依據して語

ば、これ以外に豫言的といふ言葉の解釋のしやうはありませんが）何故に豫言的であるといふことが現代の學問に取つて其れの中心動力とならなければならないかの理由は明かであらうと思ひます。生活の事實は何人でも經驗し、其等の價値は何人でも體驗して居ることであります。たゞ或る者は正しき意味に於て其れを豫言的に統一するのに、他の或る者はさうしないところから、或はさうすることの出來ないところから、こゝに或る者は正しき意味に於て學を組織するのに、他の或る者はさうすることが出來ないのであります。豫言的の情熱と豫言的の知見とは學のAlphaであつてOmegaであります、認識論といひ、方法論と言つても、畢竟するに、其等を組織し、制限するものは、豫言的の情熱と、豫言的の知見との他に何物もありません。

わたくしは、あなたの觀察的、辯證的態度を説明するあなたの言葉として、

『社會學は勿論認識的光照の一種だ。しかし、光照は單なる受動、反映を方法とすることによつては不可能だ。光照の方法は必然的に能動的だ。新光照が新行動化しないならば、その假定された新光照は他のなにものかだ。』（小記頁三〇）

といふ文句を見出だします。大して牽強附會せずして、わたくしがここで語つて居る豫言的情熱と豫言的知見とに相當するものと取れると思ひます。あなたは、あなたの豫言的情熱と豫言的知見とに依つて、現代社會を組織し、動かして居る總べての要素のはたらき振りを動的に觀察し、解釋して、あなたの謂ふところの機能主義社會を觀念的に建設して居るのであります。それがこの書の達成しようとして居る唯一の目的であります。この唯一の目的を中心としてあなたが最善の成績を擧げやうと考慮されて居る限り、如何なる事柄を取り入れ、如何なる事柄を取り除くかは全くあなたの自由裁斷に屬することであります。あなたの考慮次第で現にこの書に含まれて居るものを十倍に増しても、若しくは、半分に減じても、この唯一の目的の達成に關して現にあなたの擧げようとして居る實績を外にして、他人からそれが多すぎるとか、

豁なすぎるとか容昧することは何等の意味をも成さないのであります。

ジエ・エス・ミルは彼れの父なるジエムス・ミルを品隲して、『彼れはあの偉大なる時代（即ち十八世紀）の最後の偉大なる人物であつた。』と揚言いたしました。人類は他の事柄に於けると同樣に、學問の事柄に於ても、十九世紀を經て今世紀に到るまでに十八世紀の人々が夢想することさへ出來なかつたいろいろの經驗と智慧とを獲ました。確かに觀察は精細になり、推理の方法は巧緻になつて居ります。然し、十八世紀が創造の時代であつたのに、十九世紀、二十世紀は纔かに補綴の時代たるに過ぎません。十八世紀の學者は學問の研究に入るに先立ち、彼等は其れを派生した生活と其れとの關係より其れの意義と構造とを規定しました。十九世紀、二十世紀の學者は學問の傳統を繼承することを彼等の仕事の起點とし、前人の學說の敷衍と修正とに跼蹐するところから、彼等は常に生活と學問との關係を等閑視し、終には、學問そのもの、志向をも沒却することになります。今日に於て人類の開放のために永久に一轉機を劃したあの光榮ある十八世紀に對して愛惜と嘆美との情を洩らすのは、世の中に獨りわたくしばかりではありますまい。

わたくしがあなたを多とするのは、特にエピゴノイのみに依つて滿たされたるわが學界に於てあなたを多とするのは、あなたがその觀察と論理とを十九世紀的、二十世紀的にして居るに拘はらず、其れを運用する情操と態度とにあの十八世紀的の奔放と、光耀と、到徹とを保持して居らるる一事であります。思索家としてあなたのこの特徵は確かに學界の珍として、啻にわが國に對つてのみならず、世界に對つて一服の淸涼劑たるを失ひません。

今日の如く、アングロサクソンの文化とチユウトンの文化とが錯綜し、融通し合つて居る時代に於て、哲學に於て英米思想と獨逸思想とを特に對立させることは極めて困難であります。隨つて、强ひてさせれば無意味ともなります。然し、大體人間の經驗に關する考察に於て英米思想は其れの個別的の構造の側面に留意し、獨逸思想は何物にも優れて其れの全統的意義の側面を崇敬し、高調する傾向があるといふことは事實に相當することゝして言はれ得ると思ひます。此等の二

つの考へ方には、一得一失がありますが、正しき比例に於て其等を融合することを怠らざる限り、此等のどちらの一つも全く捨てることは出來ません。つまり、或る特定の時期に方つては、あらゆるものは特定の意味と傾向とを有つた特定の構造に制限されて居ります。當の時期に方つてこの構造は最後の實在としてわたくし共が最も尊重しなければならないものであります。然し、或る一つのものの構造は其のものと全體的の關係にある總べて他のものとの交渉によつて、其の交渉の續く限り存在し、其の交渉が變化する樣式と範圍とに隨つて、質的に、量的に、其れの組織は變化するといふ考へ方が、最も正しく兩者の長所を取り入れ、融合したものであります。そして、この考へ方は社會生活に關する文化史的考察を爲すのに最も大切なものであります。

わたくしは嘗てあなたの思索方法が（さう言つては失禮でありますが）法外に、迷信的に獨逸の其れを謳歌して居た時期のあつたのを知つて居ります。合理主義の爲すがやうに超越的全體の觀念を禮拜して居た如きは其の徴候の一つでありました。然し、歐洲に御留學中、及び、御歸國後に於て、あなたは實驗を尊重する英米の思索方法に大分近づいて行かれたやうです。わたくしの多大の興味は、刻下に於ける英米思想と獨逸思想とに對するあなたの理會と態度とを知ることでありましたが、この書を讀むに及んで、あなたは賢明にも英國思想の沒批判的な分子主義的の側面を切り棄て、其れを取り入れると同時に、獨逸思想の批判的な作用主義的の側面だけを切り離して、其れを取り入れ、巧にあなたの機能主義を構成して居らるゝのを見て、あなたが思想家として正しき道程を歩みつゝあるのを知り、實は且つは歎び、且つは安心したわけであります。

思想的に、實行的に、現在に於て、將來に亘つて、正しく、そして、豐潤に生活を批判し、指導して行く思索方法は、從來の經驗主義と理想主義との偏頗と制限とを超越しながら、其等に含まれた眞理を融合するものでなければなりません。然し、わたくしの考へてゐる意義や、形式に於ては、彼等の傳統や、迷信や、淺薄な享樂主義に禍ひされて、この見地に

到著することは今日の歐羅人に取つてなかなか至難の業であるらしく思はれます。彼等は今日に至つても、依然哲學的に考察するといへば、ある種の形式主義か、神秘主義か、超絶主義かに陷ゐるの外に道はないやうに思はれます。然し、わたくしは現在に於て、將來に亘つて、わたくし共の哲學となるものは確かにベルグソンの直觀主義でもなく、新カント派の新觀念主義でもなく、又、フッサアルの現象學でもないと信じます。

現在に於て、將來に亘つて生活の批判たり指導たる哲學の樣式と精神とは如何なるものであるべきか。わたくしはわたくしの象徵主義文化の思想に依つて其れを考へて居ります。あなたはあなたの機能主義社會の思想に依つて十分に其れを考へて見て下さい。

三

こゝまで、このやうに、思想家としてのあなたの特異性、即ち、卓越性に就いて觀察を進めて來たわたくしは、漸くこの手紙の中心動機に達することになりました。其れはあなたの理會に隨つて、謂ふところの機能主義社會の意義と、構造と、實現の過程とに關してわたくしの鑑賞と見解とを申し上げ、聊かあなたの考慮を煩はしたいといふことであります。

抑も一つの理想としてあなたが其れの實現を思念された機能主義社會とは如何なるものでありますか。其れは如何なる構造に依りて如何なるはたらきを爲すものでありますか。わたくし共はあなたの敍述に由りて、其れの本質を髣髴することが出來ます。あなたは或る箇處に於て、其れを說明して、

『機能主義社會と、私が、こゝで呼ぶところのものは、勿論、社會的一全體内の各部分がその部分自身にとつて目的を、そして他のすべての部分にとつて或手段を、意味しうる狀態をいふ。されば、機能主義社會は奴隸制度を許容しない。どうしてかといふに、奴隸制度は、一面に於て、自己が自己の目的であると同時に、他の手段でない專制者の個

人、及び國、群の存在を、そして、他面に於て、自己が專ら他の手段であつて、殆んど全然自己の目的でない卑屈者、屈從者の存在を意味する。階級社會は勿論奴隷制度社會だ。機能主義社會は、また、單なる多元社會を許容しない。單なる多元社會は、もしもそれが主義、方針、理想とされるならば、社會否定を意味するものであるほかない。どうしてかといふに、社會は、結局、即ち結論的に、協力を意味する。唯一の最も存在理由に富んだ多元社會は、即ち閥、階級、破滅から自由な多元社會は機能主義社會だ。』（第二章、第六節、頁一〇七―一〇八）

と述べ、又、他の箇處に於て、同じ趣意を敷衍して、

『されば、機能主義的社會組織を意味する狀態、即ち結社の最も複數的な、そしてその複數結社間に協力的性質が支配する狀態の實現は、事實上、倫理結社そのものゝ實現を意味するほかありえない。倫理は、實に、生活に於ける雜多質と全一質を常に充分に認識して、その雜多の各が、それの自覺に於ては、完全に主權者でありながら、他の各にとつては完全に奉仕物であるといふ位置を、その認識に內在する意味の表現として、實現する努力にほかならない。そして、各の自體が自身にとつて目的であり、他の各の自體にとつて手段である狀態をほかにして機能主義の現實はない。結社の今後に於ける發達は、この意味に於ての機能主義の發達を意味するかたちに於て條件とする。』（第二章、第四節、頁八三、）

と述べて居られます。此等の言葉に由りて觀ますると、あなたの意圖される機能主義社會は、人間愛の發揮と、世界善の增進とを目的として、現在の社會よりも其れを組織する異なる成分の交涉に於て、遙かに柔軟にして公正であり、其れに含まれた資力の利用に於て、遙かに節約にして到徹したものであるのであります。苟くも少しでも想を人間の性情と彼れの文化の趨歸とに潜めた者である限り、わたくし共の努力に依りて實現し得、随つて、實現しなければならない生活狀態として、何人と雖も其れに同意しなければならない通り、固よりわたくしとしても其れに同意する他はありません。然

し、わたくしが全心的の同意を表しますのは、其れの志向の輪廓に對してゞあつて、必らずしも其れの構造の細目や、其れを實現する方法の様式に對してではありません。此等のことになりますと、一個の哲學者とし、文明史家として、わたくしには自づからあなたのとはやゝ異なつた獨自の見解があり、思想があるのであります。

社會の窮極理想、及び、之れが材料たる現在の狀態の動的意義の解釋に關する限り、あなたの理會とわたくしの理會との間に尠なからざる共通點の見出されるのは事實であります。然し、一歩を進めて、嚴密に、そして、正確に、如何なる構造を其れが取らなければならぬか、其れの實現には如何なる過程が必要とされるかを推考することになりますと、あなたの思想とわたくしの思想との間には到底一致出來ない相違點の横はるのに氣付いて來ます。わたくしとしては、事實からあることに何等の神秘も不思議もないのであります。この原因を繹ねて、わたくしは端的に其れをあなたの情操と思索方法とは、勿論、世間俗學の徒の其等に比して遙かに機能主義的であり、遙かに卓越して機能主義的であることは顯著でありますが、其れに拘はらず、あなたの意圖される機能主義社會の實現を完全に準備し、促進するものとしては、尙ほ機能主義的たるに缺くるところのあるのに歸するのであります。こゝに、わたくしが付言して居るところのものを一層平明に敷衍すれば、機能主義社會は獨り正しき意味での機能主義に依つてのみ準備され、促進されるものであります。そして、正しき意味での機能主義は其れの相として實驗主義的、作用主義的、理想主義的、個人主義的の四つのものを具へることを必とし、其等の外何んの一つをも包含せざるべきであるのに、あなたの主張され、開說される機能主義はあなたがまだ十分に此等の相の嚴密なる意味に到徹しないところから、其等と兩立しない、そして、早晩其等に依つて征服される運命にある、否、夙に其等に依つて驅除されて居らなければならなかつた固定觀念主義的、本質主義的、合理主義的、抽象普遍主義的の諸傾向の竄入を峻拒しないどころか、時としてはさうすることのあなたに取つて如何に矛盾の行爲であるかを覺らずして、其等の侵入を歡迎さへして居るやうです。わたくしからすれば、之れがために折角の機能主義も、其れ

に内具の知見を曇らせられ、其れの當然のはたらきを阻害されて居ることはどれだけだか知れないほどであります。

或る理論が一つの社會哲學、若しくは、社會批評たるに妥當するには、是非とも其れは機能主義的でなければならぬが、其れが機能主義的であるには、必然に個人主義的、實驗主義的、作用主義的、理想主義的の四相を具へたもの、若しくは、其等の四相としてはたらくものでなければならぬとわたくしは言ふのであります。個人主義的とは人間の經驗の中で、最後の實在は其れの獨自性であることを體得するところから、立論することを餘儀なくせしめた事情の獨自性を篤と自覺し、どこどこまでも其の獨自の立場に執著して、總べての事物の觀察と推理とに從事することであります。實驗主義的とは（言ふまでもなく、個人主義的の立場を保守しながら、）忠實に、公平に、そして、徹底的に生活を組織するあらゆる要素のあらゆるはたらき振りを、其等が實際にはたらくまゝに觀察し、記錄することであります。作用主義的とは發生的にも、價値的にも生活の中に見出だされる差別と、爭鬪と、變化とは本質上の相違ではなくして、たゞ作用上の分別である、隨つて其等は悉とく超絕的のものではなくして、相關的のものに過ぎないと理會することであります。最後に、理想主義的とは現に生活を組織するあらゆる要素の內具傾向を利用して、これより實現しようとする目的物の窮極志向に隨つて適切に、同時に大膽に其等の意義を改釋し、其等の價値を改價し、其等の排列を改排することであります。ところが、わたくしの判斷にして誤りなからしめば、あなたの所論たる機能主義が、（多分あなたは其れを承認されないであらうに拘はらず、否、極力其れを否定されるであらうに拘はらず、）此等の點に關して多少の曖昧と、不徹底と、矛盾とを暴露して居ることは爭はれません。斯く斷言するからには、其れを事實に依つて具體的に說明するのはわたくしの義務でもあるし、又、さうすることはこの手紙の一要件であるのであります。

かういふわけで機能主義社會の計畫者たり、導入者たるあなたの所說の全體に對しては一個の嘆美者たるわたくしも、其れの細目に關しては、一個の批判者、好意的批判者たらざるを得ないのであります。

わたくしの批判は其れの對象として、主としてこの書の中で「現代社會の分析」なる題號を有つた第二編、特に「政治」、『經濟』の小標識に區分された第一章、第二章を選びます。何故ならば、此等の章に於てわたくしはあなたの機能主義社會の建設と其れの說明とのために費やされたものの中、最も連續的の、そして系統的の言說を見出だすからであります。言はゞあなたの機能主義社會の建設に取りて此等の章が其れの牙城を形造つて居るからであります。

四

あなたが其れの實現を意圖される機能主義社會の性質に關するあなたの著想には既に極めて氣高いものがある上に、其れを將來する方便として現存の諸の傾向を動的に、理想的に解釋し、安排するあなたの態度にも敬服に價するものが多々あります。然し、わたくしの立場からすると、巨細に亙つて、あなたの所說に對して全然の同意を表するためには、其れの或る部分は改祭を、其れの他の部分は修正を、更らに其等の外にある他の部分は大分の補足を要するやうに思はれます。

わたくしは場所柄を辨へて居るつもりであります。今、わたくしはあなたの學說を考察して居るのであつて、自分の其れを紹介して居るのではありません。然しながら、あなたの所說に最も密接なる關係のある部分に限り、出來るだけ簡明に、然し、多少の系統を保持せしめつゝ、わたくしの社會哲學の一部分を豫め披露して置くことは、直ちに批判の標準を擧示することにもなつて、積極的にも、又、消極的にも便宜があると考へるのであります。こゝにわたくしの略說しようとするところのものは、普遍的に、そして、何等の除外例なく、社會生活のあらゆる活動に關して眞實として當て篏まるものであります、隨つて、政治と經濟とに關しても、亦、眞實として當て篏まらねばならぬものです。特に政治や經濟に關して施されねばならぬ議論や反省はあなたの所說に搦んで隨處に開展するのを便利として、こゝでは、其等の根柢を据ゑるために社會生活一般に關して眞實なるものを故らに努めて圖式的に語つて置きたいのであります。

「人間は社交動物である。」之れは隨分言ひ古された格言でありますが、然し尚ほ眞を藏するが故に永久に新でなければなりません。總べての個人は、初めより、社會生活に入り、そこに社會生活を營んで、始めて完成されることが出來る性質を有つたものでありますから、社會生活に於て顯現し來たるはたらきの總べては、既に萌芽として個人生活に於て潜在して居ると見ねばなりません。殆ど迷信に近きまでに、全體は部分に先行し、特殊は獨り普遍の支持に依つて存在することが出來ると、概して獨逸式の學者が力說するにも確かに一大眞理のあるのはこの事實に基づくのであります。然し、この事實あるがために、共れの實際のはたらき振りに於ては、直ちに個人生活と社會生活とを同一視するわけに行きません。端的に、到徹に兩者のはたらきの相違の來たるところを繹ぬれば、個人生活に在つては共れが異なる欲求が單數の意思に依つて統一されるのであるが、社會生活に在つては、そこに錯綜してはたらく異なる欲求が複數の意思に依つて整齊されなければならないといふ事實に歸することが出來ます。常に全體的には調和を志向しながら、部分的には多くの場合に於て扞挌することのあるのを免かれない複數意思が如何にして整齊されて行くかを考へる時、共れを結果することに與つて重大なる役目を滿たすものとして、それぞれ各個人に內具する能力の優劣と、適應性の相違との二大要因が儼然としてわたくし共の眼前に浮き上つて來ます。

形而上學は人間の生活の在るところ、必らず此等の二大要因が伴隨して見出されるのを惡と見做すか、將た、善と見做すかはわたくしの知るところではありません。たゞ、此等の二大要因が過去に於て人間の歷史を形造り、現在に於て彼れの文化の性質と方向とを支配しつゝあることは何人と雖も等閑視してはならない、又、さうすることの出來ないほど顯著な事實であります。適應性の相違の存在は個人の間に有無の交換を望ましきものとするのみならず、又、必要なるものとしますから、彼等の生活は共れに依りて、始めて緊密なる意味で、社會化されます。能力の優劣の存在は先進と後進との間に創造と寄與と、及び、指導と監視的信任との相關關係を成立たせますから、共れは文化の進捗を保障し、促進すること

とになります。前者の役目の特徴は道德的でありますが、後者の役目の其れは文化的であります。平生わたくしのたゞ不思議として居ることは、それほど重大なる役目を滿たして來、現に滿たしつゝある此等二つのものが、特に前者が、今日に至つても、餘り學者の留意するところとならず、稀れになつたにしても、彼等に依つて其等の實際のはたらき振りのまだ尠しも研究し、闡明されて居らないことであります。不完全なる歸納論法に依りて、異なる職業の社會的意義を消極的に立證しようとしたソクラティスも、無責任なる英雄崇拜に依りて、英雄、若しくは、超人の創史的價値を傳奇的に高吟したカアライルやニイチェも、わたくしからすれば、等しく茫乎として全般を逸して纔かに其れの片鱗を摑んで居るのに過ぎないのであります。

人間の認識の關はる限り、この宇宙間に個人の存在に勝りて權威ある存在はなく、人間の利害の關はる限り、彼れの人格、即ち、個性の完成に勝りて價値ある仕事はないのであります。人間の現に從事して居る、又、あらゆる場合に於て從事し得る一切の活動は、超人間的の存在物の信仰や、反個人的の制度の尊重までをも含めて、其等は長い期間に亘つて、そこに在る總べての個人の個性の完成を最後の目的として居るものであると解釋しないで、其等に何等の意味が附せられ得るでありませうか。彼れの置かれた境遇より絕えず新たに來たる特殊の刺激と、其れにも增して、彼れの心の中に絕えず新たに兆す特殊の理想とに應酬するがために、絕えず彼れが獨自に傳承した衝動の結合と方向とを絕えず新たに改整して行くことに依つて、こゝに主觀の側に於て道德が成立し、客觀の側に於て知識が構成されるのであります。斯くして、彼れの個性は支持され、發展されるのであります。

個性を支持し、發展する經過は、わたくし共が主觀の側面に立つて道德と觀るにしても、若しくは、客觀の側面に立つて知識と觀るにしても、其れが改整である以上、必然に、欲求を代表する內容の側面と、其れを醇化し、統一する樣式の側面とが、確執する形を通して協同の精神を遂げて居るとをわたくし共は作用的に識別することが出來ます。然し、個人が

おのれの個性を完全に達成するのには、どうしても彼れは社會生活に入り、彼れと共通の性質や目的を有つた他の個人と倶に共れを營まなければならぬのであります。

個人が彼れの品性を完成するためには、どうして彼れが社會生活を營むことがそんなに大切でありますか。彼れはそこに儼然として存在し、はたらいて居る適應性の相違と才能の優劣との二大要因とを認識し、利用して、一方に於ては彼れの專門を洗練することが出來ると同時に、他の一方に於て彼れの計畫の革新を圖つて行くことが出來るからである。

わたくしは此等の二者の中、比較的に共れの意味の輕きもの、即ち、適應性の相違の方よりわたくしの考察を始めることとします。

どんなに原始狀態に遡つても、それが多くの性來的欲求を有つた人間に依りて組織されて居た社會である限り、そこには或る程度にまで職業の分化の必要とされたのをわたくし共は見出だすのであります。そして、共等の發達は獨り異なる個人が共等の各を專修することに依つてのみ實にされることが出來たのであります。されば、かういふ社會を繼承させ、發展させて行くために、社會經濟は總べてこの個人の間に職業に對する適應性の相違を分配しました。『一個の天才の天國に入るには唯一つの門よりすることとしか彼れには許されて居らぬ。然し、天國に入つた後は總べての天才は全然平等である。』とエマソンは言ひました。然し、この觀察は啻に天才に取つてのみならず、凡人に取つても等しく眞理であります。職業の分化、即ち、分業の確立された社會に於ては、總べての個人は獨り正しき意味に於て一つの職業を專修し、共れに從事することに依つてのみ完全に彼れの品性を成就し、同時に完全に彼れの社會に奉仕することが出來るのであります。つまり此等は二つの事件ではなくして、一つの事件の二個面であるに過ぎないのであります。この世の中に於て、最も善く社會に奉仕する道は唯一つしかありません。共れは各人がおのれの適應性に從つて一つの職業に從事することに依つて彼れの品性を成就することとであります。又、この世の中に於て最も善く品性を成就する道は一つしかありません。共れは

おのれの適應性に從つて一つの職業に從事することに依つて彼れの社會に奉仕することであります。

嘗てカアライルは彼れの家に雇つた怠け者の職人のはたらき振りを評して『彼れはハンマアを下す度に十誡を破つて居る』と言ひました。確かにこの職人は彼れの一擧手一投足に依りて、同時に彼れの品性を壞ち、社會に反逆して居たのであります。總べての個人がそれぞれおのれの適應性に從つて一つの職業を選び、其れを專修して居ることは最も都合よくおのれの才能を助長し、彼れの屬する社會の文化を增進して居るのでありますから、おのれに取つての歡喜は社會に取つての歡喜であるのであります。されば、彼れの仕事は、徹頭徹尾、最も優れた意味で二重に道德的價値であると言はねばなりません。して見ると、ソクラテイスが機械的歸納法に依りて、政治家や、詩人や、船大工等の異なる職業の間に共通善を見出だそうと企て、其れが纔かに彼等の生活の一小部分にのみ共通に宿ると想像したのは、知見に於て、彼れはまだ適應性の相違の社會性に到徹するところがなかつたことを證明するものであります。

わたくしは更に進んで才能の優劣の文化的價値を吟味しなければなりません。此れは適應性の相違に比して一層重大な意義を有ち、これより論議さるべき題目に對して、遙かに密接な關係を有つた事件であります。

欲求を代表する內容の側面と、其れを醇化し、統一する樣式の側面とより成り立つ生活を有つた多くの個人が社會生活に入る時には、才能の優劣、若しくは、經驗の稚熟に隨つて、此等の側面の役目の各は、文化的の意義で、おのづから其等の異なる個人の間に分配されてはたらきつゝあることが見出だされます。

こゝに於て、人間の關係の中で最も古くより存續し、最も悠久に發展して行くであらうと思はれるのは、廣義に於ける才能の優劣より生ずる關係であります。この關係は其れを觀察する興味と、視點との異なるに隨つて異なる分化として現はれます。例へば、賢者と愚者、強者と弱者、天才と凡人、經驗者と未經驗者等の如きが其等であります。然し、此等の相關々係の奧底に橫はる根本事實は一つであります。わたくしは此等の一切を包含せしめて、其れを指導者と民衆との關

係と呼ぶでありませう。

近世に至りて、指導者と民衆との關係は多少の論者に依りて考察され、論議されないことはありませんでした。然し、わたくしからすると、其等の殆ど總べては一つの極端に墮して、指導者を以て萬能の創造者とし、民衆は纔かに彼等の意見に依つて動かされる一片の傀儡に過ぎずとするか、さもなくば、他の極端に馳せて、民衆を以て一代の機運の醱酵者とし、指導者は偶ま其の醱酵の過程中に現はれる泡沫に等しきものとするかであります。まだわたくしの知り得る限りに於て、公平なる觀察と、深遠なる知見とに依りて、遺憾なく兩者の間の微妙なる相依關係を看破し、體認したものは一人もないやうであります。事實にして果して此等の論者に依りて提供される説明の Either Or の範圍を出でないならば、わたくしがこゝに人間文化の最深奧の原動力として特に取りたてて高擧する理由はないではありませんか。然し、確かに事實の眞相を把持した見解として第三のものが成立します。この見解に依りて觀照され、評定されて、其れは始めて人間文化の最深奧の原動力たる資格を發揮するのであります。この第三の見解とは他ではありません。其れは指導者と民衆との兩方のはたらきを作用を異にしながら、等しく能動的のものとすることです。樣式を創造するのが指導者のはたらきであるとするならば、其れに材料と刺激とを供給するのは民衆であるとし、政策を計畫し、遂行するのが指導者の役目であるとするならば、情操、若しくは、希望としてではあるが、初めに其れにヒントを與へ、其の後絶えず其れを支持し、監視するのが民衆の役目であるとすることです。

わたくしがこゝで語つて居るところのものは、其の根を人間の性情に發し、社會生活に於て花を開き、實を結ぶあらゆる種の活動に關してでありますから、自然ホッブスが考察したものよりも遙かに廣き範圍に亙つて考察して居るのであります。然し、假りに範圍を彼れの考察したものに限りましても、わたくしの見解に比しますと、彼れの見解の極めて不自然に人工的であり、機械的であつたのに氣付くのであります。『初め人間は無政府の狀態にあつた。總べての個人はたゞおの

れの私慾を逞うすることにのみ專念して、他人の幸福を破壞することに到つては、聊しも恐れるところなく、憚るところを知らなかつた。これでは、人と人との關係は全く狼と狼との其れと等しく、何人の生命や財産にしても、危險極まりない。そこで、總べての個人は相集りて彼等の生活に平和を齎らす方法を相談した。そして、其れは彼等の上に君臨すべき一人の有力者を見出だし、彼等の權利の中で互ひに衝突し合ふ部分を切り取り、其等を一と纏めとし、彼等に對する支配力として、この君主に捧げることになつた。大體此れがホッブスの國家起原說であります。然し、事實として民衆が彼等の指導者を選ぶのは決してこんな廻りくどい觀念的の方法でしたのではありません。もつと端的な本能的、直觀的の方法でしたのであります。

社會生活は個人生活の延長であり、自然の發展であります。前者に於て潛在して居たものは獨り後者に到りて顯現することが出來ます。されば、一個人の生活に於て動力を代表する內容の側面と、それに醇化と統一とを與へる樣式の側面とは社會生活に於て其れを組織する異なる個人の才能に相應して、それぞれ、指導者と民衆との役目となつて、始めて圓熟するのであります。隨つて、個人生活に於て其れの內容と、樣式とは永久に相互關係を保ちながら變化し行く如く、社會生活に於ても、文化的に其れの內容を受け取る民衆と、其れの樣式を受け取る指導者とは永久に相互關係を保ちつゝ進化し行くのであります。されば、ホッブスが想像したやうに、民衆は如何なる時期に於ても彼等の指導者に對して監視權、若しくは、修正權を奉納して了ふことはなく、指導者は彼等の直接の混沌たる願望に對しては兎に角、彼等の幸福と成長とに對しては、永久に責任を擔ふことに依つてのみ、指導者たる彼れの特權を保留することが出來るのであります。

同じ法則は學問にも、藝術にも、道德にもはたらいて居ります。否、此等のものは生活との關係に於て一層內面的であり、親密であるがために、一層顯著にはたらいて居ります。此等のものに於て、其れの基本は凡べて鑑賞です。創造は其れの派生に他なりません。嘗てグラッドストオンは詩聖ホオマアの事業の特徵を評して、「彼れは民衆より水蒸氣を取り、

雨と化して其れを彼等に還した』と言ひましたが、此れはあらゆる天才、即ち、指導者の事業の特徴を最も簡潔に、最も精當に、そして、最も深遠に特表して居るものであります。如何なる天才と雖も水蒸氣そのものを創造することは出來ません。彼れに與へられた仕事の總べては其れを民衆の欲求の中に見出だし、其れに樣式と統一とを與へて雨と化するだけのことです。彼れとしては其れ以上のことをすることは出來ませんが、又、してはならないのです。

『必要は發明の母』といふ諺が久しく行はれて來ました。然し、米國の天才經濟學者ヴエブレンは其れに反對して、『否、發明が必要の母である。』と言ひました。然し、わたくしは此等の孰づれもが眞理である、それぞれ、同一眞理の半面を物語つて居るものであるといふのであります。『必要は發明の母』といふのは、漸く發明の機運を化釀して行く民衆の欲求の側に立つて其れを考察した結果であつて『發明は必要の母』といふのは、其の物あるがために、始めて民衆の新らしき趣好を釀起する天才の作品の側に立つて其れを考察した結果であります。古來、民衆の欲求だけでは新らしき何物をも發明しなかつたといふことは事實でありますが、又、民衆の慣習が其れを刺激し、彼等の利用が其れを支持しないならば、如何なる新らしき發明と雖も、人間の生活の中に其れの足場を留めることは出來なかつたといふのも事實であります。

大分自説を述べましたが、あなたのお説の考察に移る前に、當面の問題に重要なる關係あるものとして、急いで、も一つの案件に觸れさしていたゞきたいと思ひます。それは人間文化の三大文化の變遷、即ち、古典主義の文化よりロマンチシズムの文化へ、ロオマンチシズムの文化より象徴主義の文化への變遷であります。わたくしは此等の各の特徴を理會し、此等の各がさういふ順序で起つた理由と、其等の各が相互に有つ關係とを理會することは、現代に於て錯綜して交雜し、對峙し、反撥しつゝある諸現象の眞相を鑑賞する上に於て、極めて重要であると考へるのであります。

完全に人間の幸福を保障するものは、改造が行はれるや否や、直ちに秩序が回復される狀態が、一部の改造は勘しも一般の秩序を亂すことなく行はれるやうな狀態であります。言ひ換へれば、常に動的平衡を保つて居る狀態であります。さ

れば、コムトもこの狀態を分析的に觀て、『秩序及び進歩』を理想生活の格言としたのでした。（無論、相對的の意味でなければなりませんが、）人間は彼れの文化を設立し、進歩する必然の順序として、先づ秩序を彼れの生活方針とし、其れが効を奏した後、始めて進歩を彼れの生活方針としたのでありました。秩序は古典主義文化の生活理想であり、進歩は象徵主義文化の生活理想でありました。そして、この生活理想の一方より他の一方へ移り變はる橋梁となり、媒介者としてはたらひたのはロマンチシズム文化の生活態度でありました。

様式は內容を組織する異たる成分の協同する時に、其等の各に含まれた動向の合成に外ならないのであります。隨つて、様式の必然に自具する律義、若しくは、權威は當然其の合成の中に內在するものでなければなりません。この考察を社會的の關係に引き直すと、律義、若しくは、權威は指導者と民衆との合意の中にのみ內在するものであるといふことになります。一層適切に事實を語るならば、民衆の欲求を材料とし、指導者が其れを醇化したものの中にのみ內在するものであるといふことになります。然しながら、內容と様式との間に、若しくは、社會的に考察して、民衆と指導者との間に或る相關關係は認めながら、律義、若しくは、權威は獨り指導者の側にだけ存在し、民衆は降臨の命令、若しくは、威壓として其れを受け取り、又さうすることが生活の規律として最も有効であつたのが、古典主義文化に於て行はれた生活方針の特徵であつたのです。あの文化に於ては、さう考へ、さう行ふことが秩序を維持するに最も適當であつたのであります。されば、古典主義文化が産出し、涵養した生活のあらゆる機關は、學問にしても、藝術にしても、道德にしても、等しく政治と戮力して、新らしき欲求を抑止し、舊き制度や傳統を辯護することを其等の職分としたのであります。偶まには極く狹い範圍に於ては、處世の方策の上に多少の變更が試みられなかつたではないが、其れは舊き制度や傳統を破壞しないことを其れの條件として、限度としたのであります。驚くべき程度に、深刻に、道義觀念のはたらきを洞察した悲劇と驚くべき程度に柔軟に、そして、大膽に認識作用の機構を分析し、究明した哲學とを産出して永久に人間文化の燈明盃

となつて居るあの光輝ある希臘主義と雖も、其れの志向に於てはこの範疇を脱することは出來ません。

然し、人間は久しくこの狀態に止まることを許されません。彼がさういふ覺悟を以て生活してゐることが、やがて始めに冬眠して居た要素を搖り起し、其等のはたらきに依りて、彼れは彼れの生活の最深本質にまで開眼せしめられねばなりません。彼れはだんだんに秩序は獨り進歩に役立つて、始めて或る意義を有ち得るのであるといふことに氣付いて來ます。統一の樣式は獨り衝動たる內容の要求に應ずるやうに形造られて、始めてそれの本來の役目を盡すのである、隨つて、之れを社會的の關係に飜譯すれば、指導者より來臨する律義、若しくは、權威と取られて來たものは、その實、民衆の意思が彼等の職務意識に反射して、或る變形を得た結果に過ぎないといふことに氣付いて來ます。

然し、人間が文化のこの必然の進行に就いて明晰な理會を有つといふことは一朝一夕の仕事ではなかつたのであります。人間は長い間物事の相關關係を本質的に分離して感じたり、考へたりすることしか出來ませんでした。そして、統一の既成樣式と衝動の新しき傾向との間に志向の乖離があり、指導者の固定方針と民衆の新らしき憧憬との間に利害の矛盾がだんだんに大きくなつて來たことは事實でありました。そこで、當時の人々は衝動の自然の發露のために全然統一の樣式を破壞しなければならず、民衆の憧憬の自由な實現のためには、指導者なるものの地位は全然人間の社會より驅逐されねばならぬと想像したのであります。これがロオマンチシズムの精神に含まれた根本假定であつたのであります。

つまり、一切の種の樣式を以て生活の素直なはたらきを歪めるものとし、其等を排斥して衝動の無樣式のはたらきを主張したところに、主張し得ると空想したところに、ロオマンチシズムの文化の特徵があるのであります。然し、これは事實として有り得べからざることであり、行ふべからざることであります。一つの樣式を否定する態度は既に一つの新たなる樣式でなければなりません。一つの傳統を破壞することは、新たに一つの傳統を建設することであり、一つの慣習を否

定することは、新たに一つの慣習を肯定することでなければなりません。されば、ロオマンチシズムの文化はさうする口實の下に、若しくは、さういふ迷信の下に、內容と樣式との相對價値、若しくは、指導者と民衆との間の相對價値に、主客の顚倒を圖りながら、思想に於ける冒險に依りて、新らしい世界を創始しつゝあつたのであります。其れはあらゆるものを否定し、破壞しつゝあると意識しながら、その實、新たに多くの善きもの、美しきものを建設して居たのであります。

ロオマンチシズムの文化が自家の手近かな、最も現實な生活を輕蔑して、過去の道德を讃美したり、怪奇な異國情調に憧がれたり、乃至、未來の社會のために空中樓閣を築いたりするのは、如何にも稚氣笑ふべきであるが、さういふことをして居る間に、前代未聞の風に、程度に、人間の思想と想像力とが解放され、豐富にされ、大膽にされたのであることを思ふと、わたくし共は其れの功績を謳歌しないわけに行きません。

然し、其れの缺陷はどこまでも其れがおのれの仕事の積極的であることを覺らずして、消極的と想像し、沒批判的におのれが繼承し、受用して居たあらゆるものに對して不必要に猜疑の眼を睜り、有害に其等に對して反感を抱き、反抗の態度を取つたことであります。ロオマンチシズムの文化の中に發生したもの〻多くには、例へば個人主義にしても、經驗主義にしても、其れが反感と反抗との色彩を帶びて居るところに其の誤謬が含まれます。たゞ殘念なことにはその誤謬を訂正しようとして起つた社會主義にしても、又、理想主義にしても、其等とは違つた方角に於てではあるが、矢張り、全然同じレヴェルに立ちて、反感と反抗とを事として居ることであります。

其の性質からして、ロオマンチシズムの文化は初めから、暫時にして其れより優れたものにおのれの地位を讓る運命にありました。最後の生活理想として現はれたものは、(若し其れはまだ完全に現れたものでないとするならば)或は、これより現はれようとして居るものは象徵主義の文化でなければなりません。象徵主義の文化の特徵は一口に言つて見れば、

其れは古典主義の文化に於て生活と文化とを形造る二つの要素に附與された價値を顚倒しながら、古典主義の文化の理想として居た靜的安定を動的安定にまで進展せしめるところにあるのであります。今、兩者の相違を藝術上の見地から表現すると、普遍の中に特殊をして沈潜せしむるのは古典主義の文化の理想であつて、特殊の中に普遍をして活躍せしむるのが象徴主義の文化の理想であります。

象徴主義の文化に到りて、始めて、個人的に觀て樣式と內容と、社會的に觀て指導者と民衆とは、完全に作用の上で融通到徹しますから、この世の中に於て第一義の實在は、それ〲彼等の適應性の相違と、才能の優劣とに隨つて、補角的におのれの個性を涵養し、補角的に協同生活を經營し、其れの文化の進捗に貢獻して居る個人の複數だけであることが明白になりました。彼等の或る者は或ひは、殆ど總べては、個人的、國民的、國際的といふやうに、だんだんに螺線的に彼等の情操と、思念と、行動との範圍を擴張して行きますが、其れは初め小さかつた核心の自然の成長でありますから、之れがために彼等の個性はます〲濃厚になり、明確になればとて、決して稀薄になつたり、不明確になつたりはいたしません。さうして彼等がます〲外國の文化を理會することが出來、異民族の信仰に同情することが出來るやうになつて行くといふのは、彼等の個性がます〲濃厚になり、明確になつて行く何よりの證據ではありませんか。

象徴主義の文化に至りて、始めてデモクラシイは長い間の迷信、若しくは、自己催眠より眼覺めて、形式的の、即ち、虛僞の平等を棄てて、實質的の、即ち、眞實の平等を取ることになります。そして、其れの本來の志向でなければならなかつた人才主義にまで歸着することになります。いろいろの點に於て、平等にではなく、不平等に生れ、又、わたくし共の逆睹し得る限り、無期限に遠き未來にまでさう生れ續けるであらうと思はれる個人を平等に愛育し、擁護しながら、現在の文化をして出來るだけ合理的に、そして、經濟的に發展し、充實せしめんがために、不平等に、即ち、彼等の適應性の相違に隨つて彼等の才能を開發し、利用して行くのが正しき意味でのデモクラシイの名に價するデモクラシイであらね

ばなりません。二千四百年の昔、哲人政治家ペリクリイスは、「アテンスは或る意味に於てデモクラシイであるが、又、或る意味に於てはアリストクラシイである。何故ならば、アテンスに於ては、總べての人々は法律の前には平等であるが、獨り最も優れたる者を擧げて路要に立たしめる」と揚言して居ります。今日に於て、この千古の眞理がまだはつきりと體得されて居らないのは、近世社會に取つて一大恥辱でなければなりません。

象徴主義の文化に至りて、始めて人間は、これまで、他の文化の下にあつては抱擁し、調和することの出來なかつたのみならず、到底永久に調和することは出來ないと思はれて居た總べての互ひに矛盾し、若しくは、反撥するやうに見える思想や、教養や、文化を全然新奇な見地より改釋し、改造して、其等を自分の生ける經驗の一部として抱擁し、調和するの工夫を創造しました。餘りにしばしば分裂してはたらく經濟興味と、道德的興味と、賞美的興味とが其等の根柢に於て全一體を形造ることを發見し、この發見よりして、彼れの能力を以て實現し得る最高の業績は、また實現されたことのなき意味で彼れの生活を一つの藝術とすることにあるの覺悟に到著したのも、この工夫の一つの發動であります。

以上でわたくしは適應性の相違と、才能の優劣と、人間文化の三變遷とに關する自説の一端を紹介しました。こゝに開陳したわたくしの意見は、社會生活と、近世文化との考察に關して、尠なくともわたくしに取つては、極めて重要たるヒントを與へるものであります。隨つて、あなたの所説を檢討するに方つても、わたくしとしてはこの見地を其れの標準としないわけに行かないのであります

五

わたくしの考察は御著書の順序に隨つて、（努めて兩者の相關關係を顯著に發揮することに留意しつゝ）矢張り政治より始め、經濟に移つて行くでありませう。

意識的に整斉し、變更し、統一することに依りて始めて生活方針となり得る衝動を唯一の道德的基本としながら、多くの個人が、彼等の本性に隨つて、單獨であるよりも一層善く彼等の欲望を滿し、彼等の品性を完成する目的を以て經營して居る協同生活が社會と呼ばるるものであります。さうすると、個人生活に於て統制を必要としたやうに、社會生活に於て統制を必要とする理は多言を用ゐずして明らかであります。のみならず、個人生活に於て必要とされる統制は、たゞ一つの人格の中に動く異なる衝動を調和するだけであるが、社會生活に於て必要とされる統制は異なる人格の間にはたらく異なる欲求を調和しなければならないのであるから、其の統制は一層威力あるものでなければならぬことも多言を用ゐずして明らかであります。異なる人格の間に彼等が等しく其れの威力を承認するやうな統制は如何なる條件の上に成立しますか。この問題を解決する鍵は政治に關する多くの重要なる問題を解決する鍵であるとわたくしは信じます。多くの個人が集まつて社會を形造るのである。それであるから、社會生活の統制は、畢竟するに、個人生活の統制の延長に他ならないといふ者があるかも知れません。然し、個人生活の統一は單一なる意思の内に行はれるのに、社會生活の統一になると、其れは一つ以上の異なる意思の間に行はれるのでありますから、自然、統制の性質に重要なる變化が行はれねばならぬわけです。社會生活をして個人生活とは明確に識別することの出來るはたらき振りを取らして居るその變化は何んであるかと、わたくしは今追窮して居るのであります。

あなたは政治を定義して、

『政治は社會經營だ。政治は社會の統一的經營だ。社會の完全自己統營が政治そのものだ。それが政治の純粹規範態だ。』（頁一一三）

『政治は社會の統一的經營だが、それ以外のものでは決してないが、その統一的經營の主能者、即ちそれを生産するものが、要するに、社會自身であることと、社會内のものであることとは、説明と論證を、現代に於ては、必要としない。』

」(頁一一四)

『政治は、しかしながら、社會統營以外のものであることはできない。その統が關する限り、政治は唯一であるほかない。』(頁一一七)

『政治は社會統營だ。一つの社會が、自身に內在する力によつて、複雜なる自身に統一的保存を與へる行動が政治だ。政治は、それゆゑに、社會原則の最も代表的なものだといふことが出來る。』(頁一二一)

などと少しづつ言葉を變へただけで、殆ど同じ意味の事柄を反覆して居られます。このやうにそれを力說されるあなたの意は、(一)社會經營としての政治は全然社會生活そのものの所產であるとして、其れに關する一切の神祕的說明を排斥することと、(二)其れの社會經營の方法のあらゆる他の機關、例へば、學問や、藝術の其等と異なり、卓越した意味で社會經營と呼ばるべき理由のあることを顯著にしようとしたところにあることは明らかであります。あなたがここで宣言されて居ることは、固より一個の自明の理として受け取られなければなりません。然し、わたくしからすれば、政治の社會經營といふものはさういふものであるとしても、どうして其れが可能にされるかの條件を考察する必要があるのです。あなたは社會の完全自己統營が政治そのものだと言つて居られますが、社會は集合名詞であつて、實在ではありません、隨つて、人格ではありません。社會には何等の意味にでも意識や、意思といふもののあらう筈はありません。であるから、社會の自己經營といふことは一つの形容に過ぎないのであつて、實際には、其の經營は協同生活をしようとする意思と、さうして居るといふ意識とを有つた實在の人格、即ち、個人に依つて爲される外はないのであります。

こゝにわたくしは決して言葉の末を兎や角爭つて居るのではないのです。初めからはつきりと政治は異なる人格の間の特殊の交涉に依りて成立するといふことを理會することが、其れの本質と其れの進化の眞相とを理會する上に於て極めて重要であるからであります。

嚴密なる意味に於ける政治は個人生活を組織する二つの要素、即ち、統一を代表する樣式と、衝動を代表する內容とを社會化し、作用的にそれぞれ其等の役目を分擔してゐる指導者と民衆との交渉より成立するのであります。社會的に指導者の分擔は力の形を取り、民衆の分擔は承認の形を取ります。然し、創造するのは指導者であるが、始めに其れを暗示し、若しくは、其れに貢獻するのは民衆でありますから、作用的に力を擔當して居る指導者も、彼れの工夫する方針に對しては常に責任を有たなければならないし、承認を擔當して居る民衆も、其れに對しては監督と彈劾との權利を保留して居るのであります。これだけのことは政治の本質として政治と倶に始まり、政治と倶に終るべきものだとわたくしは確信して居ります。されば、政治の進化を以て、專制主義よりデモクラシイへの其れであつたとするならば、其の進化はこの本質を左右したものではなく、この本質の內に起つたものであるとしなければならないのです。

こゝで私が考察して居る政治の機構の永恒性を哲人主義と呼ぶならば、專制政治とデモクラシイとは哲人主義の變形に過ぎないのです。哲人主義は政治の屬名であつて、專制政治とデモクラシイとは、各、其れの種名であります。

世の多くの政治學者や、政治家は彼等の無智のために、若しくは、彼等の都合のために、手續き上の相違から、兎角、專制政治とデモクラシイとの實質を峻別するのでありますが、畢竟するに、彼等が政治の本質に到徹するところのない結果であります。其れが專制政治の形を取らうが、デモクラシイの形を取らうが、その他、如何なる形を取らうが、政治が人間に依りて彼等の協同生活の一つの機關として工夫されたものである以上は、學問や、藝術や、道徳と全然等しく、其れの本質はそこに協同生活を組織する多數の民衆の欲求を材料としながら、小數の指導者が其れを醇化して實際の方針として行くのである、隨つて、其の成績に對して指導者は責任を有たなければならないと同時に、民衆は其れに對して監督と彈劾との權利を保留して居るところにあるとするのは、萬古に亙つて動かすことの出來ない眞理であります。

わたくしはこの見地から政治の公事化（即ち、あなたの解釋に隨つて、最高義と最複雜義とに於ける其れの社會化）の

原因として、あなたが擧げられて居る其れの特徴なるもの丶正體を吟味して見たいと思ひます。あなたは、

『私は考へる。政治は卒先して公事化したと、そして、その理由は政治に特有の事情として明確に認識することができると。』（頁一三六）

と揚言せられ、そして、其れは、

『政治のかくの如き、比較的に最も顯著な、公事化の原因はなにか。それは、政治に特有の唯一質と、政治に特有の普遍性と、政治に特有の強制力とにあると私は考へる。』（頁一三七）

と啓示して居られます。それならば、どうして政治の有てる此等の三特徴が社會のあらゆる機關に卒先して其れを公事化したかといふと、あなたは其れを説明して、苟くも社會生活に入つた者である以上、何人にしても其れの強制力より逃れることは出來ない。そこで、總べて其れの感化の下に來たるものは、自分の努力に依つてだんだんに其の強大なる威力を自分等に取つて出來るだけ尠なく有害に、出來るだけ多く有用なものと化して行くのである。この結果は彼等の實力の發達するにつれて、次第に政治を專制から自治へ、強制から自發へと推し進めることになつたと述べて居られます。

然し、何よりも一番に究明しなければならぬと思ふのは、どうして政治が卓越して（何故ならば、他の機關、例へば、宗教にしても、學問にしても、其等が社會生活の産物であるか、社會生活に依りて感化されたものである限り、或る程度にまでは必然に此等の三特徴は有たなければなりませんから、）此等の三特徴を有つに至つたからといふことであります。まづこの事が明白になれば、其れに關聯して政治に關するいろいろ重大な事柄が明白になるといふ希望をわたくしは有つて居るのです。たゞ、政治はさういふ三特徴を有つて居るものであるとか、政治だからさういふ三特徴を有たなければならぬとかいふだけでは、わたくしに取つては何等の意味をも成さぬのであります。政治が眞にさういふ三特徴を有つて居る、其等の三特徴が、政治の本質を形造つて居るといふならば、そこには、ぜひとも政治に其等を賦與した人格と、其等

が賦與された理由とがなければなりません。人間は初めに彼れが創造し、そこに塡置した法則だけを社會生活の中に認識し、其れに服從することが出來ます。自然の場合に於けるよりも、社會生活の場合に於てカントの假定が一層顯著に有力になります。

力と承認とは相關的に成立する事實、即ち、意識であります。承認のないところに決して力は存在することは出來ません。されば、若し其等が政治の內具する三特徵であるといふならば、其等は政治が其れの機關の一つとなる協同生活を經營して居る總べての個人に依つて政治の司る特殊の職分に隨つて其れに塡置されたものでなければなりません。さきに詳しく說明した趣意に隨つて、本質的ではなく、作用的に觀て、社會生活は個人生活の必然の發展であるといふところから、其れは指導者と民衆とより成立つとすると、力は指導者から來ますが、其れを擁護し、其れをして力としてはたらかしめるものは民衆の承認でなければなりません。さうすると、無雜作に、『……少數專制としての社會統制にあつては、その少數者以外の人口は被強制的または無自治的だ』（頁一一六）とあなたが說いて居られるのは、餘りに專制政治の外形に拘泥して、其れの實際のはたらき振りを等閑に付した見解として、わたくしの承認出來ないものであります。名目上如何に少數專制でも、民衆の承認がなければ成立することは出來ないのでありますから、嚴密なる意味で被強制的、又は無自治的の人々のありよう筈はありません。若しわたくしのこの斷定を疑ふ者があるならば、其れの眞、否は容易に實驗出來ることであります。其れは彼等の上に彼等の生活の、若しくは、欲求の根本條件を破壞するやうな法律を布いて見ることです。彼等は直ちに蹶起して死を以て其れに反抗するでありませう。そして、其等の少數者を彼等の敵として戰ふでありませう。これだけのことは新たに實驗するまでもなく、既に歷史の上に於てしばしば證明されたことであります。これは極端な例でありますが、如何なる政治の下にでも、全然、被強制的、若しくは、無自治的民衆はあり得ないといふことは他の方法でも優に證據立てられます。さうすると、進歩はいつでも不完全なる自治より、完全なる自治へ、若くは、不完全

なる自發より完全なる自發へであつて、あなたが考へられる如く、どんなことをしても専制より自治へ若しくは、強制より自發への道はないのであります。

然し、わたくしは何んの必要あつて、こんな事柄を、こんな風に、明目張膽して詰難するのでありますか。世の中には、謂ふところの専制政治の下には、多數の民衆は少數者の意思に依りて文字通りに被強制的に支配されて居たのに、デモクラシイになると、總べての民衆は完全に自治を得、彼等の欲求はそのまゝ政治を左右して居ると妄想し、空論して居る論者が尠なくないのであつて、此等の人々に依りて、折角のデモクラシイもどのくらゐ其れの正しく、そして、健全なる自覺と發達とを阻害されて居るか解らないほどであるからであります。

固よりわたくしは政治は進歩するものであり、事實、確かに其れには進歩があつたと信じて居ります。専制政治とデモクラシイとの間に見出される其等の機構と手續きとの相違が何よりの象徴であります。然しながら、あなたが賢明に考察して居られるやうに、量的の専制があると等しく、質的の専制もあり得、そして、後者は餘りにしばしばデモクラシイと交錯してはたらくものならば、政治の善惡は名目上、直接政治に參與する頭數の多少では全然決定出來ないことになります。

専制政治でもデモクラシイでも、其れの實際のはたらき振りは全然同樣であります。隨つて、孰づれの場合に於ても、善良なる政治を保障する唯一の方法は、一方に於て民衆の知識と德性との增進を圖り、他の一方に於て彼等の欲求の暗示を尊重しながら、適當に其れを醇化して施政の方針を創造する賢者を指導者に有つことであります。

わたくしは、既に十分に告白して居る通り、其れの志向に於てあなたの機能主義社會に全然の同意を表して居る者であります。政治に關するあなたの機能主義的考察の多くの點に對しても、其れの豐潤なる觀照と、壯麗なる文章とのために、多大の敬意を表することを躊躇しませんでした。然し、わたくしは社會生活の機關、特に、政治に關する機能主義的

の考察には、其れが實際に運ばれて居る微妙なる人格的關係は、どんなことをしても無視することの出來ない、隨つて、若し無視すれば、其れの効果に於て缺けるところの尠なくない重要な要素であると考へます。そこで、わたくしは自分の確信よりあなたの考察を一層尠なく機能主義的たらしめようとしてではなく、一層多く機能主義的たらしめようとして、これだけの注意を試みたのであります。

政治に關してあなたが創造された機能主義的考察は、經濟にまで進むに隨つて、一層精彩を加へ、適切の度を增して來たように思はれます。離して考察さるゝ時、政治と經濟との性質の相違からも來ることでありませうが、政治に費やされたあなたの言說は多少形式的たるを免かれませんでしたが、經濟に費やされて居る言說は遙かに實質的であります。蓋し、『經濟』の一章を以て全卷の白眉とすることに何人も異議はないであらうと思はれます。

然し、わたくしはこの最も興味あり深甚の敎訓を含める章の鑑賞と評論とに移る前に、わたくしは極めて簡單になりとも言及しなければならない一つの條項を見出だします。其れは『現代政治と民族意識』の章であります。

熱心なる機能主義社會の導入者として、あなたは常に其の社會の發達を妨げるとあなたの思惟される障碍を取り除かうと努めて居られます。そして、あなたの眼中には民族主義も確かに其等の一つであるのであります。この書に於て、文化の發展に關する民族主義の價値の卑下、若しくは、其れの全然の否定に用ゐられたあなたの論法が明らかに示す通り、あなたがさう斷定される思想には可なり深い根柢があるのであつて、わたくしは其れをあなたの魂のいづれの隅にか殆ど化石の形を以て殘留して居た獨逸的合理主義の餘果に歸することが出來るやうに思はれます。さきにわたくしは、大體に於てあなたの機能主義は賞讃すべきものであるが、惜しいかな、其れには精神に於て全然乖反する合理主義的の考へ方を其れの中へ交へて居ると申しました時に、わたくしは之れが實例の一つとして、民族主義に對するあなたの見解が、わたくしの念頭にありましたのです。わたくしからしますれば、機能主義者にして眞に機能主義の何たるかを知り、現存する

要素の中の如何なるものを利用して機能主義社會を建設すべきかを知つて居る限り、民族主義の如きは彼れが何よりも先に利用しなければならないものとわたくしは考へて居ります。然るに、あなたは、今、一つの時代的物として其れを排斥して居らるゝのであります。

あなたが民族主義を以て文化發展の一要素とすることを否定せらるるには主として二つの根據があるのです。一口に言つて見れば、其等の一つは、民族結社は政治結社に比して遙かに一時的であるといふことであり、他の一つは、民族性は個人性、若しくは、人間性ほど本原的でないといふことであります。わたくしは前のの例として、

『私は考へる。政治結社と民族結社との間にはなんら本質的、必然的、永久的關係はない。歴史を見ればその證據は豐富だ。理窟からいふてもそれはあたり前だ。』（頁一四六）

『社會即民族的狀態は近代の一特質だ。それは近代をそれ自身の時代、それの全盛時代とするものであるのだ。近代以前に於てはそれは未發達であつた。近代以後に於てはそれはいよいよ過去の生命化する。』（頁一四八）

等のあなたの宣言を擧げ、後のの例として、

『社會の成長は、必然、いふところの個人性をいよ〳〵發達させる。それは、他面に於て、同樣に必然、いふところの人類性をもさうする。この二物との對比に於ては、民族性は社會の成長と共に無條件的には發達しない。』（頁一八二）

『いはゆる人情の本質に於て民族別はほとんどあるひは完全に絶無だ。……………人情の世界が民族の世界よりも深い、廣いことは何人によつても承認されるほかない有力な現實だ。』（頁一八二）

等を擧げることが出來ます。そして、わたくしは此等の孰づれの考へ方も、民族主義の價値の決定に關して大して權威のあるものではないと考へる者であります。

前の例に據りて論ずるに、或る時代に於て、一つの民族が其れの生存と發達とのために工夫した機關は其の民族に最も善く適當するものならば、異なる時代に於ける當の民族、若しくは、他の民族にはそれほど善く適當しないといふことは明白であります。然し、どうしてこの事實がその機關の文化價値を奪ふことになりますか、わたくしの了解に苦しむところであります。異なる時代から一つの政治結社と民族結社とを拉し來たり、其等の輪廓が完全に一致しないと言つて、民族結社を卑下する理由が何處に存するか、これもわたくしの了解に苦しむところであります。後の例になると、わたくしは失禮ですがあなたの心理的分析に信を置かない者であります。あなたはどうして人情に民族別が入つて居らないことを認め得たのですか。古來、民族別に依りて包和されて居なかつた美しい人情の發露が、何時、何處で一つでも見出だされましたか。又、完全なる意味の個人性とは、それぞれ、獨自の性質を保ちながら、補角的に協同生活を營むことが出來るやうに發達したものを呼ぶ名稱でありますならば、其れを一次高めれば民族性となり、其れを二次高めれば人類性になるではないでせうか。勝手な興味より、各人の生活意識より貧弱なる内容を有つた永遠性と普遍性とを抽象し、民族性が斯く造られた標準に合格しないからと言つて、其れの文化價値を疑ふとするのは惡い意味の合理主義でなくして、何んでありませうか。

長くなりますから、こゝには近世に於ける民族主義の勃興と推移とに關する歴史的考察は一切省くとしますが、過去に於て、其れが個人主義と等しく、どんなに誤解され、誤用されたにしても、今日に至つては、各民族はそれ〴〵民族主義の眞相と新使命とを自覺して來たやうに思はれます。あなたは『資本主義及び社會主義は文化的であり、民族主義は原始的、野蠻的だ。』(頁一五九)と言はれましたが、其れがさうした起原を有つがために、今日の先覺者は反つて、資本主義によりも、社會主義によりも、一層文化的の意味を民族主義に附して居るのであります。彼等は、何人にしても正しき意味で國際主義に入らうとするならば、先づ、正しき意味で民族主義のメンバアでなければならぬ。正しき意味の國際主義は、

獨り正しき意味の民族主義に依りてのみ實現されることを自覺して來ました。

されば、今日に於ける、及び、特に今後に來たる文化生活に在つては、如何なる個人も或る國民の一員となつて、始めて彼れの個性の完成を期することが出來る如く、如何なる國民も世界共和國の一員となつて、始めて其れの國民性を修練することが出來るのである。この事實を逆に、そして、一層切實に言ひ換へれば、世界共和國の性質は個々其れの獨自の特徴を保ちながら國際化された各國民の國民性の交徹より構成され、或る國民の性質は個々彼れの獨自の特徴を保ちながら國民化された各個人の個性の錯綜より釀成されて居るといふことになるのである。して見ると、正しき個人主義の基礎の上に立たざる國民主義の誤謬であることは、正しき國民主義の上に立たざる國際主義の空虚であると同樣である。徹底すれば、個人主義は世界主義にならなければならないし、遡源すれば、國際主義は個人主義であらねばならぬ。つまり、個人主義も、國民主義も、國際主義も、其れの志向よりすれば一つのものである。たゞ、其れが發動するに當つて、其れの異なる側面が力説されるに隨つて、三つのものとして取られるのに過ぎない。』といふのが今日に於ても、猶ほ、この問題に關してわたくしの作り得る最も澄明にして、最も到徹した意見であります。

いよいよ最後の議題たる經濟に到著しました。

あなたはさきに政治の公事化を論じられた際に、

『政治の率先的公事化がなぜ特に有意義だかといふに、その事實は、現代に於て殊に、經濟の社會に於ける位置を暗示するからだ。しかるに、經濟の將來的位置は現代に於ける最も直接關心的な一事だからだ。』(頁一三五——一三六)

と述べられました。あなたはこの章に於て經濟の公事化の必然と價値とを説明し、證明されようとするのであります。

それでは經濟の公事化とは何事を意味し如何なる事情に依つて其れの出現は促がされましたか。

あなたは此等のどちらをも大層焚緻な造語と、優秀な表現でいろいろの風に書いて居られますが、一々引證するのは其

の煩に堪えませんから、其等をわたくしの言葉に引き直し、其れの簡明を目的として箇條書きにしますと、大てい次のやうなものになると思ひます。

一、富の生産が纔かに道具の使用に依つて一個人、若しくは、一家庭の限られた時代に於ては、生産者と消費者とは、各、彼等の力に於て同等でありました。

二、然し、一旦、機械が富の生産の方便として發明され、應用されてから、其れの主體と過程とは最早や個人的ではなくして、社會的の性質を取つて來ましたから、生産の性質と消費の性質との間には非常な相違が生じました。

三、殊に、富の生産が個人主義を彼れの信條とする資本家に依つて所有されることになると、消費者はたゞ彼れが供給するものだけの消費は許されるが、消費に就いては一切其の他の自由を有てなくなります。

四、斯くして、消費者の全部が實際の生産者であり、消費者を除いて生産に從事して居る者はないのでありますから、生産に關して眞の功勞者は消費者であつて、其れの所有者たる資本家ではありませんが、其れにも拘はらず、（あなたのお使ひになつた言葉を拜借しますと、）道德的無資格者たる資本家は何にもしないで、飽食暖衣の狀態で生活して居るのに、道德的有資格者たる直接の生産者は一錢の金にも困り、一枚の著物にも事を缺いて居ります。

五、これは、畢竟するに、資本家が集團主義に於て生活しながら、其れを個人主義に於て所有するところから生ずるのであります。この矛盾は時勢に對する逆行より起るのであります、されば、其れを取り除くことを目的とする社會主義の主張には十分の理由があります。

六、所有によりも使用に生活の主目的を置き、富の量よりも事業の質に價値を認める技師が生産の表面に立つようにならなければなりません。これにしても、尚ほ組織者は必要でありますが、彼れは直接に消費的人々の一集中的表現でなければなりません。生産の方法と消費の必要とは相互的でなければなりません。

七、機械生産に於ては、社會的には更に角、個人的には藝術的興味を滿足させるとか、品性の發動を樂しませるとかいふ性質は有りません。隨つて、人間はたゞ其れの消費だけに價値を置くことになりますから、機械に對しては、たゞ、ますます出來るだけ其れの機構を改良し、其れの普及を圖り、其れをして出來るだけ多く人間の勞力の代用を勤めしめることとであります。これが機械生産の終局の理想でなければなりません。

以上はほんの骨組でありますが、機械生産の過程と其れの社會的意義に就いて、あなたが說いて居らるゝもの丶要領を捃摭したのであります。あなたが『經濟』の章を結ぶに、

『使用主義による所有主義は、あるひは全義に於ての使用主義そのものは、實に、新時代の常識そのもの、哲學そのもの、宗教そのものとしての價値を完全に持つ。常識は各人の行動の支配力だ。哲學は非常の程度に於ての常識にほかならない。各人と全衆が極度の熱と信、信と熱に於て善戰、健闘するところに、そこにこそ、唯一の眞の宗教は常にある。』(頁、二五一)

の言葉を以てされるところを親ますと、あなたが機能主義に依る經濟組織の革新に關し、何を其れの終極成果と考へて居らるゝかは容易に察知することが出來ます。苟くも人類の前途のために幸福と光明とを望む者である限り、誰れがこの志向に對して反對するでありませうか、反對し得るでありませうか。

然し、あなたの說かれて居る意味に於て、無論、所有主義よりも、使用主義が生活理想として確かに優れたものであるに相違ないにしても、世には或はあなたがこゝで開展された方法に滿足しない者もありませう。例へば、抽象個人主義の全盛時代に於て形造られた個人主義や、帝國主義や、唯物主義が漸く內面的の自覺より其れの改造を始めつゝあるやうに、等しく同時代に於て形造られ、無自覺に繼承されて來た資本主義にしても、時勢の推移につれて近き將來に於て必然人の心の中より其の姿を消す運命にあるにしても、其れが外境よりの壓迫に依りて爲さるるか、其れを繼承した人々の面

面の反省に依りて爲さるゝかは、攻究される餘地の十分にある問題であります。されば、あなたの暗示して居られる以外の經路も確かに考へ得られるわけであります。然し、今、わたくしは其等の一々に就いて意見を述べる時間もありませんし、意思もありません。

其れよりも、この瞬間にわたくしの心を捕へて居る遙かに深遠な意味を有つた問題が一つあります。其れは、あなたがこの章で取り扱つたいろいろの問題をわたくしの象徴主義で取り扱つたならば、其等の解決の上に如行なる變更を齎らすであらうか、と言ふことであります。其れは、無論、いろいろの、そして、其等の或るものは重大な變更を齎らします。然し、こゝでは、其等の一二を裂々に暗示することに止めねばなりません。例へば、あなたが經濟は全然藝術と絶縁しなければならぬと言はれましたが、道徳や美感と協同して生活を一つの藝術にするのでなければ、眞の經濟ではないといふことになります。あなたは機械を以て硬剛、冷酷、全然個人の意志では手に負へないものとされて居りますが、其れは個人の取り扱ひに對して極めて柔順におのれの意味を表はし、其れ自身が人格類似のものでさへあるといふことを示すことになります。生產者と消費者との關係に就いて言ふならば、兩者は、各、作用上は獨自の役目を有ちながら、これまでの經濟學に依つて理會されて居たよりも、生產に關して一層密切に、相互に補角的に協同して居ることになります。そして、消費者の役目は生產の方針の材料を與へるのにあるとするならば、絶えず其れに對する責任を有ちながら、其れを醇化して最後の方針を仕上るのが生產者の其れであることになります。然し、その間中、生產者の行動を監視して居るのは、又、消費者の役目に屬するのです。かういふわけで、あなたは『經濟は富の消費に依つて代表される生活だ』と定義されましたが、經濟は生產と消費と孰づれに一層重きを置くかならば、最後の樣式を與へる生產の方でなければなりませんから、經濟は富の生產に依つて代表される生活であるでなくてはなりません。然し、この場合に生產の力說されるのは、個人主義經濟學に於てあつたやうに、量のためではなくして、質のためであります。

言ふまでもなく、象徴主義の經濟學といふもののあるわけではありません。又、將來そんなものが組織されるか、どうか知りません。然し、象徴主義者から見て、在來の經濟學の學說は、其れが個人主義經濟學であれば無論のこと、社會主義經濟學にしても、不滿の點の多いのは事實であります。そこで、專門的の樣式に合ふか、どうか解りませんが、あなたの力說された二三の點に關してわたくしの見解を申し述べて見たのに過ぎません。

六

未熟な思想をこんなに長々と述べまして失禮いたしました。書中、若し禮を失したやうなことがありましたならば、どうか河海の宏量、お許し下さい。つまりは、事實、あなたの機能主義に共鳴し、敬服した結果、あなたのお意見の或るものに對しては、ただ自分だけで、あなたの機能主義を一層機能主義的にしようとして、自分の立場から其れを立論して見た結果に過ぎないのでありますから。

終りに臨んで、わたしはヒユウマニストとしての温かき情操と、研究者としての清澄なる知見とを圓滿に併有せらるゝ著者に對して敬意を表します。

革命ロシア十年の經過を見る

清澤洌

（一）十ケ年の激しい讃美と彈劾

ロシアにあの大きな革命があつてから、丁度十ケ年の歳月は流れた。いはゆる二月革命により落帝ニコラス二世を帝位から追つたのが一九一七年三月十二日、今から十ケ年半以前であり、それから後、レニンとその一黨が十月革命の成功によつて、ケレンスキー內閣を仆し、完全に權力を自己の手に納めたのが同じ年の十一月六日――ロシアの曆にして十月二十五日である。

十年の歳月は歴史の悠久なるに比して、決して長いものではない。殊にロシアにおける如く、人類始つて以來嘗て試みられたことのないほどの大きな試驗が、僅かに十ケ年の歳月を以て、最後的判斷に到達しないのは勿論である。併しながらロシアは、もう所謂混亂の時代ではない。トロツキーのレニン傳によれば、レニンはよくこの混亂といふ字を好んだ。かれは何時でも云つた。

『獨裁政治？　そんなものが何處にあるのだ。そいつを俺に見せてくれ。われ等の有するものは混亂だけではないか、獨裁政治などといふものはありはしない』

レニンは人民委員會で、よくかういつたといふけれども、かれの云つた意味の混亂は、もうロシアにはない。十ケ年の激しい讃美と彈劾の眞中に立つて、ソヴエート政府は、もう動かすべからざる確乎たる存在である。人類の長い歴史から觀た文明史的批判は、後の歴史家の領分に屬するものであるけれども、その事蹟と、その方向と、その成敗の跡は、最早世界の嚴正なる批判の前に立たざるべからざるものである。

たゞ併し、こゝに問題は世界の現狀は、ソヴヱート・ロシアに對する嚴正なる批判に熟してゐるかどうかである。バーナード・ショーが云つたように『ソヴヱート共和國は人文史上最も興味深い試みだ。その試みが失敗であつても、それはその重要さを少しも失はない』といふ事は何人も認めてゐるけれども、長い間培はれた各種の宣傳は、國民と批評家に先取觀念を造つて、何れも偏見或は過信なくして、これに對し得られるかが疑問だ。これを勞農ロシア側からいへば、彼等はその國內の事情が、資本主義國に惡用されんことを懼れて、自己に不利な報道は、一行と雖も國外に流出を許さず、かつその宣傳は以前から有名なものであるが故に、世界の識者にしてロシア側から出るインフォーメーションに絕對の信用をおく者は殆んどないといつてもいゝ。才のある者が才に溺れるように、彼等の得意の宣傳は、自からを宣傳に溺れしめてそれを價値のないものにしてしまつた。

一方各國側から觀れば、ロシアは土地と財產ばかりが國有の國でなくて、ニュスと事實をも國有として居る國である。そこから來るものは多く官製のニュスであつて、全幅の信用を拂ひ得るものは極めて少ないといふ懸念がある。かりに實地踏查その他によつて、その內情を確め得たとしても、今度はこれを發表する方法において不自由がある。たとへば英國の勞働黨の代表者は、かつてロシアに行つて詳しくその狀態を調查して歸英、その報告書を發表したが、ある批評家は、これを讀んで『氣の毒なほどの氣兼だ。文章は間接詞 But の連續といつてもいゝ。『われ等はボルシエビキではない、併しながら……』「われ等は反動主義者ではない、併しながら……」全文が悉くこの形式（フオーミユラ）で進んでいつてゐる』と書いてゐる。法律的にいへば言論上に殆んど絕對的な自由を有し、輿論的に云へば國民は如何なる言論をも許されてゐる英國がかうだといふのだ。他國における自由論議の不自由さは知るべきではないか。

これ等に加へて問題の性質が、中途半端なるを許さない。その人の性質と思想的傾向によつて、勞農ロシアのとつた目的と手段に對し、盲愛たらずんば即ち盲嫉になる恐れがある。かうしてソヴヱート政府出現十ケ年にして、公正なる批判は極めて少ないものになつてしまつた。

（二）ソヴヱート露國は戰爭の產物

勞農ロシアの解剖に筆を進めるに當つて、われ等はまづ二つの事實を頭に入れておく必要があると思ふ。第一にはソヴヱー

ト・ロシアが戰爭の產物であるといふ事、第二にはロシアに共產主義無し（眞正の意味の）といふ二點である。

第一のソヴェート・ロシアが戰爭の產物であるといふ事については、その最後の斷定は、將來の歷史家に待たなければならない。併しながら明白な一事は、もし世界大戰がなく、ロシアがその全力を戰線に傾倒して居らなかつたならば、かりにその帝政があれほど腐敗して居つたにしても、あの兩手で數へることの出來るぐらゐな小人數で、革命が成功したかは頗る疑はしかつたことである。

世界大戰の結果を見るがいゝ。一九一四年に戰爭が勃發した頃は、そこには二十一個の帝政國があり、この內四つは大帝國（エンパイヤ）であつた。そして共和國は僅かに三つに過ぎず、この共和國の人口の比例は、帝政國のそれに比して一對六といふ僅少な數に過ぎなかつたのである。（その頃まだ日本も米國も參戰して居らない）然るに戰爭後は四つの大帝國――英國、ロシア、ドイツ及びオーストリア・ハンガリ四國の內、殘存したものは單に英國のみであつて、他は悉く共和國になつて居る。そしてこれを數にしてみれば帝政國が十二となり、共和國が十六になつた。人口は共和國の二に對して、帝政國は一といふ比例に減じてゐる。特に戰敗國が、常にその帝政に動搖を來すのは、昔から通り相場であるが、世界大戰においても戰敗國は總崩れで、帝政を維持してゐるのは、僅かにブルガリアだけであるが、その內政が激しく動搖して居ることは人の知るところである。

從來の歷史から見れば敗けた國は、國內の動搖が激しいが、戰勝國は更にその帝政の基礎を固くするのを常とする。たとへば一八七〇年の普佛戰爭において、佛國の帝政は仆れて革命騷動が起きたが、プルシヤは却つてドイツ聯邦を完成した如きがこれである。併しながら大戰中におけるロシアの場合において、ロシアの帝政は腐敗して、ドイツ側との戰爭を遂行するにすら事欠いてゐた。その半ばにして革命は內部から起つて、その帝政は朽ちた大木が倒れるように崩壞し去つたのである。

この事はロシアの革命史を瞥見すればなほ明瞭になる。ロシアのマルクス信徒がその革命の强力なる第一擊をあげたのは、日露戰爭直後である。彼等はかねてからマルキシストとして、國家を一階級が他階級を統治するもの、有つもの（haves）が持たざるもの（have-nots）を壓迫する機關と見た。そして有たざる者が自由の道を得るのは、たゞ國家を破壞するの外なきことを信じた。彼等はこの機會を日露戰爭において敗けた時に見出した。一九〇五年（明治三十九年）革命は首府セントピータースブルグに起つて、無產階級の獨裁を宣布したのである。その

時はなほ成効しなかつたけれども、レニンは國會に出席し、後でから云つてゐる――

『大革命であつた。それは單に憲法を許したといふだけでなく、一ケ月の間勞働者が武器を以て立ち、ペトログラード・ソヴエートを樹立して、世界の無產者の前に示したからである』

革命が戰爭中乃至は戰爭後において起るだらうといふことは、世界の識者が認めるところである。バートランド・ラツセルはニヤリング教授との立會演說において

『私は、われ等の文明が必ず崩壞するだらうとはいはない。またそれが確かだとも考へない。もし何かの機會によつて、ある一定の國において崩壞するとすれば、それは唯戰爭に敗れた結果としてあり得るであらう。ところで歐洲各國が同じ時に皆な敗戰するであらうとは考へられぬ。少なくとも誰かは勝つだらう。この場合、勝つた國では資本家はその生命を新しく延ばすであらう。新らしい組織に赴からとするのは敗けた國である』

と述べてゐる。

戰爭と革命――そしてその戰爭を最も好む者が、革命を最も嫌ふ保守主義者、軍人などとなるにおいて歷史の皮肉はあり得よう。

（三）露國に共產主義無し

第二に『ロシアに共產主義なし』といふのは、一見餘りに誇張した言のやうである。この事は後で今少し說くけれども、日本のある一部の論者のやうに、ソヴエート・ロシアといふと、社會主義、共產主義の本場であると信じて居る人々のために、これを命題とすることは必要であると考へる。

私がこゝで『ロシアに共產主義無し』といふのは、共產主義乃至は社會主義を全的に解してゞある。共產主義とは何かといふと

『共產主義とは社會主義の理論（ドクトリン）であつて、たゞに生產機關を共產化するばかりでなく、消費する品物、例へば食糧、家具、住宅等も社會乃至は團體で持つべきものであり、かくして單に仕事及び報酬のみならず、個人の必要品も社會で持ち、かつ管理すべきものだと主張する。共產主義は富の分配、社會的權利、義務において、絕對的で完全な平等の主義を要求する』

ものである。（Dictionary of Socialism, by Dr. Rappoprt. P.25）

然らば更に社會主義はといふと、『勞働の權利（ライトトウーウオーク）は總べての人間

の自然の權利である』點に出發して『併し社會主義で主張する勞働の權利は、資本主義制度の下では不可能であつて、それは共產的共和國の下においてのみ可能である。』と主張し、『故に近代社會主義者は現下の議會における代表者乃至は政府として、この權利を主張することを捨て、社會主義國家の時期が來て俸給組織が廢棄するまで待つのである』といつてゐる。（前同書P13）

私がロシアに共產主義及び社會主義なしといふのはこの意味である。そこには生產機關の國有の問題はあるけれども、嚴格なる意味の社會主義は、單に一部において試みられて居る……無論熱心に……といふ程度にすぎないのである。

この事は容易に數字で示し得る。昨年十二月に開かれた、ロシア勞働組合の第七回大會における報告によると、勞働者がその食糧を個人商人から買入れた額は六割乃至八割に及び、農業家は勞働者を雇入ることが出來、これに對しては無論給料を支拂つてゐる。ロシアが外國の個人資本家の投資を歡迎してゐるのは、今更のことではないが昨年（一九二六年）を以て終る會計年度には一ケ年に十四のコンセッションをドイツ會社に與へて居る。

それ許りではない。ソヴェート・ロシアの失業者の數は驚くべきもので、その數は本年（一九二七年）四月において、一百四十七萬七千人に及び、これを昨年同月の百〇七萬七千人に比すると正に四十萬人の增加である。（この數字は親露論者フイッシャーのニュー・ヨーク・ウオールド紙に寄せた電報による。）理由は何れにあるにしても、資本主義原理を攻擊するソヴェート共和國としては驚くべき事實といはねばならぬ。

ソヴェート・ロシアが共產國でないといふ事實は、教養ある經濟學者の悉く認めて居るところである。英國の一流の經濟學者であるケーンズ（John M. Keynes）は、一九二五年即ち一昨年の九月に勞農ロシアに行つた。同氏はその報告において、『ロシアの試驗は、その結果から判斷するには尙五ケ年のタイムを待たねばならぬ』といひ、併し現在の狀勢は左のやうだと云つてゐる。

『ロシアは人口が約一億四千萬あり、その內七分の六は農民であつて、七分の一が都會人及び工業勞働者である。われ等の見るところによれば都會及び工場の人々は、自活して居らない。即ち彼等は彼等の生產が許し得る以上の生活標準を保つて居る。この都會人口が餘分に費消するところの支出は、農民をエキスプロイトすることによつて埋め合せられるのであるが、これは都會人口が全體の人口に比して非常に少ない

から可能なのである。かくして共産政府は、農民を搾取することにより、その大事にするプロレタリア勞働者を飽食（比較的にいつて）せしめることが出來るのであり、また一方農民は、かうして搾取さるゝに拘はらず、かれ自身の土地が與へられたから政府の更迭を望まないのである』

ケーンズ氏はかういつて、ロシアの農家の收入は以前の半分を過ぐる事多くないと斷じてゐる。

これをもつと明瞭にいつてゐるのは、英國の有名なる露國通であるランサム（Arthur Ransome）である。氏は曰く

『私はよく人に共産（コンムニスト）ロシアについて聞かれる毎に、そんなものは存在しないと答へるのが常である。そこには諸種の實驗が町に行はれて居るけれども、それはもつと廣い田舍からの寄附によつて可能なるのみである。謂はゞ試驗の島が、殆んど手をつけられてゐない資本主義の廣い海の中にあるといつてもいゝ。それは太平洋といふ廣い海が存在するからこそ（隨分地方的な風で騒がされたが）、革命が島の中に生存することが許されるのだ』

と述べてゐる。

こゝに引照した兩氏とも、徒らに偏見に捕はれて議論をする人々ではない。否、何れもソヴエート聯國に對して多大の同情をすらも有する人である。たゞ現在の狀態はと聞かれゝば前記の如く答へざるを得ないと云ふまでゝある。

（四）一團の『狂信徒』權を握る

前に述べたように戰爭で帝政ロシアの土台は動搖した。加ふるに戰爭思想は、力を以て權力を奪ひ、暴力を以て反對者を叩き伏せるといふ思想である。これが假へ對手國に對するものであつても、戰爭の長引くに從つて、同じ思想が國内で醱酵されないわけはない。ロシヤの革命の期はかうして熟した。

そこに現はれたのが當時三十五才であつたケレンスキーであつた。この大して實力のない一個の法律的頭腦の一擊が、何百年の歴史を有するロマノフ家を仆したことによつても、如何にその土台が朽ち果てゝゐたかが分ると思ふ。併しケレンスキー政權は長くなかつた。この場合必要であつたところの實力と信念が、かれに欠けてゐた。この後に來て、かれに取つて代つたものが、一團の『狂信徒』であつた。

こゝで『狂信徒』といふのは、決してレニン及びその一黨を惡し樣にいふためではない。それはレニンとその一黨が宗教に對すると同じ狂熱と信仰が、自分達の主張に對してあつたこと

を意味する。彼等は、マルクスをその儘信じた。彼等はまたルソーの信じた様に、人間は自由に生れたに拘はらず、實際は鎖と壓迫に惱んでゐると見た。一九一七年の革命の際にかれは一書を著して云つた『國家とは何であるか、それは司配階級の官僚によつて指揮される腕力(フォース)（軍人と警察）の道具にすぎない。』と。

この彼等の狂熱は、彼等が住んで來たロシア帝政の極端に壓制的なる政治によつて、益々刺戟された。彼等には殉教者的態度すらあつた。マルクスを科學的に研究して、その説に服したといふよりも、彼等は寧ろ自己の內部に藏する噴火山のやうな不平と不滿を、マルクスを通して爆發さしたといつた方がよかつた。五十名の無關心者よりも、三名の狂熱的信念を有するものゝ方が強い。彼等はこの少數者を以て大事をなしとげた。そしてその結果が、帝政の反動から、無產者獨裁の反動に赴いて、無用たる破壞と、慘虐を敢てしたのだ。この事は許すべからざることではあるが、後世の歷史家は恐らく時計の振子が、一方から強く他方に回轉したのであつて、ある意味でやむを得ない次第だといふかも知れない。

こゝに序手だから當時天下をとり、今現にロシアを回轉してゐる共產黨の現狀を紹介しておかう。革命當時には同黨の數は少なかつたけれども、今は約百萬人の會員がある。一九二五年度においては、その人種別はロシア人が七十二・二パセント、七パセントがウクライニア人、三・九パセントがユダヤ人、殘る一六・九パセントが各國人である。始めの間はロシア共產黨といつたけれども、その後ロシア人ならざる會員の感情を尊重して總聯邦共產黨（All-union Communistparty）と呼んで居る。この黨の特長は會員が若い事であつて、四十才以上の會員は全體の一五・三パセントに過ぎず、三十才乃至三十九才までの者が三九・四パセント、二十才代のものが二九・三パセントであつて、他は十八才以下である。

この共產黨には勞働者が多いのは元よりであつて、過去において或るべく門戸を閉(せま)くして、容易に入會を許さなかつた同黨は、更にその門戸を工場勞働者だけに開いた。この結果レニンの死んだ年とその翌年とを比較すれば、工場勞働者は四四パセントより五七・九パセントに增加し、農民は二八・八より二五・三パセントに落ちた、そしてインテリゲンチヤは二七・二より一六・八パセントに減少したのである。（この數字はマンチエスター・ガーデアン紙所載ランサム氏の記事による）

その頃よくレニンはその信ずる社會主義が極めて僅かの間に成効するやうに聲明した。即ち革命の翌年一九一八年一月には

『ロシアにおける社會主義が成功するには、少なくとも二三ケ月は必要である』といひ、また第一會の人民委員會では繰返し『半ケ年の内に社會主義は地を領するであらう。そしてロシアは世界の最大國となるであらう』と述べたとある。(Lenin By Trotzky. P1衣)

この言葉において、レニンが何を意味したのかは判然としない。トロツキーはこれはレニンが、社會主義を單に將來の『目的』と見ないで、今日明日の現實問題として取扱ふために、黨員を奬勵せしめたものだと見、又ある者はロシア革命が成功した以上、世界の無產階級も風をのぞんで蹶起して、こゝに世界革命が成就するものだと信じ、レニンはこれに望みをつないで居つたのだと說くものもあり、更に『過渡期におけるロシア』の著者ミリウコッフのように、

『ボルシエビキはロシアの權力を長くとつて居るであらうとは信じなかつた。今現にわれ等の手に入れ得る共產黨首領の自白によれば、彼等は二三ケ月以上、その位置に居ることを豫期しなかつた。この短い期間に彼等はロシアから出來るだけ、取るものを取つて、これを世界革命の目的のために使はうとした』

と述べてゐる者もある。

（五）**產業組織とレニンの誤算**

レニンの目がけたものは、然らば單に社會革命だらうか。社會の秩序と、生產機關を打ち壞すだけが、その目的であつたらうか。

この疑問に答へて、ケーンズは『それなら實につまらない事だ。共產主義が單に長い期間において、資本主義よりも結局物質的幸福を、より多く得られる技術的機關であるといふだけであるならば、それは單にどちらがいゝかといふ經濟的技術の問題である。併し私はこれだけではないと思ふ。』と述べ『レニン主義の道德的根據は、個人及び社會の金錢を愛する態度に對する點に集つてゐる』といつてゐる。

この意味は、近來の社會は餘りに金を造ることにのみ重きをおいてゐる。靑年は金を貯る事を一生の目的として、少しも社會的に恥かしくない計りでなく、それは一生を國家と社會と敎育と藝術と智識に棒げると同じ程度に尊敬を拂はれてゐる。レニンの目がけたのは將來かゝることがロシアにおいては不可能であるやうにせんとしたのではなからうか。即ち尊敬すべき靑年が、金を造る事を一生の事業として居るといふやうな社會を改造して、何人も社會のために働く、その義務を盡せば、社會は

當然かれを保障するやうにしやうとしたのではないだらうか。から見なければ、彼等が新しい宗教として、その主義に狂熱的信仰を捧ふ意味が解されない。……これがケーンズなどの觀察する宗教的レニン主義である。レニン主義をかう解していゝかどうかは議論があるだらうが、レニンとその一黨を一個の宗教信者と見たところは、われ等の同感を惜み得ないところである。

こゝまでは彼等の自由である。彼等が如何に『マルクス教』を信じようとそれは全く彼等の問題である。併しながらその少數者が、狂熱的信仰を以て自からロシアの支配階級たらんとし、すべての反對者を排撃し、生産機關を壞つたことから、彼等に對する批難と問題は生ずる。

日本にも、よく見られるやうな幼稚な左翼論者、たゞ破壞したがる者、また破壞さへすれば建設は自然に出來るといふやうな無責任な人々ならば知らぬ事、三十年を經濟と政治に費したレニンが、何故復雜なる産業網、分配網が直ちに再建出來ると夢想したらうか。

この疑問に對して最近發表されたるロートンの『ロシア革命』は、出來るだけ、忠實にこれに答へようとしてゐる。(The Russian Revolution 1917—1926. BY Lancelot Lawton)

同氏によればレニンは、今や資本主義は發展して殆んど自働的に運轉されるまでになつたとみた。現にかれはその著書に曰く

『資本主義は總べての會計、銀行、シンヂケート、郵便、消費組合、雇人組合を維持するために裝置を創造した。そこで唯一の必要することは、この裝置をその儘われ等の手に移すことである。……この手段にはパンの專賣、パン札及び産業的强制徵集などが必要である……働かざるは食ふべからず』

かれはこれが平和的に出來るものだと信じた。かれは『農民は總べての土地を取ることが出來る、但し嚴格に秩序を保つて、機械、建物及び家畜を害なふなかれ』と命令した。併しそれは出來なかつた。大衆は革命とは自由に他人のものを自己のものとして、自から金持になれることだと信じ、徒らに掠奪をした。ロートンはこれについてこう書いてゐる。

『かくして革命は始めにおいて大慘事と終つた。それは天災や地震の如く人間の幸福については少しも考慮されなかつたのである。けれどもこれは何世紀間の暗黒、虐政、戰爭、饑饉、腐敗政治の産物である。ザーもレニンもトロツキーも、これを製造したのではない。それはロシアの國民に、そうならなければならなかつた理由があつて、たつたまでかゝる。』

かくして生産機關は勞働者の手に渡つた。勞働者は又實際、

共産國家の指導でよく働いた。運轉は決して理想的ではなかつた。始めの間は帝政時代に殘された手持品によつて運轉されたけれども、それが無くなつた後は工場は偏へに破滅の道を辿つた。最高經濟會議は、總べての工場に原料、燃料、俸給を與へる筈であつたけれども、手品師でない彼等はそれが永遠に可能であるわけがなかつた。工場における勞働者の統制はくづれた。トロツキーを頭とする經濟委員會は勞働の強制を行つたけれども、これも失敗に歸した。

一九二〇年に至るまでに、勞働者の給料は戰前の一割六分、勞働者の就業數は四割、そして總生産高は一割四分といふ慘めな程度に下つた。政府はついに勞働者に對し工場より品物を取り出して、これを農家に持つて行き、食糧と物々交換をすることをも許した。

強制的共産主義は見事に失敗した。これは勞農政府自身の有力な分子も認めたところである。

（六）新經濟政策以後の問題

一九二二年十一月二十二日のことである。この日第三インタナショナルの年例は、クレムリンの宮廷に開かれて、各地から集つた代表者は一千名に及んだ。壇上には珍らしやレーニンが立つてゐた。手に時計を持つてゐるのは、醫者から一時間を限つて演說を許されたからである。かれの足許には有名なラデックが控へてゐた。ドイツ語の自由なレーニンが、にはかに適當なロシア語を思ひ出せない時に、ラデックは小さい聲で下から加勢した。

レーニンの聲には一種の辯明の響きすらもあつた。顧みればソヴエート政府が、その共産主義の理想から一歩を後退して、所謂新經濟政策を宣言し、農民に土地の所有を公認し、商人に物資の自由賣買、現物と貨幣との交換を許すやうになつたのは前年（一九二一年）の事である。それは黨内の一部から激烈な反對があつたに拘はらず、殆んどレーニンの責任において實行したといつてもいゝものである。かれは當時正直に『共産主義は、教育ある國民によつてゞなければ成功しない』ことを告白した。そして過去一ケ年の新經濟政策の成績を述べ、『確實に二千萬ルーブルの剩餘金を得て、これを基礎工業の方面に使用することが出來る』旨をも報告した。それは主義的にいへば確かに後退であるけれども、經濟的にいへば革命ロシアの成立以來始めての好報であつた。

併しこゝに問題は起つた。産業の復興は結構なことであるが、たゞ經濟上の原則として、かうした膨脹期には多くの流動

資本を必要とするのであるが、外國と斷つて居る勞農ロシアには、これを何處からも得ることが出來ない。資本が得られなければ、從つて自由に産業機關を擴張するわけにはゆかないといふ悩みがある。これが當時から現在に到るまでのロシアに附添ふ問題であつて、主義上から云へば資本主義國として眼の敵にする米國の如きに、絶へず秋波を送る所以である。

ところが一方農民の方では一二年續いて農産物が豐饒であつたので、購買力が非常に增した。そこで農民は、かねて無くなつてゐる織物、機械その他の製作品を買はうとしたけれども、前にいつたやうな事情で、國内の製産では到底農民の必要に應ずることが出來ない。普通の國ならば海外に信用を設定して、品物を輸入すればいゝのであるが、ロシアにはこのクレヂットがない。唯一の品物輸入の道は、ロシアから何か輸出してその代價を以て輸入するにあるのだが、困つたことにはその輸出品は穀類を以て最とし、これに材木、油、毛皮等若干あるのみで、いづれも農家の所有するものである。彼等はまづその欲する織物を與ふるのでなければ、自分の持物を手放さないのである。ソヴエート政府は、かうして深いヂレンマに陥つた。

この結果、經濟上の必要は、農民に對しては高價なる製造品を賣つて、農民からは安い穀物を買入れた。これはソヴエート政府が輸出入を專有してゐるのと、需要供給の關係から可能なのであつて、私がこの文の始めにおいて『共産主義の實驗は農民を搾取ることにより可能である』といつたのは、正にこれを指すのである。

かういふ狀態の下にあつて、工場勞働者乃至は都會人が、農民より有利なる地位に立つのは當然である。その購買力からいつて、都會勞働者は農民に比し二倍ぐらゐの待遇を得て居ることになり、殊に無産階級といつても、實は工場勞働者を中心にするソヴエート政治であるから、そこには種々なる特點があり、待遇もいゝ。そこで農村の青年はドシ〳〵都會を目がけて行くのである。始めに書いたやうに目下の勞農ロシヤの失業者は百五十萬人を數へ、この内五十萬人は始めて仕事を見つける者であり、又總數の半分は不熟練職工なのである。政府はこれを由々敷い問題なりとして、前後策を講ずると同時に、來年度には失業者救濟資として八千萬圓を支出する外に、社會保險組合 (Social Insurance Organization) は別に六千六百萬圓を出だしてこの問題の解決を計る筈である。問題の重要性を知るべきではないか。

われ等はこれ等の點について最早餘り詳しく内容を語ることは出來ないが、スターリン一派と、トロツキー一派と抗爭し

て、共產黨內に常に內訌が傳へらるるは、この經濟政策——農民の要求に耳を傾くべきか、乃至は依然工場勞働者を中心にすべきかといふ問題を主としてゐる。即ちトロツキー派は飽くまで、工業勞働者を中心にしてその政策を行ふべきであると主張する。何故ならばロシアの如き後進國は、他國における革命なくしては、自國の革命を完成せしめることは出來ないから、この際更に躍進して世界革命を起すために努力すべし、今にして農民の多少の不滿の聲に耳を傾くるのは、最初の革命精神を沒却するものだといふのである。トロツキー一派の少數黨は一個の國際革命論者だといへる。

これに反してスターリン派、即ち現今の政府派は、ロシアの革命は外國に於ける革命の援助を受けなくても、獨力で出來る。われ等は事を性急に急ぐ必要なく、內の問題を片づけながら進んで差支へない、といふ立前に居る。そして主義的には歩一歩後退して、一九二五年には所謂新經濟政策といふものすら許してゐるのである。

この邊の卑近な例をとるなら、日本における明治初年の征韓論と比較してもいゝと思ふ。威勢のいゝ征韓論がトロツキーで、內を治むべしとの一派がスターリン。そして日本でそうであつたように、ロシアにおいても穩和論が勝つて、トロツキー、ヂノブイエフ、カメネフ等は失脚したのだ。

（七）勞農政權の下に古いロシア

然らば勞農ロシヤの過去における功罪は如何。そして將來ロシアは如何なる方向をとるであらうか。

第一にわれ等が感ずることは、一國の國民性といふものは、それが帝政であつても、また無產者獨裁であつても、根本的にはそれ程變化するものではないといふことである。支那が共和制をしいても、その實質は大して進歩しないと同じである。帝政時代に見られた特長は、今の政治にも見られるのである。世人は勞農ロシアにおいて現に三百萬の勞働者に、百五十萬に近い役人が居るのを笑ふけれども、それは單に帝政時代の形式と官僚主義が、今に現はれたのに過ぎない。

このロシア精神の發現は、死んだレニンに對する國民の態度でも分ると思ふ。元來ロシア人は偶像を禮拜することを好む國民であるが、今や現にキリストやマリアの像の代りに、レニンの像を禮拜して居るものが少なくない、そして田舍においてはお燈明をすらあげて居るものがあるとのことである。これは單に無智識階級の間の事のみではない。人民委員會の會議室には大きなテーブルがあるが、その上位のところに一つの椅子があ

る。それには紐を横に引いて、何人も据ることを敢てしないが、それはかつてレニンが据つたものであり、何日の何時にそれを使用したと書込まれて居る。

考へても見給へ。始めレニンとその一黨が立つたのは偶像破壊のためではなかつたか。それが今や一個のレニンに對しても、神としてこれを遇し、モスコウ市の中央クラスナヤ廣場にあるレニンの廟に軍人を立たして守護して居るのである。死者に對する禮としては餘りに丁寧にすぎる。われ等をして『彼等もついにロシア人なり』と微苦笑せしめずにはおかない。

第二にわれ等が知り得ることは、ロシアの大袈裟なる實驗に對しては、未だその効果によつて批判することは出來ないけれども、過去十ケ年の成績によれば、レニンが革命當初に放言したやうに『半歳ばかりの内に、われ等は世界第一の國になる』といふ豫想とは、大分な隔たりがあることである。即ち一九二六年は農業の好收穫であつたに拘はらず、この產額は戰前の九割にすぎず、また工業の生產高は同じく戰前の七割を出でないのである。ロンドン・タイムス紙が最近信用ある調査なりと發表したるところによれば、ロシアの產業の生產額は一九一三年において七十億ルーブルであつたが、一九二五―二六年の一年には四十五億二千三百萬ルーブルに過ぎないといつて居る。これ等ソヴエート・ロシア反對者の宣傳として割引さるべきものだとしても、明白なる一事は產業上、經濟上において他國に誇るほどの進步を遂げて居らないことである。しかもそれに拘らず勞働者が大した反感を起さないのは、彼等が『無產階級の政治』とか『勞働者の天下』とかといふ精神的な滿足を得て居るが故であらう。

第三にわれ等が知ることは、彼等が如何に個人の自由と言論を壓迫して來たかである。これは一面彼等の歷史から見れば無理のないことでもある。共產黨は少數團體として强力なる行動をするためには、一致團結するの外はなかつた。故に黨の會合の節には飽くまで討議を決するけれども、一度議が決せられれば、これに絕對に服從するの義務があつたのである。

彼等は政權を自己の手に納めた後も、これを全國家に適用した。勞農主義に反對するものはドシ／＼慘殺した。學校においては十九世紀の始め、即ち勞働階級が權利を持ち始めた頃からの歷史は敎へるが、その以前の事は少しも敎へないところが多い。また書籍の檢閲の如きは、滑稽に近いまでに嚴格である。最近ロシアにおける著作家は、パリーの一露字新聞に書を送つて、彼等が全くその自由を奪はれたるを述べ、ロシアは今や一種の恐怖狀態であるといひ『サツコ、バンゼツトの死刑事件に

抗議する者が、何故にわれ等の受けてゐる迫害に同情しないか』と訴へて居る。英國の自由主義立場にあるマンチエスター・ガーディアン紙は社告で、この手紙の眞實性を裏書きし、その暴虐を攻擊してゐる。（八月六日同紙）

ソヴエート・ロシアが如何なる實驗を試みようと、これは彼等の問題である。われ等はこれを興味と同情を以て眺める餘裕はある。併し個人の權利と自由を古靴で踏みにぢる樣に踏み躙つて、そこに進步と文明はあるだらうか。他國にも同じやうなことがあるといふ論法は、彼等自身の行爲をチヤスチフアイすることにならない。彼等の誠實さはこれを認めて居るに拘はらず、世界の識者がソヴエート・ロシアを眞實なる友とするのを躊躇するのは、單にこの非道なる彈壓政策——目的は手段を正化するといふ直接行動主義があるからである。

（八）ロシアは何處に行く

ロシアは如何なるであらう。大きな實驗臺の上に立つたロシアは將來如何に變化するであらうか。簡單ながら勞農ロシアの十ケ年の經過と、その内情を述べて來たわれ等の筆は、この問題に當面せねばならぬ。

一國の將來が、かくも變化するであらうといふような豫言は、餘程の無鐵砲でなければ敢てしないところである。けれども我等はロシアの將來について、や丶安全に云ひ得ることがある。第一にはソヴエート政府が、最早容易に動かぬであらう事、即ちその基礎は相當に根深く出來た事（戰爭があつて、國家が再び混亂に陷らなければ）。第二には旣にその位置が動かないとすれば、今の共產主義は出來るだけその政權を維持することに努め、永遠に勞働者の手に主權を維持するため總ゆる努力を拂ふであらうことである。第三には今の傾向からいへば、必要がロシアを益々資本主義化せしめるであらうと思はれるが、併しこの點は共產黨内で現に二派に分れて爭つて居り、いづれも一時の政策的後退だといつてゐるから、内部の事情によつて決定されるであらう。

たゞ問題はこの間に農民が如何なる役割をつとめるかである。ロシアの農民に無智識者の多いのは有名な事實であるが、併し彼等と雖も生活意識には敏感である。彼等は永遠に工場勞働者の頤使に甘んじて居るだらうか。彼等は旣に自己の主張によつて新經濟政策も得、一九二五年には所謂新々經濟政策も與へられた。彼等は更に進んで、勞働者獨裁の牙城に迫つて、平等なる政治的ヴオイスを持たうとしないであらうか。その場合には工場勞働者本位、都會本位の政策は、三度び・轉機を醸さ

ねばならぬ筈である。

そればかりではない。農民が國政にヴォイスを持たうとする事は、必然に獨裁的政治運用を變化せしめないではおかない。國民の七分の六の多數を包括することは、現在の制度では到底不可能である。この必要がロシアの政治機關を、もつと廣汎な民衆的なものとするのではなからうか。トロツキーは元來、彈壓政策、獨裁政策の張本人である。それは自己に有利に囘轉する場合には都合がよかつた。今かれは不遇の地におかれて、發言と主張の自由を封ぜられて、彈壓政策が如何にかれに響くか。かれがもし幸ひにしてわが身をつめつて、彈壓政策の痛さを知るやうなことがあらば……鬪爭に馴れたかれがこれを覺ることはあるまいが……幸福はかれのみに止らない。

あの鈍重な、併し根深いロシアの農民が、ムク〳〵と頭を擡げて來て、都會勞働偏重主義のソヴエート政權を脅かし、そこからかすか乍ら民主的政治が生れるとしても、それは全くロシア流のものであらうことは明らかである。われ等が多くの左翼論者に承服しないのは、彼等が總べてを一個の公定式(フオーミユラ)に入れて、そこから結論を引き出すことである。われ等は一國の國民生活に經濟的要素が極めて重大であることは元より承認するが、又何千年の歷史を有する國民性その他の考慮が、必要だと思ふ。ロシアのソヴエート政權が、その主張と主義といふ外皮をはげば、帝政とそれほど相違しないことが一つの例である。

ロシアの實驗は犧牲は頗る大であつたけれども、併し將來人文史上特筆され、參考とされることだけは疑ひない。然らばわれ等は出來るだけ親切に、その行先を見守るだけの寬量は必要ではなからうか。（一九二七・九・八）

太平洋會議と移民問題

那須　皓

一

過日のジュネーヴに於ける國際人口問題會議で、國際勞働局長アルベル・トーマ氏は、移民に關する國際的調査機關を作れと提唱した。その趣旨は甚だ結構であるが、太平洋沿岸諸國に關する限り既にかゝる調査機關は太平洋問題會議に於て或程度迄實現されて居るのであつて、一昨年布哇に開かれた第一回會議及今夏七月同地に開かれた第二回會議に於て、移民問題が參列諸國の代表者に依つて熱心に討議せられたのである。素より太平洋問題會議は爾餘の諸問題をも取扱ふものであつて、移民問題のみに專らとなる譯にゆかぬし、且參加國も日、英、米、支、濠洲、加奈太、ニユージーランド、其他に限られて居る次第であるから、移民に關する全世界的な調査機關が新たに生れて同問題がより徹底的に調査せらるゝことは結構なことであると思ふ。と同時にかゝる調査機關が出來たとしても、その構成如何によつてはそれが果して太平洋問題會議の如く多方面の人々を集め、忌憚なき論議並びに調査の發表所となり得るか否かに就て多少の疑問がある。各國政府が集つて作るような機關は、資力や資料の蒐集や其他に就いて多大の便宜を有すると同時に、動もすれば其の活動が官僚式となり、其所に述べられる意見が率直さを缺き、眞に各國民の種々なる意志、要求、不平等の淸算所となり得ぬ場合が多いからである。

偖て此の際、私は太平洋問題會議に於て移民問題が如何に取扱れたかに就いて今回の會議參列者の一人として一言して置きたいと思ふ。過日の報知新聞は其の社說に於て我々が排日移民法の存續に不滿なる旨を此の際再び明言すべしと主張して居つ

たが、此事は實に太平洋問題會議に於て一昨年も今年も日本側委員の繰返し力說する所であつたのである。太平洋に於ける移民問題の論議は自ら排日移民法を中心として旋廻するに至る。されば一昨年の會議に於て移民問題を議するに當り、帝大法學部の高柳教授は排日移民法に對する不滿を力說すると共に、より善き移民政策の基調として、一「國家は移民に關する國家主權の行使に當つて全人類の利益及び要求を適當に考慮し、自國民のみならず、他國民の要求を不當に制限せず、他國民又は他人種の感情又は感性を、所謂主權の極端な主張に因つて、害すべきものでない事」を認めねばならぬと主張して、多大のセンセーションを起したのである。同教授は更に移民入國許可の合理的條件や、入國後の權利義務等に關しても、精細なる意見を發表した。此の他移民問題に關しては、法律的、政治的、經濟的、人種的、文化的、宗教的、等種々の觀察點より日、支、米等の委員によりて各種の意見が述べられたが、劇的興味の中心は此の排日移民法批難にあり、之が人々に最も深い感銘を與へたと云つてよいかと思ふ。

今夏の第二回會議に於ても、同じく排日移民法を不當とする聲が日本側委員によつて種々の機會に擧げられたのである。石井徹氏は夜の總會議に於て、日本側は此の排日移民法を以て問題終局せるものと看做す能はずと論じ、又鈴木文治氏は移民問題は結局勞働問題にして、萬國の勞働者は人種差別的精神を去り國際協調的態度を以て之を解決せねばならぬと叫んだ。人口食糧問題の討議に際して「各國民は高き生活標準維持を理由として未開地を他民族に閉鎖して可なるや」との質問を私が出したのも同じ心持ちに出でて居る。過日のトーマ氏の演說中に述べられた二點、「即ち廣大なる未開地を有する國民が他民族の來住を拒否して可なりや」及び「各國民は生活資料の許す限度以上に增殖して可なるや」なる質問は實は布哇で私共が議したものなのである。併し今私は此等の點を一々詳細に述べる事を避け、私が出席した移民問題の圓卓會議に於ける排日移民法に關する討論の一般を記し、更に之に一挿話を加ふることによつて、私の印象を讀者諸賢に傳へたい。

二

移民問題の圓卓會議に於ては、移民の動因に就て先づ種々の說が述べられたが、國際間に於ける移住を全然自由に放任するとは種々の困難を惹起するから、必要に應じて或程度の制限をなすことは現狀として已むを得まいと云ふ議論が覇を唱へた。此の議論の根據としては今日は運輸機關が發達して居るから急

迄に多人數の人々が全然文化的社會的事情を異にして居る他國に移住し得べく、其の結果として各種の難問題が發生する虞れありと云ふことが擧げられた。併し乍ら制限はするとしても其の制限たるや固より極端に自國本位であつて國際間の圓滿なる諧調を破壞する如きものであつてはならぬこと勿論である。

所で米國の排日移民法は正に此の後者に屬する。それは不必要なる侮辱を日本國民に對して與ふるものである。此の事は列席の米國側委員の爲々承知して居る所である。一方、米國側としては日本移民が自由に米國内に漲り入る事は絕對に嫌である。日本と雖も嫌がられる所へ無理に腕力で押入る考へは毛頭無い。そこで差當つての問題は如何にせば日本の面目も立ち、米國の要求も貫徹するやうに之を改め得るかと云ふことである。それは排日移民法の撤廢か、修正をなす外はない。そして以前の紳士協約に戻るか、又は歐洲諸國と同じ比率制度で日本移民の入國を認めるかの外はない。紳士協約の復活は困難とすれば寧ろ歐洲と同じ比率制度の適用が一番公平であり且實行し易い。

勿論日本は此の比率制度の下に多數の移民を米國に送り得ない。現制度下では僅に百數十名に止るとのことである。さり乍ら今日我々が最も不快を感じて居るのは、我國が差別待遇を受け、我が面目が不當に傷けられたと云ふ點にある。實利よりも寧ろ名聲の問題である。そこで「比率制度を適用すれば日本國民はより滿足するか」との米國委員の問に對して私は「然り」と答へたのである。

比率制度の適用は多數の米國側委員の眞面目に考慮する所であつた。今日は未だ時機の熟せざるものがあるが、今後適當の機會に排日移民法の修正案は米國内に於て自發的問題たる可能性があるから今暫らく隱忍してもらひたいとの旨を彼等は述べた。どれだけそれが米國輿論を動かし得、どれだけ我々は待たねばならぬかは、固より確言し得ない。併し我々は適當なる心理的機會の到來を待つ此等の人々の心事を疑はない。我々は米國の公明なる分子の活動を刮目して今後に期待するものである。

比率制度適用に對する反對意見は之を餘り聞くを得なかつたが、その少なき反對論者の一人たるローウェル氏（加州フレスノ・レパブリカン元主筆）と私との問答を左に記して參考に供しよう。私の質問は四ケ條よりなる。

（一）歐人と同じき比率制度によつて、年に僅々百數十人の日本移民の來住を認むることが、一億一千萬の米國民に取つて、如何なる社會的困難を齎らすと考へるのであるか。

（二）加州に多年在住して平和に職業に從事せる日本人をして

加州に安住する能はさらしむる如き空氣を作り、之を加州より驅逐することは正義に協へるものであるか。

(三) 加州に於ては日米人の雜婚を法律によりて禁じて居るが、法律はかゝる個人的心情の問題に迄立入りて之を規定する權能があるか、又さる規定が果して實効を奏するか。加州在住邦人は日本に歸り妻帶して之をつれ歸るを得ず、加州に於ては白人との結婚を禁ぜられるとすれば、配偶者を得る能はざるものを數多生ずる。之は人道問題ではないか。

(四) 東洋移民排斥問題に就ては種々の口實を設けるが結局は人種的僻見に基いて居る。殊にアングロサクソン人種の人種的優越感に基いて居るのである。然るに世界の白人中には佛、露、其他の如く東洋人に對して人種的僻見を有せざるものがある。然らば吾人は自然の勢ひとして此等の白人とより接近しより親しくなるであらう。而して世界はアングロサクソン系の資本家的國家の一團と反アングロサクソン系の他の一團とに分裂對抗する勢を招致するであらう。若し米國の東洋移民排斥がかゝる結果を招くとすれば、米國は國内に面倒なる人種問題の惹起せんことを虞るゝ餘り、國際的により大なる難問題を發生せしむるものではなからうか。それは世界の平和的進歩に貢獻する所以ではあるか。之に關しては如何に考へるか。

三

以上の質問に對するローウエル氏の答へは大約下の如きものであつたと記憶する。

(一)比率制度を日本に適用する結果少數の日本移民が米國に來住することは固より問題とするに足らぬ。併し米國は近き將來に於て歐洲移民をより自由に入國せしむべく現在の比率制度に改革を加へ或ひは之を撤廢するの必要を感ずるかも知れない。その時に歐洲移民と同樣に日本移民が漲り入ることは困るから、何等かの差別をつけねばならなくなる。さうすると現在の差別待遇を撤廢することは將來再び其の問題を矢釜しくする所以になる。

(二) 在來の加州在住日本人の住心地を惡くして居るのは氣の毒に思ふ。日本が若し排日移民法を以て結着した問題と考へるならば、我々は直ちに加州在住日本人に對して一切の差別待遇を止めるであらう。

(三)日米人結婚禁止法は、雜婚に何等の惡結果なきことが科學的に證明せられる迄は已むを得ない。成程法律は個人的愛情の問題を左右すべきではないし、加州で結婚を禁じても

他州で結婚し得るから此の法律は凡ての場合に有効ではないかも知れぬ。自分としても個々の例外的雜婚の場合に異議はない。然し勞働階級の人はともすると餘り考へずに雜婚するものであるし、かゝる種類の雜婚が大衆的に行はれることは、現在の處では其の結果の良否が不明である。そこで法律で之を禁じて置くことが萬全のやり方であると考へる。

又加州在住日本人の結婚難は如何にも御氣の毒であるが、加州としては日本人種が餘り増加するのは望ましくないから、如何に立派な日本の花嫁であつても來てもらつては困るのである。

（四）　移民問題は人種的僻見による點大なるを認める。又米國が東洋人の移住排斥の結果、世界的に難問題が起るかも知れないことも認める。併し云ふが如き世界的難問題は未だ漠然たる未來の問題であるし、東洋移民の大衆的渡來によつて米國が甚だ困難なる立場に立つは眼前觀面の事柄である。米國としては手近な具體的困難を先づ避けるように努むるのは、已むを得ない……云々。

ローウェル氏の答へは以上の如きものであつたが、氏個人としては日本に對し多大の好意を持つて居るそうであり、氏が辯明の辭にも中々苦しげに見ゆる所があつた。加州在住邦人の待遇改善を以て排日移民法に關する討論終結の交換條件とすることなどは甚だ理屈に合はぬ態度である。更に又、日本人は同化し難き國民と云ひ得ぬとの主張に對して、氏が「日本人は同化する、寧ろ米國人が東洋人に對する同化能力乏しきのだ」と云へる如きは好適辭と批評するの外無きものであつた。

ローウェル氏は勇敢に現狀維持を唱へたが他の米國委員の多くは決してさうではなかつた。加州と東部諸州とでは本問題に關する思想感情の大いに異るを述べ、又私に對して「面目なく感ずる」旨を個人的に述べた人々も少なくなかつた。

更に本問題に絡むで議に上つたのは、一つは排日移民法を改正すれば、日本は直ちに歸化法の改正をも要求するのではないかとの掛念、今一つは日本は排日移民法の改正のみならず同樣の事を支那人に對しても要求するのであるかとの質問であつた。前者に對しては、我々は今の處歸化法改正を問題として居るのではない事を答へ、後者に對しては、私個人としては勿論支那移民が日本と同樣の取扱ひを受くるを希望するが、日本は支那の代表者ではないから、米支間の問題は米支間にて解決せらるゝ外なかるべく、日本國民の多數もそれ以上は考へて居らぬと答へざるを得なかつた。東洋人のみを一括せる別の移民法の制定は如何との質疑に對して、私は日本は歐洲の如何なる國

に比しても同等なる取扱ひを要求するものであるから、東洋人だけの特別移民法は御免を蒙ると述べた。結局移民法に於て入國者に差別を附するならば、人種別によらずして該國民の文化教養の程度によるべきことを日本が要求するのかと、ローウェル氏は反問し、而して私は然りと答へたのである。ロ氏も日本の文化教養が歐洲諸國と優に比肩し得べきを認めた口吻であつた。

排日移民法につきては、尙他の委員諸氏によりて種々の論議があつたが、以上に略述せる所を以て、略大體の空氣は察せられることゝ思ふ。即ち多數の米國委員は比率制度採用を以て最も適當なる解決法と考へたらしい。唯日本側より至急に之を迫らるゝ事は、却つて事の達成をぶちこわすとの意見を持つて居つた。最後に私は面白き一挿話を附加する。

四

圓卓會議で私が排日移民法の不當を鳴らして、「外交史上先例無き無禮」と云ふ可なり強い言葉を用ひた時であつた。休憩時間が來ると米國の某委員は、私を室外に拉して私に告げて曰はく

「君は米國が日本を侮辱したと云ふが、實は日本が先きに米國を侮辱したのだ。米國は與へられた侮辱の返報をしたに過ぎないのだ。その證據はかうだ。

石井ランシング協約の中に、米國は日本が滿蒙に於て、特種(スペシアル)の利益(インテレスト)を有することを認めると云ふ一句がある。これは單に日本が滿蒙に接近して居ることに依つて生ずる地理的優勢を述べたに過ぎないのだけれども、日本は之を米國が日本の特種の利權を認め、そのことを外交的に婉曲に云ひ現はしたものであると解釋し、爾來滿蒙に於ける機會均等に對する米國の發言權を常に一蹴して居る。日本は此のように外交文書の文句に就ては用意周到な國だ。

所で米國の排日移民法を通過させたのは、全く埴原大使の用ひた「重大なる結果(グレーヴ・コンセクエンス)」と云ふ一句にあるのだ。之は戰爭を以て米國を脅かしたものだ。此の一句を見る迄は排日移民法が米國議會を通過する見込は萬無かつた。自分も之に反對であつた。然るに此の一句出でてより曾て反對なりし數百萬の米國人は忽ち排日移民法に贊成するに到り、法案は一擧議會を通過して仕舞つた。

何故ならば此の威嚇に屈伏して排日移民法を拒否したら米國民は世界の臆病者と嗤笑されるからだ。自分は恥かしくて東京の街を歩けなかつたに相違ない。そこで排日移民法は日本

が先づ與へた侮辱に對する米國の返報だと云へる。自分は外の米國委員が沈默つて君の攻撃を甘受し、米國許りが惡い國だと云ふような顔をして居るのが癪にさわつて堪らぬ。日本が排日移民法の改正を希望するなら、もつと公明な、是々非非の態度で來なければ駄目だ。佛國の戰債帳消し運動の如き、米國をシヤイロツクなどと罵つて居るのでは到底その目的を達する譯にはゆかない。米國民の心理をもつとよく把むで來なければ駄目だ。日本だつて戰爭を以て威嚇された時に、恐れ入つて引込むことはしないであらう。君はどう思ふ。」

此の委員は六尺許りの大男だが、私の顔を覗き込み眼を据えかう云ふのだ。私も別に恐れる處はないから、彼れの眼を見つめつゝ返事する。

「石井ランシング問題とこれとは違ふ。單なる地理學的事實を外交文書に特記する筈がないから、特殊の利益云々は特殊の意味があつたに相違ない。併し「重大なる結果」は必しも戰爭を意味せぬ。當時の日本は戰爭を決して考へては居なかつた。假りに英語の細かな意義の使ひ分けに於て我が外交官に多少の不用意があつたからとて、それを以て日本國民が先づ米國を侮辱したなどとは飛んでもない話だ。

又あの一句が無ければ排日法は議會を通らなかつたと云ふが、通る危險があつたればこそあの警告も發せられたのだ。勿論日本とても他國から理不盡に戰を以て脅かされて引込むような臆病者でないが、併しそれと此の場合とは違ふ。」

某氏曰はく

「兎も角も米國のみが惡るいのではないのだ。」

此の時、會議再會の時間が來たので此の會見は一時中斷したが、私は腑に落ちぬことがあつたので、鶴見祐輔氏や高木八尺教授などに當時の事情を聞き訊したる後、同夜及び翌朝の二回更に此方から會見を申込み、二人で水入らずの議論を交換した。

私は埴原氏の文書は米國外務省の協議及び贊同を得たるものなること、「重大なる結果」なる文句は發表後第三日目に始めて排日議員の利用する所となりしものなること、若し惡意に解釋すれば埴原氏は一種のわなにかけられしとも看做し得ること、等を述べし後に下の如く語つた。

「米國に日本が先づ侮辱を加へたとの言は斷然受取れない。第一に排日移民法を議會の議とすることが既に侮辱ではないか。又加州に於ける日本人侮辱は地方的出來事で全米國民の意志でないと云ふが、然らば君は南京で一部支那の暴民によ

り米國民が侮辱發行せられし時、支那政府の責任を問はないのであるか。君は日本が威嚇したと云ふが、當時の日本は大震災の打撃を受けて傷き倒れて居たのである。威嚇などとは以ての外である。君は米國が臆病者と嗤はれはせぬかと云ふが、日本古來の道德を以てすれば、倒れて武器を手にし居らざる敵に打つてかゝるより卑怯な振舞ひはない。故に米國があの時排日移民法を通過させなかつたならば、我等の米國に對する評價はより高かつたであらう。假りにあの文句に多少の不適當があつたとしてもそれは日米兩國外交官の共同責任である。之を以て日本國民全體に對して侮辱を加へて可なる理由とすべきでない。」

尚我々は色々と論じ合つたが、餘り眞劍になつて居たので、後で鶴見君から毆り合ひせぬかと心配したとひやかされた。併し最後には彼れも私の意見を反駁することを止め結局双方共に或程度の諒解を得て愉快に別れることが出來た。これも今度の會議中の忘れ難き一挿話であつた。此の某委員のやうな思想の人も米國には多少はあるらしい。兎に角率直に眞劍に一切をぶちまけて話し合うことが、本當の諒解を得る所以であると云ふことをしみじみ感じた次第であつた。

休業銀行の預金者に與ふ

堀江歸一

休銀問題の解決難

本年三月の金融市場動亂に際して、休業の已むを得ざるに至つた銀行は全國に亘つて、三十四の多きを數へ、其預金額亦八億六千二百二十八萬三千餘圓の多きを數へる。是等休業銀行中當業者の努力又は日本銀行の援助に依つて、開業の運びと爲つたものは臺灣銀行以下七行あるのみであつて、其他に至つては、何時に爲つたらば開業して、金融機關として、活動するに至るか、今日の狀勢を以つてしては、殆ど測り知るを得ない。預金者の内には、一方に預金を持ちながら、他の一方に銀行に債務を負ふ者もあらう、否預金其ものが貸付金の振替に依つて、生じた場合もあらう、斯る預金者に對しては、銀行の休業必ずしも大なる迷惑を及ぼさないかも知れないが、自己の生活上に於て剩し得た零碎の金額を銀行に預入れて、其大を成すことに力を致したり、相當金額の資金を預入れて、其利子を所得として、生活したりする預金者に取つては、斯く數個月の久しきに亘る銀行休業は大なる苦痛の種子であつて、困苦、失望、懊惱等物質的に精神的に打撃を受けること少なからざるものと考へられる。社會の廣きに就て、探究したならば、銀行休業に伴つて生じた悲劇的事實は枚擧に遑あらざる次第であらう。私は休業銀行の當業者に對して、憎惡の念の禁ず能はざるものあると共に、預金者に對して、大なる同情を表するのであつて、休業銀行が一日も早く開業し、預金者の爲めに損失の最も輕き條件の下に、金融機關としての業務を復活するに至ることを希望して已まないのである。

銀行が預金者を始め一般の取引先に大なる迷惑を蒙らしめ、

又銀行として將來經濟社會に處する上に於て、信用を毀損することを知りながら、尙ほ支拂停止を敢てするのは、畢竟(一)預金に對する支拂準備金不足して、預金の取付に應じ難く、(二)現金以外に所有する資金亦流動的性質を失ひ、容易に之を處分して、現金を充實する能はず、(三)不景氣の爲めに、有價證券其他の資産の價格に大なる低落を來して居る今日、右の處分を急ぐときは、銀行の蒙る損失の大なるものあり、斯くて進退兩難に陷つた結果であつて、休業銀行は其れ〲資産の上に大なる缺陷を存して居るのである。故に休業銀行にして開業の運びに至らうとするには、第一に此缺陷を充足することが必要である。好景氣の場合であれば、銀行は其所有する資産の値上りを計上し、又は實際に騰貴した價格を以つて、之を處分して、缺陷の一部を充すを得る次第であつて、若しも斯の如くするを得れば、銀行に取つて甚だ好都合であるに相違ないが、今日の休業銀行に就て云へば、個々の銀行に依つて、事情に多少の異なるものありとしても、大體に於て、資産に於ける缺陷の大なるに對して、不景氣の今日、所有に係る有價證券を處分する困難は頗る強く、隨つて右に述べた普通に行はれる方法を以つてしては、今日の窮地を脫するを得ない。勢非常の方法を以つて、缺陷充足の策を講じなければならないのであつて、其方法として考へられるのは、第一、資本金の減却、未拂込株金の徵收、第二、積立金の切崩、第三、預金の切棄並に將來に於ける預金取付の猶豫、第四、重役の私財提供に外ならない。

休業銀行と株主の責任

銀行の所有する資産の價格に減損を來し、負債に對して、權衡を失するに至つた場合に、新に資産負債の權衡を求めるには、資本金の減却を以てするのが株式會社經濟の要訣とする所である。唯資本金に急劇過度の減却を來たすことは、銀行の信用上、面白からざる結果を生ずるを慮り、斯る場合に處する用意として、平生若干の積立金が備へられて居る次第であるから、銀行は一方に資本金の減却を行ふと共に、他の一方に積立金の切崩しを以てし、後者を行ふことに依つて、資本金の減却される程度を或る所に止め、以つて銀行將來の信用を保持するに勉めるのである。然らば斯く資本金の減却、積立金の切崩に依つて、銀行の債務の上に生じた減額は如何に處分するかと云へば、銀行が債權として計上しつゝある貸付金中、所謂固定貸に屬し、何としても回收する見込みなきものを除却し、又所有資産の評價を嚴重にし、以つて資産負債の均衡を保たしめるのであつて、斯の如くして銀行は始めて其基礎を鞏固にし、更生

の實を擧げるを得るのである。固より一個の株式會社である以上は、株主が會社と運命を共にし、利害を頒つのは當然である。即ち彼等にして平生利益金の分配に與つて居つたからには、萬一の場合に、株主としての責任を盡す可きであり、責任を盡す一の方法としては銀行の株式が未拂込であり、而して銀行に於て債務償還の爲めに、新に資金の充實を必要とするときには、銀行の求める所に應じて、株式の拂込に當らなければならないのである。現に英吉利の如き國に於ては、製造工業を始め、一般事業を經營する株式會社は勉めて株金を全額まで、又は全額に近き所まで、拂込ましめ、以つて會社の資力を充實するに反し、銀行業に於ては、拂込株金は額面の一部分殊に一小部分に止め、他は之を未拂込の儘にして置く例である。即ち斯の如くして銀行が萬一營業上に手違を生じて、資産の補充を必要とする場合に、株主として拂込を行はしめるを得るが爲めである。隨つて株式の全額又は全額に近き所まで、拂込を行はしめた銀行は却つて銀行に取つて依頼す可き保證資金の少なき、又は皆無なるの故を以て、世間の信用厚きを得ない。之を厚からしめるには、株金の大部分を未拂込とする必要があると解されるのである。

此點から云へば、我國の休業銀行中、株金拂込未濟のもの丶ある場合には、銀行は整理の一手段として、先づ株主をして全額の拂込を行はしめる可きであつて、此點に躊躇す可き道理はないのである。之を十五銀行に就て云へば、同銀行の公稱資本金は一億圓であつて、內拂込濟の分は四千九百七十五萬圓であり、他は未拂込である。然らば、十五銀行整理の第一着手としては、此未拂込に屬する株金五千二十五萬圓の拂込を株主に就て、行はしめるのが當然であるのに、斯る正則の方法を取つたならば、十五銀行の株主中、平生資力の貧弱なる一部華族の如きは、家資分散の已むを得ざるに至るであらうと云ふ掛念があつて、容易に實行されず、華族の內には團體の力を以て、未拂込株金の徵收に反對する運動を試みつ丶ある者すらある。畢竟株主の拂込を躊躇しつ丶ある間には、他の方面から救助の加へられるものがあらうと云ふ依頼心から、斯る擧に出づるものと解されるが、斯の如きは株主の義務を閑却するの甚だしきものであつて、平生彼等が口にする社會の儀表たる者にある可からざる所である。若しも斯る十五銀行關係者の運動が効を奏して未拂込株金の徵收を度外に置くが如き整理案成立し、而して此事が他の休業銀行の襲用する所と爲つたならば、休業銀行整理の步を進める上に於て、一つの妨碍と爲ること論を俟たない。世人の注目す可き所である。

銀行重役の私財提供

右の如く資本金の減却、積立金の切崩、未拂込株金の徴收に依つて、休業銀行の資産に於ける缺陷を補充すると云ふことは、休業銀行整理策としては當然過ぎる程の事であつて、本來銀行にして其基礎の堅實を謀り、信用の維持を重んずる以上は、支拂停止の失態を暴露する以前に、是等の手段を講じて、災禍を未然に防ぐ可きであつたのである。然も斯る外科的手術を施しては、銀行の資産に於ける缺陷が世間の知る所と爲り、假令ひ手術の結果、立派なる健康體と爲る利益はあるとしても、矢張り世間體から云つて、無病息災を裝ふに如かずとして、彌縫に彌縫を重ねて、遂に收拾するに難き不始末を演ずるに至つたものであるとすれば、夙に爲す可くして、爲さなかつた所を今日に至つて、爲すのは、前後の關係上、已むを得ざる所である。然しながら玆に一の問題と爲るのは、右の如き手段の並び行はれる場合には、休業銀行を復活せしめるに就て、獨り責任を負ひ、損失を負ふ者は株主のみである。株式會社として、銀行の存立する以上は、銀行と株主とは正に同一體であつて、銀行の損失即ち株主の損失と爲るを以つて、當然の道理とす可きであるが、少しく觀察を廣くするときは、銀行の破綻に對しては、株主以外に責任を負ふ可きものがありはしないであらうか。私は其負ふ可き者を求めて、銀行の重役と預金者の二者であるとし、前者は私財提供の形態に於て、後者は預金切棄の形態に於て、共に休業銀行破綻に伴ふ責任を負ひ、休業銀行をして一日も早く開業の運びに至らしめなければならないものと考へる。

銀行にして株式會社組織である以上は、其重役たるものは、取締役であると、監査役であるとを問はず、銀行の世人に負ふ債務に對しては、單に自己の所有する株式のみを以つて、責任を果す限度とす可く、此以上に何等の負ふ可き責任はないのである。故に銀行の重役が私財を提供して、銀行の資産に生じた缺陷を補充するが如き、固より道德上の問題に屬し、世間なり、預金者なりに於て重役に向つて、強要す可き筋合でないと云へるかも知れないが、我國に於ては、多くの休業銀行重役に對して、此道德上の義務を果さしめなければならない理由があると考へられる。元來經濟社會には天災とか、戰爭とか測り知る可からざる變動の爲めに、大なる波瀾を生ずることがある。斯る影響を蒙つて、銀行が破綻の已むを得ざるに至つた場合には、事は不可抗力に出でたのであつて、重役たる銀行經營者の所置を寛恕しなければならないかも知れない。其れでも營業者の平生爲す所愼重であり、安全と確實とを第一義として、經營、

の歩を進めて居つたならば、或る程度の不可抗力的災害を蒙つても、尚ほ之に伴ふ損失を避け得られることは、千九百十四年の歐洲戰爭開始に際し、倫敦市場に勃來したパニックに於て、倫敦市中諸銀行中、一の破綻を暴露するものゝなかつた一事に徴して、之を知ることが出來る。我國の經濟社會は大正九年の恐慌に次いで、大正十二年の關東震火災に遭ひ、打擊を蒙るものゝ少なさりからし其上に、更に累年の不景氣に惱まされ、銀行業の如き其餘波を受けて、營業上不如意の狀態に陷つたに相違ないとしても、尚ほ本年三四月頃に於ける如く、全國に亘つて、多數の銀行が失態を演じたに就ては、其原因の經營者の過失に存することが認められる。即ち我國の銀行業者が濫に暴利の獲得を事として、不確實なる方面に向つて、資金を融通したこと、銀行業者自ら一方に經營する自己の事業に對して、金融の便を謀る爲めに、銀行の資金を融通するに無謀なる方法を以つてし、銀行をして事業の機關たりてらしめたこと、好景氣時代に銀行自ら投機熱の渦中に投じ、虚業の跋扈を盛ならしめたことの如き、我國銀行業者――少なくとも其或るものが自ら求めて自家營業の基礎を薄弱ならしめた所以である。果して然らば休業銀行の如き決して不可抗力ともす可き天災とか、又は不慮の災厄に依つて、閉店した次第ではなく、事の玆に至つたに就ては、頭取以下取締役は營業を行ふに就て、常識を缺き、誠實を失ひ、而して自家・身の利益を逐ふに忙しかつた一方に、監査役は銀行の營業に就て、取締役の爲す所に對して、適正の監督を加へなかつたことを以つて、有力なる原因とする。株主に選舉され、又彼等の信頼を受けて、銀行經營又は監査の重役を託された者が斯る不始末を爲したとあつては、株主に對し、將た又預金者に對して、負ふ可き責任のあるのは勿論であつて、宜しく彼等は私財を提供して、銀行資産の缺損額を補充するの用に供し、株主に對しては資本金減却、積立金切崩に依つて、彼等の蒙る損失を輕減す可く、預金者に對しては預金切棄に伴ふ損失を緩和す可きである。現に彼の十九銀行の如き本年四月支拂停止の不始末を暴露したものゝ、其營業に於て、不如意の趣きのあり、幾多憂慮す可き事實の續出して居つたことは、少しく金融界の事情に通ずる者の盡く認める所であつたが、破綻の生ずる三四個月前即ち昭和元年下半季の貸借對照表は如何なる形に於て發表されたかと云へば、

當季純益金	三、五二一、五六〇圓	當半季諸積立金	九〇〇、〇〇〇圓
前季繰越金	一、三二七、〇七一	同　配當金	二、四八七、五〇〇
		同　賞與金	一八〇、〇〇〇
		後半季繰越金	一、二八一、一三一
合計	四、八四八、六三一		四、八四八、六三一

であり、右の配當金は株式に對して一割に當り、斯る好成績を擧げるを得た故を以つて、重役亦半季十八萬圓の賞與金を收め得たのである。數個月前に斯る好成績を收めた銀行が數個月後には支拂停止の窮境に陷ると云ふが如き急轉直下の變動に接したのは、其間に天變地殃の一方ならざるものでもあれば兎に角然らざる限り、容易に理解する能はざる所であつて、斯の如きは畢竟我國に於ける銀行重役なるものが銀行の經營に誠意を致さず、帳簿上の算數を糊塗して、單に架空の利益を擧げ、株主には世間並み以上の利益を配當して、彼等の歡心を繋ぐ一方に、自己亦多分の賞與金を受領し、他日好景氣の來る際まで、持堪へやうとする不眞面目千萬の考へに基くものであつて、私財提供に依つて、彼等不德義の重役に制裁を加へることは、無辜の預金者に對する損害を輕くすると共に、彼等を將來に戒める所以と爲るのである。

私財提供と法規の改正

或は銀行の破綻暴露に際して、重役が私財提供に依つて、預金者に對し、又株主に對して、一々責任を負つたならば、有限責任法に依つて、彼等を保護する效果は實際に皆無と爲り、銀行重役には却つて無資産者のみ之に當るであらうし、又銀行重役と爲つた機會に、資産家は財産隱匿の手段を講ずるに至り、却つて銀行業の發展を害するに至ると云ふ說が行はれる。恰も英國に於て、有限責任法の銀行業に適用される以前、銀行業に出資し、又斯業の經營に當る者が無資者であつたことは、即ち右の議論を裏書するもの丶如くに思はれるかも知れないが、私は必ずしも其然るを信じない。銀行業に有限責任法を適用するのは、株式を通じて、資本金の醵集を容易ならしめるの理由に出でるものであるから、株主の責任は之を有限とすること勿論であるが、同時に重役の責任を無限とすることは、決して銀行業の發展を妨害する次第でなく、重役の無限責任は必ず一方に重役自身をして萬一の際に於ける責任の重大なるに顧みて、營業の方針を愼重ならしめるであらうし、他の一方に重役の無限責任は預金者に安心を與へて、預金の吸收を容易ならしめ、隨つて無限責任の下に、無資産者が重役と爲つた所で、毫も世間の信用を博する能はず、結局有資力者が無限責任を果す可き條件を以つて、重役と爲れる銀行が繁昌するに至るであらう。故に私は我國銀行法の規定を改正し、銀行の預金殊に貯蓄的性質を有する特別當座預金に對しては、重役の連帶無限責任を以つて、之に當らしめること丶するを至當とする。而して今未だ日此種の法制成立せず、重役が飽くまでも法律の規定を楯として

有限責任を以つて、預金者に臨み、自家の過失に依つて、預金者に蒙らしめんとする損失を不問に付するとか、私財提供を口にしながら、單に世間體を繕ふが如き輕微の金額を提供して、一時を瞞着すると云ふ態度に出でるに於ては、預金者たるもの宜しく輿論の後援を得て、銀行重役に迫る所ある可きである。

従來銀行破綻の實例に徴するに、預金者の内には、預金を失つて、營業を繼續するに難く倒産の已むを得ざるに至るものもあれば、喪心の極再び起つ能はざる打撃を受けるものもあり、社會に幾多の悲劇を見るの常である。一方に斯く破綻を暴露した銀行重役は如何なる運命を辿るであらうか。或は預金者に對する責任感に動かされ、世間に對する思惑を顧慮し、自ら自己の生命を絶つ人もあれば、全然世間から隱退して人目に觸れざる所に餘世を果す人もある。然し斯る殊勝なる心掛けの人は曉天の星を數へるが如きものであつて、大多數は銀行破綻の當初に於てこそ、私財を提供して、預金者に申譯をすると云ふが如き存外立派なる言を吐くが、其言下に私財を提供するが如き者は殆ど其例を見ず（今回も十五銀行前監査役關口氏の財産提供が一の美談を以つて目される位であることを遺憾とする）多くは有耶無耶に歸するの常であり、而して世間の餘熱の冷却した頃には、破綻銀行の重役は何れかに隱匿した財産を擁し、捲土重來の勇を皷して、世間に活動する者少なしとしない。我國預金者の寛仁大度なる、斯る事實に對して、之を看過する次第であるかも知れないが、寛仁大度も物にこそ寄れ、重役自身の我欲的精神を滿たす爲めに、銀行を半潰しの状態に陷らしめ、之に伴ふ損失は預金者や、株主に負はしめ、重役自身は株主の一員として、相當の負擔を荷ふことゝ爲るが此以外に重役として、全く關知する所なく、従來重役が銀行から收めて居つた賞與金も、俸給も總て取り得と云ふ有様であつては、重役としての徳義を蹂躙するの甚だしきものであるは、論を俟たない。休業銀行の整理に際しては、預金者は必ず預金の幾割かを切棄てる形に於て、負擔を課せられるであらう。休業銀行の閉店の永引くこと、今日の如く、其間に要する費用は自ら銀行の資産を蠶食するに至るし、殊に最近行はれる預金と貸付金との相殺に依つて、銀行の資産が減少し、債務者の状態に依つては全額回收の可能なる資産が額面以下幾割かに相當する價格を以つて買取られた預金證書の類を額面に計算した價格で決濟される有様であつては、最後まで殘れる預金者の蒙る損失は將來益々大なるの虞れなきを得ない。此虞れの大なるを慮り、預金者は預金額の幾割かを損失するとしても、早く銀行をして開店せしめる方が得策であると云ふ考へから、銀行の申込む預金額切棄ての交渉に應ずるに至るであらう。然し此際に預金者と

して第一に考慮しなければならない問題は銀行の重役が如何なる程度まで私財を提供したか、株主は如何なる程度まで、資本金の減却、積立金の切崩を敢てしたかの二點であつて、是等の點に於ける程度の高低は自ら預金者として預金切棄に就て蒙る損失の多寡を決定する所以と爲るのである。

預金切棄ての問題

然らば預金者が何處までも預金の切棄に承諾を與へず、預金切棄を一の眼目とする銀行整理案の實現を不可能ならしめる一方に預金者なり、一般債權者なりから銀行に對して、破産の申請を裁判所に提出し來つたならば、結局休業銀行の多くは破産の運命に陷らざるを得ざるに至るであらう。固より休業銀行の多くは營業上に蹉跌して、支拂停止の已むを得ざるに至つた次第であるから、其世間に有する信用の薄きは論を俟たない、斯る銀行の倒れると、起るとは、經濟社會の全體から云へば、重大なる問題ではないと云へるであらう。然も預金者の方から見れば、何處までも預金切棄の協定に異を立て丶、銀行を破産處分の窮境にまで推詰め、預金者並に一般債權者の有する債權額に按分して、殘餘財産を處分した所で、利するもの果して幾何を數へるであらうか。其れよりも減資、積立金切崩、未拂込株金の徴收に依つて、株主に負擔を蒙らしめ、重役には私財の提供を命じ、其代りに預金者亦預金の切棄に應じ、兎に角一旦銀行を生かすことを以つて、得策とする。一度び破綻を暴露した銀行が如何に整理し了つたからと云つて、再び世間の信用を恢復して、營業上に繁昌を得るのは困難であらうとしても、減資、積立金切崩、重役の私財提供に依つて、不良貸付を銷却し、將來の營業に愼重なる方針を取つたならば、或る程度まで切棄てられた預金の殘存額位は安全に擁護し、何年かの後には預金者の請求に應じて、其引出を認めるを得るに至るであらう。預金者に取つては、此幾年かを待つことが苦痛であるに相違ないとしても、一時の感情に刺戟されて、銀行を破産處分に付するよりも、全體に於て有利の結果を齎すに至りはしないであらうか。預金の一部切棄と殘る預金に對する取付の猶豫とは休業銀行を復活せしめるに就て、預金者の荷ふ可き負擔として、當然のものであつて、預金者は銀行當業者が減資、積立金切崩、重役の私財提供等に依つて、銀行の整理に就て、充分の誠意を示した以上は、之を諒として、自ら右の負擔に當り、銀行の復活を助ける可きものと思ふ。唯銀行當業者が右の誠意を示すに就て、遺漏なきかどうかは、銀行個々の場合に臨んで、判斷す可き所であつて、最も緻密の考量を要する所である。

或は昨今休業銀行の整理に際し、日銀當局者の休業資産に對して下す評價の餘りに嚴重であり、斯くては減資なり、積立金切崩なりの高は自ら強く、預金者に對する預金切棄ての額も亦大なるに至る可きを以つて、一時の便宜手段として資産の評價を寛大にし、以つて過渡期に於ける影響を緩和しやうと云ふ希望も行はれるやに聞くが、我國の銀行業が從來放漫に流れ、現に今回の如き休業銀行の續出するに至つたのも、要するに此便宜手段の濫用された故である。然らば休業銀行の資産に對する評價が嚴重であつて、他に對する負擔の重いのも、銀行業改善の爲めに、已むを得ざる所である。唯今日整理時代に資産評價が嚴重に行はれ、斯く評價された資産の價格が後日に至つて增進した場合に、此利益の分配に與る者は整理時代の預金者ではなくして、整理時代から引續いて、銀行の株主と爲つて居る者であり、彼等は或は整理時代に減資に依つて受けた損失を將來に至つて、恢復するかも知れない。此點から云つても、預金者よりも株主の方が休業銀行復活に就て、多くの負擔に應ずる理由に富むと云へる。

新聞紙の報道する所に據れば、中井、村井其他一二の休業銀行に關する整理案は漸く當業者の手に依つて作成され、日本銀行の承認を得たもの丶如くであり、隨つて此案を基礎として、預金者に向つて、交渉を開始することも、遠きに非ざるやに傳へられる。私は預金者が虚心、能く前記の諸點を念頭に置き、冷靜に利害を批判して、以つて銀行と交渉の歩を進めることを希望して已まない。而して此交渉を行ふに就ては、預金者間に意思を疏通し、利害關係を統一し、出來るだけ同心一體以つて銀行に當ると共に、法律上の事項に就ては、信用ある法律家に託して、其意見に聽從することを必要とするのである。

唯銀行が預金者と預金切棄の交渉を爲すに當り、預金者を取扱ふに一律平等を以つてす可きか、其れとも預金額の大小に依つて、或る差別を置き、金額の小なる者には全部の拂戻を爲し、金額の多きに隨つて、拂戻の率を弱くするが如き手加減を設ける可きかと云ふことが一の問題と爲る。從來我國に於て、休業銀行の整理された實例から云ふときは、銀行に依つて、預金額に或る大小の區別を設け、其小なるものに對しては、全部の拂戻を爲し、其大なるものに對して、或る制限を設け、又切棄ての率を強くすることが社會上弱者を保護する點に於て、極めて必要と爲るのであつて、殊に我國銀行業に於ける如く、特別當座預金なる名稱の下に、一回十圓を限度として、零碎小額の預金を取扱ふ慣例ある國に於て、特に其必要の大なるを見るのである。而して此方法の下に、預金切棄の率を強くされた預

金者に於ても、小額預金に對する全額拂戻に依つて、自家の適用される預金切棄て率の強く爲れることに就て、異議を挾まず、自己よりも財的地位の薄弱なる者を助ける社會的公共心を發揮することを望まざるを得ない。

或は休業銀行が小口預金に對して、全額の拂戻を爲す以上は、産業組合の預金に對しても、亦全額拂戻を行はなければならない。蓋し産業組合は小額零碎の資金を集めて、之を銀行に預入れたものであるからであると云ふ理由の下に、此說が事毎に大藏大臣三土氏の提案に非難を試みる農林大臣山本氏に依つて、提唱されると云ふことである。然し産業組合が銀行預金を切棄てられた場合に、忽にして其有する資産に缺陷を來し、組合の小口預金者に預金の切棄てを行はざる可からざるに至るか其れも組合の有する他の資産を以つて、斯る缺陷を補ふに至るかは、全然別個の問題であつて、單に産業組合は小口の預金を組合員から集めたものであると云ふ故を以つて全額拂戻の特典を受けしめる理由を生じない。若しも斯る理由にして正しいとすれば、保險會社や、貯蓄銀行の預金に對しても、其會社銀行の強弱を問はず、全額の拂戻を行はしめなければならないことと爲る。斯の如きは、私の到底首肯する能はざる所である。

和議法適用の問題

預金者が右の如き預金切棄ての交渉を受けた際異議なく之に應ずれば、銀行整理案は直に成立する。私は銀行當業者の整理案に對する誠意の現はれるものあり、又其誠意を實行するだけの物質的要件の備はれるに於ては、預金者として今更ら銀行を破産處分に付するが如き荒立ちた所業に出でず、寧ろ穩便に預金の切棄てに服し、一日も早く銀行開業の時期を促進して、開業後の銀行に就て、便宜を受けることを賢明とする道理である。總ての預金者が此事を理解し、一方に休業銀行の當業者亦充分の誠意を披瀝したならば、休業銀行問題の解決は順調に進行することゝ思はれるが、我國民の內には一種の理屈倒れを喜ぶ風の著しきものがある。大局から見た利害は姑く之を度外視し一片の理屈を柄として、銀行の申出す、預金切棄ての交渉に應じなかつたならば、遂に預金の切棄てを骨子の一とする整理案の實行に一頓挫を惹起さゞるを得ない。茲に於てか此困難を除却する爲めに、和議法の適用を必要とする說を生ずるのである。即ち現行法規に於ては、和議を成立せしめるには、議決權を行ふ可き出席者が和議債權者の過半數であり、且つ屆出を爲した和議債權者の總債權の四分の三以上に當る債權額を有する者の

同意を必要とするのであるから、預金者の多數殊に大口預金者の間に預金の一部を切棄てゝ、銀行をして成立の緒に就かしめる諒解が成りさへすれば、和議法の下に、整理案の成立を見るを難しとしない。唯和議の條件は各債權者に對して、平等であることを要し、斯くて大口預金者と小口預金者との間に、預金拂戻の割合に就て、差別を設ける場合には、大口預金者の公共的精神に訴へて、銀行をして、豫め和議法適用以前に小口預金に限つて、金額の拂戻を行ふか、小口預金の拂戻に限つて、重役の提供した私財を以つて、之に充てるかの便法に就かしめる必要を生ずる。政府なり、日本銀行なりの努力は正に此邊に試みらる可きものと考へられるのである。

休業銀行の合併問題

結局如何なる形に於て休業銀行の整理の行はれるを問はず、預金者が或る程度の損害を蒙ることは、之を免かれるを得ない。固より預金者は銀行の破綻に對して、單純なる預金者たるに止まり、銀行に就て資金融通上の關係の存せざる以上は、毛頭負ふ可き責任を持たないのであつて、此點から云へば、銀行經營上に過失を爲し、不良の所業を企てた重役や、斯る重役を選擧した株主と同列に置かれる可き道理はないと考へられるが如くであるが、世間に銀行の數多ある間に於て、特に預金者が不良銀行を選んで、預金の關係を結んだと云ふことは、預金者として、不明の罪の負ふ可きものがあり、而して斯る銀行を取引先としたことは、或は銀行業界の實情に就て、充分の知識を持たなかつた自己の責任であつたり、又は幾分の高利率を以つて、預金を爲すを得る利益に惑はされたりした過まちであつたりする以上は、預金者が預金切棄ての形に於て、損失を蒙り、斯くて休業銀行の復活を助ける義務を荷ふのも、亦已むを得ざる所であると解される。故に私は預金者に向つては、一方に重役株主に對する負擔に依つて、自家の損失を輕くするの手段を講ずると共に、他の一方に於ては預金切棄てを骨子の一とする整理案に對しては、宜しく公共的精神を以つて、之を承認する態度に出でることを希望して已まない。若し其れ將來の問題としては、休業銀行の預金者たるもの、今回の金融動亂に際して、如何に小銀行や機關銀行の基礎の薄弱であるか、高利を以つて預金を吸收する銀行の裏面に如何に多くの危險の伏在するものであるかの事情を實驗的に知悉した次第であるから、斯る銀行との關係は出來るだけ之を薄くし、預金者自身の力を以つて、大銀行支店制度の行はれる勢を導致す可きである。金融動亂以來地方に於て銀行合併の機運の動きつゝあるが如き、此趨

勢を語るものである。斯くては休業銀行は整理を遂げて、開業したとしても、預金者に依つて、預金を引出されはしないであらうか、又假令ひ開業後に於ける預金引出に就て、或る制限を設けたとしても、結局は時期の問題であつて、或る期間の後には預金を引出される一方に、預金の新に預入れらるるもの皆無の狀態と爲つて、再度の窮地に陷りはしないであらうか。日銀特別融通法はあるとしても、其れに依つて、資金の融通されるのは、本年四月から一個年間であるとすれば、其以後に於て、右の如き狀勢の起つた場合には、之を如何とするか。此一事は休業銀行の整理開業後に遭遇せざるを得ざる一の恐怖であつて、之を避けるには、獨力を以つて開業することを諦らす、他の有力なる銀行に依つて併合されるか、有力なる諸銀行の出資に依つて、先づ一の新銀行を設立し、然る後に其れに併合されるか、孰れかの道を求めなければならない、前者は從來安田銀行が休業した銀行に對して行つた手段であつて、百三十銀行とか、肥後銀行とか、諸多の地方に於て、破綻を暴露した銀行は一旦低廉なる價格を以つて安田銀行の買收する所と爲り、債權債務の整理を了し、安田を背景として、營業上に復活するに至るや、更に改めて安田銀行と合併するの例であつた。此場合に休業銀行の株主は低廉なる價格の下に、株式を安田に買收され、預金者亦預金切棄の大なる苦痛を蒙らざるを得ないが、若しも之を承諾せざれば、銀行復活の道なきの故を以つて、安田の爲す所に承服せざるを得なかつた。随つて安田が今日の大を成すに至つたのは、一面から云へば、休業銀行に對して火事場泥棒的態度を以つて、廉價なる買潰しを行つたことに原因の存するものとしなければならないが、他の一面から見れば、此事たる、畢竟先代安田善次郎氏の算數に明であり、又自己の計畫を實行する勇氣に富んで居つた結果であつて、氏の世に在れる故を以つて、全く倒潰す可き銀行が半潰れの狀態に於て、安田に併合されたもの敢て少なしとしない。今日の如き休業銀行の續出した場合には、私は勢故安田善次郎氏の辣腕を偲ばざるを得ないと共に、氏の後を繼げる大小銀行業者が何れも口舌にこそ巧みなれ、休業銀行に對して、拱手爲す所を知らざるを見て、彼等を憫殺するの外ないのである。

休業銀行整理の爲めに、一の新銀行を設立し、總ての休業銀行を此新銀行に合併せしめることも、整理の一案たるを失はない。一時三井、三菱、第一、住友、等東西の有力銀行が新銀行の爲めに出資するやの計畫も行はれて居つた。元來本年春のパニックたる、重なる原因は今日の休業銀行の營業上に於ける失態に相違ないとしても、パニックの勃發する直前並に直後に

於て、市中有力の諸銀行が之を防禦し、預定するに就て、何等共同的動作を取らず、却つて整理銀行に對するコールの回收を嚴峻にして、危機の到來を促した銀行すらあつたことを考へたならば、彼等が休業銀行復活の爲めに、或る負擔を荷ふのは、社會に對して、當然の義務を盡すものであるが、固より斯る出資に對しては、今後幾年かの間、充分の利益の舉げられないのは勿論であつて、隨つて營利の追求に急なる市中諸銀行が果して社會公共の爲めにする精神を以つて、斯る犧牲に當るかどうか、頗る疑はしい、從來新銀行設立の議あるに拘はらず、一向其の進行を見ないのも、亦怪むに足らないのである。

日銀特別融通の效果如何

斯の如く考へ來れば、休業銀行は結局獨力開業を以つて、根本の方針とし、此目的を達するに就ては、休業銀行の株主、重役併に預金者の三方面に於て、其れ〳〵或る損失を負擔す可く、而して其之を負擔する割合に就ては、重役株主に之を重くし、預金者殊に小口預金者に對して、之を輕くするの方針を確立す可きものと思ふ。此根本方針にして確立した以上は、政府は日本銀行を促して、休業銀行の爲めに、日本銀行特別融通法を適用するに至らしめなければならない。始め日本銀行特別融通及損失補償法の原案の臨時議會に提出されるや、政府は休業銀行をして此法律の利益に浴せしめざる方針であつた。斯くては休業銀行の復活を促進する障碍と爲るの恐れありとし、衆議院特別委員會に於て、休業銀行中營業を開始して、之を繼續する見込みのあるものには、補償法を適用することに修正され、政府亦之を容れるに至つたのである。而して日銀特別融通法の下に於て、特別融通の目的物と爲るを得る見返品は種々の方面に擴張されて居り、擔保價格の算出に就ても、金利步合の決定に就ても、大なる便宜が認められて居る次第であるから、休業銀行の如き、一旦整理開業の運びと爲つた曉には、大に特別融通法の利益を享けて、將來の營業に安んじるを得る道理であるのに、今日までの實際に徵すれば、現に開業中の銀行すら、日銀に就て特別融通を受けるに就て、必ずしも自由ならず、幾多窮屈なる制限を忍ばなければならないと云ふ説がある。然らば休業銀行が一旦開業した曉に、此法律の便宜を收めるに就て、更に一層嚴重なる制限を蒙りはしないであらうかと云ふ掛念の行はれて已まないのも當然である。日銀特別融通法の適用を嚴重にして、今日の如く日銀の貸出高を制限し、銀行券の發行高を或る程度に止めることと今日の如くするのが正しいか、其れとも日銀貸出高の増加、通貨の膨脹を賭して、特別融通を盛に

し、休業銀行の復活に便宜を與へるは勿論、現在開業中の銀行にも資金の融通を謀るのが有利であるか、此點に於ける政府併に日本銀行の方針の確定せざることが休業銀行問題の解決には勿論、一般金融市場の安定を進めるに就て、大なる妨碍を爲してるものと考へられる。休業銀行を永く今日の狀態に置くと、速に開業の運びに至らしめるとは、單に休業銀行預金者の利害に關する問題のみに止らない、一般金融市場に於ける變態を除却して、其正常とする道に就かしめると否とは、實に此問題へ解決を以つて、出發點としなければならない。私が敢て休業銀行預金者に本論を示して、其決心を促すと共に、更に預金者以外一般世人の注意を求める所以である。

投稿規定

一、投稿は今後書留郵便にて送附されたし。尙返信用書留郵券を必ず封入の事。
此規定に反して萬一紛失したる場合あるも本社はその責に任ぜず。

一、投稿は「中央公論編輯部、投稿係」宛に郵送されたし。
その場合必ず「中央公論原稿」と傍書ありたき事。
個人に宛てゝ發送せらるゝは差支なきも一度は必ず係の手に渡るものなれば直接係に送らるゝ方便利です。尙個人の私宅に宛てゝ送らるゝ事は絕對にお斷りします。



官憲の公平性と社會運動

赤松克麿

一

過般の日紡罷業に於ける警官の辨當代收受事件は、社會運動者の間に、近來にないセンセーションを捲き起した。警官が資本家から辨當代と稱する賄賂を取つたといふ事實だけが問題なのではない。收賄警官に對して、司法官憲が起訴猶豫の處置を取つたといふ事實が我々として看過することの出來ない問題なのである。

司法官憲の見解によると、警官今泉某が會社から多額の金錢を貰つたことは、犯罪ではあるが、微罪であつて、起訴する程度に達して居ない。だから今泉某に對しては、免官といふ行政處分を以て社會的制裁は十分であると思ふから、之れを起訴猶豫にしたといふのである。更に、辨當代の收受は、火事場に驅けつけた警官が、感謝の意味で振る舞ひ酒を贈られた場合と同一であつて、むしろこれは一個の社交的儀禮だといふのである。我々が司法官憲の辯明を聞いて、先づ遺憾に堪えないことは、彼等の社會常識の缺如である。彼等は此の事件を以て、收賄警官一個人の問題に局限することに努め、從つて警官一個人に對する刑事政策のみに重點を置いて居て、此の事件の帶びるところの重大なる社會的性質を全然理解して居

ない。即ち、若し我國の最高司法官憲が、勞働爭議に際して取締警官が會社側から多額の金錢を收受することを以て起訴に値しない微罪であると折紙を付けるならば、それが、今後の我國社會運動全體に如何なる影響を及ぼすであらうかといふ事柄に就いては、之れを全く念頭に置かないで、唯だ一巡査部長に對する情状酌量のみを中心點として、司法官憲は此の事件を處理して居る。勞働爭議を區々たる火事場と同一視し、數千圓の金錢を一杯の振舞ひ酒と見做し、そしてまたさうすることが一般無産階級に如何なる印象を與へるかを全然考慮に入れないで、果して複雜なる近代的社會現象に對する法の正しき運用が期し得られるであらうか。我々は左翼主義者のやうに、それは官憲が資本家の走狗だからだと、極く簡單に片づけようとするものではない。それよりも我々は、かつて司法官が化石だと評されたと同じやうな意味で、司法官の時代離れした社會的沒常識に責があると考へる。我々は、今日司法官憲が意識的に資本家階級を擁護して居るとは思はない。むしろ數年來の勞働爭議に關する犯罪に對する判決例の如きは、封建主義より民主主義への多少の轉向を認める程である。しかしながら今回の司法官憲の社會的沒常識は、結果としては、資本家と警官とがぐるになつて勞働階級を抑壓した事實を、司法官憲が大目に見たことになつて居る。

二

抑々勞働爭議は、資本主義社會制度の下に於ては必然的に發生する社會現象である。社會主義國家の看板を掛けて居る勞農ロシアに於てさへ、勞働爭議は頻發して居る。ところで從來、勞働爭議を犯罪視する傾向が、我國の官憲の間に濃厚であつたが、近時の民主主義の發達は、大正十四年の春の議會に於て、同盟罷工禁止法たる治安警察法第十七條を撤廢せしむるに至り、勞働爭議が合法化されることになつた。故に今日に於ては、罷業は合法的經濟鬪爭であつて、官憲は從來のやうに罷業に立ち入る法律的根據を失つた譯である。由來、我國の官憲は、官僚獨特の絶對國家主義に支配されて居て、勞働爭議を抑壓するにしても、資本主義精神に據つて意識的に資本家側を支援するといふよりは、勞働爭議が國家の安寧秩序を紊すものであるといふ無理解なる絶對國家主義の立場から、爭議に干渉してきたといへる。だから過去に於て、彼等は罷業團を壓迫しながら、彼等が資本家の走狗であると云はれることを非常に嫌ひ、そしてまた意識的には資本家の利益のためといふよりは、國家の秩序を維持するために、罷業團に不利益な行動を執つて來たのである。

然るに最近に於ける民主主義の進展は、勞働組合や勞働爭議の非合法性を著しく除却し、從來官憲の頭を支配してきた絕對的國家主義に對しても近代的變化をもたらし、官憲は勞働爭議に際して、勞資の外に超然として嚴正なる態度を持すべき旨を、地方長官會議に於ても、議會に於ても、當局者は繰り返し力說するやうになつた。事實、その効果は幾分現はれた。若し罷業團に於て、經濟鬪爭を全面的政治鬪爭へ轉換すべしだの、革命的豫行演習に利用すべしだのといつて、左翼一流の血迷つた馬鹿騷ぎをしない限り、罷業に對する官憲の態度が比較的公平性を示してきたことは、數年來の民主主義的進步の現はれとして、我々の確かに看取し得る事實である。之を社會運動史的に見るならば、大正八九十年頃の政友會内閣の罷業取締政策と、大正十三年に成立した憲政會内閣以後のそれと比較すると、我々は經驗的に、民主主義の一步前進を認識することが出來る。然るに今回、瀆職警官に對して執つた司法官憲の態度は、此の民主的傾向に對する逆轉を示すものであつて、今後の社會運動に對して少からぬ惡影響を及ぼすものだと信ずる。

三

過般の日紡爭議に際して、南千住署の警官の態度が際立つて暴戾的であつたことは、罷業團幹部をして憤慨せしめたばかりでなく、何んだか怪しいところがあると、いふ一種の疑念を抱かしめた位であつた。問題の今泉某は、爭議中終始會社内に駐在し、或時は門前に於て應援者を毆打し、石を投げつけ、女工を投げ飛ばし、露骨に會社側を支持した。或時は、罷業職工が警察署の許可を得たビラをポケットに入れて居つたのを見て直ちに檢束し、甚しきは六月十一日、會社が爭議團員に對して不當なる寄宿舍立退きを要求したとき、彼は之れに加擔して、應ぜざる者十一名を直ちに檢束した。かくの如き常軌を逸した職權濫用の行爲に對して、勞働總同盟の幹部は看過出來ない事實として、警視總監、檢事總長を訪問して、その不法を糺彈したことがあつた。一體、勞働爭議の際に、會社側と取締官憲との間に金錢關係があるかどうか、爭議團側には直覺的に解るものである。過般の日紡爭議の如きは、その直覺が最も鮮かに利いた一例である。

爭議團の直覺は見事に的中した。今泉某は會社の用度課長黒田某の手より辨當代と稱する數千圓の金を收受し、その結果、彼は會社に對する御禮心を以て、會社のために極力犬馬の勞を取つたのであつた。かくの如きは今泉某が巡査部長の公職にありながら、その職務に關して賄賂を收受したものであつて、刑

法第九十七條に觸れることは明白である。然るに司法官憲は、これは犯罪ではあるが起訴に値しない微罪であるといつて、不思議にも取り上げない。仕方がないから總同盟側は今泉某と黒田某とを告發するに至つたのである。若し勞働爭議に際して、警官が辨當代の形に於て賄賂を取つても、起訴に値しない微罪だとするならば、如何なる結果を生ずるかといふに、先づ現在薄給に惱む我國多數の下級警官は、最も巧妙なる方法に依つて、辨當代を稼ぐ風潮を生ずるであらう。ところで辨當代を支拂ふ能力のあるのは、云ふまでもなく勞働者側にあらずして資本家側である。勢ひ下級の警官群が、辨當代の支拂能力ある資本家側の御用を積極的に務めるに至るであらうことは見やすき理である。

我國の警官が、米國あたりの警官に比較して清廉であることは、しばしば聞くところであるが、現在の下級警官の待遇條件では、資本家側の誘惑の危險に曝されて居るといつて差支ない。今、警視廳管下の巡査の待遇條件を調べて見るに、初任給が四十五圓であつて、四十九圓までは三個月に一回一圓宛昇給し、五十五圓までは六個月に一圓、五十九圓までは九個月に一圓、六十五圓までは一個年毎に一圓といつたやうな割合で、ともかく七十圓まで上り得るやうになつて居る。しかし此の割合で行くと、七十圓になるには廿六年かゝる譯である。官服帽子劍等は貸し下げられるのだが、靴下やズボン下を買ふために、被服費として年三十五圓、住宅料が家族の多少に應じて七圓から十五圓まで支給される。其他夜勤辨當料とか非番手當とかいつたものが約五圓位ある。だから十年も勤續して居て、子供が三人位ある人について見るに、月收平均八十五圓から九十圓といふことになる。現在警視廳管下には巡査が一萬餘り居るが、その月俸平均が五十五圓位である。これでは妻子も養へない譯だらう、その半數弱の者は獨身である。巡査部長になつても月俸平均六十圓弱に過ぎない。巡査部長今泉某が日紡の手から二千數百圓の金を渡されたとき、かつて見たことのない大金だし、また將來再び拜むことの出來ない大金だから、惡いとは知りつゝも手が出たのであらう。我々は今泉某一個人の立場を察すれば、薄給になやむ境遇として、充分情状酌量は出來る。しかし不幸にして此の問題は、今泉一個の問題ではない。我國多數の下級警官群が、劣惡なる待遇狀態にあればある程、此の事件は、より嚴正に處斷されなければならぬ社會的根據を持つものと云はなければならぬ。我國の官憲が、先進資本主義國家の官憲に比較して、一個の清廉性を持つことは、官僚主義と抱合した我國資本主義の特異的發達の一面の反映であるが、それが

ために我國從來の勞働爭議が、險悪化を多少緩和されたことは しばしば示されたことであつた。然るに今回の司法官憲の處置は、此の殘存せる官僚的正義心を毒して、これの資本主義化を促す作用をなすものと斷定してよい。

四

收賄者今泉某が司法官憲によつて不問に付せられると共に、贈賄者たる會社側の黒田某も法網を逃れた。一體、贈賄者は收賄者に比較して責任が重い。普通の場合、贈賄者があるから收賄者が生ずるのだ。しかして今回の場合に於て、黒田某は會社の用度課長であるが、彼一個人の意志によつて、彼の財力から問題の金額が支出されたものとは常識上考へられない事柄である。即ち、會社の最高幹部の意志の發動に依ることであつて、黒田某はその傀儡に過ぎないであらうことは容易に察知し得られる。かく推論して行くとき、司法官憲は、資本家が勞働爭議に際して、罷業團を抑壓するために、警官に多額の金錢を振る舞ふことを ——それは罷業團を壓迫する最も有利な手段である——起訴に値しない微罪であると判定した譯である。

元來資本家階級なるものは、その營利のためには、何ものも犠牲にして顧みざることを其の特質とする。勞働爭議に際して、彼等が官憲を買收する位のことに、最もおへつき易い戦法であるが、彼等が從來露骨にそれをやらなかつたのは、前に述べた我國官憲獨特の生眞面目さがあるのと、さうすることによつて受ける法律的制裁を恐れたからである。尤も、資本家が官憲を買收したといふ事は、過去に於ける勞働爭議で度々聞いたことであるが、しかし我國の官憲が米國の官憲ほどに買收が利かないことは確からしい。我々は一方に於て官憲が露骨に資本家を支持する場合と、他方に於て官憲が嚴正公平なる態度を持する場合と、二つながら存在することを知つてる。ところでもし今回の事件のやうに、資本家による官憲買收行爲が寛大視されるとなると、彼等の黄金の魔手は、遠慮なく薄給にあくせくしつゝある下級警官に延びるであらう。對照的存在を示しつゝある官憲の公平性は、司法官憲の沒常識なる見解によつて、ひとたまりもなく資本の魔手に壞されて行くであらう。我々は、今回の事件に於ては、收賄警官を罰すると共に、より嚴刑を以て會社の重役に臨むべきが至當だと考へる。若し今回の事件に於ける日新重役の行爲を不問に付するならば、刑法第百九十八條は死文に等しいことになる。國家の末梢神經を、資本の魔手から幾分でも防衛するつもりがあるならば、今回の事件の如きは、資本家に對して一大鐵槌を下すのが當然である。

五

今日、選擧が合法的政治鬪爭であると同じ社會的意味に於て、罷業は合法的經濟鬪爭である。新興無産階級は、出來る限り此の兩個の合法的鬪爭を通じて階級的向上を圖らうとする。ところで支配階級は、選擧の嚴正を說き、嚴格なる普選法を制定し、選擧犯罪に對しては寸毫といへども容赦しない態度を取りながら、罷業に於ける露骨なる贈收賄罪に對しては驚くほど寬大である。去る八月二十九日から開かれた警察部長會議に於て、鈴木內相のなした訓示の中に「顧つて選擧の實情を觀るに、買收請託其他不正陋劣なる方法により投票を左右にし、選擧の本旨にもとること甚しき實情にあり、今にして如上弊風を剪除し、これを革正するにあらざれば、國家の前途誠に深憂に堪えざるものあり、改正法はこゝに顧み、新に選擧運動並に選擧費用等に關する規定を設け、……以て嚴に選擧の自由と公正とを確保し、選擧精神を實現せんことを期せり、……各位は苟くも法網を潛り非違を敢てする者に對しては、寸毫も容赦するところなく、最も敏速に斷然たる處置をなすべし」と述べて居る。

選擧の自由と公正とを確保すると共に、罷業の自由と公正とを確保することは、近代民主國の一本質でなければならぬ。完全なる選擧權と完全なる罷業權との確立は、我國無産階級の健全なる發達を期するために、現下の過程に於て要求せらるゝ民主主義獲得の最大なるものである。當局者が一方に選擧の自由と公正とを高調しながら——これには言行不一致的要素も多分に含まれては居るが——他方に於て、選擧と同じ重要なる社會的意義を有する勞働爭議を區々たる失火と同一視し、取締警官が數千圓の金品を會社から收受して明かに罷業團に不當なる抑壓を加へたる事實に對して不問的態度を取るが如きは、我國官憲が今尙ほ封建的國家主義に禍されて、近代的民主主義を完全に會得せざる證左でなければならぬ。我々は、司法官憲が意識的に資本主義化したといふ意味に於て、これに抗議するのではない。帝國主義時代に入れば、あらゆる支配階級の各要素が反動化し、一致協力して、無産階級を彈壓するといつたやうな、公式的な見解に立つ單純さを我々は持ち合はさない。我々は、世界大戰を轉機として、我國支配階級內部の或る要素が反動化したと共に、他の要素が民主化した傾向を明かに認めることが出來る。その民主的傾向は、普選の實施、治警第十七條の撤廢等に現はれた。しかして此等の民主主義的收穫は、我國社會運動の進展に大なる拍車をかけた。更に社會運動の現下の過程

は、獲得した民主主義を積極的に利用すると共に、更に民主主義の獲得を増大することに存する。しかして我々が現下の任務を遂行するがためには、支配階級内部の民主主義的傾向を出來る限り擴大して行くやうに仕向けることが肝要である。此の意味に於て、我々は我國支配階級に殘存する絶對的國家主義に抗議し、これを除去することに努めなければならぬ。今回の警官涜職事件の如きは、司法官憲の絶對專制主義を暴露した好箇の一例であつて、我々は、民主主義の進展のために、我國社會運動の合理的發達のために、どこまでも今回の事件を究明しなければならぬ。

我々は支配階級を反動化せしむるやうな戦術を用ひながら、民主主義の獲得を叫ぶ左翼主義者の態度を取らない。民主主義の獲得を單なる鬪爭的宣傳題目としてでなく、字義通りに眞面目に之を要求するならば、我々の運動戦術も之に對する合目的のものでなければならぬ。左翼主義者の如く、帝國主義時代への轉入の事實を以て、支配階級と被支配階級との關係對立を簡單に規定し、明日の革命を期待するが如き急迫した公式的戦術を用ひながら、民主主義の獲得を主張するが如きは、自己矛盾も甚しいといはなければならぬ。我々が今回の事件に關して、左翼主義者と共同戦線を張らなかつた理由が茲に存する。

言論暴壓の抗議と階級鬪爭

布施辰治

一

法律と云ふものが、その名を被支配階級の利益に借りて居りながら、その實、支配階級の利益のために、又、その特權擁護のために利用せられて居ると云ふ事は、私共が法廷職務の實際に經驗する無産階級運動關係の刑事事件を通じて、明かに曝露せられつゝある事實である。斯うした法律の正體は、法律が正義の看板を揭げて、その正義なるものを、どのやうに賣りつけて

居るか、と云ふ内情をよく知つてる者には、つとにわかつて居る、あまりにも明白な苦がく〳〵しい事實である。だが、田中政友反動内閣成立の使命とも見るべき、言論集會解迫の狂暴、葬儀の靈位が勞働運動の闘士であつたからと云ふので人間一生の告別を惜しむ弔意を中止したり、會葬者の解散を命じたりする事迄が、法律の名によつて行はれつゝある事を思ふと、かうまでも法律と云ふものは悪いものか、と云ふ今さらの如き驚きを感ぜずに居られない。

とは云ふても、私は、やはり法律を學んだ者であるだけに、法律そのものが直ちに悪いとは言ひえないやうな感じもする。實は法律そのものが悪いのではなくて、之を制定し、之を適用するところの政治が悪いのだ、と云ふことを、法律そのものゝために辯護したいやうにさへ思ふのである。法律といふものは、政治の道具にすぎないのであつて、政治の成り立たぬところに法律は成り立たない。故に、政治が悪ければ、當然、法律も悪くなるのだ。

けれども、私は、あながち政治そのものを根本的に悪いのだと言ふわけでもない。人生共存の生活基準として其の統制が必要と思はれる場合、眞に、萬人協同の爲めに、眞に、萬人協同の意志を實現せむとして行はるる政治であるならば、私は、しひて之をも否定排撃しやうとは思はない。從つて、又、かかる政治を行ふための道具として設けられる法律であるならば、敢へて、否定排撃しやうとは思はない。其處で、私は言ふ、法廷職務の實際に痛感させらるる法律の害悪も、又、之を制定運用して居る政治の害悪も、すべてそれは、支配階級の利益と幸福との爲めに政治が利用され、又、法律が利用されて居るが故なのであると。

今日、日を追ふて益々白熱化しつゝある政權奪取の階級戰は、最も、雄辯に其の事實を物語たつてゐる。政治並びに法律の性質を最も聰明に洞察しえた、即ち、左樣した無産階級が、徒らに政治並びに法律そのものを否定することなく、此の政治並びに法律を以て、全被支配階級の爲めに全被支配階級の意志を實現せんとして居るものが無産政黨の使命である。そして、支配階級の爲めに被支配階級の利益幸福を蹂躙する現在の政治並びに法律を、あくまでも維持せむとして猛り狂ふ支配階級を屈服せしむる爲の猛運動を進出して居るものが無産階級の政治鬪爭なのである。

而して、そのいづれが勝つか、と云ふことに萬人協同の幸と不幸とがかゝつてゐるのだ。

斯のやうに考へて來ると、なほのこと、私は、法律そのもの

が惡いのだとか、政治そのものが惡いのだとか言つて、之を排撃否定することが出來ないのである。政治とか法律とか云ふものは、本質的に無目的であり無勢力であつて、それが、良くなるのも惡くなるのも、この政治並びに法律を目的づけ勢力づけるところの或るものによつて、即ち、その或るものが何ものであるかと云ふことによつて決定されるのである。そして、この或るものが惡ければ、政治も惡くなる、從つて、法律も惡くなるのである。

二

さて、私は、上來、法律は政治の道具であり、從つて政治の變化が法律を變化すると云ふ事を述べて來たが、それは、最も手近かなブルヂョア政黨の政權爭奪戰に於ても見られることである。

彼等の政權爭奪には、勿論、そこに、いろ／＼の目的を作つて居る。けれども、その目的の中の最大なるものの一つは、彼等が公然と明言しても居るやうに、「次の總選擧を自分等の內閣で實施したいから」と云ふことである。何故なら、我黨內閣の手で總選擧を行ふことによつて、自分等に有利なやうにこれを利用することが出來るからである。

元來、總選擧は、言ふまでもなく、選擧法によつて行はれるのだから、その選擧法なる法律に權威があり生命力があつて何ものにも冒されず、法律そのものが選擧を支配し得るとしたなら、その選擧が誰れの內閣で行はれても同じことであらねばならない筈だと思ふ。だが、事實は、決して其の然らざることを示してゐる。と同時に、その選擧を我黨內閣の手で行ふことは、選擧法をどうにでも運用する選擧干渉を自他共に許して居る彼等の自白であると云ふ事を考へても、法律なるものは、之を支配する政治によつて、どんなにでもなるものだと云ふことが、はつきり理解せらるるであらう。

言論出版に關する取り締り法亦然りである。言論出版の自由が法律の名によつて禁壓せられるのは、法律それ自體が惡いからと云ふよりも、これを制定した政治、さらに之を時と處によつて意のまゝに振りまわすところの政治の利用が惡いからである。

先年、ロシアの飢饉救濟のために、駿台クラブで「民衆展覽會」が開かれたことがある。ところが、當時の駿台クラブに大杉榮君等の勞働運動社が陣取つて居たために警視廳では、どうしても、之が開催を許可せず、強ひて、開催すれば展覽物一切を沒收すると云ふて威嚇した。私は、この横暴な當局に抗議す

べく早速警視廳に出かけて行つて、「そんな馬鹿な事があるか？一體、何の法律によつて展覽物を沒收すると言ふのか？もし、廣告取締法や美術展覽規定乃至治安警察法によつて押收撤去を命ずると云ふのならば、僕等は敢然として抗議する。一體、どこのどの法規を以て、そのやうな事を命ずるつもりなのか？」と詰問した。そして、結局開催する事に決定した後ちの雜談中に時の監房主事たりし某等が、「實は、行政執行法の假領置として、押收するつもりだつたのだ」と云ふ本音を吐いた事がある。そこで、私が、イクラ便利な「行政執行法でも戎器兇器に非らざる書畫を假領置する事を許して居らないではないか？」とつゝ込んだところ、彼等の答は、こうであつた。――曰く「書畫をも兇器等の危險物と認定して適用するのだ」と。

私は、勿論、「そんな適用は不合理であり、無理だ」と詰つた。すると、彼等は、「いかにも、それの無理なことは自分等にも判つてゐる。けれども、他の方法で押收撤去を命じれば、君のやうな人々がやつて來て抗議するから行政執行法を用ひるのだ」と、はゞかるところもなく放言したのであつた。何故なら、彼等の爲には誠に不思議な人權蹂躪法もあつたもので、行政執行法の適用に對しては、全然、私共の抗議が許されて居らない。從つて、この法規による被支配階級に對する絕對的專政的壓迫は、支配階級の認定通り何事をも斷行し得るからである。

三

私は、かうした事實を顧みつゝ今日の言論出版壓迫の非常識ぶりを見る時、彼等支配階級が、私共の法律的に抗議し得ないやうな方法を以て暴壓する陰險至極な斷行振りに、いよいよはつきりした彼等の態度を知り拔いた覺悟の對策を講ずる事が必要だと思ふ。

見よ、演說會の中止解散は治安警察法や、行政執行法により、新聞雜誌の發賣禁止は申すまでも無く、新聞紙法と出版法に依り行はれて居るのであるが、演說の場合ならば、治安警察法違反として檢擧されぬうちは、又、發賣禁止の場合ならば、其の「不穩」箇所を指摘して起訴されぬうちは、有罪無罪の當不當を抗議する事が出來ないのである。仍ち彼等は、それらの法規を以て、專政的に言論を暴壓し出版の自由を蹂躪して、しかも檢擧や起訴をしないやうにして居るのである。其處には、數年前の言論暴壓が、演說の中止に次ぐ、治安警察法違反の起訴と、新聞雜誌の發禁に次ぐ、朝憲公序の紊亂を以て起訴した結果の逆襲を招いた行き方とは全然異つた狡猾さを極めて居

る。

かくの如く、同じく法律を用ふるにも、私共が抗議しえぬやうにして暴壓を行ふところに、今日の支配階級の憎むべき陰險さがあるのだ。從つて、言論出版暴壓の對策として、私共は、いかなる場合にも國民が政府の處置に對して抗議し得べき權利を政府に對して要求しなければならない。

かゝる自由を私共が、戰ひ獲つた時、はじめて私共は、對等の權利を以て横暴なる支配階級並びにその執行委員會たる政府を、眞に私共の前に屈服せしむべく抗爭することが出來るのだ。

かゝる對等の權利及び抗爭が認められない私共は、未だ立憲國民だとさへ言はれえぬではないか、專制政治下の奴隷と何の擇む所があらう。

私共は、今日の如く、名ばかりの「立憲國日本」に醉ふことは出來ない。事實上、支配階級の非道を徹底的に糺彈し、其の横暴に抗爭する事が認められてこそ、はじめて眞の立憲國民として、さらに躍進することが出來るのだ、私共は、まづ、名實相伴ふた立憲國民とならねばならない。

而して、その第一歩を踏み出すべきものは、勿論、言論出版の自由であり結社集會の自由であらねばならない。これらの自由は、實に社會生活の端初であり、政治生活の芽である。かゝる芽が踏みにじられて居る今日の日本に眞に政治生活の實が結ばれえぬのは、あまりにも、當然のことではないか。

社會時評

左右田博士を悼む

吉野作造

この夏八月のはじめ突如左右田喜一郎博士を喪つたことは日本現代の文化に取てたしかに一大損失である。彼が生前學界に貢献する所の大なりしは能く人の知る所、その温潤珠の如き風格がまた接する者をして常に敬慕措く能はざらしめたことも知人間の語り草に殘つて居る。たゞ彼が他の一面に於て凡ゆる新興文化運動の爲に喜んで物質的援助を惜まなかつた陰徳に至ては、或は割合に世間に知られて居ないかも知れぬ。是れ、故らに事を秘するには非るも、彼の性格が自ら斯種の事實の他に語らるるを避けしめたからである。

左右田博士の學界に於ける功績は無論の事、更に各種の社會事業に對する多大の關心は既に多くの人に依て語られた。今後も屢々種々の機會に於て語らるるに相違ない。私情としては彼の主宰する銀行の蹉跌せる今日彼を永遠の彼方に送つたのは、友人として誠に氣の毒に堪へない。況んや彼はなほ春秋に富み、學才益々伸び且熟して更に大に雄飛すべきを期待されしに於てをや。彼を夭折といふは當らずとするも、少くとも天壽を完うしたものとはいへぬ。それにも拘らず彼の今日までに遺した學問上の仕事に至ては、量に於ても質に於ても頗る大きい。是れ何人も驚嘆して措かざる所である。若し夫れ研學の餘暇を以て彼が創設經營せし各種社會事業の今日現に見事なる發達を遂げて居るをも併せ見ん乎、彼の社會に貢献せしの洪大なる、亦以て彼が安じて瞑し得べきを思はしめぬでない。要するに彼は新しき日本の學界に其將來の發達を示唆せしめんが爲に送られた偉大なる才能であつた。それ丈け彼が征途中ばにして此世

を去つたのは我々に取て返す〴〵も惜しい。

博士に就て語るべき事語りたい事は數限りもない。これ等はまた別の機會に讓るとして、只一つ是非とも私が茲に語つて置かねばならぬことは、彼が所謂新興文化運動の助成の爲めに私の提議を無條件に容れ、從て私の要請を聽いては無制限に金錢上の援助をされたことである。今爰で私はあの運動この運動と細かい事は述べぬ。私が一通の書面をやれば彼は直に必要なだけの金を送つて與れた。君の求むる所なら無條件に受け容れると云はれると、却て此方も遠慮勝になり、少くとも大に態度を愼重にせねばならなくなり、能く〴〵必要已むを得ないもの〻外は申出さぬ樣にはなつたが、それでも毎年彼の懷を煩はした金額は可なりの高に上つて居る。中には彼の希望に依て彼の出資に出る旨を秘したものもあるが、今日新興文化的新運動に與つて居る年若い人で殊に左右田博士の隱れたる同情を[illegible]こして居るものは可なりに多い筈である。而して斯うした運動は段々世間に存在を認められて來ると經營も概して樂になるものだが（中には其の反對なのも無論あるけれど）、創立早々の至て微力なる場合がなか〳〵容易に凌ぎ通せぬものだ。而も餘程事柄に理解ある人でないと、斯うした山のものとも海のものとも分らぬ仕事に助力を敢てする人はない。左右田博士はいつも斯うした仕事の斯うした時期に多大の同情を寄せられたのであつた。この點に於て彼は亦最近我國に於ける各般の文化的新運動の忘るべからざる恩人である。

松島事件に於ける證人喚問並に之に對する吾人の態度

松島事件の證人調べは昨今頗る世上の注目を惹いて居る。而して新聞の報道は證人の言明の前後撞着せることや又はその頗る曖昧なるに對して若干遺憾の意を表して居るやうに見える。之に乘じてか辯護士諸君は成丈高になりて公人の德操を難じ、間接に世間の同情を被告人の上に轉向せしめんと努めて居る樣であるが、我々第三者たる國民は此間に處し決して之等の宣傳に惑ひ正當なる判斷をあやまつてはならぬ。證人の態度のい〻悪いに關係なく、その結果各被告人が有罪になるか無罪になるかに關係なく、苟くも社會の先達を以て任ずる堂々たる公人があんな醜穢なる利權運動の手先となると云ふが如きは、如何な

る意味に於ても之を諒とすべき理由はないからである。若し夫れ被告人自身が起つて證人の不徳を叫ぶの光景に至つては、情に於て恕すべき點なきに非ずとするも、公人の態度として實に見るに堪へざる醜狀と謂はねばならぬ。

若槻前首相・川崎前內務次官並に中川前大阪府知事の喚問は、要するに政府に移轉許可の意向ありしや否や又は少くとも移轉許可の可能を信ぜしむる程度の言明ありしや否やを確むるに在るらしい。被告人側は頻りに當局の言葉の中には明白に移轉許可を信ぜしむるものがあつたと主張する。さうでないのなら誰がわざ／＼斯んな運動にかゝり合ふものかと云ふ人もあつた樣だが、此處が即ち問題の大事な分れ目なのだ。可能と信じて運動したとなれば瀆職と云ふ德義上の非難に留まるも、可能と信ずるの理由が十分でないとすれば詐欺罪に問はるるからである。之に對して政府側は初めから許可の意思がなかつたのだと云ひ張る。旣に許可の意思がない、何で許可の可能を信ぜしむる樣な曖昧な言葉を使はうやと突つ刎ねる。中には斯んな危い仕事には關係なさらぬがよからうと忠告したとさへ云ふ者もある。政府側の述ぶる所に言ひ過ぎあるの疑は僞證の告訴を受けたのに觀ても略ぼ想像されぬでないが、概していふに、その言明する所に時日其他の點につき前後多少の齟齬する所もあつて、徒らに俗間の人をして如何にも彼等が嘘を云つて居るかの樣に思はしめて居る節もある。併し公平に云つて、劇職に在る人の記憶に多少の誤りあるは恕せねばならず、又相手が相手だけに餘りに露骨な言明をしなかつたと云ふ事情も見てやらねばなるまい。但だ自分の立場を強く現はす爲に後から若干の粉飾を施すのは感服出來ぬ。何れにしても我々局外の者の判斷としては、若槻首相の場合は詮議はするが六つかしいと云ふ程度で、又川崎次官の場合は法規上不可能と云ふのではないが事柄が事柄だけにすら／＼と運ぶ問題でないと云ふ位の所で、巧に運動者を擊退したものと觀るべきであらう。文字通りにいへば無論絕對不許可の聲明ではない。之を可能と信ずるのは信ずる人の勝手だけれど、之を以て可能を信ぜしめたものと相手方に逆襲するのは恐らく誣妄の甚しきものであらう。而して當局者の右の如き曖昧なる聲明に接して直に之を移轉の可能と確信したと云ふ言ひ分だけを取て、さて客觀的に之を如何に評價すべきものなりやに至ては、蓋し人に依て異るものと私は考へる。平素斯んな醜汚なる運動に沒頭し腐敗せる政界を巧に游ぎ廻つて常習的に旨い汁を吸ひ慣れた人間に在ては、之を確信したと云つたとて怪むに足らぬけれども、例へば清節七十年を以て世上に高潔を謳は

る箕浦翁の如き場合に在ては、斷じてさうした言ひ分を通す譯には行かぬ。翁にして眞に清節の士たらば土台始めから斯んな問題に手を染める筈なく、誤つて一時之に關係したとしても、當局者がはツきり許可の内意を明示せぬ限り輕々しくその可能を信ずる道理がないからである。假りに箕浦翁が内務大臣であつたとしたら如何する。我々が今日まで考へて居た様な箕浦翁なら、恐らく斷じて醜穢なる利權屋の慾望を逞せしめる様なことはせぬ筈だ。

若槻川崎諸氏の喚問に次で世上の耳目を聳動したのは床次竹二郎氏夫妻のそれである。法廷に於ける審問の時間は短かつたけれども、我々に殘した印象は深い。床次氏夫妻對高見氏に關する問題の要點は、三萬圓の金は政友本黨への寄附として床次總裁も知つて居るのか否かの點にかゝるやうだ。寄附者は黨への寄進ではない、口留料だと云ふ。高見氏は法廷でもこの點を大に爭つて居られたが、假令之は口留料として出したものとしても、せめて床次總裁も之を知つて居るのだとすれば、彼が之を黨への寄附として取扱つたことに面目は立つ。高見氏の面目は立つが、併し斯うすると床次氏までがこの醜き利權運動の渦中に卷き込まれる恐れあることを看過してはならぬ。さうだとすると、法律上はどうか知らぬが、少くとも道義上の責任は何としても免れ得ない。是れ床次氏が公人としては高見氏の主張に承の益なから裏書き出來ぬと繰り返し〳〵頑張つた所以であらう。但だこの點に關して新聞の記事は、如何にも床次夫妻が事實を枉げて知らぬ存ぜぬの一點張りで押し通したものの様に報じて居る。高見氏はその後精神修養に志して居たなどの報道は亦更に人をして頗る彼の立場に同情せしむるものあるが如きも、公平に觀て床次對高見の言明の相違を如何に判斷すべきやはさう容易の問題ではないと思ふ。

若槻床次諸氏の言明は其人柄と關聯して其自身我々の興味を惹く問題に相違ない。併し最も多く之に注意を向ける者は云ふ迄もなく辯護士諸氏であらう。何となれば之等の言明をどう評價するかに依て被告の有罪無罪はきまるからである。尤も細かにいへば何としても有罪の免れ難きもあらうし又始めから無罪たるのやゝ疑なきもあらう。たゞ大體に於て移轉可能の確信の有無が詐欺になるかならぬかの岐れ目である以上、當局の言明がその可能を信ぜしむるに十分であつたときまれば、事件を大に被告の有利に轉せしめ得るは明白である。無罪か有罪かは辯護士の職業的立場に取て重大の關係がある。法廷に於て彼等が

興つて異常の熱意をこの點に示すも怪むに足らない。

併し乍ら我々は第三者の地位に在る善良なる國民として常に本問題に對する正當なる見地を忘れてはならない。我々は辯護士ではない。この立場を彼等と同じうせざることに先づ意を留むる必要がある。辯護士の立場からすれば、證人の言ひ分を屈服さへすれば被告の法律的地位が淸まる、被告が無罪にさへなればいゝのだ。けれども我々國民の立場よりすれば、被告が詐欺の意思を以てやつたか如何はどうでもいゝ、詐欺であらうが無からうが、從て有罪であらうが無罪であらうが、苟くも公人たるものがあゝした汚い運動に手を染めて巨額の報酬を約束したと云ふ事それ自身を、何としても恕すことが出來ぬのである。政府當局に許可の意思なきを百も承知でありながら、可能なるが如く言ひ觸らして利權屋を操つたとすれば固より言語道斷の沙汰だが、よしんば當局が許可の意思を言明したからとて、元來斯んな問題に名譽ある紳士が平然足を踏み入れていゝか惡いか位は始めから分り切つて居る筈だ。況んやその成功と交換に巨額の報酬を約するが如きをや。少しでも之に關係があつたといふ丈けで、彼等の公人としての立場は言ふまでもなく糞土の如くけがされたのである。我々も亦社會の公德の名に於て、只この一事を以て彼等を恕すべからさる醜類と斷ずるに毫末の不都合も見ないのだ。裁判の結果有罪となるか無罪となるかは始めから問題ではない。

之を書き終つた翌日の新聞は已に檢事の論告を詳細に報じて居る。すると本誌が讀者の手許に屆く頃は多分辯護士諸氏の辯論で世間が賑はつて居るに相違ない。併し法廷に於ける辯難論駁は要するに本事件を法律上どう取扱ふべきかの一點に歸する。之も無論大切な問題だが、猶一層我々の關心する所は、其事件の政治道德的批判である。詳しく云へば、彼等に依て淺ましくも蹂躙された政界の公德的秩序を如何にして恢興すべきかの問題である。その先決問題として我々は何よりも先きに、本件に對する我々の良心の態度を常に嚴しく銳敏にしておかなければならぬ。私情に於て私は被告人の誰れ彼れに多大の同情を寄せぬでない。ただ公人の立場に復ては、その何人に對しても一步も假借する所以を見出さぬのみならず、寧ろ却て何處までもその不德と不義とを大に糾彈せずには居れないのである。

滿洲の排日騷ぎにつき或る支那人からの來書

奉天を中心とする昨今の排日運動は頗る私共の心を痛ましめる。先達は撫順で大變な暴動があつた。今度のは張作霖の命令を以てしても容易に鎭まりそうにない。少數有力者の煽動に由る一時的の暴發と觀る說もあるが、夫れにしては餘りに執拗過ぎる。寧ろ之れ亦滿洲支那民衆の自覺に基ける不可抗の一現象だと見做して早く相當の對策を講ずるは、少くとも我々日本人に取つて必要な事ではあるまいか。假りに今はそれ程根底ある運動ではないとしても、早晩さうした時期の來るは火を睹るよりも明白だ。兎角用愼は早きに失するを厭はない。何時までも呑氣な夢を見て居つては、日本は遂に大陸に於て完全にその足場を失はぬとも限らない。

斯んな考から私は最近の滿洲騷擾につき何が排日の眞因であるかを突き留めようと苦心して居る。殊に該地方から來て居る懇意なる支那人に就て彼等の腹臟なき意見を聞き大に參考に供しようと考へてゐる。この目的を以て之までに既に數名の人に遇つて居るが、その中で一番私に大なる感動を與へたものはS君の書面であつた。その他の諸君の談話並に書面もそれ〲私を啓發せるもの尠くなかつたが、S君の意見に依て私は最も強く反省させられたのである。成る程これでは彼等が排日の運動を起すのも無理はないと思はれる。勿論その中には多分の誤解もあらう。けれども進んで我方より極めて公明正大な辯明を與へぬ限り、形の上では何としても彼等の言ふ所を強ちに否認することは出來ぬ。この點に我々は深く〲反省する所なければならぬとしみ〲考へさせられたのであつた。

その支那の友人の書面と云ふのは大要を摘記すれば次のやうなものだ。

今度の好機會に貴國（日本を指す）が條約上の諸權利を確保されんとするのは形式上固より當然の事でせう。我國は貴國に內容の空虛な權利を許してまだ中味を盛つてあげてはありません。故にこの儘引き續き必要な第二段の手續を取らずに引き摺つて行くのは疑もなく我國の不信たるを免れないと自認します。故に形の上では我國は貴國に對し重々申譯のない次第なのであります。

ですけれど、私共は實は餘り形式の事には重きを置いて居りません。常に眼中に置く所は實際上の結果如何と云ふことだけです。ですから、今度のやうな問題に付ても我々の專ら關心する所は、貴國の要求に應じて諸々の懸案を解決することの結果我々の生活が實際上如何に影響さるるかと云ふ點に外なりません。此點に不安を感ずるので我々は騷ぐのです。若し此事に本當に安心の出來るものなら、何で排日運動などを起しませう。只感情的に一から十まで日本を嫌忌するものと我々を觀られては困ります。

尤も貴國の事前に於ける宣傳が徒らに我國青年の神經を過敏ならしめた嫌あることは確かです。滿蒙の治安維持の爲にする張作霖の活動は極力援助するの、若し支那自ら該地域の治安維持の任に堪へぬときは日本が進んで獨力でもその事にあたるのと、丸で滿蒙を屬領地扱ひにした傍若無人の言ひ分は、如何に忍耐強き人をも憤らせるに十分であると思ひます。貴國の一部のショウヴイニストは之を聞いて現内閣を賴もしい者に思つたかも知れませんが、假令東京の眞ん中で叫んだのでも壁のひゞきは世界の隅々にまで行き渡ります。私共は永くお國の御厄介になつて居るだけ斯んな場合の政府當局者の腹の中を若干讀めぬでもありませんが、多年日本の威力にいぢめられ通しの支那民衆に取て之が非常に怖しい惡魔のさゝやきと響いたるべきことは蓋し想像に餘りありまする。

併し之等の感情的昂奮のことは此際一切拔きに致しませう。純粹な冷靜の狀態に復つて扨て我々は何で今度の貴國の交渉を忌むかを考へて見ることにします。私は先きに貴國が條約上の權利の確保に力めらるるを尤もだと申しました。此點に於て我國は寧ろ自ら進んで貴國との協議を促進する義務ありとさへ考へて居るのです。然るに此事に付て我國の當局者は、從來と雖も常に曖昧なる態度を執り不得要領の應答を一貫して未だ曾て一度も貴國に滿足を與へたことはありません。之を私共は能く知つて居ます。故に不信の非難に對しても一言の辯解もありません。それにも拘らず、私共はどうしても此際貴國との新なる交渉に入ることを欲しないのです。不信と云はれようが不義と罵られようが國家百年の利害には換へられません。何としても日本の勢力をして之れ以上滿蒙の地に喰ひ入らせては不可いと確信して居るものであります。

そんなら何故私共は此上貴國が條約上の權利の確保に努めらるることに反對するのかと云ふに、それは一言にして申せば「現狀」の擴大になることを恐るるからです。詳しく云へば滿蒙に於ける日支關係の「現狀」は——私は法理上乃至形式上のことを

云ふのではありません、經濟上乃至實際上のことを申すのです——全然國際的搾取主義の上に築かれて居るからです。能くお國の人が口にする兩國人民の共存共榮の基礎の上に組み立てられて居るのでなくして、日本人及日本國が全體として支那人及支那國と云ふものを犧牲にすると云ふ土台の上に作り上げられて居るからです。斯くして我々は在來の「現狀」そのものに多大の不滿を有つて居りました。それが貴國の不完全なる條約上の權利に基くのか又は條約以外滿蒙の首腦者との間に獲られた密約的利權に基くのか、その邊のことは能く分りませんが、兎に角今の有りの儘の狀態が實に私共に取ては堪へられなかつたのです。斯く申さば、我々がこの既に堪へ難しとする現狀の更に少しでも日本側の有利に轉向すべき凡ゆる機會に對し極度に神經を過敏ならしめて居ることはお分りになるでせう。貴國では只條約上の權利をはツきりさせるに過ぎないと云はれます、何も新に加ふる所はないのだと申されます。全くその通りでせう。條約上の權利が確保されたからとて直に積極的施設を急ぎ以て無用の誤解を挑發せぬ樣に努めると云ふ御說明も謹んで之を諒とします。併し私共から觀て而も過去の經驗から觀て、危險は恒に危險として到底消え去るものではありません。この不詳なる「現狀」が先づ根本的に改められざる限り、我々は忠良なる民國の市民として、其名義の何であれ、貴國の滿蒙に於ける凡ゆる積極政策には徹頭徹尾反對しなければならぬのです。

尤も私は滿蒙に於ける貴國並に貴國人の各種企業を無條件に排斥するものではありません。第一に私共は富源の開發を一般外國人に解放することを決して厭ひません。殊に隣國の日本の來住をば本來彼我双方の爲に好ましい事と考へて居るのです。第二に今日までの滿蒙の經濟的開發は實に主として貴國側の努力の賜なること自認し、その限りに於て貴國に感謝の意を表するに吝かではありません。第三に貴國の企業開始に依て滿蒙土民の生活狀態の著しく向上發達したことも認めます。故に日本の滿蒙經營は今日まで大に支那人の利益にもなつたと云ふ事實を私は決して否認いたしません。そんなら何故「現狀」を不滿だと云ふのかと云ふに、玆處が或は帝國主義的國力發展の甘夢に陶醉して居るお國の方々に一寸了解の出來ぬ所かも分りません。帝國主義者と共に資本主義者もこの點では從來屢々同じ誤解を繰り返して居る樣です。

專制政治家は動もすれば申します、民衆の生活は昔に比して大に樂になつたではないかと。短見なる資本家は申します。我が工場が建つてから土地の人の暮し向きが著しくよくなつたと。併し人はたゞ昔よりも良くなつたと云ふ丈けで現狀に滿足

するものではありません。隴を得て蜀を望むは、正規を踏み外づす時に難ぜらるべきも、公正の標準に基く要求なら何處まで續けさまに主張しても構はぬと思ひます。我々支那人は、貴國人のお蔭で近年著しく其生活を向上せしめられたことをば心から感謝します。ついでに私共は更に一歩を進め、協力協動の結果を享樂することに付ても公平なる分配に與り得んことをお願ひしたいのです。此點に於ける私共の立場は、近代勞働問題の論爭に於ける勞働者のそれと頗る似てゐます。若し資本家を搾取階級と呼ぶを許し得べくんば、即ち貴國の滿蒙經營に對する我々の今日の立場は、正に國際的搾取主義の被害者だと謂ていゝでせう。之れが實に我々の深い確信です、否私共の眼前にぶら下つて居る疑ふべからざる事實なのです。之を貴國の方々は一體どう觀られて居るのでせうか。

どうしてそんな風に考へるのかと云ふ御質問もありませうが、今一々之を説明するのは面倒ですから御免蒙ります。只一二の實例を擧げて貴國人の反省を促す一助に供しませう。貴國の方々は今猶御記憶でせう、先年淸浦内閣沒落の際、時の滿鐵社長川村某はそれまで三十萬圓のきまりであつた機密費を突如八十萬圓に增加しその金を持ち去つて會社をやめたと云ふので問題の起つた事がありました。之が全部當時の與黨であつた政友本黨の選擧費用に使はれたことは公然の秘密とされてあります。少し溯ると所謂滿鐵の疑獄事件なるものがあります。中西副社長の如きは隨分永い間未決檻にぶち込まれて居た様でした。而して當時疑雲の中心であつた森恪とやら云ふ人は、多年黨務に功勞あつた故を以て今度の内閣には外務政務次官の榮位を占めた所を見ると、あの時の金も大部分政黨に注ぎ込まれた事は疑を容れません。さればにや今日でも諸新聞紙は、不用意の間に滿鐵を以て政黨の金穴と呼んでゐます。だから政府が代れば社長も代るのだと申します。現に田中内閣になると、すぐ様安廣氏を斥けて政友會の幹事長山本氏が之に代つたではありませんか。之れ以上細かい事は申しません。要するに滿鐵に表面上だけでも相當の好成績を擧げて居ますが、裏面に斯くまで日本内地の政黨を養ひ得る所を見ると、實際に擧げて居る利益は蓋し量り知る可からざるものがあるのでせう。而してその利益を擧げたのは日本の方々ですから、之を貴國が如何様に使ふも勝手な様ではありますが、私共の正義觀は實は二重の意味に於て之に強烈な反對を表明するのです。一は滿鐵を政治的に惡用することで、他はその結果その經營の全然官僚的なることです。殊に其利益の少からざる部分を割いて本國の内政上の目的に之を濫用するが如きは、お國の人はどう思ふか知らぬが、

我々としては不快實に云ふ能はざるものがあります。恰も支那と云ふ國が他國から泥棒に遇つたと云ふ樣な感じです。是れ前に私が屢々國際的搾取關係なる言葉を以て之を云ひ現はさうとした所以です。

しかも之ればかりではありません、滿鐵を日本內地の政治的目的に惡用するの結果としてその經營には絕對に他人を與らしめることは出來ぬことになりました。乃ち國際的搾取は更に企業經營の排他獨裁を伴ふことになるのです。斯くして我々支那人は、貴國企業に對する關係に於てその正當なる立場の十分に保障さるべきを安心することが出來ませうか。私は專ら滿鐵に付てのみ立論しましたけれども、外の事業に付ても同じ事が云へます。多少事情を異にするものもないではありませんが、要するに滿蒙に於ける日支兩國の關係は、現に決して公正の立場に置かれて居るとは申されません、又永く公正を必すべき地位には斷じて置かれて居ないのです。之に不平を云ふのは單に私共の無駄な愚痴に過ぎないのでせうか。

私共は必ずしも貴國との從來の諸懸案をいつまでも未解決の儘に放任して置きたいのではありません。只右述ぶるが如き忌むべき「現狀」の共備擴大されんことを恐るるのです。之れさへなければ何を苦んで何時までも不信の罪を貴國に重ねませう。日支兩國の眞の親善關係は固より私共の熱望する所です。如何でせう、一つ思ひ切つて之を碍ぐる根本原因に一大鐵槌を投じては下さいませんでせうか。と云ふのは外でもありません、私の所謂「現狀」の革命的變更です。革命的變更といへば馬鹿に六かしいことを貴國に求むる樣にも聞えませうが、實はさうではありません。のみならず斯種の變革は貴國に取ても必要且つ急務なのではありますまいか。現に貴國有識の間にも、滿鐵其他の滿蒙に於ける經營を政治的に惡用するの弊害は烈しく論難せられて居るではありませんか。貴國政界の革正の爲にも、之は差迫つた問題ではないかと思ひます。是に於て私共の要求は謂はばその目的動機を異にしつゝ正に貴國有識階級の與論と符節を合するが如きものであるのです。決して難きを求むるに非ることがお分りになれば、私の他の點に關する主張に就ても、定めし正當な御了解を得ることが出來るだらうと思ひます。

滿蒙に於ける企業の利益を內地の隱れたる目的に掠め取るなどは一體植民政策のイロハを誤つた愚策で、開明の新日本の國是としては頗る見榮がよくありません。それはどうでもいゝとして、私共支那人の立場としては、成功であらうが不成功であらうが、滿蒙に於ける一切の企業の收益に就ては、之に關係

せる日支兩國人士の共同の利益を公平にはかるを期せしめ、更に進んでは文字通りに兩國人民の共存共榮を資けしめる樣にせねばならぬと思ひます。斯くてその經營に公正の方針が確定してゐると云ふ事に安心が出來ますれば、我々は大に貴國の努力を德とし又大に歡迎もいたします。鐵道もどん／＼敷いて貰ひます、鑛山もどん／＼堀つてお貰ひします、商租權を差上げます。其他必要なるものは何でも差上げます。唯吳々もお忘れにならぬ樣お願したいのは、其前に先づ十二分に私共を安心させて頂きたいことです、安心が出來れば何でもいたします。安心が出來ぬとなれば、貴國の一擧一動に私共は毫末の油斷もいたしません。油斷もすきもなく緊張し過ぎると神經衰弱にもなります。だから時に少し位亂暴もするぞと威かす心算は毫もありませんが、斯うした我國人士の當節の氣持も、御面倒だが少しは御諒察を願ひたいと思ふのです。

府縣會議員選擧雜談

府縣會議員の選擧を報道する新聞の記事中に無産政黨の擧ぐる成績に馬鹿に重きを置いてゐるのがある。無産政黨の活動や又それが民衆の上に及ぼす反映やに重きを置くのはいゝ。その實際に擧ぐるであらう所の成績に重きを置くのは適當でない。適當でないばかりでなく、却て爲に好ましからぬ惡影響をさへ流すことがないだらうかを懸念される。

何故なれば無産諸政黨がその最初の試みに於て思はしい成績の擧げ難いは始めから分つて居る、それにも拘らず之に過大の期待をかけて、さて實際の成績の豫期の如くならざりしとて、其原因を政黨側の無能力に歸したり又は大衆の救ひ難き曚昧に歸したりして、折角擡頭しかけた無産階級運動の鋒先をへし折るは、百害あつて一益なきを信ずるからである。無論我國大衆の眼はまだ十分に開いて居ない。無産政黨幹部諸氏の手腕に就ても斯の大衆を掴むの技能に於ては現に大に危まれても居る。けれども其間如何に波瀾曲折はあるとしても、無産階級昨今の社會各方面に於ける積極的進出には目ざましきものがある。この大勢を正直に受取る者には些しも失望する理由はないのであるが、たゞ之を來るべき選擧の實蹟に依ても亦適確に判斷し得べしとする議論を聞くと、私共は何だか一寸くすぐつたい氣持にならざるを得ぬ。何となれば私の觀る所に依れば無産階級

の政黨運動なるものはその外形に於て其最も派手なるものだが、其實質に於ては本來彼等の最も不得意とする所だからである。さらでだに政界の掛引に在ては因習の勢力は意外に強いものだ。既成政黨が從來の腐れ縁を辿つて臨む選擧運動に對して民衆の純潔を防護することの如何に困難であるかは既に人の知る所である。それに今度は政府の露骨な干渉もあると云ふ。此間に在て無産新政黨の割り込む餘地の實際上極めて狭いのは云ふまでもない。それに殘念なことには運動費がない。更に之に選擧の經驗もないと云ふを加算すると、彼等は物質的にも又精神的にも眞に赤手空拳を以て戰場に向ふものなのである。斯くして倘ほ一人でも二人でも味方の當選を見ることが出來たら、それだけで私は彼等の大成功を讃美せずには居れぬ。初次に一人の成功を見るは、云ふまでもなく、二回三回に於ける數倍數十倍の實收を豫言するもの、之は各國の選擧史の明に敎うる所である。初めから多數の當選を見得べしとするは、蓋し苦勞したことのない人の空想に過ぎぬ。空想した様な勝利が實現せぬとて私共は毫も失望するの必要を感ぜぬ。況して之に由て無産政黨の前途を悲觀するが如きは飛んでもない間違であらう。

× × × ×

私の視る所にして誤りなくば、無産諸政黨の選擧對策も土臺間違つて居るのではあるまいか。第一に彼等は世間の評判に釣られてか矢張り數量的成績を氣にし、無暗に澤山の候補者を擧げて盲滅法に驅け廻らんとして居る。第二に彼等の運動方法は依然として在來の舊套を脱せず、既成政黨のひそみに倣うて相も變らず「金」の調達に苦心して居る。之れでは折角の新興運動に政界革新の實効を期待すべき何物も見出し得ない。のみならず無産政黨自身に取ても之では結局その地歩を確實にし基礎のかたい成功は見得ないかと思ふ。

無産政黨が金の調達に苦んで居るからとて、既成政黨などに見るが如く有權者に金錢的誘惑を差し向けんとして居るのだと考へてはいけない。買收どころか、候補者の車馬賃もないと云ふ有様だから、事實の上で買收沙汰の起り得ざるは言を待たぬ。だからその調達に苦心して居る金と云ふのは眞に必要缺くべからざる實費に相當するもので、之れなくしては始めから選擧は問題にならぬのである。然らば之れが調達に苦心したからとて文句はいへぬ筈であるのに、それを私が意地悪くも既成政黨のひそみに倣うてなどと難ずるのは如何云ふわけか。之はそれ丈の金の調達に苦心するのが悪いといふのではない、金の調達の仕方が良くないと云ふのである。

無産階級の政治運動――殊にその選擧運動に在て最も大事なことは、投票を有權者のものとする事である。從來の選擧に在ては、有權者は概して云ふに政黨有力者の指圖に随つて投票して居つた、從て選擧は實際上は政黨の仕事であつたのだ。故に有權者の側は始めから之に關する費用の分擔に任ずる義務はな

いと考へる。甚しきはあべこべに報酬を政黨に求むるものすらあつた。少くとも政黨側から陰密なる金錢の提供などを受けて彼等の之を甘受して怪まなかつた心理的基礎はこゝに在ると謂つていゝ。斯う云ふ仕組みであると、政黨はどうしても選擧に要する巨額の費用を選擧民以外から持つて來るの必要に迫られる。自分達の仕事を選擧民に頼むのだから、表面上の理窟は何と取繕つても、その費用をばどうしても有權者に出さすわけに行かぬのである。之等の費用の如何にして作らるるかの事實は今玆に説明する限りでないが、斯かる慣行の如何に我國の政界を毒してゐたかは、既に讀者諸君の知らるる所であらう。そこで我々は、既成政黨の頼むべからざるに憤慨して起つた無産政黨に對しては、決然この點に正しい新例を開かれんことを期待したのであつた。而して今日彼等の實際に劃策する所を見るに及んで我等は大に遺憾の情を禁じ得ぬのである。

私は前に選擧は飽くまでも有權者の仕事でなければならぬと云つた。之を事實に於て政黨の仕事たらしめた所に既成政黨の罪はあると申した。既成政黨と對抗する關係に於ては、選擧投票の仕事を是非とも有權者の手に奪還せねばならぬ。之には絶對に政黨者流の指圖に從はぬことにするのが必要だ。又無産政黨それ自身の問題としては、何處までも有權者本位に選擧對策を立てることが目下の急務である。之には先づ投票に對する有權者の責任を明にするを必要として之が爲に最善の努力を注がなくてはならぬ。かくてその爲に一番直截簡明な方法は、選擧費用の如き之を全然選擧民の分擔に歸せしむる事に在ると考へる。無産政黨の選擧費用なるものは元來大した額ではない。數でこなせば一擧手一投足の勞を以てして樂に出來る筈だ。單にそればかりではない、多少でも出捐することに依て選擧民の意氣込はまた丸で違つて來る。俺の仕事だと自覺して來ると其運動は獨り手に伸びて行くものだ。之れでこそ始めて無産階級運動の本當の力が現はれるのではないか。而して今日無産政黨は果してみなこの當然の途を辿つて居るだらうか。

聞く所に依れば、無産諸政黨では何れも適當な候補者を得るに苦み、是非とも相當數の當選を見ねばならぬとて、各地方支部と協議し然るべき人に白羽の矢を立てては立候補を勸誘して居るとやら。この事に關して最も熱心なものは中央本部であると云ふ。夫れかあらぬか地方支部は頼まれ仕事を請合ふやうな積りで頻りに運動費の送達を本部に迫る。既成政黨のやり方を周圍に見せ付けられて良心の十分鋭敏でない人達に取ては、中央からの送金の少いとは如何にも肩身狹く感ぜられるものださうだ、是れ已むなく中央の幹部も無い智慧を絞つて最も不得手の金策に奔走させられる所以である。一面から觀れば悲慘の極であるが、他面に於て私はどうしても斯うしたやり方の冠履顚倒を戒めずには居れない。斯んなやり方で進んでは、無産政黨に到底前途の光明はなく、若しあればそは必ずや既成政黨と同

じく政界腐敗の大罪を犯した時でなければならぬ。無産政黨運動の本筋は、精神的にも物質的にも無産大衆の零碎な力を組織結成して起つことの外にはない。第三者の寄附や應援にすがつて辛うじて一時の窮を凌ぐやうではとても駄目だ。

× × × ×

一夜ある工場に働いて居る友人が遊びに來た。正直な勤勉な勞働者で、同輩からも頗る尊敬されて居ると聞いて居る。私が少しばかり世話を見て居る或る組合の幹事を永年勤めて居る關係で、人柄もよく分つて居る。今度の府縣會議員の選擧では社會民衆黨の爲に一臂の力を捧げたいと云ふので相談に來られたのだ。貴下の盡力に依て何票位を纏め得るかと訊いたら、努力次第では七八千は大丈夫だと云ふ。努力次第とは如何云ふ意味かと尋ねると、放任して置いては固より五六百を纏めることも困難だ、七八千の去就を動かぬ様に引き付けるには、詰り私達數名が連日全力を擧げて奔走せなければならぬのだと答へる。そこで私は改めて質問した、連日全力をあげて奔走するとすれば工場は休むのかと。仕方がありませんと云ふから、貴君はそれでいゝとして、更に數名の同志も同じく工場を休んだらその生活は如何すると聞くと、彼はハタと答辨に詰つたのであつた。ひそかに想像するに、彼はその爲には民衆黨の本部で何とかして呉れるものと豫期したらしく又之を必しも恥づべき事とは考へなかつたらしい。流石に根が篤實な人だけに、私と話し込んで居る中に自ら斯く期待することの恐しき不正なることに氣づいたらしい。そこで彼は非常に當惑したのである。それでも彼は此際民衆黨に獻身奉仕するの熱意を失はず、何とか適當の方途を發見して飽くまで初志を貫きたいと云ふ風であつた。

そこで私は云つた。私は社會民衆黨に對しては特殊の親しみと期待とを持つて居る。從てその爲に助力すると云ふ話を聞いては他人事ならず嬉しく思ふものである。が併し、それかと云うて、自らの好愛する所に偏して適當なる規道を踏みあやまる者あるを傍觀するわけには行かぬ。今貴君の立つて居る境地は洵に危險な立場だ。君は今謂はば一種の誘惑に罹つて居るやうなものだ。貴君が頗る民衆黨を通じて無産階級の發達を冀ふ熱情に富むだけ、貴君に對するこの誘惑の力は强いのである。能く考へて見給へ。第一に貴君が民衆黨の選擧運動員として極めて有能だとしても、民衆黨には今の所貴君を樂に養ふ丈けの財政的餘裕はあるまいではないか。第二によし民衆黨にこの餘裕があつたとしても、貴君が工場に於ける結構な地位を棄てて直に政黨事務員になるのは考へものだ。少くとも將來に亙り他の金錢的支給に賴らなくとも可いと云ふ身柄でなければ、今萬事を抛て政治運動に沒頭するは得策であるまい。そこで貴君の今の立場としては、矢張衣食の上は工場の勞働に托し、職工としての務めを忠實に果たし了つた後その餘力を擧げて政黨の爲に獻身奉仕すべきではあるまいか。第三には無理にかき集めなくて

は七八千が纏まらぬと云ふなら纏めなくともいゝぢやないか。放任して置いても動かぬ者は五百位あると云ふのなら、それが本當の頼りになる味方である。隙を潰して頼んで廻らねば附いて來ぬ樣なものを無理に引つ張つたとて何になる。尤も之等の人々をも本當に口説き落して五百の仲間に加へることは必要だ。併しこの爲には、選擧の時に俄に好餌を以て誘ふと云ふやり方は決して良法ではない。要するに貴君が心から民衆黨の爲に根底的の援助をしたいと云ふのなら、平常仕事の餘力を以てヂリ〳〵とやり給へ。動もすれば人騷ぎのやかましい選擧の此際は、寧ろ本分を守つて輕擧盲動せぬを可とする。貴君の爲にはかるに、此際君はその信ずる所を持して動かず、漫りに人を説き廻りもせぬが又他の勸説に惑はさるることもなく、試驗に及第した人が卒業證書の授與を待つが如く、毎日の業務に忠實にいそしみ乍ら悠然として投票の日の來るを待つがいゝではないか。斯の如くして君は始めて普通の有權者の模範にもなれるのだ。蓋し國法の有權者に期待する所は、決して政治に狂奔することではない。政治に冷淡無關心なのも困るが、國民の誰もが政黨の手先の樣になつては大變だ。兎角我國では、選擧の際に於ける世間の騷ぎ方が烈し過ぎると思ふ。あんなに多勢の人が家業を抛て東奔西走するのでは、國家の經濟的損失だけでも洪大なものだらう。互に勝負を爭ふ者が死に物狂ひになるのは是非もない。選擧權者に至ては各候補者の爭點を冷靜に比較し且判斷し、徐ろに何れに黨すべきやを究めて其去就を一定し、靜に投票の日を待てばいゝ。さう云ふ態度を國法が有權者に期待するのだとすれば、君が此際寧ろ直接民衆黨に關係するを避け、冷靜に而も正當なる立場を固守して世間の紛爭に超然たる態度を執るのは、却て大に意義あることになるかも知れない。人の目に付く樣に騷ぎ廻るのみが政治につくす所以ではない。

前段の話に關連してモ一つ私の云つて置きたいことは、今日の無産政黨の幹部は餘りに選擧民を使ひ過ぎはせぬかと懸念されることである。例へば前段の如き場合に在て、幹部諸君は恐らく喜んで其の希望を容れ、彼を直に支部長にでもしたらうと思ふ。斯くては終に支部の自發的伸張力を傷ふことなきやを私は大に心配する。加之支部長その人を得ればまだしも、偶々それが熱心ではあるが變人だと云ふ樣な場合になると、彼を表面に立たしめた事の爲に却て著しく將來に於ける發展の可能性が殺がれぬこともないでない。この事は既に〳〵幾多の苦い經驗を嘗めて居る筈だ。孰れにしても今の無産政黨は、眞に健全な發達を遂げんと欲する以上、從來のやり方を根本的に變へる必要があらう。レーニンの偉い所は一つにはその戰術に前古未曾有の一大創意を加へた點にある。既成政黨の慣行以外に一歩も出ない樣な陳腐極まるやり方に終始するは日本無産政黨の恥辱であらう。もツと足を地に付けてはどうか。而して道理の前にモ少し謙遜になつては貰へまいか。目前の成功を既成政黨なみに競はんとするが如きは以ての外の妄想である。

お前（日本）は支那に何を望むか

（一）支那の無産階級への言葉

大山郁夫

一

今私の前には、『日本から支那に望む』といふ課題が置かれてある。だが、それは、その形式のまゝでは、私に答へのしようがない。我々のやうに、日本の無産階級運動の中を歩んでゐるものは、唯その日本の無産階級の立場から物を見ることが、或ひは言ふことが、或ひは行ふことが、出來るだけであつて、それ以外、たゞ漫然と『日本』の立場からどうの、かうのといふが如きことは、我々には無意義なことだ。從つて、支那に對してもまた、我々はたゞ、日本の無産階級の立場から支那に向つて斯く望む、といふやうなことが言へるだけだ。否、それだけではない。實は、我々が縱し日本の無産階級のそれといふが如き限られた立場からでも、唯漫然と『支那』に對して何物を望んでみたところで、始まらない話である。支那は決して一の統一的意志の現實的主體ではない。この點に於て支那は、現代の他のあらゆる資本主義國家と、何の異るところもないのだ。で、たとへば、同じ資本階級の畑の中でも、國外の帝國主義の手先となつてゐる張作霖と、都市の新興ブルジョアジーの傀儡と

して動いてゐる蔣介石とが、互に內部的對立鬪爭に鎬を削つてゐた際にも、全支那の眼ざめたる無產階級は、それらの南北兩軍閥のそれ〲の頭目を、彼等の共同の敵として戰つてゐた。蔣の下野以來、その個々の特殊事情こそ變はつてきたとはいへ、同樣の一般的形勢は、根本に於ては、依然としてそのまゝ持續してゐる。かゝる狀態の下に於て、我々がたゞ漫然と支那、に對して何物かを望むといふのは、それに對して何物をも望まないといふのと、大して相違はないのだ。或ひはまたそれは、支那の軍閥とか、資本階級とか、眼ざめたる無產階級とかのうち、何づれかを特に指定して、それに何物かを望むといふのと略ぼ同じだ、といへる場合もあらう。

さうだ。我々は單に支那に對してとはいはず、日本の國內に於てすら、我々が縱し無產階級の立場から自國のことに關して何物を望むにもせよ、我々はそれを、支配階級に謀つてみたところで始まらない。我々は唯それを、彼等の手から戰ひ取るより外に途はない。支那に對しても、それは同じだ。いや、尙ほ更らさうだ。我々はそれ故に、南方のと北方のとを問はず、軍閥や資本階級やには、何等のメッセージをも持たないのだ。で、結局、我々が支那に對して望むところのものについては、我々はただ、支那の眼ざめたる無產階級に向つて、それを支那の軍閥や資本階級の手から戰ひ取ることを望むより外はないのだ。

二

我々が、さういふ意味で支那の無產階級に向つて望むところのものは、まことに簡單、率直、明瞭なものにすぎないのだ。何か？曰く、支那の無產階級が、自國內の軍閥及び資本階級、並に國外の帝國主義列强から受けてゐるところの、彈壓、搾取、および、あらゆる種類の殘虐暴壓に向つて、一旦勇敢に開始したところの、その反帝國主義的鬪爭を、最後まで執拗に戰ひぬき、彼等の正當なる諸要求を一つ一つと成功的に戰ひ取り、かくて、世界の無產階級が衷心から彼等に期待してゐるところの、そのすばらしき解放戰を、それにあてがはれた必然の運命であるところの最後の勝利にまで、不休不斷に戰ひ進めるであ あらうこと。——ただそれだけである。若しくは、結局ただその一事だけに歸着するのである。

さうだ。我々が眼ざめたる支那の無產階級に向つて望むところのものは、結局たゞその一事だけに歸着するのだ。だが、それは、容易ならざる一事である。それは、世界の無產階級の解放戰の連鎖の最も重要なる一局處に於ける決定的勝利を意味するものである。それは、それの故に、新世紀の曙光を約束する

ところの、あらゆる世界史的意義のある諸運動中にあつて、最も顯著であり、最も重要であるものの一つである。そして直接にはまた、それが如何に成功するかの上に、今や支那を中心として爆發することが氣遣はれてゐる世界戰爭が未然に防止され得るか否かの、現在・人類的に見て最も意味の深い問題が繋つてゐるものでもある。

今世紀に於て特に激化した軍備競爭の結果、今や齒まで武裝してゐる世界の帝國主義列强は、支那の資源と民衆とを搾取するといふ一點の上には共同利害を感じてゐるが、しかしその間にゃ、より直接的に感じられる各自の特殊的利害のために、日一日と益々皮肉を極めた對立抗爭に深入りしてゐる。そして、そのことの當然の結果として、太平洋を血の海に化するやうな戰爭の可能的な到來が、一般に懼れられてゐる。從つて、特にその場面に極めて近く位置を占めてゐる日本の無産階級には、それに無關心で居ることが許されないのだ。かかる戰爭に於て、いづれの側が『勝利の榮冠』を以てめぐまれようとも、無産階級が、どの道、そのために永久に取り返しのつかない慘害のどん底に突き落されるであらうことはたしかだ。それは、近き過去の世界大戰後の經驗によつて、説明ずみになつてゐる。そしてかかる歴史の敎訓を泌々と體得してゐる日本の無産階級は、かかる未來の戰爭の防止を決して怠つてはゐないのだ。で、今や全國的に次第に熾烈に燃えあがりつつある無産階級運動は、その當面の段階に於て、世界戰爭を約束する金融資本の支配に向つて、必死の戰ひを戰つて居るのだ。從つて日本の無産階級は、より直接に列强の帝國主義的搾取の場面に於て打倒帝國主義を標榜して惡戰苦鬪を續けてゐるところの、眼ざめたる支那の無産階級のその運動の一張一弛に對しては、極度に張り切つた注意の眼を向けてゐるのだ。

今――殊に蔣介石が、その露骨に不信を極めた寢返りを打つてからこのかた――彼等は言ふべからざる窮境に追ひつめられてゐる。だが、世界歴史の必然によつて今世紀が民衆の世紀として更生するであらうことを疑はない我々は、よし彼等が現在如何なる慘じめな沈衰狀態の下に呻めいてゐようとも、やがては新しき力を以て再び猛然として擡頭し、その失はれた地盤を確實に奪還するであらうことを確信する。我々は寧ろ、彼等がひとへに彼等の將來の必然の勝利に希望をつなぐばかりに、驚くべき犧牲心を以て現在の悲運に堪へてゐるのを見て、心の底からの驚嘆と同情とを禁ずることが出來ないのである。

三

我々は、しかし、まだ蔣介石があの卑劣な裏切り的行動に出ないで、彼の統率の下におかれてあつた北伐軍が、破竹の勢を以て長江一帶の地方を攻略し、長驅まさに南京に迫らうとしてゐた際に當つて既に、勇敢にも世界の無產階級解放戰の先頭隊として立ち、打倒帝國主義の戰ひの中心勢力として戰つてゐた支那の兄弟たちに對する我々の同情と關心とに驅られ、自國內の帝國主義者たちに向つて、「支那から手を引け！」の叫びを擧げた。わが勞働農民黨が本年二月に逸早く發した『對支非干涉聲明』は、その要求を不朽の形に表現したものであり、またそれから時を移さず、わが勞働農民黨の提唱の下に結成された對支非干涉同盟、およびそれによつてあくまで執拗につづけられてゐる實際運動は、少くとも、その要求を大衆的基礎の上に具體化しはじめたものである。

その頃若槻內閣は、所謂『幣原外交』の下に、對支非干涉主義の假面をこそ冠ぶつてゐたが、內實は蔣介石の背後の擁護者となつて、支那の無產階級運動の上にしたたかな彈壓を加へようとしてゐたものであることを我々が見て取つたから、我々は極端なる彈壓と迫害とがそのために我々の上に臨まうとしてゐたにも拘らず、斷乎として我々の對支非干涉聲明を發し、即刻その實行運動に移つたのだ。しかも、それ以來の事件の經過が、如何に我々のその時の豫想を一つ一つと裏書して來たかは、世人がまさまざと目のあたりに見て來た通りである。

殊に、我々のその對支非干涉聲明の上に一貫して現はれた精神によつて指導されて來たところの對支非干涉同盟の如き合法運動までが、若槻內閣の下に於て――田中內閣になつてからは尙ほ更らさうだが――强硬なる彈壓の下におかれたことは、偶ま幣原外交の對支非干涉主義が如何に欺瞞的のものに外ならなかつたかを反映したものでなくて何であらう！

四

我々が我々の對支非干涉聲明と共に揭げた諸要求中、今日に於て最も現實的な意義を見せてゐるものは、對支出兵反對のそれである。我々は初めから出兵絕對否認の態度を明かにしたが、當時それは、無產階級側からこそ熱烈なる共鳴支持を得たが、既成諸政黨側からは、批難もしくは惡罵の外、何物を以ても酬ゐられなかつた。ところが、間もなく田中軍事內閣が出現して、對支積極政策を宣言し、且つ國民の名に於て少數金融財閥のために盛に滿蒙特殊利益の鉦太鼓を叩いて、その帝國主義的意圖を丸出しにし、次いで在留邦人の生命財產の保護の口實の下に、兵を靑島に出し、更らにそれを濟南にまで進めた。か

かる狀態の下に於て、對支非干渉同盟の如きは、益々猛烈なる彈壓の的とされるやうになつて來た。

田中内閣の出兵の害毒は、さすがに今日では、一般的に認められるやうになつて來た。そして、曾て我々の對支非干渉同盟運動への彈壓のために終始一貫して努力してゐた若槻内閣の與黨の後身である民政黨ですら、今日ではそれに鬼や角とケチをつけて、田中内閣攻撃の一根據としだしてゐる。

かくて、九月七日の民政黨の役員會に臨んだ濱口總裁は、その折の演說中に於て、實に次の通りに言明してゐる。

『……政府が何と辯明しても、山東の出兵は大なる失政で、我國の公正なる態度に對して内外の疑念を招き、從つて國交の上に一點の陰影を投じたるものといはねばならぬ。』云々。

同じ金融寡頭政治の共犯者であり、帝國主義政策の共同實行者である民政黨の首領濱口氏の出兵否認の根據は、無論、我我のそれとは相容れないものではあるが、しかしそれにしても、彼がその結論として、今になつて我々のあとから出兵否認の宣言をするまでになつて來た位なら、なぜ事前にそれに見通しをつけるほどの政治家的明察を示さなかつたか？否、それどころか、彼が率ゐてゐる今の民政黨・もとの憲政會の基礎の上に立つてゐた若槻内閣は、かつては、我々が事前にそれに見通しをつけて堂々と行つてゐた出兵反對運動に對して、血の川ゐやうな彈壓を加へたのだ。だが、よし彼等が事前にそれに見通しをつけてその豫防策を講ずる程の明察を缺いていたにもせよ、彼等に何故に、せめてはその事の進行中に於てなりと、それを抑制する試み位のことをすらしなかつたのであるか？　濱口氏はそれについて斯ういふ。——

『……それまでは問題の進行中であつたから、率直に所見を述べることを差し控へて居つたが、今やいよいよ撤兵も行はれたのであるから、ここに所見をのべて政府の失政を明かにする次第である。』

眞に火事場すぎての棒ちぎり式の口上ではある。考へても見よ、問題の進行中に何も言ひ得なかつたものが、問題が過ぎてからやつと氣がついて、遲がけにそれに關する發言をしてみたところで、それに何の權威があるといふのだ？　かかる醜き追隨主義は、ただ自ら大政黨と稱して威張つてゐる彼等の面目を丸潰しにする以外には、爪の垢ほどの効果もないものである。それは、だが、その核心に於て、現在のあらゆる國際問題は、無產階級的立場からでなければ、明確なる見通しがつけられなくなつて來たことを明かに反映してゐるものでなくて何であらう！　かの世界の三大帝國主義の參加によつて行はれたジユネ

ーヴの軍縮會議の慘めな失敗を見せつけられて來た我々は、特に茲に痛切に、そのことを意識せしめられるのだ。

五

わが勞働農民黨は、世界平和といふが如きことを、單なる一片の理想として口にするものではない。わが勞働農民黨がそれを口するときには、黨は既にそれへの熱望を實行運動に移してゐるのだ。しかも、かかる實行運動は、現實に問題とされ得るものを問題とすることから始められなければならない。

で、世界平和への我々の努力に於て、今現實に問題とされ得るものは、何よりも先づ、果敢なる反帝國主義的運動に惡戰苦鬪を重ねてゐる支那の兄弟たちに對する我々の同情と關心とを、我々に可能なる限りの範圍内に於て現實的の運動に移すことであらねばならぬ。我々の對支非干涉同盟の運動の如きは、即ちそれなのだ。

しかも、かかる合法運動さへもが、金融寡頭政治から來る極端な彈壓を受けなければならなかつたことを見るとき、我々は必然的に、我々の世界平和への努力が、紋切型のパシフィストたちのそれのやうな他愛もないものでもなく、またさうしたなまやさしいものでもないことを、痛感せしめられないで居られない。

だが、我々が我々の一切の仕事を始めるとき、我々は決して、それが如何に我々の上に彈壓を招くものであるかとか、如何に我々を難局に導くものであるかとか、といふやうなことを、第一の問題とはしない。我々がその際第一の問題とすることは、我々が無產階級に對してそれをする義務を帶びてゐるか否かの一點である。で、我々が一旦我々にその義務があると見て取つた以上は、我々は最早、如何なる彈壓が我々を脅威しようとも、如何なる難局が我々の前に展開されてゐようとも、我々は一歩もそれから退かない覺悟を持つのである。わが勞働農民黨の對支非干涉聲明の如きは、かかる決心の下になされたものであり、また黨が支持して來た對支非干涉同盟の運動の如きは、かかる決心の下に進められて來たものである。

ここへ來て我々は、再び我々の出發點に立ち歸つて、重ねて次の如くいふ。――我々が『日本から支那に望む』といふことは、我々に取つては、ただ日本の無產階級の立場から、支那の兄弟たちに呼びかける言葉についてのみ、言ひ得られるものである。（遊說の途中・京都の宿で。）

（二）先づお前の惡夢から醒めよ

室伏高信

一

田中内閣の對支政策が前内閣に比べて一層反動的であることはいふまでもないことである。前内閣の小ブル的日和見主義に對して現内閣は武斷的帝國主義によつて立つてゐる。それはそれの成立當時における對支宣言や、若しくは山東出兵の事實によつて裏書きされてゐるばかりではない。武斷的帝國主義なるものはこの内閣にとつては最初からの約束である。朴烈事件の陰謀によつてその第一歩を踏み出したところの現内閣、樞密院のダイ・ハアツが直接間接にそれの産婆役をつとめたところの現内閣、そしてカアキイ服を首班とするところの現内閣が武斷的帝國主義の古き旗印を色揚げしたことはもとより豫期されたことである。けれどもかくのごとき反動政策が果して可能であるかといふの點になると問題は全く別である。武斷的帝國主義は今日果して可能であるか。現内閣が拓殖省を設けようとしてゐることは武斷的帝國主義についての野心と希望とを示してゐると勿論であるが、けれどもこのビスマアク主義が今日の世界において果して何等かの餘地をもつてゐるのであるか。山東撤兵はわれ〳〵に何を語つてゐるのか。虎視眈々として出兵の機會をうかがつてゐたものが、その機會を捕へながらしかも空しく手を拱いて世界の嘲笑裡に撤兵しなければならないといふことはわれ〳〵に何を語つてゐるのであるか。私は既に若槻前内閣の小ブル的日和見主義といふた。それは對外的には全く無意志内閣であつたといふてもいゝのである。幣原外交なるものは無外交といふことに等しいのである。けれども日本の一大財閥を背景とする内閣が小羊の支那に對して無外交に終らたければならなかつたといふことは寧ろ甚だ意味深いことである。幣原その人が無能であるか有能であるかを私は知らない。けれども

辨證法的には正と反とを代表するところの圓周上の始點と終點とが事實上一致してゐるやうに、最も無能な外交はしばしば最も有能な外交に一致するのである。支那に對して小羊の血を望みながらも尙ほ手を拱いて立つてゐたものは、出兵してそして空しく撤兵するの止むなきに至つたものに比べると、少くともその結果に於てはより賢明であつたといふとに歸着するのである。英國の對支干渉が保守黨の時代錯誤を證據立てたにほかならなかつたやうに、凡ての對支干渉は今日は手を燒かなければならなくなつたのである。それは支那それ自體がそれ自身を知りはじめたことによるのでもあるが、それによつて、そしてまたそれとともに、武斷的帝國主義の世界的の行詰まりといふことを意味するのである。レニン流にいふならば世界は帝國主義的に分割され終つたのである。世界は最早や新しい帝國主義國家のために拓殖省を新設せしめる餘地を殘してゐないとともに實にそれとともに、帝國主義國家の分裂が既にはじまつたのである。世界戰爭の結果について見るべきである。英國が受取りつゝあるところの運命について見るべきである。今日は資本主義がそれの最後の段階に到達したばかりではない。「資本主義の最後の段階としての帝國主義」それ自體が既に最後の段階に到達したのである。それは對外的な職分を使ひつくして、對內的な職分にそれ自身を集中しなければならなくなつたのである。一カルテル、シンジケエト、トラストの經濟形態は、政治上の獨裁形態によつて相應じつゝあることは事實である。帝國主義はこゝには尙ほ支配的であつて、時代はたしかにナポレオンを、シイザアを、アレキサンダアを要求してゐるのである。この世界の形勢のもとにおいてムツソリニの生れたことはもとよりたゞなる個人的な狂氣として見るべきではない。けれどもムツソリニをナポレオンやシイザアやアレキサンダアに比べることによつて明らかであるやうに、現代の世界が要求しつゝあるところの強大な意志は、對外的な英雄ではなくして、對內的な英雄である。外交上に偉大な人物が存在したのは既に昔のことである。今日では如何なる無意志な官僚であつても外務大臣をつとめることができるし、比准ずみの外交文書を紛失しない程度の用意さへあるものならば何人でも在外使臣となることはできるのである。外交が世界を支配した時代は恐らくはクレマンソオをもつて最後としたのである。階級鬪爭の面前において世界の支配階級が暗默の神聖同盟を結ばなければならないところの世界の現狀においては、そして世界の帝國主義的分割が既に終りに近づいた今日の狀態においては、對外的帝國主義を夢みることはあまりにも時代離れがしてゐるのである。今日は拓殖省が設

けらるべき時代ではなくしてそれが廢止さるべき時代である。對外的出兵の行はるべき時代ではなくしてあらゆる撤兵の行はるべき時代である、對支干渉の行はるべき時代ではなくして謂ふところの既得權なるものがその正當な所有者のために反還さるべきの時代である。獨り居留地が回復さるべきであるばかりではない。また獨り關税自主權が回復さるべきであるばかりではない。凡ての租借地も、凡ての利權なるものもまた放棄されなければならないのである。世界の帝國主義の諸國家はかくして、そしてかくしてのみ支那に對して正義を語ることを許るされるのである。われ〳〵がたとへ尺寸の地と雖も支那に對してその主權を犯し、若しくは條約の如何なる一章と雖もそこに不平等なるものを強要してゐる間は、われ〳〵は支那の兄弟に對して手を差しのべるの資格をもつてはゐないのである。

二

幸ひにして武斷的帝國主義は日本の輿論ではないやうである。日本の支配階級の一半を代表するところの民政黨の系統がこれに反對してゐるばかりではない。新聞紙の態度もこの點においては自由主義に一致してゐるやうである。そしてわれわれのビツク・ビネスと雖も支那における商業上の經驗によつて自由主義的な立場に傾いてゐるやうである。けれども支那に對する内政不干渉といひ、日支親善といひ、經濟的提携といふことは果して何を意味してゐるかといふの問題になると、われ〳〵の支配階級が期待してゐるところの對支政策なるものは、政友會であると民政黨であると、武斷主義であると町人主義であるとを問はず、それが一個の帝國主義であるの點においては一つの例外もないのである。一つは武斷的帝國主義であるのに對してより賢明な一派の諸君は經濟的帝國主義の政策を採用しようとしてゐるのである。謂ふところの對支不干渉、若しくは經濟的提携たるものが經濟的帝國主義の別名にほかならないものであることは、既に支那の諸君が見拔いてゐるとほりである。然らばその經濟的帝國主義とは何か。支那において日本のための永久的原料國を發見するといふことがそれである。日本の工業主義のために支那をして永久的にその原料を供給せしめようとすることが、謂ふところの日支經濟提携の根本條件をなしてゐることは、既に一般に宣明されてゐるところである。日本のごとき無原料の工業國からいふならばそこに最も要求されてゐるものはもとより原料である。豐富にして安價な原料の永久的供給である。この原料の保障によつてのみわれ〳〵の工業主義はこれを維持してゆくことができるし、また支那を永久原料國とす

ることによつてのみ支那を永久市場として維持することもできるのである。けれどもかくのごとき政策が果して可能であるかどうかといふことについては、われ〳〵の支配階級は甚だしく怠慢である。ロバアト・マルサスが人口論を著したのは一七九八年であるから既にその時からして百三十年である。それはしばしば世界の工業主義者にとつて利用されてきたのであるが、マルサスは工業主義のために利用さるべきであるよりも寧ろそれに對して警告したのである。彼は米國から原料を仰ぎながら米國を市場とするところの英國の紡績業が必ず行詰まるであらうことを豫言したのである。そしてその警告は今日は見事に適中して、英國の紡績業は正にマルサスの警告をそのまゝに受取らなければならない立場にあるのであるが、そのことは移してもつて日本と支那との關係においてそのまゝに適用することができるのである。日本が工業的天才を獨占することができない限り、支那から棉花を輸入して支那に綿糸綿布を輸出するといふがごときことが長く維持することのできないことはあまりにも明らかである。支那における紡績業の目ざましい勃興の事實は何ものよりも雄辯に事態の進行を語つてあまりあるのである。マルクスのいふたような工業上の先進國がそれの後進國に對して鏡を示してゐるといふやうな考はもとより誤謬である。けれども工業の後進國が永久に後進國であつて、そしてそれが永久に工業上の先進國にとつて搾取されるところの市場であるとなすことは、一層に蟲のいゝ考へ方である。支那はたしかに工業化しつゝある。それはもとより工業主義によつて立つことはできないであらうが、それが、今日あるよりも何倍も何倍も工業化するであらうことは疑の餘地がないのである。そしてそれは恐らくは工業自給の立場にまでそれ自身を進めてゆくに相違ないのである。工業的日本の危機は實にこゝにあるのである。それは日本の支配階級にとつては最も恐ろしい惡夢である。その惡夢は實現されるであらう。われ〳〵の支配階級はその受取るべき運命を受取り、日本の工業主義はやがて破產の宣告の前においてそれ自身を戰慄させるに相違ないのである。けれどもその時である、われ〳〵がまことの日本に還ることができるのは。そしてまたわれ〳〵が手を差しのべて支那の兄弟と語ることのできるのは。

三

今日の支那の形勢は専門家にとつても容易にその歸着するところを知ることはできないであらう。一勝一敗は尙ほ幾度か繰返され、今後においても尙ほ第二、第三の張作霖が現はれ、そ

してまた同時に第二、第三の蔣介石が輩るであらう。けれども如何なる素人にもいひえられることは、北方派の舊勢力に對する南方派の新勢力がつよくであらうといふこと、そして恐らくはそれが漸次的若しくは急速に増大してゆく勢力であるといふとである。それは經濟的發展の趨勢と相應じてもゐるし、近代世界の諸形勢ともより多く調和するのである。孫逸仙の國民黨系統はこの意味において新興支那にとつての最も實用的な立場を代表するものである。それは絶えず軍閥派の長い間に養成してきたところの舊勢力と戰はなければならないし、また左翼勞働運動と兩立することのできないことも明らかに試驗ずみとなつたものではあるが、舊支那からして新支那への中間的過程においては、國民黨系統にそこのバラック的假舞臺の踊り手としては最も適當な立場を占めるであらう。支那の文明化はこのハイカラ黨をして政權を掌握せしめるであらうし、またこのハイカラ黨が支那をして益々工業化せしめるに足るであらう。支那の工業化といふことは、外國からの資本主義的搾取に備へるところの唯一の道ではないが、少なくともその最も傾き易い道である。支那はこの最も容易な道を選んでから既に久しいのである。印度のガンジに對する支那の孫逸仙、タゴオルに對するプラグマチズムの新思想家の諸君は、新しい支那のとりつゝある進路の飛躍に存在してゐるかを語てあまりあるのである。新支那は先王の道を學ぶことの代りに進歩の思想をとり入れたのである。隣國相望み雞犬の聲相聞ゆるところの小國寡民の代りに、鐵道を普及し、科學を發達させ、工業を盛んにするところの近代的大國家の理想を追ふてゐるのである。民をしてまた繩を結びてこれを用ゐ、その食を甘しとし、その服を美とし、その居を安んじ、その俗を樂しむところの古の支那的價値觀念に對して物質的價値觀念をもつてこれに置き換へようとしてゐるのである。この勢は最早や避くべからざるものである。支那の自主的立場が、政治的にも經濟的にも、回復することができない間は、この形勢こそ支那の自由精神と一致することのできるところの最大の力であらう。けれどもそれが果して支那にとつての最後の目標でありうるのか、支那は第二の亞米利加となるべきであるか、支那は歐羅巴のごとく工業化し、文明化し、そして昔ながらの支那的傳統が捨て去られなければならないかといふの問題になると、われ〲の考は全然否定的であるといふことを告げなければならないのである。

四

支那が工業化し、文明化し、近代國家化するといふことは必

要な害悪としてのみわれ〳〵はこれを承認することが出來るのである。これは支那自らが選んだところの道ではなくして歐米の、そしてまた日本の資本的帝國主義の壓迫がこれを餘儀なくせしめたといふことにおいてのみ辯護さるべきであるとわれわれには思はれるのである。世界の形勢について少しく遠くを見るものにとつては、そして西洋文明の本質と價値とについて少しく眼を開いてゐるものにとつては、支那を救ふの道は如何なる模倣でもないといふことに思ひ當らなければならないのである。否、歐羅巴的資本的帝國主義に對して支那を救ふの道としても、孫逸仙的に鐵道を興し、科學をすすめ、近代式軍隊を養ふといふことではなくして、益々その傳統的な支那的精神を發揮することであるといふことに思ひ當らなければならないとわれ〳〵には思はれるのである。

五

支那の新思想家の諸君は支那を率ゐて何處へ行かうとしてゐるか。第一の亞米利加といふことが一つの答であらう。第二の露西亞といふことが他の一つの答であらう。支那は今日の世界においては、亞米利加化することにおいても、露西亞化することにおいても、最も多くの可能性をもつてゐるやうに見えてゐる。けれども工業的に後進國であるところの支那が工業主義的國家となりうるであらうといふことは今日は最早や想像することはできないのである。工業主義は常にその背後に工業的に後進なる諸國家をもつてゐるといふことが必要であるからである。そして工業的に後進なる諸國家をもつことが大であればあるほど一つの國が工業的國家となることの可能は大である。從ひてまたそれをもつことが小であればあるほど工業的國家の可能は小さい。工業的に最も後進的な諸國家の受取るべきところの運命は工業的自給といふこと以上のものではありえないのである。支那にとつては近代的な工業自給は可能でもあり、そしてまたやがてきたるであらう。それは今日では最早や避くべからざることであるかのやうに見えてゐる。けれどもその目的が到達された時に支那は果してより偉大なものとなり、支那はより大なる滿足をもつて報ひられるであらうかといふことの反省が、總じて西洋文明に對する根本的批判、それの價値と可能とに關する批判が、歐羅巴においてのやうに、日本においてのやうに、印度においてのやうに、支那においても起りつゝあるといふことは、われ〳〵にとつては甚だ重大なことだと思はるるのである。就中世界の工業の意義が、總じて近代文明そのものが行詰まりの運命を前にしてゐるところの今日において、特に就

中支那のやうに三千年來の卓越した文化と生活とを傳統してゐるところの古き國民においては、評價の正しい標準を見失はないことが最も重要でもあり、また可能でもあることである。支那は亞米利加化すべきか、まことの支那に還るべきか。復古的な思想が常に頑固黨と結びついてゐるかの如くに見えることは傷ましいことである。孔子が先づ名を正すといふた時に彼にはもとより多分の保守主義が殘つてゐる。けれどもわれ九夷に居らんとするといふた時に價値の一大轉換が宣言されたのである。老莊に至つてはいふまでもない。支那文化の基礎は文明の否定において存在する。文明的外的價値觀念の否定といふことにおいてわれ〳〵の東方的生活の最高標準が示されてからこゝに三千年である。われ〳〵の新人なるものはベラドンナの美しさに醉ふてそれを喰ふものは死するといふところの古き言葉を忘れようとしつゝある。けれども既によろめきつゝあるところの外的文明のうちにそれ自身を投げこむことが果して賢明なことであるのか、歐羅巴文明は果してわれ〳〵の亞細亞文化に比べてより卓越したものであるのか、進歩か完成か、外的か內的かといふの點について反省を怠らないものにとつては、支那は益々支那であるべきであり、そしてまた支那であることによつてのみそれは偉大なる國民でありうるといふことを悟るに至るであらうと思はれるのである。否、歐米文明に對して支那の自由を防禦するの點から見ても、遂に支那は支那であることのほかにはより善き道の存在しないといふことを悟るべきである。物質的文明の理想は如何なる國民をも永久貧困の鐵鎖に繫ぐことによつてのみ可能であり、足るを知るものは富めりといふことの最高經濟學によつてのみ人々は常に貧困から免れることができるものであることについて一考するものにとつては、そしてまた自由は外的でなくして內的においてのみ到達することのできるものであることを知るものにとつては、今日の急務は支那が歐羅巴に學ぶべきであるか、若しくは歐羅巴が支那に學ぶべきであるかといふことは多くの疑を要しないところである。

六

支那をして第二の露西亞たらしめようとする努力は一度失敗してもまた再びきたるであらう。私はその力を疑はないのである。それは支那をして第二の亞米利加化せんとするの勢力と拮抗し、若しくはそれに次ぐであらう。或はそれを淩ぐかも知れないのである。今日の世界においては支那は最も多く露西亞に似てゐるのである。けれども露西亞のボルシエヰキが農民との不斷の戰ひにおいてのみそれ自身を維持することができたやう

に、支那をボルシエヰキ化することは支那數億の農民を征服することによつてのみ可能である。これは一時は可能であるかも知れない。政治的には一時は可能であるかも知れない。けれども一時の革命騷ぎは歷史の泡である。支那の農民が農民である限りは、それはそれ自身の文化と生活とをもつであらう。農民的自由の觀念はボルシエヰキ的獨裁的官僚的都會政治と兩立することはできないのである。支那は獨裁政治に適するよりも無政府共産主義に適してゐる。王道蕩々の思想、若しくは王道平々の思想といふところのものは、究局するところ、今日の言葉においていふならば、一つのアナキスト・コムミユニズムである。そしてそれは世界において最も徹底したアナキスト・コムミユニズムであるといふことができるのである。孔孟老莊の思想を究めるものにとつては、今日の物質的文明の解決は、政治的にも、經濟的にも、これを歐米に學ぶべきではなくして支那自身が既に一つの完き解決を與へてゐたといふことについて、世界の注意を喚起すべきであると私には思はれる。

(三)　新支那に對して外交建直しを要す

笹川　潔

カール、マルクスは、長髮賊の頭目洪秀全が、廣東より進出して南京に太平天國朝を建設した運動に對し、未だ世界の何者も此の絕東の一事件に格段の注意を拂はなかつたに拘らず、彼れは當時既に之れを以て極めて意義ある出來事と認め、支那に生れたる新社會運動として、思の外熱烈なる期待を繫ぎ、此の純眞にして自然なる革命的工作は、必ず遠からずして、印度に影響し、且つ又歐羅巴に波及すべきであらうと觀察した。

けれども、彼れの期待は間もなく裏切られた、南京の天國朝廷は頽敗し、其の運動は分解作用を始めた、彼れは痛く失望し、其れ以來餘り支那に付て言及する所なかつた。

既にして六十又餘年の歲華が流れた、曾て彼れが社會運動の芽生へとして睨んだ其朽木の間からは、不思議にも亦た新たな

る双た葉が萠え出でたのである、便ち支那に於ける國民共産兩黨の合作よりして、國民革命軍の長江に進出した今回の事件がそれである。

是に於てマルクスは一方に其の眼識の卓越せることを誇負すべき權理があり、同時に彼れは又た其の眼識の不徹底であつたことを告白せねばならぬ落目を有つ、しかし六十又餘年前に經濟上の見地から社會運動を起すことを、彼れによつて當然の結果として看做された支那は吾人の注意を要する、何となれば六十年後の今日に於ては、一層此の種の運動を起す理由と必要とが存在すべき筈であるからだ。

して看ると、蔣介石の下野と共に南京政府の動搖となり、其の際に乘じて北方軍閥の勢力盛り返しとなり、馮玉祥閻錫山の首鼠兩端となり、武漢に在ては共産黨一味の失脚となり、ボロヂン、ガロンの逃竄となり、譚平山鄧演達等の敗北となり、支那革命運動の前途をして頗る暗憺たらしむるに至つた現下の狀勢も、亦た如何なる動機で、朽木の蔭より新芽を吹き出し、そこに忽然として回天の偉業が打開せられないとも限らないであらう、我々は支那の事情を判斷するに方て、決して性急に失してはならぬと思ふのだ。

× × × × ×

碩儒辜鴻銘は曾て古の支那人は即ち日本人だと言つた、古の支那魂は日本魂の如きものであつたと謂ふ意味である、此くの如き支那魂をもつた支那人は、殆んど宋末の文天祥を最後として、どうしてそれ以來意氣の揚らぬ氣慨のない民族と成つたか、これは大に研究を要する問題である。

私は竊に稽へる、支那人――漢民族の墮落は、第一次に於て北狄たる金の征服に始まり、第二次に於て滿族の壓倒となり、而して第三次に於て英國を筆頭とし列國の政治的經濟的壓迫に因るものだと。

豐臣氏の發祥地たる名古屋と、其の覇府たりし大阪とは、德川氏の征服と、之れに伴ふ政策との爲に、久しく其の市民の政治的感覺を麻痺せしめ、其の狂熱的復讐心を化して前垂と十露盤とに禮讚せしめた、政治的去勢術の如何に有効なるものであるかは、此の德川對大阪の一條に徵するも亦た明かである、況んや元と淸と列國と三面三樣に渉ての壓迫と去勢とが如何に漢民族を墮落せしめ、頽廢せしむるに至たかは、寧ろ想察に餘りある事でなかろうか

夷狄の正朔を奉ずるに忍びないために、宋や明の志士が、日

本を始めとして外國に亡命した例は少くなかつた、然らざるも風月の間に滄浪し、或は文人墨客の群に伍して生涯を了へた者は甚だ多い、所謂古の支那人は日本人なりと云ふ觀念の權化も此くの如くして其の跡を絶つたのである。

けれども支那は大國だ、傑出した人物もない譯でなかつた。特に其の壓迫の屆かぬ地方、征服者の力の比較的及ばない地方に在ては、そこに意氣の軒昂たる、氣慨の稜々たる即ち古の典型的支那魂を有した人物が輩出したのである、其の地方は何處だといふと、支那に於ける極南の地、即ち廣東である、而して之れに次いでは湖南である。

廣東の花縣に生れた貧乏教員の洪秀全が、長髮賊を率ゐて北上したことは、夷狄の壓迫に對する漢族の反抗運動、被征服者の解放運動として偉大なるものゝ一つだ、清朝を打倒して歴世王朝革命の外存在しなかつた支那に、初めて民衆革命を遂行した兩湖兩廣の民黨は盖し又た之れに次ぐものと謂ふべきだ、而して香山縣に生れた一醫生の孫逸仙によつて、近く民族主義の革命運動と爲り、其の門弟子及同志の一黨が列國の搾取抑壓に敢然反旗を飜へしたことは、實に宋末以來去勢の中に隷屬的國民と化し來つた支那の中樞民族に、一道の光明を與へ、其前途を明るくしたものでなくてどうしよう、私は孫逸仙を偉なりとし、其同志の運動を壯なりとするに躊躇しない。

私は思ふ、支那は今非常に重大なる時局に直面しつゝありと、彼れが周や漢或は又盛唐の如き、文華の爛熳たる時代を現出し、而して其の文華は古代に於けるが如く宮廷的又は貴族的のものでなくして、新たなる意味に於て全民衆的基脚を有ち全民衆と共に、福祉を偕にすることを得べき性質のものであるやうな、素破らしく立派な精神的及物質的文明の持主と成るか、或は永遠に隷屬的民族として被搾取的境遇被征服的境遇の下に呻吟し了るかは、實に此の眼前に横る列國の壓迫を掃ひ除け得るか否かによりて決定せらるべきものだと。私は衷心爾かく信じてゐるのである、それは支那の現情は内外の壓迫が然らしめたといふ私の見地から、此の現情を打破して新生命を開くには、滿洲朝廷の既に粉碎されて痕を留めざる今日、剩す所一に外國の壓迫と其の走狗たる軍閥の勢力を掃蕩する外他に途なしといふ結論に達せざるを得ないからである、支那は果して之れを行り遂げるであらうか。

× × × × ×

我維新の革命は局面も狹く又た性質も單純であつた、けれども支那の革命はさうではない。獨り其の場面の廣大なる許りで

なく、其民衆の剰多なる許りでなく、政治上の性質に於ては國內的と國外的とに跨り、而して同時に經濟上の理由からして社會問題に關聯してゐるからである、此かる困難な立場に在ては、外國の援助を望むことも、決して不自然の問題とは謂れない、けれども彼れに取て主義を均ふする―假令共產主義でなくとも――例へば平等條約を訂結し、租界租借地を返還し、關稅自主權を承認するといふ如き、彼れの見て以て眞の友邦とする國家は、差當り勞農露國と獨逸とよりないのだから、彼れが眞つ先に此等二國に向て援助を求めんとするのは、强ち不自然のことゝも思れない、然るに獨逸も露西亞も實は其の國家の現情が他國を救濟し、若くは援助し得る程度に達して居らぬ。隨て其の供給した資金も武器も、要するに寺內內閣が段祺瑞にいれ揚げた高から見れば勿論爾かく太した分量のものでなく、顧問とか教官とかいふ種類のものも、謂はゞ僅かに二百餘人を派遣するに過ぎなかつたのである。

然るに此の謂ふに足らぬ援助が、國民黨及其與黨の共產派をして、世間周知の如き偉大なる働きを成さしめ、世界の覇者たる英國をして七十年來の地盤を抛棄せしむる程に成功したのは、全く不思議に堪えざる現象であるが、これは格別詮索するまでもなく直ちに首肯し得られる問題であらう、つまり如何に支那が列國の壓迫に苦み、其の羈絆から脫出せんかと悶へてゐたこと、及び革命運動が其桎梏を除く爲に起つた一團の義軍とも見做さるべき地位に立つこと、此の二つの關係に出ることだと思はれる。

然らば支那は列國の爲に、どのやうな壓迫を受けてゐるのか、外國の資本家が支那に企業し、多くの工場を建て、或は航路を擴張し鐵道を延長し、或は又た鑛山を開掘し油田を採取する等々の事柄は、結局支那人に職を與へ、其生活の向上を促進するものでないか、日本人の口癖に言ふ共存共榮といふものでないか、私共はよくこんな談義を聽聞するのである、特に開港場邊の利いた風の商人諸君は、日本が歐洲大戰後金廻りが好くなつてから、事業は勃興する、さうして縱令不景氣に成つた今日と雖、人口の繁殖、生活の向上等の原因と、日支兩國を聯繫する交通機關の發達とからして、支那の農產物及工藝品は每年夥だしく日本に輸入せられる、だから日本は支那に取ての大切な華客であることが分るだらうと云ふのだ、これは全く其の通りだ、日本で使用する油の大部分は、支那の大豆か落花生か綿實か桐か山茶花を原料とするものだ、日本は漆器で名を知られた國だが、もう今では漆といふものは專ら之れを支那に仰ぐ、獨り政治や文學藝術が行き詰りの狀態である許りでなく、下駄の

臺や其の表迄も疾くの昔から行き詰まつて、大抵のところは支那の四川の省から搾取する、若し搾取といふ文句が不穏であるならば買收する、それから錢は無論として、米や大豆や其豆粕や小麥や其製粉やは、矢張り支那から大に到來する、棉花も勿論其の通りだ、只だ來ないものは銅と生絲位のものだが、併かし我絹絲工場は支那に無い譯でなく、其處から直接に米國へ輸出せられて、賣上代金が正金銀行の手を經て日本に這入つて來る、便ち躉が金と化して還つて來るのである。

日本の綿絲紡績工場は大規模のものだけでも、支那一圓に亘つて彼れ是れ三十二三ある、英國の五個乃至六個に比して、著るしき發展振りだ。隨て此に出入する勞働者は、其數に於ても却却多勢である、而して此の外青島漢口大連等に散在する製油工場、港灣や鐵道竝に其附屬工場に衣食する工人、或は又た撫順本溪湖等の炭山に從務する坑夫、其副產物を製造する工場、更に又た大冶桃沖山等の鐵鑛に使役せらるゝ勞働者を計へ來ると、日本の資本と關係を有つ支那人勞働者は、可なりの多數に上るのである、此等勞働者の中大冶の鐵鑛及滿鐵の工人は、比較的賃銀が高價であるが、其他は八九年前二十錢乃至三十錢の低廉なる賃率から、漸く今日の五十錢平均に漕ぎつけたもので、其間には罷業だ怠業だの大悶着を繰り返したことは言ふまでもない。

然るに前記利いた風の商人が宣傳する如く、支那の物資が日本へ不斷の流出を爲し、日支經濟上の關係が次第に合一密切の傾向を呈してから、支那の物價は飛躍的昂騰を告げ、十年前と今日とでは、少くも二倍乃至三倍、多きは十五六倍の騰貴を示すものすらあるに至つた。隨て一般農民は大地主に非ざる限り非常に困窮し始め、其の結果として漸次相率ゐて都會に出稼ぎの餘儀なきに至り、斯くして工場に殺到する爲め、在來の勞働者は種種の運動工作を試むるも、企業主を制して、其の賃銀を增騰せしむる能はず、十年後の今日僅かに五十錢の賃銀に甘んじ、併かも十二時間前後の勞働を繼續するといふ羽目に陷つてゐる。米國邊の宣教師や旅行家が支那の工場を視察し、其の幼年工及婦人勞働者の意外に多數なるに喫驚し、特に六七歲の頑是なき兒童が深夜操作するの光景に駭目し、砌に義憤を發するに至るのも、要するに親の稼ぎだけでは追つ付かないからである、便ち一家擧つて勞役に服せざる限り食ふことが出來ないからである、私はこれは僅かに人道問題として默視することの出來ないものだと考へてゐる。

× × × × ×

此くの如き工場の一隅で、大正十四年の或夜、十二歳の一少女は綿の如く疲れた揚句、覺えず轉寢したのであるが、之れを發見した日本の一職工監督は、工場内の規定に背くといふ廉を以て、笞を擧げて彼女を打擲したのである。之れを傍觀した支那人勞働者は、其の餘りに殘虐なる仕打に憤激し、此に職工待遇法の改善を迫り、此くの如くして工場内の空氣は險惡となり、資本主たる日本人側は、上海工部局の助力を求め、遂に稀代の活劇が始まり、南京路の學生示威行列となり、英國警察官の發砲となり、茲に上海全市より支那全國に亘る、世界の歴史に空前の大罷業運動を開始した、さうして英國日本を主たる目標としたのみならず、佛國も米國も苟も外國人若くは外國の公館に出入する支那人は皆擧つて業を廢するといふ騷ぎを演じた、次いで間もなく廣東沙面の外側に於て、一群の學生行列と英國警察官との間に衝突を起し、彼の有名なる六月廿三日の虐殺事件を演出した、是に於て英國は當面の敵として支那人の深刻なる怨府と成つたが、張作霖が南方に威を揮はんとせる政策からして、孫傳芳と相謀つて支那官憲の壓迫を强からしめたことは、更に又た日本に對する憎惡の念を高めしめたのである。

けれども、日本の内地には、遠き以前から支那の革命派に對して、深厚なる同情を有する一群が有る、否な日本の知識階級の大半は支那の國民黨に對する援助者である、日本の資本家や軍閥主義者が、其の本國の道德上の立場及其利害關係を無視して、支那に於て營まるゝ罪惡の結果が、意外に深刻なる報酬を伴はないのは、常に此の援助者の一群が存在するためである、これは日支兩國の關係上見遁すことの出來ない力である。

併かし日本が最近民國となつてからの支那に對し執つた政策及態度は、決して賢明なるものゝのみではなかつた、特に廿一ケ條約の强制、最後の通牒を發して、之れを强行した態度の如きは、如何にしても兩國の親善を口にし、共存共榮を主張する日本としては、餘りに亂暴な所業といふ外ない、而して又た滿洲に於ける利害の打算のみからして、支那民黨の怨府たる張作霖を庇護する如きは非常な愚策たること言を俟たずである。

然るに此の過去の失策より自覺し、新たなる支那に對して、新たなる外交の建直しを爲すべき時に當て、恰かも民族主義の下に國權の回復を絶叫する支那民衆の前に、殊更聲を大にして滿洲に於ける積極政策とか稱するものを云爲し、彼の廿一ケ條による既得權の解決を迫らんとするが如きは、餘りに馬鹿氣切た話でなからうか。

蔣介石は下野した、日本は何故彼れを助けて其志を成さしめなかつたかと言ひたい、若し支那に於て個人を援助することは、

段祺瑞に對する寺内內閣の覆轍を踏むものだといふなら、ナゼ國民黨の右翼分子を助けないかと言ひたい、若し又た國民黨の右翼分子が爲すに足らないといふ譯ならば、武漢南京の兩者を合同せしめて、共の非共產分子の政府を助けることも亦た一法であらう。

滿洲に於ける懸案は、張作霖によつて之れを解決すべきものでない、若し彼れによつて解決するとせば、日本は永遠に反感と紛糾とより脫れることが出來ないだらう、滿洲は軍事上並に國防上の價値を姑く論外に置いて、單に其經濟上の價値から見ると、世人の思ふ程に大したものでないことは、滿鐵の決算報告が一年二千萬圓の純益を計上するに止まるのでも理解せられる、東支鐵道の如きは滿鐵の如き雄大なる規模に於て經營を試みなくとも、尚一年千六百萬圓の純益を上げ、露支改訂條約に遵て、半額八百萬圓を張作霖に提供してゐる、これは南滿と北滿との經濟上の價値が如何に差違あるかといふ一つの好資料である、けれども之れに反して支那の中部及南部の日支貿易額は無慮數億に上る、勿論其の收支の關係上日本に入るべき純益の數字に至ては、調査がないから見當がつかない、しかし其の經濟舞臺の雄大であることゝ、日本內地の產業と密切の關係を持つ結果、一旦緩急あるに方ては、直ちに日本の社會問題に交涉を有する點に於て、頗る重要である、だから滿洲の仇を上海で討たるゝ如きは、日本政事家の避けねばならぬことである。

露國のスターリンの言つた言葉に、こふいふことがある、支那の革命は恐く一世紀後の問題に屬するであらう、けれども其の間に支那に對する列國が、甚だしく壓迫を加へるやうな場合が生じたなら、必ず急激の速度を以て躍進するであらうと。

今日は日本の靜かに考ふべき時代である、日本の支那に望むことは多々あらう、けれども日本に對する支那の歷史的感情は、幾許の信を日本に繋ぐであらうか、實に考へものだと私は掛念する、又た支那人の日本に望む所も多々あらう、日本は之れに傾聽する誠意は有つても、其の人口問題經濟問題社會問題の錯雜なる關係は、其の誠意を實現せしむることが出來るであらうか、其邊も甚だ疑はしい、けれども支那の革命は、其國民の覺醒と其幸福との上から、之れが成功を期待せねばならぬ、だから日本は今少しく時運の成行と大陸の變化とを注視し、徐ろに其の執るべき將來の大計に付て、豫備的思索を凝らすべき時だと私は思ふのである。——王道の上に立つて此の時局に對する大計の基礎的條件を攻究すべき時だと信ずるのである。

（四）隣邦日本人としての「私」の希望

石川三四郎

○

吾々は支那に對して何を要求するか？『吾々は』と云つても、其吾々は各々其要求する處が異なるであらう。利害干係により、思想關係によつて自ら異る處があるであらう。故に『吾々は』と云はずに『私は……何を要求するか』と云つた方が精確な云ひ方であると思ふ。併し『私は』と云つても、其私は日本人である。支那の隣邦であり、文化の性質から見ても、殆ど同種同根と云つても可い類似點を持つた日本國の一人である。こうした『私』の要求は、自ら日本人としての要求となるべきは當然である。但し日本人を代表しての要求でないことは勿論である。一人の人間が他の人間を代表する、などと云ふことはあり得ないことである。代表などと云ふことは代表する人か、又は代表される人かの不名譽である。故に『私』の要求は一日本人の要求ではあるが日本人を『代表』しての要求ではない。

第一に、日本人たる私は、支那が內亂を止めて一日も早く平和に歸することを希望する。實地に支那を研究するにしても、支那と貿易するにしても、又は支那に於て產業に從事するにしても、今日の如く常に騷亂が絕えないのでは、そして今日の如く生活に安定がないのでは、手も足も出ない。

第二に、日本人たる私は、支那が帝國主義侵略主義の國にならないことを希望する。若しあの四億の國民を提げた大國が軍閥の爲に統一されて侵略的帝國主義の國是を樹てたなら、第一に脅威を感じるものは隣國たる日本であり、殊に其日本の平和主義者たる私であろう。故に私は支那が軍閥の手に歸さず、帝國主義の國にならず、平和な自治的な世界の模範となる樣な美しい文化を創造せんことを希望する。

併し希望ばかりしても、それが果して成立するか否かを考へ

て見ねばならぬ。若し其成立の見込がないならば、其希望は一種の空想に過ぎたくなるであらう。そして其希望には何の壓迫力をも伴はぬであろう。故に其希望に强迫力が伴ひ、實際的行動となつて現はれるには、そこに成案が無ければならぬ。私は支那に於ては其成立の可能性が充分に存在すると思ふ。それに就て少しく研究して見たい。

○

一體今日の支那を一の國家として見ることは大へんな誤りであると思ふ。若し强いて之を國家と見なすなら、一種の社會的國家とでも言はねばならぬ。支那には近代國家としての機構が完備してゐない。けれども一般支那人の意識なり、生活なり、を觀察すると、そこには立派な支那社會が動いてゐる。こうした國家社會に於ては、單に一黨派が革命政府を樹立し、新政令を發したとて、容易に社會革命が成就さるべきものではない。日本人は日本國の日本人であるが、支那人は決して支那國の支那人では無い。支那の社會的國家は支那人を以て組織されてゐるが、併し支那人は國家の隸屬ではない。是れは法制上の問題では無くて、事實上の問題である。心理上の問題である。法制上では中華國民である支那人も實に於ては、單に何省何縣或は何府の住人であるに過ぎない。そして中華民國の名は彼等に便利な場合、彼等の榮譽となる場合に之を利用すれば可いのである。日本人から見れば之は甚だ非國民である樣だが、彼等から見れば日本人は到底奴隷國民だ。國家から離れては一砂礫をも動かすことの出來ない民族は即ち日本人だ。此奴隷島國の日本人が支那を觀察すると、何時でも大てい間違つてゐるのは是非も無い

○

慥か内村鑑三氏であつたと記憶するが、今から卅餘年以前、世界の諸民族中で將來恐るべきものは猶太人と支那人だといふ樣なことを言はれたと思ふ。流石は内村氏の所感である。今日世界を旅行して見ると能く眼につくことであるが、實際世界至る處に經濟的の根城を据ゑて、世界各國民を逐ひまくつてゐるのは猶太人と支那人とではないか。ちよと横濱から船に乘つて歐羅巴に行つて見るとすぐ判る。河内、サイゴンは云ふに及ばす、シンガポール、パナン、マダガスカル、到る處に支那人が活動してゐる。佛蘭西に於ける支那人の如きは幾萬を以て數ふべきであらうか、支那人自身の爲に特に大學まで經營する樣になつて居る。而も彼等の恐るべきは、到る處に於て大いに自治

生活を開拓してゐることである。そして彼等は決して日本人の樣に自國の大使館や領事館を使らない。在佛大使の如きも常に在佛支那人間に人望がなければ在職が困難だといふ位に言はれてゐる。日本人は牡蠣の岩にこびり着いてる樣に國家にこびりついてゐるが、支那人は自由に太洋を泳いで雄大な生活を食つてゐる。

こういふ性質の支那人の支那が、又あの樣に廣大無邊の領土を持つてゐる。各省間の關係は國內の地方關係と言ふよりは寧ろ一種國際關係にも近いほどのものである。そして其上に此各地方、各團體に諸列國が競爭的に關係をつける。故に支那內政問題は直ちに國際問題となつて紛糾するのである。日本が張作霖を助ければ、英國に呉佩孚を助け、ロシアが武漢政府を助ければ、米國は南京といふ風に、支那の問題には直ちに國際問題が伴ふのである。そればかりでは無い。同じ日本が張作霖を援助するにしても、日本の政府が變はれば又其態度も變はる。從て諸列國の國內の形勢が又支那の問題に影響して來る。こうして支那に繼起する諸現象は複雜を極めるのである。

（　）

然らば此盤根錯節せる支那の運命は今後どうなるのか。其樣なとは誰にだつて豫測されるものではない。けれども、枝葉末節の點を視ないで、大勢の赴く處を觀察すると、支那人の進みつゝある方向も自ら察せられる。第一に、軍閥にせよ、文治派にせよ、武漢にせよ、南京にせよ、外來帝國主義の排斥といふ點に於ては一致してゐること、是れである。是れは軍閥や文治派やの主義であるといふよりは寧ろ民心を得んが爲の必要條項として常に唱導されるのである。外來の帝國主義が經濟的に支那國民を搾取してゐることは、支那民衆が眼ざめるに從つて直接に明白に痛感されることである。軍閥も文治派も、誰も彼も、苟も支那に於て一勢力を成さんとする團體又は個人は、大てい外國の軍事的又は經濟的援助を仰いでゐるに係はらず、必ず外來帝國主義の排斥を高聲に叫ばねばならぬ。此處に支那問題の困難があると同時に、亦此處に支那國民が意識的に無意識的に進みつゝある方向が窺はれるのである。支那人の排外思想は今日に於ては一種の經濟思想から生れたものである。經濟思想と國家思想との混合したものである。

第二に眼につくことは、軍閥の時代が漸く去りつゝあるといふこと是である。農業を大部分の生業とする支那國民は由來平和的である樣に思はれる。そして民衆の教育が普及せられ、その革命的の覺醒が行き渡るに從て、軍閥なぞの威嚇や專制は

行はれなくなるのは當然である。況んや古來自治的生活に慣れた支那民族にして一朝其社會的地位に眼ざめたならば、彼等は單に軍閥等の僞政に從はぬばかりでなく、恐らくはボルシエギズムにも、フアスシズムにも滿足せぬであろう。『日出而作。日入而息。鑿井而飮。耕田而食。帝力何有於我也。』とは堯舜の時代から支那民族の歌ふ處ではなかつたか。『女は澗中の水を汲み、男は山上の薪を採る、縣遠くして官事少く、山深くして人俗敦し、財あれども商を行はず、丁あれども軍に入らず』とは詩人白樂天の詠ずる處ではないか。外來の帝國主義を排し、軍閥を斥け、而して共産派をも驅逐した支那革命は眞に自由な自治、協同の社會生活を實現するまで停止せないのではないか。鼓腹擊攘の歌を唄ひ、老莊を誦し、白居易を愛吟する支那民族は、到底マルクシストの强權的集中主義には共鳴し得ぬであろう。

○

南京政府の一重要人物であつた李石曾は筆者の在佛中、態々遠方から來訪せられて一日の閑談を共にしてくれた人であるが、彼は古來の世界人類革命の進展を四階級に分ち、ロシヤ式の社會組織、政治組織は共革命進展の最優のものでなく、無政府的自治協同の社會生活こそ最優最高のもので、即ち世界革命進展の第四階級に屬するとなす。南京政府の文相の地位にあつた彼は、雜誌『革命』中に論じて曰く、『勞農ロシヤ式の共産革命が、決して世界革命史中で最も進化した層序でないことは前述の通りだが、更に重要な事は、プルウドンとマルクスの主義の相違であつて、ロシア共産黨はマルクスの說により『階級闘爭』『無産專制』『政府主義』『集權主義』『政權奪取』等を主義手段としてゐる。プルウドンに於ては『全民主義或は大同主義』『互助主義』『無政府主義』『地方主義』『分權主義』『社會組合』等を主義手段とするのである。マルクスの主張する階級專制の國家は、完全に政府强權の下に統治せられ、プルウドンの主張は、全民の自由勞働であつて政府の性質は漸次最低限度に減縮されて行くのだ。……私が武漢の共産黨運動は第三層革命であつて、上海（及南京）の護憲運動は第四層革命だと言ふのは、此二者を比較して性質が固より明瞭だからである。もし左派右派を以て優劣新舊の代名詞とするなら、即ち武漢の共産革命は右派であり、上海護憲革命は左派であることも明かである。云々』

ちよと此文字を讀むと聊か我田引水のきらひはあるが、久しく佛國にありてプルウドンの思想に傾倒した李君の主張としては、極めて眞面目なものと言ひ得るであろう。今後武漢と南京

とが如何に融合して行くか、是れは今日卒然として臆斷する譯には行かないが、かの共産派の驅逐を以て單に革命の逆行なりと見做す日本人一般の見方は蓋し過りであらう。無産階級の獨裁などといふ舊式な手品を使つて、新たなる專制特權階級を造る位なら、何で生命までも賭して革命なぞに耗からうか。

○

南方國民黨が共産派を放逐したのは、又、決して軍閥の意見に基いたのでは無い。もともと武漢政府もロシヤ側の援助を受けることが好都合である間は、共産分子に活動せしめたであろうが、それが却て不便を感ずる場合には之を放逐するのである。武漢の第一人者汪兆銘君の如きも永く佛國に在り、ロシヤ共産革命が如何なるものなりや位は能く知悉してゐる筈だ。實を言へば、共産主義の如きは今日の支那に於ては問題ではないのである。革命軍が武漢兩都を占領して盛んに活躍してゐた時にすら、英國の『マンチエスター・ガアデイヤン・ウヰクリイ』の通信者は、其革命政府が決して共産主義に支配されてゐないことを書き送つて居る程である。

•

李石曾の解釋する世界人類革命史の四階段と、支那革命の現在が其如何なる階級に屬するかといふ應用論とは些か興味がある。彼の四階級即ち四層序とは、

第一層、君主革命、宮廷革命、專政革命等
（ロシアの專政も亦此の中の一狀態である）
第二層、民權革命、國家革命、政治革命等
（民族革命も亦第二層の狀態にある）
第三層、階級革命、財産革命、經濟革命
第四層、民生革命、社會革命、大同革命

是である。ロシア革命は第三層に屬するが、同時に第一層の專政、第二層の民權革命にも屬する。支那自身の革命は何れに當るかといふに、李君曰く『中國は辛亥以來十六年の今日に至る間に幾千年かの革命の層序を經過したと見做すことが出來る。戊戌の變法で、帝后の爭が起り、第一層を成し、辛亥の改元、帝制の轉覆は第二層に屬し、武漢政府の赤化は第三層に屬し、上海の護憲運動、全民革命を擁護し、民生主義を進展させたのは第四層序に屬する。云々』此最後の一段に至つては少々手前味噌に過ぎるの觀あり、『武漢の赤化』を言へる點は些か誇張に相違ないが、是は宣傳文としての筆の舞ひに過ぎぬであろう。李君の眞意は恐らく孫文の三民主義の名に依てプルウドンの自由聯合主義を行はうと希ふものであらう。

○

然らば李石曾君の此希望は果して可能性を持つてゐるか。支那の實狀を見るに、支那に於ては、未だ右の第三層の革命も、第四層の革命も、行はれては居ない。李君等は此第四層の革命を直ちに斷行しやうと努力してゐるのであらうが、此種の革命は大衆の覺醒と訓練とを待つて初めて行はれる事であつて、容易に實現せらるべきものではない。併し乍ら、支那に於ては、殊に現時の形勢に於ては、マルクス主義の双生兒たるボルシエヰズム的獨裁制及び、ファスシスム的獨裁制の兩者は、共に實現することは困難であらう。そして支那の國民性と其社會生活とに最も適應するものは李君の祖述するプルウドン主義であらう。相互扶助的自治聯合主義であらう。

若し支那民族が意識的に又は無意識的に、自らたる趨勢として、以上の如き方向に進みつゝあるものとすれば、隣邦たる日本の爲には甚だ幸ひと云はねばならぬ。蓋し相助的自由聯合主義の社會的國家は決して侵略的方策を取らないからである。そして其四周の隣邦は安心して之と交渉し、經濟的、藝術的、學術的、の相互扶助關係を永續することが出來るからである。

此隣國支那に於て、或軍閥にもせよ、又は他の革命政府にもせよ、或は又それが日本政府の援助する政府にもせよ、絕大なる武力によつて獨裁的中央權力を確立することは、吾々に取つて直ちに恐るべき脅威となるべきである。隣邦の平和生活は其爲に直ちに不安を感ずべきである。そしてそれは隣邦の不安であるばかりで無く、支那民族の文化の爲にも甚だ不幸と言はねばならぬ。世界に比類なき豐富な、そして光輝ある文化と傳統とを持つた支那は、宜しく其古來の傳統の中から新らしい生活を汲出して、それに依て新文化を建設すべきである。李石曾君が祖述するプルウドンの自由聯合主義は堯舜以來の支那思想の中に連綿として傳統を成して來た一理想の變型に過ぎぬと私は信じてゐる。玆に支那に於けるプルウドン主義の强味がある。

○

併し、支那は廣大な聯邦的社會である。如何に自由聯合主義と言つても、此大社會を一主義の下に連結することは困難であるかも知れない。それは長い間の教育と訓練とを要する難事業であるに相違ない。故に隣邦たる日本は單なる目前の利害にのみ眩惑しないで、隣國の爲めに永久の對策を樹てゝ之を援助せねばならぬ。其れは支那の爲のみならず實に日本自身の爲なのである。近代伊太利の先覺マヂニイは曰つた『難攻不落の國境

五　大局論と利害論との

要塞よりは親しい善良な隣國を』と。

(五) 大局論と利害論との衝突

小村俊三郎

一

日本は支那に何を求むるか、即ち支那がどうなることが、日本のために望ましいか。ツマリ支那がどうなることを日本は希望するのか。これは時節柄殊に有益な命題であらう。これまでの支那論は、支那は一體どういふ國か、その將來はどうなるかとか、支那の國民革命とは、何を意味するか、南北の關係はどうなるかとか、謎の解き合ひのやうなことばかりをやつて來て、結局差當りでは、どの見方も完全には當らず、そのために、支那の喧嘩が、日本に移つて來たことは、これまでで も、度々あつた。しかし、支那の運命は、即ち日本の運命である以上、いやでもおうでも、その觀察は必要だが、しかし、退いて冷やかに、日本自身の支那に對する希望が一體何であるかを設問し、明白にこれを認識しさへすれば、支那に對する態度も政策も、自ら一定不變のものとなり、ツマラヌ內輪喧嘩をする代りに、支那がままにならうとなるまいと、支那を中心に、これを援助し、併せて世界列國を指導し、いはゆる自主外交の根本方針を確立することが出來、これまでのやうに、ジッグザッグや、一進一退で、見苦しい以上に、大損な眞似をせんでもすむ筈だ。

しかし、日本から支那に對する希望があれば、支那からも日本に向つての希望もあらう。その調和一致が出來さへすれば、支那の內政を外にして、少くとも、その國際關係上、親善提携が出來る勘定だ。それがためにも、日本は日本の希望を遠慮なく支那に向つて明かにし、支那も同然なことを日本に對してすることが必要だ。今日まで、それが十分に出來てなく、その上に、双方共にその希望に、同情をもち、洞察をも加へて、互にこれ

を諒解する努力に缺けてゐた。その妨げをした主なる原因は、外でもない理想と現實との衝突だ。

凡そ個人が社會に立つにしても、國家が世界に立つにしても、共に困るのは、この理想と現實との不調和であらう。これさへなくば、人生に煩悶がないと共に、國際關係にも困難は起るまい。この二つは、これを日本と支那との關係でいへば、また大局の觀察と目前の利害との二つに分れる。日本は支那に對し、支那は日本に對し、その不一致のために、互に相爭うてゐる上に、日本內部でも、またこれがために相爭うてゐる。可笑しな現象だが、同じ支那に在住し、またその問題に關係してゐる本國人の內でも、目前の利害に捉はれやすい上海、靑嶋や、滿洲等にをるものと、北京や東京の如く、大局の觀察をしやすいものとの間だには、やゝ明白にその意見の差を認むることが出來る。尙可笑しい事には、支那の南方派が、共産主義を借りて來たり、過激な排日手段等をやれば、そのお蔭で日本の大局論者が困惑するが、利害論者は勿論猶更困惑し、これがため、ついに出兵論などを高唱し、北方派はまた殊更に親日を裝うて、これを利用する。その結果、南方派の方では、またこれを以て、いはゆる資本主義と、帝國主義との提携を宣傳し、あつらへ向きの排日材料に供する。かくて理想と實際との不一致、大局と利害との不調和は、どこまでも、日支兩國の國際關係を最惡の道へと導びいて行く。

二

然らば、その理想上、大局上から見た日本の支那に對する希望が、どんなものであるかといふに、それは勿論、支那自身の希望そのものに一致し、その間に何の不調和をも認めぬのみか、もし、これに反する利害の衝突さへなくば、その相一致した希望は、容易すく實現されやすい位のものである。それは大體どんなものであるかといふに、第一日本は支那の自由獨立を希望し、これを援助したい。その自由獨立のためには、先づその平和統一を回復し、民主的政治を確立し、近代的國家を組織することを必要とする。そのために、これを妨害する北方軍閥が、この大勢に屈服するなら兎に角、然らざる以上、國民革命はやむを得ざる主張運動として、これに同情し、また道德的援助をも與へたい。この目的に反した北方援助は勿論、その疑惑を招くやうな內政干政にも反對する。

また以上は主として、對內問題であるが、支那が自由獨立を回復するためには、その對外問題として、いはゆる不對等條約の改訂には、その方法が合理合法である限り、日本は率先し

て、關稅法權その他の條約を改訂し、その不對等條約を自然に廢棄せしむる。しかし、その改訂と廢棄とは、合理合法を條件とするのであるから、支那の國狀がこれに一致することを要するが爲にも、その平和統一を希望し、平和統一のために、その國民革命の成功を期待する。かくして、支那の自由獨立を回復すると共に、日本も支那に對する平等なる國際關係を回復し、出來得べくば、政治、國防、經濟上の親善提携により、進んで世界の平和文明のために、努力したいと思ふのである。

これは日本國民の理想であり、また支那國民の理想でもある。大局の上には、双方の希望は、相一致するところはあつても、衝突するところはない筈である。凡そ箇人として、その理想に生きねばならぬ如く、一國としても、これに生きねばならぬ。同様にまた他の國家に對して、その理想に生くることを助けてやらねばならぬ。ましてわが日本は、明治維新の前後から、支那の面する如き境遇を經、苦き經驗を嘗めて來てをる。今隣國支那の境遇に同情し、その經驗を移して、これを助くることは、わが國家最高の義務であり、理想であらねばならぬ。まして、これにより、支那の自由獨立と、その平和統一とを回復し、これにより、政治に經濟に將た國防に、兩國相提携して、共に世界の平和文明に努力することは、即ち世界の利益であると共に、兩國の利益である。何となれば、支那の革命が成功して、その內亂が終熄し、日支兩國の力を併せて、世界列國に對しさへすれば、東洋對西洋の問題は、自然にして解決し、その他の有色人種も、自然にして白色人種の壓迫から免れ、世界の平和と文明とに、新たなる生命を與へ、新たなる局面を開き得るからである。この理想と大局との爲には、凡そわが日本國民は、プロでも、ブルでも、今日までのところ、極端な國家主義者を除いては、大體これに反對はない筈である。

三

然るに、支那の現狀が、日本のこの理想論と大局觀とを去ること遠く、中々これを實現せられそうもないから、こゝに實際と利害との衝突がます〳〵、ひどくなつて來る。實際と理想とは、元來相容れ難いものであるけれども、日本と支那との關係は、必ずしもそうでない。なぜかなら、日本はその生存の必要上、經濟的利害の上において、支那に求むるところが多いと共に、支那もまたその存立の必要上、政治的大局の上において、日本の助けを借らねばならぬところがあるからである。たゞ支那今日の現狀では、日本との間に、この兩者を一致せしむる望みが遠いのみでなく、支那は却つて排日暴動その他によつて、日本に迷惑

を及ぼしてをる。故に支那にとつて必要なことは、一日も早くその國民革命と、これに伴ふ日本の希望を實現し、これに反し、日本の迷惑となるやうな排日暴動その他の手段を愼しむとである。同時に日本としても、支那が二千年以來の革命を成就する困難に加ふるにヨーロッパ本部以上の面積と、それ以上の人口を有し、日本が掌の上で明治維新の革命をやつたやうには行かず、又凡そ革命の際には、何れの國、何れの時代でも、多少過激の手段に出づるとは、恰も明治直前のわが國同樣、或は已むを得ぬ事情でもあるとを、諒恕してやる必要があらう。

それは兎に角、日本としては、大局の理想以外、支那に對して、別に實際の利害がある。それは明治維新以後から、今日に至るまでの間に、日本の地位と、世界の情勢に從つて多少の變遷もあるが、大體政治上、國防上、經濟上に關したものである。

第一に政治の利害に關しては、前に述べた世界並びに極東の大局上、支那との間に、政治的諒解と提携とが出來さへすれば、過去において、兩國の間に日淸戰爭も起らず、また支那のために、日露戰爭をやり、日英同盟をやる必要もなかつた筈だ。その當時から今日まで、日本の賴みにならぬのみでなく、反對に禍根となるがために、日本はやむを得ず、獨力を以て、世界に當り、自己の獨立と共に、東洋の平和を維持して來た。そのためにまた、これに必要な國防と、その負擔をもして來た。そしてその國力の不足を補ふためには、やむを得ず、歐米列强の眞似をして、同胞の支那に臨み、また彼等の機嫌を損ぜぬため、屈從外交をも忍んで來た。支那がシツカリしてゐて呉れさへすれば、こんな苦しみもせず、支那と提携して、あべこべに自主的外交をやつて、歐米をヘコますのに、支那が何時までも今のやうでは、政治的提携など、到底思ひもよらない。それどころでなく、ロシアの共產主義を眞似、ボロヂンなどを引張つて來て、漢口事件や南京事件などをやり、日本國民を憤慨させ、政府を困難の地位に陷れる。これでは折角これまで、自由主義、平和主義的方針により、自主的外交をやつて來たのが、今度は已むを得ず、再び列國との協調を回復し、英國の强硬政策を學び、山東にでも、長江にでも、出兵でもする外仕方がない。支那は、國民革命や、平和統一どころか、責めてこの上隣國に迷惑をかけぬやうにしてもらひたいといふのが、現在における實際論者の考へであらう。

第二には、國防上の利害であるが、兎も角、世界の形勢はまだどう變化するか分らぬ。それ故、日本は現在でも尙過大の國防を維持する。それも支那が現狀のまゝである限り、その

國防は、一方に極東の大局と、その平和を維持する必要からだと信じてゐる。然るに、日本はいふまでもなく、食料と原料に不足し、持久戰と經濟封鎖に堪ることが出來ぬ。支那との政治同盟の上に軍事同盟が出來れば、その上はないが、そんなことは、今の支那に望まれぬ上に、また今の時代にははやらぬ。たゞ戰時に支那大陸からの食料原料補給の道を、確保して置きさへすれば、先づ可いといふのが、わが海陸軍人の考へであらう。そのためには陸軍ばかりでなく、海軍でも、支那大陸をも、自國の領土同樣に、その作戰計畫内に入れてをる。現に最近ジュネーヴの海軍軍縮會議に臨む前、わが海軍が勝手に決めた戰略の最少限度即ち現有海軍力維持の論據には、萬一有事の時には、支那海における輸送の安全を保障するために、現有の補助艦艇が必要だといふとを、新聞にも書かしてゐた。これ等は、支那から見て、大に意見のあるところであらう。しかし、必要の爲には、何ものをも犧牲にする。戰爭の爲には、何ものをも見逃がす譯には行かぬ。支那と日本との間には、こゝにも大なる危險を伏在する。われ等も、然らば、支那が日本の敵國と同盟し、日本への供給を絶つたなら、わが海陸軍はどうするかと、聞きたいが、兎に角、日本の國防論者には、かゝる希望が存在してゐる。

四

第三には、勿論經濟上の利害である。これは前述國防の必要の外に、略ぼ（一）通商貿易、（二）企業投資、それに（三）滿洲の特殊關係の三ツを含んでをるが、この說明に入る前に、多少の前置がいる。そも〳〵、わが生存と支那、それから食料原料の供給が、如何にわが國家經濟、國民生活に必要であるかは、こゝに詳述するまでもあるまいが、兎に角、わが國民生活からいつても、日本のそれは、支那から離れては、成立し能はぬ。鐵、石炭、鹽、棉花等の大きなものは置いて、滿洲の豆粕であるが、年々一億萬内外を輸入するそれは、米、麥、桑、茶その他の肥料となり、日常の主要食料は愚か、主要輸出品も、これなくては立行かぬ。大豆もその通り、味噌、醬油、豆腐の製造も、大部分は支那からの輸入によつてをる。もつとヒドイとは、麩や麹や糠の輸入であるが、これも家畜の飼料の外、醬油その他の原料に使用され、日本人は、牛馬や豚と共に、支那の糟粕を嘗めてをる形ちである。次ぎに雞卵であるが、これは上海玉子の名で、知られてをる通りであるが、何ぞ知らん、日本の地玉子も、大部分は、支那輸入の雜穀を喰ふて、産まれるのである。モガや少女が、支那服をその身に纏ふまでもなく、

わが日本人の血液そのものには、支那の農産物を通じて、支那人のそれと同樣のものが流れてゐる。

次に國家經濟の點からいへば、大體わが國の産業貿易は、アメリカに年々七八億萬圓の生絲を賣り、略ぼ同額に近い棉花を、印度の外、主として同國から輸入し、これを紡織して支那その他に輸出し、産業も貿易も、棉絲棉布を以て基幹とするが、就中これが一國と纏まつて、年々一億乃至二億圓の輸出超過を見る國は、たゞ支那だけであつて、わが國際貸借の上に、それ程大切な國は勿論ない。で、單にわが國民生活、國家經濟の上からいへば、日本は支那大陸の瘤のやうなものであつて、その營養によつて、生存してをるといつても、過言ではなさそうな位である。

かようなことを露骨に並べ立てゝ來れば、それだから支那が附上ると、叱られるに極つてゐるが、然らば何よりもこれを雄辯に物語る總べての統計を抹殺する外はない。それ程、不通の論こそあるまいと思ふ。經濟上にこそ、日本は支那の供給に依賴するが、支那といへども、從つて日本をその輸出第一の顧客として、その國富を增進するのであるが、その外に、政治上、軍事上では、將來はいざしらず、今日までは、日本なくしては、支那は或はその存在を保たなかつたかも知れぬ。先年の大地震に、日本三島が太平洋中に沈沒したと聞き、支那人中内心に、日本を以てその要塞と心得てゐたものは、悲鳴を擧げたといふ話も傳はつてゐた。で、われ等は、寧ろ双方から、この共存共榮の事實を、赤裸々に諒解してこそ、始めて眞の親善提携は成り立つものと思ふ。

五

で、第三の經濟上の希望を說明するに先立ち、その前置が可なり長くなつたが、兎に角、わが國民は、自覺的にか非自覺的にか、これについて、非常な希望をもつてをる。それは即ち（一）通商貿易で、その中には勿論航海の自由、それも内河ではあるが、海とも同然である揚子江、その他の沿岸航路をも含んでをる。この通商航路の自由な發達については、何故にわが國民の支那に對する希望が、熾烈であるかは、前段の前置で、すでにこれを盡してをらうから、その理由は、これを略するが、たゞわが本國の國民が、支那との經濟關係を重視すると此の如く、そして、凡そ通商貿易は、相手國の人氣を肝要とするのに、これ等の希望と必要とに反して、支那在留の日本商人から、往往にして出兵その他の强硬論が起るのは、果して何の爲か。殊に通商貿易の利害と、投資企業や、製造工業の利害とは、一方

が顧客本位であると、一方は必ずしもさうでないとにより、多少その立場を異にする筈であるのに拘らず、常にこの二つが一緒になつて、強硬な出兵論などを、內地に向つて放送して來る。こゝにも大なる理想と現實との矛盾がある。矛盾だけなら兎に角、これが爲に、根本の理想を破壞される恐れがある。しかし、支那は、その內亂の渦中にあり、その騷動の槍玉に揚げらるゝ彼等の立場も、考へてやらねばなるまい。

次には（二）の投資企業がある。これは元來（一）の通商航海以上に、先蹤白人國の眞似をしたのが始めであつて、主として日清戰爭後のコンセッション、ハンティング時代に始まり、四國團成立を絕頂とした。日本の資本組織が完備し、工業智識の發達した以上、支那の無限な資源を開發し、市場を擴張するために、こゝに向つて發展せんとするのは、先蹤の白人以上、當然の勢であらうが、しかし、引續く內亂のため、借した金の利子も拂はず、企業の頓挫は勿論、紡績工場の如きは、年々のストライキに、その引揚げを決心してをる位である。これにも、支那では異論があらう。また紡績業の如き、支那の工業が進歩せなかつた時代は兎に角、長く外國の工場が持續し得る筈もあるまい。しかし、これを自然の競爭の結果に委するなら、兎に角、今日のやうな事態では、彼等の立場をも諒とせねばならぬ。元來日本からいつても、通商貿易は、わが國家經濟の上に、全體大局の利害があり、紡績業の如きは、直接には一部資本家の利害に過ぎない。さりながら、これ等の企業は、その工場と土地との關係上、最も內亂と騷動との影響を恐れる。故に出兵論の如きは、常にこれ等の紡績業者の投資企業家から起り、支那の顧客を專要とする貿易業者までが、これに附隨して起つのを例とする。これも支那には言分があらうが、われ等も、彼等の境遇には同情せずにをられぬ。然らざれば、日支大局の將來が、この目前のために、犧牲とせられる虞れがある。わが山東出兵の如きは、即ちその一例である。

（三）には所謂滿蒙の特殊關係がある。日本が露國と戰つたのは、主として、日本の存立のためであつて、支那のためではなかつたが、しかし、その戰爭には、鉅億の財を投じ特に滿洲には、日清役と共に、前後兩回同胞の血を流したから、特殊の歷史と感情とを有する。それがため、特殊地域、特殊關係の觀念も生れて來る。その上に、滿洲が、歐洲におけるベルギーの地位の如く、將來にも尚日本及東洋の脅威となる恐れがあるから、獨り、これを過去の紀念とのみ見る譯には行かぬと、わが國民は考へてゐる。それがために、やゝともすれば、ロシアを滿洲より退けて、これを支那に還付した日露戰爭と、日支協定

の精神を忘れ、條約上の權利を逸して、滿洲を日本の領土の如く、考へるに至る心配もある。それゆゑまた特殊地域から、特殊關係を云々し、恰も戰爭の補償を、滿洲の土地から取返すやうに、いはゆる滿洲の開發を云々する。殊に最近においては、わが國內經濟の行詰りから大いに支那本土に發展せんとしても、その現狀は前述の如くで、かた〴〵滿洲に向つて、その發展の餘地を求めんとするのは、大勢上には已むを得ぬ結果であらう。そしてまた不幸なことには、張作霖がその滿洲の主人公であるがゆゑに、さなきだに、日本と彼れとの關係に、疑惑の念が深められる。

兎に角、かくして滿洲と支那本土とを切離すといふやうな亂烈な議論が唱へられるのであるが、支那から見たら、たとひ、張作霖一派でも、餘り善い心持ばかりはしまいが、われ等から見ても、滿洲も大事であるとしても、支那本土は猶更大事である。滿洲と本土との日本に對する貿易關係は、前者は豆粕その他輸入超過で、本土だけが輸出超過である。貿易は三度の飯の如く、利權はトニックのやうなものである。ゆゑにたとへ滿洲を取つても、支那を失へば、わが國は喰へぬことになる。まして、滿洲でも排日、本土でも排日では、人參飲んで首くゝることにもなるまいが、兎に角わが日本國民中には、さう考へるものが少くない。ゼネラル田中の政友會內閣は、現にそんなやうなことを政策に實現せんとしてゐるやうである。

六

以上に述べて來たやうな譯で、理想上大局上では、日本と支那とは、一致こそすれ、背馳する心配は餘りないのであるが、支那の現狀が今日のやうで、その希望に達する見込がないのみでなく、反對に種々の脅威を受くる爲に、現實的利害的方面からは、寧ろ衝突の危險が多いやうに思はれる。われ等は餘りこれに意見を挾むことを、こゝではしないが、しかし、これを支那の國民側から言はせたら、種々の反對意見があるであらう。同時に以上の實際的立場に立つ日本人から見たら、われ等のいふより、更に猛烈な非難もし、攻擊もするであらう。現に彼等の中には、たゞの非難攻擊ばかりでなく、それ以上に實際の强硬政策を以て、これに臨まんとしてゐるものもある。そうなつたら、理想と大局とはメチャ〳〵だが、それは獨り日本の不幸であるのみならず、第一に支那の不幸であるから、支那の人たちも、その原因につき、篤と考慮し反省した方がその利益であらう。

しかし、最大最高の希望は、勿論理想上の大局論であり、そ

れも支那の覺悟と努力、日本の決心と援助とによつては、必ずしもその目的を達することが困難でなく、又如何に困難でも、何時かは解決せねばならぬ問題である。それさへ、解決出來れば、他の現實的利害の問題も、また自らこれも共に解決が出來る筈である。それをたゞ待つてもをれぬから、支那自身がその問題を解決するまで、日本はなるべく、これを刺戟し、これを興奮せしむるやうなことをせず、責めて兩國の國際感情とその關係だけを、無事に維持して行く外はあるまい。責は双方にある。支那は反省し自制し、日本は同情し自重せねばならぬ。然らざれば、現實の利害のために、理想の大局を破壞し、これを犧牲にする外はない。生きた人間同士のことであるから、恐らくそれを免れぬかも知れぬ。しかし、假りに高遠な理想を措き、實際の利害だけから考へても、結局日本が支那に希望するところと、支那が日本に希望するところと、何れが多いか。從つてその利害得失は、何れが大きいか。支那は日本がなくても立ち行くかも知れぬか、日本は果してそれが出來るか。要するに、目前の利害論者は、算盤の桁を彈き、大局の理想論者は、その全盤を彈くのであるが、何れにしても、人間も國家も、算盤勘定ばかりで、生くるものではなからう。一國の中、一人や二人やは、自國の爲隣國の爲、その理想に殉するものがあつても可からう。

芥川氏の文學を評す

正宗白鳥

（一）

「處女作に於て、その作者の一生の作風は決定されてゐる」

さういふ意味のことを、ウェルスが云つたさうである。芥川氏は、氏がさほど感心してゐないウェルスについても、この言葉だけは同感であると云つてゐたのを、私は何かの雜誌で讀んだことがある。

私が最初に讀んだ、谷崎潤一郎氏の作品は、「新思潮」（？）に掲げられた「象」であつた。芥川龍之介氏の作品で、はじめて私の目に觸れたものは、「孤獨地獄」であつた。この二つの作品は、それ〴〵に後年の二氏の藝術を豫定させてゐるやうである。

夏目漱石に激賞されたゝめ、芥川氏の出世作となつたといふ「鼻」は、早くもこの作者の特色を現はしてゐて、人間の心理洞察の目と、諧謔（ユーモア）の才を、そこに認めることが出來て、いかにも漱石の好みにかなつてゐるのであるが、私としては、

この作者の他の一面を現はしてゐる「孤獨地獄」の方に心が惹かれた。

私は、年少の新作家のこの小品を讀んだ時に、興味を覺えたのは、舊套を脱した藝術の萌芽をそこに認めたゝめではなかつた。斬新な技巧の光に打たれたゝめではなかつた。作中に語られてゐる話が面白かつたのだ。作者が母親を通して又聞きをした大叔父の話を、簡單明晰に、作者自身の主觀をまじへて述べてゐるのが、私の心にピッタリ嵌つたやうに感じたのであつた。

彼れの大叔父といふのは、幕末から明治初年へかけての大通人山城河岸の津藤のことで、この津藤が吉原のある遊女屋で偶然近づきになつた僧侶の心境を語つたのが、五十年後に、年少作家龍之介の若い心に觸れて、かの小品となつた。

僧侶禪超は大通津藤に向つて語つてゐる。

「佛說によると、地獄にもさま〲あるが、凡先づ、根本地獄、近邊地獄、孤獨地獄の三つに分つことが出來るらしい。それも……大抵は昔から地下にあるものとなつてゐたのであらう。唯、その中で孤獨地獄だけは、山間曠野樹下空中、何處へでも忽然として現はれる。云はゞ目前の境界が、直ぐそのまゝ、地獄の苦艱を現前するのである。自分は二三年前からこの地獄へ墮ちた。一切の事が少しも永續した興味を與へない。だから何時でも一つの境界から一つの境界を追つて生きてゐる。勿論それでも地獄は逃れられない。さうかと云つて境界を變へずにゐれば、猶苦しい思ひをする。そこでやはり轉々としてその日〱の苦しみを忘れるやうな生活をして行く。しかし、それもしまひに苦しくなれば、死んでしまふ外はない。昔は苦しみながらも、死ぬのが嫌だつた。今では……」

ここまで語つて、禪超はまた三味線の調子を合せながら、低い聲で云つたので、最後の句は、津藤の耳には入らなかつたさうである。

年少作者龍之介は、この小話を述べたあとに、自己の感想を添加して、かう云つてゐる。

「一日の大部分を書齋で暮してゐる自分は、生活の上から云つて、自分の大叔父やこの禪僧とは、全然沒交渉な世界に住んでゐる人間である。又興味の上から云つても、自分は德川時代の戲作や浮世繪に特殊な興味を持つてゐる者ではない。しかし、自分の中にある或心もちは、動もすると孤獨地獄と云ふ語を介して、自分の同情を彼等の生活に注がうとする。が、自分はそれを否まうとは思はない。何故と云へば、ある意味で自分も亦、孤獨地獄に苦しめられてゐる一人だからである」

私は、かつてこの小話を通して、幕末の僧侶禪超の心境を想望したのであつたが、今讀直すと、この小品が、暗示に富んだ筆で津藤と僧侶とを描寫してゐるのに氣づいた。母親から傳聞したたゞのお話の記錄ではないのである。

思ふに、この材料を充分に驅使して、僧侶禪超の生涯を、もつと具象的に細叙したなら、遊廓の背景や脇師の津藤の通人振りと共に、絢爛にして淒慘なる名作が現れた譯であつたが、芥川氏は、その短い人生行路に於て、さういふ材料を生かすほどの實驗を心身に吸收し得なかつた。……氏はかの小品に於ては、禪超の心の一端を瞥見して、ある理解を試みたのに過ぎなかつた。津藤の言葉として、「これを嫖客のかゝりやすい倦怠(アンニュイ)だ」と解釋したりしてゐる。「酒色を恣にしてゐる人間がかゝつた倦怠は、酒色で癒る筈がない」とも云つてゐる。そしてその後の十數年の作家生活の間にも、この材料を生かすほどの人生味は身に體し得なかつた。

「自分も亦、孤獨地獄に苦しめられてゐる一人だ」とは、年少者が氣まぐれに口にする感傷語とばかりは思はれない。芥川氏の腦裡に殘存してゐた感じであつたらしいが、その感じが歳を取るにつれてどう働いてゐたのであらうか。作品の上にどういふ風に現はれてゐたのであらうか。

(二)

小品「往生繪卷」も「孤獨地獄」と同じやうな意味で私には面白かつた。……五位の入道は、狩りの歸りに、或講師の說法を聽聞して、如何なる破戒の罪人でも、阿彌陀佛に知遇し奉れば、淨土に往かれると知つて、全身の血が一度に燃え立つたかと思ふほどに、急に阿彌陀佛が戀しくなつて、直ちに刀を引拔いて、講師の胸さきへつきつけながら、阿彌陀佛の在所を責め問うた。そして、西へ行けと教へられたので、彼れは、「阿彌陀佛よや。おおい。おおい」と物狂はしく連呼しながら、西へ／＼と馳せてゐたが、やがて、彼れは波打際へ出て、渡るにも舟がなかつた。「阿彌陀佛の住まれる國は、あの波の向うにあるかも知れぬ。もし身共が鵜の鳥ならば、すぐそこへ渡るのぢやが、……しかし、あの講師も、阿彌陀佛には、廣大無邊の慈悲があると云うた。して見れば、身共が大聲に、御佛の名前を呼續けたら、答へ位はなされぬ事もあるまい。されずば呼び死に、死ぬまでぢや。幸ひ此處に松の枯木が、二股に枝を伸ばしてゐる。まづこの梢に登るとしようか」と、彼れは單純に決心した。そして梢の上で、息のある限り、生命の續く限り、「阿彌陀佛よや。おおい、おおい」を叫んで止まなかつた。……彼れはその梢の上でつひに餓死したのであつたが、その屍骸の口には、まつ白な蓮華が開いてゐて、あたりに異香が漂うてゐたさうである。

この小品の材料は、この作者が好んで題材を取つて來た今昔物語とか宇治拾遺とか云ふやうな古い傳說集に收められてゐるのであらう。この傳說が作者の主觀でどれだけ色づけられてゐるのか分らないが、私はこの小品を「國粹」といふ雜誌で讀んだ時に、非常に興味を感じた。ことに、「孤獨地獄」と對照すると、藝術としての巧拙は問題外として、私には作者の心境が面白かつた。孤獨地獄に苦しめられてゐるある人間が、全身の血を湧立たせて阿彌陀佛を追掛けてゐると思ふと、そこに私の最も親しみを覺える人間が現出するのであつた。しかし、これ等を取扱つてゐる芥川氏の態度や筆致が、まだ微溫的で徹底を缺き、机上の空想に類した感じがあつたので、私は龍之介禪師の熱意を感じるほどには至らなかつた。

私は、この小品の現はれた當時、その讀後感をある雜誌に寄稿した雜文の中に書込んだ。……五位の入道の屍骸の口に白蓮華が咲いてゐたといふのは、小說の結末を面白くするための思付であつて、本當の人生では、阿彌陀佛を追掛けた信仰の人五位の入道の屍骸は、惡臭紛々として鴉の餌食になつてゐたのではあるまいか。古傳說の記者はかく信じてかく書きしるしてゐるのかも知らないが、現代の藝術家芥川氏が衷心からかく信じてかく書いたであらうと私は疑つてゐた。藝術の上だけの面白づくの遊びではあるまいかと私は思つてゐた。

かういふ私の批評を讀んだ芥川氏は、私に宛てゝ、自己の感想を述べた手紙を寄越した。私が氏の書信に接したのは、これが最初であり最後でもあつたが、私はその手跡の巧みなのと、內容に價値があるらしいのに惹かれて、この一通は、常例に反して保存することにした。今手許にはないので、直接に引用することは出來ないが、氏は、白蓮華を期待し得られるらしく云つてゐた。「求めよ、さらば與へられん」と云つた西方の人の聖語を、五位の入道が講師の言葉を信じて疑はなかつたと同樣に、氏は信じて疑はなかつたのであらうか。

私はさうは思はない。氏は、あの頃「孤獨地獄」の苦をさほど痛切に感じてゐた人でなかつたと同樣に、專心阿彌陀佛を追掛けてゐる人でもなかつたらしい。芥川氏は生れながらに聰明な學者肌の人であつたに違ひない。禪超や五位の入道の心境に對して理解もあり、同情をも寄せてゐたのに關はらず、彼等ほどに一向きに徹する力は缺いでゐた。

（三）

小說家とてしの芥川氏は、新技巧派の一人として認められてゐた。氏は早くから文章家らしい文章を書いてゐて、幼稚なところも蕪雜なところもなかつた。私は、新潮社出版の現代小說全集中の「龍之介集」を通讀した時に、數十種の作品のうち、一つも出來損ねのないのに感心した。現代の文壇では稀れなる名文家であると思つた。しかし、有島武郎の作品

に清新なる技巧を見る如くには、芥川氏の作品から嶄新な技巧を感受することは出來なかつた。夏目漱石の作品のやうに、明敏なる頭腦をもつていろ／＼に趣向を凝らしてゐるに關はらず、文章は在來の日本の文章のやうである「紅毛人の文學」に熟通してゐるらしいこの作者も、自己の文章には異國の情趣をあまり吸收してはゐなかつた。……私は、文章の形ばかりを云ふのではない。形は新しさうに見えても、新しい生命がどれだけ通つてゐるかと考察してゐるのである。

私は、氏を名文家として推讃するに躊躇しないが、傑れたる新技巧家であるとは思つてゐない。それから、年少にして孤獨地獄を感じてゐた芥川氏も、人間を見る目に於ては、つまりは平凡な有振れた人情を一歩も出でゝゐなかつたことを、氏の作物を讀みつゞける間に痛切に感じた。……これは、必しも氏を非難するのではない。氏は、平凡な人情を脫却して、人生宇宙の現象を見ようと、いくらか藻搔いてゐたらしいが、その態度を徹底的には持し得なかつた。それだからこそ、氏の作品が世に迎へられたのであるし、古今の多くの文豪も、つまりはそこへ落ちて安んじてゐたので、それでいゝ譯なのであらうが、津藤によつて語られて、芥川氏によつて片鱗を描かれて、われ／＼の心にも映じてゐる「孤獨地獄」の主人公僧侶禪超の心境は、そんな生やさしいものではなかつたに違ひない。

試みに、「蜘蛛の糸」を見よ。「杜子春」を見よ。あるひは、作者得意の切支丹物のうちの「おぎん」を見よ。どれも、美しく敍述された物語である。そして、どれも有振れた人情に雷同して作爲された物語である。「蜘蛛の糸」の犍陀多（かんだた）は、生前の惡行のために地獄の底に墮ちてゐたが、たゞ一度蜘蛛の生命を助けたことがあつたのか、お釋迦様の記憶に浮んで、その善行のむくひとして、地獄から救出されることゝなつて、お釋迦様の手から一筋の蜘蛛の糸が、その地獄の底へ下ろされた。犍陀多はその糸を見つけると歡喜して、それに縋つて天上へ上りかけたが、他の多くの罪人も彼れに習つてその糸に縋りついた。彼れは、多人數の重みで糸の中斷することを恐れて「この蜘蛛の糸はおれのものだぞ……下りろ下りろ」と喚いた。すると、その途端に、蜘蛛の糸はぷつりと切れて、犍陀多は眞逆さまに暗の底へ落ちてしまつた。……

つまりは、自分ばかり地獄からぬけ出さうとするこの男の無慈悲な心が、その心相當の罰を受けたといふのである。作者はここで、極り切つた秩序ある世界をやすくと受入れて、そこに何等の懐疑の苦をも感じてゐない。昔振りな童話として書かれたらしく思はれるが、作者の心持までも童話の世界に安んじてゐる。私はこの頃「ガリバア旅行記」を讀直したが、ここに描かれた童話の世界を見詰めてゐると、寒風に肌の擘かれる思ひがされる。それに比べると、「蜘蛛の糸」などの童話の世界は、ストーブで温められた溫室的書齋での假寢の夢に過ぎないやうに思はれる。……無論溫室の夢も藝術として價値があるのに違ひない。私は「蜘蛛の糸」をも愛讀した。たゞ、私は「孤獨地獄」や「往生繪卷」以來、芥川氏に對しては、世界の文壇の常套的藝術以上のものを期待してゐたゝめに、不滿を感じたのである。

「杜子春」は支那の傳奇の飜案とも云つていゝもので、龍之介集中の傑作の一つであるが、型の如くに事が運んでゐて、「私は仙人にはなれません。しかし、私はなれなかつたことも、反つて嬉しい氣がするのです。いくら仙人になれた所が、私はあの地獄の森羅殿の前に、鞭を受けてゐる父母を見ては、默つてゐる譯には行きません」と、杜子春は最後に夢から醒めたやうに云つて、「何になつても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです」と、誓ひを立てゝゐる。……かういふ程度の人間らしさに、作者は人間を見たつもりで、また自己を見たつもりで安じてゐたのであるか。それなら、禪超の「孤獨地獄」の惱みは、そこになかつた譯である。

「おぎん」は、自分一人天國の門へ入るよりも、天主のおん敎へを聞く機會のなかつたゝめに地獄へ墮ちてゐる筈の兩親の跡を追つて、自分も地獄へ落ちようと決心して切支丹の敎へを棄てた。……作者はここでも人情に安んじた。讀者もここに描かれた人情に感動して涙を落すのである。

芥川氏は、屢々題材を古傳說から取來つて、人情を說いてゐる。溫室のなかで文學讀者を集めて、巧みな言葉で人情を說いてゐる。「山間曠野樹下空中、何處へでも忽然として現はれる」と、禪超の云つた「孤獨地獄」は、その溫室に於ける

作者の眼前には現はれなかつたのである。無論溫室の屋外に、幾億萬由旬に渡つて吹きすさんでゐる寒風は、作者の耳には響かなかつたのである。

(四)

芥川氏は、切支丹物と稱せられる變つた物語を幾つも創作して、讀書人の注意を惹いた。自然主義以來の常套に習つて、凡庸俗弱な自己の日常生活を書く外に能のない多くの新進作家に比べると、芥川氏の態度は、遙かに賢明であつた。藝術的天分の傑れてゐたことをも證明される。そして氏は、それ等の古い物語を、たゞの古い物語として書いてゐるのではない。それ等に於て、いろ／＼に人間の心の動きを洞察してゐるのだ。藝無しの身邊雜記作者以上に、自己の心をそこに現はしてゐるのだ。「奉教人の死」「るしへる」「おしの」「きりしとほろ上人傳」など、いづれも完成したる藝術品である。「保吉の手帳」など、作者自分の現實の生活記錄よりも、一層よく作者自身の面目を現はしてゐる。(私は、保吉といふ男を主人公とした小說は概して藝術價値の低いものだと思つてゐる) しかし、切支丹迫害時代の壯烈悲痛の逸話を取扱ひながら、稍々もすると、一般の人情の發露、あるひは逆說的心理の摘出を試みたに止まつてゐるのに、私は多少の遺憾を覺えてゐる。作者は「孤獨地獄」の苦惱の一端を覗いたに過ぎなかつたと同樣に、迫害された切支丹信者の壯烈悲痛の心境、あるひは夢幻的歡喜の境地に、自己の心を浸染させてゐたのではなかつた。……文學はそれでいゝので、文學の本領はそこにあるのかも知れないが、さうすると、文學は要するに知惠の遊びに過ぎないやうにも思はれる。

知惠の遊びとして、芥川氏の技巧の妙を見るべきものは、切支丹物では、「報恩記」を最上とする。「藪の中」など二三、同じ趣向の立て方を試みたものがあるが、「報恩記」に於て、最もよく作者の藝術的手腕の冴えを見せてゐる。傑作の一つである。

しかし、これよりも、一層傑れてゐると思はれるのは、「地獄變」である。私は自分が讀んだ範圍內では、この一篇を以つて、芥川龍之介の最傑作として推讃するに躊躇しない。氏の多くの切支丹物や、王朝物は、知惠の遊びに過ぎないところがあつて、一度は着想と奇才に感歎しても、二度三度繰返して讀むと興味索然たることもあるが、「地獄變」は今度讀返して一層深い感銘を得た。芥川龍之介の持つて生れた才能と、數十年間の修養とがこの一篇に結晶されてゐる。聰明なる才人の知惠の遊びではない。心熱が燃えてゐる。夏目漱石や森鷗外に似て、いくらか型が小さいやうに思はれるところがないでもないが、この「地獄變」一篇は、鷗外漱石の全集中にも斷じて見難いものであると確信してゐる。私が藝術の上からのみ批判してかういふのではない。「孤獨地獄」や「往生繪卷」に一端を示したこの作者の心境がここでは渾然として現はれてゐるのに、ある尊さをさへ感ずるのである。……私は芥川氏の日常生活を知らない。氏が家庭に於て社交に於て、どういふ言葉を口にし、どういふ行動をしてゐたか知らないが、さういふ外形の生活はどうであらうと、氏が、良秀の「地獄變の展風」完成の由來をここまで見たことは、氏自身が持つて來た心力の限りを盡くして、世界を見たやうなものである。……普通の人情や逆說的心理の摘出にのみ拘はつてゐた氏も、ここでは假面を脫した人間生存の姿を見たやうなものである。「現代小說全集」の目次を開いて見ると、「地獄變」の作られたのは、大正七年のことである。氏が三十歳に達しない頃であらう。そんなに若くつて、かういふ大作を著はしたことに、私は驚歎してゐる。

氏の如き神童型の作家の晩年は自から推知されるが、最近數年間の氏の作品に、私は痛ましき衰頽の影を見てゐた。「改造」に連載されてゐた文藝評論などは、多くは氏の頭腦の混亂が示されてゐた。

（五）

曲亭馬琴を題材とした「戯作三昧」のなかに、錢湯の中で、入浴中の馬琴に當りちらしてゐる男の言葉として、「第一馬琴の書くものは、ほんの筆先一點張りでげす。まるで腹には何もありやせん。あればまづ寺子屋の師匠でも云ひさうな、四書五經の講釋だけでげせう。だから又當世の事は、とんと御存じなしさ。それが證據にや、昔の事でなけりや、書いたといふためしはとんとげえせん。お染久松がお染久松ぢや書けねえもんだから、そら松染情史秋七草さ。こんな事は、馬琴大人の口眞似をすれば、そのためしさはに多かりでげす」と云つてゐる。

作家の好みはさまぐ\である。お染久松を「松染情史」として書かうとも、自己の生活の直寫をしないで、王朝物や切支丹物に於て人間を書かうとも、それは作者の自由である。しかし、芥川氏は、現代の寫實に於ても、可成りに傑れた技倆を現はしてゐる。「秋」には若い姉妹の心の動搖が巧みに描かれてゐる。ことに、「一塊の土」はいゝ。「地獄變」と相並んで、この作者の全作中で、最高位に立つものである。お民といふ田舍女の忍苦の生涯には、作者自身の心が動いてゐる。そして、自然主義系統の作家の作品に比べると、秩序整然として冗語がない。……私は、數年前「新潮」に掲げられたこの小說を、故鄕で讀んだ時、芥川君もこんなに現代の寫實に巧みであるのかと感歎して、直ちに讀後感を書いて、「文藝春秋」に寄稿したことがあつた。……しかし、この小說以後の芥川君の作品には殆んど一つも感心しなかつた。

・

谷崎潤一郎氏の藝術觀には、強い自信が現はれてゐる。力がある。芥川氏のには、頭腦の混亂が現はれ、懷疑の惱みも見られる。谷崎氏は、かつて、熊谷直實が、淨土のある西方に背を向けるのを憚つて、逆さまに馬上に跨つて步を運んでゐたその敬虔なる心構へに感服し、自分にはさういふ宗教心はないが、藝術の美に沒頭して安んじてゐるといふ意味の感想を、ある雜誌に述べてゐたが、芥川氏は、さういふ藝術至上主義者ではなかつた。禪超や五位の入道や良秀とついて無關心ではゐられない人であつた。私が以前から氏の作品に共鳴を感じてゐたのはその點であつた。聰明であつた氏は、谷崎氏のやうな自信を缺いでゐたのであらう。自己批判に疲れたのであらう。（八月八日輕井澤にて）

種彦と稿本田舍源氏

山口剛



一

鼠の巣か、屏風襖の下張といふのが、草雙紙の中でも合巻物の有ついたましい運命であるに拘はらず偐紫田舍源氏は今も廣い範圍の讀者を領してゐる。たま〳〵紙魚に荒された位で殘つてゐる合巻物も長編の續物となると、とかく端本の憂目を見るのに、これのみは何代前かの年寄が丹精した帙の保護のもとに初編から三十八編まで揃つてゐるのも珍しくない。さすが柳亭種彦作り、歌川國貞描けばこそである。その年寄だちから何代か後の子孫は、あのこまかい小い假名文字を拾つて、ぽつ〳〵と讀みはしなかつた、また讀めもしなかつた。そこで明治以來幾通りとなく、活字板に形を替へて流布せられた。すべての草雙紙がさうであるが、繪をぬきにしたのは、片腕をもがれ、片脚を斷れた不具も同樣である、わけて國貞の畫を伴はない田舍源氏に種彦の活きてゐる筈がない。それでも、やはり活字本を以て鑑賞と研究の資料とし、そこから「種彦」を搜り出さうとさへする。種彦が忘却の底深く葬られてしまふ日は、まだ遠く遙であることを考へさせられる。

田舍源氏を一古典として見、骨董として扱ふ側では、完結に至らなかつたことをさまで苦にしないやうである。それどころか、水野忠邦の天保改革を背景として、「散るものにさだまる秋の名殘かな」の辭世を殘したその人の最期を空想化するために

は、勿論のさいはひと悦びもする。戯作者種彦、本名高屋彦四郎はおのが屬する小普請組の支配頭から召喚の命をうけた。その日にさき立つて頓に死んだ。天保十三年七月十九日病死の屆出はあつたが、果してさうであるか、傳へられるやうに自殺であるなら、何の罪をおそれたのか。田舍源氏が大奥のみそか事を沙汰したといふのが罪か、あられもない春情妓談水揚帳を作つたための御咎か、今にしてなほ解き難き謎であるから。

しかし、これ等の日に於ては、そんな離れた氣持で中絶を見る讀者はなかつた。此草紙に光氏の大將髷を海老の尾のやうに割つたのは國貞の案であるが、はじめこそ異な髮と思つたものの、繪馬羽子板、押繪の類、開帳庭の納め物、吉原の軒燈籠、團扇はもとより煎餅形皆これになつた。その髷の流行にひかれて自然拙作も源氏といふ名に似ずとの誹も薄らいで來たから、いよ〳〵末まで續きさうであると三十八編の序に種彦はいふ。それが最終刊とは天保十二年の春には思ひよらないのである。とにかくこの種彦の言葉は表に國貞に花を持たせ、裏におのが得意をほのめかすものである。さういはれても無理のない田舍源氏の流行であつた。種彦病篤しと聞えた時、大奥の女中は護摩をたき、お百度を踏む者もあつたが、中に重い役を勤めてゐた松恵といふのが、堀内妙法寺へ七日の間代參を立て、田舍源氏を供へて僧侶に祈禱させた、事露顯してつひに暇を賜つたといふのは、關根只誠これを錄し、列傳體小說史これを引用して以來、今は誰も知つてゐる話となつたが、いつの病の折か、時日が詳でない憾みはあるにしても、こんな事實はさらにあると、誰も疑はぬ田舍源氏全盛であつた。

折柄、三十八編であとが絕えたのである。多くの懸想人にとりまかれてゐる玉蔓の身のおちつき如何、髯深の汜籐との成行如何を傳へ終らないのである。さても氣を揉み拔く松恵の輩の多かつたことよ。源氏の本文を讀む者は、玉蔓の玉かつらであり、汜籐の髯黒の大將であるぐらゐはとうに心得てゐる。一人の行く道はよく承知してゐる。これだけに種彦の翻案にひきつけられる。翻案上手、翻譯上手の作者が腕に縒をかける田舍源氏である。晴の舞臺に手練の藝を一杯に見せようの腹がすでに種彦にある。田舍源氏の見物は幕が閉つてもなほ起たうともしない。樂屋を知る知らぬは問題でなかつた。

二

田舍源氏の緣にひかれて、かつて一度は活字本となつたが、品下れるためか、早く鑑賞研究の埒の外に推し出されてしまつた其紫鄙廼俤（そのゆかりひなのおもかげ）も種彦沒後の五年目、弘化四年に田舍源氏三十九

編、四十編といふ格で、初編二編を出板した、當座はおとした珠がまた手に入つた嬉しさを光氏飛鳳に使せたのである。玉葛卍廉の消息がまたはつきりとして來た。國貞改め豐國畫く海老尾の大將髷がまた見られることになつた。これだけでも、世間から歡迎をうける理由はある。今でも古本屋の店さきに塵にまみれたこの合卷を見うけることが多い。出板の年代が若いだけではないらしい。

世間名が何も作の價値を決定する譯でないが、種彦に比較すればもの丶數でない一筆庵主人の此作品とても、さうまで見くびつたものでなかつた。初編にも、二編にも、種彦そつくりの翻案ぶり、そのま丶の筆づかひが注意せられる。その癖、全體の見わたしからいへば、依然として續貂の譏なきを得ざるは何であるか。その理由を考へるには、一筆庵主人が種彦の遺稿の殆どすべてを剽竊しながら、何故あ丶まで切りこまざき、あ丶まであちこちへ填め込んだかの穿鑿を先にしなければならない。

種彦の手記によれば、天保十一年十一月十八日に三十八編を起筆した。間もなく三十九編を書き上げ、四十編にとりか丶つたのが翌月二十三日である。分量から見て上冊だけと思はれる四十編は、兩三日にして書き上げたのであらう。書き馴れたといふだけでなく、外に重要な理由も存在することであるが、田舍源氏の筆は後になるに從つて速度を加へてゐる。こ丶らあたりは行筆最も流る丶やうであつたらう。

三十九編、四十編はまさに世に出すべくして、つひに上梓せられざる遺恨の草稿である。世の田舍源氏を愛惜する者は、どうがなして種彦の篋底から搜り出したいと望んでやまざる續稿である。一筆庵はこれを手に入れて剽竊の罪を犯したのである。

三十八編三十九編を種彦が十五日間に書き流したといふのはたゞ文章だけのこと。それが出來たあとを繪の趣向にか丶る。下繪が出來る、文章の淨書も出來る。文章は板下書への注文、下繪は畫工への誂へ、それを宰領するのが板元であつた。草雙紙作者の手順が皆さうであつたが、同じ運びで、種彦の三十九編、四十編も早く板元鶴屋喜右衛門の手に渡つてゐた。一筆庵は多分そこから遺稿を入手したのであらう。しかし、鶴屋は紫鄙廼佛の板元でもある。國貞はこれの畫工でもある。作者と板元と畫工と、いづれが主犯か從犯かの別はともかく、共犯を以て目されても、辯解の辭はなささうである。

三

遺稿はまきばしらの卷の翻案であつた。髭黑の大將が、拉れ戾された北の方の親里兵部卿宮のもとを訪れるくだりと、近江の君が夕霧を戀ひ慕ふくだりを省略した外、前から續く趣向に餘儀なくされる分を除いては、殆ど本文のまゝである。

玉かつらが大將にゆるすまでの委曲は本文には見えてゐない。「內裏に聞しめさむことも畏し、しばし人にあまねく漏さじ」との源氏の君の言葉にその事ありと知られる。例の省筆である。さうなつても、玉かつらは大將をうとましい者と思ふ。「思はずにうき宿世なりけり」とさへ歎く。種彥はそこを覘つて書いた。氏仲は父光氏が玉葛に意ありとの世評を聞いて眉を顰め、どうがなして早く玉葛を他に緣づかせようと考へる。ふとしたはづみから、汜廉を選定する。僧田貫が夢中に贈るところの守の奇特を假りて、ふさはしからぬ玉葛汜廉の緣を結ぶ。平安貴族の戀物語をそのまゝに、受取るまい、事の奇怪を缺かすまいの二つの要求が、かういふ趣向を設けさせたのである。

髭黑の北の方、これを翻した汜廉の妻賤機はもの〻けに苦しめられる。玉葛の妬しさも交つて正氣でなくなる。或時は雪を冒して玉葛のもとに出かける汜廉目がけて、火取を投げつけるなどのあさましい事もあつた。賤機の父遊佐國助は聞くに忍びない。三人の孫諸共にひきとる。孫娘卷衣は年も長けてゐる。もの〻心も辨へてゐるだけ、我が家を出るに當つてのわびしさは大方でない。

「ふつとうち見れば、東の軒に旦夕寄添ひ馴れし柱あり。手習ひするにも、本讀むにも、どういふことか、こゝが居辨と近寄つて撫でさすり、今日よりはこの柱を人にゆづる心あるも、いとあはれにて、檜木柱に緣ある檜皮色の紙のありしを取りあげて、

　別るともわれを忘れてまき柱

たゞいさゝかに書きなしつ。かんざし拔いて柱の乾破れへおし入れ、又泣きゐたり」

卷衣は本文のまき柱の姬君である。この一節、源氏物語の本文には斯う見える。

「常に寄り居給ふ東面の柱を人にゆづる心地し給ふもあはれにて、檜皮色の紙かさね、たゞいさゝかに書きて、柱の乾破れたるはさまに笄のさきして押入れ給ふ

　今はとてやどかれぬとも馴れ來つる眞木の柱は我を忘るな

えも書きやらで泣き給ふ」

まきばしらの卷の名はこれに基づく。翻譯者種彥は本文に即いて筆とる心づかひから、幾度か推敲を重ねてゐた。

玉葛は室町御所へ上る。初午の祭の面白さなど、御所のすま

ひは玉葛を幸福にする。けれどすでに氾濫の風を宿してゐる身はやがて養ひ親光氏のもとに下り、その夜のうちに氾濫の邸に迎へられる。

室町御所の義植公は本文の冷泉の帝であつた。玉かつらが宮中から退出する折に、髯黒の大將は「いと物むづかしう立添ひさわぎ給ふまで、えおはしまし離れ」ない。帝も「かういと嚴しき近き守こそむづかしけれ」と憎みなされた。その夜すぐに、玉かつらは源氏の館から大將のもとに移る。玉葛の實の父の大臣は意や〻平でなかつた。「俄なるを儀式なきやうにとおぼせど、あながちに、さばかりの事を言ひ妨げむも、人の心おくべしとおぼせば、ともかくももとより進退ならぬ人の御事なればとぞ聞え給ひける」

種彦は本文を重しとして、これだけをもあたに見過ごさなかつた。「大將の近き守り」から氾濫の嚴重な供廻りが案出された。

「かねてより人々の心をかけし女故、もし道にて妨ぐる者やあらんと心もとなく、武藝に達せし倔强の若侍を五六人、その夜は殊に閑かりければ、これ幸とおのれも侍共にたち交り、出で立ちたる氾濫は箙を負ひ、弓を持ち、さすがに脛當腹卷はせざりけり。忍び門より玉葛を受取るとかの人數にて、ひし／＼とり圍み道行く人に心つけ、急げ／＼ともつむつかしう、氾濫はたちそひ騷ぎ、おのれが住ひの書院の椽へ乘物を昇ぎ上ぐるまで、少しも側を離れやらず、さても嚴しき守にこそ、あらむつかしと傳へ聞く人每に憎みあへりとぞ」

斯う長々と潤色する一方、玉かつらの父大臣の述懷をば、輕く光氏氏仲の浮世話の中に織り込む。

「光氏は氏仲にうち對ひ、玉葛を氾濫におくりしその夜の風聞をさだめて、そちも聞いたであらうといふに、氏仲手を支へ、別に噂も承はらず、たゞ高直が有り難きおん計らひには候へども、あまりそれでは婚禮の儀式もなくて遊佐の聞えもいかゞとやらん申せし由云々」

繁簡はそのところの宜しきに従ふだけであるが、作の意にさし支へのない限り、本文を活かさうとする種彦の苦心を見てやらなければなるまい。

まきばしらの翻案を終へて、種彦は本文にない一筋を書添きへた。弘徽殿女御に當るとよしの前の死であつた。この十數行を名殘として、田舎源氏は永久に中絕したのである。

四

斯くも種彦の遺稿を讀みかへして、今更に思ひ知られるの

は、一筆庵の拙い剽竊である。何故あらずもがなの筆を加へて醜い姿にしてくれたと息まきたくもなる。趣向の全部に亘つて比較するまでもない。種彥作るところの三十九編の序文と、共紫鄙廼俤の三編の序文を並べて見れば、すぐに合點がゆく。

「此序を書んとする時二人の客あり、今は何れの卷ぞと問ふ。まき柱と答へしかば彼客われに示していふ、卷眞木共に假字なり。まきは美なるをほむる詞、まき繪まき筆なるにて知るべし、美しき柱なりと。一人の客是を說きて、あさ木㨾木の類にて雜木の柱といふ。此論のやかましければ、予少時とおしとどめ、按に兩說非也。まき柱とは淺草海苔をあられ蕎麥へ入れしことと、とりてもつかぬ考に呆れて、前の論のやみしが、彼客重ねて問て曰ふ。あられ蕎麥は貝の柱をあられと見なし、いへば論なし。のりをいれしを花まきとも、又略してまきともいふはその義いかにと。詞の下、先生知らずや、麴町祭の炊が嵩辨當の代りに喰ひしがはじめ故、炊卷蕎麥とぞ名づけたりといはせも果てず、一人のさらばかの祭は六月なり、のりぶつかけも時候ならずと咎められて、平氣にて、又一說に紀の國文左年越蕎麥にはじめて製る炊やらひの山吹の花時なりと序のことは臨になりしをまき柱、又まきかへて記すも物うく、はや綱數も重なりて、三十九ぢやもの花まきの語釋に牛蒡ふさけておきぬ」

石川雅望の講釋を主として、その外あれこれから書き込んだ湖月抄本をいくくりかへす種彥は、語るに落ちて、要なき田舍物にこんな語釋を書いてしまつた。

しかし、洒落はさらりとしてゐる。それを一筆庵はあくどく、しつこくした。

「此序を書んとする時に、一個の客あり。去年賣出せし初編二編は眞木柱の卷とか聞けり。槇柱とはいかなる故ぞと問れて、おのれぬからぬ顏にて、卷眞木ともに假名なり。柱の事は暫をき、器財に卷木蒔繪あり、武器に腹卷、蕎麥に花蒔、扨年越に豆蒔あり。農夫の耕作に種蒔あれば、田舍の種を蒔くなり。然れは實生を栽培せんはなか〳〵にまだるき故、描き接穗の室咲は云ずとも夫と知れかし、梅が枝なり、源太諺だ源印の後だとも、皆人每に言囃、儀時好に稱し迚、折をゑびらといふにはあらねど、蓼喰ふ蟲の好々にほんの南蠻瓜の當りもの、など申すも氣恥しく斷られぬ先、此方から切揚にして初秋迄、楓陌儘に筆を採ず、斯て發客(はんもと)示して言やう、まだ三編も稿を脫せず、烟草休は早過ると書肆に作者が叱られて、然らば早々とてつるてんとたまらず、机に向ひしなりと味噌をあげては、卷柱の語釋の酒に醉たる如く、辻褄あはぬ挨拶に、客も笑て呆れて歸りぬ。序文の事はよそになり、在しを其儘爰に誌て牛丁の餘紙を

棄ておきぬ」

いふところの接穂の寓喩は、田舎源氏の續編を意味する。剽竊をまで示してはゐない。しかし、牛丁の鉛紙を塞ぐといへど、文は牛丁を越してゐる。

それにしても、訝しいのは、其紫鄙廼俤の初編と二編との關係である。初編には氾廉の廣門が玉葛の瀬葛と縁を結ぶこと、賤機が妬さのあまりに火取を廣門に投げつけること、賤機の里へ戻ること、まき柱の發句のことなど、三十九編の要領を盡してしまつたに拘はらず、二編にまた同じ事柄をくりかへす。さすがに事の重複を避けながら、まづ守の奇特から說き起して、三十九編の趣向といはず、文辭といはず、こゝに斷ち、かしこに綴つて用ゐてゐる。賤機火取を廣門に抛つの一條は、一編の眼目だけに省略することが出來なかつた。

作者は辯解する。はじめのは廣門が妬氣を起させた。後のは廣門が病み呆けたのをあはれに思つて、本性にかへることもと慰めてゐる時に浴びせられた。趣は同じでも意は違ふ。くりかへして書ねばならなかつた。作者はまた辯解の言葉を添へる。此物語は前にいふべきを、後から追書することが多い。初編に概略は盡したけれど、それでは細い筋が立たぬで、またぞろ書きしるした。前後の錯亂を顧みる暇がないとある。さても厄介な縁のならび、横のならびであつた。

ものゝけと妬しさ、正氣と亂心、その錯綜するおもしろさを寫すのが源氏物語の嬉しいところである。そのまゝに移しとらうと一途に努める種彦は、ついぞ賤機を悋氣者にしなかつた。しかし一筆庵があらぬものに仕立直したにも譯がありさうな。ある目的計畫が感ぜられる。種彦の筆禍事件と聯關してゐるやうである。

五

群小作家の中でも相應な地位を占める一筆庵主人である。彼に多少の藝術的良心があるなら、其紫鄙廼俤が田舎源氏を冒瀆するのいかに多いかを知つてゐやう。遺稿をそのまゝに頂戴する方が故人に對する罪の輕くなることも知つてゐやう。それなのに、初編と二編とを變な事にしてのけたのは、種彦の怨念より、もそつと恐しい力を避けようとしたためである。そこに細心な工夫が見える。

ある片田舎の女やもめ、その名を白女と呼ぶのが娘子供を教訓する。それが初編の發端である。「よんべいと面白き嫉妬深き女ありて、狂氣となり、夫をはづかしめ、親里へさられ戻りしことを夢に見たり。書物を讀みて講釋をきかするより、御話を

きかするは耳近くして幼き者にはわかるべし。よく〳〵聞きわけて女はかゝる振舞ある時は、もの知る人も、知らざるも笑ひそしる者なれば愼みたまへ」その夢物語が賤機の始終である。白女はいふまでもない田舍源氏初編の序に見える「大江戸の眞中、日本橋に近き式部小路に住めるいと媚いた娘お藤」の擬ひ者である。しかし、斯うまで高々と揭げる勸懲の看板はついぞ田舍源氏にはなかつた。天保改革の餘熱は冷めたにしろ、種彥歿して日未だ淺い弘化四年にいはくつきの田舍源氏の續稿を出すのは、よし光氏を鄰恭とし、紫を此糸とし、玉葛を濱葛とするやうな見透いた細工にしろ、斯うして出板するのが最安全な方法であつたらう。作者も、畫工も、板元も石橋を渡る寸法で、まづ初編を出した。お咎のないのを見澄したところで二編を出した。二編の末をまた白女の教誨で結ぶ。三編からは白女の夢物語でない。それでも豫告には「勸善懲惡の旨を第一に誌し幼き兒女輩のたしなみとなるべき事を教諭するちかみちの草紙物語にて續て出販仕候」とある。さういへば、二編の末丁の「迎邃招福、めでたし〳〵」も草雙紙のいつもの例ではあるが、何かの厄除けとも思はれる。わたしはわたしの邪推を自ら爪彈しながら、なほさう思つてゐる。

三編なほ種彥の遺稿との關係を斷たなかつた。飛び飛びに五編にも及んでゐる。剽竊者は四十編のすべてを切つては塡め、切つては塡める。それから起る年次の錯亂には、一々例の斷書を添へてゐる。

六

斯ういふと、一筆庵主人の細工は官憲を憚るためにのみしたととれるが、事實はそれだけではあるまい。彼が初編二編でやめるつもりなら兎も角、なほ次々に書き續けてゆくには、さうするのが賢しい手段であつたらう。原作者の興味は剽竊者の追隨をゆるさぬ境地にまで進んでゐた。一面源氏物語の本文に忠實ならんとし、一面近代風俗の考證の正しきを資せんとするその頃の種彥の態度は、つひに一筆庵如きが模倣し得ざるところである。一二の例を拾へば、容易に識られる。

種彥はまきばしらの男踏歌を初午祭に書きかへる。理由はいはない。情景を巧みに移してゐる。一筆庵は其趣向を三編に塡め込んだ。蛇足の言を添へる。「下樣にはこれをとうか祭といひけり、とうかは稻荷といふ文字を音にして讀ますることとなれば義理に違へることにはあらねど、今斯く呼びてはいと鳴呼なりき」といふのである。

種彥が四十編のをはりに、文本にない一節を加へたといふの

は、次の如くである。

「この春の頃とかよ、東山のとよしの前はじめは風の心地たりとかりそめにふし給ひけるが、わが行のしるしなく次第々々に悩みはげしく、夏に至ればなほ怠らず、六月の半頃、つひに此世を去り給ひぬ。おん齢といひ、果報といひ、何に不足はあらざれど、孝心深き義植公のおん歎ぎ、大方ならず、光氏君ももとより仁儀の正しき性質なりければ、彼方はともあれ、此方はまことの母の如くに思ほしければ、大方ならずうち驚き、室町六條東山三ところの館の混雜振ひ動くばかりたるは推測りて見給ふべし。さて失せさせ給ひしその時も、おん野邊おくりその日にも、天荒れ雷激しく鳴り、怪しき事もありしなど、巷の噂ありしときけど、たしかなる事は知らず」

これには前書がある。田舍源氏にしば／＼見らける斷書である。

「とよしの前と替名したる弘徽殿のうせ給ふこと源氏物語に見えず、若菜の上巻にさきに失せ給ひける趣あれば、失せ給ふは此ほどのことにやとおしはかりて、わづかにその事を誌すは、若菜の巻に至り、ふとおはしまさゞる事をいはゞ、書きもらしたる樣におぼさん童達もあらんかとてのさかしらなり」

弘徽殿は源氏の君を虐げ、その母桐壷更衣を虐げ、またその戀人藤壷女御を虐げたので、惡后とも呼ばれた。とよしの前も光氏をいぢめ、花桐をいぢめ、藤の方をいぢめたので光氏贔屓から蛇のやうに嫌はれてゐた。種彦は昔の註家の言葉と今の讀者の思はくを考へ、本文の年立をも參照して、その一節を加へたのである。一筆庵の剽竊はこれをも忘れない。しかし前書を棄てた。さうまで本文に即く必要がないためである。たゞ年次の亂れを說明するとて追書の形をとる、種彦の前書に倣つたのであらう。鵜の眞似する烏の醜さはこれであつた。

さればとて阿呆烏でないこの人の作にも取得はある。田貫の靈再び寶玉を氏仲に贈る。玉に奇特あり、髯深の廣門は忽にいみじき美男と變ずる、猴葛またその緣をうれしと思ふの趣向の如き、ほんの一例ではあるが、事の不思議を傳へると共に讀者の意中にわけ入るの術を解するものであつた。こゝにはこれ等を數へ立てる必要も餘裕もない。今まで其紫鄙廼俤に就いて多くを語つたのも、實はそれと比較することから、田舍源氏に於ける種彦の態度を考へるためであつた。

いつ起稿されたかは詳でないが、文政十二年に出板された田舍源氏初編の序文の末尾は、後に書き直されたが、はじめは、

「さればこの反故の散りたるをとり集め、まづ試に桐壷箒木の二帖を上木すべし、もし此草子幸を得て世に行はるゝこともあ

らば、なほ幾々編を繼ぐべし」であつた。その僥倖がめぐり來つて三十八編まで續いたのである。年を數へれば十四年になる。その永い間には作者の態度にも變化があつた。變化はある方向をさして動いた。本文から成るべく離れようとする努力が薄らいで、即いてもよい、即かざるべからずとまで變つたのである。

これはまた湯加減の變化にたとへられる。いかにも源氏の條を餡さず、なるべき程は詞をも其儘用ゐて書き給へ、源氏を讀まざる童子の少しは助となる事あらんと種彦に飜案の態度を諭くのは熱湯好きである。源氏の條を飜案して歌舞伎狂言淨瑠璃の趣に綴り給へ、源氏を讀まざる者やあると勸めるのは温湯好きである。熱湯温湯の好みに迷つた末、まづ初編を思ひ切つて温く仕立てゝ見た、それから漸く卷々の詞を折りくべて沸すやうにしたと十編の序に書いてある。湯は段々と熱くなる。種彦までがめつきりと熱湯好きになつてしまつた。三十九編、四十編は殊に熱かつた、一筆庵が頻りに水をさゝうとしたのも無理がなかつた。

せめては紅葉賀までと思つたればこそ、車爭ひを夕顏卷に引上げた、最も戯曲的な場面を使はずしまひにするのが惜しかつたのである。飜案は葵卷になつてもなほ續く、はやまりたるがいと悔しう、何に書きつらんと思つた。悔は朝顏の卷を譯す折にもあつた。その趣を早く阿古木の戀に結んで了つたからである。もとよりはかなき草雙紙のさまでに長くは續くまじ、朝顏の頃に至らば、あるかなきかになりなんと杞憂したのである。讀者の好みに應ずべく、戯曲的効果を需めるに急な譯でなかつた。五年の隔りは斯ういふ變化を齎らする。とにかくに、こんな飜譯は作者からいへば悔しいながらも、嬉しい沙汰である。讀者から飽かれる氣づかひもなく、自分の好み一杯に書きこなすことの出來る保證である。少なからぬ田舍源氏の稿料で紫一本の茂睡の墓ある金龍寺の並びに新居修紫樓を構へた嬉しさとは、また違つた嬉しさであつた。

といひながら田舍源氏のはじめの方も脈々執つた筆でない。眞面の趣向では決してない。もともと歌舞伎好き、淨瑠璃好きの種彦、草雙紙の世界に正本製の一體を創めた種彦が源氏物語の大物にとりかゝる時、手馴れた藝を片寄せる筈がない。ものの順序がまづ温湯からはじめるのが自然である。注文を伺ふまでもないことである。刊本二編の序に「歌舞伎繰り物語、三つが一つになつた綺草紙」とあるのは、最も簡明にその頃の方針を示すものである。刊本の序が出來上る前の草稿には、なほ一段婬語つて精しい一節があつた。「さて詞と人物のみを鄙びては源

氏提要、十帖源氏、おさな源氏等に似かよひて、今樣の繪雙紙には似氣なし。故にたゞ大綱をのみかの物語に倣ひ、その細條に至りては、或は歌舞伎、或は淨瑠璃の趣にて作れり」そればかりでない、初編の草紙の半ほどに、いづれは序文に仕立てるつもりなのが、綴らずに終つたボツボツ書が殘つてゐる。

「昔紫式部といふ立作者五十四段かへしの大道具をたくみ出し、──時代狂言をいづれの時にかありけんと大序からして世話にかきさし──○雲がくれの一幕をもらひにしたる大和綴──○篝火の小幕あれば、若菜に上下の長幕あり──△頭中將のたちうち──夕顔やどりにはねどりに燒酎火──明石の大どろどろ──野宮の夜かぐら──螢で顔を見合はせて琴を枕のきつかけにぶん廻してあとも見せず──に別れ──△正本傳はつて小鏡等の書拔あり、又からころもの鸚鵡石」

たゞの見立てなら見立てでもよい。いづれにしてもこの心あればこそ泥藏の長物語、人丸堂の無言場の趣向が案ぜられたのである。當時の湯加減の溫さが思ひやられる。

七

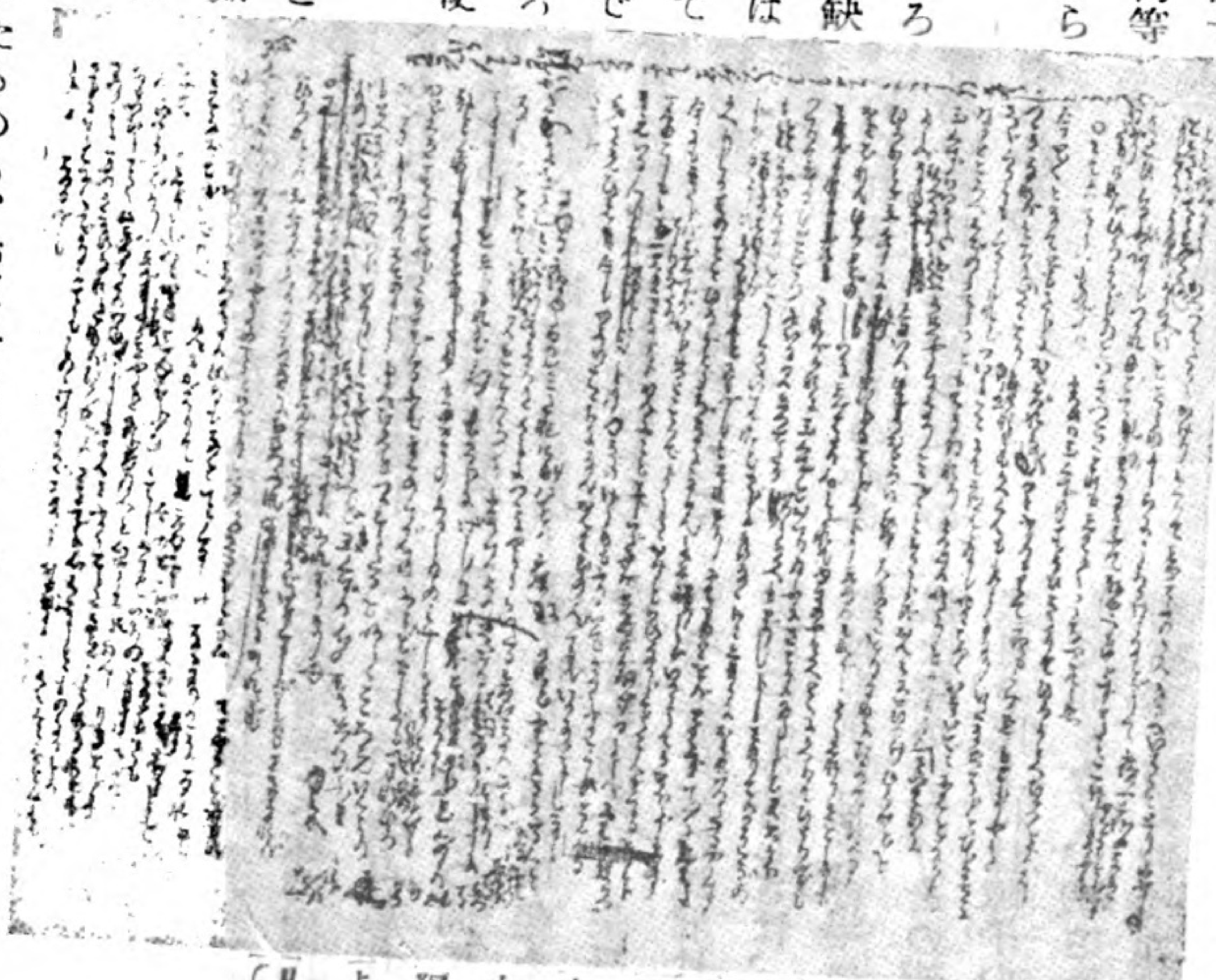
たび〳〵田舍源氏の草稿といつたが、板下書のために淨書し、國貞のために下繪を畫いたものを意味しない。それが二度目の稿本なら、これは以前の下書、すなはち初稿本である。再稿本は殘少ではあるが、あそこに一編、こゝに一編と所有してゐる仁もある。初稿本となると、わたしの如きは、去年の十月三十一日まではその在りなしをさへついぞ知らなかつた。その日天長節祝日に際して、東京市立日比谷圖書館主催の柳亭種彦、喜多村筠庭、齋藤月岑追遠記念講演會が行はれた。三田村鳶魚氏が筠庭を、林若樹氏が月岑を、わたしが種彦を受持つた。會はまた三翁の遺品遺作の類を並べて展覽に供したのである。講演の前後を、その間に過したわたしは、晒木綿の腹卷一つをたよりにして來た甲斐あることを悅んだ。田舍源氏の稿本が初編から四十編まで、朱墨縱橫に推敲のあとを見せてゐるのではないか。數日來の風邪は下痢をさへ伴つて昨日あたりから絕食の狀態にある苦しさは、それを一目見た時から忘れてしまつた。翌日も重い足を會場に運ぶ。日は晴れたれど、外套の襟元忍ぶ風は寒かつた。その夜の熱は高い、その次の日も下らない、後二月の床上には障子の鳥影がせめてもの慰みであつた。年を越して間もなく、暇さへあれば廓大鏡を手にしては、田舍源氏の初稿本を讀み耽つた。十月三十一日はうれしくも高屋彥四郎四代の孫、猛氏をわたしにひき合はせてくれた。氏の好意に甘へ更に濱松居住の令兒金之氏にすがつて戴いて、あのいみじの物

を借覧したのである。

驚くべき存在である。半紙四つ折の横綴の帳面九冊、ざつと數へて三百三十五丁に初編から四十編まで、ほゞ十四年に亘つて、何等變化のない筆づかひで書きつゞけられてゐる。

一丁の表裏を通じて、多いところで五千五百字、少くとも四千字を缺さない文字の細さは、肉眼だけでは役に立たぬ折もある。まして書いては消し、書いては墨ひいたあとまでも辿つて、創作心理を讀まうとするには、どうしても七倍の廓大鏡を使用せねばならなかつた。

鏡下照し出すところ、一にしてとどまらぬ。三十九編、四十編の如き、一筆庵のと出所を同じうしてゐるか、ほんのたまさかに傳寫されて鬼の首でもとつたやうな思ひをさせたものも、讀み合はせれば、餘りに甚しい誤だらけであつた。それはまだ小さい事である。つまりは種彦の書齋に參じて、机を中に隔てゝ坐したなり、筆の運びをぢつと見詰めてゐることが感ぜられる。いひかけた源氏物語の本文に即くの離れるのといふ態度の變化推移はやすやすとそれによつて指示される。



初稿原稿（三十九編より）

八

弘徽殿女御と桐壺更衣、つゞいての藤壺女御との寵爭ひは本文にくはしく書きしるされてゐるとはいふものの、未あれだけでは大奥を舞臺としての大芝居にはなり得ない。是非とも思ひきつた脚色が必要である。そこでとよしの前の腰元と花桐また藤の方の腰元との衝突を並べ立てる。とよしの前の白絲と藤の方の杉生が雷除のお守獻上の先を爭ふ場面を、種彦はまづ斯う書いて見た。

『今では内君とよし様の御身近く勤める女、これほどな御使を仕損じては、此身ばかりか、内君様の御恥辱「それはこつちも

同じこと、藤の方にひけはとらせぬ「いゝやわたしが「いやわしがと、行くをやらじ、とつけ戻すはづみに、捧げし三寶をうち落され、うち落し、手をとり組んで、きつと見やり、「杉生が縫の模様は御所車、ひき戻すならゆるしてやらう「ホヽヽ、さういやる白糸の模様も丁度花車落花微塵にして見ようと楊も頼もうち折り、ひき裂き「何小癪なと兩人は左右へわかれて身拵へ「やれ喧嘩よと數多の女入亂れ心々に加擔人して或はうち合ひ、ちぎり合ひ、裳裾もあらはに、髪亂れ更に正體なかりけり」けれどすぐに消した。そして刊本二編に見るやうに書きあらためた。前文未だ芝居として足らぬを思つたためである。

「此頃名譽の相人とて高麗國より來りしあり。二郎のおもとを相していふは、此稚兒の賢しく德あるは、世に比ひなく生れたれど、もし家を繼がせ給はゞ、忽ち事をひき出さん。たゞ後見に据ゑおく時は行末名を揚げ世に布いて、なほ〳〵家は榮ゆべしと懇に示したるはおのが胸によく當れり」といふのは、幼い源氏を高麗の相人に見せたくだりの翻案である。さうは書いたものゝ、要なき本文に即き過ぎたが面白くないと、さつと墨をひいた。これ等を前に引用したまきばしらの翻案と比較すれば、態度の變化は極めて顯著である。十編あたりから、趣向を妨げぬかぎりは、本文を惜しんだのと、はじめの頃、なくてかなはぬ文句を拾つてゐた態度の間には大いに距隔が存する。努めて本筋を離れようと努力したためとはいへ、夕顔の卷の例がし院の怪しい女の言葉「おのがいとめでたしと見奉るをば、尋ねも思ほさで、かくことなる事なき人をゐておはして時めかし給ふこそ、いとめざましくつらけれ」を忘れて、あとから氣づくまゝに「われをすておき素性も知れぬ女と語らひ給ふこそ恨めしけれ。この文阿古木の物語に入用」と覺書をする違ひである。阿古木とはすなはち六條御息所に當る女性のことである。かゝる直し物の必要がないほどに、原文に即いて來ると、翻案ならぬ翻譯の筆はすら〳〵と動くのであつた。消しも少く、附箋もまれ〳〵である。十九編、四十編がこの頂上であつた。

しかし、いかなる場合でも、田舎源氏の草雙紙たり、草雙紙の綺雙紙たる所以を忘れる種彦でない。どんなに本文に即かうと、その趣向を除けものにはしない。三十九編にも、四十編にもそれと示すことが出來るけれど、なほ著しい例を求めて須磨の卷をとる。草稿の中でもとりわけて消したり墨をひいたり、附箋をした箇所である。理由の説明は十七編の序文を摘めば足りる。「されば須磨明石は源氏最第一の卷ながら、是を悉く讀圖に寫さば海邊の家に唯獨、淋しげにおはすところと、都の女は彼所よりの文を見て歎くところのいとうるさきのみにもあら

ず、「文章さへもその味ひを聞えよくは寫し難く、章魚と河豚とのをかしみに、川次郎と岩根の事を、この巻中へ交肴云々」といふのであつた。

同じほどの直しを、いやもつと激しい消しと附箋を、二十二編から三編へかけて見うける。蓬生の巻に當る。二十二編の中に、文は走り繪の遅るゝは、荒れ館の繪のうるさきまで續くを厭ふが故なりと斷つてゐる。さすがの種彦もこゝの趣向には困じたのである。

事のついでに記しておくのがよささうである。種彦の筆の亂れは、荒れ館の繪だけでなく、惣領甚之丞の病篤きに際したからであつた。天保七年九月二十四日、二十二編を書きはじめる。翌月の十日に甚之丞は歿した。その間にもなほ筆を擱かなかつた。忌服の屆の覺書の裏をかへして書きつける。覺にいはく、

一　惣領　高屋甚之丞
右今十日辰刻病死仕候
忌中十月十日より同月十九日迄
服中十月十日より十一月十日迄
右之通忌服請申候依て御屆申上候猶又忌明の節御屆可申上候
以上
申十月十日　　高屋彦四郎

裏の文はすぐに帳面の「地水火風の四つの緒のはかなくたえし琵琶之助、空に歸るは水無月葉月と夢の間に、七々日になりければ云々」に續いてゐる。涙の痕かと思はれる墨のにじみを見るもわびしい。田舍源氏の初稿本から豫期せざるものを讀み出す一例がこれである。

九

繪雙紙たることが源氏と田舍源氏とを別つ唯一の條件でなかつた。作の上では室町時代になつてゐるが、作られた江戸時代と平安時代の距離は彼のものゝあはれを無條件で此に移すことをゆるさない。源氏と藤壺の前の世ゆかしい戀を、光氏と藤の方との間には敵をたばかる苦肉の策とする。おなじ心が、玉かつらを養ひながら、いつか懐しいものに思ひそめた源氏を、飽くまで親として玉葛を教へ導く光氏に變替させる。玉かつら髭黒の大將のもとに嫁して後、源氏が「かきたれてのどけき頃の春雨にふるさと人をいかにしのぶや」と歌ひおくるくだりを省略したのは、源氏の戀心を煩はしとするからである。「おなじ巣にかへりしかひの見えぬかないかなる人か手ににぎるらむ」を譯出するのは、たやすく氾濫を揶揄する筋にひき直すこ

どが出來るからである。帚黑が玉かつらに代つて詠める「巢がくれて數にもあらぬかりの子をいづ方にかはとりかへすべき」を、氾濫の發句 としたのが「數ならぬかひ こや誰かとりかくす」である。源氏は帚黑の歌を見て、この大將のかゝるはかなし言ひたるも、まだこそ聞かざりつれ、珍しうと笑つた。光氏もあの帚男のかゝるはかなき戯れごとはまだ聞かず、いと珍しと笑つた。笑ひに變りはないが、笑ひの底深く潜めるものは同じでない。「心の中にはかく似じたるをいと怪しと思す」すきすきしい心を、「心の中には玉葛が一旦の身のあやまちを、あはれと思ぼしやりしなるらし」の親めく心とは、あまりに大い相違である。これもその筈だ、あの物語に公卿の世の生活軌範を示し、この合卷は武士の世の生活信條を表はすのだから、と決めてしまひたい程の相違である。しかしさう片附けるのはまだ早い。いふところは田舎源氏の一面に過ぎない。

種彥は三編の序に全部引書目錄として源氏の梗概の書、俗解の書、またそれに取材した淨瑠璃、小說の類十數種を揭げてゐる。飜案飜譯の原書である當の源氏物語を除くのはいふまでもない。その中の一つ、都の錦の作、元祿十六年板の風流源氏物語が種彥に與へるところは多い。偐紫田舎源氏の標題さへ、その序の「田舎生立の振袖に似せ紫の下染をしらせ」から得たのではないかと思はれる。一筆庵主人もそれと知つてゐたればこそ、享保元文の頃錦文流の著はせし風流源氏物語なども、飛んだ間違ひをしながら、偐紫部楓染の豫告に、この序文を其まゝ採つて外題に號けしなりともいふのであつた。

種彥にはもつと重要なる參考書、西澤一風の作、元祿十二年板の御前義經記があつた。引書目錄の中に見えないのは、內兜を見透されてはならぬとの用心から、わざと筆頭に据ゑねばならぬお手本を省いたのであつたらう。光源氏の君を光氏と飜し、みつうぢと讀ませたのも、御前義經記に據るといふことは、わたしの推測ではない。「いとをしや御身こそ、九重の八重櫻、盛り久しき橘屋三浦氏權之助義方とて公家ならず武家ならず、浮世の樂を一代に限り」の三浦氏のところに朱線を引いた柳亭所藏の本を見かけた人も現にゐたのである。

權之助義方の子元九郞今義幼にして父に別れ、鞍馬の底寺にあり。母と妹が遊女に身をおとしてゐるとの噂を聞いて、諸國の遊里を巡禮し、大盡客との鞘引やら、身請の公事訴訟やらに、大方ならぬ辛苦を嘗める、といふ義經記の飜案ぶりは、それだけでも田舎源氏の立派なお手本であるところへ、隨分筋の上に無理な運びをつけながら、能も、歌舞伎も、淨瑠璃も、謠談ものそのまゝの形式で填め込んでゆく手法はすつかり種彥を悅ば

せた。しかし、さすがは種彦である。すぐに呼吸を呑み込んで、筋に無理がなく、脚色に統一を缺かぬ程度の物語、それへまた繪雙紙の工夫までを仕上げてしまつた。それにつけても義經記の武家物を好色本に翻案する一風と、平安の古の好色本を武家物に仕立直す種彦とは相違はいかに。元祿と天保といふ時代の上から、假名草紙につゞく浮世草紙と讀本の後を承け嗣ぐ合卷の性質から、考へねばならぬ大い問題であるかも知ない。たゞさし當つての今の場合は、そこまで立ち入らずともよささうである。

種彦がはじめは源氏の本文から疎く、後には努めて近づくといふのは、つまり御前義經記の格に入つたのが、格から出たといふことになる。そのお手本に忠實であつた頃は、あれほどまで、弘徽殿らはなり討、源氏六條通、葵の上、弘徽殿鶉屋產家などの翻案ぶりまでを參考にしたのが、それ等をさしおいて、源氏の本文をぢつと見詰めるやうに變つたのである。さうなつたにせよ、田舍源氏の態度は御前義經記式であつた。「面影うつる何々」といつて、義經記との關係を一風が示してゐるやうに、種彦はどこ迄も「これ何々の面影なり」と源氏物語との關係を斷るのである。種彦は一風の作だけでなく、其頃のは誰のでも、田舍源氏を書いてゆく以上、讀み耽らねばならぬ理由があつた。源氏物語の本文が田舍源氏の素材なら、彼にとつてはそれ等の元祿前後の作品も田舍源氏のなくてかなはぬ資料であつた。

一〇

去年日比谷の講演會で、わたしはどの種彦に就いて語らうかと迷つた。月岑と筠庭に對をなすけふの日の種彦である。近代風俗考證家としての一面を語れば足りると思ひながら、戲作の一面にも觸れなかつたら申譯がないやうにも考へられた。種彦の初期の作物には考證と創作とが別々に動き、晩年になるに從つて互に融け合ふ結果をなすといふ話は、とかうに迷つた擧句の窮策であつた。さてそれを述べる段になつて、眼の前にちらつくのは、曾我太夫染であつた。元祿年間曾我狂言、と角に書いたこの合卷のはし書であつた。「近松門左衞門はじめは歌舞伎狂言の作者なり、其頃の正本曾我多遊婦染と云ふを友人の許より借得て、是を燈下に朗誦すれば、恰も百有余年の昔狂言を目前視るこゝちしていと珍かなりければ古風を世に傳へまほしくて趣向は原本を聊かも翻す、たゞ辭のみ今様にとりなし、標題も其まゝ曾我昔狂言となづけぬ。原本に年號無しといへども、元祿六七年の頃なるべしと卷中に考る所あり、事なかけれ

ば爰にもらしつ」といふはし書は、考證と創作とを兼ね備へる種彦の態度を如實に語る。わたくしの講演はそれから口を切つた。

この考證と創作との關係の推移の跡は殊に田舍源氏に鮮に見られる。草雙紙としてのそれは、もとより正しき室町風俗を期待しないにしろ、部分的には一々據るところを欲した。風俗考證の結果、得た知識は又作中に用ゐたかつた。たとへば古い遊びの品を考へ得れば、書き替への折に用ゐようとする。つまり、十種香、貝盡ひ、篇突、火文字草の收めどころにいかに苦心したかは初編の草稿から知られる。並べ替へたり、消して見たり、漸く「頃は睦月の下旬、ついまつ十種香貝おほひ、さまざまの遊びを仕盡して」と初編のはじめに所を得た後も、また篇突火文字草を棄てをしみ、更にもう一度ついまつ、十種香をくりかへさうと試みるのである。草稿によらずとも、十編の頃は光氏に「花が咲けかしイヨ八重櫻が」の小歌を謡はせると、次の十一編の序をその解說に當てゝしまつた。十三編に花鳥風月といふ二人の神子を趣向に假りるとては、また慶安出板の花鳥風月の解說に序のすべてを投した。三十九編になると餘程勝手が違つて來る。明石姬が古満野といふ物語繪を見る所に、作者が斷つた言葉「古満野の物語の名は、枕草紙にも見えたれども、今は絕えたりとぞ、鉢かつきの草紙のたぐひに取りかへんと思ひしが、似よりたる物語を見出でざれば、これとうつぼと住吉は源氏のまゝにて改めず」から、いかに似よりの物搜しに苦心したかゞ覗はれる。似よりの物さへあれば、そつとそのまゝにしたかゞ覗はれる。似よりの物さへあれば、そつとそのまゝに何ともいはずにゐるまでになつたのである。三十七編に本文の戀文とは趣を異にする氏仲の手紙は、その頃都に名代の本屋平樂寺とまんぢうやの二軒への唐本の注文書であつた。この凝つた趣向をも惜しげなく、さら〳〵と書いておく。心にくい態度になつた。たま〳〵野暮らしく註めくものを添へた時は、長い考證一篇を中に藏する場合である。行幸の卷、帝は源氏の君へ歌たとへば雉子一枝奉らせられる。雉子一枝とは耳うとい風俗である。そこで種彦は義稙公をして紫に雉をつけた畫の扇に歌を書かせる、これがためにまづ大井川の扇流しの趣向を案出したのである。かゝる興味に生くるかぎり、どうして源氏の本文の翻譯で滿足することが出來よう。田舍源氏が四十編でをはらず、源平物語の全部を書きかへたにしろ「田舍源氏」はつひに失はれる折がなかつたと思はれる。

二

近き世の風俗資料の積み重なつてゐる書齋に　机を据ゑて、

源氏の本文を見入りながら、田舍源氏の筆を執つてゐる種彦を、住吉物語の作者などに比べるのは、あまりに馬鹿々々しいことであらうか。鎌倉の世は平安朝なつかしく、ゆかしかつた。その文藝はたゞ尊くおもはれてゐた。その頃の才筆の一人はその名古く傳はつて、そのものすでに滅んだ住吉物語を惜しむあまりに、同じやうな筋と聞く落窪物語を據りどころとして一編の物語を作つた。新しい住吉物語は斯うして出來たのである。田舍源氏もまたさうでなかつたらうか。たゞ種彦は源氏物語に對しては、多く學問の尊さを考へる。その代りに、元祿の世に限りなくなつかしさ、ゆかしさを寄せる。元祿の世を闡明せんとする知識から出立して、興味は室町の時代にまで溯る。田舍源氏はさういふ手順を經て成立したのである。

寫本から寫本へ移る鎌倉の世と事情を異にする文政天保の頃である。住吉物語の作者だちが夢にも知らぬ出板の世界が展開してゐる。又相變らず賣出しより、こゝへも三部、かしこへ五部、深山おろしに山吹の花ふき散らしておもとめを願ふは鶴屋云々と種彦は板元鶴屋のために四十偏の序を書いた。田舍源氏だけでなく、いろいろの草雙紙の上で、板元のためにも、種彦自身のためにも度々書いたことのある言葉である。それは言葉の洒落だけでなかつた。今なら印稅沙汰といふところである。しかし勘定づくだけでもなかつた。賣れるに從つて第二の修紫樓も出來る、好きな元祿前後の本も買へるのであるから、それに越したことはないが、種彦の熱意はたゞそれだけに動くのでない。賣れなくなつたら、續きの筆を折らねばならぬ。それが作者として、最もいたましき運命である。そんな羽目に陷らないで濟ましたい、と思ふばかりに鏤刻の苦心を重ねた。さういはれても仕方がない種彦もゐた。無理ならぬことである。一編といつたところが、たかだか二十枚か、そこそこの薄い冊子二三編で來年まで讀者の興味



再稿本

を繋いでゆくのである。自分だけの好みではかなはぬ譯がある。種彦はその二編、三編づゝで十四年の間、三十八編を出すまで讀者を繫ぎおほせたのである。外界の事情さへなかつたら、魔法使ひの婆に呪はれた子供のやうに、讀者はぞろ／＼と三十九編、四十編、それからそれとあとをついて行つたのであらう。其紫鄙廼俤の出板の事情がなほ裏書する。

どうがなして當りをとらう、この用心は幾度となく腹案を練らせる、さうして初稿の筆を執る、その筆はあらぬ方へ動くこともある、世間を忘れたおのが興味がさうさせるのであつた。世間と自分との關係にも、十四年の間にはかなりの推移があることはあつたが、初稿成つた後の運びはいつも同じ事になる。例の下繪にとりかゝる。どんなに忘れたにせよ、世間と當りへの工夫が雲のやうに種彦の胸裏を徂徠する。さうして初稿本には見うけない、も一人の種彦の姿を再稿本の上に見かける。



八編より

その種彦の姿を數へることは面白い。けれど今までさへ話が長びき過ぎた。よい程に切上げねばならない。

種彦の如才なさは國貞への誂へでも知られる。こゝには一つの例だけをあげる。羽織を疊んでゐるところに說明を加へる代りに「光さんの羽織でも疊んでおかう」と書いた。これまでを筋の上に浮び出させる。誂への心持もその方がよく通ずる。歌舞伎、淨瑠璃を、物語の中に融し込む術を知らない御前義經記の作者に、この手際を見せたかつた。

合卷と役者繪との關係と、言葉をあらためていへば角も立たう。芝居好きの種彦は讀者にも芝居好きを豫想する。こゝには、一つの例をあげる。國貞の誂へにも「半四郎に似た杉生といふ女」が、といふのであつた。これがまた筋の芝居がゝりと共に贔屓を悅ばせたのである。

風流源氏物語は元祿の世の啓蒙と享樂とに滿ちた草紙であつ

た。楊貴妃のためしも引き出でつべうといへば、事足るものを、都の錦は斯うも書きしるす。「楊貴妃は本后ならねども晝は終日、酒宴舞樂にてくらし、夜は夜もすがら千話まじくら、表裏なき紅の夜着たゞ二人寢の長枕、金屏さらさら引まはし、それにはあらで息づかひ、聞くに氣味よく、心地よく專寵愛かぎりなし」おぼろに、かすかに、ほのめかした古の筆のあとをけざやかに脂氣強くいひかへるこの風流物と、田舍源氏の翻案ぶりは、大い相違であつた。戀も義理に書き直されてゐる。それでも都の錦の筆ほどに、いやもつと強く濃くものをいふ國貞の繪であつた。どの編であつたか、今はしかとおぼえてゐないが、誂への言葉に、「膝を割つて赤いものをちらつかせてゐる」といふがあるのを記憶してゐる。これも商賣氣の一つである。

家の構へやう、家の作りざま、さては調度の類ひになると、とりわけて下繪に細い注意を拂つてゐる。誂への言葉もなかなか嚴しい。それ等の幾つは座右の古書の中から材料を得てゐることが指摘される。不思議なことに、それがお濱御殿にも、大奥にも似通ふところがあつたのか、種彦が田舍源氏のお咎めは、その尊い場所を繪にしたためといはれてゐる。果してさうであるか、どうかを詳にしない。けれど妻妾多き家齊將軍の奥向を光氏の名に於て寫し出したといふことの妄なるは源氏物語と對比して、また初稿本の推敲のあとを讀んで、釋明せられる。たゞ種彦はかつてそれ等の巷說あるを知つて、却つて悅びはしなかつたか。何故かといへば、大奥を雲のかなたに仰ぐ人人の田舍源氏に對する興味はそれあることによつて一段を加へると信じたからである。一犬の虛は萬犬の實を傳へて、つひに種彦を死に導いたのであるか。自殺說が眞ならば再稿本中の商賣氣が種彦を殺したことになる。

再稿本は殘ること少く、しかも、散り散りになつてゐる。これにつけても、わたしは、一編をも散佚しない初稿本の存在を祝福する。廓大鏡を手に、眼を痛めながらぽつぽつと讀んでは、板本に朱を加へる手數を厭つてはならない。

さてもさる日あるところの賣立に、ほんのちらりと見かけた半兵衞御千代針供養御事始の稿本は誰が手に落ちたのであらう。鯉東米、即ち振鷺亭のその作は、未刊の書である。種彦これを傳へ得てその趣向を假りて、新刻物語を作つた。事は種彦の識語によつて明である。種彦が振鷺亭に負ふ所はどれほどであつたか。田舍源氏三十九編四十編と其紫部趣佛との關係をおもふにつけても、ゆかしさに堪へない。

稿成つて後三日、笹野堅氏書を寄せて、針供養其他を獲たることを告げらる。うれしさと妬しさと相半ばす。氏今一年志願兵として騎兵聯隊にあり。遠く電話によつてこの離れ業を演じたると聞けばなり。

明治に於ける繪畫思潮の推移

川路柳虹

一

わが國の繪畫史のうへで、明治といふ時代が、どういふ位置を占めるであらうかは、未だ明確な判斷は下せないかも知れない。けれども既に半世紀を經過した今日では、現在渦中にある種々な傾向や運動はしばらく措き、今までの推移變轉をやゝ批評的に見うるだけの時間的距離は與へらるゝ時に達した。そして私たちは此の半世紀の間に維持してきた作品個々の評價如何といふより、むしろそれを基礎づける背後の美術思潮の變轉がより興味ふかく感ぜられる。

大きく言へば美術を通じて見る一時代の文化相に一番ふかく興味がもてるのである。明治の政變がそれ以前の文明と以後とに明確な一線を劃した如く、繪畫の上に於てもそこに充分異る一つのエポツクは劃し得る。私は近頃日本に移入された歐風畫の歷史を多少調べつゝあるが、歐風畫の移入は當然歐風思潮の移入の上に存立理由をもつものであり、また傳習的技法、傳統的形式の保存は傳習思潮、傳統文明そのものゝ現存を確保せるものであるから、繪畫の上に現はれたる傾向も同時代の思潮を示すには充分である。明治のはじめから存した歐化主義と國粹主義、急進思潮と反動思潮、乃至その折衷及び同化、それらは過去半世紀の繪畫の製作と、それを裏づける思潮の容態を語るに充分である。私はこんな點から甚だ大ざつぱ乍ら短い感想を記してみたく思ふ。

吾々は今日わが國の繪畫の上に所謂日本畫といふものゝ存在も洋畫と稱するものゝ存在も共に認めてゐる。それは各々異る

用材と傳習技法と形式とを以て存在してゐるのであるがこの兩者の差を內面的に見るなら洋畫の中にも守舊派があれば日本畫の中にも急進派がある。外邦移入の形式なるが故に新しく、國民的歷史的形式なるが故に古いといふやうなこともない。すべては千差萬別である。

日本に於ける歐風畫の起原へ遡れば遠く天文年間天主敎の移入と共にあるが、寬永十四年の天草亂は外邦思潮に對する禁壓と同時に外邦藝術に對する大きい呪咀ともなつてこれがやゝ寬容な態度を以て迎へらるゝに至つたのは八代將軍吉宗の治世以後である。その最も初めに移入せられたものは恐らく宗敎上の禮拜に供さるゝ聖畫の油繪であつたらうが、それとともに何程かの新樣繪畫が移入されたのも想像される。併しそれらで史に殘つてゐるものが殆んどない。たゞこれらから模倣して、邦人として油繪を描くもの、また銅版畫の技を學ぶものは長崎などには相當あつたのであらうが、これらの中で最初の人として傳られてゐるのは山田右衛門作である。彼は有名な切支丹で天草亂には一方の將であつたが彼の作と稱する「西歐王族騎馬圖屛風」は會津の松平容大子爵の家藏となつて現存してゐる。併しこれも正確な記錄があつてのことではなく傳右衛門作としてその作品が示されてゐるので彼の技の如何をこれらから判決しうべくもない。

日本畫の上に洋風畫の影響を見出さうとすれば寫實畫家としての應擧もさうであらうし、奧村政信もさうであらうし、鳥居派の諸畫家の描いた芝居繪の如きには明確に西洋畫法が示されてゐる。が切支丹渡來以來の所謂南蠻繪は全然洋畫の觀察と技法とを土台にしたもので油繪の用材によらざる繪畫にも明確にその影響は示されてゐる。川原慶賀、荒木如元（元慶）喜多元規、平賀鳩溪らの描くものは夫れである。川原慶賀の「出島蘭人興宴圖」の如きは浮世繪の線條を用ひながら室內と室外の遠近濃淡の意をよく說明してゐる。加ふるに圖題が紅毛人の日本の舞妓を擁して西洋風のダンスを行つてゐるのをチョン髷の役人と紅毛人が椅子により卓上の馳走を味ひ乍ら眺めてゐるが如き興趣をそゝるものである。荒木如元は繪目利と稱して蕃畫の唯一な鑑賞家とされてゐたが彼の作と傳へられてゐる一圖に「港の圖」と稱する油繪があるがこれは恐らく十七世紀和蘭陀風景畫の模寫乃至飜案の作であらう。その港は全然外國の港を描きながら中に帆かけ船や傳馬船をも加へてある。がこの圖の如きが日本人の作とすれば日本の歐風畫の先蹤をなすものに異ひない。

が歐風の用材技法を以て日本人としての洋畫を創始したもの

は云ふ迄もなく司馬江漢である。日本の歐風美術は最初葡萄牙人によつて齎らされた天主教の渡來以後和蘭人によつて導かれたこと、日本の近世文明が當時世界の海上を支配した和蘭との交渉によつて開かれたことに因するは當然であるが、この異邦文明の郷土化されて美術の上にも明確な特徴を示す迄には爾後永い年代を要したのである。そして江漢の先蹤とも見るべきものに佐竹曙山、小野田直武らもあるが彼らによつて開かれた日本の洋畫は亞歐堂田善、安田雪州らの歐風心醉家によつて特に銅版畫の上に特筆すべき技を示したが江漢の沒後はさして異材も出でなかつた。化政以後安政迄は徳川文化が爛熟の極頽廢を見んとする時であり、外國勢力の日本を政治的外交的軍事的に波瀾の渦中へ導き入れんとする時代であつたが、黒船來航を機として西洋事情の研究はむしろ當然の必要となるに及んで幕府の外來思潮研究は遂に蕃書調所の設置を必要とした。そして、これが後に開成所となつてこゝに外國美術の研究も行はるゝことゝなつたことが日本における洋畫勃興の端緒を作つたのである。即ち明治以前における洋畫移入の經路はかくして明治の政變と同時に汪然たる歐化主義を呼んで洋風畫の流行を興したのであつた。

開成所にあつて洋畫を研究したものに川上冬崖があつた。冬崖は南宗畫にも巧みであつたが夙くから洋畫に眼をつけ舶來の書や江漢の遺法によつてその技を研究したのである。この頃(安政年間)ロンドン・ニウスの特派員として日本に來てゐた畫家にチャーレス・ワアグマンといふのがあつたが彼の存在は期せずして當時の洋風畫に志すものゝ指南者となつた。ワアグマンの遺作は今日東京美術學校その他に殘つてゐるがその技術は勿論幼稚なもので、彼は新聞の挿畫々家であると同時に報道記者でもあつたのである。そしてこの門から高橋由一をはじめ山本芳翠、五姓田芳柳の如きが出た。日本畫家にして彼に洋畫の技を學んだものも尠からず、川端玉章をはじめ狩野友信の如きも夫れである。

併し川上冬崖、高橋由一、山本芳翠、五姓田芳柳らによつて所謂明治初期の畫界は當時の歐化思想の流行と共に在來の四條、狩野、土佐、南畫、乃至浮世繪の諸流派を嶄然抜んでゝ洋畫派の存在を世間に確知せしめたのである。かうして明治九年に時の政府は工部大學内に工部美術學校を設けて伊太利亞から畫家アントニオ・フォンタネージーを聘してはじめて正式の洋畫教授を開くの機運を作つた。この學校は不幸にしてわづか一年半より存立しなかつたが大鳥圭介を校長とし、フォンタネージーを主任教授とし、美術教育としても日本に於てはじめての範を

示したのである。フォンタネージーは當時の伊太利畫界においても相當の大家でトリノのアカデミ・アルベチノナ美術學校の教授でアカデミックな伊太利風といふより、フランス浪漫派の影響をうけ、ことにバルビゾンの風景畫から示唆をうけた畫風をもつてをつた。がそれ迄の日本にきてゐた外國畫家たるワアグマンなどとは雲泥の相違ある大家であり、且つ畫家教授であつたゞけに彼の渡來は洋畫といふものゝ正式の畫法、畫學といふものゝ基本を植えつけることが出來た。

この學校からは後に明治畫界に名をなした小山正太郎、中丸精十郎、淺井忠、松岡壽らを出したが、その繪畫教授は西洋風に組織立つたやり方をもつて試みられたのである。ここで教へられたものゝ中にはまだ油繪はなかつたやうである。學科別は三つに別たれ、豫科、畫學科、彫刻學科とあつて、彫刻の方はフオンタネージーと共にヴイチエント・ラグウザといふ教師がきたのである。が畫學科といつて繪畫科と呼ばなかつたのはいかなる理由によるかは詳らかでないが、事實上こゝで教へてゐたものは畫學が主で、即ち用器畫法、陰影法、透視畫法、遠近法を先づ教へて西洋畫なるものゝ學理に基く事を知らしめようとした。そして實技としてはコンテ、鉛筆等による寫生を主としてゐたもので未だ生人モデルを用ふるデッサンはなく單に「山水並に禽獸眞寫法」「草花動物を形容擬寫する法」等の教課があつたのである。而してこの學校の入學資格としては十五歳から三十歳迄の男子、及び十五歳以上二十歳以下の女子を以てし教室を二區に分けて第一區を『既ニ稍日本風ノ技術ニ得ル所アリテ專ラ實地修業ヲ望ム者』と第二區を『論理、實地共新ニ修業ヲ望ム者』とに分けて教へたのである。この時代に男女共學を既に許したことなども當時の歐化思潮の一端を示してゐよう。洋畫を學んでゐたものは殆んど皆無なのであるから日本畫の技術の素養あるものを一つの修學條件としたのも自然であり、そしてこゝでフォンタネージーははじめて日本人に洋畫の基礎が實在の寫實を元とすべきであり、物體の性質、物體の空間的關係、光線、遠近、等の合理的觀察の下に繪畫の技法の生るべきことを最初に教へたのであつた。そしてその畫法なるものは東洋古來の畫論畫法と同じく「いかなる時にはいかに描くべし」といふ風の畫法で芥子園畫傳流の西洋アカデミック式ドグマが見えるのも面白い。當時の學生藤雅三の筆記したフォンタネージーの口述記の中には風景寫生に關するものがあるが、そこには風景寫生に用ふる色彩の用を示してゐる一節がある。

「教師曰ク、萬象采色ヲ以テ體ヲナスト雖モ原色ニ由ツテ描カザルヲ得ズ。然レバ即チ原色トハ空ヲ以テ定ムベシ。故ニ

天氣晴朗青雲出ヅルトキハ萬象ノ光線往々灰色ナル者ヲ以テ點ズベシ。或は陰天ニシテ白雲空ヲ蔽フ時ハ萬象皆白色ニ順ジタル色ヲ混和シ光線ニ加フベシ。」

などゝあり、繪具の用法をのべて油繪に於ける風景寫生の方法を述べたものには

「油繪寫生ハ最初下拵ヘ最モ要用ナリ。スベテ反對ノ色ヲ粧フベシ。空及ビ水ナドハびんくまつだあノ類ヲ薄メテ塗リ、地面ノ近キハゑめらうど、びりぢやんヲ用ヒ、樹ノ影ニハてるをんぶるヲ薄ク塗ルベシ。」

などゝある。以てその畫法なるもの丶凡そを推察するに難くない。

二

この洋畫の搖籃時代に當つて在來の邦畫がいかなる狀態にあつたかといふことを考へる必要があるが、そこにはたゞ傳習的な諸畫派が辛うじて存在してゐたのである。維新の政黨は政治以外社會的經濟的動搖を來したのであるからその當初世間はなほ當分繪畫の如きに眼をくれるだけの餘裕はなかつたと同時に、明治政府の仕事が緒について諸般の事業が新な活躍をはじめた頃は一切の歐化的思潮によつて凡てが進行したのであるから、繪畫の如きも邦畫よりも洋畫が一つの偉大な勢力をもつやうになつたのである。また其實この洋畫の精神技法は因襲的邦畫の技法精神に偉大な刺戟を與へずには措かなかつた。それ故單に古法の繩墨を守るものは世人に多くの興味を與へえないがために相當の名流にして衣食に窮するものは數知れずあつたのである。幕末から明治初年にかけての名家で江戸にあつたものには狩野派に芳崖雅邦あり、南宗に春木南溟、田崎草雲、野口幽谷、瀧和亭らあり、四條派に柴田是眞、土佐狩野四條らを綜合した菊池容齋の如きあり、浮世繪に月岡芳年、二世廣重小林淸親らあり、土佐派住吉派に山名貫義の如き名家もあつたのであるが繪畫を好む士人の好尙は尤も多く南宗文人の畫風乃至文晁派の如きに限られ、狩野派は餘喘を保ち浮世繪も纖弱な技に多くは墮してゐたのである。

かゝる時代にあつて洋畫の移入及び勃興は邦畫の上にも何らか覺醒を與へずには措かなかつた。と同時に明治初年よりの極端な歐化主義も、維新の事業緒につくと同時に漸次國民的反省は生れ、更にこれが反動思想となつて國粹的思潮は歐化思潮に對立する勢ひを示すことゝなつて以來、繪畫に於ても俄然一種の民族的自覺は起つた。そしてこの國民的覺醒を美術の上に與へた先達は明治十一年に東京大學に聘せられて來朝した米人

アーネスト・フエノロサの功に歸せねばならぬ。彼は大學にあつては專ら政治經濟哲學の諸科を擔當したが東洋哲學ことに佛教に興味をもつてゐたことから進んで日本の古美術の研究に入り、それが遂に彼をして日本美術の獨特な妙味を感得するに至つたのである。而してこの結果は當時の徒らに歐化せんとする傾向に對して反省を與へんとする努力に立ち到つた。これに共鳴し、又示唆され、日本美術の傳統に據り乍ら新しき理想に生きようとする新美術の創造に心を傾けたものは當時彼の教へを大學に於て受けつゝあつた岡倉天心と、狩野芳崖、橋本雅邦らであつた。彼らはフエノロサから日本美術の尊重を教へられたと同時にフエノロサの日本美術への愛好心を細かな理解に迄導いたものはまた岡倉であり、芳崖であつた。フエノロサは狩野永悳について種々鑑識の智識をも究め岡倉や彼の同志と我が古美術に關する研究鑑賞のため鑑畫會なるものを興した位の熱心家である。彼の熱心と岡倉の熱とは遂に明治繪畫の上に特筆するに價へする創作力を作つた。

芳崖も雅邦も共に狩野派である。日本化された漢畫は中古以來德川末期迄その命脈を柳營の畫局としてつないできた。禁裡の繪所としての土佐派が宮廷の保護永きによつて却つて凡化した如く、幕府の保護による狩野派もその繪所としての空虛な權勢を所謂五家の中に守つたゞけで單に因襲の畫技を繰り返すのみでみぢめなデカダンスに終つたのである。これに全く新な息を吹入れ新生の創造に目覺ましたものは明治に入つて先づ芳崖である。芳崖はたしかに鬼才であつた。そして創造の熱に燃えてゐた苦鬪の兒である。彼は漢畫の線條に洋畫の設色を加へて邦畫の上に全く新な血路を開かうとした。あの「不動明王」や「達摩」や「山路」や「慈母觀音」に見る新意はたしかに尊崇さるべきものである。彼は洋畫に影響されたがそれは皮相な寫實や合理主義ではなくてその複雜な色彩感に於てゞある。しかも彼はその設色すら一つの統合を以て華やかに、深味と强さをもつ裝飾的な色彩に創意したのである。

彼に比すると雅邦は創意といふよりむしろ良き意味の調和的同化的創造をなしたといふ方を當れりとする。芳崖には覇氣があつた。力と强さが溢れてゐた。雅邦に見るものは穩雅な調和的資質である。芳崖は漢畫の線條を最も遒勁に生かし、或る場合原始的熱情をさへもつてをつた。古永德の如き意志的な力さへ備はつてゐた。しかし雅邦は近世の狩野派の傳統をむしろ和らかな、內省的な靜かさに導いたのである。そして四條や倭繪や宋元畫派の特質をもよく味了した。線は決して弱いのではないが剛直な覇氣あるものではなく端嚴ななかに醇雅な風韻を含

ませてゐた。彼も洋畫を一時修めた。そして明治初年には邦畫の畫技を以て衣食することに窮して海軍省に出仕し製圖掛をつとめて月給八圓かを給されてゐたのである。當時畫いた雅邦の油繪にスクーナア形の軍艦を描いた一圖が今も殘つてゐる。彼は油畫を修めたがふかく夫れには動かされなかつたらしい。ただ傳習そのまゝの狩野派でなくそこに別途な新創造を示した基底には芳崖と同じく一種の新理想をもつてゐたのである。而してこの新理想主義こそフエノロサに啓發された鬼才岡倉天心の猛然立つて興した明治美術史上の一大運動たる後年の日本美術院の運動の核心をなすものであつたのである。

私は玆で當時の一々の畫家の技藝を評隲しようとは思はない。私に興味のあることは日本美術院の新藝術を生ますに當つた岡倉その人の思想如何の檢討にある。そして洋畫派の勃興的氣運が一方に旺盛となる傾向を示した時代に一つの反動思想として、また新な理想主義として立つたこの美術上の新東洋主義國粹主義こそは全く岡倉自身の理想から生れたものに他ならぬからである。

彼は明治十九年廿五歲の時文部省から美術取調委員として歐米を巡歷し翌年歸朝したが明治二十二年に開校せられた東京美術學校の幹事となりその翌年には校長となつた。東京美術學校は工部美術學校が西洋の畫技を以て當來の繪畫となさんとして起されたのと異り、全然邦畫を根據として起されたのである。岡倉の美術に對する新しき理想は美術學校の敎守に移された。—然し美術學校は文部省に直屬する學校であるから一切が岡倉の新美術主義にのみ據つたのではない。雅邦ははじめから彼と參與したが同時に四條派の川端玉章も敎授となるに至つたのである。而して美術學校に西洋畫科と圖按科の設置を見るに至つたのは明治二十九年であり、所謂美術學校騷動によつて彼が學校を退くに至つたのは三十一年である。彼が雅邦と共に年少氣銳の門下、下村觀山、横山大觀、菱田春草、西鄕孤月らと日本美術院の運動を起したのは實にこの年である。

彼は東西の藝術をよく理解し評隲した。そして決して偏破な思想には陷らなかつたのである。今日から彼を見ると、彼は宛然美術に於ても排外的であつたやうに感ぜられるかはしれないが、むしろ彼は最も積極的なる保守派であつたのである。當時にあつて彼位穩健な見地から東西の繪畫を批判してゐたものはなかつた。と同時に彼の立脚地が當然危殆に瀕しようとしてゐる邦畫の傾向に對して、これを救ふ熱意はどこ迄も邦畫そのものゝ性質を理解した上での新理想主義に據らざるを得なかつたのであらう。彼は日本美術の特質を論ずるに當つても明快

な論理をもつてゐた。と同時に彼の趣味好尚はたんとしても東洋的であり、またその東洋的なることの中心が理想的、或は禪的（暗示的）傾向に走つた點からして、日本美術中にあつても桃山の障壁畫の如き、浮世繪畫派の如くに薄くして、足利期の宋元畫派に最も厚かつたのも理由あることとである。彼が晩年帝國大學に於て講じた「泰東巧藝史」の如きは東洋美術に對する獨創的な分類法に興味は感じられるが、かゝる趣味的傾向が益々著しいのを發見する。私は日本畫史上で最も偉大なルネッサンスを桃山期の繪畫に見、永德山樂を驚嘆すべき邦土の大天才となしてゐるものであるが、彼によると永德山樂の如きは「色彩上の大罪惡人」と目されてゐる。彼は支那美術の熱心な敬慕者として日本畫の精神的要素を支那美術の傳統そのものと觀ずることに執してゐた。彼の講述した「日本美術史」中に謝赫の六法に關する說があるが『氣韻生動は實に東洋美術の第一義を道破せるものといふべし。若し此時の畫論にして氣韻を重んぜず寫生を重んずるの主義に立たば今の東洋美術は必ずその體系を異にせるならん』と言ひ、東洋畫の線條の生命を說いて骨法用筆の至當を語り、西洋畫の線條は單なる輪廓なる故に陰影の如きを需む所以を語る。而して應物象形こそ西洋畫の必ず第一位に置くべきものであらうが「寫生のみにて美は全く成立せず」と道破する。そして浮世繪の如きは單に六法中の「隨類賦彩のみあつて他を知らざるなり」と言つてゐる。であるから小山正太郎が嘗て東洋學藝雜誌々上に『書は美術ならず』の論が出た時書が東洋美術と不離な立脚地を論じて堂々論駁したのである。

彼が私のいふ「積極的なる保守主義者」であつたことは、彼が海外に於て英文を以て發表した數種の美術論に於てもわかる。即ち彼は日本繪畫の正當な存在理由をいかに西人に示すべきかに就いて努力した。そして彼が所謂排外主義者でなく今日の時代に順應する日本美術、即ち維新の革命によつて、西歐文明を消化する努力の上に立つた新日本の美術としての繪畫を發達せしめんがために彼は傳統的精神に據つて彼の長を採ることに注集されたのである。彼は米國雜誌インタアナショナル・コオタリー誌上に於て『日本的見地より見たる現代美術（モダンアート フロム エ ジヤパニース ポイント オブ ビウ）』の一文を發表した中に次のやうな一節がある。

『日本美術中にはそれが東洋的性質を帶びてゐるがために西洋人には却てわからないといふ一面がある。東洋の一元的な思想は西洋で擴張的なものとなつたものを集中的にしてしまつた。……或る場合には色や影は思想の純一を保持する爲に除外される……かくの如き集中的畫法を取つた詩が享樂されたといふことは日本の社會の美術的文化を言明するものである。それは畫

家がわざと殘して置いた背景に同感して之をしてくれる才能が公衆にある事を示す。公衆は畫家と同樣の程度に於て畫家であつた。何となれば兩者がゐて一つの思想がまとまつたのであるから。かくの如きは茶式がこの同感の術を練習する眞面目な機會として一般に稽古されたものである。疑ひもなく茶式は式でないから式と呼ばれる。(As you are doubtless aware, the tea-ceremony is called a ceremony, because it is not a ceremony.)この浮世の生活の事相を調和的に愛賞する事を覺える一つの活きた方法であつたのである。

日本美術が此の高い理想に外れないでゐたとは見へない、茶式と同樣、しばしば形式的無意義に陷つた。我々は藝術衝動の趨勢を感じてその生々たる精力を感じない。併し暗示といふ事を尙ぶ念は我々の美術思想の中核であつた。併し理想はいつもそこにあつた。それに近づく事が出來なかつた時代に於ても。

保守的なものは此等の古い理想が捨てられるのは悲しい事であると考へる。自分はこの保守派の一人として支那日本の繪畫の傳統が全く蔑にされる事を悲しまないではゐられない。私は日本は西洋の方法を學ぶべからずと言ふのではない。それによつて我が在來の表現方法に加へる事が出來るからである。又私は西洋文明が積んで來た豐富な思想に同化すべからずといふのではない。却つて日本美術の心的準備は世界の新理想を汲んで更に強められねばならぬと察する一人である。更に一般的となる事によつて我々は更に人間的になれる、暗示の價値はそれが運んでゐる思想の深さに比例する。私が證明したい點は私は、個性を破壞する樣な模倣の方法は止めよと言ふのである。』(『天心全集による』)

東洋畫の理想が現實になく精神にありと見ることは今日やゝ立ち遲れの常識論の一つでもあるが吾々の傳統的に東洋畫に養はれた觀照法は自然を自然として見ずそれが內部生命の表象と見ることにある。岡倉は洋畫の人體本位思想と東洋畫の自然本位思想を對立さして斯ういつた。

『――外面の自然は總て假面に過ぎない。我々の前に見る樹木は皆その外面を通して內部の自然力が現はれようとしてあがいてゐる樣に見える。重要なものは單に枝や葉ばかりでない。すべての自然物象は見ゆるが如く此等の形象を通じて流れ向上生生を欲してゐる生の悅びが重要なのである。即ち東洋の美術家は自然からもその本質的なものを攝取しようとした。されば彼らは總ての細目を摘出せずして最も重要だと考へた處のみを選んだのである。』

だから『我々は希臘人がした樣に人體を光榮あらしめる欲望

を持たなかつた。神の象としての人體に特別の尊敬を拂ふ心持も持つてゐない。』といふ。彼は人物畫といふのが東洋畫に於て重要でない理由を人間といふものゝ生活が口に精神的な事を云ひ乍らも人間としての衣食の生活をすることに於て決して完全でない――から、つまり物質的動物的半面があるからさういふ人間的屬性が至高な美の對象として描出に價ひしないことを語つたのである。がこれは早計な論で勿論かういふ見地から今日の西洋美術を否定し非難するが如きことは出來ない。むしろ彼のいふが如く『これらの形象を通じて流れ向上生々を欲してゐる生の悅びが重要』なことは決して東西繪畫の差によつて異る要素ではないのである。偉大な畫家はいづこに於ても形似に捉はれず生命を見てゐる。たゞ東西繪畫がその表現の方法手段に於てこの本質生命に到るの道を異にするから一見形似に執する西洋繪畫がその本質生命を他にしてゐるかに見える誤謬であることは今日の美術家は常識として知つてよう。が日本畫の生命を說くに當つて彼はかゝる精神的理想的側面が唯一のものであることを邦畫の存在理由のため强調したのである。と同時に彼が著しく二元的な物心異同の說を持し、空な唯心論を證據にしてゐたことも知られるのである。

がこの唯心論は勿論美の至高を信ずる理想論であると共に又それが決して社會的に孤立であつてはならないことを彼は信じたのである。彼は美術批評家としてはよく當時にあつて文明的時代的批判をなすのを忘れなかつた。彼はウイリアム・モリスと同じやうに時代の民本的傾向が機械的に美術をも容易く仕上げようとするとを近代の西洋産業主義の弊に歸してゐたのである。『西洋の諸理想が日本を壓倒して流れて來た結果は慘しかつた。が、日本繪畫に對する損害はもし現代の産業主義に從はなかつたならば輕少なものであつたらう。西洋美術と雖も産業主義には災されてゐるであらう。日本にとつてこれが美術に打ちよせる昔は經濟界の岩壁に打ちよせるものよりも遙に脅威を逞しうしてゐる。産業主義は美術の侍女だ、中世に於ける宗教と自己裝飾がそれであつたやうに。競爭は生活の雜多に引きかへて流行の單一を招く。安いのが勝で、美しいのがよいのでない。市場の民本的無關心は萬事が萬事に野卑な平等といふ色をつける。人間のよし賤しい勞働者であらうとも人間の手の溫かみを感ずる手製品の代りに我々は器械の冷い手の製作品に對してゐる。時代の器械的傾向は美術家をも捉へて存在の唯一義は多にあらずして一であるといふ道理を忘れしめる。彼は餘儀なく創造しないで倍乘する。繪畫は段々手の仕事となつて心の仕事となることが廢れる』

即ち「この心の仕事」への回復を說きここで彼は形似に捉はれて精神を忘れるであらうところの西洋的傾向から脱して、一向に中心生命へ精神へ、と根本を置く東洋美術、日本繪畫の核心へこそ復歸せねばならぬ道とも信じたのである。併し彼には時代の產業的波瀾だけではない。時代このものの一般的現實的傾向に對する不可抗力に對應する明智にはやゝ缺けてゐたのである。彼の保守的反抗は氣概に於て積極的ではあつたが彼の理想とする新しき美術が吾々の新しき文明に根付かうとしてゐた一つの現實的傾向に對してはむしろ拒否的であつたのである。だから日本美術院の運動が當初にあつて新理想的であり、新傾向的であつても日本の一切美術を支配するだけの積極性には至らず、それは今日ある如く時代の影を追ひ乍ら國內的である性質をもつことも一面から言へば當然の結果である。

三

岡倉の思想はかゝる言說の上に明晰であつたが彼の理想の體現は日本美術院の運動にあつた。美術院は美術學校から離れて一つの私設美術學校を作りそこに於て彼の思ふまゝの美術教育を施さうと企てたものであるが、美術教育上に於ても彼が理想と企畫と又美術學校教育なるものに於ける海外の新知識にも彼は十分豐富であつたのである。「美術教育施設に付ての意見」並びにこの「方針」として殘されてゐる彼の遺稿に見ても彼が當時の何人よりもこの方面に造詣を有してゐることが知れる。

が美術院の運動としての新繪畫は當時の畫界にとつて慥かに一驚異ではあつた。それは美術の主張としての新生面であると同時に邦畫としての新技法の創造に多く費されたことにある。就中横山大觀、下村觀山、菱田春草らの技法は新意創造の實を擧げたのである。世間はこれを目して朦朧派と稱した。「それは主として從來の漢畫的教養による線條の他に設色法を用ひ、しかもそれが古來の彩氏體設色とも異つて西洋畫より幾分の示唆をうけた明暗渲染の技を加へたものであつたがために甚だ嶄新に感じられたのである。しかもかゝる技法は決して事物の現實描寫に用ゐられたのではない。彼等の取り扱ふ題材は多く歷史的問題や佛教畫や神仙道釋の架空人物畫や、わづかに自然問題を捉へても甚しく意想化された花鳥圖等に限られてゐた。而してこの事は事物の形似を皮相としてその背後にある或はその中核をなすとも見る內在精神の表現を重んずる結果、この唯心主義を示すべき問題としてかゝる理想的畫題が撰まれたのである。よし自然を描いてもそれは唯心主義を中心とするから形似の寫實をむしろ從とした。彼らは古畫にも傾到したが

その尤も貴むところは足利期の宋元畫派で雪舟雪村を尊むと同時にその源流の宋元の諸大家に學んだのである。

現實は單に形似に過ぎず精神はそれ以外にありと見る二元的觀照は實は一元化さるべきが至當である。精神を高しと見るが故に眼前の現實を拒否することはいかに東西の相違ありと言へ造形美術の本道として許さるべくもない。が所謂西洋畫派の勃興に對する東洋的反動がかゝる精神によつて美術院の畫風を創作せしめたことは岡倉天心の思想によつてゞある。

今日の美術院は再生の美術院で岡倉の沒後新に興されたのである。そこには既に偏狹な精神主義はなく、畫風も同人各自が自由な開拓に俟つものであるが、これは時代の變遷とともにその問題傾向の中心は既に推移してゐる。甚しく寫實的であるものもある。異邦的であるものもある。がしかし美術院創設以來の傳統はいかなる技法いかなる主題もそれが何らかの意味に於て民族的たらんとし、若くは古典的たらんとする傾向の多きを觀取しうる。この意味に於て岡倉のかつての積極的なる保守主義は今日もなほ保有されてゐると見ることも出來る。

美術院の畫風は明治の邦畫の上に一つの新しい典型を植えつけたことは事實である。併し明治の邦畫がこの唯心主義にのみ左右されたのでないこともまた事實である。明治初年以來傳統の諸流派は漸次その固有の流風を墨守するとに執して新發展を望みえなかつたが時代の風潮は自らその諸流派からむしろ綜合的な畫風を生ずるに至つた。そのことは國內的の諸流派すべてが、新興の洋風畫に對する時はそこに邦畫としての特質ある存在を示す以外にないことに於て、諸流派個々の技法の問題よりむしろ日本畫そのものゝ特質が今後にいかに發展すべきかといふことに時代的な懸案が齎らされたからである。今日尙ほ狩野派であり、土佐であり、四條であり南宗である諸畫派はその固有の傳習を守るものはあつても、それは特殊な能手でない限りその存在は甚だ稀薄となつた。恰度音曲にあつて河東であり富本であり一中であり、清元である如き分派も單に今日は三味線樂の形式として殘され、日本音樂として保有されてゐると同じく、德川から明治に繼承された諸畫派もその技法の本格を守るものはむしろ「保存」といふ形式で殘されてゐるのである。今日の多くの畫家はその固有の流派によし立つとも何らか新意を示すために繩墨を守らず、傳習の羈絆を脫してむしろ一切を自己の好むがまゝに綜合しようとしてゐる。今日の所謂日本畫の一切はこの自由を基底として存在してゐる。幕末にあつて文晁の如きはよく一人に於て諸流派を綜合したが、今日ではむしろ時代があらゆる畫家に畫法の自由と綜合とを敎へた觀がある。そして邦

畫が邦畫としての固有の地位を守るべく團體を形づくる傾向が生れてから龍池會、日本美術協會の如きが生じ、これが所謂官展開催の時代に入つて邦畫は全く過去の因習から放たれた新しい日本畫としての創造を示してきたのである。

洋風畫の發達は後段改めて述ぶるが、邦畫の上に洋風畫が陰に陽に影響を與へてきたことは事實である。而して美術院の唯心主義的理想的畫風に對して寫實的自然主義的傾向も漸次顯はるゝに至つた。この傾向を邦畫に於て最も早く顯著に示したものは无聲會の青年畫家であつたであらう。

无聲會は美術院の創立の翌年明治三十二年に旗擧げされてゐる。歷史からいふと可成古い。即ち美術院の理想的傾向に對する反抗としてのこの自然主義運動は當時なほ白面の青年であつた(觀山、大觀らよりずつと後輩の青年)渡邊香涯、結城素明、平福百穗、島崎柳塢、福井江亭らによつて興され、後石井柏亭もこれに加はつた。これらの邦畫家が凡て四條派の出身であり、且つ、素明、百穗、柏亭らが洋畫の素養をもつてゐたことも注目される。素明は學校に於ても秀才で岡倉にも愛されて居り、美術院への加盟を慫慂されたこともあると聞くが、小壯彼の抱懷する繪畫思想の美術院一派と正反對にあることを自覺してゐたが爲めであらう、その乞ひを容れずこの无聲會運動を興したのである。邦畫に於ける寫實主義たる圓山四條の教養とこれに加ふる洋畫の素養をもつて興つたこれらの人の新畫風はいはゞ明治以降西洋畫への侵入を意味した。今日から見てその當初の作が幼稚であつたと言へ、理想より寫實を重しとして邦畫に一生面を開くことへの努力を企てたことは後年の一般的洋風傾向乃至洋風近代主義を採り入れた國畫創作協會らの傾向の先驅をなしたものと言へる。

これらの人々で今日畫界にそれぞれ聲名をえてゐるのは素明、百穗、柏亭三者に盡きるが現在のこれら諸家は各々守るところを異にしてゐるとは言へ、永い間挿畫々家の職にあつた苦勞もその洋風畫的訓練を邦畫の筆技に加ふるの要素となつた。がこの人々の最初は四條派的筆技を洋風的寫生化したことに始まるので美術院一派の偏理想主義の立場からは卑俗にも見えたであらう。又今日の進んだ畫界から見ればむろん淺薄にも感じえられやうが、これを一つの傾向批判の上よりすれば正しく時代の現實的傾向がこの現象を生んだのである。

明治初年に發した洋風畫の勃興は工部美術學校を振出しにその揺籃期を過したと同時にフエノロサ、ついで岡倉らの東洋主義によつてやゝ勢をはゞめられたかの觀もあつたが西洋文明そのものゝ現實的基調は社會一般の施設生活一切に渡る歐風的進

行を如何ともなしえず、繪畫を正にこの潮流の中に生ひ育ち行つて、洋畫も充分一つの確固たる存在を示すに至つたのである。これは思想的にも現實的價値が深き根柢を有するに至つた證左で非合理的よりも合理的なることが價値あることに見らるゝ自然の推移として洋風畫の現實尊重の思想は日本畫に存する非合理主義を其儘には承認しがたき一般傾向を作つたためである。東京美術學校に洋畫科が設置されたのは岡倉が校長時代の末期に近い明治二十九年であるが、日清戰爭後の我國一般の思潮の上から言つても戰勝の原因が固有な國民的精神とこの精神を以て消化した西歐の科學力に負ふ處多きは何人も承認したところである。極端な歐化思想でなくとも、この時代に於て一般の西歐的傾向は寧ろ漸次常識化せんとしたのであらう。されば洋畫の如きも明治當初の幼稚さから漸次覺醒されてきたのは當然である。

明治初年の洋風畫はかのフォンタネージーの教化が然らしめた如く伊太利亞畫派の教養が移殖されたのであるが後に到つて佛蘭西官學派が漸次力をえ、これが完全に勝利を占めたのは明治二十六年佛國から歸朝した黒田淸輝が美術學校に教鞭をとる時代の到來に於てゞある。明治初年油繪の技法を學ばんがために海外に留學したものは不尠あつたがそれは英、米、伊、獨、佛、の諸國に赴いたのであつた。その最も早きものは英國に渡つた國澤新九郎であり、明治四年に日本を去つて十數年を伊太利及び歐米各國に過した河村淸雄もその最初の人であらう。國澤の作はわづかに現在東京美術學校に在るのみでその作風の全豹を知るに由ないがそれは甚しく幼稚な英國式アカデミックを發揮してゐる。河村は主としてヴェニスの官立美術學校に學んだのであるが彼はその本格的なヴェネチア近代畫の流風に學ぶと共に又著しく日本化した油繪の創造に腐心した。彼が歸來描いた特色ある靜物の油繪は即ちこの日本畫的運筆を以てする油繪にあつた。

時代は移つて洋風畫に於ける團體も生るゝに至つた。明治二十二年明治美術會の生誕するに至つたのはこの洋風畫の機運の熟したことを證據立てるものであらう。即ち一面から言へば明治美術會は後の太平洋畫會白馬會らを生むに到る以前の洋畫界の大合同團として日本の洋畫壇がはじめて明確な存在を社會に示した唯一の團體であつたと言へよう。

今日から顧みると黒田淸輝が佛國から歸朝し彼の學んだ佛蘭西官學風に當時彼地に流行の印象派の教條を加味した師ラファエル・コランの畫風を移植するまでのわが洋畫界一般の畫風は伊太利亞風か獨逸風、然らざれば英國風のいづれもアカデミックのみであつた。即ち河村淸雄、松岡壽、小山正太郎、中丸精

十郎みな伊太利亞官學風を繼承し、原田直治郎の獨逸風、淺井忠の英國風（とだけも限れないが）といふ工合で、佛蘭西に學んで佛蘭西畫風を僅かに傳へたものは山本芳翠、後の五姓田義松らであつたのである。松岡や小山や淺井らは純然一家の風を立つてわが明治中期の畫壇の一時期を專有した。山本芳翠、大野幸彥、原田直治郎らの畫風も兎も角目立つた。就中技の確實なのは原田であつた。彼は獨逸に赴き當時の大家ガブリエル・マツクスに就いた。その獨逸留學中のエチュードや肖像等をみると暗い調子の中に冴えた筆觸を見ることが出來る。寫實的技法もしつかりしてゐる。が歸來彼のものした「騎龍觀音」の如きに至るとその日本化せんとする努力に於て明らかに失敗を來してゐる。漢畫の精神を洋風の寫實技を以て表はさんとした如きは一種の折衷畫に終らざるを得なかつたのであらう。

明治美術會はこれらの人々の伊獨風、乃至佛蘭西畫風にしてもきはめてアカデミックな暗い畫風を以て立つ人々によつて創設された。山本芳翠はヂエロォムに學び、五姓田義松はレォン・ボナについて學んだが技はさほど優れてゐるやうにも見えぬ。五姓田の「繰芝居」といふ巴里での構想畫が東京美術學校に殘つてゐるが稚拙なものである。むしろ習作や人物畫に好ましいものがあつたやうだ。

この明治美術會の中堅は小山、淺井、松岡、原田らにあつたが黑田清輝、久米桂一郎、岩村透らが歸朝し、當時の印象派を加味した明るいフランス新官學派を齎らしてから、こゝにはじめて新舊の二派がわが洋畫壇にも生じたのである。そしてこれが又我が洋畫壇に於ける最初の分派でもあつたのである。而して世人は當時この新舊を呼ぶに「脂派」及び「紫派」の稱呼を用ひた。即ち舊派たる伊太利及び北歐系のアカデミックはその色調の晦暗であり、陰影その他に多く褐色系のテール・ドンブル、テールドウシアンの如きを主色としたことが一見脂色を以て描くかを思はしめたに反し、ラファエル・コラン系のフランス新アカデミックは陰影にもコバルトの如き紫色を用ひ、調子は明快で朗らかであつたことが「紫派」と呼ばしむるに適はしかつた。暗い畫派と明るい畫派の對比、並びに硬直な寫實風に對する軟柔な印象風とは明確に誰の眼にも鮮やかな特徵であつた。そしてこの紫派が明治美術會から脫退するに及んで遂に後者の系統が白馬會となり、また前者の系統は相結んで太平洋畫會を組織し明治の洋畫は明らかに二期に入り二派對立の傾向を生んだのである。

二派の差は勿論色彩のみではない。その態度自身の差、主題自身の差にもある。マネ、モネらの印象主義が決してその當時

正しく移入されたのではない。これがわが畫壇に正しい知識を呼び起すに至つたのは明治の末期から大正頭初へかけてゞある。黒田清輝は彼地に於て印象派作家の作品に親しみながら舊來の官學風から見たら異常な革命的畫風であつたがために恰度今日舊き畫家がなほ立體派や一般の抽象的畫風やフオーヴを敬遠する程度に於て、恐らく敬遠したのであらう。そして古典的官學派を明るい調子に導いた外光派以來の自然畫、印象派に影響をうけて明朗溫雅な新アカデミツクを作つたロオルやコランに敬服したのであらう。コランは彼地に於ては當時ロオルよりも名聲は劣つてゐた。コルモンとどうであつたかは知らぬが同じ明るい畫風をもつアカデミシアンの中に彼と匹敵するものはベナアルでも、シヤバでもメナアルでも多くあつたらう。がコランはどういふわけか黒田はじめ日本人の留學生がそこへ集まることが自然となり遂に日本に於ける「紫派」の師となつたのである。彼の良き遺作も日本に相當多いこともこの爲である。コランは「紫派」を作つたが正しい印象派は「紫派」の中にはなかつたのである。黒田の畫風は師風をそのまゝ齎らしたと思はれるほどコランに酷似してゐるがそれが歸朝以來そこに日本的情趣化も企てられ日本人の傳統的趣味にも近づきやすい優雅な諧調と取材をもつことに於て彼の畫風は非常な反響を齎した。それは決して古い因習的な東洋畫題歷史畫題等に向けられたのではない。彼は原田直治郎が「龍騎觀音」を描いたやうな愚かしい折衷畫もなさず、河村清雄が單に油繪具を以てする佐亭流の運筆畫にも赴かなかつた。そこに在る「日本的」は單に情趣、及び情緒としての可憐纖細、優雅な「日本的」である。彼は「鐵砲百合」を描いてもそこに快き外光の溢るゝ空間の關係を忘れなかつた。構想畫「小督」を描いてもこの古き歷史的問題は單に一つの回顧としての現代風俗上の物語にされてゐる。既に畫材の採り方からが當時にあつては新しい。併も外光描寫を本位とする印象派の畫風は實は日本の自然に恰當なものであつたのである。否極言すれば印象派は日本の版畫の逆輸入であつた。印象派の明確な色彩法はいふ迄もなく浮世繪版畫の影響である。日本の明るい自然が生んだ北齋や廣重は彼らを啓發して印象派を生ましたのであるが、明治初年以來の所謂西洋畫はこの直通する兩者の關係を絕つて西歐の傳統に生ひ育つた技法色調を其儘日本へ輸入したのであつた。「脂派」はその傳習を尊重したが、併し「紫派」たる白馬會が佛蘭西近代のアカデミツク中からコランを師として選んだやうに脂派の後繼幹部はその後當時彼地のアカデミシアンとして鏘々たるジヤン・ポオル・ロオランスを師に選んだ。黒田や久米や岩村の後に關

田三郎助や和田英作やまた藤島武二やが同じくコランやコルモンへ赴いたやうに、太平洋畫會系の中村不折や鹿子木孟郎や滿精一はロオランスに就いた。と同時に太平洋畫會は既に昔日の明治美術會の後繼ではなく、この佛蘭西官學系以外に當時亞米利加に遊學して歸つてきた吉田博や中川八郎らを加ふるに至りこゝに白馬會とは異つた畫風の集團となつたのである。

併も黒田、久米、岩村らは美術學校に新設された洋畫科教授となるに及び所謂「紫派」は日本の官學派となつたのである。以來白馬會は所謂「學校系」なる目標の下に文部省が公設展覽會を開いて後まで、否帝國美術院が現在の「帝展」を開くに至るまでこの官學たる白馬會系と學校とは「切れぬ緣（えにし）」でつゞいてきたのである。そしてこの白馬會の官學に對して太平洋畫界はむしろ野黨的形勢はもつてゐたが日本の洋畫界が良き發達をなしたと思はれるのは、この白馬會によつてゞ、たとへ直接でないとは言へ、印象主義の教條によつて見る觀照の移入されたことは今日から確かに有意義な且つ感謝すべきことであつた。何となればこの新しき教條の移入はとりも直さずフランス繪畫の正系へつながる傳統である故に、十九世紀以來の歐洲美術の發達經過が親しくこの道程を進んで今日の偉大な革命的畫風に逹したフランス繪畫の正道への誘導であつたが故に尊いのである。もしこれが舊明治美術會の幹部諸氏が信奉した伊太利亞系或は北歐系、乃至亞米利加系の繪畫のみが蔓つたとすると今日の洋畫壇の斯き傾向がさやうに早く到來しうるとは信じられないからである。白馬會は今日すでにない。所謂學校系の正派はすでにアカデミスムの居城に殘された。彼らの多くは今日すでにすでに舊派である。黒田逝いたあとで今日コラン風の畫技になほ濟雅な氣品と魅力とを殘してゐるものに岡田三郎助があり、新しき傾向にも充分の理解あるものに藤島武二あり、稍委ながら一派の筆格をもつ和田英作なほ健在するが時代の思潮はこれを全然過去のものにしおほせてゐる。この變轉こそ明治末期から大正初年へかけての事で、即ち彼地の旋風がこゝにも移入されて我が洋畫壇は第三期の變轉に際した。そして新進の畫家は雲の如く起つた。所謂後期印象派の運動、フォーヴ、立體派、その他ありとある突飛な左派藝術は大正初頭から今日迄外國どほりの經過を踏んで存在してゐる。官展を向ふに廻して反官展の二科會は生れた。美術院に洋畫部も出來た。文展は帝展に變つた。がこれら大正へ入つての變轉ももとは白馬會の畫風が存し、そこに時代的理解をえることに於て發達したことを記憶すべきであらう。

併し黒田は先にも述べたごとく印象派の正系は傳へなかつ

た。印象主義に對する理解はあつてもその教條そのものを追はなかつた。ピウヴィスド・シャヷンヌが彼の口から語られたことはあつても、マネやモネやドガは閑却されてゐた。テーヌの美術哲學が述べられたと同樣にモウクレエルの印象主義の平易な解說すら多く紹介されなかつた。文展初期の頃に木下杢太郎がムウテルの「佛蘭西繪畫の一世紀」を美術雜誌々上に譯述した如きに至つてむしろ印象主義は多くの畫學生の常識となつた位である。

　されば白馬會一派の畫風の移入と同時に彼地の新畫風に對する忠實な紹介はむしろ斷片的に一部の文學者がなした他（たとへば上田敏の如き）一般言論としては決して今日見る如き紹介批判等は見るをえなかつたのである。否所謂「脂派」たる舊明治美術會の幹部諸氏が繼承した明治初期以降の洋畫は單に「西洋畫」であるに止まりそこに何ら歷史的知識を以て研究された一流派ではなかつたのである。唯偶然師として學んだものが伊太利であり獨逸であり英吉利である程度に於ける漫然たる流風の繼承である。更に極言すれば西洋畫のよつて來る歷史の一般にさへ明らかでなかつたのである。故に古い西洋繪畫史に就いての智識すら立派な紹介として通用した。全然洋畫に對する啓蒙時代であつたのである。夫れ故美術學校に洋畫科が出來、淺井や小山が教授であつた時代に新歸朝の黑田、久米、岩村らの新思想家連は先づ茲に一般の洋畫に對する、もつと深い、もつと進んだ知識を植えつけねばならなかつた。久米も岩村も畫技を學んだのであるが後幾程もなく畫筆には遠ざかつた。そして久米が考古學や解剖學を學校に於て講ずると同時に岩村は美術史の講義を擔當した。それと同時に彼は一個の美術史家のみならず、美術批評家として刊行物によつて盛んな論陣を張つた。彼は犀利明快でその賑かで、奇智に富む性格は談論風發、警句亂發で甚しく人を面喰らはしたものである。が私は彼をもつて明治の洋畫が進展する上になくてはならなかつた一人物と考へてゐる。即ち岡倉が新理想主義による新繪畫の創造が保守的であり、東洋的であつたやうに、彼の言論は熱と力と創見はもち乍ら來るべき時代の備へには、その保守的であり、餘りに東洋的であることに於てまだ吸收に追はれてゐる新時代の繪畫的空氣の開展してゆくことに多くを資せなかつた。岩村は先づこの空氣を大きく打破した。この意味に於て岡倉が思想の人なるが如く岩村が一主義の人でなかつたとは言へ、彼は大きく開くべき次の時代のために一つの換氣法を試みた批評家として偉大な人物だつたと言はねばならぬ。彼の晩年は學校職員間の不和から止むなく退職し以後甚だ振はずして逝いたが、彼の旺盛な元氣は美術學校の教室に於て實に明るい空氣をもたらした。所謂西洋流の美術家氣質を日本に植えつけたのも彼である。どこ迄も

樂天的であらねばならぬ美術家氣質の養成は全く岩村が創始したもので、今日迄の美術學校の學生の陽氣さは彼の賜に外ならぬ。長髮、コール天服、みな彼によつてなされた西洋美術家風俗の移入である。が彼が美術批評家としての仕事は當時にあつてよく當てはまつた啓蒙的批判に終始してゐた。彼は極力西洋思潮を移入した。しかも彼は決してハイカラでない、鬱氣旺逸してゐた。積極的進取的な彼は既に明治三十年代に自然主義を紹介し、ウイリアム・モリスの社會主義的藝術をも紹介してゐた。モリスについてはその後彼は詳しく「ウイリアム・モリスと趣味的社會主義」なる一文に於て說いてゐるが、彼の觀察は美術が個人的にのみ享樂さるゝものでなく必ず社會化されねばならぬといふ立場にいつも立つた。そして彼の任務は美の効用を說くにいつも急であつた。今日の西歐美術と西歐思潮の不二な態度を語つて思想的に同一線上に達すべき新美術の創造を說いてゐたのである。彼は時に法螺吹の如く語られた。然しそれは彼の豪快と洒落と惡戲とを解せぬものである。彼くらゐ全性格を投げ出して渾身の熱意を以て最も坦懷に事物を批判し談論したものはない。白馬會流の洋畫が我が國の畫壇の基礎的工事を務めた如く、言論の上に於て開放的な西洋的空氣を移入したものは全く彼である。彼の主張そのものは今日から見て新奇でも、警拔でもない。たゞ彼は中正な主張をたゞ積極的に、且つ坦懷にのべてゐたのである。この點が岡倉の鑑究と大に異るが私は日本畫界に於ける保守的論客が岡倉であつたが如く、洋畫界に於ける中正な積極的論客を岩村の上に見るものである。

彼の坦懷さと明快さを語る一文を二三拔いて見よう。

『飽き易き人間の特性は絶えず變化を要求し藝術の形式は絶えず新しき姿を假りて現はれる。併し藝術は藝術である。豆汁は豆汁である。汁粉に進步なきが如く、美術にも進步はない。唯だ形式の違ひのみである。天の下に新しきものなしの語は藝術界に適用して眞理である。

□人間の生存する限り美術はいかなる社會組織の下にも存在する。併し多數の人間が此天賦の權利を實行し得る狀態の進むに從て藝術は愈々發達し愈々貴重さるゝに至るに定つてゐる。社會進化の大勢は益々藝術の發展に加勢しつゝあることを感ぜざるを得ない。

國家組織と社會組織の相違は些々たる枝葉の問題であつて人間生存の動機たる美欲は如何なる社會組織の下にも相當な藝術を發生するに違ひない。』

彼の觀察はいつも科學的であつた。だから遲疑逡巡しない。

私はこのほか思潮を語る上に於てなほ重要な人物、傾向等に於て說かねばならぬものを多くもつがあまり多岐廣汎に渉るのをおそれ一斷面の感想として他は次の機會に讓らうと思ふ。

維新史上の弱き女

尾佐竹猛

維新史の少し變つた方面を書いて見る。

血腥き維新の舞臺にも、幾多美人の彩がある、そのある者は俠妓の情に因つて危難を免かれ一世をして艶殺せしめたものもある、その或者は美人の內助に由つて活躍したものもある、さては有爲男子をして瞠若たらしめた烈女も少なくなかつた。これ等は既に書き盡され、語り盡されて余輩の兀筆を待つ迄も無いが、これ等の烈女、俠妓、美人などの如き傑出した女でなく、普通平凡な、善良な家庭の妻女、婦女子に就いて觀察して見ようと思ふ。

國家の爲め主義の爲め身命を抛つた志士の壯烈は懦夫をして起たしむるの慨はあるが、これと同時にその遺族に對しても同情の涙を濺がねばならぬ、それも夫や親の壯擧に共鳴して艱難を共にし、夫親の亡き後も其志を繼いで屈せざる婦女子にあつてはその困難も幾分慰むることは出來るが、夫や親の壯擧に何等の理解が無く、また偶之を聞き質すも、女童の知つたことならず、國家の大事は婦女子に明かすべきものにあらずと一喝されて、その儘となつて居る內に親や夫に死別して流離困苦して居るのは、また別箇の哀愁を唆つて氣の毒の感に打たるゝのである。

これも戰敗者として一藩一鄕悉く困苦したのならば、これも已むを得ずとして幾分あきらめもするが、それ程でなくてしかも嘗ては事を共にした同志から遺族の迫害せらるゝのはなんとも情ない氣がするのである。

北越の奇傑、河井繼之助の事蹟は余の好んで讀んだのであるが、偶、今泉鐸次郎氏著の『河井繼之助傳』を讀んでその一節に繼之助の妹安子の懷舊談に云く『あの長岡の戰爭の後と申す

ものは、官軍方からは河井の緣邊の者などと云へば用捨せぬと云ふ樣なことである上。中には、河井が詰らぬ戰爭などをした爲め、藩の者が斯んな辛い思ひをするのだと云つて惡口雜言する人も澤山あつて、世の中が靜になりましてから、榮涼寺へ建てました墓も、二度も三度も台石やなにかを打壞されたこともありました。妾などは婦人ではあり、また若かつたので、物の道理を辨へても居らなかつたけれども、兄の平常から見て、賊逆藩の方々に辛い思ひがさせたいと云ふ積りでもなかつたのであらうに、餘りといへば情ないと思つて、物故なつた母に、當時泣きながら話を致しますと、母の申すには何事も運が惡いのだから仕方がない、加坪の惣之丞が來て謂ふには……旦那樣の善惡は二十年の後にならなければ判りませぬ、二十年も經てば旦那樣の御忠義が必ず判つて來ますと云つて吳れるからと話されたこともありました云々

とあるのを讀んで情なく感じたのである。河井と壯擧を共にした一藩の人士は隱れながらも、河井の遺族を庇護して居つたものと思つて居つたのに、何も知らぬ遺族を迫害し、猶へその墓石さへも壞したといふのは何たる事である。これが敵方の仕事であつても許すべからざるのに、死生を共にした同藩の人々からの迫害とあつては遺族の泣くのも尤もである。此迫害に堪へ、夫に死別し、両親は病没し、倚るべき義子の幼たるを抱へて、生活と闘つて居つた未亡人の心中は眞に同情するに餘りある。

これ等は維新の際であつたから仕方が無いとするも、その後の西南戰役の谷村計介のことは兒童走卒も知らないものは無いが、しかもこの赫々たる盛名の反面には

郷黨が悉く賊軍方になつたから、計介の妻とよは洵に憐れな境遇に置かれ『あれは計介賊軍の妻よ』と指彈されるから、從つて人々に顏を見られるのを厭ふ位であつた。一村の者が打連れて神社に參詣し、從軍した家人の武運長久を祈るにも、とよは其の仲間に入られない、人々の散じた後に、こつそり下人の坂口榮太を從へ、神前に額づいて計介の無事を祈るのみであつた(贈正五位谷村計介傳)

といふ家族の悲嘆あることを閑却してはならない。

斯ういふ事例は猶ほ多くあるが、これを略して、唯だ一つ、維新の際に於ける水郡善之助(裕)の妻の一例を揭げんに、天忠組の中心人物たる水郡善之助は河内國石川郡(今の錦部郡)甲田村の土豪であるが、その妻むねといへるは大阪の町家から嫁したのである、相當の家柄の娘であつたのが、善之助には後妻として迎へられたのであつた。しかも夫の母といへるは繼母

であつた、これ丈でも家庭の氣苦勞は一通りではなかつたのに、こゝへ天忠組の事件が勃發したのである。それからあらゆる不幸に遭遇し困苦を甞めたのである、明治二年に同女から政府へ出した書上げには其事情を要領能く書き記してあるから、左に之を掲げて志士の遺族の爲めに一掬の涙を濺がんとするのである。

私夫善之助儀、近村又者同村等にて從來入魂之者共と毎々集會閑談仕候。其後は浪士體之者追々私宅へ罷越五六日も逗留、又は半月乃至半年餘も厄介差置候者も有之、數人交々罷越候。逸々名前は承知不仕候

地方の名望家で慷慨家であり鄕黨の士弟を奬勵し、諸國の有志と交つて居つたから有名無名の徒の往來寄食するものが絕へなかつた、その內有名なのは鄕黨の同志では平岡武夫(男爵北畠治房)であり他地方では熊本の松田重助、江戸の安積五郎、熊本の宮部鼎藏、鹿兒島の美玉三平、筑前の平野次郎、伊豫の三輪綱一郎、三河の松本謙三郎等の錚々たる人々であつた、が家族では一々名前は覺へずとある、厄介者が絕へない位に思つて居つたのであらう。

始終閑談之筋有之候哉善之助儀毎々出京、歸村延日相成、萬端不都合の次第も御座候に付、樣子相尋候處。女之可構事に而無之段申聞。

これだ、女童の知つたことならずと一喝したのである。しかし

右樣爲體にて數人扶助仕候に付、身分不相應の借財等出來。日夜心配仕。度々申達候得共、一切頓着不仕候、不得止事光陰相送候

これでは經濟が持切れぬと申出でても、國家の爲めには生命財産を抛つも厭ふ所にあらずとの意氣込みであるから、でんでかまつてくれない、止むを得ず借金に借金の遣り繰りをして居るが、村でも物數奇な亭主位ひの扱ひをして、これまた妻君の苦衷に同情して吳れるものも無い。

然る處去ル亥年八月十五日夜半頃、浪士之內、吉田重藏、石川肇外一人罷越、稍暫閑談仕候上、善之助申聞候者、去ル丑年以來恐多くも

朝廷之御衰頽を慷慨仕、有志之徒、日夜苦心仕候處、明曉、中山家公達侍從樣、有志之者御召連私宅へ御入可有之事實始而承知仕候得共

始めて維新回天之偉業、天忠組の義擧を打明けたのである。文久三年八月善之助上京、劃策の上歸鄕して一行を待つたのである。それも明朝入來といふことを其前日に漸く家族に告げたのである。家族の者も驚いたが

素より女の義、毛頭助辨も無之、只々家名相續の事にて心痛之外、無他事候之段相答候

私は女の事で何にも解らぬが、そんな大それたことをしてどうか家が潰れるやうなことが無ければ宜いが、とそればつかりは心配だと嘆くより外はなかつた。

無程侍從樣始、隨身之者凡八九十人斗、甲冑着用にて入來有之、善之助御呼出

中山忠光は吉村寅太郎、松本謙三郎等三十五名を率ひて到着したのである。地方の有志とはいへ一地方の庄屋の家へ、公卿の來臨である、善之助も光榮に感激し、同志十五名を率ひて拜謁し、軍氣大いに振ふたのである、

御合論之上、和州地御發向に付御案内旁御借可仕樣、被仰聞、畏候旨御請申上候

そんな簡單な譯ではなかつた、此の間諸方に奔走し、善之助は國旗を數流造り、また貯へてあつた刀槍弓銃鑓旗等を出して之に充て、一行の軍旅始めて整つたのである。天忠組最初の資源地であつたのである。

侍從樣始、人數不殘、於私宅逗留有之

一行の兵站本部である、迷惑のなんどといつて居られる場合ではなかつた。

翌十七日早天、御出立之節、忰英太郎當名清馬儀、幼少無智之者に御座候得共善之助召連出立仕候

長男英太郎は後に長義と改め檢事に任官した、此時十三才、父と志を同くした少國士であつた。

『南山踏雲錄』には此時の狀を記して曰く

水郡榮太郎、容貌艶麗、言語爽清、行年僅に十三、意氣爽清、常に好んで長槍を捻ふ、父、首途之日、強いて後に從ふ、從ふて以て父の死期を見んことを請ふ。語氣確實、心志變せす、依て之を許す

とある。好箇の劇的場面である。その後は

始終父に從ふて險阻に奔走し、軍中に起臥して困苦の色無し

と賞揚せられたのである、扨てまた書上げに戻ると

其節申聞候は、留守宅に相成候迚、別段親類之世話不相成候共、是迄見聞之通、質素節儉相守、家名相續第一相心得、次男三男之者致養育候樣申聞

後々の始末迄細々言殘し勇ましく出立したのである。親子夫妻、此世の別れと涙を隱して、愛別離苦の悲に悶へたのである、

以前より私方前代にて分家仕候善之助叔父惣左衛門義も、始終之容子心配仕罷越居候に付、種々申談候得共、及此期迚も

相止り候事無之、不及是非之旨申聞候

此期に及んでは親類も寄りつかない、

弟謙三郎義は兩三年以前分家仕、別而兄弟之儀に付、何角可申談心得候處、病中之趣申聞一切立寄り不申候

頼る夫と長男には生別れ、幼き子供を抱へ親類も相談に乘つて呉れない

繼母義も分家仕候節、右謙三郎方へ娘みち召連、所持の田畠分配仕、同家爲仕罷在候に付、於留守宅は、次男龍次郎、三才、三男多聞三郎二才兩人の小兒相抱、悲歎相沈罷在候得共、此儘にも難相成と決心仕。實家大阪表へ前顯之次第申遣はし候處、早刻父佐左衛門出向仕、尙亦委細相談候處、及此期別に手術も無之、善之助遺候、堅相守、貞操之道相立、家名取續、相心得候樣、種々及敎戒候上、歸坂仕候、

天忠組の一行は五條代官所を襲ひ、次いで高取城を攻めて利あらず、この時尼ケ崎藩、狹山藩の兵は善之助宅を圍んだのである。

同月廿九日大坂元町奉行組與力二人並同心手先之者數人、家內爲見改罷越候に付、私宅及案內申候、其節居宅四方は狹山家御人數を以、鐵砲拔身之鎗にて相固罷在候、不殘見改相濟候上、居村庄家萬次郎宅へ私呼出、去ル丑年以來、善之助行狀不及申次第事柄不包、可申聞候樣、用役之與力申開候得共、前顯之外相答候事は無之段申演候に付、私儀村內預申付、尤親類緣者たり共一切出入不相成候段、演達にて領主役場よりも爲宅番、日夜相詰申候

罪人の家族として嚴重なる監視に付せられたのである。

右之者へ日々飮食等差出申候、凡半月斗にて其後は罷越不申候

毎日宅番に來る役人にも日々の飮食等を出し、それが半月も續いては溜つたものではない。

然る處十月五日、居宅家財田畠山林、善之助所持之分は不殘、於當藩、付立相成申候得共、居宅田畠山林等は是迄質物差入有之候段申述置候

十月五日は天忠組の一擧、一蹴して善之助は京都奉行所に送られた日である。

且私所持の衣類雜具等は御渡相成候に付、日用暮方差迫、衣類等質物差入、漸消日罷在候處

此苦しみの中にも、意外の喜びは英太郎の歸宅である。これは少年故歸されたのである。

同年十一月六日忰英太郎、於京都、御調之上出牢、村內預被申付、歸村仕候に付、抑八月十七日出立已來之轉末、始而承

知仕候

夢かとばかり喜び、涙の中に語り合つたが、善之助の牢內に在ることも知り得たから、幾分の安堵も出來て

善之助儀、牢內罷在候事故、上京仕、差入もの等掛り役之者相頼、取斗申候。

何卒無事に出獄せよかしと念じ、

英太郎義も歸村仕候に付同人へも申談、百姓業用仕罷在候。

細々ながら母子共に働いて居つたが、更に不幸は此悲しき一家を見舞つたのである。

翌子年二月小兒兩人共、難痘相煩死去仕候、前後迷亂仕、罷在候處、引續、繼母大病取合、追々差重、存生中善之助へ對面之儀申聞候に付、出京仕歎願書差出候得共、無取用終に繼母も養生不相叶、死去仕候、右體、愁傷相重一入心痛仕候

世の中のありとあらゆる不幸を一身に背負つた如き悲しみも、只だ一縷の望は、善之助の生死にかゝつてあつたが

其後も牢內に差入物心配仕候而、出京仕候處、掛り役之者より最早當方には不罷在候旨申聞候に付、無是非引取候上種々手筋を求め、善之助生死相尋候得共、一切不相分、日々心痛仕罷在候處、子年七月下旬斬殺相成候哉之旨、風說追々承知仕、遺憾無止時、悲歎仕罷在。

善之助は元治元年七月十六日、平野次郎等外六名と共に六角の獄におて聞くも無慘な殺され方をしたのであつた。

しかも天運循環、世は維新となり

然る處去る辰年五月、鷲尾侍從樣、南紀表より河州地へ御出向之節、悴濟馬儀も御供仕、追々御取立被成下候旨申越、於私儀冥加至極

天恩之深重、難有奉感拜候得共、何分女之淺智、奉恐入候得共、今般厚御主意を以、癸丑以來、王事に亡命仕候者共御取調に相成候樣、御布告被遊候、御次第に付夫、繼名、小隼人義、何卒勤王之寸志相顯候樣、被成下候はゞ乍此上天恩之程重々、難有奉存候、不顧恐懼奉歎願候間、宜御沙汰奉願上候、恐惶頓首敬白

明治二己巳年　三月

本多河內守領分

河州錦部郡向田村

善之祐

後妻　むね

巳年三十七

御上樣

漸く夫や悴の忠勤を認めらるゝに至り、英太郎は東京府士族

に列せられ終身四人扶持を下賜せられ、後任官して金澤地方裁判所検事となり正五位に叙せられ、善之助も後年正五位を賜らるゝに至つたのであるが、この不幸なる遺族の苦衷は割合に世に知られないのである、氣の毒な人々である。

これより少しく方面を變へて華かなる邊を記さんに、幕末史上の大立物坂本龍馬の艶種とし、小説に劍劇に映畫に裸美人の駈けつけとして知らざるものなき好餌の劇的場面であるが、そもこの美人の晩年はといへば、谷干城の日記の一節に

坂本龍馬の殺害せられしは京都河田三條下る元土佐の前にて少し南に下り西側近江屋新助方なり醤油屋なり、龍馬が妾は猶原阿龍とて京の人なり初めは尼と成り貞操を保つてありしが遂に其の操を保つ能はずと右新助の話なり三十六年四月京都にて新助に聞く所なり

とある、後には流浪して千住の名倉に居つたこともあつた。がその後の詳しいことは知れて居ない。彼女も弱き女である、さう責めるにも當るまい。

次には若江薫子のことを書いて見ようと思ふ。

薫子は伏見宮殿上人、修理大夫量長の娘で、秋蘭と號し、漢學は岩垣月洲に學び、四書五經などみな手寫し暗誦して居た。詩も出來れば歌も上手である、それに慷慨激越、談論風發の女丈夫であつた。慶應四年五月發行、内外新報第二十七號に

薫子は伏見宮殿上人若江修理大夫の女なり袖蘭と號し又秋蘭とも云年二十三歳草莽を結び和歌など人に教へ甚博學の聲あり衆人競ふて之を挫かんと欲し行て議論すれども常に皆屈服して歸ると云想に蔡姫、謝女の亞流ならんか

とあつて當時既に喧傳して居つたのである。

昭憲皇太后の一條家にをはせし時、經書を進講し、御入内に付き力を盡し、御治定後も改めて稽古の爲め參殿を命ぜられた。その頃國事に奔走し、屢當路者に建白を提出して居る、その中でも「國體を壞り外使を延くべからざるを論ず」並に「横井平四郎刺殺者を寛典に處せられんことを乞ふの書」は有名である。建白女と綽名された位でありそれ等の爲め忌諱に觸れ囚居謹愼を命ぜられたこともあつた。その囚中の詩として傳つたものでもなかく慷慨の氣があふれて居る。

これ丈の女丈夫で、しかも宮中に緣故の深かつたのに、維新後には零落して顧るものが無かつた。

明治七年十二月余女史ヲ西京ニ訪フ、女史貧甚シ、一老嫗病ニ臥シ傍ニ在リ衣體ヲ掩ハズ曰ク是レ先人ノ妾也。女史親カラ藥餌ヲ調シ扶持懇到、傍ヲ古今ノ事ヲ談ス、感慨淋漓、其ノ命ニ安ンシ節ヲ守ル皆卓絶及フ可ラサル也

とは安達清風の記す處である

その後は岡山邊に居つたやうである。明治十一二年の頃、薰子は岡山に來て、[illegible]人を集めて敬神尊王の話をしたり、人に歌を書いて遣つたりしたさうであるが云云（山房札記）

九年余岡山ニ在リ、女史亦タ備讃ノ間ニ游寓ス。一日來リ訪フ語リテ曰ク人生朝露ノ如シ吾子然依ル無シ此書半生心血ノ注ク所。子余カ爲メニ刊行セヨ。余輙チ友人山田榮造ト之ヲ印刷スルヲ謀ル（安達淸風）

この時『和解女四書』の刊行を謀つたので、此書は薰子の歿後明治十六年に出版せられ、後また『和解女四書と若江薰子』の中に採錄せられてある。

それから丸龜に土着し私塾を營み子女に敎へ、本邦烈女傳を起稿して居つたが、その脫稿を見ずして、明治十四年十月十一日、四十七歲を一期として病沒したのである。そのときは祭祀料若干を賜はつたといふことである。

そこで、前半生に比し、あまりに後半生が氣の毒であるからこれは何か譯があるであらうと思つて調べたのである。一書には

後嗣其人を得ず、爲めに家道凋落し、居るに家なき悲境に陷り已むなく漂泊の單身となり云々

とあるが、これは單なる一片の想像に過ぎない、その眞因は嗚呼……矢つ張り彼女も女であつたのである、情夫が出來たのであつた。

薰子が美人で無かつたことは

京都の出水邊に若江の天神といふ小祠があつて、その側に若江氏は住んで居た。十歲位の時でもあつたか、或日父に連れられて若江氏の宅を訪ふたことがあつた、その時量長の娘であるといふ二人の女子にも會つた。妹の方は普通の婦女で、髮もすべらかしにして公卿の娘らしい風をしてゐたが、姉の方は變つた女で、色も黑く、御化粧もせず髮も無造作に一束つかねて居つた。男まさりの女で、頻りに父に向つて論議を挑んで居つたことを記憶する、父もかういふ女には辟易すると云つてゐた。これが即ち薰子であつたらう。（山房札記、谷森建男氏談）

とあるにても知れる、裁りも振りもかまわずに議論する純然たる女丈夫型であつたのである。猶ほ『怪傑岩倉入道』には

薰子女史は三十餘りの歲齡であつた。細腰の華奢な姿であつた。芙蓉とも謂ひたい淸艶な姿ではあつたが、美人では無かつた。髮が薄く、片鬢は透けるほどであつた。重い疱瘡の怨みが尙ほ殘つてゐた。それに近視眼で、短冊に和歌など書か

れる場合には、鼻の先に觸れはせぬかと思はれた許りであつた、それでも流石に堂上の端くれである。何處やらに品格はあつた。

とある、小說であるから多少の潤色はあるが略ぼ此通りであつたのであらう。この女丈夫の醜婦に情夫が出來たといふ以上はこれも相當の志士でもあれば可かつたが、人もあらうに無頼漢にひとしい市井の徒であつた。これには人々呆れ果てゝ相手とするものが無くなつたのである。世の中には前には貞女としての賞めものであつたものが後には墮落したといふやうな事例は必らずしも稀有では無いが、薫子の場合は前半生が前半生である丈け世人の驚きも異常であつたのである。或人は

何分、家の生計も豐かでなかつたから、誘惑を受けたについては、むしろ同情に値するものがあつたであらう。

といつてゐるが、これは辯護にならない、反つて益〻價値を下ぐるものである。

私はさうは思はない。女丈夫だからとて女である。醜婦であるから女丈夫にも精進したものであらうが、矢ッ張り溫い血潮は漲つて居る、中年の危機……矢ッ張り弱き平凡な女であつたのである。女丈夫であればあつた丈け、情にも脆かつたのである、醜婦と自覺して居る丈け溫き情には弱かつたのである。これが若し今の時勢であつたなら、その女丈夫を傷くることもなかつたであらうが、餘りに時勢が違つて居つた、環境があまりに固かつたのが彼女の不幸であつた。

幕末勤王の志士が維新後には墮落して刑辟に觸れたものがある。自由民權の爲めに生命財産も惜まざりし政治家が、後には瀆職罪に問はれたものもある。世人が一概に墮落と罵り變節と嘲るも、人、夫れ〲には同情すべき事情もあり、氣の毒な狀況もある。女丈夫とはいへ、情に脆き女性の身である、一時の過ちはこれを永遠に葬るべく餘りに酷である。

しかし要するに以上擧げた數者は弱き女であつたのである。がそれとは事かはり極めて強き女でも、女としての情なさと淺ましさがあることがある。

維新史として最も壯烈なるは會津女隊の奮戰である。勇婦は昔から無いこともないが、婦女が一隊となつて勇戰したるが如きことは古今の史乘に未だ甞て無き悲愴なる戰である。しかも其結果は如何といふに筆するに忍びない慘狀であつた。啻に慘狀といふばかりでは無く何とも名狀すべからざる不快がある。これは曾て書いたこともあるが、今一度之を繰返さんに、

赤岡お竹。同志の女子四十人と一隊を組織して奮戰せしが、死傷殆んど盡き、お竹また飛丸に中りて斃る。お蝶生擒せら

れ、お國これを救はんとす『官軍むらがり來りて之を辱しむ』お國走りて溪間に至りて自殺せんとせしに、追兵至る、お國飢ゑ且ツ疲れて、また戰ふこと能はず、追兵を顧みて曰く願くは憐を垂れ、妾を縛せず、直に頸を刎ねよと。追兵きかず。『これを縛して凌辱を極む』

維新史を讀んでこゝに至ると、實に何んともいへぬ不快の感に打たれる。これが堂々たる官兵の激戰中の出來事である。この獸の如き官兵と、一死君國に殉ぜんとする殊勝なる女子とを比較して憤慨する前に、この強き女子も女子なるが故の情なさと淺ましさとをしみじみと痛感するのである。

これは敵なるが故にとして幾分宥すべし……決して恕せないが……假りに宥すとしても、更にこれよりも甚しいことがある。

戰爭の慘禍を蒙りし者、現秋田縣の山利、雄勝、平鹿、仙北、河邊、北秋田、の諸郡に及び、而して藩民を屠殺し、掠奪せし者は敵に非らず、三卿の兵に非ずして、藩兵夫れ自身なり、沿道過ぐる所の女に完逃の者なく、牛馬鷄の類は悉く盜まれて荒村の如し、時人之れを澤三位の厄と稱する者是れなり、當時人民の多くは、皆西國兵の行く所を追ふて逃れ、之れに後るゝ者は敵軍に從ひ、藩兵を見ては蛛の子の如く逃避せり。（山中新十郎翁傳）

これは敵では無い、味方も味方、平素上に立つて威張つて居る藩主の軍隊の爲めに、その領民が凌辱せられたのである。世には能く支那軍の不紀律を說き、官軍といはず革命軍といはず、戰地に臨む途中、沿道の民財を掠め、婦女を凌辱するといつて非難するが、遠く支那に事例を求むる迄も無く、我が維新史には此の汚れたる記事があるのである。

會將佐川官兵衛が

西兵の爲す所を見られよ、民財を掠奪し、婦女を奸淫し、良民を屠戮し暴逆至らざるなし

とあるは必らずしも誇大の言で無く、しかもこれ官軍のみの非行で無く、その他の諸藩にも行はれたことを想像するに十分である。

これ等は戰時中の一時の變態と見ても、明治二年三月の布告に

百姓町人之妻娘風儀不宜者間々有之、今般京都府ヨリ嚴敷申達候處、堂上、諸藩、並社寺之家來兵卒共、農商之家ニ立入用向ニ事寄、婦女を勾引シ、或ハ威力ヲ以テ淫リケ間敷振廻致シ候者モ有之哉ニ相聞、以之外ノ事ニ候、向後、右不所業之儀無之樣、其主人主人ヨリ嚴重可申付候。若シ心得違之

輩、於有之ハ屹度御取糺可被及、御沙汰候間、此旨兼テ可相心得候事

といふのがある、平時首都に於てさへこれである、當時の軍隊の風紀は察するに難くは無い。所詮は亂世には女は氣の毒な運命に措かれてある。

戰後の慘狀に至つては猶更である。『會津事情』に曰く

家中老幼婦女子凡ソ壹萬七千人、北方三百七十ケ村ニ居住セリ。其舊主ノ家來ナルヲ以テ村々ニテモ迷惑ナカラ置ケリ。中ニ宜シカラサル者ハ、衆ヲ殘ラス賣拂ヒ、根太板ノ上或ハ土間ニ莚或ハ藁杯ノ敷置モ有リ、婦女子堪ヘサル所ヨリ、往往節ヲ失フ者有リ、憫然ノ至リ也。

遊女ヲ印札ト唱フ、是ハ舊會ニテ印ヲ押セシ札ヲ與ヘ置クヲ以テ也、去春比ヨリ、若松城下ニ千餘人ニ及ベリ、其始ハ賞金職人、莫大ノ金ヲ費セシヨリ起リ、又舊幕脫走ノ徒頻ニ散財セシヲ釣ント欲シテナリト云、開城後ハ兵隊並ニ官員、盛ニ遊蕩セシヲ以テ也。又商家ニテハ兵燹ニ罹リシ故第一活計ノ營ミ易キハ賣色ナルヲ以テ也

これも已むを得ぬであつたらう。馬關の娼妓は平家の女﨟だちの成れの果てが元祖であるといふ傳說もまんざら根據の無い說でもなさゝうである。深く〳〵考へさせらるゝ人生問題である。

雲

旅人と雲

吉田絃二郎

雲といへばすぐに「岫を出る雲」のことを思ひ出す。

伊豆を旅してゐると天城の草山をもく／＼と湧き立つ雲の白く靜かなるをいつも面白いと思つて見る。

夏の末から秋の涼風のころの空、そのころに旅をしてゐるとよく漁村の濱邊などで不圖夕暮の鰯雲を見ることがある。

靜かな海岸の白砂の上にのこされた小波の痕のやうに、纖かな筆致の鰯雲が、南の空から北の空へと彗星のやうにさつと一たすりに描き出されてゐる。いつまで空を仰いでゐてもちつとも動きもしない。形もかはらない。鳩の胸毛のやうにかすかな雲の群である。空は深く、靑い。海には波一つ立つてはゐない。

濱の男たちは魚がとれるといつては鰯雲をながめる。旅人は濱の玉蜀黍のかすかな葉摺れの音を聽いては空を見ながら旅のわびしさを思ふ。

まつたく鰯雲のたゞよふ夕暮れは山も濱も海の上もすべてのものがこの地上の滿たされた日を想像させる。漁夫等はその妻や子たちの家に酒を掬み、農夫等はその燒けた爐のかたはらに憩ひ、小鳥等はその柔かな草の巢にやすらうてゐるやうな感じである。

高い鰯雲につゝまれた夕暮れの濱を步けばこほろぎの音も草の葉の下に身に沁むほどにしづかに聽く。一茶ならずとも「死に仕度いたせ／＼」といふ秋のわびしさを感じないではをれぬ。

人間は年をとるにつれて、地上のいろ／＼なわづらひにとら

へられて俯向きがちになり空を見ることがすくなくなる。寂しい事である。

ぢつと濱に立つて綿雲をながめてゐる心は恐らく淡い涅槃の心であらう。かすかな正覺の境であらう。終日の勞働の後に綿雲を見るやうに作られた秋の夕暮れは惠まれた日である。

山の溫泉宿の二階の欄干などにもたれて旅のつれ〴〵に青空をながめてゐるとつい近くの山の上をかすかに白いうすい雲が霧のやうに漂ふてゆくのを見る。さらにその雲の上には綿雲にも似た眞つ白な細い線の雲がまるで動くことを知らぬかのやうにぢつと落ちついてゐるのを見る。それでもすこし長くながめてゐると幾らかづゝ雲の形が動いてゆく。そして上と下の雲の流れ方がちやうど反對になつてゐる。山の上の雲は水の流るゝやうな勢で西に流れてゆく。高い空の雲は悠然として、しづかに東に漂ふ。そのやうな雲を見るのはいつも風もないほどな靜かな日である。山には瑠璃鳥が鳴き、日の光りはなごやかに山の青葉をつゝむ。

雲は大抵の場合そのかすかなる形、そのかすかなる動きに面白味がある。

都會のあわたゞしい人たちがほとんど空の雲を忘れてしまつてゐるやうな靜かな夕暮れころに不圖かすかな美しい夕燒雲を見出すことがある。或ひはさらに夕燒雲よりも細く、淡く、毛彫りのやうな感じの纖かな雲を見出すことがある。すい〳〵と水馬の足に描かれた水の輪のやうに淡い絲雲を見出すことがある。そのやうなかすかな雲ほど一層雲の面白味は湧く。その絲のやうな纖細い雲のうへにも夕燒の色は燃えてゐる。

岩燕を見るには岫を出づる入道雲を背景にしなければならぬ。

かけすや、瑠璃鳥を聽くには高い綿雲の下がいゝ。

山にかゝる雲はやはり纖細い橫雲がいゝ。霧のやうに淡い雲もいゝ。きれ〴〵に飛ぶ雲でなければならぬ。でなければ山をつゝんでしまう。

しかし山を見る者にとつてはをり〳〵は重疊たる密雲もいい。

忽然として凝雲の間から鐵のやうな岩壁の高山を見出す雄大な感じはまた特殊なものである。

ことしの晩春のころわたくしは北國を旅した。出羽をめぐつた芭蕉が越後へ出たをり越えたであらう羽越國境の山々や、出雲崎や彌彦山やが桐畑の花のかなたに見出された。そしてそれらの山が一樣にまだ北國の遲い春を惜しむやうに雲につゝまれてゐた。雲晴れて山見ゆるもよく、雲のかゝつた山の見えない

のも情味深いものである。

高山のいたゞきを香煙のごとく漂ふては消え、消えては散つてゆく白雲の姿は終日ながめてゐても見飽かぬものである。山の高きがゆえか、雲に情あるがためか知らないが。ともかく山にかゝる雲をながむれば人間の心は神のごとく浄められる。

霧ともわかず雲ともわかぬ夜明け方の山の雲、平原の雲も實いものである。

雲は靜かなるがいゝか、月をかすめて飛ぶ野分ころの脚早な雲もあはれである。

星ばかりの秋の眞夜中にたま〳〵片雲の星をかすめて空に飛んでゐるのを見出すことがある。何となしに心惹かるゝものである。

高い山のいたゞきに宿を明かして待つ御來迎をつゝむ金色の雲はいかにも尊い。やがて朝の太陽の光りが曉の雲をやぶつて出るころは下界は一面に眞つ白な雲の海につゝまれてしまう。

富士、日本アルプス、八ケ嶽、筑波といつた風に點々として嶮山の嶺のみが島のやうに雲の海に泛かぶ。雲のもつとも壯大な眺めであらう。

いつ見ても飽かぬのは朝夕に軒端をかざして見るあるかなしかの繊雲のたゝずまひである。

近江から京に入る夕暮れころわたくしはよく比叡のあたりにかゝる夕燒雲の美しいのを見出すことがある。

朝の靜かなる雲と夕燒の雲は林間の梢を通して見るも面白い。

白い片雲は芒の原に見るもよく、江上河心に眺むるもいゝ武藏野の秋の雲は殊にあはれである。そのはてしもない黑い小楢のこほろぎの聲とともに。——一九二七・八——

◇

艦長の見た雲

佐々木味津三

Kは船醫だつた。船醫であると同時にKはまた船員妻君同船論の急先鋒だつた。尤もそのくせK自身は十才も違ふ弟が、おほ方もう二人目のお父さんになると言ふのに、まだお髭を生やした獨身者でゐるが、だからKが密輸入物のトルコ煙草と共に、いつも僕のところへもたらしてくれる土産話は、どれもこ

れもがエキゾチックなものばかりだつた。――これもさう言ふKが、夢はいつ寝ころんでみてもいいものだね。と言ひ乍ら何かの折僕に語つてくれた話のうちの一つである。

◇

――歐洲戰爭がまだ海のものとも山の物とも分らない時分の事であるが、なにしろその頃は亞米利加航路を一航海やつて來ただけでも、凡そ汽船と名のつくものなら裕に二十萬から三十萬位の純利金が揚つたのだから、それがより危險を伴つてゐる一周航路となると、少くも一航海に百萬の純益は缺かさないと言つた豪勢さだつた。隨つて船員達の手當もまた莫大で、勿論Kもその恩澤に浴した一人だつたが、しかし、彼は不幸にも紅毛人の女に戀愛を感じ得ない宿命をもつてゐたから、港々の關所へ寄つても、彼ばかりは小遣を減らす方法がなかつた。

で、自然彼の考へついたのは、さう言ふ環境におかれてあるすべての人が考へるやうに賭博だつた。實際またわれわれはKでなくとも、Kのごとくいつ潜航艇にやられるか分らない運命におかれて、Kのごとくに小遣を潤澤に支給され、Kのごとくにまた異人種に戀愛を感じえない宿命を持つてゐたとするなら、誰だつて呑むか打つかの二つに刺激を求めようと言ふ氣になるのは當然なことだが、殊にKはマルセイユを立つて、リバプールに入港するまでずつと腎臓をわづらひ、折角殘つた二つのうちの呑む事を更に封じられてゐたので、勢ひ最后の「打つ」に走るよりほかはなかつた。

けれども遅まき乍らもそこにKの興味の集つた事は、彼のために大いに祝福すべきことであつたが、しかし生憎とその船がまた貨物船だつたので、航行中船客を對手に一寸一丁と言ふやうな工合にいかなかつた。で、Kは紐育に行つたらと大いに博意を貯へて、心中潜かにその時の亢奮を思ひ浮べ乍ら、豫定通り船と共にリバプールの港を立つた。

立つたのは夜の八時。季節はお誂向の秋のさなかで、だが、アメリカはまだその時參戰を發表せず、それだけに獨逸の海軍力は西に東に猛威を逞しうしてゐたので、船はイギリスの領海を離れると同時に燈を消し、型通り不寢番を配置して萬一の場合の警戒に備へた。半夜宛の交替で、丁度その夜半から順番に當つたのがKである。

Kは宵のうちにぐつすりと眠りをとつた元氣で、チベラリイかなんかを口ずさみ乍ら、勢よくデッキへ上つた。と、その途すがら不意に船首の特別船客室から、ちかりと一條の光線が彼の目に入つた。

貨物ばかりで乘客はどこからも拾はなかつた筈だがと思つたので、不審に考へ乍らそつと覗くと、同時にKの胸は怪しくふるへた。知らないまにリバプールででも便乘したのか、一見して身分ありげな年輩の英人が三人、今を必死と目色を替へてトランプにふけつてゐたからである。それぞれの傍にはポンド紙幣を二寸厚味位も積みあげて、しかも遊戯はKもよく熟知してゐるポーカアだつた。

Kの食指は勿論動いた。何かいい方法はと考へてゐるうちに、ふとKの思ひ當つたのはマルセイユ以來國際病で、Kの厄介になつてゐる二等機關士のMだつた。Kは早速Mの船室を襲ふと、事情をあからさまに訴へて朝までの代理を頼んだ。もうおほかた治つてゐたのに假病をつかつて、Kにあと二週間の休養診斷書を書かせてゐたMは二つ返事ですぐに引うけたので、Kはこおどりし乍ら引返して行くと、無遠慮に部屋を襲つて、早速單語を並べ乍ら來意を告げた。

「紳士諸君よ。予も甚だそれを好むが、幸ひに予をも迎へてくれぬか？」

「おうボウイ非常によろしい。汝なかなか話せる。」

連がほしかつたものか英人達も分り易い單語を並べて、大いに歡迎してくれたので、Kはどさりとさつ束を投げ出し乍ら、手につばきをくれた。

けれども結果は不幸にしてKに博運がなかつた。朝食の振鈴が鳴るまで戰はして、Kは十ポンド紙幣を三枚ほどまきあげられた。しかしそんな事で屈するKではなかつた。なにしろポケツトにはうんと軍資金が唸つてゐるし、それに勃然と大和魂の發揚をうけたので、Kは一睡するとまた三人に向つて挑みかゝつた。

戰はその夜の深更までつゞけられた。ところが二日目の結果もやはりKに不成績だつたのである。こうなるとKもまた一個の立派な博徒であるが、あとがあとを曳いて愈々大和魂の發揚を覺えたので、怯まずに三日目も朝つぱらからまた挑みかゝつた。十時、十二時、三時と依然成績は不良だつたが、所謂賭博における向運の波である。――三時をすぎた頃からにはかに運律が變つて、Kはめきめきと勝ち出した。それからの二時間ばかり殆んど當りつゞけで、前日の負をとり返したばかりではなく、凡そその三倍位のポンド紙幣がKの兩側につみあげられた。

玄人ならば勿論そこで切りあげるところであつたが、言ふまでもなくKは素人だつたから、さあ來い！と言ふやうな意氣込で、運律に乘じ乍ら景氣よく挑みかゝつた。

と！Kのその挑戰の言葉が終るか終らないかの時だつた。突

然船體が大きく前後に搖れたかと思ふと、ぴたり船が急停止をやつた。同時に人々の悲鳴に近い叫び聲がデッキを壓した。殆んどそれが全然の無警告で、しかも一瞬の出來事である。

勿論Kも慌てたが英人達の慌て方は一層にひどかつた。あまりにもその慌て方がひどすぎたので、サムライの道をわきまへてゐた筈のKも悉くうろたへ、折角三日がゝりで鮮をとつたさつ束をも忘れ乍ら、本能的に甲板へかけ上つた。

上つて見ると事態はしかしさつ束を藏ひ忘れた程度では許されなかつた。目測三百米位の波合に見える一隻の巡洋艦—マストに威嚇するごとくにかゝげられてある信號は、速やかに停船、乘員は靜かにボートへ移れ——さう言ふ命令だつたからだつた。「畜生め！アメリカの國旗を掲げてゐやがつたから油斷したんだ！」

船長は靑ざめて地團駄踏んだが、もうおつゝかなかつた。敵の巡洋艦は三百米もの近くへ面憎くも艦側を接し、あまつさへ三門の砲口をこちらに擬し乍ら、出方一つでは一發にと言ふ形勢を示してゐたので、從順に一同は船を明け渡すよりほかはなかつた。勿論Kもさつ束なぞは取返しに行く暇もなくボートへ移された。

前後して敵の巡洋艦からは艦載水雷艇が曳下ろされて、船内點檢の者達が入替つて本船に乘移つた。しかもどうしたことかその一行の中には敵艦長の姿があつた。勿論これは異例中の異例事でなければならぬが、しかしその謎をひそかに知つてゐたものは、船長とそしてKが三日間ポーカアの對手をやつた例の英人三名だつたのである。實を言ふとその三名こそは參戰の說服と、武器購入の重大使命を帶びてゐた秘密の使者だつたさうで、だから船長初め英人達は突如姿を見せた敵巡洋艦の機敏さと言ひ、艦長自身の檢點と言ひ、勿論スパイの內通による行動と判斷して、一方ならぬ心配の仕方だつた。

と、長いことかゝつて船內の點檢をやつてゐたやうであつたが、英人達の荷物の中からでも、それを裏書する何かの書類をでも發見したのか、艦長の命令と同時に信號手が巡洋艦に向つて異狀な亢奮を見せ乍ら旗を振り出した。同時に三門の砲口は相前后して目標をかへると、ぢりぢりとK達船員が分乘してゐた、二隻のボートに向つて擬せられたのである。しかもそれが意地悪くこまかに照準を合はして、ボートが波で搖れると搖れるやうにまた砲口を向けるので、船員達は期せずして首をちゞめた。勿論Kも必死と首を縮めやうとかかつたが、不幸にして彼は人並以上に背が高い上に、生憎とまたトップに位置を占めてゐたのでうまい工合に身を潜めることが出來なかつた。どう

せドンとくれば避ける暇もない事は分つてゐたが、それでも何かと思つて必死と周圍を見廻してゐると、その時突然うしろのMがKの袖を強くひッ張つた。

「おい艦長をみろ！　艦長の容子をみろ！　ひよつとすると助かるかも知れんぞ！」

助かるかも知れないと言ふ言葉が胸を打つたので、Kも思はず振向くと同時にKはそこで不思議な艦長の容子を見とめた。何に興を催したものかしきりと感に堪えないもののごとき面持をし乍ら、一心に西方の空を見守つてゐるので、釣られ乍ら視線を追つて行くと、Kもあつと目を瞬つた。實に珍奇！　そしてまた實に突如！　恰も日沒時で、最后の眞赤なその陽光を一杯に反射させ乍ら、不意にもくりもくりと二條の大きな雲の峯が水平線のかなたから上昇したと見るまに、見事にもそれが明瞭に積まれるY字形をつくつたのである。艦長はその美觀に打たれでもしたかのごとく直立不動の姿勢でぢつとそれを見守つてゐたが、ふと副官の方へ振向くと重々しい獨逸語で大きく言つた。

「ようし！人員はすべて本艦へ手厚く收容しろ！汽船は爆沈！」

――語り終るとKはその時目に一杯涙をためて、次のやうな事をつけ加へ乍ら僕に言つた。

「孰れは名のある風流艦長だつたらうがね。それにしても自然の美觀と言ふやうなものに對しては洋の東西を問はず凡そ人情は同じなんだね。殊にそれが當時人喰人種のやうに非難された獨逸人のそれも武人だからね。さう思つたら僕は暫く泣けてならなかつたよ。」

しかし僕にはその事よりも、Kが船室へ置忘れて來たと言ふボンド紙幣の束の方が氣になつたのでそれをきいた。するとKは泣いてゐる目に苦笑を浮べながら、事もなげに言つた。

「ううん雀百まで踊を忘れずと言ふやつさ。淺間しいものだね。あとでしらべたらちやんとポケットに取込んであつたよ」

◇

雲の歷史序說

藤澤衞彥

◆1◆ 民謠に遺る立雲の變化

ちぎれ鳥海山(てうかいざん)
鳥(とり)の音(ね)深い
ザツと夕立
來るであろ。

野山三里の草原を辿り盡すと、淋しく續く木山三里の山徑である。その山の神秘に閉ぢられがちな呼子鳥の啼音が、奥深い樹立の森から幽かに流れて來ると、

『鳥の音が馬鹿に遠い。夕立だな。』

と、先達があやぶむ。

日本海の壯嚴を支配する鳥海山の大自然に雲がかゝつて、海を掩ふてゐる三角形の山の影を立雲(たちぐも)がちぎると、もう夕立はまぬがれない。上騰氣流は飽くまでも旺盛に、雷雲(らいうん)となつて、雷電を迎しつつ、海拔八千何百尺かの山頂めがけて、むくむくと上昇し、所謂積亂雲(ギュムロニンバス)の曲型を成して、聳え廣がる。

◆2◆ 雲に關する民間傳承の價値

經驗によつて、天候の變化を豫知することは、氣象學の幼稚な時代、當然尊重せられたことで、その經驗の民間傳承にあるもの〻うちには、雲の形象と風との眞理を、俗信のうちに存し、民謠に遺せるものがある。

◆3◆ 入道雲の俗信と其被物

入道(にふだう)は湖(みづうみ)を煙(けむ)らす。

といふ俗信が十和田湖畔の村村にある。

入道は山の雨師。

といふ俗信が妙義山麓の村洛にある。

雲の峯から、むくむくと如意のやうな頸をもたげて、段々と發達し、入道姿の雲形と成長すると、間もなく、湖水一面にザアと驟雨がやつてくる。

曾て、北齋は、妙義山の入道雲を畫いて、空一面に其怪態の種々相を擧げたが、實際の入道雲の姿態を注意して見てゐると、北齋の入道怪雲之圖は、更に各自薄い絹の被物(ベール)を着けてゐるに氣づくであらう。さて、此時、一陣の冷風は襲來する。正にこれ山雨急に到らんとするの兆である。登山者は、入道の衣の裾に、赤味を帶びた眞黒な雲がぼかしに圖案されたのを氣にしながら、避難所に驅け込む。間もなく、雷雨たちどころにやつて來て、その勢力範圍は、茨城、千葉、埼玉、東京に及び、一過後には、そよそよと心地よい涼風が立つ。この入道雲を、氣象學では、又、積亂雲(キュムロニンバス)と呼ぶのである。

◆4◆ **日照雲の雲の峰と日和坊**

雲の峰が次第に高くなつて、所謂夏雲多奇峰の樣態に變じ、殊には其内の一つの峰が忽ちもくもくと湧き上つて入道雲の俗稱を受くるまでに變化する。

雲の峰(積雲(キユムラス))の遠く連つた景趣は、裾を水平に並べて、むつくりと積み上つた平和なもので、日本民間名稱を日照雲(ひでりぐも)(旱雲)といひ、又、綿雲(わたぐも)、浮雲(うきぐも)、綿帽子雲など呼ばれる。

平和なやうでも、積雲は、非常に複雜な渦動を續けてゐるので、氣をつけてゐると、その峰は、或は次第に高くなつて行き、或は高い峰が急に消え失せ、或は又新しい峰を生ずるといふ風に、片々として綿の如くに積まれた雲の峰は、上層の風に從つて游行し、夏の日の午後など、殊に高つて奇峰多しまでに進むのであるが、普通の厚みは二三十間位のものに過ぎないやうである。

雲の峰は、又、海岸線に近く現はれることがある。

三崎城ケ島あたり、夏日、白雲の一列に並ぶ現象を示す事が多い。これ、海上の冷たくして重い空氣が、陸上の暖かくして輕い空氣の下に押入らんとして、重きもの、輕きものを壓し上げ上昇せしめた際に、陸上の空氣は膨脹し、冷却して、積雲の現象を現はすのであるといふ。海の浮雲といふのがこれである。

日照雲は、日盛りにむくむくと現はれて、日が沈むとそのまゝ跡方もなく消えて行くのが本來だが、まゝ、晴の日がなほ幾日か續く象徵(シンボル)として、夕燒のやうに、その片雲に紅を染めて美觀を呈することがある。

かうした日の續く時、常陸の深山には、日和坊(ひよりぼう)の怪が出現すると信ぜられてゐる。俗間に、雨降りの續く時、照照法師に晴を祈るのは、この日和坊の靈を祭るのだとの說がある。

◆5◆ **日本民間觀天望氣法の要素としての雲の位置**

觀天望氣の法にして、雲を標識とすることは、昔、日本に於ては、尤も夏日に於て行はれた。

京都では、夏月、晴天續きの後、西方に白雲累積して、其形狀山嶽の如くなるを呼んで丹波太郎といひ、この雲起るは不日に雨ある兆とされた。

東南方に、このやうな白雲の現はれるを奈良次郎といひ、正南方遙かにこのやうな白雲の起り出づるを泉の小次郎といひ、東北方に白雲奇峰の如く現はるるを近江の小太郎といつて、みな不日雨の降るの先兆であるとされた。

然も、夏日の暴雨の如きは、晴雨須臾にあるが故に、先兆を以て論ずることはむづかしく、たゞ即日の雲氣、殺風の來徑を

密にして之を察しなければならないといふので、土地と風との關係が最も注意せられた事である。

叡山の頂上から、目路遙かに天霧らふ琵琶湖を瞰望すると、湖水を超えてとりめぐる近江の山山の波形に疊み合ひ、末遠く雲に入るのを觀るであらう。かうして、京都の東西は群國相連つて海岸に遠いので、西風は晴多く、東風も亦晴るといふが、湖水の濕氣を帶び帶びざるの影響があり、帶びると雨降る事があるといふ。

東北風を、京の俗呼んで湖地風といひ、又近江東風ともいふ。此風、湖水を歷て來り、多くは雨をなすが、若し甚しい時はかへつて晴れるといふ。

東南風を俗呼んで伊勢東風といひ、伊勢沿海の濕氣を帶びて來るので、少く吹けば晴れるけれど、甚しい時はかへつて雨となるといふ。

西南風を洋津風といひ、此風吹けば必ず雨あり。西北風を日吉風といひ、此風吹けば最も晴れるが、連日なれば雨降ることもある。北風は、一日晴れるが、やがて雨があり、南風は、晴るゝが例であるが、其風猛烈にして連日止まなければ卻つて霖雨となるとされた。

雲は、黑雲西南より東北に至るものを入雲といひ、必ず雨降り、東北より西南に至るものを出雲または込返といつて、雨一漏にして晴れることもあれば、長雨となることもあるとされる。

大阪では、丹波太郎、奈良次郎、和泉小次郎のほか、西方に、黑雲重々として東西に聳然たるを摩耶九郎といつて、北雲夕陽に五彩を成し、西北方に起るを有馬三郎といつて、以上、天氣相續くの後あらはるゝものは必ず雨の兆である。

東北方より吹く風をアナジ風又はシナド風といひ、必ず天氣晴明となる。北方より來る強風を北國來風といひ、西南より來る強風を眞風といひ、直接晴雨に關せないが、彼方の雲北に行き、此方の雲南に向ふが如きことあれば天候變化の徵であるとされる。

これが、飛んで、新潟、對佐渡郡に行くと、島の金北山を中心にして、例へば、次のやうな民用晴雨便覽が立てられる。

朝
晴光だ
後にや
一雨降ると思へ。

◆6◆ 山の帶としての層雲

下の鳥海山
腰に雲卷いた
明日は
下安（北風）吹くであろ。

これも佐渡の民謠である鳥海山の山の帶は、山麓の村村から、よく見える。學名を層雲民間名稱を棚雲と呼んでゐる雲である。

山の帶も、麓から見れば棚引いてゐる立派な雲だけれど、そこまで登つて見れば高霧であつて、よく其霧のために方向を誤り、遠近の差も分らず、種々なる錯覺をさせる。遠山奇談として昔から語られてゐる怪奇なものゝうちには、この霧に影響されれた非科學的なものが多いが、この霧も亦一種の雲には相違ない。「淮南子」に、山雲は草莽のごとし其形類に象ると見えるもの即ち此雲で、全く、彼は、霧の高所にあつて、草原のやうに平たく廣々と棚引いてゐる。

◆7◆ 白暈俗信としての日暈月暈

例の入道雲が發達した時、入道頭のあたりから、遠く全天に亘つて、四方へ、幾條かの長い白い羽毛のやうな纖細な薄雲の出ることがある。又、晴天つゞきの後、南方の海上高く羽毛で一氣に畫いたやうに現はれることがある。これが、細氷の結晶から出來てゐる卷雲で、この高層雲は、一般に、天候變化の前兆とされ、颱風の前後などには、必ず現れ出る。

その雲が次第に増加して、天空一帶、薄絹に擴つた變形を卷層雲といふ。此雲は變現極りなく、見る間に擴がり、見る間に消えて行く。薄い幕を張つて、空を蔽ふと、爲に、日や月の光を弱め、やがて、日や月に白暈が出來る。これも、天候變化の前兆である。

日が暈すれば雨となる。
月が暈すれば天氣が變る。

といふやうな俗信が、各地にある。

◆8◆ 雲種々相の變化

おばんが紅さいた
ととかかさんにいふてやろ。
おまんが紅
いはし雲。

などの、おばん、おまんは『おまん何處いつた』のおまんで、おまんが紅おばんが紅は、天が紅し、晩が紅する夕燒の光景である。おまんが油屋の角で液體をこぼしたことは、地上の降雨が月の狀態に關係してゐることを表はした自然に對する原始思想で、『おまんが紅鰯雲』は、初秋の澄み渡つた蒼空に、海洋を背景として、鰯の群の集れるが如き形に現はれる狀態の美しさを謡つたものである。

この白き鰯の群は、時に又、鯖の斑點の如くあらはれる事がある。これで又、鯖雲(さばぐも)の異名がある。

その變態も數多く、或は漣のごとく集るもあれば、蛇の鱗のまかれたる如くに見ゆるもある。

すべて、これ學術上卷積雲(シロキユムラス)と呼ばれる雲の種々相で、卷雲が現はれてから、次第にこの雲が出るに至れば、もはや降はまぬがれないとされる。

卷積雲は、頗る變り易く、忽ち滿天を蔽ふと見るうち、高度を低めて、積卷雲(アルトキユムラス)に變るなどの奇態を呈する。この時、鰯の群または鯖の斑點は、その雲片を擴げて、大班(おほまだら)となり、白雲の塊を大にして、一層天候不良の迫れるを示す。

積卷雲（高積雲）に對して、層卷雲(ストラトレラス)（高層雲）と呼ばれる旗(はた)雲がある。空一面に被さる薄鼠色の雲で、時には、その旗の長さは、帶の如く、土手の如くに廣がつて、太陽を鈍色(にびいろ)に曇らせる。所謂花曇の主體で花咲く頃から葉櫻の期に多くかゝる。

積卷雲が、空一帶に擴つてしまふ場合にも、天氣はどんよりとして來て、やがて又、光環(くわうくわん)と稱へられる虹色の環を日月の周圍に生ぜしめる。それから、天候いよいよ不良となれば、雲は次第に低くなつて、眞黑な塊つた雲が一面に浮ぶやうになる。所謂層積雲(ストラトキユムラス)で、日本では畝雲(うねぐも)と呼びならされてゐる。その變態で、波狀に現はれるものがあるので、支那では、滄雲(さううん)と呼び、波水(はすゐ)と名けてゐる。この雲に變化するは益々天氣の惡くなる兆で、これが、更に低くなつて來れば、雨雲(あまぐも)になるので、俗にミズマサと呼ばれる雲で、准南子は其形類に象つて、魚鱗(ぎよりん)（水雲）と名けてゐるが、それは、學名にも、亂雲(コンバス)と呼ばれるほど、其形一層亂雜なもので、數町の低空にやつて來て天を蔽ひ、雨降らすに至る。

◆9◆ 雲の樣態と其觀察法

雲は、樣態種々相の感じ、その親驗の特徴によつて、天候變化の大體をつかむ事が出來るとされたので、昔は、四正の雲物を確かにして天候を觀察することが、一つの定規とされたことでもある。

今、(A)「民用晴雨便覽」と、(B)「船乘天候錄」と、(C)「東方朔秘傳置文」(D)「雲形妙術集」との中より、その太陽を觀察して天象を觀驗した古人の雲による民間豫報を、一例證として次擧して見よう。

(1)朝に太陽の上を觀るに、黑雲或は霧氣ありて太陽をふさぎ、日光かたはらに射て、その色慘み淡く、黃色なるものは、その日必ず風雨あるものである。(A)

(2)或は黃なる氣、太陽を蔽ひて昏く、或は土を積むが如く、或は盆を累ぬるが如く黃色にしく潤ひ厚く、朝には東方、夕には西方に、太陽を壓ぎ、或は日を掩ふものは、皆これ風雨の氣である。

(3)入道雲高く、その頭の薄雲日を蔽ひて日赤ささすれば近きうちに雨あり。(D)

(4)日の出る前、雲あまた日の方にあるは、大風の至る兆である。(B)

(5)日の出る前、村雲、南北へ散らば、やがて風雨がある。(B)

(6)日の出る時、黃色に見え、また、大きく見えて、日明かにあらば、雷か又大風があらう。(C)

(7)日出づる時、赤きは風、黑きは雨、白きと靑きは風雨である(B)

(8)日出づるところ晴れて、やがて曇り、晴れざるは風雨の兆。(B)

(9)日出づる時、中の黑みたるやうに見ゆるは、濕氣、風も添ふと知れ。(B)

(10)日出で、黃色に見え、村雲下に棚引くは北風。(B)

(11)朝日あかくして天を焦すは風吹く兆、朝日あかく地を焼くは小雨降る兆。(C)

(12)朝日に焼くあれば風、夕日に焼くあれば翌日雨。(B)

(13)薄雲高く空にかゝりて日と共にあり、夕に鰯雲となれば、雨あるの兆。(D)

(14)日出でて火焰の如くなる氣上にのぼることあるは、大に旱する兆。(C)

(15)日照雲朝より夕につづき、色はゆるは天氣つづくの兆。(D)

(16)日、靑々として出づれば、大風に雨を添へるであらう。(B)

(17)日の出に、雲あり、日の雨わきにつきたるは大風の來る兆。(C)

(18)若し、晩に、日入りの時、太陽の上を視るに、黑雲もしく

は霧の氣ありて太陽をふさぎ、日光旁に射て黄白にして慘淡たらば、その夜風雨あるものである。(A)

(19)白雲空にあつて、其形、山の尖の如く、太陽の邊に起るものは、十二時頃(午刻)雨南方より來るものである。(A)

(20)朝、日出づる方に雲霧なければ、其日は必ず風雨なく、のどかにうらゝかなるべし。(A)

限がないので、こゝらで止めるが、昔は、風雨の氣を觀、天の晴氣を觀、雨の有無を明にし、天候を測るに、雲物を審にしたもので、未だなほ民間に於ては、上古の遺法として、民俗のうちに之を存するものが多いことで、殊に、山岳に於ける天氣豫報の如きは、今も觀天望氣法に據るところが多い。

◆10◆ 研究さるべき雲の歴史の廣さ

雲氣を望み觀て瑞妖を差別したことは、天文を觀て吉凶を豫言することと共に、往昔とりわけ兵家に專ら行はれたところで、「周禮」十煇の法など、雲氣をうかゞひ變態を觀て、天氣を占ひ、人事を愼んだもので、其後の天文を觀るもの、雲氣を占ふもの、皆これを本として種々に仔細を附會したものが多い。

日本の「雲形集」や、「兵家妙術集」や、「天時占候虎の卷」など、時に天象に對する經驗を重ねて、數々中るの理を有してもゐるが、「天時占候」の如く、地盤を定めず變占吉凶を形狀のみに置くは、雲形を以て香煙視した憾みがある。一炷の香煙、風絕えて無き時は、その煙、ただ一直線を繰り出すが、微風に因つて動搖する時は會聚散消するの狀、或は蛇の如く、魚の如く、浪の如く、木枝の如く、或は葉の如く、花の如く、輪環の如く、佛像の如く、其類、千變萬態、終に一つでない。然しながら、これ何の吉凶であらう、瑞妖であらう。昔、兵家が雲形によつて、戰日の天候を豫知し、戰爭を自利に導いた結果は、「大日本史」が錄せる雲氣の歴史以外、記すべき雲の歴史であり、古代人が、仰いで天を眺め、輪形の白雲を見ては之を天の湖水となし、其中に片雲の漂へるものを白鳥姿の Apsaras 神の沐浴と信じた思想の游行などは、更に遠く雲の歴史を原始時代に引上ぐるもので、雲形の民間傳承の全般を知るには、總て其處まで研究の手を伸すべきであらう。

畫としての雲

森田恒友

○

故鷗外漁史の名譯、「即興詩人」の中に、海を背景とした松原の景を記したところがあつて、それに、「松の黑きは、海の白きが爲めなり」といふのがあつた。「今手元に即興詩人が無いから、或は字句は違ふかも知れぬが、意味はさうであつた」之れは、「私共畫家からして、墨の色を文章に表はしたものとして當時面白く讀んだものであつた。又當時即興詩人を評した批評家の言に、此のところは、特に賛詞が呈されたようであつた。其後私は西洋を旅行し、西洋人の自然觀を大體知り、成る程西洋人として、そういふのはかなりに珍らしい澁い見方だと思つた。

而し東洋には、

「月出でんとして、雲先づ白し」

といふ句があることを思ひ出すと、同じく自然を黑と白との澁い見方をしたものとしても、遙かに後者の方が優つて居ると言はねばならぬ。

前者は、單純な黑と白との自然だが、後者は、復雑な、黑白の色感以外に、光りがあり、空の清澄さもあり、矢張り自然を書き、描いたものは、東洋の方が勝つて居ると感ぜぬ譯に行かぬ。

○

大體雲の美しさ、月の美しさは、何と言つても東洋のものだと言へる。

最近私は、山湖に舟を浮べ、湖上煙雲去來の景に、久しぶりに接したが、それは誠に美しい。煙雲の動きによつて、山湖は大きい感じになるし、湖畔の山々も、壯大な美しさを現ずる。

○

山旅をして、段々里に近く脚を運ぶ晩夏の午後に、ひぐらしの聲を聞きながら、疲れた眼先の空に、ふわりと毬雲が一つ取り殘されたやうに浮んで居るのを見ることがある。

又はねむの花が、溪合ひにぼんやり咲いて居るのを眺めながら、山路を下りて來る頭の上の空に、同じ雲が浮んで居ることもある。

それは如何にも旅人にとつて、淋しい感じのものでもあり、嬉しい慰めをもつ感じのものでもある。

○

山雲は壯に恐ろしく、野雲は親しみ易い。野に在つては、夏の午後、そら夕立が來るぞ、と云つても、梅干しや浴衣の干物を取り込む時間があるが、山雲はそんな時間は無い。山に雲が來たら、同時に雨が來る。それには恐ろしい感じがあるが、然

身に汗をかいた山旅などには、その冷たい雨をあびることは快いものでもある。

山の雲

石井鶴三

空に浮ぶ雲といふものは不思議にも美しいものである。私は雲を見る事を好む。天を仰いで、音もなく流れてゆく雲の動きに見入つて居ると、時も處も我をさへ忘れてしまふ事がある。

都會は年々高い建物が建られて、天がだん〳〵狹くなり、其上街の騷々しさとあはたゞしさに、人々は空を仰いで雲を見て居るやうな餘裕は奪はれやうとしてゐる。これは悲しいことだ。

だが、さすがに郊外へ來ると此わづらひから救はれて、ひろ〴〵とした天がわれらを迎へてくれる。郊外に住むものは幸福である。少くも朝夕美しい雲が眺められるだけでも。

實際、五彩麗しくかゞやく夕雲の美しさは誰の胸をも躍らすに相違ない。一日の仕事を終へて家路に急ぐ人々が、この夕雲の美しさに迎へられる時、恐らくは一日の勞苦もおのづから忘れられて淸々しい幸福に充ちた心持になるであらうと思ふ。これは私自身屢おぼえのある處である。この心、ものの美しさに感動する心こそ、美しく尊いものであると思ふ。藝術といふものの畢竟はこの心をもととして生れる。ものを作つたり作られたものを鑑賞する等の事は末の問題である。根本はこの美しき心にある。美しき心人の生活を美しくし、美くしき生活より萬の美しきものは生れる。

夕立のまさに至らんとする前、もの凄い黑雲の沸きあがるを見、遠雷の音を聞くと、私は誘惑されるやうにじつとしてゐられなくなる。氣の弱い人々のおびえて居る中を、私は雨着に身をかためて家を出て行く事がある。そして豪雨雷電のすさまじい活動の中に立つて、壯絕凄絕の光景を心ゆくまで味ふ。

私はいま、子供の時分下總の海岸で見た一つの光景を思ひ出す。それは六月の或日であつた。はるか彼方の空に眞黑な雲が幕を張つたやうに低く垂れてゐた。私は一人田甫の中に立つて、其黑い雲の異樣な物凄い色に見入つて居たのだ。と、其雲の中から雲と同じ色の蛇の尻尾のやうなものが垂れ下つて來た。はつと思つて居るうちに、別に海の中からも一つ同じやうな形のものがのびあがつて來て、雲から下つたものとちよつと觸れたと思ふと、ぢきに離れてまたそれ〴〵雲と海の中へかく

れてしまつた。

これはいふまでもなく龍卷の現象を見たのであるが、さう云ふ事を知らなかつた子供の私は全く恐ろしくなつた。非常に大きな動物が雲の中に住んで居るとしか考へられなかつた。家にかへつて家人に此事を話すとそれは龍が下つたのだと云ふ事であつた。やはりさうだつた。あの繪で見て居た恐ろしい龍といふ動物が雲の中に住んでゐるのだ。私の見たのは確に其龍の尻尾なのだと信ぜざるを得なかつた。それにしても海の中からあがつて行つた尻尾は何であらう。あれもやはり龍であらうか、海の中にも龍が住んで居るのであらうと想像した。そしてこの世には恐ろしいものが居るものだと思つたものだ。

はじめて山に登つた時、曉け方まだ明けきらぬうすあかりに雲の海を見た時の不思議な印象は今に忘れられない。頭の上にばかり見て居た雲といふものが、足の下にもく\/してゐたのだから全く驚いてしまつた。

日がのぼつてしばらくすると、それらの雲が活動をはじめる。或るものは一團となつて山をはひあがり、山の頂を越えて谷へ下りて行く。私はどうしても、それらの雲が生命のある生き物としか思へなかつた。

山中の雲の變化のおもしろさは到底拙い筆の及ぶところではない。山は雲のふるさと、其ふるさとに入つて人に會ひ雲と親しい友となつた感がある。平野にあつて天を仰いで其動きを見て居るのとは大に趣を異にする。近づいて手を握り合ふ親しみである。

私は嘗て雲の沸きあがる山の繪を描いた。山を知らぬ先輩の畫家は、雲が山より前に出て居るがおかしいと云つて批難した。私は山中では雲が山より前に出るのは常の事と說明したが、山を知らぬ人には首肯出來ぬものらしかつた。

大和の國は、美しい五色の雲があらはれる不思議な國である。一年私は古美術巡禮の旅に出て、しばらく大和の國にとゞまつた。晝は寺々を訪ね、夕方よくこの平野に立つて五色の雲のあらはれるのを見た。

上代の佛畫に描かれたり、裝飾に用ゐられたりした五色の雲は、はじめ私は空想より出たものかと思つたが、色も形もそつくりそのまゝのものが、自然の中に見られるに及んで、其寫實から來たものである事を知つた。古人の仕事の偉大を見る度に、いかに古人が自然に親しむ事の深かつたかを思ふ。自然を離れて私達の仕事はないやうな氣がする。今人ややもすると自然を疎にして、小さい頭をしぼつてものを作らうとする。遂に及ばないのではあるまいか。

各派無産政黨の臺所拜見

來間恭

一

この夏、信州の別所から眺めた淺間山のスロープが、ばかに氣に入つて、沓掛から登つて見た。中腹から上になると山肌は石炭殻をつんだやうに木も草もなく荒涼たることにすこしおどろいた。

目のさめるやうな舞臺に、黑子がチラチラしたり、舞臺裏や樂屋があつたりするやうに、どの家にも玄關があれば臺所もある。應接間は小綺麗になつてゐても、居間の方は取り散らけてあるかも知れない。この節、まさかどんでん返しもあるまいが、家によつては明かずの間くらゐないと限らぬ。

無産政黨だけ御多分に洩れる法はない。内幕を覗いてみれば隅から隅まできれいずくめとは行くまい、が千住骨ケ原の腑分に行つた良澤や玄白が臟腑骨節の眞相を初めて見たときほど、びつくりすることはないだらう。

しかし、さらの鼎でも叩けばすこしは埃が出るから、もしや御迷惑であつたら無産黨諸君へ平に御容赦を願ふことにして、ぼつぼつ初めよう。

二

無産黨といへば、どうしても本家は勞働農民黨だ。本家が必ずしも長者ではないのだから、分家諸君、おこつてくれるな。本家の貧乏世帶を見なさい。

ついこの間、本部で會計係の佐野君が書記の小柳君に向かつて「けちなことをするな、もう三錢だせ」と怒鳴つてゐる。小柳君は悄氣てゐるから、何かと思ふと、小柳君が黨の選擧基金へ銅一錢寄附したのに、熱心な會計係はてうど白銅にしたかつたのだ。

佐野君の郷里は、會津若松から二十何里とか山の奥で、東京から歸ると歩く時間が汽車の時間の倍はかゝるさうだ。杉山元治郎氏がまだ福島の方で耕しながら傳道してゐたころ、慕つて訪ねて行つた歸りに、貰つた鷄が、途中で卵を二つ生んだといふ話のある山の中から、切り出したばかりの材木のやうに、佐野君は朴訥至極な青年、小柳君は今年の春、大山さんの事件で早稲田を退學になつて、至つて金氣のない方だ。そこで僅か三錢のことが問題になる、人に罪なし、金が現行犯だ。

去年の冬、本部は火の氣なしで、みんな外套を着たまゝ仕事をしてゐたが、地方から出て來る黨員が誰も彼も本部で風邪をひくといふので遂々安物の瀨戸火鉢を二つ買ひ入れた。

勞農黨の本部は、衆議院の近くの組合クラブといふビルデングの中にある。三階の一室で十五坪くらゐの廣さ、屋賃は月八十圓に電話の借り賃十五圓、電氣代五圓、ガス代二三圓を合せて百圓あまりだ。この頃書記長の細迫君が時々ビルデングの事務室へ召喚される、頭を下げながら滯納を詫びてゐる。敷金が三つも入れてあるが、家主さんは一と月と待つてくれない、督促急を極めるので、廿圓か三十圓づつ、それもはしたつきかなんかで小刻みに拂つてゐる。それで時々電燈を消されたりなんかする。

震災記念の九月一日には、ビラを撒く筈であつたが、印刷代がなくて撒けなかつた。

「勞農黨へはロシアから金が來る」といふ人がよくある。社會民衆黨あたりでさへさう言つてる人がある。よしそれが本當としても——本當ならなほ更、勞農黨は「ウン、貰つてるよ」といふわけがないから、はつきりはいへないけれども、まづルーブルの匂はしないやうだ。尤も別な方面へ、こつそりソビエットの赤い金が來て、間接に勞農黨の運動が助かつてゐるやうな筋合ひはあるかないか、保證の限りではない。

最近に財政部の黑田君が、既往八ケ月の細かな計算から割り出して作つた豫算書によれば一ケ月の本部經常費は五百三十五圓になつてゐる。それは機關新聞の費用をのけたもので、内譯を見ると、

事務所費	一〇五圓
給料	一八〇
雜給	七〇
旅費	三〇
通信費	五〇
印刷費	三〇
消耗品費	四五

その他雜費などが三十五圓である。これまでは書記の原君と會計の佐野君と二人だけ三十圓の俸給取りで、ほかには電車賃として四月づつ貰ふ者が六人あつたのを、九月から改正して三十圓のサラリーマンを六人に增し、電車賃を含む雜給も全體で七十圓にふやしたのである。

三

これにしても可怪しい。毎日本部で働いてゐる人が十四五人はゐる。西村さんと清家さんは紅二點、は餘談だが、みんな一體どうして食つてゐるんだらうか。

大山さんは浪人しても、原稿を稼ぐし、七萬圓に賣らうといふ家持ちだけに、月々黨へ三四十圓はきまつて出すし、臨時に收入があると澤山出したりするのは當り前として、常任委員の難波、上村、大道、秋和氏なども、無論黨からは一厘も取らない。細迫君は、親父さんが長州の豪農だから、口實さへ付けばいくらでも引き出せる。脛をかぢる合ひの手に原稿を書いてつないでゐればよいのだから、いゝ身分だ。高松高商教授をやめて來た益田君は、初め二ケ月ほど五十圓ばかりの給料を貰つたが、とても黨に氣の毒で取れないから、と斷つて電車賃だけの組に落ちて、飜譯で暮らしをたてゝゐる。佐野君は三十圓の月給でどうにもならなくなると、會津山中の父にあてゝ、叮嚀な手紙を書きだす。

問題はあとの連中だ。連中とは失敬だが、大てい毎日本部で顏を見る佐伯君淺野君岡部君らは東大、橋本君は京大、杉本君小柳君長島君秋笹君水島君などは早大、吉村君は大阪外語といふ風に、みんな學生上りのごく若い人たちで、その中の橋本、秋笹、吉村、三君は京大事件の被告で學校へ行けなくなつた組、長島君と小柳君は大山さんの問題で、この春早稻田を出された。

淺野君と京大出の淡君は、このごろ賣り出してゐるから周圍を多少うるほす餘裕がある。橋本君は、但馬の豐岡で一か二といふ金滿家の息子だから、皆のドル箱、社會理法とあべこべに搾取される一方だ。

他の諸君は身分からあまり親兄弟をせびれないし僅かにパン仕事があればする位で、五六人一緒に合宿して安上りのドン底生活をしてゐる。

「今日は肉を食べよう」

「いゝな」

「コマ切れでないやつを食べたいな」

「だれか金だせ」

「有難くお禮を申せ」五十錢玉一つ、
「占め占め」
「上等とコマ切れと半分つ買はう」
「君さき歸れ、めしを炊いとけ」
こんな調子の會話を聞くことがある。小さいコンミュニズムの世界だ。

四

黨本部の經常費五百圓なにがしかは、どうしてどこから出るかといへば、まづ黨費が感心に月平均二百五十圓くらゐ、はいつて來る。黨費は黨員一人が年三十錢だから、逆算すると、黨費を完納する黨員が一萬ある勘定になる。黨費の集まりがよいのは左翼の强味として誇つていゝ。

尤も月二百五十圓といふのは平均の話で、普通の月は新設の支部から承認して貰ふために送つて來るのが多くて、百圓に足らぬこともあるが、黨の大會の時には一度に纏まつてはいる。去年の末の大會に、黨費が九百廿何圓集まつて、寄附金などと一緒にして千圓ばかり、中澤銀行へ預け入れたのは、豪勢だつたが、例のパニックで出し殘りの十何圓かをフイにした。

維持會員の方から月々百七八十圓は集まる。時たまに篤志家がくれる特別の寄附金も、平均すると月五十圓位だし、友誼團體から寄贈された雜誌などの賣り上げも三十圓位はあるから、それで經常費だけは出て來るわけだ。けれども無產政黨には機關新聞といふ莫大な金を食ふものがある。

「勞働農民新聞」は月三回發行で、一回に一萬枚刷つてゐる。一回分が紙代や印刷費などで百七十圓、その三回で月に五百十圓の金がかゝる。新聞は特別會計として、自給自足を原則にしてはゐるが、いつも例外ばかりで、新聞による收入は誌代と廣告料を合せても百五六十圓、その外はまるで欠損といふわけだ。ロハで新聞をまくようなもので、そろばんは取れないけれど、新聞を失ふことは政黨が消えてなくなることだ。新聞政黨なんかいはれる所以だ。印刷所は度每に、きちんと百五十圓位耳を揃へて行かなきや、刷つてくれないから、發行日の前には幹部が四苦八苦する。本部費があればとり敢えず流用する。別途會計もなにもあつたものではない。經常費が食ひ込まれて、家賃を拂ふに困るといふ順になる。寄附を頼みに行く。書店から前借りする。切つぱつまればアイスへ走る騷ぎをして、やつと刷り上つたところへ發賣禁止と來た日には……。

變なお婆さんを、たまに本部で見かける。新聞の保證金を千圓貸してあるので、お婆さんは每月きまつた日に利子をとりに

來るのだ。十八圓を懐にして皺くちやな追從笑ひをしながら
「はいさようなら」

五

ちと景氣のいゝとこを見よう。

たれでも驚くのは勞働農民黨の會議ぶりだらう、その生き〳〵としてゐることに。

マルキシズムの理論が、たゞ理論としてゞはなく、現實の問題に結びつけて整然と説かれる。駁論が出る。駁々論が出る。秩序と親和の空氣の中を眞摯な論爭が進む。議論の盡きたところで大山さんが結論を與へる。府縣會選擧に用ゐる一般政策の浩瀚な原案も、さうした討究を數日重ねた上で決められた。議案をほんとに練る會議だ。

毎週月曜日の午後二時から常任中央執行委員會が開かれる。時間勵行だ。眞劍勝負のような會議が大てい夕方までつゞく。

毎週一回か二回、事務會議がある。學校出たての若い諸君が思ふ存分な意見を吐く。細迫君も時々ひどい目にやり込められる。

大正十年前後の東大新人會の連中などは、多くは、學校を出ると一定の職について衣食の安定をもちながら片手間に、紙の上の社會運動をやつて、鬱を散ずる程度だつた。最近の社會科學の學徒は、それとちがつて、いきなり渦の中へ身を投げる。

梅田さんが、ある時ある人に「このごろの學生はほんとにやる氣だよ、ほんとにやるさうだよ」つて、感に耐えた表情をされたことがあるが、全く、最新のゼネレーションは疲れと空腹を知らない。朝早くから黨の雜務をとる。使ひに走る。演説に行く。ビラを撒く。辻賣りに立つ。檢束される。讀む。書く。身體中の動くものをみな動かす。彼等は自然に、黨の腦になり、心臟になり、手足になる。黨が彼等のものにならなかつたら不思議だ。

京大事件の被告三十何名は、一人のこらず勞働農民黨で働いてゐる。黨へ食ひ込んでゐる、本部でも地方の支部でも。

六

日本農民組合がおとゝし、初めて單一無産政黨を提唱してから、無産政黨はいくつかに割れた。組合自身もいくつかに分れた。しかし日本農民組合は今なほ勞農黨の礎石である。

評議會が、政治研究會時代このかた無産政黨へ植えつけた細胞の力は、牢として拔き得ない。評議會を勞働農民黨から除け者にしようとした右翼や中間派が、自分で出て行くより仕方が

なかつた。

今年になつて、いはゆる混合型の問題がおこつた。それが福本氏から山川氏への乘り換へを意味するかどうか別として、組合は經濟鬪爭の組織に、黨は政治鬪爭の主體に、二つの職分が、かつきり分れたのは、正しく黨の成長したのを意味する。

職分は分れたが、實體はやはりもとの通りだ。農村では日本農民組合員が、都市では評議會員が、勞農黨の中心であり、又は殆ど全部であるのに變りはない。府縣會選擧に立つた候補者も二つの組合員が大多數である。

全國水平社のうちの勞農黨支持聯盟は、奈良、三重、福岡、愛媛、岡山、京都などで、黨支部の有力な構成分子になつてゐる。今度立候補する奈良の阪本君、三重の岡田君と山田君、福岡の梅津君、京都の菱野君などは水平社の人だ。先ごろ起つた津刑務所長の差別問題で勞農黨と全國水平社はます／＼接近しつゝある。勞農黨は各地方におこる具體的な問題を見のがさずに捉へて、鬪ふ。鬪爭のみが大衆を敎育し、獲得する、といふ勞農黨の考へ方、やり方は選擧の場合でも同じである。いかに多く投票を得るか、といふことよりも、いかに鬪爭し、いかに曝露するかゞ勞農黨には大切な問題である。

大道君等の東京市從業員組合は、東京の各支部に屬してゐる。東京市電自治會の幹部派は秋和君等の統率の下に、新宿、大塚、巣鴨、錦糸堀などに優勢である。早稻田車庫の控所では幹部派と健實同盟派とが、聲明書やビラを貼りつ剝がれつ鎬を削つてゐる。俸給生活者組合は人數は少いけれど、東京、横濱、大阪、神戸などの黨支部で重要な地位を占めてゐる。

おもしろいのは、勞農黨を支持する團體の間に、しかも似たもの同士の間に、對立があることだ

佐野學氏を盟主とする雜誌「マルクス主義」の一派と、禪茂人君をキャプテンとする雜誌「大衆」一派との理論鬪爭がその一。

布施氏の借家人同盟と、それから分離した神道氏等一派の日本借家人同盟との拮抗がその二。前者は雜誌「法律戰線」をもつて訴訟主義で行くし、後者は機關紙「借家人」に據つて大衆行動を誇る。

第三に、最も愉快なのが、通稱「プロ藝」と、通稱「勞藝」の軋轢だ。プロ藝にいはせると勞藝を除名したのださうで、勞藝ではプロ藝を後足で蹴つて出たのだといふ。それは勞農黨にとつてはどちらでもよい。兩藝がめいめい自分こそ勞農黨の後援者だといふ氣持で助けてくれるから。

プロ藝こと、日本プロレタリア藝術聯盟は「プロレタリア劇

場」を提げて北海道へ行つて、この間あの上演禁止問題をおこした。そして藝術自由の名において頑強に當局と爭つた。プロ藝には、失禮ながら、文壇的名士が居ないだけ、コンミユニストパーテーの意識が強くて、行動がテキパキしてゐる。繪をかく橋浦君はこのごろ勞農黨の選擧ポスターを一枚頼まれても十枚くらゐ描いて行つて、一枚分の代金を貰つて歸る。明眸の谷君は、夏のルパシカ姿を毎日のように黨の本部へあらはす、檢閲制度改正同盟の仕事で。中野君は黨のパンフレットなどに名筆を揮ふ。

勞藝と略稱される勞農藝術家聯盟には、前田河氏を初め、若手ながら葉山、林、佐々木など、賣り出しの文壇人が顏を並べてゐるので、やゝ泰然としてゐる。といつても勞農黨が何かやらうとすればすぐに應じて立つ意氣がある。金錢的にも有力に助ける。

勞藝はトランシチーヴ、プロ藝はイントランシチーヴ、たつたインの差だけ。

さうした部分的な三つの對立關係は、しかし勞農黨全體としての和らぎ、すつきりした氣分を、みだすほどのものではない。

維持會員の名前をあげてみればどんな人たちが勞農黨の成長を目守つてゐるか、わかるのだが、もしや御迷惑があつては濟まないからやめよう。しかし劇壇を絶えず先驅する小山内氏が少からぬ厚意をよせてゐること、清き强き光芒を文壇に放つてゐる藤森氏が古くから、勞と財を惜まぬサポーターであることだけはいつておきたい。

勞農黨の旗の下を長く覗きすぎた。もう見落しがあつていい、長居はけんのん、なぐられないうちに出かけよう。

七

日本勞農黨は勞働農民黨のお隣りさんだ。

去年のくれ、麻生氏が一味とゝもに、住みなれた總同盟を後にして、日本農民組合の健實派と一緒に別な世帶を持つた。

日勞黨はいふ、左はいけない、右もいけない、俺たちこそ階級戰線の正道を行くのだと。

第三者、たとへば堺利彦氏の如きは、遠く見ろ、大きく思へ、同じことぢやないか、日勞と勞農は一つになれ、といふ。

理くつは今日はごめんだ。日勞黨も一たん張つた世帶を、さう簡單にたゝめはしない。日勞黨も炊煙をあげてゐる。炊煙の上り具合は細々としてゐるか、景氣よくか。

本部は芝公園地、御成門の停留所からすぐのところに、セミバラックの借家である。家主はもと朝鮮銀行總裁であつ[illegible]

部使吉氏、大ブルだけあつて、敷金いらず、家賃が少しくらゐおくれたつてなんとも云はない。と却つて妙なもので、借り手の方は毎月八十五圓也を律義に持つて行かねばならぬ氣になるさうだ。

人件費は書記二人の給料二十五圓づつで、たつた五十圓。宣傳費として、本部から地方へ出かける人の旅費や宣傳ビラの代金が、月に七八十圓から百圓くらゐかゝることもある。通信費がたかたか馬鹿にならない、一遍支部へ指令を出すにも二錢切手が百何枚と封筒なんかで三圓はかゝる、月に五回も支部へ何とか云つてやれば十五圓、その他電報や手紙の往復で十圓、電話料は月に三十圓位拂はねばならぬ。そんなものをみな合せて一ケ月の經常費は三百五十圓ないしは四百圓になる。

機關紙の名は「日本勞農新聞」で、一回一萬枚の費用百五十圓、の月二回發行だから三百圓ないし三百五十圓の現金が要る。

本部と新聞の費用を合せて七八百圓、その財源を聞いてみると、收入の概算は、黨費平均五十圓、維持會費百圓、新聞紙代及廣告料百八十圓、小口寄附三十圓で、〆めて約三百六十圓にしかならない。それは所要の半分に足るや足らずやだ。もうあと三百五十圓乃至四百圓は泣いても笑つても要るのだから、こゝに正體のはつきりしない特別寄附といふ項目が生れる。「大口の特別寄附金は麻生、加治、松谷、山崎、賀川その他の黨關係者が出してゐるので拘束をうけるやうな惡金は決して取つて居らぬ」と重厚な三輪書記長がきつぱりいふのを、マアそのまま信用してよからう。

先だつても麻生氏は伊豆のどこかの温泉場に逗留して、小說に潜念してゐたから、そのうちに小說はどこかの新聞か雜誌にあらはれて、金は特別寄附だらう。五月ころ山崎氏——米國伯爵が保證金を出して、新聞を月三回發行にする筈で、紙上にその豫告までしたところへ、山崎氏の取引銀行たる中澤銀行の破綻で、保證金が出せなくなつて旬刊計畫はオヂヤンになつた。尤も伯爵は衣食には窮しなかつたと見えて、その後、加藤君と岩内君が補缺選擧に立候補したときに「一枚の電報を百枚くらゐに有效に使ふことを條件として」金十圓送つて、相かはらずの今朝彌式を發揮してゐる。

新聞の方が今のやうに一頓挫をきたしたところへ、寢耳に水ぢやないが、印刷機械が一台ころがり込んだ。それは望月君のお父さんが自家で使つてゐたのを寄附してくれたのだつた。無產黨には何より重寶な道具、印刷代が滯つて刷つて貰へぬといふ心配から解放されて、面白半分に毎日ゴトン／＼いはせてゐ

る。序だが、好漢望月君は、この八月、まだ糟糠中であつた愛妻を失つた。郷里の靜岡縣岩淵町から出て來た望月君の兩親や親類の人たちは、實は内心「源次は何して暮らしてゐるのやら」と思つてゐたのに、組合員が大ぜい行つてどんどん働くし、お通夜にも立派な人が多いのに驚いてしまつた。お父さんは嬉し涙と悲しい涙と一緒だつたそうだ。

勞働農民黨は無名青年ばかり多くて　演說會を開くのに名士拂底を嘆じてゐるが、日本勞農黨には、世間的に名前へ苔のついた人がいくらもある。麻生、松谷、三輪、上條、加藤、望月、岩内、細野、三宅、淺沼、田所、河野などの諸君の名前なら、演說會のポスターに書き榮えのする方だ。足尾の石山氏や、强戸村の須永氏も、組合のことを多少でも心得てゐる限りの者にはよく知られてゐる。

關西方面でも杉山、賀川はもとより、栅橋、山名、阪本孝、藤岡、吉川、阪本勝の諸氏など斯界の名士が日勞黨關係にかなり多い。むしろ日勞黨は、避雷針みたいに、頭の方が先りすぎるくらゐだ。

日勞黨には、全日本農民組合、日本勞働組合同盟、組合總聯合、司厨同盟、窯業總同盟などと、支持する組合が多い割に、黨の活動ぶりが左翼ほどには冴えない。黨費の集まり方も勞農黨の五分の一にも足りない。どことなく、どんよりした氣分が、この黨の根本的な立場から醸されてやしないか。右へも左へも寄れない窮くつさ、中間道の惱み、といつたようなものがありはしないか。

日勞黨の本部に行つて見ると、壁へ貼紙して「寢ころぶべからず」だの「白晝將棋をさすべからず」だの書いてある。てうど社會民衆黨本部にも、中央委員勤怠表が張つてあつて「當番欠勤は罰金十錢」と脇へ書いてあるのと同じで、そんな貼紙の必要なことは、一抹の惰氣があることのシノニムであるやうな氣がする。が將棋必ずしも悪くない證據には、將棋隊ともいふべき河野、菊川、資積、織本の諸君が日勞黨では正に彰義隊で、理論的にも事務的にも一番俊秀な尖鋭分子である。

八月のある夕方、本部の事務室で、河野君が麻生氏に向つて、

「本部も支部も働くことについてもつと考へる必要があると思ふ」

「どうして？みんな働いてるぢやないか」

「僕にはこれで充分だとは思はれない」

「どうすればいゝんだ」

「どれすればよいかといふことを考へる必要がありやしないか

と思ふ」

「今だつて皆せい一ぱいに働いてゐるんだしこれ以上どうにも仕様がないだらう」

「しようがないことはない、例へば勞働農民黨のやうなやり方にも……」

「君、ありや左翼のやり方だよ、たゞいらいらするだけのことだよ」

「さうぢやない、左翼からでもどこからでも學ぶべきことは學ぶがよい」

と河野君は、ねばりのある口調に熱を帶びながら、諄々と黨の行動や執務の方針について意見を語つた。麻生氏は王將が追ひ詰められた形になつて行つた。傍で三輪君は默々としてゐた。爭ひではなかつたが嚴肅であつた。

八

社會民衆黨の本部を見よう。芝園橋を三田の方へ渡つてすぐ、芝園ビルヂングの二階へ上つてドアをあけると、眞向ひの壁に大きな繪が張つてある。この繪は松岡、宮崎兩氏が南京政府を訪ねて、歡迎をうけたときに宴席を飾つたものださうだ。まん中で大きな手が握り合はされて、兩側に青天白日旗と社會民衆旗が飾つてゐる圖である。

三民主義と社會民衆主義の關係問題は預つて、こゝ社會民衆黨は安部磯雄氏がソシアルデモクラット三十年の生涯に、自ら最後の花を飾らうとするところである。

去年協調會館に開かれた、この黨の準備會の席上で、十ばかりの黨名をならべて、その可否を參集者の擧手に問うたとき、議長席にゐた安部さんが、「社會民衆黨」に手を擧げた爲に、その時最多數であつた「日本勞働黨」をやめて、次點の社會民衆黨に決まつた。民衆黨の生命とする精神は、すなはち安部さんの精神である所以もうなづける。その指導精神を一口にいへば「合法的手段による社會改造」である。合法的手段に力を入れて讀むこと。それをもつと判りよく言はうとすれば、多くの言葉を費さねばならぬから、それは他日の機會に、應接間でかみしもを着てのことにして、今日は家人の居間でくつろいだ話をしたり、勝手元を見せて貰つたりしようといふわけ。

しかし主人の安部さんは、自分の居間でゝもめつたに、だらしのないなりなぞしさうにもない。謹嚴なことにおいてエマヌエルカントを思はせ、溫雅な點においてジョージワシントンを偲ばせる。全國を行脚する安部さんの人氣は至るところでとてもいゝさうだ。その人格を慕つて入黨する者や、金を寄附する

者も少くない。匿名でかなり巨額な寄附を安部さんまで送つて來ることがよくあつて黨はホク／＼。安部さんは教育界だけの人でなく、宗教界や體育界だけの人でもないやうに、政治界のみの人でもない。しかし假りに政治家として人氣投票をやつてみても、安部磯雄は田中義一に必ず負ける、と誰が保證するか。とにかく安部さんは日本のもつよい方面を綜合した人格だ、といつてあまり不當ではない。

今年の三月、協調會館で對支問題の演說をやつた後で、黨の連中がみんなでどこかへコーヒーをのみに行かうといふ話になつた。すると安部さんは「十錢づつでも儉約した方がよいでせう」といつてサツサと歸つて行つた。こゝまでのことはその當時新聞に出た。ところがその晩に、鈴木文治氏は安部さん以外の人と一緒に、銀座のカフエータイガーへ現はれた。あの大きな圖體では人目につかないわけに行かない。ある人は、安部さんがコーヒーをのむのをとめたといふ新聞記事を讀んで、一方鈴木さんがタイガーにゐたのを目擊して、非常に鈴木さんを非難した。がありやうは、健康そのものゝやうな鈴木さんはいくら食べてもすぐ腹がへつて堪らない人だ。その晩もタイガーでライスカレー一皿とハヤシライス一皿を平げて、コーヒー一杯と水をのんだゞけだつた。罪は食慾にあり、健啖が罰せらるべきであつた。

鈴木さんは、だらしないといふほどではないが、ノンキマンだ。天成の樂天家であるところに、ほれ込む人もある。總同盟は自らの代表者として、鈴木さんを社會民衆黨へ送り込んでゐる。經濟運動の方は松岡、西尾の兩氏らで引き受けてゐる。その方が鈴木さんには恰好な進路か知れない。氣質から見て組合よりは政黨向きにも思はれる。今度も勞働會議から歸つて、疲れをいやす間もなく、報告演說會もあとまわしにして九月一日から舌戰の旅に上つた。大正元年八月一日、ユニテリアン教會の一室にあげられた「友愛會萬歲」の聲が近代日本の黎明を告げてから、こゝにまる十六年の歲月が流れた。來年あたりは、もうあのビヤ樽を日比谷の議會に見つけてもおそくはない。

社會民衆黨が、安部さんと鈴木さんを酷使しすぎるやうに、その人については、つい多くを語りたくなる。

安部、鈴木兩氏とゝもに中央執行委員で、苦しい會計監督をかねてゐる島中氏は、往年の鋭鋒をつゝんで、內助に專らである。いつか本部で、財政狀態はどうかを聞いて見たら「名實ともに無產黨でね。」

本部の經常費は、こゝも他と大同小異で月に五六百圓かゝる。他黨と少し違ふのは、書記の大槻、細田、安平の三君が五

十圓の高祿──他黨に比して──をはんでゐることだ。黨費は年額十錢で、殆ど何の足しにもならない。吉野先生の肝入りで出來た社會民衆クラブといふ後援會と、時々の特別寄附などで、どうにか支へられてゐる。府縣會總選擧に本部が使ふ運動資金は三千六百圓の豫算で、今までに千圓ほど集まつてゐる。白柳秀湖氏がポンと百圓出した。總同盟の關東同盟會も百圓寄附した。

機關紙「社會民衆新聞」の編輯ぶりは、ほかの無産黨新聞に比べると水際立つてゐる。その代り月二回出して九百圓要るといふから金もかけてる。その新聞は黨の出來るずつと前に赤松君が創めてゐた。赤松君はいろんな能力において無産戰線の異彩だ。左翼の尖鋭を一手に引受けて右翼の論陣を守つてゐる。黨の行動を指導する。演壇へ立つて熱辯を揮ふ。新聞の經營も一人でやる。「民衆の夕」を思ひ付いて映畫九官鳥を西村樂天氏に説明させて、一夜に三百圓儲けたなんて手腕もある。

片山書記長を初め、馬場、宮崎、鈴木、小山、小池、松永、渡邊、龜井、山崎の諸氏にもお目にかゝるべきであるが、今日は急ぐから失禮しよう。たゞ温厚な片山氏が、黨務に熱心のあまり收入減を來たして、家産を持ち出すので、どうか家庭爭議の起らないことを祈りつゝ。

九

日本農民黨は、無産戰線の内部ではほとんど無産政黨として の取扱ひを受けないことが多い。指導精神が、全然アンチマルキシズムでしかも國粹的なスローガンを振りまわしたりするものだから。黨は全日本農民組合同盟との混合型で、黨の機關は黨首を委員長などといはずに、總理といふし、他では中央執行委員といふところを總務といひ、書記長に當るものが幹事長といふ名前で、その邊も既成政黨軌を一にしてゐる。

早大の北澤氏は顧問の名義で黨を助けてゐる。右翼論陣の驍將である高橋龜吉氏も理論的な方面を支援してゐる。須貝氏は筆頭總務（總理は缺員になつてゐるところに味がある）におさまつて「今度の選擧には、わしも大分金を出してやらねばなりませんわい」といゝ氣持な話であるが、實際にこの農民黨を支へてゐるのは平野君だ。この一族の生活はピンからキリまで平野君の一本脛にかゝつてゐる。農民黨は平野君の私黨だといつても恐らく言ひすぎでない。

こゝの家計だけはどうしてもわからない。當の平野君が「どれだけ要るか、どれだけ使つて來たのか僕にもわからない」といふんだもの。苦衷はお察し申す。金庫までコヂあけるやうな、

はしたないことはしますまい。

赤阪見附のお濠に臨んだ、木造の洋館二階建が日本農民黨の本部だ。その全部を占領してゐるから仲々手廣い。疊の間もあつて十人、十五人は寢泊りもできる。去年の十一月、こゝを借りるときに敷金を一部入れただけで、その後はビタ一文も拂はないので家主はカン／＼に怒つた。しかし平野君は麹町の福島館といふ自分の下宿してゐるところの主人を說いて、その洋館を買ひ込ませて終つた。「これで來年の春まで家賃の心配がなくなつた」と平野君はニコ／＼。

また平野君は宣傳用のフイルムを作つて田舍を持ち廻れば一擧兩得と考へて、脚本を作つて貰つて蒲田松竹へ持參したが、話が甘く行かなかつたので、中央映畫社といふのへ話を持ちこんだ。平野君の計算では、見料二十錢で一ケ所三百人と見て六十圓、月に二十回やれば千二百圓、それも黨と組合の力でやるからフイルムの元をとる位お茶の子といふわけだつたから、映畫社の主人は一ぺんに大乘り氣になつて、作り上げたのが五卷もの「種蒔く人」。平野君は徒手空拳、たゞ一枚の借用證文と引き換えに「種蒔く人」を手に入れた。いゝ腕だ。

平野君と逆に堅實一方で行く三和君が會計に頑ばつてゐることは日本農民黨にとつて何よりの幸せだ。この人がゐればペルレットのやうに足元を忘れて牛乳壺をこわすことはない。策にかけた純な人が未來をもつ。「物はいつまでゝも道具に使はれるが人は……」なんかいつても三和君なら惱らずに受けとつてくれさうだ。

一〇

めくらのかき覗きはもうよさう。

魔法の絨毯

——もだん・でかめろん其六——

谷譲次

1

あめりか西部地方の禮裝は、敬愛するW・S・ハアト其の他の主演にかゝはる映畫「われは男なり」、「われも男なり」、「眠れる谷」、「愛馬のうそぶく時」、「覆面の酒場」、「沈勇ジミー」、「熱血の夕陽」等・等・等——無數の「等」——によつて、とくに世界的に知られてゐるが、いまこの西部活劇の英雄に必要な小道具をあげてみると、まづ第一に愚鈍なそして勇壯な横顏、以下列擧。

羊毛の短衣。砂ほこり。

はしのまくれ上つた鍔廣帽子(ソンブリロ)。

眞鍮の鋲を打つて、土人風(インデアン)の模樣を出してある、下の擴がつた革製の脚當て。

眞紅な絹の襟飾り。

片手でまく紙卷煙草(ロウル・ユア・オウン)。

左右に肩を振る歩きかた。

粗暴さ。口尻の微笑。ふたゝび砂けむり。

乘り手よりも聰明な馬。

舊式な大型二挺拳銃。

「腰のぴすとる伊達には差さぬ、人を撃つため殺すため」——なんかといふ次第で、これがモンタナの旋風(サイクロン)、もしくはワイオミングの山猫(カイヨテ)として人ぞ知る牛小僧(カウ・ボウイ)のいでたちだが、こいつも、牧場主のひとり娘「うるはしのヒルダ嬢」を救はんものと恐怖の森をさして悍馬を走らせてゐるうちが身上で、汽車の沿線に寝そべつて車窓の都會人を揶揄したりしてゐるところは、ひどくだらしがない。もしまた、誤つて紐育へでも押し出して

こやうものなら、まさしく幽靈が戸まどひしたかたちで、單に物語的な牡蠣を笑はせるにとゞまるであらう。

ところが、このカウ・ボーイのつくりは必ずこの上なく自分に似合ふと固く信じてゐるたつた一人の男が、紐育州紐育市内にあつた。あひのこオスカアである。

あはあ！　オスカア！

じつさい、あひのこオスカアが上記の裝身具を纏つて午後三時の廣小路を濶歩したら、その浪漫的なこと、その高壯なこと、確實に「市の美觀」であらうと思はれるほど、オスカアは警部のやうな堂々たる恰幅と、アロウ印し洋襟(カラー)の廣告繪にでもありさうな彫刻的な顏との所有主であつたが、あわれ、このオスカアも非色彩的な東部亞米利加人の扮裝においては、たとへいくら洒落てみたところで、要するに「化粧品店の牛小僧(ドラッグ・ストア・カウ・ボウイ)」であり、「瀬戸物屋へ追ひ込まれた牡牛」であり、すこしでも周圍を考慮に入れゝばそのまゝぢつとおとなしくしてゐざるを得なかつた。このあひのこオスカアについてはじつに色んなことが言へる。すでにあひのこ――かれは日本人と伊太利人との混血兒だつた――といふ言葉が通稱になつてゐるのでも想像出來るとほり、白と金いろと青とから成り立つてゐたので、ドレスデンの陶器みたいだつたとも發言し得るし、全身の毛孔で紐育の醜聞(スキャンダル)を呼吸してゐたため、ハドソン河をちよつとでも西へ越すと即死してしまふほどの紐育つ兒だつたといふこともほんとだし、羅馬の角鬪士(グラヂエイタア)のやうに伊達者だつたし、一日本人であると同時に紐育生れの市民だつたが、何よりもヂャズ・ボウ・タイ――おそろしく小さな蝶型ねくたい――を結んだ近代のハアキュレスであつたといふ一事だけは、特に記述しなければなるまい。ハアキュレスは希臘神話に出てくる男性美と力の化身で、ヘラの恨みから自分の子供を殺したりする。のちにミセネの王ユウリシアスの命令で十二の難題を課されて苦しむんだが、そのなかに、ネミアンの獅子を仕留める一條だの、アルカ、テアンの鹿とエリマンシアンの猪とを生獲りにすべきことの、ヘスペリデスの金の林檎を手に入れろといふのや、オウヂアンの馬小屋を掃除すべしなんてのまである。この馬小屋と大きな關係があるといふわけは、わが紐育のハアキュレスはいはゆる「廐の蠅(ステエブル・フライ)」で、古代のハアキュレスがクリイタンの馬を捕獲しやうと努力したかはりに、あひのこオスカアは近世SPORT史中の最難物たるサラトガやベルモントの馬を掴まへやうとして世にも必死になつてゐた。早く言へば競馬である。賭け馬である。あひのこオスカアにとつて、決勝戰で馬の鼻づらが一吋出るか引つ込むかは、全的にかれの生活を支配してゐたと

言つていい。

美丈夫(ヘアギュレス)あひのこオスカアを主人公とする競馬のはなしである。

あはあ！　あひのこオスカア！

銀の匙を口にして生れてきた人はないさうだが、オスカアはWJZのマイクロフオンをくわへて母體をあとにした。とにかく、生粹の紐育人のなかでもオスカアほどの辯舌家は多く類がなかつたくらゐ、その饒舌ることしやべること、一度口を開いたが last 英語がもう彼にはいはゆる英語などといふものでないのは勿論だが、たゞイースト河の流るゝがごとく滔々として盡きないのだ。氣取り屋でおしやべりなオスカア！思へばこれだけでも、あまりにも國際的に悲しいあひのこオスカアの姿であつたことよ！HUH！

たとへば――たとへば、ですよ。

いまこの物語がはじまらうとするに當つて、われ〱はわれわれのオスカアとオスカアの雄辯とを、ブルツクリンの橋の上に發見する。

AHA！　あのブルツクリンの橋だ。

東河に股がつて紐育と川向ふのブルツクリン市とを繫いでゐるのがこの中梁式とかいふ鋼鐵の橋。一八八三年の開通で、上部の長さが千五百九十五呎半、兩方の陸上架梯がおの〱九三○呎、正味の長さは七五八○呎あつて、重量が七千噸といふ怪龍だ。橋の上に廣い道が五つ通つてゐる。二つが自動車専用、一つは通行人の路、他の二つは電車道路だが、いや、歩いてもあるいてもブルツクリンの橋である。さぞくたびれるだらうといふので、そこは往き屆いてゐて、歩道のところどころに腰掛けがおいてある。よほどお金がないか、さもなければ氣まぐれな趣味の散歩者のむれが、悠然とそのベンチに腰を下ろして、ミルクのやうなマンハツタンの夕空に平べつたい宵月が引つかかつて、その光りと影の底に、ビルデングといふビルデングの窓が下から順に虛ろにぼやけてゆくを見つめてゐたりする。相手のあるものは戀も語る。が、ないものは仕方がないから居眠りでもする。と、橋の下の水面を昆蟲のやうに這ひまはる船の灯が長く流れて、汽笛が、昇天するたましひみたいに、搖れ上つてくる。O！　ブルツクリン橋！

――なんかと詠嘆してゐるひまにテンポを早めやう。

この橋上の哲人のあひだを往來して、賭け馬の仲介(ブツキイ)キンセル兄弟のために内報(チツプ)の紙片を賣りつけて歩くのが、わが親愛なるあひのこオスカアの仕事なのだ。だから、オスカアがどんなにお洒落紐育つ兒であらうと、いかに「自分の帽子をとほしても」も

のを言はうと、それはすなはちお人柄なわけである。七千五百八十呎の細長い空間を持場（テリトリイ）に請負して、彼は毎夜一定の人数をキンセル兄弟へ紹介しないうちは、橋全體に汗のやうに露がおりても never 引き下らないことにしてゐた。腰かけに二三の人かげを認めるが早いか、オスカアは、と言ふよりもオスカアの口は、十年の知己のごとく走り寄つて、いきなりその眞ん中へ割こんで、now―― here he goes! お饒舌箱（チヤタア・バックス）が廻り出す。

『や！ 今晩は。』

OH！ オスカア！

『一週間ほど前でしたがね、』オスカアはすぐにはじめる。これは暗誦しきつてゐる文句なのだ。『一週間ほど前でしたがね、私が朝うちを出た時の顏つてものは、そりやあ大變でしたよ。まるで怒つた猫が爪を磨いだやうで、え？ 顏ぢう傷だらけなんです。で、途中、地下鐵で友達にあひましたが、やつの言ひ草がい丶ぢやありませんか。おや！ 君、君あ何時の間に結婚したんだい？ ですとさ、これにあ私も癪にさわりましてね、つひほんとのことをいつちまつたんです。いや、じつは剃刀が切れなくてこの仕末さつて。すると、その友達が急に眞顏になつて、自分の使つてゐる剃刀の講釋をはじめて、その美點その長所を並べて私に即刻そいつを買ふやうにと言つてきかないんです。が、まあ、べつに反對する必要もありませんからたうとう友だちと一緒に店へ行つて其の剃刀を買はされましたが、いや、驚きましたよ。實際ぐあひがい丶んです。そりやあかういふ私も、買つた時はすつかり莫迦にして、ま、ものは試しだつてな氣もちで次ぎの朝そいつでかうじよりじよりやつてみたんですがね、その剃刀たるやですな、じつによく切れる。成程と私はその時思ひましたね。これあるかなだ、人の口に間違ひはない。その剃刀を使ひながら、私はじつに色んなことを考へましたよ。親切な忠告、人生これ以上に信頼すべきものはありますまい。これはこんなふうに、一度滿足の經驗を通して、われわれ消費者にいろいろな滿足を教へる場合が多いからです。私は剃刀屋ではありませんから、その店や商標は言ひませんが、かうして人の口から人の耳へと傳はつてゐるあひだに、そこに自然淘汰の手が働いて、何時の間にか市場の商品が選擇されます。適當な品物が適當な人に購買されて、それがすべて日常生活の道具としての商品を標準化（スタンダダイズ）する一つの原因ともなり、同時に、多量生産に由來する廉價の傾向を助長させて、亞米利加の物質生活を劃一單純にし、ひいては商業そのものをも刺激する動機になつてゐます。供給者の側からばかり功利的に觀て、人の口は何よりの廣告だなどと片づけてしまふわけには

往かないと思ひます。事實亞米利加の民衆は非常に購買力が强いし同種同系統の商品の競爭がはげしい。全く今日のあめりかほど商品と客の群とが密接な關係を作つてゐる市場もちよつとほかにはありますまい。だからこそ、恐しいほど人の口が信用されるわけですが、これはまた一方から言へば摸倣の心理――近代都會生活者に共通な好奇心です。それを未だに碌でもない物をつくり出して、聲を大にして押しつけるのが廣告だと思つてる人がありますが、これは實に古い。さういふ時代は最早や過ぎ去りました。それよりも實質をよくして、人の口によるこの購買の好奇心が自然に自發されるのを待つ――廣告もそのための廣告といふはうが新しいやり方ですよ。需要者は市場への好奇心で一ぱいで、凄いほど見てゐるものですからね。この好奇心をおたがひに善導して來たところが、亞米利加の經濟生活をしてこんにちあらしめてゐるゆゑんでせう。その證據には、われわれ亞米利加人ほど何へでも强い好奇心を持ち得る人種はないと言ひます。さうでせう。近代科學の便宜はほとんどみんなあめりかにおいて實用され、發達してゐます。ことに吾人紐育人は、一八〇〇年代の末の西部開拓者のやうに、絶えず地平線のむこうに未知の魅力を感じて、そこをさして急いでゐる。言ひかへれば好奇心の突角が鋭い。好奇心の感激とでも申しませうか。これが紐育人の特性です。いや、生命です！――ところで私はあなた方、といふよりもあなたがたの好奇心に訴へたい。い丶ですか、私はこ丶に絨毯を持つてゐます。え？こんなものは持つてやしないぢやないかつて？ところが持つてゐる。もつとも小さな小さな絨毯なんです。これを――この魔法絨毯を私は一枚十五仙であなた方にお賣りしたいと思ひます。が、では、一枚十五仙の魔法絨毯とは何か？あなた方の好奇心のために、宜しい、一つ說明しませう。」

2

「一枚十五仙の絨毯なんかあるもんかと仰言るんですか。ところがあるから妙です。しかもそれがお伽話に出てくるあの魔法絨毯で、私はそいつをこれ、このポケットに一ぱい持つてるんです。え？お買ひになりませんか？まづこの魔法絨毯はですね、それを兩手に持つと、あなたは千哩でも二千哩でも何處へでも行きたいと思ふところへ直ぐに旅行出來る。しかも安全この上なしといふんですから、何うです、驚いたでせよ？天候に關係はない。暴風雨よ、猛り狂へ。雪よ、地を覆ふがい丶。雨でも何でも降るならふれ、あなたはこの一枚の絨毯で世界の果てへでも飛んで行けます。南極から北極、居たいと思ふ個所に何時

までもゐて、歸らうと氣が向けば即座にかへれる。いたるところでいろんな面白い人物に會ふでせう。彼らは奴隷のやうにあなたに仕へるでせう。飛行機で雲を破る日もあれば、密林の濃いにほひに戀人の毛髮を聯想することもある。南洋の濱、大新聞の編輯局、美女の寢室、絨毯の威力のまへには、人々はあらゆる場處を開放してあなたを受け入れます。あなたは空氣のやうにどこでも自由に出入し得る。カウ・ボウイとゝもに「うるはしのヒルダ孃」を救はんものと恐怖の森をさして悍馬を走らせたり、フロリダのエヴアグレイドに神秘の深さを覗いたり――まだある！この絨毯を手にとると同時に、金いろに空をこがす廣小路の灯はあなたのものでせう！土人（インヂアン）が馳驅する平原も、ベイブ・ルウスとグエリッグが棍棒を揮ふ野球場も、劇場もポロ・グラウンドも自動車工場も摩天閣も、すべての美味も流行の服も紐育第一の倶樂部員の株も上院の椅子も、朝飯まへの入浴も入浴中の朝めしも、制服の執事（バトラア）も召使の大軍も、彼女とさうして彼女のたましひも、現代の亞米利加で一番人氣のある「三のS」――Stage と Screen とそれから Society ――も、この三つSを合はせた一つの大きなS――光榮ある Scandal も、殘らずあなたの所有に歸して、あなたのためにのみ存在することゝなるでせう」。まだあります！この一枚の魔法絨毯を適當に行使することによつて、あなたは社會百般の事物を支配し、動かし、じつに意思のまゝに更へることが出來る！道德はあなたを規準としてあらたに作られるでせうし、牧師は神を捨てゝあなたへ集まるでせうし、政治はあなたを中心に行はれるでせうし、商工業も藝術の相場も大學の研究室もあなたの足もとにひれ伏しますし、女といふ女はもとより、物質、思想、感情、國家、自然、人類、靈魂、家具、寶石、細君の機嫌、板燒き白魚ヴイアナ式、苺ショウト・ケイキ、一足十五弗の靴下にいたるまで、一せいにあなたをほめたゝへて、都會・陸海軍・商業會議所・法律・すていきの皿・舞踏場とゝもにすこしでもあなたの役に立つことをもつて唯一の名譽とするでせう！鐵道もキユナアド線（ライン）も太陽も犬も一人のあなたを悅ばせるために走り、畫家はあなたの肖像をゑがいて「主權者」と題し、詩人はあなたを謳ひ、作家はあなたを美化し、彫刻家はあなたの記念碑をきざみ、哲學者はあなたをあこがれ、音樂家はあなたの頌歌を奏し小女はあなたを思つて泣き、鳥はあなたの上に落ち、魚はあなたを見てしづかに沈み、電車はあなたと知つて停まり――これは運轉手がとめるんですが――馬も、O! YES、馬もあなたに感嘆して氣をつけて突進するに相違あません。馬をさへ」、そして市會議員をさへ恐縮させるあなたで

す！明日の麵麭がなんでせう？夫人の舌鉾、重役の業卷がそもそも何でせう？あなたは世界の帝王です！この一枚の魔法絨毯さへ手に入れゝば。いまゝであげた凡てのものが絨毯と一しよに飛んでくる。この世に何一つとしてあなたに不可能のことはなくなるのです。じつさい魔法絨毯はあなたを絶對の君臨者として權威づけます。なにによつて？何を手段として？十五仙の魔法絨毯――それは金です！富です、弗です！まつたくどるの力ほど近代において決定的なものはありますまい。金さへあれば何でも出來て、私の言つたことが片つ端から實現されます。で、この弗・金錢・富を私はあなた方へお分けしたいと思ふ。これこそお伽話の魔法絨毯、いや、今ではそれ以上何でもかなへて呉れる不思議な妖精なんです。値段は今夜だけ特に十五仙、たゞの十五仙！――といつたところで、皆さん、誤解なすつては困る。私は何も五弗や十弗百弗の合衆國紙幣を買つていたゞかうと思つてやしない。Then, 私のいはゆる金十五仙也の魔法絨毯とはそもそも何かと申しますれば――えゝと、やつぱりそのお金ですな。五弗、十弗、百弗！だが、いまも言ふとほり現金ではない。が、現金でないだけあつて、お買ひになつたあとで、五弗が五百弗に、五百弗が五百萬弗にならないとは限らない。YAP！かならず富を築いて、馬をさへ畏服させるのが私の賣る魔法絨毯！馬？さうです、馬と云へば馬、あの horse ですが、一體どの馬？となると、これが實にむづかしい。どの馬に五弗賭けて五百にするか、何の馬に五百載せて五萬弗當てるか、こいつが競馬道でいふ默示（ハンチ）といふやつで、このハンチがシンチとなると大したものです。シンチは cinch ご存じのとほり本來の意味は「馬の腹帶」なんですが、こいつが俗に大丈夫（シンチ）、確實（シンチ）といふ言葉に使はれてゐる。で、馬賭けとくると、まづ何よりも適確（シンチ）なお告げ（ハンチ）が大事なわけなんだが、馬と言つたつて莫迦にあなりませんよ。馬の動物感識（アニマル・センス）にはじつに信ずるに足る誠意がみとめられます。いま現にこの多くの馬があなた方のためにサラトガやピムリコやベルモントやウインザアで泪ぐましい競爭をつゞけてゐますがね、じつさい馬はよく人語を解して命令どほりに行動しますな。人は小さなことで性格が判るものですが、馬だつてさうです。どんな馬でも宜しい。馬をそこらへ離しておいて、あなたがこつちから「おい、來い。來ないか。くるかこないか。くるなら來い。來ないならくるな。」と言つて御覧なさい。十中の十、必ず來たりこなかつたりしますからね。全く馬は悧口者（ボオイ）ですよ。それに、この文句を英語や佛蘭西語では勿論、希臘語でも支那語でも、ホッテントット人がホッテントット語で言つても、馬にはそのまゝ

すつかり解るとみえて、やつぱり「來るか、こないか」といふ言葉どほりに「きたり來なかつたり」しますからな。いや、黒人の小使以上に恭順で敏活ですよ。さて、この馬ですが、その「腹帶」を掴まへて正しい馬に賭けることが競馬のこつとは言へ、單なる漠然とした見込だけではとても駄目です。ぜひともしつかりした狙ひがなくてはならない。が、しかし、與へられた條件をすべて考慮に入れて、『間違ひのない勝馬』sure-winner を豫想するといふことは、素人にはとうてい無理です。では、何うすればいゝかといふと、こゝへ人の口のありがたさが出て來る。つまり、信頼すべき苦勞人の助言ですな。これが何よりの腹帶であり、「熱い代物」なんです。それも私のは馬から直接聞いてきたほんとの内報なんですから、百發百中、的を外れるといふことはありません。早い話しが、私はこゝに明日の勝ち馬の名を書いた紙きれを澤山持つて來てゐます。こいつのどれへでも鼻つぱしへ幾らかぶつけてやれば、明日中に大金が轉げこむこと請合ひ、一枚の紙に馬の名が三つ載つてゐますから、朝早く、太陽の光線と一しよにエ街一三番のキンセル兄弟、あのエヂスン電氣會社の前の玉突場の地下室、あそこへ駈けつけて、これと思ふやつへ二弗以上いくらでも賭けてごらんなさい――これです！この封筒に入つてゐる競馬の内報！私じしんが馬小屋へ忍んで明日の馬の囁きを聞いてきたんだから世界第一の正直正銘折紙つきの腹帶だ！さあ、一攫千金つかみどりの秘訣が只の十五仙、たつた十五仙！人の口はお信じなさい。好奇心は尖らせなさい！馬の内證ばなしに耳を傾けなさい！十五仙の資本で富の王座の入札！私の言つた魔法絨毯といふのはこの封筒にはいつてゐる賭馬豫報のことですよ！え？たしかに魔法絨毯、うそは言ひません――弗さへ握ればマンハツタンもこのブルツクリン橋も、廣小路にあふれる女の行列も裁判所も一番いゝ煙草も新聞の論說も何からなにまでそつくりあなたのものぢやありませんか。畫家はあなたをえがいて「勝者」と題をつけ、詩人はあなたを讃めたゝへ、自動車はあなたを崇めて喇叭を鳴らし、文學者は――十五仙！この魔法絨毯の競馬チップが十五仙！馬のさゝやき、確かな腹帶、魔法絨毯！さあさ、人の口、十五仙！十五仙！全世界が十五仙です。安いもんだ。惡魔みてえにやすいや、ちつ、要らねえのかなあ、魔法絨毯！』

一段落つくと、あひのこオスカアは自分の興味のために矢庭に唄をうたい出す。

Gimme a handy guy like Peewee,
Booting then winners in!

あはあ！、オスカアー

遠く河面を撫でてゆく歌聲も、折から橋を轟かせて過ぎる貨物自動車に直ぐにかき消されるであらう。すると、川口を入つてくる汽船を迎へて稅關のランチが半暗を裂くであらう。その灯のついた船室が四角く小さく、そして明るく視野をよぎつて、事務員らしい男女が笑つてゐるのが見えるであらう。

オスカアは石炭のやうに默りこんで、手に持つた封筒の束でけろりと膝頭を叩いてゐる。

AH! Incredible, invincible, impetuous —— & impossible Oscar! 暗轉。

なぜ男の子は家を出て放浪するか。そして何故老ひたる母が、毎夜窓ぎはに灯りをともして息子のかへりを待たなければならないか。あめりかではこれに對する答へは一つだ。紐育。さびしいたましひの港紐育の誘惑。

聖ペトロでさへ帽子——もし被つてゐれば——をとつて挨拶しなければならないであらう驕慢な女が全市を占領して、男と蟲類は女の慈悲においてのみわずかに生存を許可されてゐる今の紐育は、日に月にあの銀幕の聖地ハリウツドに近づきつゝある。金剛石——硝子製品をも含む——はみな巨大に光つて——なかにはあんまり光らないくせ——一時間一弗の保險金がかかつてゐるのがこの紐育物質美の追究に急で、そこにはもう人間のよろこびも悲しみも發見出來ない紐育の町。平凡な天才が路傍にごろごろころがつてゐて誰も——天才じしんも——氣がつかない紐育の屈折。食事して舞踏して博奕を打つ夜の倶樂部の紐育。エリナア・グリン女史はモナ・リザのやうな眼をしてゐるし——だから書く本が賣れるのだ——そしてサトン・プレイスと河畔並樹街と「低い四十丁目(ロワア・フオウテイス)」とには、社交界の新加入と耳輪の鳴る合唱踊子と、鼻のかけた拳鬪家と舊大陸の親王殿下————どうしてかう歐羅巴には親王さまが多いんだらう?そして何うしてみんな紐育へお嫁さがしにおいでになるんだらう?あゝ!どうして最後に、粋な小さな鬚を生やして、なぜあんなにそのお寫眞が女工たちを騷がせるんだらう?——と、それから、ズウマニア國の位階勳等を持つ女優とその母なる公爵未亡人と、Firpo と Peggy O'My Heart と Miss Lulu Bett と、競馬とボウカアとバカラを愛好する男女の群集とが、色彩と體臭と發音と混沌との一大構成をなして押しあひへしあひしてゐる。

このバカラてのはよほど珍妙な加留多賭博とみえて、三人乃至十一人を一卓子として非常に複雑な規則があるらしいといふほか、くわしいことを說明する自由を持たない。佛蘭西にはじまつて、かなりながいあひだ國外に知れずにゐた。名稱の起原は完全に不明だが、ふらんすに同じ名の、過般の大戰で破壞され

た有名な硝子產地の町がある。この遊びは多くの私的倶樂部でさへ禁止されてゐるばかりでなく、英吉利では法律で taboo になつてゐて、一九一二年から一三年にかけて倫敦市內でこのバカラ・ゲイムを主とする倶樂部がさかんに警官に踏み込まれたほどだ。もつていかに猛惡な――何らかの方面に――博奕の一種であるかが推察できるであらう。

が、そんなことは何うでもいゝとして――。

さて、そこで、このキンセル兄弟賭け馬仲介（ブッキイ）事業所の扉を叩いてみるとしやう。

紐育ちうのさまよへる息子たちが、お母さんのお祈りを無視して、容易に自家へ歸らない最大の理由が、この場所（ジョイント）を覗見することによつて幾ぶん判明するかも知れないし、事實これがペン・ホテルの窓ほど多い紐育の陷穽の一つなんだから。そして、都會の放浪兒――その代表者あひのこオスカア氏――の一團に關する何よりの考察となるであらうから。また、オスカアのいはゆる「馬のさゝやき。魔法絨毯」たる競馬賭博の組織を闡明する手ぢかな方法としては一ばん具體的でもあるのだから。あはあ！

こゝです。這入りませう。

BY・GOLLY！

ぱい・がり！

3

U―U―U―H！きな臭い煙草の濃霧。

喧嘩を賣られない要心に、人の顏を見ないやうに氣をつけながら玉突場をおりきると、もうそこの四壁にかこまれた小さな空間は、紐育色の强い「さまよふ兒ら」と近代的な馬と魔法絨毯との不可思議な集會所（レンデヴウ）だ。キンセル兄弟の馬賭け市場である。

このへんは灰色の石の並立と煤煙のほか何にもないL街の角、エジスン電氣會社分工場の前で、步道に南京豆の皮と立ん坊の裾が風にそよいでゐるやうなお粗末な商店街なんだが、玉突場のまへにだけはときどき今年の流行型の大きな自動車がとまつたりする。地下室キンセル兄弟へのお客なのだ。いつ行つてもあんまり人相（ルックス）のよくない移民系のきさなのが大がい十四五人はがやがやしてゐて、狹い部屋の隅にどこかの事務室の拂ひ下げらしい机がおかれて、上に電話がほうり出してある。机のむかうの壁は一枚の黑板だ。あちこちに壞れかかつた椅子がちらばつてゐて、隅にしやがんでそつと賽ころを振つてる組もあれば、顏色を更へて勝負の電話が掛つてくるのをぢつとゐやうといふものあはれなお爺さんもゐたりする。小意氣で下品な服裝

と歯切れのいゝ亂暴なことばと、それらを一つに溶かして電話の鈴、キヤムルとラツキイ・ストライクとソアテイマ、たまにはメラクリノヾエル・プロヾクトのけむり、これらが裏町的に無頼な空氣を醸し出して、おゝ、氣のせいか、ぷうんと馬小屋のにほいが漂つてゐる。一回二回と各地の競馬の結果が、大取次をとほしてしつ、、、きりなしに電話でしらせてくる。そのたびにみんな一せいに骰振りやカアドや雑談を中止して耳を押つ立てるんだが、人はしぢう變つて、ぶらりぶらりと出たり入つたりしてゐる。机の上で賭金の授受が行はれるのだ。

地下室だから暗い。晝間からぼんやり電燈がついてゐる。その下に禿頭を光らせてキンセル兄は電話係りだ。

『ヘロウ！　イエ、ス。メイン——一・九・二七、さうだ。さうだよ。え？　何處？　ピムリコ。四番競馬。時間、一時二十分開始。うん、一着は？・綠金。二着は？　甘い戀人。おうらい。三ちやあく、え？　なに？　もつと大きな聲で言へよ。ちくしよう、應接間の鱶め、やい！　三着は何だてんだ。え？　アニタ？　アンナ？　うん、アンナSか。よし。あとは also ran。棄權？「桃色の寢卷」と海神。ALL・SET！』

キンセル弟が電話の聲を聞きながら素早く黒板へ書きつける。と、あとからすぐまた電話だ。

『ヘロウ！　キンセル！　ルイヴイル・けんたきい？　来週。五回目。時間、一時十二分開始。一着「接吻して頂戴」。二着、日曜日。三着、キヤプテン・グレゴリ——以下負馬。棄權は？　無し、おうる・せつと！』

『ヘロウ。ウインザア加奈陀。二番レイス。一時十七分。一着、え？　え？　何だつて？　忘れな草？・おいおい、ほんとかい。忘れな草が一着！　こいつあ番狂はせだ！　テキサス・ガアルは何うしたんだ？　落伍馬だつて？　Damn！—やられた、やられた——こんな莫迦なことがあるからなあ。賭金はうんとあるだらう？　重いだらう？　惡魔、えれえめにあはせやがらあ。へん、沈沒よ、こつちも。世話あねえや——二着は？』

といつたぐあひ。その都度、もつとも露骨な悲喜がこの濕つぽい室内に爆發し旋回し低迷するのだ。BY・GOLLY！——このばい・がりといふのは至極便利な叫び聲で、競馬に勝つた時、負けたとき、汽車に乗り遅れた時、細君と口論するとき等、すべて瞬間の感情を、その感情の性質いかんにかゝはらず最も瞬間的に表明する必要ある場合に使用される無意味にして有意義な音響——じつさい單なる音響に近い。あめりか人は短い大聲を發することを好むから、かういふ感嘆詞を枚擧にいとまないほど持つてゐる。そのうへ、こいつが、錫鍋横町で俗曲の樂

譜が製作されるよりももつと早い速度で流行し、短日月にめまぐるしく變化するんだからやり切れない。それこそ、ほんとにBY・GOLLYだ。

Well、ばい・がり!

こゝでちよつと落ちついて、遠距離競馬賭博なるもの丶概略について考へてみる。どうもこれがはつきりしないと、何をこんなに眼の色をかへて騷いでるんだか、いさゝか判然しない恨みがあるから。

が、しかし、その制度や運轉の講義を徹底させるためには、あひのこオヌカアのやうな斯道の大家をわづらはさなければならないし、それよりもめりけん國でさへ州によつては御法度になつてゐるくらゐだから、こいつはなるべくぼやかしておくはうがいゝかも知れない。なんかと言つたところで、べつに故意にぼやかさなくても、かうなると玄人でないのが却つて強味で、こつちだけ心得顏してゐれあ大いしたことはあるまい。

さて、賭け馬をするといつたつて紐育の眞ん中で馬に走られちやあかなはない。馬は遠隔の地の競馬場で、それぞれに盛大な設備とおびたゞしい觀衆と聲援の喚號の中で動物的名譽と虛榮を爭ふのである。すると各都市にBOOKIEといふ商賣があつて、これが、各競馬場へ出張してゐる大取次(エイヂエンシイ)から電報また長距離電話によつて報道を買ふ。つまり誰でもかういふ店——たとへばこのキンセル兄弟のごとき——に顏を出しさへすれば、ゐながらにして馬の走りぐあひ、勝敗だけは逐一手に取るやうにわかつて、競馬そのものは見なくても、金を賭けるのに必要な部分は遺憾なく供給される。では、どうして賭けるかといふと、それには競馬會社が協力して毎日發行する競馬表(フオウム・シイツ)といふ馬の官報みたいな印刷物があつて、これが賭け馬の大憲章となるわけだ。どこの競馬場でもしよつちう走つてゐるといふんぢやないが、各地の季節が違ふから事實は年中何處かしらに競馬が開かれてることになつて、だから仲介業も賭けるはうもともに職業として立つていく。あめりかで有名なのはケンタキイダアビイ、これに出場することは馬にとつても騎手にとつても生涯の——馬及び人の——誇りとされてゐて、開催中は町ぢうのホテルは勿論、民家にも寢るところがなくて自動車の中や階段の下に夜を明かす人があるくらゐ、全國はおろか遠く英吉利あたりからさへ双眼鏡を肩に鉛筆と馬表を握つたすぽうつ連中があつまつてくると言はれてゐる。メリイランド、ニユウ・オリンス、サラトガ、クリイヴランドその他いたるところにある。國外のもあめりかの賭けを免れることはない。メキシコ、加奈陀、南亞米利加、ハヴアナなどがそれである。これらはうばうのそ

の日その日の競馬の結果が、一同おはるごとに大至急にキンセル兄弟なんかのところへ報告されてきて、それで金錢がいろいろの比率をもつてあちこち動く次第なんだがキンセルのやうな仲介者の仕事を見るまへに、くだんの馬表なるものを仔細に研究してかゝらなければならない。

Form Sheet は新聞一面を二つ折りにしたぐらゐの紙が數枚から十數枚重なつてゐて、その兩面にべつたり細字の表が印刷されてる日刊物だ。ちよつと見方がむづかしいが、要するに翌日走る馬の番組で、それに附屬して一つ一つの馬に關する詳細な智識、その出場する競馬の條件狀況、騎士の成績などがおそろしく綿密に記載してあるから、賭けやうと思ふ人は、ぜひともこの明日の馬表を引つ繰り返して、あらゆる角度、すべての可能性を思ひあはせ、これだ、これがきつと勝つと信ずる自分の馬を豫斷しなければならない。かういふと比較的容易なやうだが、何うしてどうして駈け出しの賭け人にさう「熱い代物(ヘツト・スタフ)」がつかめるわけはない。馬を見ないからだらうなんてことをいふけれど、素人が馬を見たつて何うなるもんか。かへつて見ないはうがいゝくらゐのもので、色んな點から突きつめて行つて明日は必ずこれが勝つ。もし負ければ燒いた魚が泳ぎ出すにちげえねえ――なんかといふんで、大自信をもつてそいつに大枚の鳥目を奸せたりすると、よく取られて、おまけに燒いた魚もちよつくら泳ぎ出しては見せないやうなことになる。だから、かなり長くこの「馬を見ない馬賭け」に浮身をやつしてゐる人でも、名前が氣に食つたからとか、出鱈目にさしたらそこが當つたからとか、上から數へても下から數へても七番目――七は幸運の七(ラツキイ・セヴン)だ――だから、なんてことを唯一の頼りにして賭け馬をえらんだりしてゐる。が、これらは何といつても個人的な趣味で、正道は矢張りよく馬表を白眼んで、科學的思索に準據して勝馬を豫想するところにある。現物の馬を見ずに、一片の刊行物によつていかにして見込みを立てることが出來るか。これがめいめいひそかに遣口(システム)をつくり、ひとり想を練ることを要する遠隔賭馬の妙點なのだ。

馬の名には珍なのがすくなくない。いま、競馬表(フオウム・シイツ)にならつて、出來るだけ原表に近い假作をこゝろみ、一つ首をひねつてみやうか。つくづく選馬の難を嘆じてあひのこオスカアの封筒入り魔法絨毯へ好奇心がうごくやうなら占めたものだが――。

かうだ。ばい・がゐ!

ピムリコ競馬。六回目。距離五時七分。二歳馬。定金(パアス)一萬八千弗。相互。

競馬場の狀態(コンデシヨンス)――一週間雨なし。晴天。微風。やゝ暑し。

士は乾燥。砂塵の氣味。出場馬――内棚に近き側より
1、あたしを愛して。2、ジヤツプ・ウマ。3 Get-It。
4、蜜月。5、バリバリ博士。6、この機會。7、V・O・U・&・I。8、ナポレオン七世。9、火花栓。

1　あたしを愛して――濠洲產。父、フエルヂナンド卿號。母、王冠號。濕地にて勝ちたる經驗多し。最近過去の戰績――これがばかに詳しいがうるさいから略します――平素より黃色と蓄音機を好む。目下すこしく鼻を害しをり――過日蚋を吸ひこみたるため――裁量、騎士と騎士の腦髓と鞍とを通算して百一封度弱。ちなみに騎士は今日特に黃いろの絹をまとひ、なほ出場眞際に蓄音機にて「自由の雄叫び」「宵の明星」「O！樂園よ」等をしんみり聞かす豫定。

2　ジヤツプ・ウマ――ほかいどう・にほん產。父、オヤカヤ號。母、蝶々號。勝ちたることもあり。裁量、九十九封度强。性行嗜好等一切判斷に苦しむことのみ多し。たゞし常食は米飯。

3　GET・IT――。

もうよさう。きりがない。が、まづこんなふうな材料で、これにうんと數字がはいつてゐる。しかし、これだやあとても手に負へない。やりきれない。

そこで、おう！オスカア！

4

競馬の賭けの組織に二つある。一つを聯合、他を相互といふ。ともに賭ける對手による區別で、聯合のはうは會社が一方に立つて全公衆を敵方の張手とする場合の謂であり、相互といふのは、便宜上會社をとほして各個人がほかの個人と勝負をあらそふやり方だ。どつちも仲介を當の相手とするところはおなじだが、金の流れ方、ならびに動く金の性質に大きな違ひがある。したがつて聯合のはうは馬券額が固定しやすいが、相互となると一に人氣の問題で、萬人がひとしく勝つとにらんでゐた馬が勝つたところで分け前が多いから大した步合にはならないものゝ、一朝とんでもない番狂はせでもあらうものなら二弗が二百弗、二十弗が二千弗、何んなことにならないとも限らないから、本來の冒險味はこの方面にあるといはれなければならない。だから賭ける身の心もちから觀ても二つの途があるわけで、小さいながらも確實な利を得やうとする萬全の馬を追ふのと、遠擊ちで大きなところをばかり狙ふ山師的な手口とである。どつちが利益が多いか、そんなことは知らない。おそらくどつちもあんまり香ばしくないと見えて、「馬小屋の蠅」あひの

こオスカアでさへ、口に魔法絨毯の能力をならべ立てるばかりで、自分はちつともその利きめをかうむらずに依然としてブルツクリン橋の上で舌を叩いてゐるんだから、これが何よりの證據らしい。どうも馬つてやつは根が畜生だけにさう當てにはならないものなんだらう。

とにかく、ほんとの馬表はなかなかやゝこしくて讀み方が解るやうになるまでにも相當の日數がかゝるが、その競馬表とさんざ首つ引きしてあげく、いよいよ大丈夫(シンチ)といふ無言のお告げを受けたとしたら、前の日、もしくはその日の朝、まだ勝負の報せが來ないうちにキンセル兄弟へでも飛びこんで行つて、好きなだけ金を出して馬へ張るがいゝ。一番なら勝馬(ウイナア)、二着はプレイス、三着をショウといふ。同じ回の競馬のなかで二つか三つの馬を選び出して一二三着をいろいろに編成して賭けることも出來る。これを「パアレイ」と稱して、みんな適中したら大したものだ。負け馬のことを also-run と呼ぶが、こいつにのせた金はもちろん返りつこない。が、同じ勝つたにしても、ことに相互だと計算がなかなか厄介で、時としては一着を當てるよりも二着へ賭けたやつのはうがうんとさらへ込んだりすることもあるわけだ。賭け金と引換へに、キンセル兄弟は馬の名と金高、一二三着の豫想その他を殴り書きして署名した覺えの紙片を渡す。しばらく待つてゝもし勝つたら、これを呈示して額面の何倍かの拂戻しを請求するんだが、たいがいとられちまふから心配はない。なかには、いま電話が來て結果がわかるといふ數秒まへにおたがひの賭け紙を高く買つたり安く賣つたりして際どい剩錢をよろこんでゐるのもあつたりして、要するに何がなんだかよく判らないがそのわからないところが無精にうれしいらしく、キンセル兄弟の仲介(ブツカイ)はつねにこのとほり繁昌してゐる。何はともあれ、オスカアの魔法絨毯以上のしんちはといふと、うつかり手を出さないのが御同樣まさに第一着であらう。あめりかの馬は、乾草のかわりにあひのこオスカアの辯舌による被害者の紙幣をむしやむしや食べて生きてゐるのだ。ばい・がり!

・キンセル兄が電話係り、キンセル弟が現金を出し入れして戰場のやうなさわぎだ。おとくゐをはじめ新參の客もいりかはり立ち代りやつてくる。あたらしい人のなかには昨夜ブルツクリンの橋の上であひのこオスカアが魔法絨毯を賣りつけた顏も多分に混つてゐるから、オスカアは上機嫌、ちやあんと晝間は店に出てきて、縱横に走りまはつて世話をやいてゐる。オスカアの魔法絨毯といふのは、客引きの一方法に過ぎなく、何にも知らない人を馬賭けの興味のなかへ引きずりこむために、毎日キン

セル兄弟とオスカアが額を鳩めて馬表と相談して、なにしろ素人は最初が大事だからといふのでせいぜい勝ちさうなのを選んであるんだから、そこはさすがに專門家で、何んといつても適中率のすくないはうではない。が、馬は馬、絨毯は絨毯、當つたり外れたりする。だからオスカアも昨日大金を所有し、けふ素寒貧であるに何の不思議もないわけだつた。

電話が鳴る。黑板が白くなる。重い煙草のけむりを搔き亂して色んな聲がする。

『ばい。がり！勝つたぞ、勝つたぞ！四十弗が三百六十！どんなもんでえ。』

『また取られた。遠狙ひ(ロング・シャット)は駄目だね。この二三日負けつづけだ。ばい・がり！』

『何でした、馬は？』

『マダム・モンゴリア。』

『あつ！あいつにあ私もひどいめにあつた。それに今日は二封度重く走つてる。』

『おい、スパルタはどうだらうな。』

『サラトガの七番レイスだね。さうさな、ひよつとすると見込みがあるぜ。競馬場(トラック)が濕つてる。前にも輕く濡れた土で番くるはせをやつたことがあるんだ。』

『ＯＨ！ ＧＡＷＤ！ ばい・がり！』

『ベルモントの六回はもう遲いかい。』

『六回は困りますね。いま結果が來てるんです。墨西哥は何うです？墨西哥の六回ならまだ間に合ひますよ。』

『キンセル、ハヴアナの五回は來たか。』

『來ました。そこに出てます。えゝ？その、一着が「石鹼の泡」つてやつ――。』

『ビムリコの五回の一着、青銅女王！騎手はビイウヰイ・キッド。』

『ビイウヰイ・キッド？ばい・がり！』

『ビイウヰイ・キッド、やつ、よく勝つなあ、この頃。』

もう一度、暗轉。

西印度の夏(インデアン・サンマア)といふ。

十月から十一月、冬のはじめにからりと晴れ上つた空の高い日が、思ひ出したやうにつゞくのだ。空氣は透明だ。風は底に冷氣をもつ。四十二丁目と廣小路の角に森の香がする。人はみんな痩せて聰明に見える。日光は青い。女の顏は果物のやうに食欲的だ。自動車は輕い。巡査の口笛は細い。都會に水のやうな白いおちつきがみなぎる。そして馬は走り、あひのとオスカアはますます多辯になる。ＡＨ！あめりかの小春日――詩と食

物と馬との Indian summer！

　ミルクのやうな夕空に平べつたい宵月が引つかゝり、その光りの影の底に、橋の下を長蟲のやうに這ひまわる街の灯が長く水面に倒れて、汽笛が、昇天するたましひみたいに揺れ上つてくる。ブルックリン橋。

　オスカアの「人の口」が今夜もはじまつたところだ。『一週間ほど前でしたがね、私が朝うちを出た時の顔つてものは、それやあ大變でしたよ。』から開始して、『供給者の側からばかり功利的に觀て、人の口は何よりの廣告だなどと片づけてしまふわけには往かないと思ひます。』を過ぎて、いまや「言ひかへれば好奇心の突角が鋭い。好奇心の感激とでも申しませうか。これが紐育人の特性です。いや、生命です！」まで來て、その「生命です！」にすこし力を入れて、ちよつと切つた時だつた。西方(ウエスタン)ユニオンの電報配達夫みたいに小柄な男が、そつと腰かけのうしろからオスカアの肩をつゝいた。『ちよつと、あなた、濟みませんが、ちよつと――。』

　オスカアが立つて行くと、その子供のやうな男は、嬉々としてオスカアをベンチから離れた欄干のそばへ連れて行つた。十四五の子供かと思つたらさうではない。たゞ小さなだけで、顔は三十前後のおとなだつた。

『何ですか・なにか御用ですか。』

『いゝえ、べつに用ではありませんが、あなたはよく今晩馬のために宣傳して下さると思ひましてね、いさゝか敬意を表したいと――僕、ビイウヰイ・キッドです。どうぞ宜しく。』

　ばい・がり！馬のZEVが有名だつたやうに、あるひはこれ以上に連戰連勝のほまれを荷つて亞米利加の競馬界に謳はれてゐたのが、この不世出の名騎手ビイウヰイ・キッドであつた。その鄭重な禮まで述べたんだから、あひのこオスカアの得意や思ふべしである。かれは、『ばい・がり！』と程よく謙遜しておいて、

『――あひのこオスカアと申します。』

と手ぎわよく自己紹介をした。そして、自分の胸にも達しないビイウヰイ・キッドを見下ろしながら、なるほど、これだけ小さけれあ輕いわけで、馬も樂だらうと思つたりした。ビイウヰイ・キッドは爪立ちするやうに、あひのこオスカアは前へ屈んで、二人はながいこと話しつゞけた。

　Gimme a handy guy like Peewee,
　　Booting them winners in!

この流行兒ビイウヰイ・キッドと面と向つてゐるのだ。

OH！　オスカア！

『いつ紐育へお歸りになりましたか。』

『昨晩歸りました。メリイランドが明後日からはじまりますので、明日立ちます。』

『あなたの評判はじつに素晴らしいですな。』

『いや、なに――BY・GOLLY!』

『あなたの馬はしぢう變るやうですね。フイスク夫人の所有なら何でもお乘りになるといふわけですか。』

『えゝ。まあさうです。私は御存じのとうりフイスク馬舍に屬してますから。それに、一たい私は馬は何でもいゝはうなんです。』

『ばい・がり！それはどういふ意味です？』

『つまり、いよいよ勝つまであまり馬を信用しないことにしてゐます。馬は要するに馬ですよ、オスカアさん。』

『はゝあ。さういふものですかね。』

『さうですとも。ですから、馬に賭ける場合だつて同じことです。馬を見ずに人を見る、乘り手を見る――こゝですた賭馬のこつは。』

『――。』

『そりやあ一がいには言へませんがね、私の考へでは、馬を選んで金を賭けるなんて感心出來ませんな。もちろん走るのは馬ですが、同時に、走らせるのは騎手だといふことも忘れてはならない。』

『すると、騎手に賭けるといふわけですか。』

『いや、たゞ騎手を見て賭けたほうが安全な競馬もあり得るといふまでゝす。』

『もうすこしその點を御說明願へないでせうか。』

『ばい・がり！たとへばですね、いゝですか、たとへばですよ――例へば、私が賭け馬をするとする。私は馬を見ませんね。馬をみづに何うするかといふと、私じしんへ賭ける。と言つたところで、この頃はまあおかげで何うやら勝ちつづけてゐますが、私だつて人間ですから――馬が馬であるやうに――負けることも多い。いや、負けるはうが多いくらゐです。それぢやあ私じしんへ賭けても矢つ張り取られるぢやないかと言ふかも知れないが、私には私の勝つ競馬がはつきり判るんです。これこれの條件さへ備つてゐれば、どんな馬に乘つて出やうと必ず勝つといふ自信を持つ時があります。私の今まで大きな番狂はせはみんなそれですよ。』

『そ、その條件てのは何です、何です？』

『まづ走る距離ですな。あまり長いのも困るが、短かすぎてもいけない。が、何よりも必要なのは、前の晩から當日の明方へ

かけて土砂降りに降ることです。』
『雨が、ですか。』
『雨です。うんと雨がふつて、競馬場(トラック)が泥沼のやうにぬかるんでゐると、これが私にとつて一ばん有難い。私は騎手としてはじめて馬に乗つたんぢやありません。子供の頃から西部のカウ・ボウイ――。』
『カウ・ボウイ?』
『いえゝす。ながらくカウ・ボウイをしてゐて、雨の中でも何でも馬を扱ひ馴れてゐるんです。だから土が重くて、ほかの騎手が困るやうな時にも、私にはそれが何らハンデキャップにならない。かへつて泥濘が深ければ深いほど面目を發揮できるわけです。陽が照つて乾かないうちの一回二回の早いレイスがいゝですね。もし午後に走るやうなことになつても、走位(ポジション)が眞中ならまだ比較的泥がぼく〳〵ですから「腹帶(シンチ)」ですよ。かなりやくざな馬でも乘りこなして一着へ持つて行けます。ねえオスカアさん、惡いことは言ひません。それから、もし馬表でビイウヰイ・キッドが大雨のつぎの朝乘るところを見つけたら、そして距離さへ滿足でしたら、默つて馬の鼻のさきへあなたの全財産をおかけなさい。馬をみて考へちやいけませんよ。私はかならず一着をとつて、あなたに大儲けをさせてあげますから。お信じなさい。人の口はお信じなさい――これが私からあなたへの誠意ある魔法絨毯です。あはゝ、オスカアさん!』
かういつて、小さなビイウヰイ・キッドは小さく身體を運んで行つてしまつた。
ばい・がり!
さて――あひのこオスカアである。
『君、どう思ふ? 今夜あたり降らないかしら?』
かれが人の顏さへ見ると希望に燃える眼つきをしてから言ふやうになつたのは、この晩からのことだつたのは言ふまでもあるまい。そして、それから數日經つた豪雨の曉、オスカアはすこしでも識つてる人を、片つ端から寢込みを襲つて歩いて、
『すまないが五十弗でも廿弗でも貸してくれたまへ。』かくして集めた金へ、急遽自分の所有品全部――襟衣と古靴と古服だけ殘して――を猶太の爺へ渡したその代まで加へて、オスカアはすべてを雨後の朝の二番競馬に走るビイウヰイ・キッドの馬へ第一着に賭けたといふことも、改めていふまでもあるまい。
すべての物語は悲劇的平衡を必要とする。
ブルックリン橋上で會つた小男がビイウヰイ・キッドではなくて、じつは、オスカアから魔法絨毯を買つて馬賭けを覺えたばかりに仕事も家庭も滅茶々々にしてしまつた腹いせとして、

犠牲者のひとりが金ちんだらうだつたとはオスカアは知らなかつた。たゞ、オスカアの知つてゐることは、自分が無一文無一物のすつからかんになつた一事と、多くの債權者がかれの踵を嗅ぎまはつてゐる事實だけだつた。

だから彼は充分幸福であり得た。げんに今夜なんかもさうである――。

ミルクのやうな夕空に平べつたい宵月がぶらさがり、橋の下の水面を這ひまはる船の汽笛が、昇天するたましひみたいに揺れ上つてくる。O！ブルツクリン橋！

見すぼらしいヘアキユレス、あひのこオスカアのおしやべりだ。『――一枚十五仙の絨毯なんかあるもんかと仰言るんですか。ところがあるから妙です。しかもそれがお伽話に出てくるあの魔法絨毯で、私はそいつを、これ、このポケツトに一ぱい持つてゐる。まづ、この魔法絨毯ですね、こいつを兩手に擴げると――。』

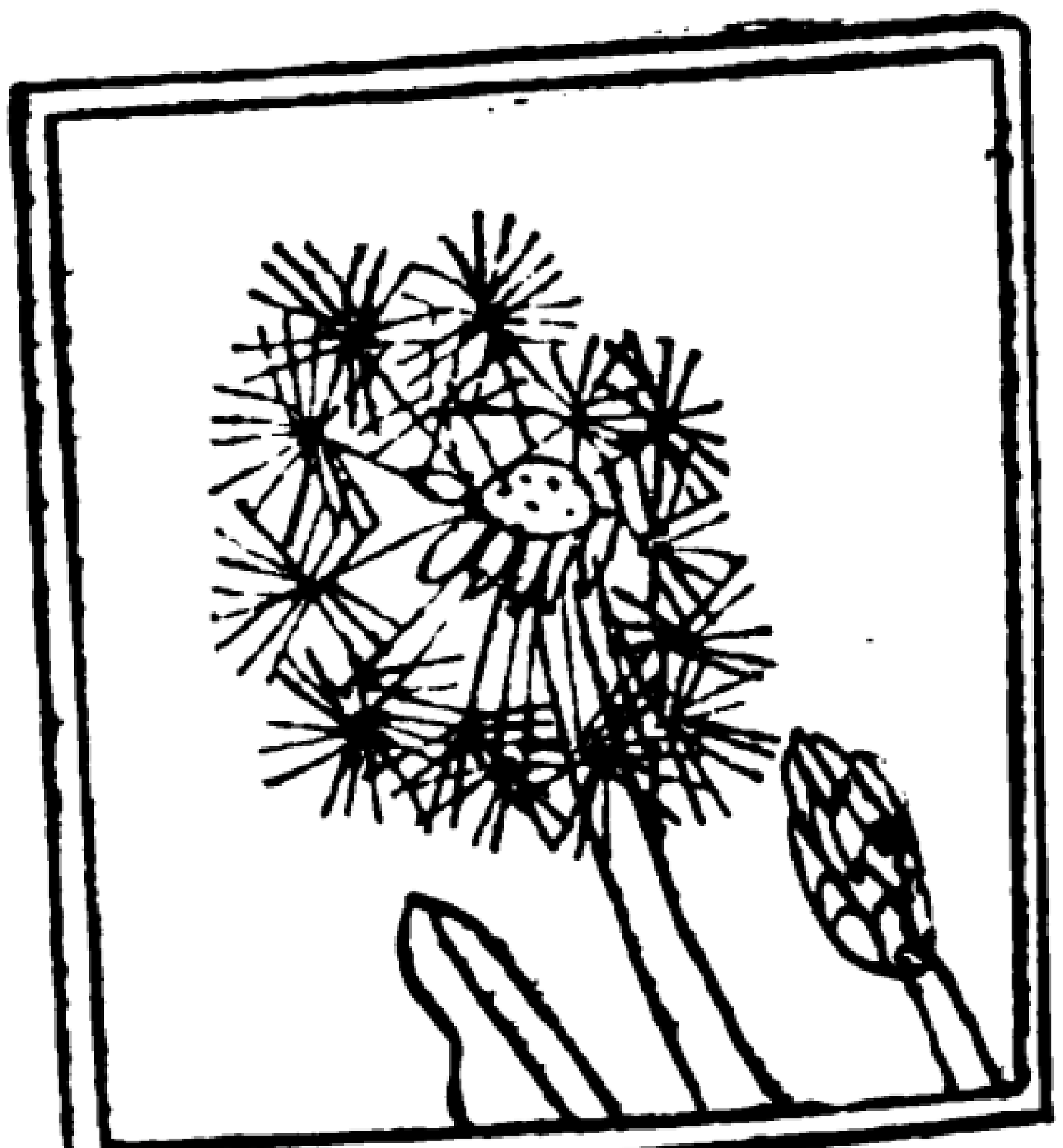
おう！オスカア！

どうせ森のかげから出てる道だよ
だから悲しみばつかり持つてくるのさ
だから、俺あ把手(グリップ)をしまつて
春はメリイランドへ歸るのさ

誰かゞ唄ひながら橋を渡つてゆく。

『この一枚の魔法絨毯を適當に行使することによつて、あなたはすべての富、金、弗――。』

――おはり――



當なし行脚（其四）

新しい男＝蛤と諸戸＝テント村＝木曾川

堺利彦

一　二本の足、新らしい男

伊豆の伊東から修善寺に通ずる峠道（たうげみち）の、或る山の鼻の曲り角からホンの少し手前の處に、乗合自働車が一臺止まつていた。何か機械に故障を生じて、運轉手がそれを修繕して居るところ。

バナード・ショウの脚本『人と超人』の第二幕の初に、『自働車が一臺破損している』場面を出して、『自働車の下から突き出てゐる、紺のセル地のヅボンをはいた、仰向の二本の足』といふ光景を見せて居るが、今丁度それと同じ光景だ。然し脚本では、その『仰向の二本の足に氣を取られて、脊をかがめて、兩手を膝に當てゝ、一心にそれに見入つて居る』のは、『革の外套を着て、先の尖つたキャップを冠つ』た『乗客の一人』だが、今ここでは、そんな氣のきいたのとは丸で違つた、見すぼらしい老人、——縮みの浴衣の裾を端折つて、右の肩から左の脇に大ぶん重さうな學生用のカバンを掛け、腰には新らしいタオルをだらしなくつるし、頭にはパナマの古帽を阿彌陀にかぶり、そして足には紺足袋、日和下駄といふいでたちの、如何にも見すぼらしくはあるが、然し又至極ノンキらしい、脊の低い小ぶとりの老人、——それが矢張り脊をかがめて、兩手を膝に當てて、仰向の二本の足を一心に見守つてゐた。

その老人が誰あらう斯く申す私であつた。私は今度の行脚に伊勢參宮といふ極めて平凡な『當』をつけたが、然し凡中の凡たる東海道の汽車には出來るだけ乘りたくないと考へた。そこで先づ新宿から最近開通の小田原電車に乘つた。何の變哲も無かつたが、初めての道だけに珍らしかつた。秦野邊で煙草の葉の奇麗に釣るして乾してあるのも珍らしかつた。驛の名所案內札の餘白に芭蕉の句たどの書いてあるのも珍らしかつた。イヤそんな細かい事まで話して居た日にや際限がない。小田原に着いてから、箱根の街道を越えようかといふ案もあつたが、それよりは熱海にといふ事になつた。

今度の行脚には私の老妻もついて來た。これが多少とも邪魔にたる事は請合だが、何か一つでも役に立つ場合があるかどうか。それは兎にかく、私達は熱海で『御一名二十錢』の『萬人風呂』にはいつて、それで一かど、熱海の溫泉なるものを經驗した氣持になり、扨こゝでも又山越案を棄てゝ、今度は汽船に乘つて伊東に行き、伊東では海にもチヨツトつかつたりして、これからいよいよ山越に掛つた。所がその途中、好い氣持で山の眺望を樂しんで居る處に、前記の故障が起つた。

運轉手が舌打を一つしたきり、默つて運轉臺から飛びおりて、その運轉臺の皮蒲團を引きずりおろし、それを手早く車臺の下にほうりこんで、それを脊中の敷物にして仰向にスル〳〵と其の車臺の下に這ひこんだので、六人の乘客は皆それ〴〵不安な顏をして、言葉ずくなにジツトしていた。私と今一人の客は車からおりた。その客は只だ悠然として、頻りに山の景色など眺めてゐた。私は前記の通り一心に仰向の二本の足を見守つていた。

そこにブウ〳〵といふ音が聞えて、程なく我々の直ぐ前の山の鼻に向ふから自働車が現はれた。危ない！と我々には思はれたほど、その車は我々の近くに來てヤツト止まつた。『オイどうした』と、その車の運轉手もおりて來た。我々の運轉手も脊中で這ひだして來た。『ヴアキユムにガソリンが來ないんだ。』『そいつアいけない。今日はあちこちに變な事のある日だ。あちらの森の下んとこでも、トラツクが崖にめりこんで騷いでらア。』それから二人は何かと修繕案を相談して居たが、然し彼等は全く乘客を無視してゐた。技術上の事に智識のない乘客など、全く眼中に無いのだつた。

暫くしてあちらの運轉手は、『俺アもう先に行かア。待つても居られない。』さういつて彼は、こちらの運轉手と二人がゝりで、こちらの車を道の片脇に引寄せた。『濟みません、どうも有りがたう。』こちらの運轉手は禮を云つた。『ガソリンを置いて

なア、二合瓶を一つ持つてるから。』あちらの運轉手は直ぐに自分の車に乘つて．ドドドオと山をおりて行つた。こちらの運轉手は再び車臺の下に、仰向にもぐりこんだ。

暫くはあたりがシーンとしてゐた。山中の靜かさは又別だ。私も今一人の客を眞似てそこらの景色を眺めた。右手の山には若杉がこんもりと茂つてゐる。左手の崖には高い檜が深林を成してゐる。我々の行く手の道の山の鼻は、大きな谷を隔てて向ふの高山と相對してゐる。フト氣がついて見れば、オーシツクが山々谷々の到る處に鳴きつゞけてゐる。而もそれがいよ〳〵靜かさを感じさせる。涼風が何處からともなくソヨ〳〵吹いて來る。おみなへしの少し黄ばみそめたのが一莖見つかる。

そこに又一つ自動車が向ふからやつて來た。『オヤ！どうしたんだい。』今度も車が止まるなり直ぐ運轉手がおりて來た。彼はこちらの運轉手の頭の方にまはつて、故障の見舞を云つた。こちらの運轉手は何か素人に分らない技術的な答をしていた。『それにね、タンクからヴアキユユムに來るチユーブに、ボロきれを突つこんで掃除をするもんだからね、仕樣がありやしない。』そんな言葉が聞えていた。あちらの運轉手は車臺の下をのぞきこんで、何か不用になつた道具を受取つてやつたり、そして又、外の道具を渡してやつたり、いろ〳〵まめまめしく手傳つていた。然し彼もいつまで暇取つては居られない。『もう大丈夫かい。何なら俺が行つてさう云つてやろが。』『イヤもう大丈夫、大丈夫。』『そうか、ぢや俺ア行くよ。』『どうも有りがたう。』『左樣なら。』『左樣なら。』同業のよしみ、同職の親しみが誠に美しく感じられた。

又暫くして我々の運轉手はヤツト車臺の下から仰向に這ひだして來た。彼の顔は晴々としてゐた。『どうも濟みませんでした。』彼は初めて乘客に對し簡單な謝辭を述べた。乘客は皆な安堵の息をつき流した。私も今一人の客も直ぐに車に乘つた。運轉手も運轉臺に登つた。勝利の感と歡喜の情が車の内外に充ち溢れた。技術家たる運轉手が特に光つて見えた。私は絶えずシヨウの脚本を思ひ浮べていた。

その脚本では先づ前記の革の外套を着た乘客（實は主人）が、運轉手の『二本の足の踵を持つて手押車のやうに其人を引張りだす、其人は兩手で身を支へながら、口に槌をくわえて出て來る』ことになつて居るが、私はその光景の記憶と、眼前實在の光景とが、何だか一つに解けあつた樣な氣持がした。次に脚本では、運轉手は『紺のセル地のサツパリした服裝の青年で、髭は奇麗に剃られ、目は黒く、指は太く、髮は短い黒いのがキチンと掻き分けられ、眉は稍や不規則な形をして、容易に

物を信ぜぬといふ色を見せている。彼が車を扱ふ時の動作は極めて敏捷であつて、而も頗る慎重である。タナア（主人）及び其の連れの人々に對しては、少しも恭々しいといふ態度がなく、只だ冷然として口數をきかず、ずいぶん露骨によそよそしくして居るが、それでも彼等に苦情の口實は與へぬだけにして居る。』とあるのだが、現在の我々の運轉手も全く其の通りの風采であり、氣質であり、人物である樣な氣がした。

脚本では又、この自働車の主人たる青年タナアが一個の富豪アナキストであつて、この運轉手ストレカアが勞働組合に屬する一個の社會主義者であつて、そしてタナアが誇張的にストレカアの人物を評價する事になつてゐる。即ちタナアは其の友人にストレカアを紹介した時、『君が若し彼の腹の中にはいつて、彼が如何に深く紳士なる者を輕蔑して、如何に高く技術者として自ら標致して居るかを見たなら、君は恐らく仰天するだらう。彼は實際、この車を破損する事すら喜んでゐる。なぜかと云ふに、其時には即ち此の僕の紳士的無能と、彼の技術家としての才力とが現はれて來るが故に。』と云つてゐる。タナアは又『オイ君、彼に經濟學の話を始めさせちや大變だ。彼は其の方は十分心得て居るが我々は何も知らない。君は藝術的社會主義者に過ぎないが、彼は科學的社會主義者なんだ』と云つてゐる。

タナアは更らに又、ストレカアの如きは『實に重大なる社會現象だ』と云ひ、『この數年來、我々文士學者連は、少し並外れの新式婦人を見ると、頻りに「新らしい女」といふ叫びを擧げたもんだが、「新しい男」の出降には少しも氣がつかないで居た。ストカレアは即ち「新しい男」なんだ』と云つてゐる。

尤も脚本では、この時、タナアの友人に、『何もあの男に新らしい所なんぞありやしない。君の批評の仕方が新らしいばかりさ』と云はせてゐる。如何にも、此の批評の仕方が新らしくして面白いに相違ないが、然し新らしい勞働者が本當の『新らしい男』であり、新らしい勞働婦人が本當の『新らしい女』である事は確かだと私は平生から考へてゐる。そして私は、今この場合、我々のこの運轉手が、實にストレカアその儘の新らしい男である樣な感じを持つた。

斯樣に、本當の新らしい男である所の、我々の運轉手は、今や修繕し終へた自働車を再び運轉させようとした時、『こんなボロ車なんぞ早く賣つちまやいいんだ』と、吐きだす樣に罵倒した。『ほんとだね、幾ら運轉手が上手だつて、車がボロぢや仕樣がねえ。』乘客の一人がそれに應じた。『會社はこれで平氣なんだから堪りやしない。おかげで運轉手がしよつちゆう頭をペコペコ下げなきやならない。馬鹿々々しいたらありやしない。』

自動車はその時すでに、ブウブウと云ひながら山の鼻の岩角を曲つていたが、車のバネが馬鹿に堅いので、そのカーブの時、車體はドシン／＼と烈しく揺れて、私の小いからだは殆んど宙に飛びあがつた。

その夜、私達は『新らしい男』の案内で修善寺の或る溫泉宿にとまつた。ずいぶん永い一日だつた。翌日電車で三島に出で、更に同じく電車で沼津に出で、それから名古屋までは、凡中の凡より外に仕方が無かつた。伊勢參宮にしては、ずいぶん變な道順でもあり、可なり念の入つた道草でもあつた。

あちこちで目についたもの、夾竹桃、百日紅、栗、無花果、痛々しく枯れかけた稻、眞ん丸く摘まれた茶の株など。

二　七里の渡し、彌次君と融合

名古屋から熱田に引返し、熱田から桑名まで海上七里、謂ゆる宮の渡し。私達は昔の東海道膝栗毛の彌次郎兵衞北八を眞似たつもりで、爺さんと婆さんと二人、この渡し船に乘つた。船は昔しながら『順風に帆をあげ、海上を走ること矢の如く、されど浪平らかなれば、船中思ひ／＼の雜談にあごの掛金もはづるゝばかり、高聲に笑ひ罵り行く中に』物賣舟が幾艘も幾艘も漕ぎ寄せて來て、『酒のまッせんかいな、名物蛤燒の燒立、團子よいかいな、奈良漬で飯くわッせんかいな』などとうるさく勸めること、これも昔の通り。

好い心持に居ねむりをしてゐた私は、この聲にフト目を覺すと、小便が漏るようだ。所で思ひだしたのは、熱田の茶店で買はされた火吹竹。これは固より火吹竹の事だから、先の方に小い穴があけてあつて、これを船の緣にもたせかけて小便をすれば、大へん具合がいゝといふわけなのだが、私はその時、穴のあいてある事に氣がつかず、丁度しゆびんの樣に、只その竹の筒に小便を仕込み、あとでそれを海に打ちあける事と心得、その通りやつたものだから、サア大變！先の穴から小便が流れ出で、船中小便だらけとなり、乘合の人々みな肝をつぶし、『ヤアこりや何ぢやいな、水がえらう流れる』『誰か土瓶をうちこかいたそうな』『ソレ／＼煙草入も風呂敷包もビッショリぢや、こりや堪らんワイ、』といふ大騷動。そうする中、早くも誰かが氣がついて、『ヤアお前これは小便ぢやな』と咎められる。私は赤面して竹筒を押し隱しながら、うろたえてマゴ／＼すると、女房までが尖り聲で、『あなた何といふ馬鹿な事をしたのです』と私をキメつけ、『あなた小便するなら、その竹の筒をそこへこう當てがつて、先の方を海へ出して仕込めばいゝのに、子供ぢやアあるまいし、船の中を小便だらけにして皆樣に申譯がない』

とわめき立てる。私はおず〳〵して『俺は又船の中で仕込んで、あとでぶちまけるのだと思つたものだから』と、小聲で言譯して居ると、乘合の人達は、『イヤヘヤ途方もない、こりや臭くてたまらんワイ〳〵』と遂に船中總立の有樣。私は矢張り只うろたえてマゴ〳〵して居ると、『コレ〳〵お前さん何をボカンとしてる。自分のした事だ、早くそこらの拭掃除でもしなさらんカイ』と、舟先を一つ誰かにコヅキまわされた。私はフツトそれで目がさめた。私は名古屋から伊勢に向ふ汽車の中で眠つて居たのだつた。そして實際、小便が漏りそうになつて居た。

ヤレ嬉しや、私は、早速便所に行つて來て、それからこの不思議な夢を考へ返して見た。成るほど、私は濱松あたりで『汽車の窓から』といふ旅行案内記を讀んだところ、その中にあちこち膝栗毛が引用してあつて、殊に七里の渡しの處がおかしかつたので、一つこの渡しに乘つて見ようかと、老妻とも相談して、名古屋に着いてから驛の案内所で聞いて見ると、そんな渡しなんぞ今はありやしない、尤も小蒸汽が通つてるには通つてるが、それは荷物船で、殊に夜中の出發で景色も何もあつたものぢやないと、散々に笑はれた。それで仕方なく、私達は更に切符を買うて參宮列車に乘りこんだが、七里の渡しに對する私の切なるあこがれが、とう〳〵夢の中で、私自身と彌次郎兵衞君とを融合させてしまつたのであつた。私の妻も私の夢の中で確かに一役を務めたわけだ。

所で汽車が桑名に近づくと、私は又切なるあこがれを心中に感じた。あの渡しに乘つて居れば、『桑名の城見ゆと云ふに嬉しく窓の間より覗ひ見るに、四方の海ばら渺みわたりて、景色云はん方なし』と蜀山人が書殘した其の風景の間に、桑名の城下に上陸して、『燒蛤に舌皷を打つ』筈だ。そう思ふと、私はどうしても此の桑名を素通りする氣になれなかつた。そこで私達はツイふら〳〵と桑名驛に下車した。

三　燒蛤の廢業、荷車の挽犬

桑名驛は田舎びた停車場だ。然し驛前から一直線に、今漸く新道が開通されたところで、それに電車が通る筈であるらしく、石ころ道にレールの敷かれたのが殺風景に見える。その道の兩側にはまだ飛々にしか家が立つて居ない。そして時雨蛤の看板はそちこちにあるが、燒蛤は一つも見當らない。時雨蛤は名こそ床しいが、つまり佃煮で、それが曲物に入れて店先に並べてある。餘り有りがたくない。

私は譯もなく燒蛤が慕はしくて、それの燒きたてのウマそうな奴が、何處かそこらに轉がつて居そうな氣がしてならな

かつた。新道を二町ばかり行くと、旭ビルチングと稱する、巍然たる新築の大白亞館が、如何にも安つぽく立つてゐる。丁度開館の當日と見えて館上、館外悉く五色の旗か何かで安つぽく飾られてゐる。心得のためチヨツと内部にはいつて見ると、ムツト暑い空氣の中に、まだ乾ききらぬコンクリートの臭ひがしてそこにゴタゴタと立並んだ百貨店の間に、見る見る中に腐つて行くかと思はれる肴の店があつて、それに蠅が群れて居るなど、迚もやりきれないので、直ぐ外に出た。

猶ほ燒蛤にあこがれつゝ、暑さも厭はず桑名の町をさまよひあるくと、昔からの古い町々はさすがに何となく床しい所がある。行き行きて桑名宗社といふいづれ由緒のあるらしい、古い立派な神社の前に出た。神社の門は賑やかな町の通りに並んで立つて居り、その門の正面は、町の通りと丁字形を成した廣い參詣道になつて居り、門の兩側には一軒づつ掛茶屋があつて、それが今は氷屋になつて居る。私達はその氷屋の一つの床几に腰かけて、氷を食つたり、無花果を食つたりした。

神社には半ぶん尻を向けて、參詣道の方を眺めると、右手の角には柳の木が一本茂つて居て、その蔭に自働電話が恰好よく据ゑられてあり、それから半町ばかり離れた向ふには、白い大きな石の鳥居が兩足を踏んばたがつて立つて居り、その兩側の家々からは、色々な看板や廣告や旗のぼりなどが、賑やかに横額を見せて居り、ちよつと面白い舞台面である。

何處ぞ燒蛤を食はせる家はないかと、氷屋のおかみさんに聞いて見ると、サアと云つたきりで、愛相もこそもない。すると親爺がそれを引取つて、料理屋に行きなさりや、御注文次第で何なり拵へるにや拵へませうが、今ぢや別に燒蛤と云うて看板を出した家はないと云ふ。桑名はもう燒蛤を廢業したらしい。廢業した店を叩き起してまで、わざ〳〵こゝで燒蛤を食はねばならぬ事はない。然し蛤は今でも取れるのかと聞けば、ソラ、そこを通る人達は皆な蛤取の歸りだと云ふ。成るほど、鳥居の方から續々とやつて來る、籠を提げたり、風呂敷に包んだ物を提げたりした人達がある。今は丁度夕暮で、蛤取の歸つて來る時刻であつた。彼等はこれからそれ〴〵の家に歸つて、あの蛤を食ふだらう。煮ても食ふだろう、燒いても食ふだろう。私はせめてそれに幽かな桑名の匂ひを嗅いだ。

蛤取のとぎれた頃、大きな一臺の荷車が、通りの南の方から神社前にやつて來た。倔强な犬が二疋、梶棒の兩側について、主人と二人で氣を合せて車を引張つてゐるのが、私達には珍らしく見えた。先年、養老の瀧に遊んだ時にも、その以前、紀州の新宮に行つた時にも、犬が先挽をする人力車に乘つた覺えが

ある。面白い一つの地方色である。その荷車が行き過ぎてから間もなく、又一つ重さうなのが、今度は北の方からやつて來た。これには大ぶん瘠せた中犬が一疋ついてゐた。主人の車挽も同じ樣に痩せていた。彼等はその痩せた筋肉を全身の到る處に於いて極度に引きつらせながら、人は兩足を、犬は四つ足を、踏んばつてゞ踏みすべらし、踏みすべらしては又踏んばり、ウンともスンとも云はず、只だ靜かに僅かづつ其の重い車を進ませていた。車挽の燒けこげた額からは汗が霧吹の露の樣に滲みだして居り、犬の口からは赤い長い舌がダラリと横に垂れて、せわしい息づかひにユラ〳〵揺れていた。何かのハズミに、犬が一つ大きく後足を踏みすべらした時、親方の足もとうとう止まつた。車は其のありたけの重みを以て只だ靜かに大地を壓してゐた。それが丁度、私達の腰かけてゐる眞ん前だつた。

一息入れた親方、更に勇を鼓して車を挽き出さうとした。ソラツ！といふ強い短い掛聲と共に、彼は犬の挽綱を一つしやくつた。犬はあわてゝ四つ足を踏ん張つたが、サツパリ力がはいつて居なかつた。車は少し斜めに向を變へたばかり、前にはチツとも出なかつた。ソラツ！といふ二度目の掛聲で、親方が全力を絞ると同時に、犬も今度は力一ぱい踏んばつた。肩と腰の筋肉が今にもプツリと千切れはしないかと思はれるほど、急激に伸縮し、極度に緊張した。せわしい息づかひに、痩せた横腹が有りたけの肋骨を露出させた。それでも車は、ミシ〳〵と云つただけで、動かうとはしなかつた。親方は斷念した。彼は腰の手拭を取つて額を拭いてゐた。犬はハア〳〵ハア〳〵ハアハアと、今にも心臓の破裂しさうな息づかひをして、ジツト目をあげて私達の方を見た。實に訴へる者の如くであつた。『アラ、犬が何か云つてる樣な目付をしてる。苦しいんだよとでも云つてるのでせうか。』私の妻はそんな事を云つた。すると車挽の親方は、『こやつ、暑がつて仕樣がない。からだがチト弱いにや弱いのだが。冬にや綿入の袖なしを着せてやるのだけれど、夏は仕樣がない。』これは見る人に對する言譯でもあり、犬に對する憐み心でもあつたらう。

然し彼れはそれ以上、犬を痛はつて居る餘裕がない。彼自身が痛はられて居ない。彼は更に三たび勇を鼓して梶棒をつかんだ。ソラツ！　の掛聲に必死の覺悟が現はれた。それが犬にも響いた。痩犬の全身が不可思議の底力を發揮した。車が不承無承に動きだした。私達は暫くその跡を見送つて、深い溜息をつき流した。

四 女工、娼妓、諸戸

先程から、犬の主從が四苦八苦の働きをして居るのなどには目も吳れないで、三々伍々、鳥居の方から續々とやつて來る若い女の群があつた。小いのは十三四、大きいのは廿歲(はたち)前後、容貌と服裝と人品とに略ぼ平均の水準があつて、どうも學校の生徒でなく、良家の娘達でない。あの女達は何ですねと氷店の亭主に聞けば、あれは皆んな女工だといふ。成ほど、それで分つた。然し何の女工さんだと聞けば紡績の女工だといふ。桑名は古くから紡績事業の起つた土地で、今は『東洋紡績』の工場があつて、主にタオルを拵へて居るのだといふ。

然し女工さん達がいつでもあんなに自由に出て歩くのかと聞けば、今日は日曜だといふ。成るほど、それも分つた。然し彼等はあんなに連立つて何處に行くのだろう。ついそこに活動がある。成るほど、それも分つた。彼等はこの夕暮の涼しさに、それぞれ小ざつぱりと身じまひをして、一週間の疲れを慰むべく、恐らくは彼等に許された唯一の自由なる安活動を見に行くのだろう。恐らくは彼等は、こうした自由と、こうした歡樂とに依つて、自分達の境遇を、そんなにひどいものでない、可なり我慢の出來るものと、無理やりソウ思はせられて居るだろう。そして彼等は、世間の多くの娘達と同じく、ずいぶん希望のある未來を畫いて、いつかそれに近づき得るものと、氣休めに考へさせられて居るだろう。私はそんな風に考へながら、殆ぼ跡から跡からとやつて來る彼等の姿を見て居ると、彼等の顏色の何となく冴えない事や、總てに何處となく疲れて見える事や、謂ゆる女工〳〵した取りなりの現はれて居る事などよりも、むしろ却つて、彼等が人並に(或は人並以上に)化粧などして、町屋の娘達に劣りはせぬといふ誇りでも持つて居るのでは無いかと思はれる、多少とも得意らしい色の見える所が、甚だ哀れに感じられた。

その中に少し年かさの、目に立つて服裝なり人品なりの立ちまさつた、五六人連がやつて來た。あれも女工さんだろうか。もちろんそうだ。女工、女工と云ふが、どうして中々立派にしたのがある。氷屋の亭主はそれを私に自慢する樣に話した。成るほど、それは結構だ。恐らく彼等は少數の、特別の地位に置かれた、稍や自由な、稍や實入のいゝ人達だろう。然し彼等のそうした地位こそが、即ち他の大ぜいの人達の目を釣り、心を奪ふ、わざわひの種では無いのだらうか。私は彼等の、それこそ明らかに得意らしい、少し取りすました樣子振を見て、いよ〳〵却つて哀れに感じた。

桑名宗社門前の景はいろ〳〵に變化した。今度は北の方から、どうしても素人でない、少し脹らし味のある、然し多少は美しいに相違ない、脊の高い若い女がやつて來た。あれは藝妓だらうか。イヤ娼妓だ。成るほど、さうか。これも桑名の名物だらう。

桑名の名物と云へば、蛤より外に平生から私達の聞き及んで居るのは、富豪諸戸(もろと)の名聲である。私はその事を氷屋の亭主に訊ねた。亭主は聲に應じて答へた。えゝ〳〵、そりアもう、諸戸さんと云へば大したものです。

五　富の由來、功勞の理由

燒蛤では私を失望させたが、然し桑名は又、思ひがけなく、別の名物諸戸を以て、私に記事の材料を供給した。

諸戸さんの邸はこの町にあるのですか。えゝ〳〵、すぐそこの、この通りを北に二三町行つて突當つて、……向ふに赤煉瓦の倉が五戸前並んで見えるそれがさうです、大したものだ。へエ！、そして諸戸家の商賣は何です。商賣？、そんなものはない。ぢや、今の紡績の株なんぞは？。イヤ、諸戸さんはそんな事は何んにもやらぬ。ぢや諸戸さんの財産は？。それは田地と山林ばかり。その代り、田地と山林はこの界隈十里四方くらい大抵あそこの物だし、外に伊賀、伊勢、紀伊の三國に跨がつて莫大なものだ。地租ばかりでも三萬圓から納めてる。へエ！、さうすると、諸戸家は昔からの大盡ですか。ナーニ、先代の清六さんが稼ぎだしたのだ。尤も、先祖は揖斐川の岸の加路戸新戸を開いた大地主だつたと云ふが、清六さんの代にはそれも衰微して、加路戸屋といふ搗米屋だつた。へエ！、ぢや清六さんが一代でその莫大な田地と山林をモウけだしたんですね。どうして又、そんなにうまくモウかつたんでせう。何んでも清六さんは家運を昔に返すのだと云ふて、加路戸からこの桑名に出て來て、こゝで搗米屋を始め、その頃ぢや例の燒蛤で名高い、出船入船の桑名の事だから、船宿などで段々モウけだした。運も善かつたらうが、人間の根性が別だ。清六さんはお大盡になつてからでも、松坂木綿の着物ばかり着て、汽車も三等ばかりだつた。飯を食ふ時間も惜しいと云ふので、お椀に二ハイづゝ飯を盛らせて置いて、それを代り代り休みなしで食べた。へエ！ぢやその根氣と儉約と勉强でそれだけの莫大な地所をモウけだしたんですね。大したもんですね。それで此の桑名の町で、諸戸さんの評判はどうです。評判は宜しいね。尤も、清六さんはモウ二十年も前に亡くなつて、今の當主はあんまり評判が善くもないが。へエ！、今の當主も矢張り清六と云ふのでせう。イヤ、清

六の名は弟さんの方が嗣いで、當主は精太郎と云ふのだが、その人は女道樂をしたりして、マア我々と世界が違ひまさア。町の世話なんぞ考へる樣な人ぢやない。ヘエ！、すると先代の清六さんは、町の爲に何かして吳れたのですか。えゝ〱、第一にや水道だ。この桑名は揖斐川と長良川の川口で、土地が低くて水が惡い。そこで清六さんが水道を拵へて、三里九町があいだ鐵管を埋めこんで、桑名町一面に美しい水を出して吳れた。そこらの辻々にある水道栓が皆それでさア。ヘエ！、それは大した事だ。まだ外に何かありますか。あの揖斐川の岸に一里ばかり櫻の土手があつて、それが櫻のトンネルと云はれて花の頃にや大變な騷ぎだが、あれも皆な清六さんが植ゑてくれたんだ。

氷屋の亭主が氷をけづりながら清六大盡の德をたゝえ、私達老夫婦が床几の上でそれを謹聽して居る時、そこにフラリと一人の男がやつて來た。どうぢや親爺さん、氷は賣れるか。ヤアモウ、氷なんぞ賣れたとて高が知れてる。一パイ三錢ぢや。成ほどのう、今の世の中ぢや、何んぼ稼いだかて諸戸さんまで立身は出來まい。そうぢや、今もお客さんに諸戸さんの話をしたところぢやが、エライ人は違ふたものぢや。そうぢや、エライ人は違ふたものぢや。どうせ地道ぢや金もうけは出來ん。

その男は遊び人でもあらうか、何處となく、譯ありげに見えた。そこで私が口を入れた。清六さんは一體どうして金もうけをしたのでせう。どうしてと云ふて、金もうけのカラクリは兎かく內證のものだから、あんまりハッキリ分つちや居らんが、マア第一は戰爭だな。ヘエ、戰爭！。そうだ、あの明治十年の西鄕戰爭で、諸戸はウントもうけたと云ふ事ぢや。國家の大騷動で人が皆な難儀をする。その時、いつでも誰かゞソット大もうけをする。世の中はよく出來てるよ。ヘエ！、清六さんは西鄕戰爭の時、何をしてモウけたのでせう。何でも、あの時、いくさが起れば米の値があがるに相違ないと云ふので、諸戸はありたけの金で米を買ひ込んだ。それが運の開けはじめだそうな。

清六さんは何か大隈さんと因緣があつたと云ふ事ぢやないか。氷屋の亭主が口を出した。ウン、そんな話もある。俺もよくは知らんが、御維新の時に、諸戸が何處かの宿屋で大隈さんの奧さんと宿りあはせて居て、奧さんの難儀を救うてやつたとやらで、それで後々大隈さんが諸戸を引立てたと云ふのだがな。いづれ大金もうけは地道ぢやない。何かの筋を何處かから引張るので無きや、うまい汁を吸はれる氣遣ひはない。

何の筋をどう引張つたか知らんが、清六さんは一手で以て米を軍隊に納めたと云ふぢやないか。ウンそうだ。而もそれが、

朝鮮米をドシ〳〵買込んでは、それを皆んな日本米で通したと云ふのだから、ボロイわけさ。これから次には紙幣の買占さ。政府が戰爭で無理な事をして、紙幣が反古の樣になつたところを、諸戸が皆な買占めた。それが後に莫大なモウケになつた。諸戸淸六は食ふ物も食はず、着る物も着ずに働らいて、謂ゆる勤儉力行であれだけの身代を築きあげたと云ふが、政府の役人と內通して、買占をやつたり、御用達をしたりするのは、勤儉でも力行でもありはせぬ。成ほど、淸六どんも、搗米屋から船賃までの時代にやア眞黑になつて稼いだに相違あるまい。だけど、それから先にやア底もあり蓋もあり、疵もあり筋もありさ。どうせ商賣は買うたり賣つたりで、安う買うて高う賣るに不思議はないわけだが、それなら相場師もバクチ打も同じ事だ。だから大金もうけは地道ぢや出來んと俺が云ふのぢや。なア氷屋の親爺さん。

氷屋の親爺さんは少し相槌を打ちかねて居る。この諸戸の桑名に於いて、桑名の諸戸を惡口する事は容易でない。然るにこの一癖ありげな奇怪な男は、氷屋の庭先に突立つたまゝ、盛んに氣焔を擧げている。そりや淸六どんはエライさ。エライにや違ひない。あの木曾川の岸の荒地を皆んな買入れて、それを自分の手で立派な田地にした。國家の爲に耕地面積が增大した。國家の爲に米穀の產額が增大した。諸戸淸六は國家の功勞者だ。だから彼は從六位に叙されて居る。だけどなア氷屋の親爺さん、その荒地を買入れた元の金は何處から來てる。先つきにから話した通りぢやないか。そうした金で安い荒地を買うて、その荒地に又そうした金をつぎこんで、とう〳〵それを立派な田地にして、そしてそれから每年ドシ〳〵年貢を取り立てる。それが國家の爲と云ふのぢや。のうお客さん、面白い話ぢやないか。

これは私に向けられた言葉であつた。全くだ！。ほんとに面白い話だ。モツト、モツト話して聞かせて下さい。

ハハア、本當はそれほど面白い話でもあるまいがナ。然しなアお客さん、諸戸は又植林に功勞があると云ふ。そりや成ほど、植林なんといふ氣の永い、遠い先を見透した仕事は、並の人にや出來ん事ぢや。けどもなアお客さん、それも荒地の開墾と同じ事ぢや、ありあまる金で安いはだか山を買込んで、それに苗を植ゑつけて放つて置けば、二十年三十年の後にやア、自然の力でそれが大した材木になる。その材木を切つて賣れば大した金になる。その金が皆な諸戸のものになる。ボロイ話ぢや。そしてそれが矢張り國家に功勞と云ふのぢや。

全くだ！。モット何か面白い話はありませんか。私達はそんな面白い話が聞きたいばつかりに、こうして行脚見たいな旅を

してるのです。

イヤもう話はない。然しなアお客さん、この桑名は昔から米穀と材木で繁昌した土地柄で、今でもそうに違ひないが、只その米穀と材木が皆んな諸戸の商買になつてると云ふだけの事でさ。桑名が諸戸のお蔭になつてるのか、諸戸が桑名のお蔭になつてるのか、どちらか分つたものぢやない。イヤ、その位の事ぢやない。この桑名の町を中心にして、伊賀、伊勢、紀伊の諸國に亙つて、人と土地とを搾りあげ、吸ひ取つた其のアブラが、即ち諸戸家の身代だといふ譯ぢやありますまいかな。それに何ぞや!(こゝで此の怪男子の氣焰がいよ〳〵熱烈を極めて來た。)十五萬かそこらの目くされ金を出して、水道を一つ拵へて呉れたと云うて、而もそれが自分の用水の殘りを分けて呉れたと云うても善い程のものであるのを、桑名の町中の金玉をブラさげた男共が、涙をこぼすほど有がたがつて頂戴してる!。何たる意久地なしだ!。何たる阿呆共だ!。なアお客さん、なア氷屋の親爺さん、俺アそれを考へると腹が立つて腹が立つて仕様がない!。アツハヽハ、ツイしやべりすぎて日が暮れかゝつた。左樣なら、御免なさい。

怪男子はプイと行つてしまつた。あれはどうした人ですね。

ナニ、あれはあゝいふ人です。どうもそれ以上、聞くことも出來なかつた。

六　諸戸邸の内外、諸戸邸の將來

私達は餘り永く氷屋の床几を邪魔したので、もういよ〳〵尻をあげようと思つて、更に諸戸邸への道順を亭主に尋ねた。亭主は表に出て北の方に指ざしして教へてくれた後、あの邸の中を一度見せて貰ひなさるとよいのだが、それは迚も六かしかろうと云つた。何しろ、あの邸の中には、廣い庭園があつて、池があり、噴水があり、築山があり、櫻があり、その外、色々な花の木が植ゑてあり、色々な動物が飼つてあり、一年に一度、花の頃には、それを公開して誰にでも見せる。諸戸家には番頭が三十人も五十人も居り、臺所には日本の板場と西洋のコックと兩方が揃つて居る。又邸内に、海から潮のはいつて來る生洲があつて、あらゆる種類の大小の魚が絕えずそこに生けてある。本家の裏側には、數軒の分家がある。當主の弟の淸六氏と、婿を迎へた妹達とがそれに住んでいる。

凡そこれだけの事を聞いて置いて、私達はお邸拜見に出かけた。少し行くと左側に活動小屋がある。まだ入口で切符を買つてる女工達もあつた。又少し行くと、兩側の家の格子作りが變な形に見える。あゝ、なるほど、先程の娼妓さんの巣がこれだ

それから又少し行つて、立派な家に突當つた。然るべき料理屋らしい。立ちどまつて玄關をのぞいて居ると、女中が式臺に出て來てお辭儀をしそうにした。びつくりして直ぐ右に折れた。そこにはいれば燒蛤が食へたかも知れない。それから海べに出て、海に臨んだ昔の城趾——石垣の上に松の茂つた好い景色——を見たが、そこは行きどまりになつて居るので、又跡戻つて料理屋の前の通り、今度は住吉の社に通ずる奇麗な橋の袂に出た。なるほどそこから向ふに赤煉瓦の倉が五戸前並んで見える。

あれだなと思ひながら、橋を渡り、住吉さんの前を通ると、揖斐川の川口に出た。こゝは昔、芭蕉翁が『あけぼのや、白魚白きこと一寸』といふ面白い句を殘した貝津の濱である。廣々として川口の靜かな夕暮の景色がいゝ。船から岸に踏板が掛つて居て、船頭の女房らしい子供をおぶつた女が、その岸で洗ひ物をして居た。川添の土手道は、成るほどこれが諸戸氏の植ゑたのだらう、川上に向つて目の屆くかぎり一直線に、櫻の——今は葉櫻の——トンネルになつている。そのトンネルの中を自轉車が二つ並んで遠く小いさく走つて居るのが美しかつた。

そんな細かい景色などはどうでもいいが、私は今、諸戸本邸の裏側に來て居るのだつた。本邸その者はこゝからは殆んど見えない。只だ塀の内の森の間に高い塔の様な建物が一つ見え隠れしていた。倉庫の幾つかは其の背面を土手道に向けていた。土手道を横ぎつて、船つきから倉庫の方へ、小いレールの敷いてあるのも目についた。こゝからも多くの年貢米が運び込まれるのだろう。土手道に沿うて中位の揃ひの家が幾つも幾つも並んでいる。これは多分、三十人も五十人も居るといふ、その番頭さん達の役宅なのだろう。それが皆な萱葺屋根で出來ているのは、いづれ何かイワレのある事だろうが、兎にかく雅味があつて面白い。その役宅のうしろ、本邸の塀そとに、稍や大きな邸が幾つかある。その中にも大きな萱葺の面白い恰好の棟が見えていた。これらの邸は多分、先に聞いた分家なのだろう。何しろ此邊一帶が諸戸家の城廓なのである。これで大體の形勢が分つた。

然し私は、折角の事だから、是非とも諸戸本邸の正面を一見せねばならぬ。私は土手道から塀に沿うて横道を奥の方にはいつて行つた。大ぶん疲れた細君も後からトボ〳〵ついて來た。私だつてずいぶんもう疲れては居たが、そこは職業的忠實心の刺激で、なまける氣になれなかつた。横道の折れ曲る處に一つの門があつた。その表札を見ようとして、薄くらがりの中を門に近づいた時、電燈がパットともつてビックリした。表札には諸戸精太郎と大きな字で書いてあつた。こゝは多分、本邸の通

用門だらう。だらう〳〵の想像ばかりだが、間違つたつて差支もない事だから、一々たしかめはしない。

もひとつ角を曲ると、今度は忽ち廣い通りに出た。こゝが疑ひもなく本邸の正面で、高塀の内に種々の大きな建築物が立つている。先つき橋の上から見た赤煉瓦の倉の五戸前も、即ちこの高塀の内にある。先づ出くわした一つの大きな門には幾つも幾つもの表札が掛つてゐる。曰く、諸戸殖産株式會社桑名支店。曰く、三重縣養魚株式會社桑名支店。曰く、株式會社三重農場桑名支店。保證責任諸戸家信用購買組合。そして其の前側は、先つき渡つた橋の下から續いた、湖入の堀割で、大船小船の幾十艘かがはいつて居る。

私達は夕闇の中に疲れた足を引きずりつゝ、その堀割と高塀との間の廣い道をたどつて行くと、いよ〳〵本邸の正門にやつて來た。突當りが本門らしく、そこは嚴めしく閉めきつてある。右側は堂々たる、然しながら極く手堅い商店風の、舊式日本建の表口で、荒い大きな格子の中に、番頭達が帳面をひろげたり、算盤をはじいたりしてるのが、遠くから善く見える。その前の堀割には、大きな材木が一面に浮かしたり、積みあげたりしてある。如何にもお大盡家の門前の景色である。

私達はその門前の道の角に水道栓の立つて居るのを見つけて、直ぐにそこに行つてウガイをして水を飲み、手拭をぬらして顔をふき、ついでにハンケチの洗濯までした。水は冷たい善い水だつた。減らず口はきゝながら、私達も諸戸家の水道の恩澤にあづかつたわけだ。

私はその水道栓のそばに立ちながら考へた。若し桑名の町が東海道五十三次の一つとして、燒蛤で賑はつた頃、徳川の親藩たる松平家が、この桑名の城主であつた。其の城が今では只だ風景の好い公園か何かになつている。時節が變れば城廓も用を爲さぬ。徳川様の御威光も、松平様の御支配もしびてしまつた。そして今では、ブルジョアの天下、諸戸家の全盛が現出している。然し時節は又變る。諸戸家のこの城廓が、今度は何になるだらう。現在やつているといふ一年一度の公開を、平生不斷の公開にしさへすれば、そこに又一つ公園が出來るわけだ。それともこゝを一般人の休養宿泊所と云つた様なものにでもして、現在諸戸家の所有地に働いて居る様な人達が、その公休の數日なり十數日なりを、自由に面白くこゝで遊び暮すと云つた様な事にでもなるものだらうか。

イヤこれは飛んだ空想に耽つて相濟みませぬ。然しこれで兎にかく御邸拜見は相濟んだ。私達はそれから又とぼ〳〵と大ぶん歩いて、停車場前の宿屋にとまり、そこで蛤の吸物、蛤の

佃煮、及び蛤のフライを食つた。桑名は存外面白い處だつた。

七　伊勢參宮、朝熊山、テント村

第三日、いよ〳〵伊勢參宮。回顧すれば、私が十七歲の春、東京遊學の途中、初めてこゝに參詣したのは、正に四十年の昔である。（私の妻の初めて參つたのも三十餘年の昔だといふ）所が今『山田驛』に下車して、兩側に旅館の立て列ねた大通りを『田舍者らしくキヨロ〳〵して行く心持は、旅館と土產物屋の大きさや美しさに大なる相違があるであらうに係はらず、矢張り昔とおんなじ樣だ。外宮の神苑の手洗場で『滾々たる淸水』の下からムク〳〵と湧き出て居るのを嬉しがる心持も、矢張りおんなじ、昔の『間山(あひのやま)。古市』も通らず、今の『四十八町の新道路』も通らず、電車でわけなく、外宮から內宮に行くと、『參拜道路、樹木、芝生、それに野飼の白い鷄』『伊勢ならでは見られぬ神々しさ』も昔のまゝ、『五十鈴川の手洗場』の『千古の淸流』にウグイスの群れて居るのも昔のまゝ、正殿のあたりの『古木鬱蒼』『人目を驚かす杉の大樹』正殿の『御屋根の……千木……勝男木』も昔のまゝ。只一つ違つたと思ふのは、入口の宇治橋の上から錢を投げると、河原の乞食が竿の先につけた網で上手にそれを拾ふといふ光景が無くなつている。かの有名な『お杉お玉』の如きは、私の知る昔にも既に無かつた。

今一つ變つたと思ふ事。內宮驛前で買つた『伊勢神宮誌』の『宇治山田市及附近略圖』を案ずるに、この『神都』に裁判所があり、警察署があり、中學校があり、女學校があり、商業學校があるのはまだ驚かぬとして、『東洋紡績山田工場』『東洋紡績宮川工場』『三重セメント株式會社』のあるに至つては、正に驚歎に値する新現象である。

私達は神樂殿の前を通る時、『巫女(みこ)』といふものを拜みたいといふ氣がフイと出た。『大江の千里』とも云ひさうな裝束をした、そこの神官に伺つて見ると、お初穗は一圓以上、お神樂は七圓以上百圓以下で、お神樂は『舞姬』が勤めるが、お初穗には『舞姬』は出ぬといふ。一圓なら苦しくないが、舞姬が拜めないでは物足りないし、さりとて七圓以上の舞姬は餘りに貴いのでヤメにした。

昔は何とか太夫といふ『坊』に宿つたと覺えて居るが、今は宿屋にはいる必要もなく、內宮前の腰掛で六十錢の鰻井を一杯たべたきり、直ぐに次の旅程の朝熊(あさま)登りに掛つた。

歸りの電車を楠部(くすべ)で乘りかえて平岩驛につき、そこから『勾配の急峻なる點に於て日本一の稱』あるケーブルカアに乘ると、忽ち『海拔一千六百尺』の朝熊驛に達する。これはアサク

マでなく、アサマである。『風景の絕佳なること』云ふも更なり。伊勢灣や二見の浦が月の下に見える。『朝熊かけねば片参宮』などと云つたのは『神佛を混じた昔の風俗』だそうだが、今は『登山電車』が盛んに此のスローガンを高調して、神佛混交を復活させている。

扨この山の上、ケーブル驛から三町餘の處に『とうふ屋』といふ立派な旅館がある。本館、別館、簡易食堂など三四軒が、道を挾んで陣取つている。こゝから富士も立山も日本アルプスも見えるといふ。修善寺にも『とうふ屋』といふ宿屋がある。（ついでに、長岡には酒屋といふ宿屋がある。）こうした名前には何だかひどく面白味が感じられる。

この山のいたゞきには金剛證寺といふがある。私はそこで釣鐘を一つゴーンとついて見た。寺の少し手前に『萬金丹の本舖』がある。本舖のは特に善くきくだろうと云つて、私の妻は廿錢のを二包買つた。

今一つ、この山の上に『テント村』といふ面白いものがあつた。『テント村事務所』といふ掛札を出した、道ばたの小さなテントに就いて聞くと、つまりこれは輕便な宿泊所で、『登山電車』の經營である。寢臺一個の借賃が五十錢、毛布が一枚につき十錢づつ、食事が朝十五錢、晝廿五錢、夕六十錢。これは面白いと云ふので、モダン旅姿がそこに宿る事にした。

一少年に案内されて林の中を通りぬけると、海を見おろした山の腹に白いテントがあちこちに立つている。私達はそれの第五號（No. 5）を割りあてられた。こいつはいゝ。有りがたい。素敵だ。私達は大はしやぎにはしやいだ。テントの中には、折りたゝみになつた輕便寢臺が數個、椅子が數個、横長いテーブルが一個、電燈が一個。それからテントの外に水がめが一個、洗面器が一個。設備は只それだけ。床は赤土ばり。やがて少年が毛布を一人三枚づつと、坊主枕を二つと、蚊帳を一はり持つて來てくれた。

私達は早速寢台を二つひろげて、その上に毛布を敷いた。そして椅子テーブルの位置など恰好よくして見ると、それで結構、室内のような感じがする。見晴しのある側のテントの裾をまくれるだけまくつて、寢台の上に樂々と腹這になつて見ると、眺望はこゝでもとうふ屋なり朝熊驛なりと同じわけで、何ともかとも云はれぬほど愉快だ。こんな時、煙草を吸はぬ身はチョツトさびしい。妻は手提の中から『梅干』を取りだしたりした。この時だけは婆さんでも連れて來て好かつたと思つた。只つた一人きりのテント住居は餘り寂しいだろう。

一應おちついたところで村内巡覽に出かけた。テントは五間

おき十間おき位に、第十號までである。私達のより小いのもあれば、大きいのもある。天井ばかりで、四方の垂れのない、附屬テントもある。私達の第五號にもこれが附いている。便所も二三個所こしらへてある。ブランコも二つ立つている。事務所のそばにはテニスコートもある。この趣向は今年の夏はじめてやつた事で、今後每年夏期にやるのだといふ。但し今は幾らも客が無いらしく、のぞいて見たテントは皆アキヤだつた。

それから食券を持つて食事に出かけた。食事はとうふ屋の簡易食堂でやる。席が奇麗で價が安くて、割にうまくて、女中達が無邪氣で親切で、好い氣持だつた。私はビールを一本倒さないで居られなかつた。湯はとうふ屋の別館で入れて呉れた。奇麗な浴室だ。そしてロハだ。

その夜、生來付て知らないほどの愉快な眠りを貪つた。所が、夜中にフト目がさめて見ると、雨がドシヤぶりだ。稻光りがする、神鳴りが鳴る。頭の邊にはテントの隙間から少しづゝシブキがはいる。土間には水が大ぶん流れこんで蚊帳の裾がぬれる。チヨツト悽愴たる光景でもあつたが、然し又思ひがけない珍らしさでもあつた。

夜があけると、雨はやんだ。然しテントをまくつて下界を見おろすと、只だ一面に濛々たる白い霧。樂しみにした朝景色は散々だつた。山を下ると霧はもう散れていた。見あげると、今度は山の方が只だ濛々たる白い霧。

八　卒塔婆小町、三千圓の貸金

二見の浦は別step なし。

二見の浦は別邪なし。只だ昔の勇士が馬を乗りつぶした樣に、私の足が日和下駄をはきつぶしたので、或る下駄屋を見つけて利休下駄を一足六十錢で新調した。妻は新調を不經濟と考へ、二十錢で齒の入替をして貰つた。

二見驛で少し時間があるので、妻は驛のそばの井戸で洗濯をやりだした。鳥羽に向ふ汽車の中では、幸ひ人は少し、洗濯物の繻絆などが窓に干されていた。

鳥羽の港も何の變哲なし。而も又小雨が降りだした。早々停車場に引揚げた。するとそこで、思ひかけなく妻が一役を勤めた。

彼は驛の軒下で見るかげもない一人の老婆と何か話していた。その老婆に比べると、彼はまだ若い女と云つてもいゝ。まさか彼が、自分を引立てる爲に、その老婆を話相手に選んだわけでもあるまいが、實際その老婆は卒塔婆小町を思ひださせる婆であつた。聞いて見ると、老婆はこゝの案內者であつた。もう十七年間、案內をやつて居るのであつた。そして此頃は餘り仕事が無いと云ふのであつた。妻は老婆に『おぼしめし』とい

ふ案内賃を三十錢ばかり拂つて、案内を頼む代りに身上話を要求した。老婆は喜んで語りだした。

彼女は津の生れであつた。彼女の夫は四國の者で、この鳥羽に來て沖賣を商賣にして、相應に善く暮していた。その頃は、鳥羽の港は出船入船で賑かだつた。紀州灘や遠州灘の荒浪をよけるのに、鳥羽ほど善い港は外に無かつた。彼女の夫は多くの船乘を相手にして、もうけもしたが親切に世話もした。從つて貸しも多かつた。兎かくする中、彼女の夫は中風になつた。商買は駄目になつた。誰も寄りつかなくなつた。貸しは丁度三千兩あつたが、返して吳れる者は一人も無かつた。催促すると云つても、先は船乘だし、何處の者だか分りもしない。彼女は遂にこの町の案内者になつた。初には知らぬ人に物を云ひかけるのが耻かしくて困つたが、間もなくそれにも慣れた。それから七年間、案内者をしながら夫を介抱して、とう／＼それを見送つた。其の時、私の事を、七年といふ永い間、善く亭主の世話をしたと云つて、賞めて下さつた警察のお方が、今でも折々この驛に來なさるが、矢張り私を可愛がつて、いつでも私に切符を買はせて下さつたりなさる。

こんな物語をする時、彼女の凋びた頰に血の氣がさし、うるんだ目に輝きが見える。彼女は若い時には、たしかに可なりの美人だつたに相違ない。頰は今こけて居り、齒は缺け落ちて居るが、笑ふ時の目元には何處やら可愛らしい所がある。彼女は洗ひざらした所々糸のぬけた、紺飛白の單衣を着て、手には色のあせた朱繻のこうもりを持ち、腰は曲り、髪は亂れ、これでは案内の賴み手のないのも無理はないと思はれるほど、こぎたなく見えて居るが、それで段々話を聞いて見ると、誠に人の好い事がうなづかれる。年は七十二だといふ。

私達は三人で、そこにしやがんで話して居た。すると、そこを通りかかつた驛の赤帽が、ニヤ／＼笑ひながら見返り見返りして行き過ぎた。婆さん又やつてるな、とでも云ふのだろう。思ふに此の婆さん折々誰かをつかまえては身上話をする癖があるのかも知れない。然し赤帽のニヤ／＼は決して、惡意の冷笑と見えなかつた。卒塔婆小町は常にこの驛の愛嬌者であるに相違ない。

その頃の私は本當によく働いた。彼女は又繰返して語りだした。朝のうち働らいて、晝には戻つて來て爺さんに飯を食はせ、頭を冷してやり、そして又晝から働らきに出かける。夕方に戻つて來ると、拵へて置いた日なた水で爺さんにお湯をつかはせる。自分はお湯など使うた事がない。いつでも水ばかり。この頃は丈夫だから、それで何とも無かつた。

でも折々私が爺さんに愚痴をこぼした。あんたは人にばかり金を貸して、私に何も殘して呉れん、貸した金は誰ひとり返して呉れる者はないがな。私がそう云ふて爺さんをこずきまわす。そうすると爺さんは首を振つてコワがつてる。丸で赤ん坊と同じぢや。それで私が又頭を撫でて可愛がつてやる。

最後に彼女は、今でも貸金三千圓の證書と帳面のあることを語つた。鹽だの黴だのでベタ〳〵になつて居るが、私が死んだら反古にもなるまい。

その恰好では案内者らしく見えないから、白だすきの樣な物でも肩に掛けるとかしてはどうだと、私の妻が注意すると、私もそう思うて居る、こうして鑑札まで貰うてるのだから、今に白い前掛でも拵へて、それに案内人と書いて貰をかと思うて居る。――彼女はまだ永くこの業を務める積りで居る。

時間が來て私達が汽車に乘らうとすると、彼女は改札口の處まで送つて來て、是非又いつか來てくれと云つた。そして今度はゆつくり案内をさせてくれと云つた。そしていつまでも改札口の外に立つて、手を振つたりして、ニコ〳〵顏で私達を見送つた。

九　津、四日市、湯の山

例の通り、あとは大端折。伊勢に來て津を見ないといふ法がない。私達は鳥羽からの歸りを津におりた。然し何事もない。只だそこの小いさな無料圖書館で、諸戸清六氏の植林と水道とに對する、頌德の、一文を讀んだ。

津から四日市までの海岸に、今年はじめて開通した電車がある。それに乘つて見た。恐ろしく奇麗な電車だ。私は梨をかじりかけてフト氣がついた。向ふの掲示に『煙草及び飲食御遠慮』とある。成るほど、これほど奇麗な電車を飲食でよごす事は遠慮すべきである。然し私はとう〳〵梨を食つてしまつた。

その晩、四日市に宿つて朝、湯の山に遊んだ。四日市から電車で一時間ばかり、それから自動車で山の中腹まで登る。谷川の岩や石が皆白くて水が殊に美しい。こゝは冷鑛泉だが『水滑らか』の趣きがある。蒼瀧見物の行き返りにはずいぶん骨が折れたが、それだけの値打はある。養老の瀧などよりズツト好い。

その道連の話にも諸戸の噂が出た。この邊でも賣りに出るほどの田地は皆な諸戸が買つてゐる。諸戸家の暮し振は、迚もお話にならん。お話にならんと云ふのは、大抵つまらんもの丶事だが、諸戸の場合は、お話にならんほど豪勢なものだそうな。

この邊では小作と地主の爭ひはどんな樣子です。私が問を出した。すると二人連の頑丈な若い婦人の一人が答へた。すいぶ

ん烈しくたりました。私の家は自作だけれど、地主さんのお内では追々みた自分で作る事にたつて來た。それもずいぶん難儀でせうと云ふと、でもこれは矢張り意地だから。私のつい近處の或お内など、奥さんもお嬢さんも皆な總掛りで大騒ぎをしている。ぢや、小作から田地を取りあげて、雇人に作らせて居るのですな。誰かゞそう云つた。ぢや今度もし其の雇人共があばれだしたら、どうなるだらう。先の事はどうせ分りませんさ。大きた銀行さへ潰れるのだから。全くだ。何せ百姓は駄目です。私達も此の秋にはモウ何處か出て行く積りだ。これは先つきの婦人だつた。それがよい、それがよい、いつまで田舍に居てどうなるものか。あんた達が出て行くなら、俺も一緒に行かうか、なア姉さん、どうぢや。ハッハハハハ。ハッハハハハハ。そんな話が暫らく恭瀧の下ではずんだ。

四日市に戻つてここでも市中を一巡したが、同じく何事もなし。只だ私は波止場で暫く感慨に耽つた。四十年前、十七歳の私が、こゝから汽船に乗つて横濱に向つた。當時はまだ東海道に汽車が通じて居なかつた。この波止場は昔と大して變らない様な氣がする。半白の老翁の心持が兎もすれば十七歳の少年と餘り變らないと同じ様に。

十　日本ライン、犬山城

サアもういよ〳〵歸り道だ。然し今一個所だけチョット何處かに遊びたい。京都まで足をのばして比叡山に登るか、名古屋に引返して木曾川を下るか。謂ゆる『日本ライン』の名に釣られて後者が勝つた。

どうも勝手がよく分らないが、兎もかくその夜、名古屋鐵道で犬山まで行つた。宿は犬山城の下の迎帆樓にせよと敎へられた。そこに行つて見ると、中々にしやれた宿屋らしい。紳士達が藝妓でも連れて來そうな處に見える。少々ひるんだけれど、既に玄關まで行つて引返すわけにも行かない。勇を皷してズット通る。長い廊下を奥深く導かれて、川に臨んだ小意氣な部屋に入れられる。いよ〳〵以てビク〳〵だ。こゝは薄ぎたない爺さん婆さんの來る樣な處ではないのですよ、と云つた樣な顔をされては、ヤリきれないと思つたが、今さら何とも仕樣がない。そこに物なれた女中が來て、山登りでよかと見立てて呉れた。

こゝでうまい鮎など食つて居ると、鵜飼の篝船が上流から下つて來た。椽先の茂りを通して黒い川の中に其の赤い火を見るのは甚だ美しい。この景色を一見しただけでも、こゝまで來た

値はある。費用に厭ひのない客なら、こゝから別仕立の船で川を登つて、そして下るのが普通の仕方だが、我々は名古屋で『日本ライン週遊乗車船券』といふ奴を一圓六十錢で買つて來て居る。明朝電車でライン遊園地まで行き、そしてそこから乗合船で下るべきである。

朝、勘定を取つて見ると、宿りが三圓。ちよつと驚いた。桑名では二圓五十錢、四日市では一圓七十錢の安宿にとまつて來た私達としては設備に於いて、食物に於いて、女中に於いて、それらに二倍三倍する愉快を得ながら、それが三圓では何しろ安いと思つた。然し安いに異議はない。好い氣持で出立した。

ライン遊園地はまだ名ばかりで、何もない。電車を降りて桑畑か何かの間の面白くない道を二十町近く歩いて、——然し十數人の自然の道連が後になり先になり喋りながら歩くのだから、そこに存外面白味があつて、——初めて木曾川のほとりに出た。いづれこゝに自働車でも通されるだらう。

船は十一時に出る。それまでの間、待合所が賑ふ。今朝、心中の男女の屍體がツイそこに浮きあがつた話を、おかみさんがして聞かせる。屍體がまだそこに菰をかぶせた儘に置いてあるといふ。又しても心中だ。私の旅行に自殺か心中の出て來ない事はない。然し考へて見ればそれも當り前か、新聞を見れば、自殺や心中は毎日ある。別だん珍らしい事ぢやない。人生は到るところ遊び場所だが、又到るところ死に場所だ。木曾川も又一つの有名な自殺所になるかも知れない。

十五人定員の、細い長い輕い船に、二十人ばかり詰めこんだ。船に乗つたら船頭の云ふ事を聞くもんだ。技術者の權威を以て叱られると、皆か小いさくなつて順々に席を詰めた。心中は何處だ何處だとキョロ／＼するが、岩の上にも舟の中にも、それらしい物は遂に見えなかつた。

船は下りはじめた。兩岸の風景はつまり山と岩だ。殊に大小無數の謂ゆる奇岩怪石だ。岩の色や形の面白味は長瀞と大差はない。或は長瀞の方が上かも知れない。然し何しろこちらは川が大きい。川幅も廣い、水量も多い、山も高い、總てが雄大だ。その點から云へば比べ物にならない。私は昔し一度、富士川を下つた事があつたが、あそこも水が少くて、舟が岩の間を縫うて行く時、屢々危險な思ひをした。そうした冒險的の興味は、木曾川には殆んどない。その代り、悠々洋々と云つた樣な趣きはある。然し又それにしては、更に今一段水量が多かつたらと思ふ。ドイツのラインは知らないが、あそこは小蒸汽が通つてる樣だから、モツトモツト雄大だらう。

下ること約一時間にして、向ふの左手に犬山の城が見える。

黒々とした高い森の頂上に、シヤチ鉾を戴いた白い壁が聳えている。おもちやの様な小さな城だ。『白帝城』といふ名は少し仰々しすぎる。然し景色としては、その小いさいおもちやの様な所が甚だ善い。城から少し手前に犬山橋が横たわつて見える。立派な鐵橋だ。犬山橋、犬山城、そして右手のかなたには濃墨色の夕暮富士、こゝの景色は幾ら自慢されても餘り腹が立たない。橋の下からボートが一艘登つて來た。若物が四五人乘つてユル／＼漕いでいる。我々の舟と大ぶん距離はあるが、丁度兩方が上りと下りと行き違ひになる時、その若者の一人が奇聲を發した。姉がひとりこつちやも欲しい！。他の若物が又それに續いた。こつちやにおいでなまつせい！。如何にも、我々の舟には四五人の若い婦人が乘つて居た。

舟は犬山橋の東岸についた。私達は橋の袂の西洋料理キリン亭に登り、名物の煮茶酒を一杯飲み、一圓の定食を食つた。

十一　木曾川の闇、水力電氣の光

いよ／＼歸り。然し例の凡中の凡には再び乘りたくない。私達はその日の午後、中央線の汽車に乘つた。この汽車中の光景を大ぶん委しく書く腹案であつたが、モウいよ／＼時間と紙數の餘裕がない。

私達は夕暮から夜中にかけて木曾川の岸を逆登つた。木曾川の神秘の闇は、到る處、燦然たる電燈の光で破られている。それが皆な水力電氣のお蔭だと、隣席の一旅客が教へてくれた。然しうまい汁は皆な都會に持つて行かれる。今一人の隣席はさう教へてくれた。資本の力がズン／＼と此の山のなかに侵入するのですな。更に他の一旅客は少し演説口調でそう云つた。

× × × × ×

あちこちで目についたもの。ネムの花、食用蛙親おたま分讓、自轉車ノーリツ號、朝鮮人の勞働者、支那人の床屋(耳掃除)。

若槻と箕浦

武者小路實篤

自分は若槻氏についても箕浦氏についても殆んど知らない。新聞で知つてゐるだけである。それも注意して讀んでゐるとは云へない。わりに丁寧によんだ方かとも思ふが、今になつて見るとさう丁寧にもよまない方だ。しかしこの二人の關係について自分は一寸とかいて見たく思つてゐながら、かく折りがなかつた。今度中央公論の記者からこれについて何かかいて見てくれと云はれて、前一寸かきたかつたことも思ひ出して、かくことを承知した。

しかし眞相を知らないのだから、二人の人については、想像でおきなつてしやべるより仕方がないが、自分は二人の個人について饒舌るといふよりも、もつと他のことが饒舌りたいのだ。

僕は新聞でよんだ所では箕浦氏の方が正直者で、若槻氏の方がごまかしてゐるやうに見へる。箕浦氏の方は始終云ふことが一貫してゐる。若槻氏の言葉はその時その時で、少し變化してゐる。尤も若槻氏は急がしい人だから忘れたり、思ひまちがひしたりするのは同情出來ないことではない。しかしそのために箕浦氏に汚名がつくか、つかないかと云ふことになると若槻氏の責任が重いわけだ。

自分と同じ黨に屬し、自分の先輩として働いて來た人をなるべく救ひたく思ふのは人情である、しかし同時に、自分が宰相であり黨の主領であつて見ると、うつかりしたことを云つて法律にひつかゝりたくないのも、無理のない所がある。このヂレンマに若槻氏はなやんだにはちがひないが、友情よりは法律にひつかゝることを恐れすぎたうらみのあることゝは非難されても仕方がないかと思ふ。始めの時に、「箕浦君がさうとるのも尤も思はれることを云つたのは自分の不注意だつた、自分はかう云ふ

意味で云つたのだが、箕浦君がさう取つたのも今になつて考へると無理がない、自分の云ひ方に注意が足りなかつた。氣の毒なことをした。同君にもすまなく思つてゐる」と云ふやうな感じでものを云ひ、箕浦氏を法律の許す限りにおいてかばうやうにしたら、箕浦氏も腹を立てず、反つて感泣したかも知れない。それをあまりに自己辯護に急すぎた恨みがある。

それは若槻氏の位置では無理のない所もある。しかしもう少し友情を見せてもよかつたと思ふ。痛くない腹をさぐられるのを恐れすぎた方がある。そして箕浦氏一人をつきのけて逃げた形がある。之は見ようによれば無理がないが、若槻氏が才人であつて、力の人ではないことを語りすぎ、たよりにならない人だと云ふ氣をさせた。原敬だつたら決してそんなことはしなかつたと思ふ。加藤高明でももう少しやり方がちがつてゐたらうと思ふ。

あまりに法律の網にかゝるのを恐れて道徳の網にかゝるのを忘れた。原敬の圖太さはいゝと許りは云へない時もあるが、しかし議員、黨の恩人を顧みなすぎるのも人情に背く。箕浦氏が怒り出したのも無理はないと思ふ。

しかし若槻氏の云つた言葉は、箕浦氏が云つた通りにしろさう大したことは云つてゐないやうに僕には思へる。法律のことはよく知らないが、法網にひつかゝらない程度で、箕浦氏ののぞんでゐるだけの名譽は救ふことが出來はしなかつたかと僕には思へる。それが出來ないのなら、法網にかゝりたくないのは無理のないことだから、ある點でまかすのは無理がないと思ふが、少し法網を恐れすぎ、反對黨の攻撃を恐れすぎた。反對黨の攻撃を恐れすぎた例としては若槻氏が反對黨が箕浦氏を慰問しないことを攻撃したのに、反對黨がいたくない腹をさぐらなければ勿論自分だつて慰めにゆきたかつたのだが、自分をゆけないやうにさせておきながら攻撃すると云ふ意味のことを若槻氏は平氣な當然な顏して云つてゐるのを見て、自分はがつかりしたことがあるが、反對黨や新聞でほめてくれれば慰問に出かけるが、悪口云ふからゆかないでは友情ぢやないと思ふ。無理はないとも思ふが、少し弱すぎ卑怯である、男らしくないと云はれても答へることは出來まい。

若槻氏は決してわるい人ではない、又そのつめたい處が特色で面白い所でもあるが、總裁としてやつてゆくには如才なさすぎる。頑固な所がわるい意味でもない。日本人はどうもさう云ふ性質をよろこばない。世間的すぎる。

其處へゆくと融通はつかないが、箕浦氏の方が氣持がいゝ。箕浦訴へるのはいゝとは云へないが、しかし相手の出やうが、箕浦氏のやうな性質の人を怒らすのは無理がないと思へる。しかし

人間としては若槻氏の方が上かも知れない。ともかくいろ〳〵のことがわかり、それを上手に處理する才があるであらう。

箕浦氏はかつちりしてゐるが、少し狹いやうに思ふ。

しかし前にも云つたやうに僕は兩氏とつきあつたことはないのだし、よく知つてゐるとは云へない。たゞ新聞でよんだ時さう感じたのである。そしてうらにうらがあるかないかは自分はまるで知らないのである。

又箕浦氏が金をとつたことは、どんな理由でもほめられないことは知つてゐるが、しかしそのことについては別に何にも云ひたくない。金をとつてゐる人を皆、ふんぢばつて見た上でないと箕浦氏一人を批評することは出來ない。大概のことは比較的の話であるから。

○

自分はこゝで云ひたいのは、法網を恐れすぎると同時に、法網さへのがれゝばいゝ。どうしてゞものがれさへすれば、その人は名譽も社會的位置も失なはずにすむと云ふ考へだ。つまり尻尾はいくら出してもいゝ、つかまれさへしなければと云ふ考へ方だ。

この考へ方は僕は面白く思はないのだ。

僕が新しき村の仕事を始めて半年程した時、村にごた〳〵が起つた時があつた。自分はその原因をつかまへようとして、一人の女の人をつかまへてその人の云つた言葉を云つて、その人が云つたと云ふことを認めさせようとしたことがあつた。所が四人がゝりでいろ〳〵聞いて見たが、どうしても自分の云つたことを云つたとは云はなかつた。そして他のこと許り巧みにしやべつて、要點をごまかした。自分はその時、その尻尾をつかまさないうまさに一番おどろいて、之は一筋縄の女ではないと思つた。尻尾をつかまましてくれゝば大したものではなかつたのだ。むしろおとなしく尻尾をつかまして、わるかつたと云つてくれたら僕はすぐその人を許し又信用することが出來たと思ふのだ。しかし裁判所の前に出たやうに尻尾さへつかまれなければいゝと思つて、たくみにごまかす、そのごまかし方で、その人の人となり全部に僕は愛想をつかしてしまつた。今ならそれも無理はないと思ふかも知れないが、その時の若かつた、又そんな人に始めて逢つた自分は、その人にすつかり愛想をつかすより仕方がなかつた。

その人はごく小さい尻尾をつかまさないかはりに全身が尻尾以外のものではないことを示すことを恐れない愚人だつた。しかしそれは新しき村の話で、世間では全身尻尾であつても、つ

かまれないものは罰せられず、名譽を損ねずにすむが、どんな小さい尻尾でも尻尾をつかまれたものは、罪人になる。少くも不名譽になる。そして皆からあいつは馬鹿だと云ふとになる。

だから空々しい程嘘を云ふ者憎らしい程嘘を云ふものが信用出來る男になる。

殊に政治家は嘘をつくことゝ、とぼけることが必要になつてゐる。之は質問する方もわるいのであるが、答へる方はなほわるい、そしてわるい程信用される。仲間も賣らないことにもなる。あまりに何んでも正直に云ふものはボロを出し、あと始末に困ることになる。だから或る處までとぼけたり、嘘ついたりすることの必要を強いられる。それを又裁判に應用して、他の人の罪を重くしても自分は助からうとする。ちと罪がおもくなるが、聞く方が馬鹿だとも云へる。

人間の言葉には證據がない。嘘だとか、知らないとか云ふことを否定する證據がない。そして人間は又忘れることもあり、思ひちがひをすることもある者だから、云つたとか、云はないとかを問題にして裁判するのは危險である。しかしだから言葉は信じられないものとなつても困る。しかしごまかさうと思へばいくらでもごまかせるものだし、自分の云つたことを正確に覺えてゐない時が多い。だから若槻氏が覺えがわるく、まちがつたとしても、それを嘘だときめてしまふのは少し亂暴でもある。しかしそれと同時に若槻氏の言葉のいかんで箕浦氏が詐僞師になつては氣の毒である。箕浦氏のことはよく知らないが、僕の想像では嘘つきではないやうだ。それだけ尻尾をつかまれたとも云へる。

だから若槻氏の言葉いかんで詐僞か詐僞でないかきまるとあれば、詐僞でないことにするがいゝ。若槻氏の言葉だけでは證據不十分だから、その他の人も、若槻氏に迷惑を與へるのを恐れる人達であつて見れば信用出來ないのは當然だ。

人間の言葉を信じすぎて他人の罪をきめるのは多くの場合あやまりの多いことであり、注意すべきことである。箕浦氏が賄賂をとつたことは事實だらうが、嘘をついて金をとつたと見る必要はないと思ふ。

○

しかしこの事件について僕にかいてもらひたいことは、若槻氏が箕浦氏にたいしてとつた態度、又箕浦氏が若槻氏を訴へた態度のよしあしについてと思ふ。

自分は兩方が無理はないと思ふ。若槻氏の當時の位置、つまり總理大臣としての位置から云つても、箕浦氏を助けるより

も、政府のつぶれることを恐れる念の强いのは凡夫としてやむを得ないこと、思ふ。たゞせめるならあまりに用心深かすぎ、あまりに手を早く清めすぎて、罪を箕浦氏一人に荷はせるのにいそがしすぎた。しかしそれも無理がないと云へる。一寸苦しい位置である。それを冷靜すぎる態度できりぬけたのは、箕浦氏にたいしては友情があついとは云へない。

何處か少し氣持がわるい。しかし無理がないとも云へる。大概の人はあゝいふ態度をとることになると思ふ。たゞ若槻氏の持つて生れた冷たさが災ひしたとも思へる。

箕浦氏のとつた方法も、無理がないと思へる。うそつきにされてはいやであらう。詐僞したと云はれてはいやであらう。そして若槻氏の冷靜な態度で白を黑と云つてすます態度に不快を感じるのは無理がないと思ふ。

無理がないと云ふことはほめたことにはならない。しかし同情出來る、そして裁判と云ふものは隨分馬鹿氣たものと思ふ。わざ〳〵大じかけに噓をつかせる。そして噓をつく以上どうすることも出來ない。新聞で見てゐると床次夫婦の答へ方なぞも、どうもあゝ答へるより仕方がないだらうと思ふが、不愉快である。もう少しどうにかならないものかと思ふ。誰もおとし穴におちるのはいやだ。それで噓つくのがうまい者程、利口になる。罪をまぬかれて恥なき徒を製造する。

僕だつたら正直に云つてしまひさうだが、しかしそれで人や恩人を落し入れることになつては矢張り正直には云へまいと思ふ。しかし正直に云はないために他の人を、それも自分の仲間で、自分の黨派に屬する人をより不幸にするのはいゝことゝは云へない。

僕は證人の言葉に重きをおきすぎるのは考へものと思ふ。あんなことをくり返して時間をつかうのは馬鹿氣てゐる。箕浦氏のことは箕浦氏の云ふことを本當として罪をきめ、若槻氏の方は、あいまいにしておく方が利口だ。法律だつてその位いの融通はつくものだらう。

もう十分世間では若槻氏の尻尾を知つたのだからこれ以上せめる必要はない。しかしこの爲に箕浦氏にあらぬ罪名をきせるのはわるいと思ふ。

自分は法律のことは知らないが、この世のことはよく〳〵質のわるい人間でない限り、皆、無理がない處で動いて、そして無理がない同志でいろ〳〵の無理が出來てくる。この無理をなくすために法律があり、裁判があるのはやむを得ないことゝ思ふが、あまりに根ほり葉ほりしてゆくのはどうか。

ある所でぼかしてしまう方が利口ではないか。尤もこのぼか

しやうに裁判官の明不明があらはれる。明らかにすべきものは明らかにしなければならない。しかしどうせごまかすにきまつてゐることを、ごまかされることを承知の上で質問するのは馬鹿氣てゐる。それよりは證據不十分にして、罰せられる人の言葉をそのまゝ信じて罪をきめる方がいゝ。

どうしたつて正體をつかめない嘘に向つてムキになつてぶつかつてゆくのを見るのは見てゐて氣持のわるいものである。

○

それで僕の考を云へば、

箕浦氏は金はとつたが嘘はつかなかつた。

若槻氏は多忙すぎて云つたことを忘れたが松島問題を許可すると斷言したことはない。

その位いでいゝのではないか。

若槻氏はあまりにうるさくなるのを恐れすぎた。そして箕浦氏にたいする思ひやりが、少し不足してゐた。其處に缺點があればあるが、あの場合、誰もが落ち入りやすい缺點である。位置がわるいのだ。

箕浦氏が怒つたのは無理がない。怒らなかつたらふみにぢられたであらう。人間はある處までは辛抱するものだ。だがそれ以上は辛抱しない。その辛抱の程度が人によつてきまつてゐる。箕浦氏も出來るだけ辛抱しようとしたのだと思ふが、それ以上相手が蟲がよく出たので切りがないので怒つたのだと思ふ。箕浦氏の行動には裏に裏があるとは自分には思へないものである。

しかし今度のことで一番馬鹿氣てゐるのは裁判と云ふものが人間の言葉と云ふものを信用しすぎてゐることである。人間の言葉と云ふものはさう正確なものでなく、又人間と云ふものは嘘がつけるものだから、又思ひちがひや、忘れると云ふこともあるのだから、いくら當人がそんなことは云はないとか、云つたとか云つても、何處まであてになるかわからない。そんなものをつかまへて當人が白状すればそれを信じるといふのは簡單である。

事實我々は信用してゐる同士なら言葉も信用するが、しかし政治家の言葉なんか信用するものがあつたら馬鹿氣てゐる。濱口氏位はいくら信用が出來るかと思ふがそれもある程度である。そんなものを大問題にして裁判しようとするのは元々無理であり、馬鹿氣てゐる。言葉を信用出來ないのは殘念なことではあるが、今時ではやむを得ないことゝ思ふ。

だからいゝ加減にして箕浦氏を嘘つきにしない方が賢いと思へる。以上。（二七、九、四）

右と左

長谷川如是閑

日本の電車は左側から乘り降りするが、何處でもそれが普通らしい。尤もローマの電車は右側だつたやうだから、外にも右側の例があるかも知れないが、先づ左側が普通であらう。

左側から乘り降りする習慣は、恐らく馬車の時代からの引きつゞきであらうが、この習慣の成立には、右手の機能の發達が與つて力があつたらうと思はれる。さうしてそれは乘る方よりも降りる方を本位にして生じた習慣であらう。

多くの人種は大抵右きゝであるが、乘物から乘り降りするには、殊に降りる場合には、安全を保つために手を用ゐねばならないが、その場合、右きゝの人間としては、その手は左手であるよりは右手である方が有力である。しかも右手を使用するには乘物の左側に降りるが便利である。乘物が靜止してゐる時は何方の手でも異りはないが、然し、進行してゐる時、又は何時動き出すかわからぬやうな場合には、右きゝの人には、左側から乘り降りする方が、すぐと右手の使へるために、安全である。この場合、左手を使へば身體は進行と逆になつて危險である。電車がプラットフォームを用ゐる場合には、乘降が左であつたり右であつたりするが、その場合、進行中に右側から飛び降り飛び乘りするのは、左側からする

よりも熟練を要する。その場合は左手を使はねばならぬからである。

然し、電車の左側から乘降する習慣は、元來、道路の通行に所謂左側制度が發達した後をうけて、その結果成立した習慣に過ぎないので、强ち右手の結果ではないであらう。

それにしても、道路の左側制度の成立は、やはり右手の發達に原因したものなのである。

日本の左側通行は外國の例を眞似たに過ぎないやうに考へられてゐるが、然し、日本人は右手の發達を非常によく利用してゐる人種である。從つて、左側通行は、日本人に適した制度である。

通路の進行者が左側に偏するのは、右手の發達した人間の場合には合理的である。今日の左側强制は、混雜、衝突等を避けるための意識的態度であつて、その意味だけでは、左右何づれを採るも差支ないやうであるが、然し、日本人のみならず、右きゝの人種がその行動——生物學的の意味での——の傾向を自覺したならば、やつぱり左側通行を意識的に採るであらう。蓋し右きゝの人種は、本能的の注意を自然右側に向けるものだからである。右きゝの人間は、突然、何かの危害に出會つた時には、突差にその手を用ゐる必要に出喰はすことが普通であるところから、勢ひ機能のよりよく發達した右手を、先づ動員する。たとへば、危害が正面から來れば、突差に此方の身體を左へ廻轉して右側をその危害に當面せしめる。擊劍の姿勢——殊に西洋のフエンシングは——その本能的態度を利用した形である。日本の擊劍は、重もに手の機能に依賴して、攻守共に、手の關節の働きを主としてゐるが、フエンシングは、腰の關節を利用して、手の着彈距離を甚だしく延長せしめてゐる。それには、身體を、極端に左側へ廻轉せしめて、敵に、身體の右の側面を向けるやうにせねばならぬ。此の姿勢に於ては、明かに、鬪者は互に左側通行の姿勢をとつてゐるのである。日本の劍客も、警戒する時は、敵を自分の右方に置かうとする。右きゝの人間が、直ちに斬りつけるには、敵が左側に居られては不便である。刀劍などの鑑定を乞ふ場合には、必ずその人を右に見るやうに坐れ、といふやうなことがいはれる。それは、拔身を鑑定してゐる

人間か、所謂刀の鼻り等で、突然亂心して斬りつけることなどのある場合、直ちに防禦の姿勢を取り得るには、その敵を自分の右に置くのが、都合がいゝからだといふことである。

左側通行は、佗同士が通行する譯ではないが、右きゝの人間は、危害の場合に突差の注意が右側に集注される傾のあるところから、當然、自身を左側に置くやうに無意識的に行動するのである。

所が芝居の武士が、互に警戒しながら花道などで行き違へる場合に、右側通行が屢々行はれる。これは、實際を取り違へたものであらう。實際の武士を見たことがないので何ともいへないが、原則として、警戒者は必ず敵を自分の右に見るものであるとすると、警戒する者同士が正面から行き合つた時には、各、相手を右側に見るやうに避ける筈である。さうして行き違ふにつれて自身の身體を右へ廻轉させて始終敵を自分の右側に置いて之に備へるのが自然である。然し、この形は、兩者の進行の方向とは逆に身體をむけることゝなる。即ち敵を右に見るために、敵を自分の背後に進ませてゐるので、自分は前の進行の方向とは逆に向き直る姿勢をとらねばならぬ。反之、もし敵を左に見れば、自分は警戒のため右側を突き出しノ字形の姿勢で前通りの進行の方向をとつて進みつゝ常に敵を注視することが出來る。即ち敵と向ひ合ひながらすれ違ふことが出來るから、進行は妨げられない。故に出合つた兩者が、互に『進行』といふことに重きを置けば、自然、敵を自分の左側に通すことゝなり、則ち互に右側通行となる。芝居の武士は、恐らく屢この『進行』に重きを置くところから、右側通行となつたのであらう。

然し、實際の場合を考へると、警戒すべき相手と出會つた時には、兩者の心理は、もはや『進行』に重きを置くものではなく、『警戒』を主とする筈である。從つて進行に便利な態度をとるよりは、防禦に便利な態度をとる筈である。進行を主とすれば、芝居のそれのやうに、右側通行となるが、攻撃又は防禦を主とすれば、當然左側通行となる筈である。だからもし出會つた二人の武士が、互に攻撃するつもりも防禦するつもりもなく偶へに逃げ出さうとするつもりであつたなら、

必らず芝居のそれのやうに、右側通行となるであらう。たしか福澤諭吉翁だつたと思ふが、維新當時、洋學者として攘夷連につけ覘らはれた時分に、お茶の水邊を歩いてゐると、怪しい武士が向ふから來たので、大に警戒して近づいて行くと、向ふは無論警戒の態度をとつて、互にすれ違ひになるまで接近した刹那、福澤翁は一目散に駈け出したが、同時に敵も反對の方向に突走つたといふ話がある。この場合は屹度、福澤先生とその相手とは、芝居の武士のやうに、右側をとつたに違ひない。

武器も右利きの人種は、主として右手で用ゆる故に、前述の右を敵にむける姿勢はやはり必然である。たゞその例外は槍と弓と銃器とを用ゆる場合である。(子供の頃、鎖鎌を見たことがあるが、これは必ずしも右側を向けてゐなかつたやうに記憶するが、それはその人の癖であつたかもしれない。尤も長い鎖の先きの先きの分銅を敵に打ち當てるには、刀劍のやうに手の着彈距離の延長を必要としないのだから、右手は後ろに退いて鎖を廻はしてもいゝ譯である。)銃器でも、銃槍は右側を以て相對するが、これは刀劍の一種として用ゐられた場合である。

槍は、全く左側を以て對すること、フェンシングの正反對である。然し、これも右手の機能が主として働くことに代りはない。槍の場合は、右手は銃器に於ける火藥と及び銃身內の旋條と、同じ作用するもので、即ち槍の貫通力は一つは右手の力量と操作とに依るのであるが、その場合右手は、一方に於て火藥と同じく槍身を押しやる力であると同時に、旋條のやうに槍身を廻轉させる働きをするのである。又ある意味で、銃身の長さの機能をも右手がつとめる。といふのは、元來銃身の長さは、彈丸の進行を直線的にするためであるが、槍の場合には、右手は、槍身を押しやる力であると同時に、それを出來るだけ直線的に押しやることを要する。所謂、矢の離れと同じだとある。彈丸は進行の距離が長い故、曲線的とならない譯に行かないが、さうしてその曲線が有効に利用されてゐるが、槍の場合は槍身の進行は全く直線的であるこ

とを理想とする。これは矢の突き通す力が直線に於て最も効果的だからである。即ち槍の場合は、右の手は、銃器に於ける火藥と、旋條と銃身との三つの機能を兼ねるもので甚だ重大である。而して右手がこの重大な機能をつとめるためには、當然右手と敵から遠い方の位置に置かねばならぬ。即ち左側を敵に向けねばならぬ。が槍の場合、左手が決して重要でないのではない。槍に於ける左手は、丁度、銃器の場合と似て一層重大である。銃器に於ける左手は砲に於ける砲架の用をなすものだが、槍の左手も全くさうで、砲架が自由に砲身を上下左右に回轉せしめる支點をなすやうに、槍の尖頭を方向づける支點となすものである。しかも槍の場合は、左手はその外に、挺子に於ける支點の機能をもつ。挺子には、支點の所在によつて三種あるが、槍の場合の左手は此三種の挺子の各の役をつとめるのである。挺子の三種とは、（甲）支點が力の着力點と抵抗の着力點との中間にある場合と、（乙）支點が一方にあり、他の一方に力の着力點があり、その中間に抵抗のある場合と、（丙）支點が一方にあつて、抵抗が他の一方にあり、この中間に力の着力點がある場合であるが、槍の場合の左手の作用は、挺子のこの三つの作用を働くのである。この場合、左手は支點で右手は力であり、敵は抵抗である。槍はこの挺子の作用をするときは、敵を刎ね上げる場合と、打ち下ろす場合と、受け止める場合と、これらの作用を石突でする場合とである。

右のうち刎ね上げることが最も多く利用されるといふことである。通常太刀は上から打ち下ろすもの故、防禦も上から打ち下ろされる攻撃に對しては馴れてゐるが、下から打ち上げるのに對しては防ぎ惡い。『槍の穂太刀影上より來るは見安く、下より出づるは見えず』といふことがあるが、それは平生下より來るものゝ防禦に馴れてゐないためであらう。此の打ち上げる場合は、即ち挺子の（甲）の場合である。打ち下ろす場合もやはり同一であるが、然し、この場合は、左手は支點でなく力の作用をなすもので、その場合は、右手が支點の作用をつとめる。

次ぎに受け止める場合は、もし槍の柄の中心で受止めれば、その場合は即ち抵抗（敵の太刀）が中心に來て、支點

（左手）と力の着力點（右手）とが兩方へ分かれるのだから（乙）の場合である。又右突きを用ゐる場合――これも刎ね上げることを主とするのだが――は支點（左手）と抵抗の着力點（敵）とが兩方に分かれて力の着力點（右手）が中央に來るのだから（丙）の場合である。

槍に於ては右の如く左手は支點で、右手がやはり重要の働きをとげることに變はりはないが、その武器の性質から身體は左側を向け、從つて注意は左に偏するから、これは確かに右傾の原則例外である。

その例外の次ぎのものは弓であるが、これは、左手も右手も、所謂押手勝手の秘法として摩訶不思議の口傳が各流に於て汗牛充棟――口傳の汗牛充棟もをかしいが――で、とても片手間には覗けない。が、弓が現在のやうに各國とも左を押手とし右を勝手としてゐるのは、やはりより發達してゐる右手に重要な機能を與へてゐるものと見ねばならぬ。

弓に於ける手の働きは甚だ微妙で殆んど意識的に何うすることも出來ず、全く無意識的動作の熟練による外はないのであるから、左右の何れの手かを意識的に偏重することは、弓に於ては禁物となつてゐる。然し「離れ」を何流でも最も重大視してゐる所から考へると、やはり發達した右手の機能により多くたよつてゐるのである。そのために現在のやうな姿勢をとることゝなつたと見ていゝ。されば弓の姿勢も亦右手の發達を基礎として定つたものである。

次ぎに銃は、槍に於けると同じく、左手はたゞ支點であるが、しかし銃に於ては、右手は槍や弓のやうに重大な機能をもつものではなく、たゞ指頭の些細な機能的の力を用ゐるだけである。銃に於て重要な機能をもつものは眼である。而して銃も亦弓と同じく右を後ろにし左を前にする姿勢をとつてゐるが、これは右の眼を使用するに必然の姿勢である。もし反對の姿勢をとつて右手を支點とすれば左の眼を用ゐねばならない。されば銃を用ゐる姿勢が現在のやうであるのは、右の眼を用ゐるためである。人間は手に於て右利きである如く眼に於ても右利きなのであらう。尤も昔の支那人は『左眼日を生じ、右眼月を生ず』などゝいつて、左の眼を貴んだやうだが、然し弓はやつぱり右の眼でねらつてゐた。

もし眼が右きゝであるとすると、これはやはり手の右利きに隨伴して成立した現象であらう。注意が右に澤山偏重されれば眼も右が發達する譯である。すると耳も右の方が聞える理窟だが、所謂『耳を傾ける』といふ場合に主として何方の耳を傾けるものであるかは明かでない。

所で訝かしいのは、足である。私は子供の時分に、學校の體操の先生が『左、右、』と呼ぶのををかしく感じたことを思ひ出す。通常『右、左』と覺へてゐるのに、體操の先生だけがその反對をいふのを變に感じたのである。足だけは左がさきに動き出すものらしい。その理由はその道に於て何ういふ風に說明されてゐるか、知らないが思ふに足の場合に始めて動き出すのが左足である理由は、恐らく、右の足が多くの場合、旣に多少前に出てゐることから起つたのではあるまいか。即ち普通われ〳〵は停止してゐる場合に正しく兩足を列べてゐることはめつたになく、兩方の足が前後してゐるのであるが、その時右の足が前に出てゐるとすると、步き出す時には先づ左足を踏み出すわけである。體操の先生の『左、右』の起原はその邊にあるのではあるまいか。

然らば、これも亦右利きの結果で、右の手がよりよく働くために、自然右足が前に出てゐるといふのが常態となり、その結果、步き出す時には先づ左の足が出るといふことになつたのである。

『右』の優越といふ所から、左に對して右が優位をしめるといふ支那の習俗となつた。日本は左を優位とするといふ說があるが、然しそれは神代の話で、一般の習俗はやはり右を尊んだ。西洋では、獵犬を左側後方に從へることになつてるし、所謂『その右に出づる』のを、支那に同じく優越視するものであることが察しられる。然し、右を政府黨とし左を反對黨とする習慣は、一七八九年のヴェルサイユの國民議會で當時のフランスの兩派の座席が偶然さういふ風に分かれたのが、後の例になつたのだといふことで、左手右手の機能の區別とは一切交渉がないことはいふまでもない。

世界の市街電車の多くが、左側から乘降することが、人間の手の右利きであるといふ事情から出立したものであるといふ私の說は、恐らく大風がふけば箱屋が繁昌するといふ落語家の說と同一視されるであらうが、然し、この事は、その落語と共に、人間の行動のすべて、從つて社會の組織、制度、習慣等のすべてが、網の目のやうに互の關係に於て結びつけられてゐて、そのどの部分も、決して全體との關係を離れて成立してゐるものでないといふことを考へさせる事實である。

それを考へれば、人間の行動が、從つて社會の組織、制度、習慣等が、ある變化過程をとらんとするに至つた場合には、單に、その變化する當の事物にだけ、その變化過程が起つたのではなく、それが關係するすべての事物に於て變化過程が進行してゐるといふことが想はれるのである。

もし世界の市街電車が、右側から乘降するやうになつたならば、その世界では、右手と左手との機能に變化が起つたのであるといふことを考へねばならない。同時に又、目下の左右の手の機能に變化が起つたならば、電車は早晚右側から乘降するやうになるであらうことを考へねばならないのである。

然るに又、左右の手の機能が變つたに拘らず、電車は依然としていつまでも左側から乘降する習慣をつゞけることがあつたならば——さうしてそれは有り勝ちの事だ——手の機能と電車の乘降との間の聯絡の中間に於て、兩者の關係を妨げる事情の存在することを想はねばならぬのである。

そこで、人間の行動に向つて、從つて社會の組織、制度、習慣に向つて、意識的の作爲を加へんとするもの、即ちある變革を企てるものは、あらゆる關係に於て、變化過程が如何に進行してゐるか又はゐないかといふことの確かな認識から出立しなければならない。

さういふ事實ほど人間を焦ら立たせるものはない。それは全く人間に必要なことだが、しかしそれが同時に人間を殺して

しまう。人間の要求は、どこかの一部に起つた變化過程に刺戟されて猛烈に湧き起る。しかるに意識的の努力は、その變化過程の全關係を認識しやうとする努力に全領域を占領され、衝動的要求は、いつのまにか智的要求に産み直ほされる。人間そのものゝ要求は、單なる智慧袋の要求に變化させられる。人間的要求たる科學、哲學、藝術、宗教は、單なる科學的要求、哲學的要求、藝術的要求、宗教的要求となり、公式と、認識論と、耽溺と、法悦とが、人間最後の目的として求められ且つ充たされる。その時、人間は何うなる？依然としてもとのまゝである。然らざればもつと惡くなる。

『哲學者が爭論する間に、饑餓と性愛とが世間の問題を解決する。』電車の乘降と右手の機能との關係をとく私を笑ふものを私は笑ふ。さうして彼等にいふ。私は現に在る事柄の廻りくどさを認識してゐるのだ。君方は現に無い事柄の廻りくどさを創造してゐるのだ。（終）

豫約募集

カール・マルクス著
高畠素之譯

資本論（改訂廉價版）

マルクスの資本論は有史以來人類の科學的努力が產出した最大勞作の一だ。刊行六十年にして、時代の生命を現實的に燒熱し、時代の思想を樞軸的に回轉せしめたもの、マルクスの「資本論」の如きは稀である。唯だ其の浩瀚、難解、高價の故を以て一般に讀まれざるを遺憾としたが、譯者は今回其の明快なる飜譯を更に原書と嚴密に對照加筆改訂し、本社之を世界一の廉價版として刊行す。玆に始めて求め易く、讀み易からしめた。此擧聊か本邦文化に對する貢獻として自負するところ敢えて諸賢の御援助に俟つ。

飜譯の大改訂・世界一の廉價版・『資本論』初めて民衆に解放さる！

世界最廉價の資本論 全三卷八册八圓

邦譯初版六十五圓。改譯版廿五圓五十錢獨逸原本十三圓英譯十五圓七十錢佛譯(紙裝)八圓本書は上製で七圓五十錢で讀める。

豫約略規

（配本）昭和二年十一月第一册刊行每月一册宛配本
（體裁）四六判上製各册約二百八十頁
（申込金）金壹圓（全拂の方は不要）
（會費）每月拂壹册金壹圓、全拂八册分金七圓五拾錢
（送料）一册に付金十二錢、書留は十錢增
（〆切）十月三十一日限

內容見本

資本論の讀方、マルクス傳其他の重要記事滿載の內容見本。進呈

東京市麴町內幸町一ノ三
改造社
振替東京八四〇二番

婦人

◆秋季特輯◆ 「燈下の讀

■首都の雌豹……三上於菟吉

□アンネット……中條百合子
□おビ一ネ……吉屋信子
□ザ閨……高群逸枝
□心に殘る女主人公……山田邦子
□狹き門のアリサ……岡本かの子
□小說の中の女性……柳原燁子
□情の女……茅野雅子
□宇治の宮……時雨
□ナターシャその他……岡田嘉子
□ルメジオス……若杉鳥子

愛讀小說の女主人公

女の復讐

□メロン夫人の復讐……佐々木味津三
□或る女工の復讐……樺山千代
□子供と幸福に代へて……伊福部敬子
□復讐の復讐……平林たい子
□或る女の手紙……木蘇穀

■新設 繪畫講座……松本亦太郎

■婦人に薦めたい書物……卅五名家

■生活を通して觀る 樋口一葉女史……山田邦子

■一九二七年度の挿話……牧逸馬

■スカーフの掛け方と持ち物の配色……三須裕

■おせッかい……大澤豐子

■海からの悲しい土產……水谷溫

■一本の竹切……伊福部敬子

■心臓問答△△△△△秋に多い小兒病……長尾美知

綺談四選

■死者蘇生譚……小酒井不木

■伴侶結婚の話……清澤洌

■羅馬での失敗……藤原義江

■或る牧師の話……央村能二

■憂鬱な愛人……松岡讓

公論

物號

◆特價 壹圓◆送料 參錢

花占ひの頁……河井酔茗
漫畫）新東京女風景……堤寒三
木檜代議士に寄す……林きむ子
編輯室より（僕のページ）……島中雄作
逸話、女實業家チーツ夫人……古莊國雄
竹枝調（歌）……吉井勇

創作四篇

顯現……谷崎潤一郎
去年の雪今いづこ……佐藤春夫
かよと復讐……水守龜之助
愚人の唄……正宗白鳥

家庭教師招聘是非

兒童の村小學校……野口援太郎
東京女高師附屬小學校長……北澤種一
靈岸小學校長……椎名龍德
慶應義塾幼稚舍主任……山崎恒吉
明星小學校長……森田虎次郎
成城學園主事……小原國芳
富士見小學校長……津田信雄
高師附屬小學校主事……日田權一

弗の女身像……佐々木指月
對人關係の一考察……倉田百三
思惟と孤獨……吉田絃二郎
ロマンス考……木村毅
チャプリン論……牛原虛彥

昭和異聞盜嫁物語……大泉黑石

家庭電化

A電化の家に住みて……山本あや子
B不經濟な臺所電化……植村まり
C缺點の見出せぬ便利さ……婦人記者

今月の問題……吉野作造

◎政府の金に賴り過ぎる◎富豪が金を寄附する動機◎寄附を當にする社會事業は駄目

兄弟姉妹の情味

兄・弟・姉・妹……有島生馬
女の中の男一人……南部修太郎
ひとりッ子……堺眞柄
三人姉妹……柴田秀子
男の中の紅一點……安成くら子
男ばっかり九人……木山吉造
一人息子の氣焰……加宮貴一

避姙器具は子宮癌を誘發する……ドクトル渡邊孝樹

京市麹町區丸の內ビルヂング七階。振替・京三四番・電話丸の內二〇六 中央公論社發行

萬有科

我國唯一最大の綜合科學書

=正篇六卷既刊・續篇八卷發行=

日本に於ける唯一最大の綜合科學書の完成！　之れ我等が本大系刊行の唯一動機であつた。幸に我等の此理想は茲に其大部分を實現し得、第一期正篇六冊の完成を告げ、續篇八冊の刊行を發表するを得るに至りたる事は、我等の欣快に堪へざる處である。正續併せて十四卷之れ現代我國が捧げ得る最高最大の出版物たる事を確信する。

見よ權威あ

正篇（六冊）

▼第一卷▲

- 科學總論　醫學博士　永井潛
- 天體と宇宙　理學博士　山本一清
- 氣象　理學士　國富信一

▼第二卷▲

- 地球の歷史　理學博士　早坂一郎
- 植物　理學博士　三好學
- 人間の話　理學博士　石川千代松
- 遺傳　ゴールドシュミット

▼第三卷▲

- バクテリア　醫學博士　竹內松次郎
- 海の生物　農學士　內田惠太郎

▼第二卷▲

- 都市計畫　工學士　石原憲治
- 上水及下水　工學博士　草間偉
- 建築　工學士　岸田日出刀
- 公園と庭園　林學博士　田村剛

▼第三卷▲

- 道路　工學博士　牧彥七
- 橋梁　工學士　田中豐
- 鐵道　工學士　米澤政治郎
- 通信　工學士　稻田三之助
- 自動車及航空機　工學士　內藤邦策

▼第五卷▲

- 醫學　醫學博士　杉田直樹
- 衛生　醫學博士　暉峻義等

學大系

る執筆者と此内容

家畜動物　農學士 橋本重郎　理學士 平岩馨邦

▼第四巻▲
海洋の科學　理學博士 野滿隆治
地球の話　理學博士 松山基範
岩石・鑛物　理學博士 渡邊萬次郎

▼第五巻▲
機械　工學士 東條喜一
磁氣と電氣　理學博士 三枝彦雄
物理　理學博士 石原純

▼第六巻▲
進化論　理學博士 石川千代松
生物の相互關係　理學士 内田亨
食物と榮養　醫學博士 永井潜
化學　藥學士 貴志二一郎
藥の科學　藥學士 伊藤靖

續篇（八册）

▼第一巻▲
人類及人種　文學博士 鳥居龍藏
人文及自然地理　理學士 田中薫

體育學　醫學博士 吉田章信
實驗心理　文學士 増田惟茂

▼第六巻▲
工業化學・化學工學　工學士 永井彰一郎　工學士 西澤勇志智　工學士 内田俊一　工學士 友田宜孝
色染と紡績　高工教授 菱山衡平

▼第七巻▲
採鑛冶金　工學博士 宮崎虎一
印刷　工學博士 矢野道也
寫眞　工學士 鎌田彌壽治

▼第八巻▲
農學　農學博士 稲垣乙丙　農學士 難波得三　農學士 平尾菅雄　農學士 植田宰輔　農學士 柴田文平
林業　林學博士 上原敬二
水産　農學士 内田惠太郎

内容見本
ハガキ申込み次第無代進呈す

▲四六倍版、背及角皮、クロース表紙、天金、用紙アートペーパー、九ポイン組ルビ附、一册六百頁以上。
▲正篇は申込みと同時に配本、以下毎月一册宛配本、續篇は昭和二年十二月より隔月一册宛刊行、一ヶ年四ヶ月を以て完結す。
▲申込金五圓、每月拂は十圓宛、一時拂は正篇は索引共金六十圓、續篇は索引共金八十圓、正續兩篇申込は金百三十五圓。

申込締切 **十一月五日限**

東京市神田區錦町一ノ一九
萬有科學大系刊行會
振替東京七〇六六七・電話神田二六五六番



石に撃たるゝ女

吉田絃二郎

この二三日また不思議に明石の精神病院の赤い夾竹桃の花の窓がかれの頭に泛かんで來たり、「瓊子はきつとわしのところにもどつて來るにちがひない」といふやうな雜念が頭をもたげたりする日がつゞいた。しかしもう今ではそんな考が起きて來てもそれはすぐに霧のやうに消えてしまうほどかれは靜かな心の世界を見出してゐた。

「鳥飼はん、今朝いなはりますかい？」

いつも京への用足しを辨じてくれる鞍馬口のおかな婆さんが手甲脚袢に前垂れを掛けて大原女のやうな甲斐々々しい風をして濡れ緣に腰を卸した。

かれは振りかへつて聲の方を見た。

「お婆さんでしたか。今日何です？

「あんた今日ほら時代祭！」おかな婆さんは頓狂な聲を出した。
「あゝなるほど……」
「あんたがはじめてこゝの庵寺へおいでやしたのが、ほらおとゝしの時代祭の日でしたやろ。」
「さうでしたなあ……わしもちやうどまる二年この寺に厄介になつとりますんぢやなあお婆さん。」輕い溜息をついた。
「早いもんどす。あんたはんこれで三度目の時代祭やなあ。」
「わしも餘つぽど坊さまらしうなつたやらうな、はゝはゝは……」
「そりやもう立派なばゝはゝは……それでけふはやつぱりいちんち……」
「わしもこのごろは京都まで出かけるのもいやになつたんぢや。大文字の夜加茂まで出かけたきり……」
「ほんまに…………」
「あのうや〳〵した人ごみのなかはわし、もうよう行かんがなはゝはゝは……」
「そいぢや何かわたし御用がありましたら。」
「さあ、いつもお氣の毒ぢやな。」
「何であんたはん……」
「ぢや遠慮せず頼むがなお婆さん、男の子の綿入を拵へてやりたいと思ふたので、こなひだ岡がたづねてくれた時呉服屋へ頼んで置いてもらつたんぢや。あの出町のほらいつかわしの單衣を仕立てゝもらつた店、あすこに立ち寄つて出來てたらあんたかへりに受けとつて來ておくれ。」
「あんたはんのお國のお子さんに！おう〳〵……」おかな婆さんはちよつとしんみりした句調でたづねた。

「あゝ……こゝに來てはじめてだよお婆さんお布施がすこしたまつたのではゝはゝ……」
「ぢやまたかへりに寄せさしていたゞきます。」おかな婆さんは庵寺を出て、そこから半丁ばかり小徑を走つたところの鞍馬道に置いてあつた荷車の方へ近づいて行つた。そこには今年の冬から兵隊に取られることになつてゐるかの女の末つ子の敬三が待つてゐた。
幸福な母と子は輕い轍の音を立てゝ鞍馬道を京の方へ急いで行つた。

×

鳥飼は簡單に朝の食事……といつてもまつたく簡單な食事で、鹽辛く漬けられた大根の葉とたゞ一碗の麥飯だけのことであるが……をすますと、ふたゝび坐つて經を誦みはじめたが、けふは幾ら經を誦んでゐても心が落ちつかないやうなので途中で止して緣側に出た。
すつかり秋になつてしまつた。
今しがた幸福な母と子が京の方へ急ひで行つたばかりの白い路のほとりにはまだ露が下りてゐた。
こほろぎが草の下で鳴いてゐた。
かれはしばらく山を眺めたり、どんよりと曇つた京の空を見たりしてゐた。
時代祭、甲冑をつけた馬上の男や、旗指物や、鉾、楯を持つた人々や、それらの行列をながめてゐる四條あたりの大通りの群集やがかれの頭に泛かんで來るのであつた。
「せつかくの時代祭ぢやないか。けふ一日だけゆつくり見物してから、明日寺に入ればいゝぢやないか。」
二年前の岡の言葉がよみかへつて來た。

かれはその朝、膳所の病院から出たばかりですぐに鞍馬口の方へ行くことにしたのであつた。

かれは醫師の注意でまだその時は色眼鏡をかけてゐた。三條の橋の袂を通るころであつた。橋のすこし手前の小ひさな郵便局のなかゝら一人の男が甲冑をつけて出て來た。そして柳の下につながれてゐた馬に乘つた。馬はその男に比較して背が低く痩せてゐた。男は馬の上で卷煙を喫んでゐた。

人々は四條の方へ飛んで行つた。

「どうしてもわしはけふ寺へ入る。明日までは待てんのぢや。」かれは無理に岡を突つ離すやうにして鞍馬口の方へ急いだ。

たゞ一冊のお經と、聖書と、易學に關する二三冊の本と、病院から貰つて來た藥瓶と、もう鞍馬口では霜さへ下りたといふのに着替への袷一枚持たず庵寺へ急いだのであつた。

かれはその朝のことを思ひ出した。

かれはその朝京都の町を歩いてゐるのが自分ながら恐ろしかつた。かの女と別れてから半年以上も病みぬいた揚句に決心した寺入りが、或ひはその一朝で裏切られてしまうやうなことがありえないとは、かれ自身どうしても信ずることはできなかつた。

そのころは今よりももつと視力は衰へてゐた。それでもかれは京の町を歩いてゐる若い女を見るごとにかの女のことを思ひ出さずにはをれなかつた。

「嬰子わしはお前の一切を赦す。わしはお前が幾人の男を拵へようともうお前を氣の毒だとこそ思へ、怒りはせぬ。わしは今こそ父親の心でお前に對することができる。」すくなくともかれはかの女と別れてから半年の病院生活のうちにそれだけの寛容な心持ちだけは見出すことができたと思つた。

「故郷の姉妹たちや親戚の者にあはす顔もない。わしの健康はふたゝび社會に出て働くには適しない。わしはこのまゝぢつと眠つてゐたい」かういつた心持ちからかれはその朝鞍馬口の庵寺にはいる決心をしたのであつた。

かれは自分の決心を信じた。時としてはかれ自身の現在の心を人間のすべての罪悪をゆるすキリストや釋迦の心にもくらべて考へることもあつた。しかしそれと同時にかれはその半面になほ女に對する復讐の姿がかれの心の底にいぶりながら燃えてゐるのを否定することはできなかつた。

かの女の髪を掴んで引き摺りまはした刹那のかれ自身を想ひ出すことによつて、かれはかれ自身のうちに潜んでゐる獣のやうな或るものを恐れた。

肉體と一緒に自分の決心にも黒い法衣を着せることが必要であつたし、またそれは大急ぎでしなければならないことであつた。でないとかれの心はやはり東京へかへつて二度と京都の郊外の庵寺にはいつて靜かに自分の姿を見つめるといふやうな機會は永遠に失はれるかも知れなかつた。

四條の或る町角に來た時岡は病院を出たばかりで疲れてゐるだらうからタキシイにしようといつてくれた。岡のやさしい心づかひを涙がにじむほどうれしいと思つた。しかしかれはもうけふからは托鉢僧か乞丐法師になつたつもりで庵寺まで歩いてゆくのが一番正しいことだと思つた。

京の町の出外れに近づくにつれて友禪を洗つた小川の流れがひどく染料に濁つてゐたり、萩やカンナの秋草などが昔ながらの寂びた庭に咲いてゐたりした。

不自由な眼にも秋の空は澄み、深みかゞやいてゐた。

過去三年の間たゞ一人の女を愛するがために、憎むがために、人間のあらゆる獣的なあさましさに生きつゞけて來た自分の生活を振りかへるだけでも、かれは白い埃の道の眞ん中にしやがんで懺悔をしなければならぬやうな氣にもなるので

あつた。

稻の穗が重く垂れてゐた。眞つ赤な鼻綱をつけた黑い牛がのそくさと街道を京の方へ步いて行つた。自働車が走るたんびに恐ろしい砂埃を浴びせた。しかしかれはすこしもそれを不愉快には思はなかつた。もつと〳〵頭から埃を浴びせかけられるのがかれのやうな人間には當然のことのやうに思はれるのであつた。

今の世の中では男も女も戀愛に對しては昔とはまるでちがつた考へ方を持つやうになつて來た。羞恥だの世間だのといふことを考へるのは時代遲れのやうに思はれて來た。今日の世のなかで妻に裏切られたのを恥ぢて寺にはいつて法師になる。あまりに時代錯誤のやうに思はれないこともない。お芝居のやうに考へられないでもない。しかし「わしにはそれより他にゆく道はない。」子供のころからだが弱かつたので一度明石の奧の山寺へ二年ばかりあづけられたことがあつた。そんなことからして寺といふ感じはかれにはまた特殊な親しみのある魅力を持つてゐるのであつた。そんなことがかれをして古風な失戀者の行き方を選ませたのであつた。

×

しばらく鞍馬道をながめてゐたかれは庵寺のうしろにまはつて行つた。

庵寺といつてもまつたくながい間の無住でたゞわづかに八疊の一間きりであつた。いつの間にか佛像さへ盜まれてしまつて、もと佛像が安置されてあつた跡には燃えさしの榾が二三本放りこんであつた。かれがこゝに住むやうになつてから膳所の寺から岡が恰好な佛像を運んで來てくれた。實際足の踏み場もないといつたほどの荒れ方であつた。かれはたゞ一本の柱に雜巾がかゝるやうにするためにも十日も十五日も背を折らなければならなかつた。眼の不自由なかれにとつてはその荒れはてた庵寺一つ人が住むやうにすることはなか〳〵の苦行であつた。しかしかれはそれを喜んだ。

あの女に魂を奪はれて醜い生活を送つた罪劫消滅のためだ、然やうだいや、故郷の親戚たちに對しても、現在の身を苦しめ抜くことが一番の道だと考へてはかれは朝夕の勤めの他には廃寺の修理やら、寺の周圍の手入れやらに骨を折つた。冬ちかいころだつたので裏の山の枯木を折つては冬の仕度をしなければならなかつた。草に蔽はれてしまつた裏の山にはいつて山鳩の聲をきゝながら枯枝をあつめることもかれの心をしづめるに適當な仕事の一つであつた。かれは何といふことなしに山のなかで二三度ほとりと涙を落したことがあつた。

冬がふかくなるにつれて、比叡の峯には白い雪がつもるころになれば寺の横の小川は枯れ／＼になつた。草は深い霜に枯れてしまつた。かれはかち／＼に沍てついた川の中から小石を運んでは寺のまはりのぬかるみのなかへ敷いた。寒い山おろしが二三日も打ちつゞいた後の日などめづらしく空が晴れて、生駒あたりの山々までがはつきりと眼に浮かんで來るやうに思はるゝ靜かな日があつた。かれはそんな日にはほとんど終日川から小石を運んでは寺から街道までの小徑に敷いた。そのやうな單調な勞役はひどくかれの心をよろこばせた。

裏の方へ歩いて行つたかれはけさも栗の實が昨夜の風で落ちてゐるのを見出した。かれは勝手口から笊を持ち出して落ちてゐる栗を拾ひはじめた。

まだ眼がすつかりはなほつてゐないので、すこしはなれたところにある栗を見出すことはなか／＼困難であつた。それでも十分ばかりもさがしてゐる間にかれはほとんど小ひさな笊いつぱいの栗を拾ふことが出來た。

かれはこの數日前から毎朝拾つては栗の實を貯へて置いた古い箱をかゝへて南の縁側へ出た。

蟲がつくといけないので、かれは古新聞を箱の上にかけて置いた。そして毎朝ひとつづゝ丹念に選り分けてはふたゝび古箱のなかに入れて上から新聞紙をかけて貯へて置くのであつた。

「松男と梅二郎がこの栗を送つてやつたらどれほどよろこんでくれるか知れない。」かれははぢけるほどに實つた艶々し

い栗の皮を撫でながら故鄕に殘して置いた二人の子供のことを考へるのであつた。
故鄕の子供たちへ栗を送つてやる。たゞそれだけのことを考へたゞけでもかれはこの數年來に、はじめて見出された靜かな自分の心の變化について感じないではをれなかつた。
かれは故鄕に先妻の子二人を殘して東京に出てからこつちほとんど十年間その子供たちについて父親らしいやさしい思ひやりを持つたことが幾度あつたであらう。殊にかの女と一緒になつてからは。
このころになつてはじめてかれは愚かな父親らしい自然な心を見出すことが出來た。
かれは南の濡れ緣の上に並べられた栗の實を日にかざしては不自由な眼で選りはじめた。
山鳩は裏の赤松の林に鳴いてゐた。
かれは聽くともなしに山鳩の聲を聽いた。
たれか堂のうしろから近づいて來るものゝ氣はひがした。たしかに跫音を偷んでかれの動靜をうかゞツてゐるやうな氣がしてならなかつた。
「まだわしの頭はすつかり癒えてはゐないのか知ら?」さう思ふとかれは寂しかつた。
膳所の病院で湖の水をながめながらすごした夏の暗い生活が思ひ出さるゝのであつた。
「あまりひどい精神上の打擊に面したのでかなりひどい神經衰弱にかゝつたのですよ。だけどもう大丈夫です。寺にはいつて一年でも靜かな生活をされることはいゝことです。」
若い院長の言葉がよみかへつて來た。
ずつと以前に明石の精神病院の窓で見た赤い夾竹桃の花が泛かんで來た。
「實際あのころの君はまるで狂人だとしか思へなかつた」とも或る友人はいつた。

「まつたくわしは發狂してゐたのかも知れぬ。」さう思ふとたまらなく寂しかつた。狂人といふ言葉ほどかれにとつて恐ろしい言葉はなかつた。

庵寺にはいつてわづかに過去の自分を振りかへつて見るばかりの生活——それが今のかれの生活のすべてゞあるが——自分では自分のやうな過去を持つたものにとつては一番適當な正しい生き方であると思つてゐても、他の人から見れば「あの男は氣が狂つてゐるのだ。だからあんな芝居じみた生き方をしてるのだ」とかう判斷されたとしたら、そしてそのやうな世間の人の判斷が正しくて、自分がたとへ狂人でないまでも、神經衰弱のために間違つた生活をしてゐるのであるとしたら！

まつたくこんな考へ方は耐らないことであつた。

ともすればさういつた、現在の自分の生活意識に對する不安が青空をかすめる雲翳のやうにかれの靜かな心の上に暗い陰を投げかけることがあつた。そして屹度そのやうな刹那にはかの女の白い顏や、白い顏に比べて恐ろしく黒い肌や、哀訴してゐるやうな、冷笑つてゐるやうな眼が映つて來るのであつた。

かれは一つの大きな栗の實をかゝへたまゝ遠い世界の幻を追つてゐた。

×

足びきの山暮れゆけば路悲し古里なればわれかへるなり（或る人のよめる）

かれ自身の愛誦の歌が唇頭に泛かんで來た。

三十三歳の秋であつた。朝鮮から滿洲さらに台灣といろ〳〵な勞働者の群にはいつて四年振りで故郷に歸つたをりのかれの歌であつた。

六歳にしてかれはよく四書、小學を讀んだ。かれは神童として郷黨のほこりであつた。しかしかれは結婚して二人の子の父となつたころから、或る時は廣島の教會まで十餘里のところを馬車に乘つたり汽車に乘つたりして、夜中から出かけて行くやうなことをした。片山潛氏の「我が社會主義」などを讀んでかれの所有になつてゐた山や畑地を捨てゝしまうといふやうなことを主張したりした。二十九歳の夏かれは精神病者といふことで無理やりに明石の海岸の精神病院に入れられた。

精神病院の生活はかれにとつてはかへつてなつかしいものであつた。病院は淡路島を水一つへだてゝ眺むる明石の海岸にあつて、窓を明くれば白い砂を弄ぶ波濤が青々として淡路島までつらなつてゐた。夾竹桃の花が玻璃窓を掩ふて眞つ赤に咲いてゐた。

わづかに一ヶ月の病院生活の後かれは親戚の男の手にわたされた。かれは故郷にも立ち寄らないで裸一貫のまゝ下の關行きの汽車に乘つた。

四年目に飄然として故郷に歸つて行つた時、もうかれの妻はゐなかつた。二人の男の子が姉の手で養はれてゐた。中國特有な花崗岩の砂に掩はれた低い山、そこには稚松が疎らに生えてゐた。道も白かつた。川の水は涸れてゐた。四年振りの故郷の人々はかれを異邦人のやうな目で見た。かれは求むべくかへつて來たあたゝかい言葉をすら見出すことはできなかつた。

「狂人だよ、わしは狂人だよ、また明石にでも歸つて往のうよ。」

「さうだ、お前は狂人だよ、精神病院がちやうど宜えわ。」故郷のたれかれの眼はかういつてゐるやうに思はれた。

「それにしても何でわしを最初に精神病院に押し込んだのだ。」わづか一ヶ月の病院生活であつたが、それがよし醫師や故郷の人たちの考へちがひからであつたにしても、一度精神病者らしいと判斷せられたといふことが、いつもかれの生涯を

通してのかれの心の曇りであつた。

「そんなことは斷じてない」といふ明るい斷定のうしろには必ず「或ひはさうかも知れぬ」といふ暗い寂しい肯定が附き纒ふて來るのであつた。

「もしかするとわしは一生狂人のまゝで生きてゐたのかも知れない。幸にして今日のサイエンスではわしが狂人であるか、常人であるか、判斷する材料がないばかりに、わしはかうやつて都會の眞ん中を自由に歩いて働いてゐることができるのかも知れない。」耐らないことであつた。

×

七月の空は大都會の屋根をも、窓をも、高い煙突をも、不規則な電柱をも焦きつくすほどに燃えてゐた。監獄のやうな高い煉瓦の壁の下には向日葵がひよろ／＼と伸びてゐた。どこかで若い職工たちの笑ふ聲が聞えた。機關室の方からは忿に飛輪（フライ・ホイール）の風を切る音がはげしく呻つた。

「わたしが鳥飼で……」

「わたくし先日お手紙をいたゞきました山脇でございます。無躾な手紙をさし上げましてまことに失禮いたしました。」女はたいてい俯向きかちであづた。

かれは一眼見て美しい女だと思つた。その刹那かれは女に擊たれてしまつたのであつた。四十一歳の男としてかれは恥づべきことだとは思つたが。

「先日は叔母がお伺ひいたしましていろ／＼お話を承りましたさうで。」

「叔母さんがおいで下さいましたが、どうもあんなお上品な方にわたしの家のやうながさつな家の面倒を見ていたゞきま

すのは痛み入りますから。」

「ではもしおさしつかへさいなかつたらわたくしのやうなものでもおつかひいたゞけませんでせうか。」女は心持ち顔を赤くした。

「どうも不自由で困るものですから新聞に廣告は出しましたが、みなさんのやうな方に來ていたゞいては……」

「でもわたくしどんな御用でもいたします。それに先生のお書きになつた（無我の愛）つて御本あれを叔母がいたゞきましたのを拜見しましてからわたくしはぜひ先生に……」女は初心らしくオペラバツタの紐をいぢつたりしてゐた。紐は薄黒く汚れてゐた。女はボイルのやうな浴衣を着てゐたがひどく色も褪せて、素足から裾にかけて眞つ白に埃を浴びてゐた。汗がにじみ出て肩から帶のあたりがぐつしより濡れてゐた。女は時をり暑さに耐へないかのやうに喘ぎ〳〵言葉をつゞけて行つた。女があまり健康體でないといふことはすぐに想像された。

「で、たゞ今御厄介になつてゐらつしやるといふお住ひは？」

「大井でございます。」

ちよつと暗い影がかれの心をかすめて行つた。こないだ叔母といふ女がたづねて來た時は本所の或るお邸だといつてゐたから。しかし女と話してゐる間にかれはその暗い影をも忘れてしまつてゐた。

「御主人は？」

「連れ合ひはもうずゐぶん前に亡くなりました。」女はちよつと俯向いた。

「わたくし亡くなつた夫にはずゐぶん苦勞をさせられましたから、つく〴〵男といふものに反感を抱くやうになりました。先生の前でこんなことをまうしますのは失禮ですが。」

「どうしてゞす？」

「だつて殿方つていふものはみんな口では新らしい思想だの個だのといつておいでなんですけど、女といふものに對してはやつぱりいつでも暴君であらつしやるんですもの。わたくし男つていふものはやつぱり獸的なところがどんなえらい方にでもあるんだと思ひます。」

「さうでせうか。」

「えゝ、わたくしさう信じます。」

「それはすこし手きびしいですなはゝはゝは……」

「いえ、先生だけは別です。だけどわたくしつくぐ男といふものには……さうですどうしても好意は持てませぬ。」

「では餘つぽどこれまで辛い思ひをなすつたといふのですか。」

「えゝ、それはもう……」女はちよつと袖口で涙を拭いた。男はしばらく默りこんでゐた。

「先生、わたくしのやうなものでございますが、何か御用がございましたら、何でもいたしますから。先生、あなたのお力を……」

「そりや、わたしに出來ますことでしたら……」

「わたくし先生にお逢ひすることができてこんなにうれしいことはありません。わたくし九月には只今のお邸からお暇をいたゞいてかへつてまいります。そしたらすぐ先生の御宅へお手づたひにまゐります。」

「ぢや、ともかく九月になりましたら一度たづねて來てごらんなさい。」

「ぢや九月にはきつとおたづねいたしますから……」

女は應接室の隅に立てかけてあつたパラソルを握つた。折目の筋が破けて、柄の長い流行おくれの古ぼけたものであつた。

「ちよつと待つてください。失禮ですが……」かれは紙幣を一枚摑み出した。「あの電車代にでもつかつて下さいませんか。」

女は帶のあひだから素直に紙入れを男の前に出して、そして紙幣を摑んでゐる男の手の下に素直に紙入れをひろげて見せた。ちよつと羞恥を見せて微笑みながら。なかにはたゞ數枚の銅貨がはいつてゐるのみであつた。

男は女が素直に紙入れを出してひろげて見せた心をいろ〱に想像した。

女はすつかり男に凭りかゝつて來てゐるやうにも思はれた。或ひはそれがかの女の輕い技巧なのか知ら？　とも思つて見た。

しかし女のすべての動作は小娘のやうに自然であつた。男は女の素直な表情をそのまゝ受け容れた。

×

翌日女からのたよりがあつた。

「七月×日はわたくしにとつて一等めぐまれた日でございました。そして恐らく永久にめぐまれた日であることを信じます。わたくしはお別れしてからあの御門から停留場までの坂の道を歩いてゐる間に幾度涙を手の甲に感じたでせう。きまりが悪かつたので電車に乘らないでちやうど二停留場だけ歩きました。いろんなことをつゝしみもなくおしやべりをいたしましたことを恥づかしく思ひます。でもおゆるし下さい。わたくしは生まれてはじめてわたくしの魂を投げかけてゆける人を見たと思ひました。わたくしは近日叔父の病氣をみとるために急にお邸からお暇をいたゞきまして四國までまゐらねばならぬとになりました。もし一昨日のわたくしでございましたらわたくしはお邸を出て旅をすることの身の自由をどんなにうれしく思つたでせう。だけど今のわたくしは東京を離れるとをたまらなく悲しく思ふやうになりました。お笑ひ下

さい。四國へまゐります前に倘一度お目にかゝれます機會をえましたらなど〻、夢のやうな幸福を描いて居ります。瓔子。」

かれはその夜社から歸ると直ぐ瓔子へあてゝ手紙を認めた。

「御俤忘れかねてをりましたところにお手紙にてうれしくうれしく拜見いたしました。御出立前に倘一度お目にかゝりたいとはわたくしより申上る言葉でございます。日時、場所等のことは電話にて。×局三二四一番。」

二日後の午後かれは社の用もそこ〳〵にして芝の增上寺の山門の前で電車を下りて裏の小暗ひ木立の方へ走るやうにして歩いて行つた。

女は噴水のかたはらに池を見たがら立つてゐた。女は遠くからかれが近づいてゆくのを見つけて笑ひながら二三歩男の方へ歩み寄つた。四日前のかの女とは見ちがへるほどにさらに若々しく見えた。みんなまがひものではあつたが荒い柄の明石に觀世水の錦夜帶の模樣が一層女を美しくして見せた。

かれらはながいこと公園のなかを歩いたり、或る古墳のかたはらのベンチに腰を卸したりした。四十一歳の男と三十二歳の女はまるで若い初戀同志のやうな幸福を感じながら。

そこからは暗い木立を通して海が見えた。海には火がまたゝきはじめた。

「わたしもう四國へゆくのはいやになりました。よしませうか知ら。」

「でも、御病人がおありでせう。行かなくつちやいけませんよ。」

「だつてわたしもう東京をはなれたくないんですの。」女はかたく男の手を握りしめた。男も女の手を握りしめた。そして時計の鎖にくゝりつけてゐた銀の十字架を女の手の平に載せてやつた。

かれは女を電車まで見送つてひとりで目黑の家の方へかへつて行つた。

かれは夜つぴて眠れなかつた。

女の白い顔が浮かんで來た。はつきりと映つて來ることもあつた。が、次の刹那にはまつたく取りとめのない顏になつてしまつて、どんなに考へても考へても女の顏が思ひ出せなかつたりした。

その翌日女からはふたゝび手紙が來た。

「わたしは夜が明けるまで眠れませんでした。」と女は書いてゐた。

かれは社に行つてもほとんど仕事が手につかなかつた。四十一歳のわしがこんなことではばかばかしいと思つて自分の心を抑へようとしたところでそれは何の役にも立たなかつた。

工場からは海が見えた。かれはそのころたいていは社宅の方へ泊つてゐた。社の寄宿舍には三百人からの少年工がゐた。かれは勞働問題研究者として好んで少年工たちと一緒に寢起きしてゐた。日が暮れかゝると事務室の窓から海を見た。船の火を見た。そして女と公園を歩いた夜のことを考へた。

數日後女からはたよりがあつた。

「たうとう四國までやつて來ました。ずゐぶん遠い旅でした。宇野から連絡船に乘つて高松へ下りた時なんか、つくづくこゝまでやつて來たことを後悔しました。叔父の病氣はいつ癒るんだか、どうなるんだかさつぱり見當がつきません。わたしが遠いところを女一人でやつて來ましたことをさう喜んでゐないやうなんです。それかといつてなかなか東京へおかへりともいつてくれないのです。わたしは毎日濱に出ては砂原を歩いてゐます。そしてあなたのお名を砂の上に書いたりしました。涙が砂の上に落ちてゆくのを見ながら甘へるやうな氣になつてしやがんでゐます。わたしもう四五日も經つたら何とでもいつて東京へかへります。逃げてゞもかへります。それからほんたうにすみませんがわたし着替の夏の物が一枚欲しいのです。あなた買つてくださらなくつて。成るたけ急いでね。」

かれは翌日すぐ社の用にかこつけて三越まで行つて女のために夏の物を一枚もとめて四國へ送つてやつた。

女からは重ねて手紙が來た。「わたしはいよ／＼明後日こちらを立つことにきめてしまひました。お邸の方も手紙を出してすつかりお暇をもらふことにしました。とても九月まで待つことは私には不可能なことなんですから。目黒のお宅へ伺ひます日はいづれ電報でお知らせいたします。汽車は品川で下りますから、あすこまで來てくださらなくつて。」

×

八月の初めさすがに品川驛のプラットホームはむし暑かつた。かれは海の火をながめながら女を待つて居た。

女はひどく疲れてゐた。それでも群集のなかにかれを見出すと飛ぶやうにして近づいて來た。

「すみません。でもお目にかゝれるまではほんたうにお逢ひすることができるか知らと思つて案じ案じやつて來ました。」

女のバスケットを受けとつて、ガアドをわたつて山の手線に乘りかへた。

明るい電燈のなかではかの女は何も語らなかつた。そして人々の視線を避けるかのやうにたいていは俯向いてゐた。男にはその長い捷毛が美しかつた。

目黒驛から暗い坂を下つて十五六丁も歩いたところにかれの家があつた。家に近づくにつれて女は默りがちになつた。

「さあ、これがあなたのお家です。可愛いゝ家でせう。」男は先に立つて家のなかへはいつた。そして八疊の座敷の電燈のスイッチをひねつた。

女は次の間の敷居に沿ふて座つたまゝどうしても座敷の方へははいつて來なかつた。そして俯向いたまゝ啞默つてしまつた。

「どうしたんです。こつちへおはいりなさい。あなたの可愛いゝ小ちやなお家ではありませんか。」

女はやつぱり默つてゐた。そしてきよとんとした眼で男を見た。部屋のなかを見た。かれもまた女の沈默に引きこまれ

て默つてしまつた。女はふたゝび俯向いてしまつた。かれは前にも後にもその刹那のかの女ほど女らしいいた〲しさを示した女を見たことはなかつた。

家の中がまるで深い山のなかの寺のやうに森閑とした。

何で女があの刹那だけあれほどしんみりとした心になつてしまつたのか。かれは今日でもかの女を思ひ出すごとに、そのことについていろ〲に想像する。

女は八疊の座敷にはいつて來た。女は笑つた。かれも笑つた。

かの女はバスケツトのなかゝら浴衣を取り出して着替へた。かの女は自分で押入れから座布團を取り出したり、台所に行つては茶の道具をさがし出したりしていかにも氣易い心に振舞つた。

かれは縁側に出てソオフアに凭た。

女は蚊遣り線香を焚きながらかれに寄り添ふてゐた。かれは女の柔かな手をぎゆつと握りしめた。

かれが社へ出かけて行くたんびに女は門の外へ出て見送つてゐた。夕方はよく目黑のステーションまで來てかれを待つてゐた。

「わたしははじめてこの世に生まれて來た甲斐があつたと思ひます」と女はいつた。

かれも亦女に劣らぬほどな幸福を感じた。かれはまつたく火のやうに燃えた。

女と同棲してからのかれの社に於ける仕事振りや、今までにないかれの明るい氣分までが人々の眼について來た。

「鳥飼君、このごろ君は神さまからはじめて人間になりましたね。」社長のかういつた言葉をもかれはむしろ幸福な氣持でうけいれることができた。

「あなた社の御用とわたしとどつちがお好き？」

「社にいらつしやるのと、わたしと二人きりでいらつしやるのとは?」

「わたし酒を召し上る方大嫌ひ。わたしの前で禁酒をおちかひなさいよ。」

女はこんな調子であつた。

「僕は妻の前で禁酒をちかつたんだから」

かれは宴會の席でよく藝者たちにかういつた。そしてさつさと家へかへつてしまつた。

かれはかれについての人々の噂を耳にしないではなかつた。しかしかれは女一人のためにすべてを幸福に感じた。

九月一日の大地震はかれにとつて大きな試煉であつた。

かれは一日の夜は社に踏みとまつて三百人からの少年工たちのために働いた。たゞ一人で郊外の暗い家のなかに夜つぴておびえてゐるであらう女のことを考へると耐らなくなつてしまつた。

翌日もかれは社に踏みとまつて少年工たちの食料の配給から、十幾人の死傷者の面倒を見なければならなかつた。かれは一人の若者を目黒の女のもとへ使に寄越した。

「わたしがお宅の前まで行きましたら奥さんがはだしで門の前までころげ出しておいでになりました。そして旦那さまは御無事でしたとまうしましたら、兩手に顔を埋めてお泣きなさいました。」

使の者の歸つて來ての言葉はかうであつた。まつたくかの女は使の者の言葉通りに泣いた。

生まれて間もなく母を失ひ、五歳にして父に別れたかれは人間の愛に飢えてゐた。かれは生來はじめて人間の愛に滿たされた。かれは女のやさしい愛情を想ふと瞼の裏がほてるのを感じないではをれなかつた。

「わたしのやうな都會に生まれた女はどうしても氣が弱くていけないんですよ。强さうなことはいつてゐますけれどね……

……あなたたとへわたしにどんな惡いことがあつてもゆるしてくださるでせうね。わたしそしたらどんなに安心して生

きてゆけるか知れません。」

「お前のやうな美しい女のすることはどんな罪惡だつてかへつて美になつてしまうよ。」かれは冗談半分に妻の言葉を聽いた。

女も三十二歳である。過去に於ていろ〳〵な誘惑に遭つたことは想像された。しかし、かれは「すべての過去は過去に葬らずればいゝのだよ」といつも女に話した。

「あなたは眞實あの御本にお書きになつた通りにやさしい方ね」とも女はいつた。

「無我の愛」といふ一冊の本はかれがひどくトルストイかぶれしてゐたころに自費出版して工場の少年工たちに配つたもので、それがかれの唯一の著書であつた。

かれらは愛に醉つてゐた。しかし醉つたものは覺めなければならぬ。

戀愛からやがて夫婦といふ關係に置かれてゐることを二人が感じたころは、そこには世間的な金といふものゝ冷たい眼がかれらの心を覗き込んでゐた。

女はその履物と足袋に對しては都會人共通な非常な潔癖を持つてゐた。女はちよつとでも汚れた足袋や、すこしでもちびれた履物を穿くことはしなかつた。たいていは足袋は二三度穿いたゞけで押入れのなかに捨てゝしまつた。

女はまたよく男を誘つては三越や高島屋あたりに出かけて行つた。

「わたしまがひ物を着るくらゐなら木綿を着た方がまし。どうせ買つてくださるのなら一番高いのにしてちやうだい。」

さういつた鹽梅で二人きりの月々の生活費はたゞかさむばかりであつた。長い獨身生活の間に貯へられてあつた金も大半は女の月々の呉服店への支拂のために失はれてしまつた。かれは社の庶務課長として二期のボーナスを入るれば月々三百圓ちかくの收入を持つてゐたが、それでは不足がちであつた。

かれは妻の浪費癖を困つたことだとは思つた。しかし美しい妻をさらに美しくすることは愉快でもあつた。かれは金のために自分の心を見すかされるやうなことはしたくないと思つた。

「あなたゞつてもすこし身綺麗な風をなさいよ。でないといくらわたしだけいゝ着物を買つていたゞいたつて、一緒にも歩けないぢやありませんか。」女はよくさういつた。自然かれ自身までがいつとはなしに小ざつぱりしたものを着るやうになつた。

かれは月給袋をそのまゝ女にわたしてゐたがいつもそれだけの收入では追つつかなかつた。

或る日かれは社からかへつて來て、女がゐなかつたので何氣なしに火鉢の曳出しを明けて見た。

かれは女にあてゝ來た一通の手紙を發見した。かれは惡いことだと思ひながらも讀んだ。女の先夫との間に出來た須賀子からの手紙で、それには金と着物とを受けとつた禮が認められてあつた。かれは迷つた。かれは妻が歸つて來た時炬燵の上に突つ伏してゐたが、思ひ切つて手紙の一件のことを打ち明けた。かれは後悔した。が、もう取りかへしはつかなかつた。

かれははじめて恐ろしい女の憤りを見た。女はまつたく狂人のごとく荒れた。

「わたしはあなたに隱し立てをしました。わたしは姦婦です。惡魔です。」かの女は自分で自分の髮を摑んでは引き捲るやうなことをした。自分で自分の指を噛んだ。血がかの女の唇から垂れた。

だけど次の瞬間には女はたゞすゝり上げて泣いた。あだかも可憐な小娘のやうに。

かれは氣の毒でならなかつた。

「わしが惡かつた。つまらぬことをいつて。勘忍してくれ。」かれは女の背なかをさすつてやつたりした。

「わたしがもとく惡いんです。あなたにすまないことだとは思ひながらも、ついあの子に責められると……ゆるして

ね、やつぱりわたしのやうな人間でも子供のことを思ひますと……」女はふたゝびすゝり上げて泣いた。

そのやうな場合の女は一層かれを惹きつける異性的な誘惑を持つてゐた。女は一層若く、美しく見えた。

幸福な歡樂の生活はふたゝびとりもどされた。一層はげしい昂奮さへ伴つて。

「あなた叔母のこのころの眼にお氣付きなすつて？」或る日叔母の留守に女は暗い顏をした。そのころ瓊子の叔母はたいてい二三日置きに來ては泊つて行つた。

「朝起きなすつた時いつも不愉快な顏をしておいでのやうだね。わしもそのことならこなひだから氣付いてはゐたが。」

「あれなんですよ。あなたにはあの恐い眼を見せないからいゝんですよ。わたしにはもうこのころでは朝起きるたんびに恐い眼を向けるのですよ。」

「だつて譯がわからぬぢやないか。」

「かういへばわたし一人が惡い人間になるやうですが、あの叔母さんの眼がわたしの一生を臺なしにしてゐるんですよ。」

「お前はそんなに氣が弱いとも思はぬが……」

「いゝえ、わたしには叔母さんの眼といつたら蝮の眼より恐いんですよ。叔母さんはあなたとわたしの仲を妬いてゐるんですよ。」

「ばか〱しいそんなことが……」

「だつていつの場合でもさうなんですよ。あなたのことはばかに褒めてゐますよ。憎いのはわたしなんです。あなた餘つぽどしつかりしてゐてくださらないと困るんです。」

「何をしつかりしてゐなければならぬのだ。」

「そんなことが恥づかしくてわたしの口からいへますか。叔母さんはこれまでゝもいつもわたしの男を……。」

「馬鹿なことをおいひ。そんな馬鹿々々しいことが……」

　女はだまりこくつてしまつた。恐怖に似た不安が女の顔をかすめた

「だつてわたし恐くなつて來たんです。叔母さんのあの眼だけは、わたしのやうな惡魔にもどうする反抗力もないのです。あの叔母さんの眼は魔法使ひの鞭見たいなものです。」女は最後にさういつて俯向いてしまつた。「わたしの一生は數々あの魔法使ひの鞭に打たれつゞけて來たんです。」

　數日不安な空氣が家のなかをとざしはじめた。

　かの女と叔母が二人切りで離れの方へ仕事をしてゐる時など二人の間に癇高い言葉がとりかはされた。いろ〳〵な男の名らしい名が繰りかへされた。怒つたり、泣いたり、小半日も啞默つてしまうやうなことがつゞいた。

　いよ〳〵魔法使ひの鞭が動きはじめた。

「わたしには秘密は何もない。」

「あなたはあれほどわたしを責めて置きながら御自分では秘密を持つていらつしやるのね。」

社からかへつて來たばかりのかれの前に女は突つ立つてゐた。凄いほどな冷たい眼であつた。

「嘘。嘘をおつしやい。あんなにお金はないないと仰つしやつた癖に、あなたはまだ九百圓の貯金を持つておいでになるではありませんか。」女の顔は普段の美しさにかへつた。

「わしだつて會社の相當な地位にもゐる男ではないか。それが九百圓の貯金一つ持つてゐたつて金を持つてゐるなんて話せるほどの額でもないぢやないか。」

「だつてあなたは勞働者の味方なんでせう。無我の愛、無抵抗主義なんでせう。そんな方が貯金を持つてゐるつて可笑しいぢやありませんか。」

「無我の愛だの無抵抗だのいふことは若いころの理想だつたよ。あのころは僕も心が純潔だつたからなあ。このごろはわしも大に抵抗主義、鬪爭主義になつてしまひさうだ。」
「だつて社の工場の人たちはみんなあなたを神さまのやうに崇拜してゐますわ。あなたにそんな爭鬪主義なんて強いことができますものか。」
「わしだつて或るころは臺灣の荒浪を切つて氣の荒い男たちと一緒に船員の生活をやつたことがあるからのう。」
「だつてそれとこれとは別よ。あなたはどこまでもやさしい人よ。どんなことがあつても最後までわたしにはねえ。」
「さあ、どうだか明日の心は自分でもわからないからなあ。」
「いゝえ、あなたはわたしだけには最後までやさしい人よ。乾度、乾度。でもわたしほんたうにうれしかつたわ、まだあなたがお金持ちだといふことがわかつたので。わたしたちは安心して生活ができるのね。わたしお願ひがあるの、今度指環を買つてね、いゝでせう！」女は小娘のやうにあどけない微笑を見せた。かの女の齒はかがやいてゐた。
かれらは幸福であつた。
しかしその刹那にも魔法使ひの鞭はどこかの暗のなかで振られてゐた。

×

三月の末東京はまだ寒かつた。かれは夜の汽車で品川を立つた。女はかれを見送つて來て泣いた。それは二人の同棲後はじめての別れであつた。
「わたしひとりで東京に待つてゐるんだつたら寂しくて死んでしまふかも知れない。」とも女はいつた。
汽車が出るちよつと前に寺見といふ同郷のそして同じ社の男が見送りにやつて來た。

「おや泣いたんですか奥さんは？おうらやましいですよ。」寺見はからかひ半分に女の顔を覗き込んだ。女は不愉快な顔をした。

ともかくかれは故郷に歸つて行つた。夜寢てゐる間にもかれは品川で泣いてゐた女の顔を想ひ出した。かれは十年振りで二人の男の子を見た。ほとんど父の愛といふものを知らず伯母の手一つで育てられて來た二人の子を思ふと、かれはどうしても自分の心に恥ぢざるをえなかつた。「何が無我の愛だ！僞善者！肉の耽溺者！」かれは自分の心を責めながら、東京へ連れて行つて瓊子の前にはじめて二人の子を引き合せるためにも父親らしいいろ〳〵な心づかひをした。「東京へ往んだらそんなにお行儀が惡くつてはいけんぞ。さうぢや、そんな風にして箸を取るのぢや。」かれは子供たちの一擧一動に對してすら細かな心づかひを忘れなかつた。

かれはわざ〳〵廣島まで出かけて行つて二人の子供たちのために洋服と靴とを買つて來たりした。

山を賣り、畑を賣りしてできるだけの金をとゝのへた。瓊子とかれ自身の幸福のために。

昨日賣つたばかりの山沿ひの畑には桃の花が美しく咲いてゐた。かれはちよつと寂しい氣にもなつた。麥畑を突つ切つて裏の松山にのぼつて行つた。どこからともなく雲雀の聲が聞えてゐた。そこからはかれの邸の母屋の屋根越しに春日にかゞやいた平原の白い壁や、菜畑をへだてゝ遠い青い海が眺められた。

白い花崗岩の何の變化もない低い山の連亙、單調な稚松、明る過ぎるほどな一本調子の徑、低い土堤、すべてが昔のままであつた。姉も訪ねては來てくれなかつた。妹も來てはくれなかつた。

かれは一人ぼつちで歸つて來て、ひとりぼつちで松山のなかにしやがんでゐた。十年前の故郷の歌を思ひ出したりした。

しかしかれは瓊子のことを思つた。二人の子を東京へつれてゆく、瓊子は二人の子を可愛がつてくれるにちがひない。ちやうどかれが瓊子の娘をいとしがるやうに。

かれはできるならばまだ取りのこされてゐる一丁歩ばかりの畑も――それはまだ麥が播いてあるので收穫の後に、話しをつけなければならなかつたが――父の家をも賣り拂つて、故郷には一握りの土をものこしては置きたくないと思つた。故郷は氷のやうに冷たい人々の視線のみがかれを見守つてゐるやうに思はれた。瓔子の子、かれ自身の二人の子、かれとかの女。かれは明るい五人の幸福な目黒の家を描いた。三人の子供たちは眞實のきやうだいのやうに家のまはりを笑ひながら走つた。かれとかの女は緣側のソオフアに凭りかゝつて文藝や思想問題の話をつゞけてゐた。

愛すべき可憐なる妻よ。品川のステーションで泣いた女。あの大地震の日かれが無事であつたことを聽いて顏を掩ふて泣いた女。

故郷の空は霞んでゐた。憂鬱な白い砂の道がつゞいてゐた。

「旦那さま電報でごさんすぞい。」松山の道を留守番の老婆がのぼつて來た。

「電報ツ！どこから來たんぢやろか。東京にはちがひないが。」或る暗い豫覺がかれの手をかすかに顫へさせた。

「タイコイヘデシタスグカヘレアサノ………」

魔法使ひの冷たい鞭は振られた。

山を賣り、畑を賣つた金を懷にしてかれはたゞ一人で四月の朝品川のステーションに下りた。かれは病み上りの男のやうにひよろ／＼としてガアドを渡つた。

ちやうど日曜だつたので目黒驛を下りてすぐ近くの寺見の家をたづねて見た。寺見は心當りをさがしてあげたが皆目女の行方は知れないといつた。さらにタキシイを走らせて白金の淺野氏の家をたづねて行つたが、淺野氏の手から瓔子の遺書が一通わたされた。

「まさか短氣なことをなさることもあるまいと思ふのですが、お氣の毒です。警察の方へも賴んでは置きましたが。」

「わたしにも家出をするなんて原因がわからないのです。ともかく一度家へかへりましてから。」かれはふたゝびタキシイを飛ばせて目黒の家へかへつて行つた。

惡戯好きな瓊子が出し拔けに玄關から飛び出して來て、かれの首つ玉にかぢりつくやうなことをしないとも限らない。」かれはそんなことをも考へた。しかし家のなかには瓊子の姿は見えなかつた。瓊子の道具は無論のことたゞ一枚の瓊子の着物さへのこされてはゐなかつた。すべてが計畫的に取りはかられたかのやうに。

八疊の座敷の眞ん中に置かれたちやぶ台の上に瓊子がいつも飲んでゐた湯呑がたゞ一つふせてあつた。

かれはすぐその足で瓊子の叔母の家をたづねて行つた。

「このころお宅の方にはすつかり御無沙汰してゐましたからね。瓊子がゐないんですつて、御冗談でせう。だつてあの子が家出するなんて理由がないぢやありませんか。」叔母は瓊子に似て輪廓の整つた白い顏をしてゐた。ばかに昂奮してゐたために凄いほどに思はれた。そしてどことなしに冷たい毒蛇の眼を聯想させる憎々しい落ち着きをさへ持つてゐた。

「ともかくあなたの責任ですから、あなたの手で探してください。わたしのやうなお婆さんには何もできませんからね。」

かれは眼がぐら〳〵と眩むやうに感じた。かれの最後の心當りはかの女の出身校である××女學院の松路女史であつた。

「こんなに遲くいらしつては困りますよ。何分こゝは女學校ですし、寄宿舍には若い娘さんばかりおあづかりいたしてあるんですからね。」

松路女史の薄黑い顏、疳高い聲、中性的なラフな感じ、冷たい眼、不快な反抗を抱かせられるやうな誇示をかれはぼんやり意識の上に感じた。

「それで何ですか瓊子さんが家出をなすつたつて。」松路女史は何時逢つてもまだ一度だつて「あなたの奧さん」といつて

くれたことはなかつた。かれも瓊子も最初は氣付かなかつたが、後には松路女史は故意にさうしてゐることに勘づいた。
「もしか先生は何かお心當りはおありにならないでせうかと思ひまして……」
「普段あまりお仲がいゝさうですから、ちよつといたづらに瓊子さんがそこいらに隱れてゐるんぢやありませんか。そんなことでこんな夜中に起されてはわたしこそいゝ面の皮ですわほゝほゝほ……」賢明なる松路女史はドアーを閉ぢて寢室へはいつてしまつた。
「畜生！僞善者！あの時おれはあの憎々しい姿の横つ面を甃の上に叩きつけてやればよかつた！」かれは今でもその時のことを思ひ出しては憤りを感ずるのであつた。
午前二時であつた。かれは夢遊病者のやうになつて飛鳥山の石の上にしやがんでゐた。
薄月夜であつた。花の下にはまだ醉ひどれの男たちが草のなかに罵りながら寐てゐた。醉ひどれの男たちが眠つてしまつて花の下草が森閑としたころは夜明けの空が白みかゝつて來た。
雨がぽつり〳〵と降つて來た。かれは女の遺書を懷に入れたまゝ雨のなかを郊外の電車の方へ歩いて行つた。
品川に着いてから三日目の夜かれは家にかへつて行つた。
かれはその夜もまんぢりともしなかつた。
かれは幾度か家のまはりを通る女らしい跫音を聽いた。そのたんびに戸を明けては雨の薄明りのなかに瓊子の姿を見出さうとした。
なんとなく君かへる夜と思はれて昨夜は門を閉めずおきたり（或る人のよめる）
かれは雨の朝を八疊の部屋のちやぶ台に凭りかゝつたまゝ戸外を見つめてゐた。
「郵便です。」

かれは玄關に出た。瓊子からのたよりであつた。

「まだ生きてゐてくれたんだ。」腹立たしいのと、うれしいのと二つの刻する心をそのまゝにかれは封を切つた。

「陸奥の山の雪をながめつゝこの手紙をしたゝめます。わたしをこのまゝ死なしてください。このまゝわたしが死にましたら、せめてあなただけは瓊子といふ女を可憐な女だと思つて下さるでせう。美しい女、氣の毒な女とだけは思つて下さるでせう。このまゝ永久にお目にかゝらないことがあなたにとつても一等幸福なことになりませう。もしふたゝびお目にかゝるやうなことがあればわたしは過去のすべての醜いものまでもあなたの眼の前にあばかねばならぬことになりませう。あなたはわたしを呪つて呪つてお棄てになるやうな日が來るにちがひありません。わたしのやうな汚された女でも神さまのおめぐみで生まれてはじめてあなたによつてほんたうな戀といふものを知りました。わたしはもうこのまゝ死んでも、或ひは一生修道院にはいつてもちつとも悲しいとは思ひませぬ。わたしを知つてゐるかぎりの人はわたしを毒婦か悪魔のやうに記憶してゐます。たゞあなただけがわたしに殘されてゐたわづかばかりの美しいところを見てくださいたした。記憶してくださいました。わたしはもうそれだけで生きてゐた甲斐があると思ひます。後生ですからわたしを探してくださいますな。またわたしの過去について知りたいなどとつまらぬ好奇心を起してくださいますな。せめて世界のうちであなた一人だけはわたくしを美しいヴイジョンのなかに生かして置いて下さいまし。唯一つのお願ひでございます。遠い陸奥の山が寒さうでございます。眞つ白な山の雪を見てゐるとたまらなくあなたのことをなつかしく思ひます。瓊子──あなたさままひる──」手紙の上には涙の落ちた痕があつた。

×

魔法使ひの鞭はかれを驅つてまだ春淺い東北の旅へ立たせた。かれは瓊子なき東京へ二度とかへつて來ることはしまい

と決心して立つた。かれは一氣に青森まで走つた。かれはそこのステーションで、瓊子らしい若い婦人を海岸通りの天主教會へ送つたことがあるといふ俥夫に逢つた。かれは直ぐに天主教會へ駈けつけた。瓊子がながめたであらう遠い雪の山々が夜明け方の雲の下につらなつてゐた。

「五六日前にさういつた風な御婦人がちよつとお見えになつたことがありました。」黑い法衣の教父は氣の毒さうな顔をしてかれを見た。

かれはぼんやり禮拜堂の片隅に立つてゐた。高い幾本もの眞つ白な丸柱が並んでゐた。嬰兒を抱いた聖母の像が端然としてほの暗い蠟燭の火の前に立つてゐた。

堂の隅々にはまだ夜明け方の小暗がとりのこされてゐた。

若い女たちは床の上にしやがんでは風呂敷包みのなかゝら珠數と祈禱書とを取り出して、雪白の布を頭から深く冠つた。或る者は默禱した。或る者は壁の龕のなかの聖像の前に中腰になつて、そこにそなへられてある聖水に指をつけては十字を切つた。

かれは衣摺れの音さへ立てないほどな靜かな禮拜堂のなかの人々の十字を切り、祈禱書を默誦してゐる姿を見た。そこには人間の愛慾苦患の陰だもないかのやうに想はれた。かれはかれ自身の生活とはまつたくかけへだたつた靜かな世界を見た。かれは床の上にしやがんで頭を下げた。そしてたゞひとり跫音を偸んで往來に出た。

ふたゝび雪をいたゞいた山が眼についた。彌撒の鐘の音が春寒の海のほとりへ響いてゐた。

かれはすぐ海峽を渡つて函館に行くことにした。

海は荒れて暗かつた。

かれは甲板の上に立つたまゝ一度もケービンにははいらなかつた。北海道の涯までも妻を探して歩く男は波の下に沈ん

てゆく内地の山を眺めては、つい ぽとりと涙を落すやうな弱氣にもなるのであつた。

雪が降つて來た。外套を通して冷たい雪風が疲れ果てたかれの肉體をさいなむやうに吹きつけて來た。函館警察の若い親切な巡査は雪のなかを湯の川の天使園までついて來てくれた。谷から山を分けのぼること小一里、目たゞ蕭條、目に見えるかぎりは雪のみである。山も谷も雪に埋められてゐた。曠野のやうな山の上にトラピスト天使園の禮拜堂が雪のなかにたゞ一つ高々とそゝり立つてゐた。暗い雪の空。雪のなかに沈默せる巨人のやうな禮拜堂。かれの魂は撃たれた。

フランス人の修道尼は上手に日本語を語つた。そして「鳥飼瓊子さんといふ御婦人はお見えになりません。もしお見えになりましたら大事にいたはつてあげます」といつた。パンと葡萄酒がかれの前に置かれた。

かれは若い巡査と一緒にふたゝび黄昏の雪のなかを町の方へかへつて行つた。今しがた通つたばかりの二人の足跡は雪にうづめられてゐた。

かれはその翌日もあきらめ切れないでたゞ一人で雪のなかをふたゝび天使園の方へ登つて行つた。

雪は降りに降つた。幾度か雪につゝまれた林を抜け谷をわたつて山の上に立つた。雪は横なぐりにかれを叩きつけた。

かれは凍えんばかりに顫えた。

黑い法衣に銀の十字架を胸にかけた二人の修道尼が出て來た。かれは初めて芝の公園で女と邂逅した時女の手に銀の十字架を握らせたことを思ひ出した。

「どうぞこちらへ……」修道尼は十字を切つて爐の傍に腰を卸した。爐には大きな榾がくべてあつた。部屋の聖母の像を窓から洩れて來る雪の光りが寒げにつゝんでゐた。

「神さまはきつと奥さまをあなたへかへしてくださいます。」

「お祈りなさい。そして靜かにお待ちなさい。忍ぶことが一番いゝことです。苦しむことも神さまのめぐみです。さあ御一緒に祈りませう。」

二人の修道尼たちはかれを聖母の前につれて行つてひざまづいて祈つた。かれは瓊子の姿を胸に描きながら祈つた。涙がこみ上げて來て仕方がなかつた。

「靜かにお待ちなさい。お祈りをなさい、あなたの奥さまのために。祈りはすべての悲しみに勝つ力をあたへてくれます。」と一人の修道尼が見送りながらいつた。

「雪の道を歩きながらもお祈りなさい。きつとあなたのお祈りは神さまにも、あなたの奥さまの胸にも響きます。谷の雪があぶないから氣をつけておかへりなさい。」さらに他の一人の修道尼はかれをはげましてくれた。

かれは振りかへりつゝ親切な二人の修道尼たちを見た。雪は深かつた。膝は雪のなかに埋もれてしまつた。高い枯木には名も知らぬ鳥が啼いてゐた。手も足も千切れさうに疼きはじめた。呼吸をすることが苦しいほどに雪風ははげしく顔を叩きつけた。暮れてゆく雪のなかをかれは唖のやうになつて林をくゞつた。

かれはふたゝび彌撒の鐘の聲を聴いた。

倶知安、札幌、帯廣、網走とかれはあてもなく雪のなかの旅をつゞけた。

かれは何のために北海道の東の端の海岸までも妻をさがして歩いたのか、ほとんど自分の心を想像することさへできなかつた。

かれはたゞ一時でもぢつとして瓊子を待つてゐることはできなかつた。たゞわけもなしに妻を思ひながら雪のなかを歩きたかつた。かれは網走ちかくの或る漁場の砂丘の上に立つてゐるかれ自身を見出した。そこではもう雪は解けて濱には柔かな草が延びてゐた。海は低い雲にとざゝれてゐた。

「こゝは日本の東の涯の海でさあ！」かれは眞つ赤な毛布で作つた上着を被て網を繕ふてゐた一人の老漁夫からあらいつた言葉を聽かされた時、妙に自分の弱い心をあまやかすやうな悲しみの底のなぐさめをさへ見出した。

かれは砂の上に立つてゐた。いつであつたか璞子と江の島に行つた時璞子が素足で渚を歩いて波のなかへはいつて行つたことがあつた。

「わたし自殺をするのなら月の夜にこんな砂の上に一歩一歩足跡をのこして海にはいつて行きたいわ」といつた女の言葉がかれの記憶によみがへつて來た。もし妻の足跡が網走の海岸の砂の上にのこされてゐたら、恐らくかれは妻のあとを追つて海のなかへはいつたであらう。

ふたゝび雪のなかを函館に出て海峽をわたつて青森へかへつた。かれは青森の海岸の宿屋に滯在して淺蟲野邊地あたりまでも探し歩いた。かれがふたゝび天主堂をたづねて行つた時は、十日以前に逢つた敎父はほとんどかれの疲れ果てた顏を記憶してゐなかつた。かれの眼はまつたく狂人のごとく血走り、かれの言葉は聽きとりがたいほどに顫へてゐた。

宿屋のかれの部屋からは天主敎堂の彌撒の鐘の音が聞えた。かれは彌撒の鐘を聽いては妻のために祈つた。

「鳥飼さん、あんたのそのお姿を見てはわたしのやうなものでもお氣の毒でなりませぬ。この上は一つ易を見ておもらひになつたらどうです。よくあたる易者がありますで……」宿のおかみさんにすゝめられてかれは或る裏町の狹い路次をくぐつて行つた。

「尋ね人ですか？」老易者の聲は聽きとり難かつた。

暗い六疊の一室にはかれの娘らしい三十歳くらゐの病みほうけた女が隅の方に天井を向いたまゝ眠つてゐた。女は死人のやうに蒼白い顏をしてゐた。

算木を動かし筮竹を揉む靜かな音に女は眼をさまして客を見た。かの女の眼はすでに死んでゐた。女はふたゝび深い眠

りに落ちた。

「尋ね人西下す、宿所神の字現はる、對者を悵みつゝ思慕す。一週間以内に本人の居所判明す。夫婦和合甚だ困難なり。……どうもお氣の毒です。それに亂して狂す……と出てゐます。」老易者は默々として筮木を並べなほしたりした。

眠つてゐた女はふたゝび眼をひらいてぢつとかれを見た。そしていかにも苦しさうにかすれはてた咳をした。女はさらに死のごとく眠つた。

×

目黒の家にはかれが東京を立つた日のまゝに妻の湯呑がたゞ一つちやぶ台の上に置かれてあつた。

「どうも怪しい、君の奥さんは東京にゐるらしい。寺見君はほゞ知つてゐるらしい。しかしどんなにたづねて見ても寺見君は知らぬといふのだ。」親切な一人の友人はわざ／＼寺見をたづねて幾度も訊いてくれたが寺見の答へはいつも一つであつた。後になつて女は寺見から旅費を貰つて出たと云ふことまでわかつたが――。

しかしかれは寺見などに頭をさげて訊ねて行く氣にはなれなかつた。品川で別れる時寺見が泣いてゐたかれの妻の顔をのぞいてからかつた不愉快さがよみがへつて來るのであつた。

かれは人に裏切られることの悲しみを恐れた。かれは人を頼らうとする自分の心を叱つた。かれは天使園の修道尼の言葉通りにたゞ妻のために祈ることゝ、青森の老易者の言葉に頼ることのみに決心した。かれは終日家に閉ぢこもつてゐた。

老易者が豫言した最後の日が來た。かれは少年時代に寺に入つてそのころ易經を讀むことや筮木を持つことを敎へられてゐたゞけに易の豫言に對してはかなりの信頼を持つてゐた。

かれはその日は朝からものに憑かれた人間のやうに部屋のなかを歩きまはつたり、門の外の跫音に氣を奪はれたりして

ゐた。憤りと悲しみと、神の心と惡魔の心とがかれを支配してしまつた。

「郵便！」疲れ切つて寢ころんでゐたかれはがばとはね起きた。

女名前の手紙であつた。差出人の名は單に岸村俊子としてあつた。

「取急ぎのまゝ申上ます。奥さまは今大病でゐらつしやいます。熱にうかされた奥さまはあなたさまのお名を呼びつゞけておいでになります。あまりお氣の毒ではたにゐて見かねますのでたゞ／＼ないしよでお知らせ申上げます。わたくしの名も、それからお知らせいたしましたことも絶對に秘密になすつて下さい。場所は麻布×町××キリストの友教會でございます。」

かれは手紙を掴んだまゝ家を出た。そしてタキシイを驅つて鳥居坂の警察へ飛び込んで行つた。

「××キリストの友教會？屆けがしてないんですね。いや探して見たらわかるでせう。」若い署長は二三度電話をかけてゐた。場所はすぐに分つた。

「人妻を監禁するなんてけしからんことではないか君？　君は宗教家といふんでせう。」かれと一緒について來た巡査は教會の牧師をつかまへて詰つた。

「人妻ではありません。瓊子さんは鳥飼といふ男と同棲はしてゐましたが、法律上の夫婦ではないのです。」

かれはこの宗教家の三百的な口吻を腹立たしく思つた。かれはぶる／＼と全身のわなゝくのを感じた。

「何ですと、瓊子は僕の妻でないといふのですか？」

「いつ君の妻になりました。君は法律上……」

「だまれ僞善者！君は人の妻を監禁して置いて。尚一度言つて見たまへ……」かれは拳を固めて牧師に近づいて行つた。

「まあいゝわたしにおまかせなさい」巡査はかれをなだめた。奥の方からはあまり激しいかれの聲に驚いて瓊子の叔母

や、松路女史や牧師の奥さんがてれた顔をして飛び出して來た。

かれは瓊子を隱した一切の秘密を知ることができたと思つた。世の中といふことについては、子供のやうな無智なかの女のうしろに廻つて、糸をあやつつてゐる人たちを見ることができたと思つた。さらに去年から瓊子に入籍を迫つても何かといひぬけをこしらへては籍に入ることを拒んでゐた理由をもほゞ想像することができたと思つた。

かれは奥の病室へはいつて行つた。瓊子は白い寢床の上に寢てゐた。そしてかれの姿を見るや飛びついて來てかれの首つ玉に腕をかけた。

「あなたどうしてわたしの所がわかつて？」

「神さまのお告げだよ。」

「さうではないでせう。」かの女は微笑を洩らしながらしげ〳〵とかれを見た。

ちようどその時牧師や家の人たちが入つて來たのでかれは妻から離れて坐つた。

「いつたいこれはどうしたといふのです？」かれはふたゝび牧師を見て立ち上つた。

「靜になさい。こゝはわたしの家です。瓊子さんは今日まであなたにだまされてゐたのです。」

「何ですつて？」

「あなたはお國の方へ奥さんもあり、お子さんもおありだといふことではありませんか。さうすれば瓊子との結婚は到底望めないことですね。」牧師は冷笑をさへ浮かべてゐた。

「わたしに子供があることは最初から瓊子も知つてゐます。それは瓊子にも子供があるのと同じことです。先妻とはすでに十年以前に離婚してゐます。それはお調べになればすぐわかることではありませんか。そんなくだらぬ理屈をつけてあなた方は無理に瓊子を連れて行かうとするのですか。」かれはふたゝび牧師に詰め寄つた。

「あなたは腕力に訴へるのですか。すこし紳士的になすつてはいかゞです。」牧師はどこまでも冷靜にかまへてゐた。

「何が紳士的だ。僞善者！」

「鳥飼さんわたしはあなたはもすこしは紳士らしいお方かと思つてゐましたよほゝほゝほ……」松路女史は傍から聲をかけた。かれはその刹那のとりすました松路女史の賢明振つた顏を惡魔以上に憎んだ。

「トルストイはいつも老婆を惡者にして書いてゐるが、トルストイも乾度このやうな小ざかしい、そして自分ひとりを正しい人間のやうにうぬぼれてゐる老婆に出逢つたにちがひない。こんな老婆は惡魔以上だ。あの悶々しさつたらない。神はなぜ人間の世界にこんな老婆を作つたか？」かれは松路女史の冷たい木彫のやうな顏を見つめたまゝさう思つた。

それに松路女史はかういふ社會の婦人の御多分に洩れず官學崇拜者であつた。だから鳥飼が一時私立大學に學んでゐたといふことを聽いてからは、かれを社會主義者だの無政府主義者だのと蔭口を利いてゐた。さういふ點からも松路女史は自分の學校を出た瓊子が私立大學出の鳥飼などと一緒にゐるといふことに對してはむしろ侮蔑を感じてゐた。

「ともかく瓊子は病勢がかなりすゝんでゐますから入院させます。その間わたしの方でおあづかりします。」

「ぢやわたしも一緒に病院にゆきます。」

「あなたは無我の愛などをお唱へなすつたお方と聽きますが、どうですこの場合もすこし人類愛の立ち場からあなたの愛をもつと寛大になすつては。あなたも紳士らしく見えますが……」

「人類愛の立ち場からとは何だ。」かれは牧師の僞善者らしい口吻を憤つた。僕は僕がいゝと思ふことをすればいゝのだ。僕は君等のやうな美名のもとに隱れて惡だくみをするやうなことはしない。僕は瓊子を愛してゐる。瓊子も僕を愛してゐる。だから僕は瓊子を僕の家に連れてさへゆけばいゝんだ。」かれの聲は顫へてゐた。

「はゝはゝは…あんたはまるで狂人だ。お話にならんはゝはゝは……」牧師は顏の筋肉一つ微動だもさせない落ち着きを

持つてゐた。そしてそこに立つてゐる巡査や松路女史を見て笑つた。
「ともかくあなたのやうな狂暴な人間には瓊子はわたせません。」
「わたしの妻ぢやないか。君に何の權利があるか。よし、それならば僕には僕の決心がある。」かれは部屋を飛び出さうとした。
白い寢床の上に寢てゐた瓊子は急に起き上つてかれの前に立つた。
「あなた待つてください。わたしも決心しました。わたしはあなたと一緒に目黑の家へかへります。」女は寢卷を着替へに離れの方へ走つて行つた。
牧師や叔母や松路女史がかの女を追ふて離れの方へ走つて行つた。しばらくかの女と牧師たちの間にひそ〳〵話がつゞいた。
女はひどく昂奮した蒼白な顏をして出て來た。女はいつもよりさらに美しかつた。
「あなたのことを海賊ですつて?」
「誰が?」
「松路先生が……」
「さうか。惡漢が!」
「わたしのことを肉に生きる女ですつて!」
「海賊と、肉に生きる女かはゝはゝは……」かれはわざと大きな聲で笑つて見せた。しかし聲が咽喉につかへてかすれるやうで笑へなかつた。

目黒の家に歸つて來た瓊子は翌日までぐつすり眠つてしまつた。二日三日とまだモヒ注射の疲れがとれなかつたせいか蒼白い顏をして寢床の上に橫たはつてゐた。

「あなたにわたしの居所を知らして上げたのはやつぱりわたしでしたの。驚いたでせう。わたし俊子さんにたのんで手紙を書いていたゞいたんです。だつてねあなたが北海道までわたしを探しに行つてくだすつたといふことを聽きました時は寢床のなかで泣いてしまひましたのよ。あなたの惡いところばかり考へて、あなたのことを忘れようと思つたのですが……やつぱりあなたはわたしが最初から考へてゐた通りほんたうにやさしい方ね。」

女は寢床のなかでかれの手の平をいぢりながらかれの顏を見た。かれは女のために粥をこしらへたり、夜おそくまで氷をかいたりした。

「青森では教會に一晩とめてもらひました。だけど舊敎ではないの。プロテスタントの方でした。えゝわたしも連絡船ではずゐぶん弱りました。あらしの夜でねえ。やつぱり雪がひどかつたわ。わたし天使園へは行かなかつたの。わたしが行つたのは×××のベプテスト園よ。雪あらしのなかを裏の林まで行つて木を運んだり、乳牛を絞つたり、わたしこれでもずゐぶん苦しい目に逢つたのですよ。わたしその時もうすつかりからだを惡くしてゐましたの。」女はかれが入れかへてくれた氷囊を額の上にあてた。そしてぢつと男の手を握りしめてゐた。

「いつたいお前は何のために家出をしたんだい。」

「それはもういはないでください。あなたにあげたあの手紙のなかに書いてあつた筈です。」

「お前はうしろに隱れてゐる人がある筈だ。お前は直にそんな人のいゝ加減な口車に乗つてしまうからいけない。」

「さうね、わたしやつぱりいつまでも子供見たいなのね。あなたさへわたしのそばについてゐて下すつたらあんなことはなかつたのよ。わたしついいろ〳〵先々のことを考へてゐると心細くなつてしまつたので……」女は眼をつむつてしまつた。かれはもうそれ以上たづねることはしなかつた。

瓊子の健康がもとにもどつたころから叔母はまたせつせと訪ねて來た。

「魔法使ひの鞭を持つた人間！」かれは叔母を見てはさう思つた。しかしかれは表面だけでは今まで通り何のこだはりもなく接してゆくことをつとめた。叔母はよく金をねだつては歸つて行つた。叔母と一緒に須賀子がやつて來ては滅茶苦茶なかれの淨瑠璃を聽いては腹をかゝへて笑ひこけた。

かれが社に出かけた留守の間を見ては叔母は一層はげしく瓊子をたづねて來た。家のなかの道具が減つて行つた。叔母が訪ねて來た日はかの女は終日機嫌が惡かつた。

「わたしまた北海道へ逃げ出すかも知れませんよ」かの女は冗談のやうにそんなことをいつたりした。

「叔母さんにまた何かいゝ智慧を聽かされたんだらう。」

「嘘、そんなことはないの。わたし叔母さんなんか來ない遠い世界へ行つて見たいの。」

かの女の外出が頻繁になつた。ともすれば夜になつてまで出かけて行つた。日中は日中でかれの留守中には知らない男の來客があつた。それを何とかいふとかの女はちやぶ臺の上に茶碗を投げる、火箸を叩きつける、まつたく狂人のやうになつてしまうのであつた。そして最後には疊に突つ伏して泣くのであつた。

「わたしが惡かつたのです、勘忍してくださいね。」

「何でもない。今からはもうあんなことをしない方がいゝ。」

「早くとめてくださればいゝのに、あんな時は。あんたはまつたく氣が弱いのね。」

女はかれの腕に抱かれて小娘のやうになつてはしやいだ。かれの魂はわけもなくかの女の若々しい肉體に引き摺られて行くのであつた。

そのころからかの女の夢遊病がはじまつた。

終日社の仕事に疲れ切つたかれは毎晩石のやうに眠つてしまうのであつた。

或る晩不圖かれが眼をさますと直ぐかたはらに眠つてゐる筈の妻の姿は見えなかつた。

月の光りが一枚の白いカァテンを通して欄間から射しこんでゐたので、部屋のなかには霧の底のやうなほの明るさが漂ふてゐた。

そうつと襖の戸が明いて間もなく妻は部屋のなかへはいつて來た。

「どうしたの瓊子！」かれはちよつと險のある聲で呼んだ。

「わたしすつかり寢ぼけてゐたんですわ。おう寒い……」妻は冷え切つた兩手でかれの手を握りしめた。「ねえわたし冷たいでせう。すこしあたゝめて頂戴な。」

「困るぢやないか。しつかりしてゐなくつちや。」

「えゝ、あたし昔から夢遊病よ。」

女は間もなくいぎたなく眠つてしまつた。

それからそれへと不愉快な聯想がわいて來て、かれはどうしても眠ることができなかつた。

×

不運はふたゝびかれを見舞つた。北海道行き以來かれは、ほとんど社を休みつゞけてゐた。或る日かれはつひに社を出

なければならないことになつた。

かれが家にかへつて「もうわしも今日きり社にゆくことはないんだよ」と寂しく笑つた時、女はまつたく血の氣を失つた顔をしてかれを見上げた。そして

「わたしが悪かつたんです。あんなことですつかりあなたを怠けさしてしまつたのですから」といつて袖口で涙を拭いた。

かれは毎日ごろ／＼と寢ころんでばかりゐた。かれの肉體も魂も疲れ切つてゐた。「恐らく人はこんなときピストルを持つてゐたら乾度顳顬に銃口を當てるにちがひない。」などと考へることもあつた。

たゞ瓊子の肉體だけは二十前後の女のやうにいつもかれの魂を窒息させるほどに惹きつけた。かれは自分の心をあさましく思つた。

叔母の手紙がよく出入りの商人の手を經てこつそりと瓊子にわたされた。

かれが晝寢をしてゐる時など叔母は裏口から瓊子を呼び出しては往來に出て何かひそ／＼と話つてゐることもあつた。

叔母は口汚く瓊子を罵つた。瓊子も敗けてはゐなかつた。かの女は二度と烏飼の家を訪ねて來てくれないがいゝなどと叔母を責めてゐたこともあつた。

或る日かれは事務引渡しのため最後に社へ出かけて行つた。そこにはあさましい勤め人根性があまりに露骨に動いてゐた。昨日までむしろかれの歡心をもとめてゐた周圍の人々は社を追はれてゆくかれに聲をかけることすら恐れてゐるやうに思はれた。かれは暗い心を抱いて家に歸つた。かれはこの地上に頼るべきものとしてはたゞかれ一人、そして瓊子のみであると思ひながら歩いてゐた。

家のなかはすでに薄暗かつた。

妻はゐなかつた。

いつもの八疊の部屋の眞ん中に置かれたちやぶ台の上にはかの女の一通の手紙が載せられてあつた。

「ともかくお互にしばらく別々になつて働きませう。このたびのこともわたしがみんな原因になつてゐるのでございます。それを思ふとわたしはあなたにあはせる顔もありません。けさあなたがすご〱と家をお出かけなされたうしろ姿を見ました時、わたしはつく〲わたし自身の罪について考へました。わたしがあなたから離れることはあなたの將來のためでございます。わたしは寂しくともしばらく一人で暮してゆきます。どうぞこのことをゆるして下さいまし。」

かれは會社の地位を失ふとともに女をも同時に失つてしまつた。かれは泣くにも泣かれない腹立たしさを感じた。

押入れのなかを探して見た。この前の家出と同じやうに女の着物といつては一枚もとりのこされてはゐなかつた。

かれは毎日心あたりの家をたづねては女の行方を探した。かれは或る秘密探偵社の手によつて偶然にも女が過去にいろいろな恥づべき秘密を持つてゐたことを知つた。そこにはかの女に捨てられた數人の男があつた。一生を棒に振つた男たちもあつた。かの女はその足もとにたほれてゐる弱い男たちの死骸を見てはほゝえんでゐた。かの女こそ淫婦である、毒婦であると思つた。しかしかれはかの女を愛してゐた。かれが想像してゐた通り今度の家出にも叔母と同時に松路女史が背後に糸を操つてゐたことも知つた。

或る日かれは青山墓地に近いA博士邸の奥の一室に導かれた。

博士夫人に伴はれて瓊子がはいつて來た。瓊子は俯向いてゐた。

「わたしはどんな御家庭上の御都合があつたのかまつたく知りませんでしたが、松路さんを信用してあの方の御依頼であなたの奥さんをおあづかりいたして置いた次第ですから……」と溫厚な博士は口を切つた。「ともかくこゝでお二人ともよくお互の御意見なり御希望なりを打ち明けてお話しなすつたがいゝでせう。」

「それではわたくしからちよつと訊ねさしていたゞきます。瓊子、こゝは神さまの前だ。お前は先づ過去の一切の罪惡を

こゝで懺悔なさい。それだけの誠心がないならば何を相談しても無駄です。」

「わたしの過去の罪悪ですつて?……わたしにはそんなものはありません。」女の聲はやゝ顫へてゐた。

「嘘をいふものではありません。わたしはちやんと私立探偵に頼んで……」

「あのあなたはそんなものにお頼みなすつて!」女は狼狽とゝもに一種の憤りをさへあらはした。

「えゝ僕は頼みました。そしてお前の過去のことをみんな知つた。」

「でも、わたしは最初からあれほどあなたにお頼みして置いたではありませんか。あなたわたしの過去に手を觸れてはいけませんて……」

「だつてお前は過去には何もないといつたぢやないか……」

「はい何もありません。」

「嘘をおいひ。お前は谷川といふ男を知つてるだらう。」

女の顏は蒼かつた。

「お前はそれから山根といふ男を知つてゐるであらう。金村といふ醫師はどうしたんだ。原口といふ鑛山技師はどうしたんだ。お前は恐ろしい罪を犯してゐるぢやないか。お前の最初の夫はお前を呪ひながら死んだといふことではないか。お前は石を投げられなければならぬ女ではないか!」

「あなた、あなたは………」女はヒステリーのやうに急にすゝり上げて泣いた「わたしはすつかり懺悔します。わたしはたしかに過去に恐ろしい罪を犯しました。石を投げられなければならぬ罪を犯しました。」さういつたかの女は眉をびくびくと動かした。そしてちつと固く唇を噛んだ。

二時間ばかりの後かれは瓊子をつれて目黒の家へかへつて行つた。

「ほんとうに困るぢやないか、わたしに心配ばかりさして。」
「すみませんでした。勘忍してくださいね。」
「何も怒りはしないよ。」
「勘忍して下さる。だけどねえ、あなた。もう二度とわたしの過去のことをいつて下すつてはいやよ。」女は男の膝に顏を突つ伏せてしまつた。
「過去のことは訊ねまい。しかしお互の間にすこしでも隱してゐることがあると思ふと一生不愉快だよ。いつたいどうしてお前はそんな大それたことをしたんだい。」
「ぢや何も彼もいつてしまひます。わたしの最初の夫、須賀子の父です。父も母もないわたしは叔母さんに無理やりに押しつけられたんです。わたしはそれこそ無垢な處女でしたに。わたしは十六でした。男つてどんなものだか、夫婦つてどんなものだかそんなことを何で知りませう。そのわたしを叔母さんはあの人に押しつけたんです。わたしは何も知らなかつたけど叔母さんとあの人の玩具になつてゐたんです。叔母さんとあの人の都合のいゝために。結婚して十日と經たぬうちにわたしはあさましい人間の世界を見てしまひました。わたしはほんとうに家を逃げ出すか、でなければ叔母さんを殺すか……そんなことまで考へたこともありました。わたしがあの人と結婚する、もう三日目から叔母さんはわたしたちの家に泊りこんでしまつたのです。わたしは眞夜中に起きて幾度泣いたでせう。あんまりあさましい、これがいつたい人間の世界にあり得べきことでせうか。獸だ！獸だ！わたしはあの人を、叔母さんを呪ひました。」
「そりや、叔母さんはまるで肉ばかりのために生きてゐるやうな人だからな、それくらゐのことは平氣だらうよ。しかしお前はどうしてそんな氣になつたのかなあ。」
「そのやうな境遇に置かれた女に對しては狡猾な男はよく機會を利用することを知つてゐますよ。男はみんなね……あな

た……」

「でもお前を呪ひながら死んだといふ御主人のことを思ふと氣の毒ではないか。」

「すぐ男の方はさうお考へになるのね。女でもやつぱり男の方へ同情してわたしに石を投げます。だけどねあの人だつてさ。そのころよくわたしの家に遊びに來た篠原つていふ若い綺麗な男でしたが、わたしはまだそれでもあの人一人を大切に守つてゐたのに誘惑に來てゐたといふことがあとでわかつたのですが、そしてこの男もやつぱり内々はわたしを打つたのです。」その人とわたしがどうだとかいつてわたしをたうとうピストルで

「ピストルで！」

「えゝ、わたしその時だけはもう殺されたものだとばかし思つてゐました。うしろから追つかけて來て二發つゞけさまに打つたのです。一發はわたしの襟を一寸ばかり裂いてゐました。」

「お前その篠原といふ人とどうかしてゐたんぢやないの？」

「いゝえ、わたしそれこそそのころまではまだ他の男なんか夢にも考へたことはなかつたのです。わたしそれからなんですよつく〲男といふものゝ自分勝手を憎むやうになりました。あなた想像してもごらんなさい。何の罪もない處女を無理に貰つて置いてさ、自分たちは勝手な眞似をしてゐて、ちよつとした疑ひだけでピストルで殺さうといふんでせう。人を殺すんですよ。そのことを思ふとどうしたつて男を信ずることはできなくなりました。主人と同じ部屋に寢てゐます。夜中に眼をさます。主人が油ぎつた顔をして濃い眉をして、厚い唇をして眠つてゐるんです。わたしはどうしても男を人間だと思ふことはできなくなつたのです。いつでもわたしに飛びかゝつて來てわたしの咽喉を締める野獣です。」彼女は話してゐる間にふたゝび昂奮して來た。

「男は野獸かも知れぬが、それにしてもお前はよく今日まで叔母さんと一緒にくつ付いて來たね。そんな不仕合せの原因はみんなお母さんにあるんぢやないか。」

「だつてそりや駄目、わたしが何處へ逃げやらうたつて叔母さんはそれは不思議な感覺を持つてゐるとでもいゝませうか。どうしてでも探し出すのです。それにわたしにしてもすこし叔母さんと離れてゐると心細くなるんです。悪い智慧にかけてはあの人はわたしなんかより十倍も百倍も持つてゐるんですから、いざとなるとやつぱり叔母さんに頼るやうになるんです。子供の時からあの人に育てられて來たせいかわたしにはどうしてもあの人のあの冷たい美しい眼でちつと睨まれると魂がすくんでしまふやうなんです。」

「やつぱり叔母さんはお前の一生の魔法使ひの鞭を持つてゐるのかね。」

「さういへばわたしの一生のふしだらが叔母さんのためだといふことになりますが、ともかく叔母さんに大關係がありますよ。だけど一番わたしの一生に關係があつたのはあの人の二發のピストルよ。」

話してゐる間に女は多少やけ氣味になつたのか、或ひはかの女自身の蠱惑的な美を誇示するためか、かの女のために失戀して南洋に走つてしまつたといふ美術學生のことや、鐵道自殺したといふ若い京大の法學士のことやそれからそれと男の名を算へて行つた。

「もういゝよ。たくさんだ」かれは女の話を切つてしまつた。

「いやでせう、こんな話は。わたしだつていやですもの。あなたも不仕合せな方ね、わたしのやうな女を妻に持つて。でも、あなたわたしが愛せられて。」

「…………………」男はうなづいて見せた。

「あなたはこのごろ急に白髮が殖えたのね、わたしが心配させるからでせう」女は帶の間の紙入れのなかゝら毛拔を取り

出してふうわりとかれの頭に細い指をかけた。

「何も知らなかつた昔が戀しいわ……」

男はだまつてゐた。女は男の長い白髮を美しいかの女の手の平に乘せてゐた。

×

ふたゝび妻の夢遊病がはじまつた。

かれは家中の戸を家のなかゝら錠をかるやうにした。女はそれに對しては「あなた錠をかりましたね」ともいはなかつた。そこには憤り以上の恐ろしい沈默が潜んでゐた。

ともすれば見知らぬ會社員らしい男が夜になると家のまはりに立ちとまつてゐたりした。

女は外出しては夜遲くまでかへつて來なかつた。

もし外出しないやうな時は家の內から錠をかけた戸を見つめながらまるで狂人のやうにわめき、たけり、すゝり上げて泣いた。

「あなたはよくもA博士や奧さんの前でわたしにあの恐ろしい恥づかしい懺悔をさせましたね。あなたは女の心を御存じないのです。わたしあなたと一緒になつてからあんな恐ろしい懺悔をするくらゐなら、まだあの純潔な妻だつたころあの人にピストルで撃たれて死んだ方がどれだけ幸福であつたか知れない。」

「お前はすぐ昂奮するからいけない。早くおやすみ。」

「わたしは石で撃たれなければならぬ女です。さうです。わたしは撃たれなければならぬ女です。あの人たちの前でわたしにあんな恥づかしい懺悔をさせるくらゐならなぜあなたはわたしの頭を石で撃ち割つてはくださいませんでした。」

「もういゝよ。靜かにおやすみ！」

「あなたは僞善者です。あの博士だつて、奥さんだつてよくわたしのあの恐ろしい懺悔を平氣な顏で聽いてをれたものだ。誰にだつて人の懺悔を聽くちからはない筈だ。わたしの言葉を聽いて下さるのは神さまばかりだ。畜生ッ！畜生ッ！」

女は夜具に顏を突つ伏せて狂人のやうになつて泣いた。

泣き疲れると子供のやうになつて寢ころんだ。男は女の眠りをさまさないやうにそうつと夜具をひつかけてやつた。

妻の健康は日に日に衰へて行つた。かの女はカルモチンを飲まないでは眠れたくなつた。ちやうどそのころからまた須賀子が目黒の家へ泊りきりになつてやつて來た。須賀子はからだが惡く俥で病院に通はなければならぬのであるが、職業を失つたかれにはそんな贅澤もできなかつたので毎日かれは須賀子を背負つて病院へ出かけて行つた。須賀子を負ぶつて十二三丁の道を往復することはかなりの苦痛であつた。

しかし瓊子や須賀子に「すみません、すみません」といはれるとたゞその言葉だけでかれは幸福を感じるのであつた。「わしはまだ一度も松男や梅二郎を負ぶつたこともないが」などゝ故郷の子供のことを思つては不圖淋しい氣にもなるのであつたが。

須賀子が家に來てくれたのでともすれば沈鬱になりがちな家のなかの空氣が明るくされ、笑ひ聲が洩れるやうになつた。かれが須賀子を負ぶつて病院通ひをする、それを手傳つて後からついて來る瓊子には、はじめて女らしいしとやかさといたいたしさとが感じられた。

もし須賀子が急に發熱でもして鹽梅がわるくなつた時など瓊子は朝から夜中まで白湯一杯飲まないで須賀子の枕もとに坐りこんでゐた。須賀子の病氣の間に瓊子はげつそり痩せてしまつた。

須賀子はふたゝび狸穴の家へかへつて行つた。ふたゝび家のなかの空氣は險惡になつた。妻はからだが惡いといつては

寝てばかりゐた。かれは水を掛けて飯を食ひ[illegible]

かれは險惡な空氣の原因について考へて見た。

「あの苦しい恥づかしいA博士夫妻の前の懺悔は石で撃たれるよりも苦しかつた。ピストルよりも殘忍であつた」と妻はいつた。

「かの女の一番目の夫はピストルでかの女の運命を決めてしまつた。わしはピストル以上の殘忍な武器で瓊子を殺したのではなかつたか！」かれは時々かういつた考を抱くやうになつた。

瓊子がいつたやうに懺悔は神のみが聽くべきもので人間が聽く筈のものではなかつた。

妻に懺悔を強ひて、妻の過去のすべてを知つたかれは、前よりも一層妻を愛することができたであらうか！さらに懺悔を強ひた男に對して、女は前と同じ愛をさゝげることができたであらうか！

「これではいけない」と思つたかれは氣を替へる方法としてよく二人で不動あたりから、競馬場や、玉川あたりまでも散歩に出かけて行つた。しかし結果はいつも憂鬱に終つた。二人は銘々ちがつた二つの世界を思ひながら歩いてゐた。

またしてもかの女の外出が頻繁になり、家のなかの目ぼしい懸物や道具類までが金に替へられるやうになつた。そのたんびにかれは女を罵つた。女も敗けてはゐなかつた。男の手には蚯蚓腫れや引つ搔いた傷の跡が絶えなくなつた。

「あなたは手出しをなさらないだけ感心だわ。」女はいさかいの後によくさういつた。それでもすこしくどく經濟のことなどで女を叱ると「お互にもう嫌氣がさしたんでせう。わたしいつでもあなたのものでなくなつて上げるわ。わたしはわたしですきな人をいくらでもこしらへるわ」といつてはかれを睨みつけるやうなことをした。

或る日かの女は朝から外出して夜になつてもなかく歸つて來なかつた。かれが戸を締めて寝ようとしてゐるところに妻が俥に乘つてかへつて來た。

「お前はいつたい今ころまで何處にゐたんだ。」
「何處へつてわたしだつて行きたいところは幾らもあります。」
「何處へ行つたのだ。誰と歩いてゐたのだ！」
「あなたわたしの貞操を疑つてゐらつしやるのね！」
「お前の貞操！お前に貞操が……」
「あなたはまたそんなことを……あなたは……」女は出し抜けに鏡台の上の剃刀を掴んで男に突つかゝつて來た。女は幽靈のやうな顏をしてゐた。
「馬鹿ッ、何をする！」かれは立ち上つて行つて女の太腰を蹴つた。女は椽側からころげ落ちて仰向きに倒れた。かれはなほも飛びかゝつて行つて女の髮を鷲掴みに掴んで土の上に二三度女の顏をこすりつけた。蹴る、擲る、罵る。男は惡鬼のやうに狂ひ立つた。かれは生まれて初めて女を蹴り、擲つた。
「勘忍して、わるうございました。」女は剃刀を棄てゝ泣いた。
一時間の後には女は男の腕に抱き起されてゐた。
「わたしあなたをほんたうに突くなんて氣はなかつたのですよ。だつてあなたはまたわたしの一番苦しいことを仰つしやるんですもの。」女はハンケチで顏を掩ふた。
三度目の夏が來た。
かれは職を求めるために毎日のやうに履歴書を書いては心あたりのところへ送つた。しかし一度仕事を失つたが最後なかなか思はしい仕事は見つからなかつた。つい氣が欝してならぬので近所の碁會所へ出かけて行つた。
瓊子はこのころでは外出もしなくてたいていは椽側の古びたソォフアの上に疲れ切つたからだを横たへてゐた。それは

女がはじめてかれの家へやつて來た夜二人が凭りかゝつて燃ゆるばかりの戀に夜を更かしたソオフアであつた。
蛙が近くの田圃で鳴いてゐた。

「人を戀はずたゞ山を戀ふつばくらめいづこゆきけむ」

女はそんな歌をうたつてはぢつとたゞ一人で懶うげな空を見つめてゐた。ヒステリイのやうに空を見ては涙を落すこともあつた。

「わたしは過去においていろ〳〵な人をも裏切り、人にも裏切られ、恥づべきかぎりのことをした。けれども鳥飼に對してはわたしは自分にそれほど責むべきことがあるとは考へない。わたしの魂はけがされてはゐない。鳥飼はわたしを愛してくれた、誰れよりも、どの男よりも。しかし、しかしわたしの過去といふものがどうして消すことができよう。わたしが十六の時鳥飼に逢つてゐたら、鳥飼も幸福であり、わたしも幸福であつたらうに……」かれはそのころの日誌に女がかう記してゐるのを見た。

「男つてそんなものだらうか。わたしは世界に鳥飼よりやさしい男がゐようとは思はぬ。鳥飼は無我の愛の實行者である。わたしは鳥飼を僞善者だとは思はぬ。しかし鳥飼でさへわたしの過去をゆるしてくれることはできない、わたしは鳥飼に頼つてこそよみかへらうと思つたに……男はみんな同じ男なのだ……わたしは人間に生まれたことが寂しくてならぬ。」かの女はかうも書いてゐた。

男は毎日のやうに仕事を探しに歩いた。しかし世間はみな冷たかつた。

かれはたうとう懐にわづかの金を入れては兜町へ通ひはじめた。

女は自分に拵へて貰つた帯だの冬の物だのを典してかれのために金を拵へてくれた。そして朝早くから不動さまへ出かけて行つてかれの就職口のために祈つてくれた。夜になると自分で御籤を拵へては翌日の相場を占つてくれた。不思議と

妻の占ひは當つた。兜町からのかへりにはかれはその日儲けたわづかの金で妻とかれ自身のために浴衣だの、髪の道具だのを買つて妻をよろこばせた。もと〳〵相場のやうなことはかれには何の興味も持てなかつた。しかしかれはあの人いきれの中に押し込められて手を振り、聲を嗄らしてゐる喧騒のうちに呼吸してゐる間だけは窒息しさうな憂欝さからも救はれるのであつた。つひわづかの金を拵へては兜町へ出かけて行つた。

憂欝は永久に二つの魂に巣食ふてしまつた。どうにもしようのないわびしさがかれらの魂をつゝんでしまつた。

兜町の運がよくて珍らしく小金が懐のなかへ轉げこんで來た。

「あなたそのお金はちつと持つてゐて、それを儉約して使つてゐる間に仕事を探してはどう！」浪費者の妻がめづらしくも殊勝なことをいつた。そして不動さまのおかげでしたよといつては御燈明を上げたりした。

「可憐なる妻よ。」かれは涙ぐましい氣にもなるのであつた。

「これくらゐの金はいつでも出來るよ。」かれは環子と二人づれで常陸の大洗まで出かけて行つた。

かれらは近ごろになく明るい幸福をとりもどした。濱には一面に防風の花が咲いてゐた。女は磯の草の葉を嗅いではかがやかな眼でかれを見た。

女は海にはいりたいといつた。かれは女を抱へて波のなかにはいつて行つた。大きな波が來るたんびに女はきやつ〳〵と叫んでは小娘のやうにさわいだ。かれらは濱の砂を堀つては小半日そこに寢ころんだり、那珂川の方まで松林のなかを歩いて行つた。

「わたしあなたと二人でかうやつて松原を歩いてゐると何だか今日が二人の初戀のやうな氣がしますわ。そしたらどんなにうれしいでせう。」

「馬鹿なことをいふのだな。お前は……」

「えゝわたしいつでも初戀ばかりだつたらいゝだらうと思ふんです。」
「浮氣だなあ……」
「えゝさう。だつて初戀には過去といふものがないんですもの……」
二人は松林のなかゝら無線電信局の横を通り拔けてふたゝび濱に出た。そこでは濱の男たちが荒波をくゞつては鮑だの榮螺だのいろ〳〵な海草だのを取つてゐた。波から上つて來た男たちは靑い海原を背景として焚き火にあたつてゐた。瓊子は漁夫たちから榮螺を買つてはその焚き火のなかで燒いて鳥飼と二人で笑ひながら砂の上にしやがんで喰べた。
「いつまでも東京へはかへりたくない。」とも女はいつた。
目黑の家へ歸つて來ると、そこには以前にも增した憂鬱がかれらを待つてゐた。
そこには小田原の或る邸へ厄介になつてゐた瓊子の叔母からの金の無心が來てゐた。その翌日には須賀子が母をたづねて來た。そして何か言ひ合つては母を罵つてゐた。
「どうしたんだい？」
「わたしたち二人だけで大洗に行つてゐたことを誰かが話したんでせう。それであの人たちはやつぱり二人のことを妬いてるんですよ。あの子ももう子供ではありませんからね。」
かれはたゞ俯向いて考へこんだ。
仕事はなし、故鄕に相談してやつた金のことについては返事も來なかつた。瓊子と一緒になつてから蒐めた本も本箱も洋服簞笥も金に替へられてしまつた。
瓊子は何處かへ仕事を探したいといひ出した。
かれは女を手離すことを恐れた。しかしかれらは賣り拂つて金に替へるべき何物をも持たなかつた。二人のうち誰かゞ

一日でも早く仕事を求めなければかれらは餓死するの他はなかつた。妻は最後まで大事に持つてゐた綴の帶一筋を賣つてしまつた。その金の一部分は求職欄の新聞廣告料に使はれた。

三日目に妻の勤め先がきまつた。大磯の某子爵の別莊のハウス・キイパアといつた風な役目がかの女の仕事であつた。女は大磯へ行つてしまつた。

女からは最初は幸福さうな手紙が來た。かれは金を都合しては帶揚げだの、ハンケチだのを送つてやつた。間もなく女からは寂しくてたまらない、子爵といふきたならしい老人の女好きらしい眼がいやだなどといふやうなことを書いて來た。

かれは妻と別れてゐる寂しさに耐へなかつた。

「瓊子！瓊子！」かれは夜ひとりで眠る時そつと妻の名を呼んだりした。

半月ばかりも經つてからかれは郊外のSといふ大富豪の管理人として雇はれることになつた。S氏は銀行や會社を十五六も持つた英國流の紳士であつた。かれがS氏方の監理人となる間もなく瓊子もまたS氏に望まれて令孃たちの面倒を見るやうにといふことになつて、かれと一緒にS氏邸の一隅に小ひさな家をあたへられた。

かれらの生活にもふたゝび惠まれた日が來さうに思はれた。

しかしかれらはやつぱり不運であつた。或る日かれらは二人とも一緒にS氏の邸から追はれた。S氏の邸内へ叔母が一度、須賀子が二度かれらの家をたづねてくれた。しかしそんなことがかれらをS氏の邸から追放する理由にはならない筈であつた。かれはその理由を解するに苦しんだ。

二人は築地の或る路次の二階を借りて一先づそこに落ちつくことにした。もと支那人が住んでゐたらしく低い天井も壁も毒々しい赤紙で張りつめられて、ひどく油に汚れてゐて、そこいらの空氣までがまだ大蒜の香を漂はせてゐた。夜は南京蟲に襲はれて首のまはりは腫れ上つてしまつた。その毒々しいほどな赤い紙につゝまれた壁や天井は息苦しいほどに人

間の感覺を獅噬するやうに思はれた。そのやうな生活のどん底にゐてもかの女の生活慾はすこしも衰へなかつた。かの女は發作的にまるで狂人のごとくかの女の夫を熱愛した。

町には松飾りの仕度にとりかゝつてゐる家もあつた。いまにも降り出しさうな雪空の日がつゞいた。男はもう外套も持たなかつた。女は一枚の外出の着物も持たなかつた。寢るにも起きるにもかれらは着のみ着のまゝであつた。夜になると男は路次の小屋を出て一日分の食糧を集めて來た。

「結句これが仕合せかも知れないわ。着物もないんだから外出はできないし」さういつては女は終日部屋のなかへ寢ころんでゐた。蠟燭を點しては南京蟲退治をはじめたりした。女は大磯の邸から貰つて來たといふトランプを化粧道具のなかから取り出して男と二人で終日トランプを弄ぶこともあつた。

「あなた大變よ、もうがまぐちのなかには五十錢もはいつてはゐませんよ。」女が頓狂な聲を絞つたのは年の暮もいよ〳〵押しつまつた日の午後であつた。かれは默々として立ち上つた。そして外套もなしに路次の家を出た。雪が落ちてゐた。日暮れころになつてかれは二百圓の金を懐にしてふたゝび默々として歸つて來た。かれは惡漢のやうな暗い顔をして妻の前に二百圓の金を投げ出した。

「どうしたの？こんなにたくさんのお金を！」

「S氏に逢つて來たのさ。だつてお前には大磯の伯爵邸に立派な職業があつたのをわざ〳〵ことはつて歸つて來たんだらう。だからわしにはともかく、お前に對してはこれくらゐの解職手當をくれるのは當然なことぢやないか。」

「ゑらいわ、まつたく。凄いのね、あなたは。わたし感心しちやつたわ。無我の愛なんていつてもこんなに苦しくなつちやねえやつぱり。」

「無我の愛だけは止してくれ、馬鹿々々しい。」かれは吐き出すやうにいつた。

「だつてあなたはあの工場でも勞働問題ばかり研究してゐたんでせう。だからやつぱしこんな時は役に立つのね。」

「…………」かれはそこに突つ立つたまゝ窓の外を眺めてゐた。かれは寂しくてならなかつた。「正當の要求！　しかし何といふ悲しい要求であらう！」どこかへ行つて自分一人で泣けるだけ泣いて見たいと思つた。

大晦日の夜久し振りでかれらは幸福さうな顏をして人通りのなかを歩いてゐた。しかしそれもほんの束の間の幸福であつた。十圓紙幣を出して買ひ物をして八圓餘りのつりを貰つた。たゞそれだけの金をのこして、かれらは二三日前にS氏から貰つて來たばかりの金を落してしまつたのであつた。

憂鬱はさらに深い憂鬱を誘ふた。おまけにかれはそのころから急にはげしい動悸を覺えるやうになつてゐた。

瓊子は或る日外出して夜になつてかへつて來た。そんなことが二日つゞいた。叔母とかの女と二人でタキシイを走らせてゐたといふことをかれは偶然にも知ることができた。しかしかれはもう妻を叱ることもできなかつた。

かれも妻も心あたりの人たちに當てゝは手紙を書いたがどこからも返事すら來なかつた。

有樂町の簡易食堂の朝飯を妻と二人ですまして往來に出た時かれらの懷にはすつかり集めて三圓幾何の金しか殘つてゐなかつた。かれはその朝房州へ立ち、妻はお茶の水の宿屋に奉公することになつてゐた。かれは瓊子と別れるために京橋まで一緒に歩いて行つた。そして停留場の前に來た時女に二圓をわたした。

「だつてわたしはお茶の水までさへいけばいゝんです。あなたは汽車でゆくんですし、からだが惡いんだから藥だつて買はなくちやなりますまい。」女は二圓の金を男にかへした。

「僕こそ途中まで歩いて行つて、金があるだけ汽車に乘ればいゝんだから。」

「駄目です。だつてあなたはからだが惡いので海岸にいらつしやるのぢやありませんか。そんな人がどうして歩けます。」

女はどうしても金を受けとらなかつた。結句女は男から五十錢銀貨一枚を受けとつて別れた。

「氣をつけてくださいよ。」と電車の窓で女は涙を流した。

房州に行つたかれは東京の大地主K家の別莊番といふことで、養生かたく働かせてもらうといふ約束であつた。しかしとても養生どころのさわぎではなかつた。かれの肉體はかれが想像してゐたよりもずつとひどく衰へてゐた。滿洲で脚氣を病んだ時と同じやうに足は重く呼吸は苦しかつた。それでもかれの仕事はなかく激しかつた。庭の掃除、水汲み、風呂焚き、薪割り、煉瓦運び、山腹の井戸まで歩いて行つては氷てついた釣瓶の綱を掴んで水を掬み上げなければならなかつた。老主人は事々にかれを口汚く罵つた。女中たちは容赦もなくこきつかつた。

かれは幾度か躓いては倒れた。幾度か木蔭にしやがんでは今にも息詰まりさうな呼吸を鎭めた。そのやうな光景を見出した老主人は不正直者だ、食はせ者だといつて鞭打たんばかりにして叱りつけた。

かれは存外人間の生きる力の根强いことに驚いた。苦しんでも、罵られても、絕望しても、心臟は破裂しさうな病體でゐても、鞭打たれても人間は生きてゐる。かれは悲しみにも、絕望にも忍び得るかれ自身の力を思ふては何となき氣强さを感ずることもあつた。しかしたまらなく寂しかつた。

四十日の後かれはふたゝび霊岸島の波止場へなまぐさい魚の蓙包み（こもつゝみ）と一緒にかゝへあげられた。かれはもう歩くことさへできなかつた。

かれは俥をやとつて青山の知る邊をたよつて行つた。かれの病勢はたゞつのるばかりであつた。お茶の水の瓊子のところへは危篤の電報が打たれた。しかし瓊子は二日經つても來てはくれなかつた。

かれは俥に乘つてお茶の水に瓊子をたづねて行つた。

「主人がゐませんのでそんな女の方がこちらにおいでかどうかわかりません。もつとも軍人さんの未亡人といふ方が一人おいでゞしたがたゞ今は出かけてゐますので。」

かれは宿の親戚の女といふ人の口裏から判斷して瓊子が軍人の未亡人といふ觸れ込みで働いてゐることを想像することができた。

かれはその上いつまでも玄關で爭つてゐることもできなかつたので、ふたゝび俥で歸つて來た。頭と胸には氷のかけらを抱きながら。

その翌日の朝瓊子が突然風呂敷包みを一つ抱へて青山の家をたづねて來た。

かの女はお茶の水の旅館からも追ひ出されたのであつた。

かれは女を責めることもしなかつた。かれはあまりに疲れてゐた。

行くところまで二人は一緒に歩いて行かなければならなかつた。

×

秋の瀬戸内海に沿ふた鳥飼の靜かな故郷では村の人たちは寄るとさわると東京から女を連れて歸つて來たかれのことについて噂し合つた。

叔母たちはやつて來ては「あないに亂暴者ぢやつた男がこないにおとなしうなつたのはみんなあんたのおかげぢや」などといつて瓊子を褒めた。

「美しい嫁をつれて來たで鳥飼の旦那も今度は村に居つくぢやらう」などと村の人々は話した。

亡くなつた母が丹精した築山には紅葉がかゞやいて家のまはりには曼珠沙華が赤く燃えてゐた。

「どうだね落ちつけさうかね。あんまり寂しいので……」

「いゝえわたしもう東京のやうなうるさいところはこり〳〵です。わたしこんな靜かな田舍に來てはじめて自分のほんた

うな生き方がわかつたやうな氣がします。」かの女は心から田園の生活をよろこんでゐるらしかつた。カルモチンを飲まないでは眠れなかつたのが、今ではカルモチンの入れ物も忘れてしまうやうになつてしまつた。

　松男も梅二郎も日毎かの女になづいてゆくやうになつた。

「松ちやん梅ちやんてクラシツクないゝ名だことね。わたし二人とも大好きよ。あなたよりよつぽど美い男になつてよ。」

そんな冗談などをいひながら夜おそくまで二人の子供のために袷を縫つてゐた。

「わたしは幾年振りでこんなにつめて針を握つたでせう。」女にはあまりに靜かなかの女自身の生活が不思議にさへ思はれるのであつた。

　たゞしかし瓊子には島飼の姉や妹たちが滅多に訪ねて來ない餘所々々しさが腹立しかつた。

　東京に家も持たず、親も持たないといふことがいつもかの女のひけめであつた。その弱味を持つてゐるだけにかの女はきやうだいたちの冷たさを人一倍強く感ずるのであつた。

「お前一度姉の家にでも遊びに行つて見たらどう？」かれが、或る日、かういつたことからして瓊子は色を眞つ青にして怒つた。

「あなたは島飼家の主人でせう。あなたはもうすこし御きやうだいに對して權力があつていゝ筈でせう。わたしの方から頭をさげてゆく必要はない筈です。」

その結果はかれが田舍に來てからの初めての言ひ爭ひになつた。

「わたし死んでやるからさう思つたがいゝ。」

「東京へさへ歸れば何でもないんだ。こんな家滅茶々々に汚してやる。」

「井戸にはまつてやる。」

「髮を切るから……」

かの女が泣き喚く甲高い聲が屛の外まで洩れきこえた。竹藪の蔭、門の外、裏の畑、そこいらには村の人々が集まつて來て立聽きをしてゐた。

「鳥飼の大將もゑらい女を連れて來たもんだなあ。」

「あんな女ぢや松ちやんや、梅ちやんも毒を飲まされるぞ。」

「ごろつきか、淫賣かなあ。」

村の人たちはかの女を頭からけなし始めた。

瓊子は毎日からだの具合が悪いといつては寢ころんでゐた。そしてしまひにはかれと同じ部屋に眠ることさへ拒むこともあつた。

瓊子と叔母との間には頻繁に手紙が交換された。

「オバキトクスグカヘレ」の電報が來た。

かれは驚いて瓊子をつれて故郷を立つた。しかしそれは瓊子を呼び出すための叔母の苦肉の策に過ぎなかつた。叔母は元氣で働いてゐた。

かれは一先づ瓊子を東京にのこして自分一人で故郷に歸つた。

十五六日後れて瓊子はふたゝび田舍に歸つて來た。かの女は見ちがへるほど面やつれしてゐた。

夜になるとかの女は部屋のなかを狂ひまはつたり、人の名を呼んだり、すゝり上げて泣いたりした。

「どうしたのだ。おい、しつかりしろ。」かれは泣き出さんばかりにして女を抱いた。

かれは女を抱へて廣島の病院まで出かけて行つた。

かの女の入院費をこしらへるためにかれは田舍へかへつてきた一枚の畑を賣つた。

女が病院から歸つて來たころは低い花崗岩の山々には小春日の柔かな光りが漂ふてゐた。

女は大分氣が落ちついてゐた。

「花壇でもこしらへたらどうでせう。氣がのんびりしないでせうか。」

女は東京から持つて來たバスケツトのなかからいろ〳〵な西洋草花の種子を取り出しては築山のまはりに播いた。

「あの目黑の家の庭に美しい花が咲いてゐたでせう。これみんなあの花の種子よ。」

男も女に手傳つて種子を播いた。かれら二人の樂しかつた當時の思ひ出を新たにするやうで何となしに明るい心になつた。

「今播いとくと來年の春の彼岸には美しい花が咲きますよ。屹度こちらの方があたゝかだからいゝ花が咲くでせうよ。」女は一つ一つ丹念に土を細かに碎いてはかけて行つた。

その夜は珍らしく町に活動寫眞があるといふのでかれは女と二人で一里あまりの道を步いて行つた。寫眞はアメリカ物で一人の女が幾人もの男をだます、男は自殺をする、或ひは道樂者になつてしまう。最後にその女が鐵道自殺をするといふ筋であつた。

「あの女は惡い女だ」とかれは活動のかへりに話した。

「だまされるあの男たちが馬鹿なんだわ。わたしあの男たちをだまして、おしまひに鐵道自殺をした女がどれほど可哀想だか知れぬと思ふわ。」女はそんなことを話しながら男のうしろからついて來た。「男はだまされるやうに見えますが、たいていは男がわるいのよ。つひこつちが同情して氣が弱く、一度でもゆるすと男はもう永久に女を苦しめるんですもの。女があゝなるのは無理がないわ。」

女は相かはらずからだが惡いといつては寢てばかりゐた。親戚の人たちはほとんど寄りつかなくなつてしまつた。

「あなたはまつたくお人よしね。良飼家の主人でゐながらまるで押しがきかないのね。」女は寢そべつたまゝ、こなひだ播いたばかりの花壇を見ながらよくそんなことをいつた。

「それだからいゝところもあるのね。あなたは十日でも二十日でもわたしが……こんな話はよしませう。だけどさ、わたしまつたくあなたのやうな氣の弱い旦那さまを持つてこんな田舍に年をとつてしまふのはいやになつちやつたわ。わたしは村の人がわたしを何といつて蔭口を利いてゐるかちやんと知つてゐてよ。あんまりひどいことをいつたらわたし大風の晩に村中に火を放けてやるわ。あなたわたしと親戚の人たちとどつちが可愛いゝの……」

瓊子はどうしても故郷に置くべき女でもなかつた。また居べき女でもなかつた。

「わしは何も彼も失つた。しかし瓊子一人さへ得れば望み足れりだ。」かれはさう思つた。

裏の松山をこめて時雨が煙るやうな日がつゞいた。機を織る音などが枯れ〲の桑畑を越えてきこえて來た。

「わたしこんな刺戟のない穴倉のやうなところに住んでゐたら窒息しさうだわ」女は裏庭をへだてゝ倉の白い壁の面にしつとりと降り灑いでゐる雨をながめては深い溜息をついた。

女は夜つぴて狂ひ泣きに泣いた。そして晝はいちんち寢ころんでゐた。

「ぢやお前東京に歸つたらどうだ。」

「あなたにそんな決心がついて。」

「わしは決心した。東京へ行かう。」

「ほんとに?」女は飛び上つてよろこんだ。

「この家も何も彼も一つのこらず賣り拂つて東京へ歸らう。」

「まあうれしい。あなたはえらいわ。」女は急に男の首を抱きしめた。

女はともかく男より先に東京へ歸ることにして、たゞ一人で立つた。

「あなたわたしの俥が見えなくなるまで見送つて頂戴！」

男はうなづいた。そして二階の窓から女の俥が松山の裾に隱れるまで見送つてゐた。女は俥の上からハンケチを振つた。

女を東京へ送つた日かれは、殘りの田地家屋一切を賣り拂ふことを親戚の人たちへ話した。憤る者、罵る者、泣いてとめようとする者。かれはたゞ一人攻撃の矢面に立つた。

「お前はあの狐にだまされてゐてまだ眼がさめぬのか。お前は憑き物がしてるのだ。お前は狂人なのだ。でなくてはどうしてあんな女を……」

「兄さん、家だけは賣らないで下さい。わたしたちは佛さまを拜みに來る家もなくなる。この結構な家を……」かれは妹の涙と言葉を一番心苦しく思つた。

家は賣り物に出された。家財道具一切も。

亡くなつた母が嫁入りの時持つて來たといふ古風な金蒔繪の鏡臺に不圖映つたかれの顏を覗いてはかれは眼を伏せてしまつた。

かれはそれ等の思ひ出の多い父や母の道具を擔ぎ出してわい〳〵いひながら歸つてゆく人たちの姿を見るに忍びなかつたので二三里離れた或る濱の方へ歩いて行つた。

幾年にも思ひ出したことのなかつた老婆の占ひ者のことを考へた。

八十を越した老婆は濱の村はづれの小高い松山のなかに住んでゐた。祈つてゐる間に老婆は神がゝりのやうな狀態にな

つて前にのめつてしまつた。彼は無氣味なほどしやがれてゐた。
「この女には遠い先の世から幾度となく生まれかはり死にかはつて怨みをこめた男がある。その男がつきまとうて輪廻の世界をめぐつてをる。それぢやによつてこの女は男といふ男に辛抱できず、次から次へと男を苦しめて歩く。この女はみめかたちこそよけれ恐ろしい惡魔の生まれかはりぢや。」かれは老婆の言葉をいろ〳〵に判斷しながら歸つて行つた。
かへつて瓊子がいぢらしくさへなつた。
家田畑の賣り渡しの登記がすんだ翌日であつた。かれは東京の友人から瓊子が或る男と一緒に逃げてしまつたといふ通知を受けとつた。そしてさらにその翌日には對手の男はかれと同鄕の寺見であるといふこと、それから寺見とは一年も前からすでに關係があつたといふことまでもわかつた。

×

かれは瓊子の後を追ふて東京へ出た。
寺見は社を止めて、やはり東京附近でどこかの社に勤めてゐるらしかつたが行方は知れなかつた。
夜となく晝となくかれは瓊子をさがして歩いた。瓊子の叔母も瓊子や寺見と一緒に隱れてゐるといふことの見當はついたがどうしてもわからなかつた。
かれはたゞ到るところで瓊子が逃げた原因をかれの狂暴性にあると決められてしまつた。
「あの人はあなたと一緒にゐると乾度殺されるにちがひないといつてゐましたよ。あなたは時々狂人のやうなことをなさるといつてゐましたよ。あなたはずゐぶん凄い腕でSさんから金を取つたりしたさうですね。」かれは瓊子をたづねて歩いた先々で乾度同じやうな言葉を聽かされた。

かれは狂人といふ言葉を聞くたびに暗い心になつた。

まる一ヶ月の間かれは東京中をさがし歩いた。

かれは瓊子を斷念しなければならないと思つた。もうかれは囊中無一物に近い狀態にあつた。東京を去る最後の夜であつた。かれは故郷を立つてから一度も脫いだことのない背廣姿のまゝ芝公園のなかを歩いてゐた。かれはその夜の宿賃さへ持つてゐなかつたので、そこのベンチに一夜を明かすことにした。かつて瓊子と初めて瞥見した同じベンチの上に。そして銀の十字架を女の手の平に載せてやつたベンチの上に。冬の海には火がまたゝいてゐた。

かれはその夜そのベンチから交番へ連れられて行つた。かれは一夜を警察の留置場に送らなければならなかつた。

東京を去つたかれは一燈園にもゆき、膳所の寺にもゆきほとんど半年の間瓊子を殺すべきか、瓊子を愛し盡くすべきかについて惱みつゞけた。瓊子を憎むことの深い時ほど一方ではかれは一層深く瓊子を愛してゐることに氣付いた。松阪女史に海賊と呼ばれたほどかれの胸は厚く、かれの腕は太く堅かつた。かれはその鐵のやうな肉體を抱いてかの女を憎み、かの女を愛した。

半年の後かれはまた何の目あてもなしに東京へ上つた。一燈園の生活、膳所の寺の生活は瓊子に對するかれの憎愛の念をかなり平靜にすることができた。かれはもう瓊子を探すつもりでもなく、瓊子に對して最後の言葉を投げかけるつもりでもなくたゞ漫然として上京した。何となくかれは東京が戀ひしかつた。

「わたしはあのころは鬼熊にでもなつてやらうかと思ひましたよ。」とかれはA博士に話した。

「さうでせう。あのころは失禮ですが、あなたはまるで氣が狂つておいでのやうに見受けました。わたしたちは密かに心配してをりました。」博士の言葉はかれに暗い心を喚び起させた。

かつて夾竹桃の花に窓の硝子が赤くなつてゐた明石の海岸の精神病院の一室が浮かんで來るのであつた。

「わたしあのころは氣が狂つてゐたにちがひないといふ人がありますが、さうでしたらうか。」かれはN氏の家に行つても、K氏の家に行つても同じことを訊ねた。

「えゝずゐぶん眼なんか狂人のやうに坐つてゐましたよ。多分……」

かれはさらに暗い心をいだいてN氏の家を出で、K氏の家を出た。

かれはふたゝび東京を立つて膳所へかへつて行つた。疲れ果てたかれはそこの病院の白いベッドの上に六十日の間夜晝の差別なく反轉しなければならなかつた。

「かなりひどい神經衰弱でしたよ。これからも當分は餘程大事になさらないといけません。……普通の人と狂人との區別ですか。そりや分るのもあれば、ちよつと醫者にもわかりかねるのもありますよ。」

「ぢや一生涯、自分でも狂人だといふことを氣付かず、世間でも氣付かないでそのまゝ死んでしまうやうな人もあり得るわけですね。」

「まあそんなこともあり得ないとはいへますまいね。」

「さうするといつたいかうやつてみんなが苦しんだり、悲しんだり、憤つたりしてゐるんですが……なかには自分では正しい意識、道徳觀念の上から憤つたり、惱んだりしてゐるつもりでゐても、實はその人は最初から發狂してゐたんだといふこともありえますね。さうするとそんな場合には、一生思想的にも、肉體的にも苦しみ悶へたといふことが實は發狂から來てゐることで、何の價値もなかつたといふことになりますね。」

「そんなこともあり得るかも知れません。」

「さうだとすると……」かれはベッドの上に仰臥したまゝちよつと窓の方を見た。それは想像するだにあまりに殘忍な人生であつた。

夾竹桃の花が眞つ赤に窓に映つてゐるやうな氣がしてならなかつた。しかし視力の衰へてしまつたかれは窓の外の青い木の葉を見分けることさへできなかつた。

×

日の暮れ方であつた、おかな婆さんは時代祭を見て息子と二人で車を挽いて鞍馬口の方へかへつて來た。そしてけさかれに頼まれた二枚の子供の綿入れを置いて行つた。

「ほんまにえゝ柄ぢやな。送つてやりやはつたらどないになあ……」婆さんは幾度も綿入れをひつくりかへしては見てゐた。

夜のお勤めがすんでからかれはいつものやうに濡れ縁の端にしやがんで京の町をとりかこんでゐる山々の黝い姿をながめてゐた。

かれはこのごろいつも鞍馬の方の山のいたゞきに星のやうに燃えてゐる赤い火をながめては、何となしに深みゆく洛外の秋のわびしさに浸されることをよろこんだ。

今夜も黝い山のいたゞきには空に接して赤い火が燃えてゐた。

それをながめてゐる間に、けさ久し振りに思ひ出してゐた明石の海岸の精神病院の夾竹桃の赤い花のことがふたゝび不圖浮かんで來るのであつた。

「一切は存在するか、存在しないか。正しい意識の上に生きてゐるか、狂つた意識の上に生きてゐるか。もし狂つた意識の上に生きてゐたのだとしたら！」

しかしかれのこのやうな神經衰弱的な發作は夜が更けるにつれて霧のやうに消えてしまつた。

かれは二枚の子供たちの綿入れを新聞紙につゝんで、けさ選り分けた栗と一緒に古い風呂敷につゝんだ。

「いや一つづゝに拵へてやつた方がよろこぶかも知れぬ。」かれはさう思つたので、今度は栗を二つに分けて、綿入れも一枚づゝにして二つの小包を作つた。二人の子供たちが銘々の小包を一つづゝかゝへて喜ぶであらう姿がかれの眼に映つて來るのであつた。「鳥飼松男樣」「鳥飼梅二郎樣」かれは二つの小包の名前を認めた。そしてぐる〳〵と糸でからげてしまつた。

佛壇の前にちよつと合掌して、御燈明を消して、夜具を引きかむつて寢た。

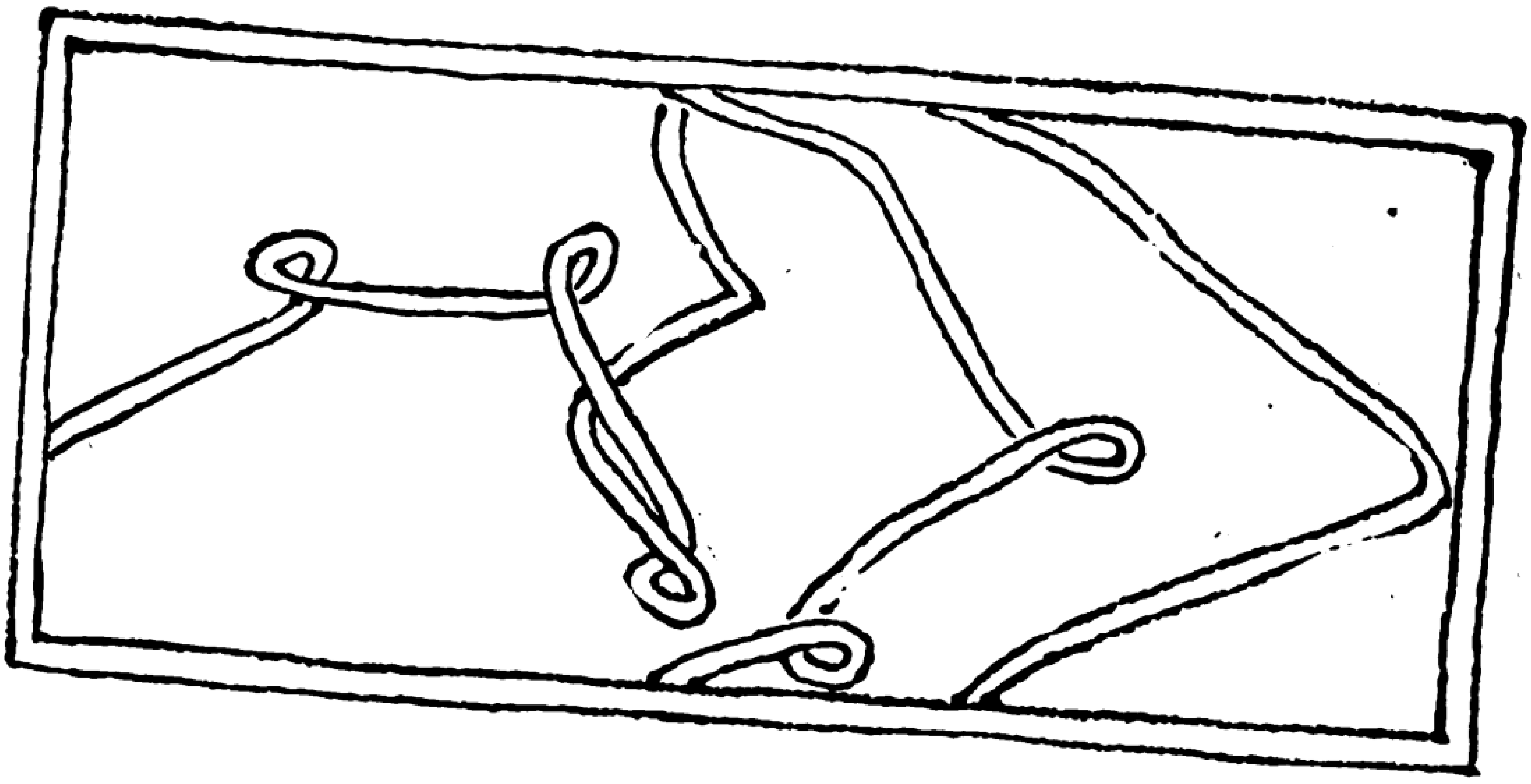
「明日の朝は霜だな!」かれは薄い夜具にくるまつたまゝ冷たい足の指をごし〳〵とこすつた。

ちようどその時裏の方でぽとりと栗の實の落ちて地を打つ音が聞えた。

秋の夜は死のごとく靜かであつた。

「明日の朝またあの栗を拾つてやらう。そして尙一度小包を解いて新らしい栗の實も入れてやらう。」かれはうと〳〵と眠りながらそんなことを考へてゐた。

――一九二七・八――



浮世床小景

（三馬原作）

久保田万太郎

人物。

主人。
下剃。
客の一。
客の二。
客の三。
客の四。
客の五。
客の六。
客の七、

客の八。
客の九。
客の十。
その他

場所。

江戸市中。梳髪舗「浮世床」の内部。

時。

冬のはじめ。いまの時間にして午後三四時ごろ。

第一景

（象戯をさしてゐる客の一、客の二。——外にそれを見てゐる二三人。）

客の一。そこでお手に？

客の二。お手にはやま〳〵王が三枚飛車角六枚……

客の一。戯談だらう。

客の二。香桂さきに立たず、金角寺の和尙……

客の一。銀があるか?

客の二。銀も一分や二分はあり。

客の三。(側から口を出す)おツそろしく渡したもんだな。

客の一。構はねえのよ、駒で象戯はさゝねえ。

客の二。駒でさゝねえで盤でばかりさすか?――いゝだらう。それも。――それなら、大丈夫、負けつこねえ……

客の一。うるせえな。分つたよ、もう……(駒をすゝめる)

客の二。ふん、入王とさせまいか?――歩をなれとうて……

客の一。まづ金をいたゞき女郎衆と……

客の二。惜しい成金をとられたぞ。――惜しい成金を……と、えゝかうしろ。

客の一。待つたりよ。――これはこゝにゐたんだな?――そんならこの香でこの金を取らう。――かうは逃げめえ。

客の二。何だ何だ、どうするんだ?――どうするんだ、そんな……

客の一。…………

客の二。あれだ。――手めえの駒で足りねえで人の駒までうごかしやアがる。――一人で兩方さす、器用だよ。――器用だよ、お前は。――とんだ若殿さまのお相手だ。――それでいゝか?――それでいゝのか?――何でも佛のいふ通りにしてやらア。――よくば、それ、引ッたくれんけの紫財布と、かうすれアどうだ?

客の一。來たな、おつに。――いゝとも、いくらでも來ねえ。――どうとも好きに責めねえ。――責めらるゝが勤めの代り、だ……

客の二。おまへがたも精出して、お責めなさるが身のお勤め。——勤めといふ字に二つはない、テテン……
客の三。（口を出して）そこへ逃げる奴があるもんか。——その隣へ逃げてむだ駒をつかはせねえつてことがあるもんか……
客の四。いゝ手があるちやアねえか。——そんないゝ手のあるのに……
客の三。目がくらんでるからみえねえんだ。
客の一。うるせえな、口を出すなつていふのに……
客の二。默つてくたばれ、何にもいふな……
客の一。何にもいふな、人ではないわ……
客の二。や、何にもいふな、人ではないわ……と、それどこへ行く？
客の一。こゝへ逃げる。
客の二。それどうだ？
客の一。もう一つ……
客の三。いけねえ〳〵……さゝ逃げちやアいけねえ……
客の四。それぴたりだ。
客の二。よんやまかせろさ、と……
客の一。よんやまかせろさ、と……
客の二。それ、よんやまかせろさ、と……
客の一。それ、よんや……

客の三。そ、そこだ〳〵。――油断しちやアいけねえ、そ、そ……

客の二。はて、何にもいふな、人ではないわ……

客の一。や、人ではないわ……と取る……

客の四。いゝか〳〵、そんなことをして……？

客の二。そりや、何にもいふな、人ではないわ……と、さアどうだ？

客の一。…………………

客の二。どうだ、さア？

客の一。（未練たらしく）さうか、畜生……

客の二。駄目々々、話にならねえ。――さ、つぎは誰だ？

客の三。よし、俺が敵をうつてやる……

客の四。いゝえ、待て、俺が出る……

客の三。まア待て、俺が……

客の二。へん、へぼめらが。――さア誰でも来い。

客の三。（客の一に）さ、退いた〳〵……

客の二。強いものとさすとへぼ將棋の筋が切れるとなア。

客の三。何をいやアがる。――その口を忘れるな……

（捨臺詞いろ〳〵。――客の二、客の三とまた勝負をつゞける）

第二景

(客の五、客の六、客の七)

客の五。(外を指して)みねえ、おい、あれを。――深い笠をかぶつて、觸つたらやぶけさうな羽織を着てあるいてゐる
あれが三十箇所の地主さまのなれの果だ……

客の六。角のどらか?

客の五。さまアねえや。――心がけが悪いとみんなあの通りだ。

客の六。が、いたはしいもいたはしい。

客の五。あの親父さんて人は伊勢から出て來て一代に仕上げたんだ。――その代り利勘で、今日は大分さかながみえるから、ちツと奢つて奉公人に食はせようといふ奴が、大きな皿に鰯なら五匹ばかり、尾頭をならべて、鰯が小笠原流にしやにかまへてゐようといふものよ。小鰭なら今日買つて燒いて置いて、自身にあすの朝籠を下げて河岸へ行く。河岸中をぐるぐるまはつても値が出來ねえから、土大根の折を買つて來て、昨日燒いた小鰭を一匹づゝ入れ、輪切大根の煮つけの、それが物菜よ。――さかなといふものは頭にうまみのあるものだと爺さんがさきへ立つて、頭からそれをもりもりやるんだから、此奴、奉公人もみんなどうしたつてさうしなければならねえ。だからものに廢りがねえ。――年中朝が茶粥で、晝が汁ばかり、夜食は澤庵、それも鹽のあた辛い奴だから二タ切で湯までの菜になる。今日は佛の日だといふのが、八盃豆腐の、平の中をゆるゆるおよいでゐようといふやつだ。――で、三度の飯の外に食ふものといへば、冷飯を干した糒の鹽いり、その中へ田舍から貰つた味噌豆を入れるといつても豆の數は鉦大鼓で探すほどしかねえ。その外に

は手めえ作りの醴、婆さんが上總ものだからたまにさつまいりといふ茶うけを拵へる。――外に奢りといふものさつぱりなしよ。――それには御先祖さまを大切に、出入のものには目をかける。――自然金が子を生んで家質は流れこむ。商ひは儲かる。――身上の出來るわけよ。

客の六。それはうちも親父もそいつてゐた。酒の出るのは夷講ばかり、平生客のあるときは蕎麥を二つ鼻のさきへ置いて、さあどうぞ、遠慮なくどうぞといつたところでたつた二つだから客も一つしか手をつけない。――と、婆さんを呼んで。ではお相伴しよう、お前も頂戴しろと半分つゝ食つたといふことだ。

客の五。それにしてもわづか三十年の間に。地面が三十二三ヶ所。土藏が三十、穴藏が二十五六、手代子供ばかり四五十人。――出入の人數からかけたら大層なことだつた……

客の六。それをたつた二三年でつぶした……

客の五。それもみんなあのどらめのしたわざだ。――現在の親の葬ひに燒香をすればつて役者の眞似をして上下でゐざりあるく。――さういふ奴だから、末始終、ろくなことは仕出來すめえと思つてゐると案の條、それ藝者だ、たいこもちだ、何だかだとさまぐ\なものが入りこむ。――茶屋だ、女郎屋だ、すべつた轉んだで内外の物入は強くなる。仲間の取遣はあがつたり大明神。――そのくせ高慢に人をみ下しの、やれ文盲の俗物のと役にも立たねえ茶點獻を鼻にかけて茶座敷ばかり何度こしらへたか知れねえ。――あゝなるのは自業自得……みんな不孝の罰だ……

客の六。（つくぐ\と）だが、それにしても、なくすといふ奴は早いもんだ

客の五。さうともよ、一文の錢だつてあだやおろさかには儲からねえが………

客の六。つまりは、だが、料簡一つだ。

客の五。さういふうちにもみねえ、なかにはあゝいふ後生樂もゐるんだ……（外をまた指す）

客の六。あゝいふ？

客の五。あの、あすこの、向側を通る二人づれよ。

客の六。あゝ、あれか？――うれしさうに肩を引ツつけて、いちやくして行くあの。――夫婦だらうか、あれ？

客の五。いづれはさうだらうが、野郎のはうの、あたまへ青黛をなすつたあのいやみな拵へはどうだ。――いまの陽氣だからいいんだ、暑い時分でみねえ、下手に額の汗をふいて色男を藍隈にする奴だ。

客の六。女も、あれア、たゞものぢやアないね。

客の五。ねえとも。――でなくつて晝日中、あんなあつかましい眞似の出來るわけがねえ。――人を人とおもはねえ擧動だ。

客の五。かゝア自慢の野育に入つた奴か。

客の六。女房野育の次第を御覽じろよ？――だが、あれも、あの女には大てい入揚げたこつちやアねえぜ、必と……

客の六。なぜ？

客の五。なぜつてさうだ。必とさうだ。――で、辛苦して、やうくうちへ引つ込の、費もたんすの鐶が鳴るといふ世界よ。――が、何だね、長えことはねえね。――よく持つて半年だね。……

客の六。何が？

客の五。あいつらよ。――半年たつと、あの野郎、必と、あれ、あの女に打捨られるからみねえ。

客の六。可哀想に……

客の五。可哀想でも仕方がねえ。――決して、あの女、あの野郎に惚れちやアゐねえ。――もとく野郎より女のはうが役者は上なんだ……

客の六。どうして分る？

客の五。どうしたつて分らアな。――一ト眼みれア、お前――

（客の七、そのばへ來る）

客の七。何だ、何を力んでゐるんだ、一人で？

客の六。（ふり向いて）あゝ隱居さん……

客の七。何をみてゐる、先刻から？――何か通るのか、外を？

客の五。通つたんで、いま。――女づれの若え野郎が高慢な面アして、いま、向側を……

客の七。何だ、岡燒か？

客の五。ぢやアありませんよ。――安くするからいけねえ、隱居さんは……

客の七。（わらつて）いゝやな、まア。――人間、人の疝氣を頭痛にやむうちがいゝんだ。年をとつちやア、もう、その氣力もねえ。――どりや行つて來よう……

客の五。どこへおいでなさる？

客の七。久しぶりに色のところへ行つて逢つて來る。

客の五。えゝ？

客の七。これだ、これだ。（ふところから珠數を出してみせる）

客の五。あゝ寺參りか……

客の七。おいらの花は惣花にしても三十六文ですむ。

客の六。何年になります、亡つて？

客の七。婆さんか？
客の六。えゝ。
客の七。早いもんだ、來年もう七年だ……
客の五。何でせうね、これで、おんなじこつても、年をとつてからわかれた女房はそれほど力もおちますめえね？
客の七。それはさうは行かない。——何といつたつてそこは恩愛だ……
客の五。ちやア、矢つ張、とき／＼は思ひ出して……？
客の七。懐しくなるさ。……といふのも、上下や帽子かいどりで仲人に謡をうたはして一しよになつた仲ぢやアない。——仲人が葛籠を背負つて左の手に鐵漿壺を下げ、右の手に酒を一升さげて來たものだ。——こつちはこつちで稼業かかへり、いまもう花嫁が來ると思ふから、豆腐を小半丁買つて來て、鰹節をかいてゐるとそのお輿入よ。——仲人が指圖してすぐに花嫁が釜の下を焚きつける、仲人が味噌を擂る。——とゞ仲人のふところから出した鰯を焼いて三々九度。——さういふ苦勞した仲だ。——跡月まゐりそこなつたからさぞ待つてゐるこつたらう……
客の五。せい／＼、まア、そのつもりでよく拜んでおいでなせえ。
客の七。からかつちやアいけない。（わらふ）——はい、どなたも御免……（そのまゝ出て行く）

第三景

（客の五、客の六、客の八、客の九、客の一、主人）

客の八。（うしろから）いつも氣のいゝ隱居だよなア。
客の五。結構人だ。
客の六。あゝいふ親をもつたせがれは仕合さ。
客の八。が、また、あのせがれもよく稼いで悧口ものだ。――あれなら身上は大丈夫だ
客の六。あれで、あの隱居も、若いときにはちつとは無駄な金もつかつたんだらうな？
客の五。なアにつかやアしねえ、口ばかりだ。
客の八。それだから悧口だ。
客の五。通人だの通りものだのつて奴は、俺にいはせれば、全體野暮だ。――その證據にはみんな末をとげてゐねえ……
客の八。むかしの何とかいふ女郎も通人とは廓に入らねえのが通人だ、女郎買をして金をつかふものは遲かれ早かれ身上をしまふから結句野暮だといつたさうだが、悟つてみればそんなものかも知れねえ。
客の六。角屋敷つひには野暮の手へわたり、か。
客の五。だからよ、通だの通りものだといはれて身上をしまふより、野暮だ、話せねえといはれて金をためたはうがずつと利方だ。いまの、あの、角のどらをみるまでもねえ。
主人。（急にこのとき口をだす）だから、こちとらなんぞ、疾うにもうその氣で通りものを止めてる……
客の五。何をいやアがる、どこの通りものだ？
主人。（わらつてそれにはこたへず）さア、八兵衞さん、來たり……
客の六。おつと、俺の番か？
主人。すぐにやらう。

客の六。今日は一つ油をつけてもらはうか。水髮にばかり結ふと毛が切れるといふから……

主人。切れたつていゝぢやアねえか？

客の六。さうは行かない、俺だつて、まだ……

主人。色氣がある、か？

客の六。でもないが。

主人。道心堅固なことをいふ口の下ですぐそれだ。

客の八。それと知りつゝ迷ふ奴さ。——なア八さん……（トいひかけて外をみる）おや、長六ぢやアねえか？

客の五。えゝ？

客の八。いゝえよ、そこへ來たの……

客の五。そこへ？（おなじくまた外をみて）さうだ、長六だ。——へんな奴だな、にや／＼して。——（聲をかける）何だつてそんなところに立つてゐるんだ。——入んねえな、こつちへ……

（客の九、入つて來る）

客の九。はツきりしねえな。

客の五。うむ、すつかり今日はしぐれた。——よく倦きずに天氣がつゞいたもの。——何を、お前、ふところに入れてゐるんだ？

客の九。新道の八百屋から猫をもらつて來た。

客の五。猫を？——小猫か？

客の九。眼のまだあいたばかりの奴だ。——名をつけるんだがいゝ名はあるめえか？

客の五。どんなのがいゝ？

客の九。駒だの福だのは古いから、何とかゝう、武張つた、強さうな名がつけてえ。

客の八。（わらつて）そんなら辨慶とつけたらいゝだらう。

客の五。辨慶？——辨慶でもあるめえ。

客の八。そんなら朝比奈か金時……

客の五。いつそ飛んで關羽がはどうだ？、

客の九。みんないけねえ。

客の五。どうして？

客の九。めすなんだ、この狐……

客の五。氣のきかねえ。——ぢやア巴御前だ。

客の九。呼びにくいな、巴御前は。——ちよッ〳〵〳〵巴御前來い、巴御前來い、巴御前來い……いけねえ、舌がまはらねえ。

客の五。巴といひねえな。

客の九。巴來い、巴來い、巴來い。——巴、巴、巴……矢つ張いけねえや。

客の八。そんなら板額だ。

客の九。板額來い、板額來い。——板額來、板額來板額來……

客の五。（わらつて）反魂香、反魂香、反魂香と聞えやアがる……

客の九。いけねえ、いけねえ。

客の一。（象戯の仲間を拔けて出て來る）待て、待て、俺がいまつけてやる……
客の五。象戯はもう止めか？
客の一。止めぢやアねえ、中休みだ。——虎とつけねえ、虎と。——惡いことはいはねえから虎とつけねえ。
客の五。なぜ？
客の一。强いことにかけたら虎ほど强いものはねえ。——だから强さうな名がいゝなら虎とつけねえ。
客の八。だが龍虎梅竹といふぜ。——虎も强いがさういつたら龍のはうが虎よりもつと强い。
客の五。それはさうだ。虎と龍と戰ふと龍は飛あるくこと自在だから虎はかなはねえ。
客の九。なるほど。——ぢやア龍としやう。
客の五。龍來い、龍來い。——どツこい〳〵と聞える……
客の一。しかし何だぜ、さういつたら龍だつて雲がなくつちやアはじまらねえぜ。
客の九。さうだ、雲にはかなはねえ。——ぢやア雲にしよう？
客の五。雲だつてさういつたら風には一ト溜りもねえ。——だから風のはうが上だ。
客の八。そんなことをいつたら、風だつて、障子を閉めたらそれつきりだ。めつたに吹きこむこつちやアねえ。——して
みりやア風より障子のはうが强い。
客の九。それはさうだ。
客の一。いゝえ、待ちねえ、障子だつて鼠には囓られる。——してみりやア鼠のはうがもつと强い。
客の五。鼠は、だが、猫にはかなはねえ。——鼠より猫のはうがずつと强い。
客の八。そんなら何も苦勞することアねえ、それでもういゝぢやアねえか？

客の一。なぜ？
客の八。いつそ猫とつければいゝ。
客の九。猫と……（ト自分にいつてみて）あゝさうか……
（このとき、猫、客の九のふところで一ト聲ニヤアと鳴く）
客の一。何をいやアがる……
（客の五、客の八、客の九、みな〳〵わらふ）

第四景

（客の六、主人。——將棋の仲間三四人）

客の六。……それアさうだ。——諸事さうなつたんだ。——時の流俗つてものは不思議なものだ。
主人。こちとらの餓鬼の時分には、大三十日のあけがたにまだ、扇子〳〵と賣つて來て、その聲を聞くとわけもなく春めいた氣のしたもんだが、いまぢやアそれもさつぱりなくなつた。
客の六。さういへば元日の朝、沙魚賣だの福壽草賣だのが來ていかにも元日らしい心もちがしたつけが、このごろぢやアいつにも沙魚賣の聲なんぞ聞いたことがない。
主人。それには何事にも氣が早くなつた。——近いためしが納豆だ。——こちとらは冬でなくツちやア喰はねえものと思つてゐるのに、このごろでは八月のはじめから納豆汁だ。——で、肝心の霜月時分には納豆々々の聲もしねえ。——い

やになッちまふ……

客の六。われ〳〵にしてがさうだから、あの肝右衛門さんなんぞのいつもやかましくいひなさるのに無理はない。――尤ものわけだ……

主人。全くそれは、肝右工門さんの臺詞ぢやアねえが、芝居の狂言でも以前は荒事が第一だつた。――荒事師がフッと一ト吹ふくと二三十人のぺえ〳〵役者が揚幕のはうへ吹きとばされる。――舞臺一めんの大島臺に役者が殘らず乘り、だん〳〵それがせりあげになると、その大島臺を大太刀の柄のさきにつッかけ、握り〆拳をあごへあてた奴が眼をむいてせり出す。――栢莚のうはさをしちやアよくぢいさんがさういひ〳〵したが、いまどきそんなことをしたら誰もみるものはねえ。

客の六。それにはつらねといふものが廢り切つた。

主人。いくら長ッたらしい文句でも昔の見物は耳をすまして聞いてゐた。――それだけみせるはうも優長ならみるはうも優長だつた。――敵役は藍隈か赤ッつら、立役はちよいとだけ眼の縁へ紅をさす、だから出て來るとすぐ、あゝあれはどういふ役だと分つたが、いまは敵役も立役もおんなしやうに白く塗るから、どれが惡でどれが實か分らない。――むかしッからの見物はみんなそいつてる……

客の六。すゝんだといへばそれだけすゝんだわけだ。――七十幾つになるぢいさんが十四五の娘形になつたといふのはむかしのことで、そのころの人はそれでよかつたもの丶、いまの世の中ではそれぢやアすまない。お半はお半に釣合つた年ごろの役者、お千代はお千代に似合つた年配の役者でなければ情がうつッて來なくなつた。――狂言と地との差別がだん〳〵なくなつて來た。

主人。だからつまりは、水も本水をつかへば、飯もほんたうに喰ひ、芋もほんたうの芋を洗つて鍋へ入れ、ほんたうの火

にかけて煮てみせねえぢやア納らなくなつた。――時の鐘だつて銅鑼を叩いたものが本釣になる　鐵砲だつていまぢやア竹筒へ焔消をこめて、本鐵砲の音を聞かせる。――この鹽梅で行つたら、このさき、どんなことになり行くか分らねえ。

客の六。いまに、それこそ、濡事も女形ではといふことになつてほんたうの女をつかふやうになり、敵役の首だつてほんもの丶刀でほんたうに斬るやうになるかも知れない。

主人。そんなことをしたらしかし、日に一人つゝでも敵役の役者が命をおとさなければアならねえ。――眞逆にだからさうまではしねえだらうが、濡事のはうは、いまに女の役は女でなくつちやアならねえときが必と來る。――必となるに違へねえ、さういふことに……

客の六。しかしさうなつたら事だ。

主人。事だとも、それは。

客の六。さうなつたら變るだらうなア、世の中も……

主人。それこそらんぴ亂國だ。――二二が四、二三が六と、物事それこそ丁度ツこには行かなくなる。

客の六。（しみ〴〵と）さうだらうなア（……このとき象戲の仲間に爭論はじまる）

第五景

（客の一、客の二、客の三、客の四、客の五、客の八、主人、その他）

客の三。……何だ、此奴らは。――ふざけるのもいゝ加減にしろ。――詰まうと詰むめえと手めえたちの世話にはならね

えんだ。――手めえたちを相手にさしてる象戯ぢやアねえんだ。――默つてればいゝ氣になつてつべこべ側から入らざることをいやアがる。――側でそんなにぐづ〱いはねえで、男なら此奴ら、一人つゝ出て來て尋常に勝負しろ。口幅つてえことをいふやうだが手前らに負けるやうなそんな耄錄はまだしねえんだ。――相手はへぼだ、多寡の知れたこんなへぼだ。……さう思へばこそ此方は、大人げねえから此方はそのつもりではじめからかゝつてゐるんだ。――それだつて負けねえとは限らねえ。勝負は時の運だ。時の表裏でどうなるか分らねえ。――それも知らねえでわい〱鬼の首でもとつたやうに騒ぎやアがる。――承知が出來ねえ。――さア料簡が出來ねえ……（わけもなくいきり立つ）

客の二。待ちねえ。――一寸待ちねえ。――いま聞いてゐれば何だつて？――相手はへぼだ、多寡の知れたへぼだ？――わるかつたね、へぼで惡かつたね。――だが、俺がへぼなら手めえは何だ？　そのへぼの俺に負ける手めえは何だ？

客の三。何をいやアがる。人が甘茶をなめさせりやアいゝ氣になりやアがつて……

客の二。何だ、甘茶だ？――くそでもくらへ。それならなぜあんなに待つたをしやアがつた？

客の三。一度や二度待つたをしたのが何だ？――その代り手めえのはうには助言をする奴がついてゐるんぢやアねえか。――うるせえほど側にゐて口を出す奴がゐるんぢやアねえか。――俺のはうにはそんなものはゐねえんだ。――そんなけちなものはけちりんほどもゐねえんだ。

客の二。何だ、けちなものだ？――けちなものとは何だ？――けちなものとは何て言草だ？

客の三。けちなものだからけちなものといつたんだ。――けちだからけちといつたんだ。――それで口惜けりや表へ出ろ……

……

客の二。表の出ろ？――いゝとも、出てやる。――しやらくせえことぬかすな……

客の三。さア出ろ、――早く出ろ……（立上る）

客の四。（とめる）何だなア、源さん、どうしたもんだ？――お前でもねえ、しづかにしねえな…… そんな大きな聲を出してみッともねえぢやアねえか……

客の三。みッともねえ？

客の四。さうぢやアねえか、みッともねえぢやアねえか。――多寡が象戯に負けたッくれえでそんな、外聞がわるいぢやアねえか……

客の三。ぢやア何で助言した？――何だつてよけいな口出しをしやアがつた？――そも〳〵手めえたちのそんなことしやアがるのが間違えなんだ。――それだからみえる手もみえなかつたんだ。――そのためにかゝなくつてもいゝ恥をけえたんだ……

客の一。（宥める）いゝぢやアねえか、まア。――そんなお前のやうにいつたつて仕方がねえ。

客の三。仕方がねえ？――仕方がねえとは何だ。――さ、かうなれば手めえも相手だ。――手めえ俺に何のうらみがあるんだ？――何の意趣遺恨があるんだ？

客の一。何をいやアがる。――誰が手めえなんぞに意趣遺恨がある……

客の三。いゝや、ある。――あるに違えねえ。――なくつてあんな助言のしさまの出來るもんぢやアねえ。――平生から俺は手めえつてものが氣に入らねえんだ……

客の一。大きにお世話だ。――將棋に負けて腹を立てるやうな唐變木とははゞかんながら一つにならねえんだ。

客の三。何、唐變木だ？

客の五。（み兼ねて口を出す）いゝぢやアねえか、もう。――いつまでそんなつまらねえことといつたつてはじまらねえぢやアねえか……

客の八。（とも〳〵口を出して）いゝ加減にもう料簡しねえよ……
客の三。嫌だ、料簡しねえ。――誰が何といつても今日は料簡しねえ……
客の五。いゝぢやァねえか、そんな強情張らなくつたつて。――大ていにしねえ。――よう、大ていにしねえ……
客の三。嫌だ。――嫌だといつたらいやだ。――どいつも此奴もたゞはおかねえ。――さァ出ろ、さァおもてへ出ろ……
……
客の二。出ねえでよ。――（客の一に）太吉、こんな奴を打捨つといたらくせになる。――出ろといふんだから手めえも一しよに出ろ……
客の一。出るとも。――こんな野郎に……こんたものゝ分らねえ野郎にけじめをくつたら男が立たねえ……
客の三。そんなことをいやァがつて逃げるなよ……
客の一。誰が逃げる。――さういふ手めえこそ逃げるな……
（……客の一、客の二、客の三、客の四、その他そばに居合せたものすべて、わけもなくわい〳〵いひながら外へ出る。――罵つたりわめいたりする氣配しばらくつゞいてそのまゝ遠ざかる）

第六景

（客の五、客の六、客の八、客の九、客の十、主人）

客の五。何だ、彼奴ァ。――まるで狂人の沙汰だ……

客の九。象戯に負けるとあんなにも口惜しいもんだらうか？
客の八。（わらつて）あれは別だ。――あんなのはめつたにねえ。
主人。平生はあんなぢやアねえんだが。――もの〻理合もよく分るんだが……
客の五。誰よ？
主人。い〻え、源さんさ。
客の五。あ〻もしかし夢中になる……といふよりなれるものかしら？――可笑しいと思ふよ、俺は……
客の九。何のこたアねえ、酒に酔つたやうな……
客の六。それだつたら手もなく酒亂だ。
客の五。い〻え、それならさうのやうにまた始末がい〻。――いつそ世話がねえのさ。――素面であ〻魂を宙につるし上げッちまつたら手のつけやうがねえ……
主人。外の手合もよくねえ。……さういふ病のあるのを知りつ〻寄つて集つてやい〱いふんだから。――あれぢやア誰だつてカン〱になる。――勝てる象戯だつてあれぢやア勝てねえ……
客の五。（わらつて）それはさうだ。――あれは助言なんてものぢやアねえ、ぶち壊しだ。――腹を立つのも尤もは尤もだ。
主人。片つ方も、また、止せばい〻のに高慢をいふから……
客の六。が、それにしても、あ〻まで是非善悪の分らなくなるものだらうか？
客の八。だからよ。……だから怖いといふんだ、勝負事は……
客の六。さうだらうかねえ。

客の九。大丈夫だらうか、しかし？

客の五。何が？

客の九。間違えにならねえだらうか、外へ行つて？

客の五。それは大丈夫だ。――太吉でも、金藏でも、あのまんまぢやア引つ込がつかねえから出て行つたまでだ。――それには留めてもゐるんだからその心配はねえ。

客の九。そんならいゝが……

（客の十、このときおもてへ來る）

客の十。（いきなり主人に）鬢さんこゝへ卯之の野郎は來なかつたか？

主人。何だ、寅さん、藪から棒に……

客の十。いゝえ、卯之の野郎が來なかつたか聞くんだ？

主人。卯之さんと、さア……？（下剃に）留、來たつけか、卯之さん？

下剃。一寸さつき來ました

主人、あゝさうだ、來たつけ。――だが、來て今日はすぐ歸つた。

客の十。いつ時分だつた？

主人、さア、あれは、晝すこうしまへ……だつたなア、留……

下剃。えゝ、そんなこつてした。

客の十。晝すこうしまへ、と？――はて、それぢやアどこへ行きやアがつたらう？

主人。どうかしたのか、卯之さん？

客の十。（それにはこたへず）で、どんな風だつた？――別段かはつたところはなかつたか？

主人。かはつたところ？

客の十。うむ、どツかいつもと……？

主人。さういやアぼんやりしてゐた。――いつになくぼんやりして、さうだ、しきりに溜息をついてゐた。

客の十。ぼんやりしてしきりに溜息を？

客の五。（口を出す）ど、どうしたんだ？――何か出來たのか？

客の十。うむ、出來たんだ。

客の五。どんなことが出來た？

客の十。とんでもねえこつた。

客の五。とんでもねえこと――それは誰に？――眞逆卯之公の……

客の十。それが卯之の野郎の身の上なんだ……

客の八。まアこつちへ入んねえ。――そんなとこに立つてねえでこつちへ入んねえ、

客の十。うむ。

（客の十、入つて來る。――みな／＼そのそばによる）

客の五。一體それは……？
客の八。どういふんだ。それ……？
主人。眞逆しかし……？
（ほとんど同時に）

客の十。それよりもお前たちはあの野郎をどう思ふ？

客の五。どう思ふ？
客の十。馬鹿と思ふか悧口ものと思ふか？
客の五。馬鹿とも思はねえが、さア、それほどの悧口ものとも思はねえ。
客の十。甲斐性のあるはうと思ふかないはうと思ふか？
客の八。あんまりあるはうとは思はねえ。
客の十。身を粉にしてがせいに稼ぐはうかノラクラするはうか？
主人。それはまア、始終(しよつちう)こゝへ來てごろツちやらしてゐる位だからがせいにさう稼がうはずはねえ？
客の十。ど、あんまり評判はかんばしいはうぢやアねえな？
客の五。まづね。
客の八。けど、人間はごくのいゝもんだ。
主人。いたつて肚は綺麗だ。
客の十。その卯之の野郎が――もしその卯之の野郎が急に分限者(ぶげんしや)にでもなつたとしたらお前たちどうする？
客の六。分限者に？
客の十。さうよ、大金持に。
主人。（急にわらつて）そんな夢みてえな……
客の十。……ことでねえんだからばかばかしい。――千五百兩といふ金と地面が二ケ所……それも沽券の千兩、千五百兩といふ奴(やつ)が急に今度あの野郎のふところへ轉がりこんで來たんだ。
主人。ど、どうして？

客の五。どうしてそんな？
客の十。それがよ、あの野郎に伯母さまが一人あつたんだ。
主人。うん……（うなづく）
客の十。その伯母さまが先月の末死んだんだ。
客の五。その伯母さま、外にみよりはなかつたのか？
客の十。なかつたかどうか知らねえがさういひ殘して死んだんだ。——平生からあのやくさな野郎を可哀がつて ときぐはいまゝでゞも小遣なんぞとゞけてよこしてゐたんだ。
客の六。で、卯之さん、さういふものゝ來るのを自分では……
客の十。知らなかつたんだ。夢にも知らなかつたんだ。——だから、昨日、さきから人が來てそのいちらつを聞くとすぐ氣拔けのしたやうになつちまつた。
主人。びツくりしてか？
客の十。……かも知れねえが、そのまゝふらツとうちを出、どこへ行つたのか昨夜遲くなつてぼんやり歸つて來た。——で、今朝になるとまた起きぬけにうちを出て飯どきになつても歸らない。——うちのものは、だから、どこへ行つたかとみんな心配してゐる……
主人。それだつたら何もぼんやりしちまふことはねえだらうに。——先刻あんな溜息をつくことだつてねえだらうに。——
——可笑しな男だぜ…
客の八。いゝえ、それはさうぢやアねえ、ぼんやりするはうがそれは至當だ
主人。なぜ？

客の八。なぜつてさうだ。——話を聞いたゞけでも俺は心細くなつた。——浮世がいやになつた。
客の六。（歎息するやうに）つまりは運だ。——運のいゝ奴にはかなはねえんだ。
（一同、ゆくりなく寂しい心もちにつゝまれる）

第七景

（客の五、客の六、客の八、客の九、客の十、主人、下剃）

客の六。どれ行かう。——すつかり今日は油を賣つた……
主人。これから何處へ行くね？
客の六。これから今日は澄藏がつかひものをして盃を買めて來るんだ。
主人。お目出度か？
客の六。みたやうなもんだ。
主人。飮めさうなかツぷくをして下戸だから可笑しい。
客の六。酒は飮まず、煙草は喫はず、勝負事は一切やらず。——これで身上が出來なければ生きてる甲斐はない。
主人。だから出來たぢやアねえか。
客の六。いまだつて二二が四、二三が六と物事さう丁度つこには行つてゐないんだ。——おいらも伜さまが一人ほしい。——いや、ぢやア、おさきへ……

（客の六、つまらなさうに歸つて行く）

客の五。（ふいとあくびをして）さア、こつちもそろ〳〵神輿を上げるか。――どうだ、銀さん……

客の八。うむ、行かう。

客の五。長つ尻だよなア、みんな……

客の八。手めえで知つてればいゝ。

客の九。俺もぢやア歸らう。――そこまで一しよに行かう……

客の五。角ですぐわかれるんぢやアねえか。

客の九。でも氣はこゝろだ。

客の五。あんなことをいやアがる……

（客の五、客の八、客の九、出て行きかける）

客の十。待ちねえ、待ちねえ、俺も行くから……

主人。歸り風が立つとみんな一しよだぜ。――遊んで行きねえよ、もつと

客の十。でも、俺も、卯之を探さなくつちやアいけねえ。――さうでもねえ、間違えでもあると……

主人。そんなことがあるものか、大丈夫だ。

客の十。さうでねえ、こんなときにはまたどんなことが出來るか知れねえ。――用心に如くはねえ……

（捨臺詞いろ〳〵。――客の五をさきに、客の八、客の九、客の十、歸り行く）

客の八。（わすれた用を思ひ出してすぐ後もどりをする）髪さん、……明日の安兵衛さんの葬ひは何時だつけね？

主人。たしか四つと思つたが……

客の八。寺は？

主人。それが遠いんだ、目黒の蛸薬師からまだ十五六丁もさきだ……

客の八。其奴ア事だな。

主人。だが、葬ひは、遠くつても近くつてもどのみち一日つぶれるんだ。――早く歸つたつて何にも出來やアしねえ。

客の八。それもさうだ。――お前も行くだらう？

主人。行くとも。――あの人とは久しい馴染だつた……

客の八。ぢやア、また、明日逢はうぜ。

主人。うむ、逢はう。

（客の八、出て行く）

第八景

（主人、下剃）

主人。留、手の空いたところでおもてを掃いてしまへ。

下剃。えゝ。

（下剃、外へ出る）

主人。（小音でうたふ）今日はとりわけいろ〳〵と、いふこと聞くこと、たんとある、その約束で今朝早う……

（下剃、入つて來る）

下剃。親方、雨がふつて來ました。

主人。ふつて來た？

下剃。えゝ。

（主人、耳を澄ます。――雨の音きこゆ）

主人。うむ、ふつて來た。――ふり出しがわるいから此奴は明日は降りだ……

下剃。えゝ。

主人。此奴はしかし、いま歸つた手合は、ちつとのところで可哀想にびしよ濡れだ……

下剃。えゝ。

（……雨の音やゝ高く聞ゆ）

（昭和二年九月。――東京中央放送局のために）



噓つきの夢

武者小路實篤

昨日私は極樂へ行つた夢を見ました。

極樂は皆さんの思つてゐらつしやるやうな特別に美しい處ではありませんでした。そのくせすべてが實に美しく輝いて見えるのです。一々丁寧に見ると下界のものと同じもの切りないのです。そのくせすべてが話にならない程美しく見えるのです。

下界とちがふのは田畑や人家のないことです。それは私にはどつちかと云ふと心細く思へました。しかし極樂にゐる人は食ふ必要も、着る必要も、住む必要もないのです。

皆一度死んだものですから、死ぬ心配はないのです。だから極樂では何にも恐ろしいものはありません。そして人間は何にも地上を歩かなければならないと云ふこ

とはなく、勝手にとび歩いてゐます。
しかしそれが少しも不思議な氣がしませんでした。
人間がすべて裸でゐたか、着物着てゐたか、私にはわかりませんが、たしかに着物を着てゐた人もあつたやうですが、それをつくる處は見かけませんでした。働く人は誰もゐませんでした。
皆自由に思ふまゝにとびまわつてゐるのです。そして笛をふいたり、太鼓をならしたりしてゐる人もあれば、碁や將棋をさしてゐるものもあり、譜をかいたり、話をしたりしてゐます。皆たのしんでゐるのです。
何にもしないでぼんやりしてゐる人が一番多いやうですが、その人も退屈はせず、心うれしくしてゐます。退屈なんて云ふ感じは持つてゐないのです。
萬事がいゝので、愉快なので、心うれしいので、すべてが新鮮なのです。
こゝでは金も暴力もありません。皆自分の好きなことをすればいゝので、それではためいわくにはならないのです。
私は誰を見ても心がおけず、うれしくなるのでした。そして誰に話しかけてもたのしい返事がもらへるのです。
私は愉快になつてあつちこつちをとびあるいてゐました。そして人があまりゐない森のなかに入つてゆきました。
そして其處で二人の人が話してゐるのに出あひました。それは一人は寫眞でよく知つてゐるトルストイでした。もう一人は若い男でしたが、立派な顔をしてゐました。ひげがあつたかなかつたかわかりませんが、身なりはいやしいやうでしたが、かゞやくやうな若者でした。トルストイは丁寧にその男に話かけてゐました。
「私は是非一度あなたにお伺ひしたいと思つてゐたのです」
「なんですか」
「あなたとマリアとの間は清かつたのですか、それともどうだつたのですか。私が生てゐる時、そのことについて或る人

と大議論をしたことがあるのです。その男は云ひました。あなたは酒を平氣でのんだりなさる方だから、それに姦淫を犯した女にたいしても、私もお前をせめる資格はないとおつしやつてゐらつしやるから、きつとマリアとも關係もおありになつたにちがひないと云ふのです。私はそんなことはあるわけはないと云つたのですが、本當はどうなのですか、本當のことをそつとお知らせ下さい」

「私は忘れてしまつたよ」

「本當にですか」

「忘れたね。そんなことは私にとつて大したことではなかつた。私はあの女から七つの鬼を出してやつた。あの女は實にすぐれた心をもつてゐた女で、私の心の最も深かい處に入りこめたのはあの女一人だつた。あの女は澤山の男を知つてゐたが、あの女の魂はいつも少女のやうに男の魂を求めてゐた。しかしそんなものは滅多にころがつてゐるものぢやない。あの女が男から得たものは、鬼ばかりだつた。私はそれも逐ひ出して、私の最も深かい魂を見せてやつた。するとあの女は泣き出した。私にあの女の悪口を云ふものはいくらもゐるが、あの女の魂を知りあの女の清い涙を知るものは私だけだと云ふことは誰も知らないのだ。又この私の魂にふれることも出來た女だと云ふことを知るものもなかつた。彼等は肉のこと切りわからないので、魂のことは問題にはしないのだ」

私はあとのことは聞かなかつたが、トルストイはがつかりしたらうと思ふとおかしかつた。しかしトルストイは眞面目な顔してもつと若者をくるしめてたかも知れない。どうせ夢だからあてにはならないがね。

それから私はもう少し歩いてゆくと、其處に一人の女の人が來たのに出あつた。女の人は輝くやうな若者が通らなかつたかと聞いた。通つたと云つたら、あはてて、おひかけていつた。それを私はマリアだらうと思つた。

私は其處で前の男が誰だと云ふことをはつ切り知つた。それで私ももう一度その若者の顔を見ようと思つた。

若者にひげがあつたかどうか、僕の知つてゐる牧師に話したく思つたから。

しかしもう若者は見つからなかつた。

そして僕はあきらめて道傍の石にこしかけて一人で考へて見た。

マリアは天國に入りたいために耶蘇を愛したのか、耶蘇を本當に愛したから天國に入れたのか

耶蘇は又天國に入る資格のある心の持ち主だからマリアを愛したのか、愛したから天國に入れてやつたのか。

こんなことを考へてゐると一人男がやつて來た、自分はいきなりその男に自分の疑問をただして見た。

するとその男は僕の顔をぢつと見て、いきなり僕に舌を出せと云つた。

へんなことを云ふと思つたが舌を出して見せた。すると今度はまぶたをひつくりかへして見て、それから脈を見た。それから聽音器を出して僕に肌をぬがして僕の胸にそれをあてゝ、深かく息をして見ろと云つた。

僕は云はれる通りになつてゐたが、不意にこいつは氣ちがひだなと思つた。さうしたら身の毛が一時によだつた。

するとその男は首をかしげて云つた。

「この男は何もわるい處はない。この男は馬鹿にちがひない」……

それで目がさめました。

（一七、九、一二）



喜左衛門どんが幽靈になつた話

相馬泰三

喜左衛門どんの一人息子の喜一が入營した時のこと、方々から贈られた餞別の金がみんなで十五圓足らずあつた。喜一はそれで腕時計を買つて記念にしようと思つたのだが、實際は、それとはまるで似てもつかない結果を生んだ。無論、本人も納得した上でのことではあつたが、それは、そつくり、そのまま、喜左衛門どんの手に渡り、改めて、また、金貸しの庄之助どんの手提金庫の中へと、いつか、人知れず姿を消してゐたのである。そのことはあとでばれて、そのために、喜左衛門どんと庄之助どんとは、村の人たちから、散々に惡口(わるくち)をたたかれた。

喜左衛門どんにしたつて、自分の惡いことを重々承知してゐないではなかつたが、そのくせ、一方では、また、「せつぱ詰つたもののすることは、せつぱ詰つてみないものには解らないもんだ。それに、外ならぬ親と子の間柄ぢやないか、あとで

それだけのものを返へしてやりさへしたら、何のことはあるまい。」こんなふうに、自分だけの理屈をちやんと拵えあげてゐた。そして、實のところをいへば、「世間へ知れたのが何よりもいけなかつたのだ。」と、ただ、それがかへすがへすも残念なだけであつた。

聯隊のあるM町とは三里半も離れてゐるのだが、二七の市日には、喜左衞門どんはいつも欠かさず、野菜物を荷車につけて出かけて行つた。そして、その序りにはきつと喜一に面會をして來た。軍服姿の我が子をほんの一目見ること、ぎこちない軍隊言葉を使ふやうになつてゐる我が子とほんの一言二言口を利き合ふことが、そんなにも嬉しく、そんなにも樂しみでならなかつたのだ。

それにつけても苦になるのは、例の腕時計の一件であつた。どうかして、何とかしてと思ひながらも、いつも、どうも、何ともならなかつた。そして、徒らに半年の月日がたつてしまつた。それほど喜左衞門どんは貧乏で、懐工合がいつも〳〵悪かつたのである。

氣をつけて見てゐると、實際、どの軍人もどの軍人もみんな腕時計を持つてゐる。「聯隊ぢゆうで、腕時計を持つてゐないのは、恐らくは喜一たつた一人なのかも知れない！」こんなことを考へると、喜左衞門どんは、文字通り、居ても立つてもゐられない思ひがした。

喜左衞門どんは、ほんとに頭が少しどうかしてゐたのかも知れなかつた。

ある晩、おそく、あたりがすつかり寝靜まつてから、そつと起き上つて、家の者に知れないやうにこそ〳〵と屋外へ出て行つた。そして、それから三十分とたたないうちに、驚いたことには、喜左衞門どんは、地主の長坂さんの勝手口に身をひそめて、ぢつと家の中の樣子をうかがつてゐたのである。

しーんとして、家の中から何の物音もして來ないことがわかると、喜左衞門どんは、ぬき足さし足で土間口へまわつ

た。そこの戸締りを、女中たちが便所に行つて（この地方の家のつくりとして、普通、便所は屋外にある。）そのまま忘れてゐたり、また、自分のところへ通つて來る男衆のために、一旦おろしたさるを、また、そつとあげて置いたりすることの往々にしてあるのを（さういふことが、この地方では平氣で行はれてゐる。若い頃のことをいへば、喜左衛門どんにだつて、まんざらさうした經驗がなかつたわけでもない。）知つてゐたからである。手をかけて引いてみると、そこの板戸は果して何の苦もなくする〳〵とあいた。

喜左衛門どんは戸を開けて置いて、注意ぶかく、そつと身を引いた。そして、もう一度、耳をすまして、家の中の樣子をうかがつた。やつぱり、しーんとして何の物音もして來ない。喜左衛門どんは依然として家の中へ入つて行つた。案内は、しよつちよう出入をしてゐるので、自分の家同樣によくわかつてゐた。がらんとした、廣い板敷の台所を通りぬけると、眞中に圍爐裡がきつてあつてそれに自在鍵のさがつてゐる茶の間があり、そことその先の一段高くなつてゐる廣間との間に挾まつて、小茶の間と呼ばれてゐた小ぢんまりした部屋がある。そこの片隅に、帳づけをしたりする小机が置いてあり、そのわきに、田舍家には珍しい、物々しい大金庫が据えてあつた。（滅相もないこと！そんなものに用があつたわけでは更々ない。）ここのご主人は、どういふものか、在宅の折には、自分の懷中時計を、きまつて、その金庫の上の鴨居の釘に、いろんな帳面類と一しよにぶらさげて置くのが癖であつた。（このことは、喜左衛門どんばかりでなく、おそらくは、村ぢゆうの者がみんな知つてゐたに相違ない。）喜左衛門どんが目ざしてきたのは、實に、その懷中時計だつたのである。そんなわけで、喜左衛門どんの仕事は至極簡單に、至極無事にすますことが出來た。

長坂さんの屋敷そとへぬけ出た時、初めて、喜左衛門どんは、滅法界に暗い晩であることに氣がついた。大空は厚い雨雲にすつかり蔽はれて、どこにも星一つさがし出すことが出來なかつた。それで、馴れ切つた場所であるにもかかはらず、急に西も東もわからなくなつてしまつたやうな氣がした。身をかがめて、まるで這ふやうな恰好をしないと、どこが

畑だか、どこが道だか、どこが田圃だかわからないほどである。

喜左衛門どんは、長坂さんの園ひ堀のはづれのところで、たうとう踏みはづして、片足泥の中へはまりこんでしまつた。そして、その機みに、穿いてゐた下駄を片つぽ失くした。自分の家の印の燒版がおしてあるので、手がかりを殘してはならないと一生懸命に探したが、いくら探しても、どうしても探し出すことが出來なかつた。

家へ戻つて來て、とろ〳〵としたと思ふと、一番鷄が鳴き出した。

その日のおひる頃、喜左衛門どんは、M町の、とある時計屋の店へはいりこんでゐた。そこの看板には、「古時計買ひます、交換も致します。」こんなことが書かれてあつた。そして、その日から、喜一の左の腕にも、ほかの軍人たちと同じやうに、小型の時計がくゝりつけられ、そこでコチ〳〵と一人前な音が刻まれることになつたのである。

喜左衛門どんは、長い間の願ひを果すことが出來たので、重荷をおろしたやうな氣がした。そのせゐか、前の晩のことなんか思ひ出してみても、不思議と、あまり氣にならずに濟ましてゐることが出來た。すると、直ぐに、この人の癖として、「きつと、何でもなくてすんでしまふだらう。」こんな自分勝手な、蟲のいゝ考へ方を初めるのであつた。「家の者が少しぐらゐ騷いでも、あすこの旦那様はあの通りのさばけた、分別のある、穩な方だから、表沙汰になさるやうなことはないにきまつてゐる。さうしたら、私は、いつか折を見て、（だが、それも、ずーつと先きへ行つてからで構はないことだ。）旦那様に何もかも白狀して、あやまることにしよう。あの方は、きつと、私を許して下さるにちがひない。たゞ、世間へ知れてくれさへしなかつたら！肝心なことはそれだけだ。」

そして、例によつて、自分だけは、それで、もう、すつかり事濟みになつてしまつたやうな氣がしてゐた。

ところが、三日目の朝、雨降り仕事に（雨が降つてゐたので）喜左衛門どんが娘のおやすを相手に土間で芦簾を編んでゐると、そこへ、村の駐在所の岡本さん（巡査）がひよつこりやつて來た。その姿を見ると、喜左衛門どんは、直ぐにど

キンと胸にこたえた。だが、それを無理に押隠して、何喰はぬ顔をしてゐた。

岡本さんは、娘の手前を思つてやつてか、つとめて何でもないやうな調子で、

「ちよつとK……（警察分署のある町）まで一しよに行つて貰ひたいんだがね……」こんなふうに云つた。

「はい、承知しました。」

それはそれでよかつたのだが、喜左衛門どんはそのまま済付き拂つて（相手にはそんなふうに見えたのである。）仕事を續けてゐた。

岡本さんは、ちよつとの間待つてゐたが、じれつたくなつて、やや語氣を强めて、

「おい、早くしないか！」と催促した。

しかし、あと、もう少しで切りがつくところだつたので、喜左衛門どんは、そこで止してしまふのが惜しくてしようがなかつた。それは半ば本能的なもので、本人自身にもどうもならなかつたのかも知れない。

「こら、何をぐづぐづしてゐるんだ！」

岡本さんは、たうとう我慢がしきれなくなつて怒鳴り出した。そして、それと同時に、何もかもが急に惡化して行つた。

喜左衛門どんは、藥屑のついた仕事着のまま、兩手を背後(うしろ)にまわされて引き立てられて行つた。

K町までの一里近くの道を、二人はただの一言(こと)も口を利き合はないで歩いた。喜左衛門どんは、途々、考へた。―かうなつては、所詮、のがれつこはありやしない。先方へ行きついたら、さつぱりと白狀をしてしまはう！　そして、お仕置きを受けなければならないものなら、潔く受けるより外に仕方はあるまい。……だが、待てよ、さうすれば、自分はかまはないとして、あの兵隊さんはどうなるかな？　あのカチカチはどうなるかな？（たとひ、自分の胸の内のことでも、あか

らさまに喜一だの時計だのといふことは避けなければならないと思つた。）調べが進んで行けば、どうしたつて、自然にそこへ綠がつながつて行くにきまつてゐる。それではまづいぢやないか。何とかして、これはあつち方面とは全然關係がないことにして片附けてしまはなければならない。……品物は持つてゐるのが恐ろしくなつて、橋の上から川へ投げこんでしまつたとでも云つて拔けるかな。そして、あくまでも、さういふことにして頑張つたら？さうしたら、先方だつて、どうしてみようもないぢやないか。まさか、川を浚つてまで探してみるわけにもゆくまいからな。……それでは何だつて、そんな時計なんかを盜む氣を起こしたかと訊かれたら？……」ここで、考ははたと行き詰つてしまつた。いくら智慧をしぼつても、なか〳〵いい考が浮かんで來ない。取り替え、引き替え、いろ〳〵な理屈をつけてみるが、どれもこれもい、、、」しつくりしない。

喜左衛門どんは、時々ぴしや〳〵いふ二人の足音に、はつと我に返へらせられた。Kの町は、もう、やがて間近に迫つてゐた。「今のうちに何とか甘い答辯の言葉を見つけ出して置かなければ」と、あせればあせるほど、頭はます〳〵混亂するばかりであつた。

分署は思ひきり粗末な、舊式な木造洋館で、ペンキは剝げ放題に剝げ、おまけに、羽目板のところどころに、朽ちたのを取り替えた跡があつたりして、どこか、つぎはぎだらけな古洋服のやうな風貌をそなへてゐた。ところで、この洋風といふ奴が、何事によらず、喜左衛門どんにとつては甚だ難物であつた。テーブルや椅子のならべてある部屋へ連れて行かれ、官服をつけた、眼鏡をかけた、佛頂面の分署長の前へ立たされただけで、喜左衛門どんは、もう、身の内がぞーつと總毛立つやうな思ひがした。

分署長は、和服をつけた人とは全然趣を異にした（喜左衛門どんには、そんな風に思はれた。）からだつき、眼つき、聲、言葉つきで、だしぬけに命令を下した。

「おい、貴様の足の裏を見せろ！」

「はい、はい。」

とは云つたものの、喜左衛門どんは、その時、殆んど氣をつけに近い姿勢をして立つてゐたので、その命令に服從するためには、一體どうすればいいのか、てんで見當がつかなかつた。

それだのに、分署長は、やはり同じことを繰返へすのであつた。

「足の裏を見せるんだ、足の裏を！」

喜左衛門どんは、相手が癇癪を起こしてゐるにちがひないと思つて、ます／＼度を失つた。そして、突差の思ひつきで、床へ尻餅をついて、兩方の足を一遍に前の方へ突き出した。ところが、兩手を背後へ廻されたままになつてゐたので、そのはづみに後へ轉がつて、注文通りに、二つの足の裏が分署長の鼻の先へつきつけられた。普通なら、ここで、居はせたものが、何が何であらうと、一齊に腹を抱えて笑ひ出す場面なのだが、不思議なことに、此所では、誰一人としてクスリとも云ひはしなかつた。それに氣がつくと、喜左衛門どんは、何だか底冷えのするやうな氣味惡さをさへおぼえるのであつた。

喜左衛門どんは、手がかりとして、堀で失くした下駄のことばかり氣にしてゐたが、そのほかに、それよりももつと確な證據があつたのだ。といふのは、板の間に、はつきりとした足跡の列が殘つてゐた。そして、それは誰が見ても直ぐに判じられるほど、それほど著しい特徴を備へてゐた。喜左衛門どんの左の足の中指は頭がなかつたし（五六年あとのこと、怪我をして、もげてしまつたのだ。）右のかがとには魚の目が二つ出來てゐて、見る者が見れば、足跡のなかに、その魚の目の頭をちやんと指摘することが出來たのである。喜左衛門どんも、そこまでは考へてゐなかつたのだが、土間の上り口のところに敷いてあつた濡れ雑巾で、とにかく、ちよつと足の裏をこすつたにはこすつたのであつた。しかし、旦那衆がたの板の間はいつだつて鏡のやうに拭きこまれてあるものなのだし、そこへもつて來て、百姓の足の裏などといふもの

は、これがまた、ちよつと雑巾でこすつた位でそれで奇麗になるやうな代物では決してないのだから仕方がない。

喜左衛門どんが立ちあがつて、元の姿勢にかへると、分署長は、暫くその顔を眺めてゐたあとで、味も素つ氣もない、喜左衛門どんなどとはどんなことがあつてもそりのあひさうもない、ドスンとした調子で、

「白狀するんだ。證據はあがつてゐるぞ。」と、頭からおつかぶせるやうに云ふのであつた。「長坂の家で、懷中時計と、財布の入つた風呂敷包みを盜み出したのは貴樣にちがひあるまいが。」

さう云はれて、喜左衛門どんは意外でならなかつた。懷中時計はいかにも自分が手にかけたには相違ないが、もう一つの方は全く思ひもかけない、從つて、自分とは絕對に關係のないことだ。「へえ、そんなことがあつたんですかね？」と、あべこべに訊きかへしたいやうな氣持がした。

それに就いて、こゝで說明して置かなければならないのだが、それは、かうである。——喜左衛門どんが考へた通り、長坂のご主人は、盜まれたものが自分の懷中時計だけだといふことが判明すると、足跡に目星がついたためでか、さうでなくてか、とにかく表沙汰にしないことに決めて、家のものどもにも堅く口どめをさせたのであつた。それだのに、その時分になつて、住みこみの作男の長藏どんが、「おらがとこの、金の入つた風呂敷包もなくなつてゐるぞ！」と云つて、急に、まるで氣ちがひのやうになつて騷ぎ出したので、たうとう、事が大げさになつてしまつたのである。ところが、ずーつと後になつてわかつたのだが、長藏どんの風呂敷包は、實は失くなつたのではなくて、どうかした機會に押入れの奧の方、積み重ねた荷物の蔭へと落ちこんでゐたのであつた。

喜左衛門どんが、眼をパチクリさせて、いつまでもぼんやりしてゐるので、氣短な分署長は、おどしつけるやうに、

「返事をしろ、返事を！」と、どなりつけた。

喜左衛門どんには、例の風呂敷包みの一件が、どうしても腑に落ちなかつた。「をかしなことがあればあるものぢやない

か！　それぢや、あのあとへ、また、誰かほかの奴が入つて行つたんだな。もし、本當にさうだとすると、……さうだ、ここのところは、何とかうまい細工が出來るかも知れないぞ！……」ひよいとそんな狡い考が浮んで來たので、つひ、ぼんやり思案に耽つてゐた。

すると、分署長は、たうとう、本當に怒つてしまつた。

「おい、こら！　なぜ默つてゐるんだ？　貴樣はとぼける氣だな。これならそれで、こちらにもやりやうがあるんだ！」

かう云ひざま、喜左衛門どんの横つ面へ、目の玉の飛び出るやうなはり手を一ツ喰らはせた。喜左衛門どんにとつては、それは、例の風呂敷包みの一件以上に意外でならなかつた。なぜなら、どんな理由からにしても、苟も家長たるものが、今のやうな思ひきつた亂暴を赤の他人から加へられることがあらうとは、今の今まで思ひもよらなかつたからである。喜左衛門どんは、自分自身は（家長の位にすわる以前のことは別として）無論のこと、ほかのどんな家長の場合でも、そんなためしはこれまでに一度も見もしなければ、聞きもしなかつたのだ。

喜左衛門どんは、うつむき加減にしてゐた首を思はずぐつと延ばし、怒りに燃えたつた兩眼をまともに相手の顏に向けた。

「その面は何だ！ここをどこだと心得てゐるか、馬鹿野郎！」

かう云つて、分署長は、前よりも一層手ごたえのある奴を二ツ三ツ續けざまに浴びせかけた。

喜左衛門どんは、急に耳がきこえなくなり、目がくらんだ。すると、どういふものか、そのあとで、すつかり度胸がすわつてしまつた。「こつちにも覺悟がある。貴樣のやうなものゝ取調べを受けてやるものか！　貴樣の前では、死んだつて白狀なんかしてやらないから！」こんな決心をしてしまつたのである。

翌日の午後、岡本さんが、喜左衛門どんを留置場から出して、裏つ手の陰氣臭い一室へと連れて行つた。そこには、分

署長が待ち構へてゐて、今度は幾分秩序だつた取調べを行つた。しかし、それに對して、喜左衞門どんは、何でもかんでも「知らん、覺えがない」の一てん張りで、我武者羅に自分の意地を張り通した。そして、その結果が、しぜん、昨日と同じやうなことになつてしまつたのである。だが、今日は手を縛られてはゐなかつたし、それに、豫めその心構へがしてあつたので、身をかはしたり、それを防ぐことも出來た。

岡本さんと、もう一人――若いくせに顏の大半をぼう〱とした髭で埋めた、それでゐて、目や鼻のあたりの厭にのつぺりした、硬いのか軟いのかわからないやうな、ひどくあいまいな顏つきをした巡査とが傍に附いてゐたが、その有様を見ると、別に命令をされたのではなかつたが、左右から一齊に喜左衞門どんを捕つておさへにかかつた。

警察が何か、警官にはどんな職權が與へられてゐるか、そんなやうなことの辨へのない、そして、のぼせきつてゐるために今は自分の盗みをしたことなどを綺麗に忘れてしまつてゐる喜左衞門どんは、「何ツ、糞ツ！」といふ氣になつて、

「よしツ、やるならやつてみろ！」

かう叫びながら、三人を相手に、きつと身構へた。

しかし、それは徒らに自分から需めて自分を苛めにかかるやうなものであつた。喜左衞門がやつきになつて反抗すればするほど、相手方の襲撃はいよ〱猛烈の度を加へた。

「さうだ、こいつのあごの髭をつかんで引つぱるんだ！　それから、そいつの腕をねぢあげるんだ！　いや、ちがう、それはおれの足だ！」

喜左衞門どんは、ねぢ伏せられて、うんうん唸りながら、時々、こんな譯のわからない、うわごとみたいなことを云つた。それは、そこへ悴の喜一がやつて來て自分の加勢をしてゐる幻を見てゐたからである。――喜左衞門どんの頭腦は、もう、何だかぼーつとしてしまつてゐるのであつた。（どこか打ちどころでも惡かつたのかも知れない。）そのうちに、その臉

朧とした頭の中で、ふと「おれはこんな目にあはされながら、このまま此所で死んでしまふのかも知れない。」こんなことが考へられた。しかし、さう考へても、少しも悲しくもなければ、厭でもなかつた。なぜなら、それに續いて、「この場となつては、生きてゐて此奴等を負かすことはとても出來ない。その位なら、死んで、幽靈になつてかたきをとつてやる方がましだ！」こんな考が浮んで來たからである。喜左衛門どんは、急に自分が救はれたやうで、嬉しくてたまらなかつた。誰に、何にかはわからないが、とにかく、おじぎをして、おじぎをしてお禮を云はずにはゐられない氣持であつた。

喜左衛門どんは、この部屋のそとに、椎の樹だか何だかがこんもりと茂つてゐるのを、初めに窓から見て知つてゐた。「死んで幽靈になつたら、直ぐに、一先づそこへ姿をひそめることを忘れてはならない。」かう思つた。「さうして置いて、仕事はゆつくりあとでやればいいんだ。……順序として、最初に岡本さんから片づけることにしよう。今晩、村へ歸つて行くところを、どこかで待ち伏せてゐて、不意に、『お化け……』つておどかしてやるんだ。あの人のことだから、膽をつぶして逃げ出すにきまつてゐる。さうしたら、あとから、『ばれろん、(おぶさつてやらうの意)ばれろん！』と云つて追ひかけてやるんだ。お化けにおぶさられれば死ぬといふことは誰だつて知つてゐるから、逃げられるだけ逃げるにちがひない。ところで、こちらはまた、どこまでもどこまでも追ひかけてやるんだ。――川原であらうが、竹藪の中であらうが、川の中であらうが、……夜の明けがたまでには、向ふの方で、さきにへと〳〵になつて倒れてしまふにきまつてゐる。」

喜左衛門どんは、幽靈と二人づれなので、ひどく心丈夫な氣がした。打たれても、小突かれても、おさへつけられても、もう、痛くも苦しくも何ともなかつた。そして、頭の中の考はます〳〵冴えて、力がこもつて行つた。もし、萬一、今晩のうちにやつつけることが出來なかつたら、一旦、ここの椎の樹（？）の蔭へもどつて來て、また、あしたの晩のことにすれればいい。……その次ぎはあの髭もぢや！これも大丈夫、岡本さんと同じやうにして參らせてしまふことが出來

る。ところで、最後に、あのおつかない肥滿漢だが、此奴は、ことによると、おぶさつただけでは往生しないかも知れない。さうなつたら、首を締めてやるんだが、あんなに首が太くつちや、うまく締めきれるかどうか、あやしいもんだ。幽靈になると、凄味の方ならいくらでも出せるが、力は拔けてしまふものだつていふからな。……なあに、さうしたら、構ふことはない、彼奴の家へ乘りこんで行つてやるから。そして、毎ばん、彼奴の寢てゐる部屋の天井で、思ひきりあばれ廻つてやらう!……夜ぢゆう、底氣味の惡い唸り聲を聞かしてやらう!……寢てゐる彼奴の顏へ、生々しい血潮をたら〳〵とたらしてやらう!……それでもいけなかつたら、物凄い鬼火になつて、彼奴の身のまわりを燃えまわつてやらう!……それでもいけなかつたら、眞黑な、大きな――一坪もあるやうな、いや、それよりももつと大きな蜘蛛になつて、彼奴の胸の上へおつかぶさつてやらう!……それでも駄目だつたら……」

この時である、岡本さんでない――もう一人の巡査が、ひどくおびえたガタ〳〵聲で、

「幽靈!」

から叫んで、いきなり、そこへぺたりと尻餅をついてしまつたのは。すると、それと殆んど同時に、あとの二人も、まるで彈かれでもしたやうに、ぱつと後方へ飛び退いた。

自由になつたので、喜左衛門どんは、ひよろ〳〵と立ちあがつた。そして、兩手をあげて打つてかかるやうな容子をしたが、それつきりで、またすぐに、もとのところへぐたりと倒れてしまつた。(完)

――二年・九月稿――



一舊友

佐藤春夫

一

「お父さんはすぐ歸つて來るんだから、みよ子はこゝで、かうして待つておいで。ね。そうらそつから、あつちを見たり、こつちを見たりして、ね。おもしろいだらう」

子供は私の指ざした方へ目をやつた。窓ごしに人や車の行き交ひしてゐる廣場をちらと見てから、私の方へふり返つた。さうして私の言葉にうなづいた。私の車は停つた。私は自分でドアを開けて降りながら、ショファに言つた、

「ちよつと待つてゐてくれたまへ、子供はここへ預けて置くからね」

ショファは目禮で答へた。

私は歩きながら時計を出して見た。まだ八分ぐらゐ間がある。しかし見上げる

と、つきあたりの大きな掛時計はもう四分しかない。ちようどいい。私はプラットフォムまでは行かないことにきめた。せつかく電報が來てゐるほどだから、プラットフォムで私をさがして落膽するかも知れないけれど、あんまり目ざとくない私は、今まで人を迎へに行つて直ぐ相手を見つけ出したことがない。それに今日迎へる人間とは、もう久しく逢はない。改札口で注意してゐた方がまごつかないで見つかりさうである。

私は改札口に立つて、おくれてゐる自分の時計を直してゐた。すると、私の肩をたたく者がある。ふりかへると、そのとたん、そこに村松梢風の顔が私の目にぶつかつた。

「や」

「御苦勞さま。僕は寢坊なものだから、泡をくつて、やつと……」

「僕もさうだよ。今來たばかりさ。プラットフォムまで行つても、兩方で見忘れてゐるだらうと思つて、ここに立つてゐるんだが」

「ここでいいよ。――君は一たいもう何年ぐらゐ會はないの」

「七年、になるかな」

二

我々が今迎へようとしてゐるのは、田漢といふ支那人で、私の知つたころには、東京の高等師範學校へ留學してゐた。彼は私の書いたものに同感したといつて、私に先づ手紙をよこした。つづいて私のところへ訪問して來たのであつた。私たちは一年ほど交際した。交際と言つても先方から訪問してくるだけで、私は一度もそれに答へたこともなければ、またこの他國人をどこへも案內したことはなかつた。といふのは田はもうそのころでは、東京へ來てよほど久しく經つてゐ

たので別に案内を要しなかつたし、また私はといふと、何かとすつかり參つてしまつてゐた時代で、友達をつれて散歩したりするやうな氣輕なる氣持はとてもなかつた。歸國して後も田は時をり才氣の溢れた文章で手紙をくれた。けれども筆無性な私は惡いと思ひながら一ぺんも返事をしなかつた。それだのに村松が上海へ游ぶことになつた時、私に誰か紹介しろといふので、私は田を紹介した。松村はその地で田に大へん世話になつたさうで、それ以來、義理堅い村松は田と缺かさず文通をつづけてゐる。さういふわけで今では、田とは私より村松の方が親しい。實は田が蔣介石の南京政府に投じてそこの藝術部の電影股長とかいふものになつてゐるといふことも、昨日の讀賣新聞で、村松が田を日本の文學社會へ紹介してゐる一文によつて私も知つたようなわけである。

田はその四日ほど前に神戸へ着いたのである。船に乘り込む時に彼は先年上海で交を締した谷崎潤一郎のところへ電報で知らせて來た。神戸市外に居住してゐる谷崎は、しかし折から上京中であつた。けれども田が來ることを留守宅から報ぜられると、彼は直ぐに神戸へ歸つた。も少しは遊ぶ筈だつた谷崎は私の家ではたつた一晩しかとまらなかつた。その谷崎をとほして私は、田の來遊だけは早く知り、上京する時には必ず私の家へ來るようにと、田へくれぐれも言傳てしてやつたのである。私は新築の自分の家へ友達を迎へることが愉快であつた上、又この機會に平素の疎遠を取戻したかつた。

田からは電報が來た。私はそれを湯殿のなかで受取つた。明日朝九時半に着く迎へてほしい、といふのである。明日は日曜だな、と思ふと私はちよつと當惑した。明日は私には先約があつた。二人の雜誌記者と一緒に私は一日淸遊することにしてあつた。私はこのごろどういふわけか自分でペンを執る氣にはどうしてもならない。しかも途中でやめにくいつづきものの仕事にひつかかつてゐた。それで私はその記者たちに賴んで、私の口授を筆記してもらつて、やつと原稿をこしらへてゐた。さういふわけで、私はこの雜誌記者たちには彼等の職務以外の面倒をかけてゐる。で、この一日の遊びはそのお禮ごころといふつもりでもあつた。それもその前の日曜と決めてあつたのを、谷崎が上京したりした都合もあつ

て、私はもう一週間繰り延したのだ。さう重ねて自分の都合ばかりで破約するわけにはいかない。お湯につかつてゐた私の指の水分が、電報紙の上へ吸ひ取られてひろがつてゆくのを見ながら、私は都合が惡いなと思つたが、直ぐに方法を考へた。つまり、田が夜汽車でつかれてゐるやうだつたら家へ殘して休ませ置くし、もしまた元氣なやうだつたら彼をも玉川へ同伴して行かうといふのだつた。

私が停車場へ出かけようとする前には記者のひとりは、約束によつてもう出かけて來た。私は事情を述べてしばらく待つて貰ふことにした。頼んで置いた車が來ると、門まで見送つて來たみよ子を、私は片腕に抱き上げてそのまま、車の中までつれ込んで來た。この子は私を追ふて一刻でも私と一緒にゐたがるしまた自動車に乘ることが好きだからである。

三

「ひところは多少、窮迫してゐたようだが、なかなか出世したさうだから、どんな顏をしてやつて來るものか」

村松の柔和な顏と聲とは、知人の世に出たことを喜ぶ風があつた。私もそれに答へようとすると、轟轟といふひびきが聞えて來た。

「來たようだぜ」

折カバンをかゝへた若い旅客が三四人、身輕るに笑ひ興じながら、ガアドになつた廊下へもう現れて來た。それを先頭にさまざまな旅客の群集がつづいた。村松と私とは默つて先方を見つめてゐた。が、待つてゐる男はなかなか出て來なかつた。と、思ひかけない目の前で一つの顏を見出すと、先づ疑ひすぐ思ひ出した。聲を上げて手で相圖をしたのは、三人とも——田も私も松村も、皆同時だつた。田の顏には、直ぐに活氣が現はれた。私は只一人の彼を想像したのに、彼はもうひとり連れがある上に、七八人ばかりの出迎へに圍れてゐた。さういふわけで私たちは彼を見出さずにゐたらしい。彼は

つかつかと大股で改札口へ出て來た。彼はまづ私の手を、それから村松の手を執つた。私は人と手を握り合ふ習慣はない。さういふ場合には私は自分を東洋人だと思ふ。いつも氣おくれがする。だが、この場合だけは特別だつた。田に對する友情のせゐではない。彼の態度の自然に釣込まれたのだが、きつと上海ではふだんさういふ眞似をするのだらう。

田漢は彼の同伴者を私たちに引き合した。「ナイさん——私のおぢいさんのお友達」と言つたが、おぢいさんといふのは叔父さんの間違ひである。田は以前からこれを間違つて使つてゐる。それにしてもナイといふのは不思議な姓だ。そのナイさんは見たところ三十二三ぐらゐ、田自身と大して違ひのない年輩である。よく太つたのが、田の相變らず痩せた神經質な樣子と對照をしてゐる。言葉がわからないので只てれたやうな笑ひを浮べてゐる。私たちの挨拶がすんだ時、このちよつとの間、私たちのうしろになつて暫く存在を忘れられた形だつた七八人の人々の間から、一人が私の名を呼びかけた。村松が田と話す時、私の名が出たので聞き知つたのだらう。その相手を怪しむまもなく彼は自分を紹介した。葉山嘉樹だつた。また一人が出て來て同じやうに自分を紹介した。里村欣三だつた。彼は私に一枚のビラ紙をくれた。見ると彼等は手に手にそれぞれ一折づつのビラ紙を持つてゐた。私たちの樣子を見て田は、私たちが知り合ひでなかつたのに氣づいて、改めて私たちを紹介した。この一團は雜誌「文藝戰線」の仲間で、名ばかりは私も無論知つてゐる人たちであつた。この所謂無産階級文學者たちのうちの或者が上海で田と知り合ひになつたので、けふはこんなに大勢の同志で出迎へたものらしい。

さて田をどこへ泊めたものかといふことが問題になつた。村松は田から電報を受取ると宿屋を考へてそこを用意させて置いたのだ。私はまた私で自分の家へ迎へてもいいと考へてゐる。村松は彼の用意と私の考へとを田漢に知らせた。すると「文藝戰線」の人たちは彼等にもその用意があるといふのだ。折から彼等の仲間で芝居をするので、その爲めに使つてゐる部屋がいろいろあるといふのである。さう言へば私にくれたビラ紙は、その仲間の前衛座といふ劇團とそれに雜誌

とまた彼等の藝術や思想の一班を、世人に知らせるためのものであつた。ひつぱり紙鳶になつた田は、彼の癖で眉に皺をよせて考へてゐたが、私のところへ行かうと答へた。しかし、「文藝戰線」の連中はなほ重ねて田を誘ふのであつた。田は重ねて辭退する言葉がうまく見つからぬらしい。

「どちらでも君の都合のいいやうにしたまへ。……しかし、今はともかくも僕のところへ一たん來てはどうだね」

私がさういふと、田漢は私に賛成した。

「それじや」文藝戰線のひとりが言ふのである「皆でお茶でも一つ飲まうぢやありませんか」

私は考へながら答へた

「といつて、ここにはそんな場所もなし……」

「廣場の向ふへ行けや、丸ビルの地下室でも」

私は車のなかで待ちくたびれてゐるだらうみよ子と、それから同じく家で私を待つてゐる記者の村井とがさつきから氣がかりなのだ。そこでかうきまつた上はこの大勢の立話を早く切り上げようと思つて私は答へた。

「それはまた、いづれいい機會があるでせう。一つそれは別につくらうぢやありませんか」

四

私は村松をも誘つた。狹い車は一ぱいになつた。私はみよ子を膝の上に抱き上げた。太つたナイさんが前方の小さな台に腰かけたのが氣の毒だつたが、言葉がわからないからそれを挨拶することも出來なかつた。

村松と田とは車に落ちつくとすぐに何かと話し出した。村松はねばつこい調子だし、田は少しどもりながら早口で、まあ中ぐらゐのうまさで日本語を話す。ふたりともなかなか話好きだ。田は村松の問に應じて、改めてナイさんを詳しく

紹介する。私の前に腰をかけて手持無沙汰のあまりに、手を差し出したり笑つて見たりなどして、みよ子をあやしてゐるこの肥大漢は、田の説明によると、南京軍の少將ださうである。尤もそんな資格で遊びに來たのと違ふ。實は汽船のなかでうつかりそんな事を言つてしまつたものだから、いろいろと面倒なことを尋ねられてどうかすると上陸禁止になるのぢやないかと心配したものだ。田は言ひつづける。

「何も、別に目的はないですがね、僕のおぢいさんのお友達で、親友で、僕が今度日本へ來ると、來ることにすると、ナイさんも以前から一度日本を見たいと言つてゐたので、ちようといゝ都合だどいふので見物に來たのです」

「おぢいさんの親友だつて？」

「え、おぢいさんの親友。それはごく仲のよかつた人です。面白い人です。僕とも氣が合ふ」

村松は田がおぢさんを誤用してゐることをまだ知らないらしい。それにしてもこの陸軍少將は、叔父さんの友達といふより田漢の友達にふさはしいほどの年輩に見える。顏色がよくつて丸々と太つてゐるせいもあるかも知れないが、いくらよく見ても村松や私よりは若く見える。そのナイさんは自分のことが話されてゐるとは知らずに、頻りにみよ子をからかつてゐる。子供らしい愛嬌のある男だ。目は少し鈍栗眼だけれども。彼は兩手をみよ子の方へ差し出して彼の膝に來いと、みよ子をあやしてゐる。

「そら、あの小父さんがおいでと言つてゐるよ。行つてごらん」

私はさう言ひながら、みよ子をナイさんの方へ抱いて差し出すと、この人見知りをしない子は、直ぐにナイさんの膝へ行つて抱かれた。さうして一瞬間へんな顏をしたが、直ぐに笑顏を見せた。

「ほう——人なつつこいんだね」

村松が見てさういふと、田は

「幾つになつたの。」
「六つだ」
私が答へると、田は
「佐藤さん、そんなに大きくなる子供がよくあつたのですね」
私は面倒だから、この子供が實子ではないことは言はなかつた。
「ああ、僕も子供をつれて來るとよかつたのですがね」
「さう、さう」村松は思ひ出して言つた「君の子供は大きくなつたらうね。何とかいふ名だつたね、――幾つになつたらうな」
「海男（ハイナン）。五つと五ヶ月になる。」
「もうそんなになるかね。いや、さうだね。僕が始めて見た時には赤ん坊だつた。――お祖母さんがそれや大へんに可愛がつてね」
村松は上海で田漢の家族と親しんでゐた當事を、そぞろに思ひ出すといふ口調であつた。
「大きい」田は言つた「五つにしてはずつと大きい。この人より（田漢はみよ子を眺めながら）もつと大きい。それに賢いよ。妻に似てゐる。大へん神經質、何でもわかる」
子供のことを言ひ出すと田漢はパッショネートな調子になり、すると彼の日本語が怪しくなる。それを聞くと、事情をよく知つてゐる村松は同情を催すのである。私もそれを多少知らない事はない。當時、田は手紙をよこしたし、又後に、村松からその噂を聞いてゐた。田漢はしばらく口を噤んでゐたが、走つて行く車の窓の外をきよときよと見まはしてから、
「あ、ここ、九段のところだ」

「さうだ」私は答へた。

「君は」村松は言つた「よくおぼえてゐるね。この邊は多少變つてゐるだらう」

「變つてゐる。でも、よく思ひ出す」

私は自分の家がだんだん近くなつてくるので、そこに待つてゐる村井を思ひ出した。それから今日の一日の計畫に就て、田と村松とに相談した。田湊はくたびれてはゐないと言つた。さうして即座に賛成した。

「玉川へ行かうと思つてゐるのだが」

「それは面白からう」村松は言つた「僕はまだ野暮な話だがあそこに遊んだことはないがねえ」

「僕も知らないのだ。名ばかりで、面白くもなささうだけれど」

「玉川、玉川。僕知つてゐる。あそこ僕見ました。行きませう。」

幸に田は玉川に遊ぶことを大へん喜んでゐる樣子である。私はふと、彼からのきのふの電報を思ひ出した。

「君――田君。電報は祇園で打つたのだつたね。谷崎が案内してくれたらう」

「さう、きのふ。汽車へ乘るまでゐました。面白かつたよ」

「みよ子」私は閑却されて窓の外に見入つてゐる子供に言つた「こゝどこ？　知つてゐる？」

「……」子供はうなづいた。

「どこ？」

「ね」快活な子は元氣よく、私に答へるついでに皆にも敎へる如く「もう直ぐ、おうちよ！」

みよ子はいつも、江戸川橋までくると見覺えがつくらしい。

五

うちにはベランダの籐椅子に村井がひとりぽんやり待つてゐた。もうひとりの伊藤はまだ見えないといふのである。

「ほ、これは聞きしにまさる邸宅だね」

村松はそんな冗談ともお世辭ともつかぬことを言ひながら、部屋のなかへ這入つた。

よく氣のつく村松は、自分が田に就いて書いた文章の出てゐるきのふの讀賣新聞をポッケットに持つて來てゐた。田は室内におちつくと、さつき車中で受取つたその新聞をひろげて熱心に自分が書かれてゐる記事を讀み出した。その間にナイさんは、ひとりで自分の小さな手提カバンなどを開けてゐたが、名刺をとり出して、私たちにくれた。雷震と大きく二字書いてその下にやや小さく天鳴とある。ナイではないライなのだ。震といふのは名で、天鳴は字なのであらう。面白い姓名だ。それにしてもナイでは雷ではなく地震になつてしまふ。

伊藤は十二時まで待つても來なかつた。十一時かおそくも十二時といふ約束なのだから、何か都合でも出來て來ない事になつたと見える。仕方がないから彼は放つて置くことにした。今日の肝腎なお客たる村井はかうしてよく知らない人たちのなかへ雜つてしまつた。この遊山は自然と田漢のための歡迎會に變つた。

田と雷と村松とそれに私とが一臺に、別の一臺には村井と私の妻たみ子とそれからみよ子とが乘つた。みよ子は私の車へ乘りたさうな顔をしたので、私は車が狹いと言つてきかせた。二臺の自動車は四谷へ出た。明治神宮の外苑を拔けた。田もここを見るのは始めてで、自分が珍らしいだけに言葉のわからない雷のために說明してやつてゐる。道玄坂を上つて行く。私と田とにはふと同じ追想が同時に起つた。それは田が始めて私を訪れた時、私はこの坂をのぼり切つて右に折れた草屋根の家にゐた。ちよつとした庭のあるいい家だつた。田は二三度その家へ來た。

「ああ、僕の妻、亡くなつた妻」田は車のなかで叫ぶやうに言つた「あの人も一度、あなたの家の門まで行つた。とうと、入らなかつた。あなたのここのところの家！」

「さうだ。僕がわざ／＼下りて行つてすすめたが、氣分が悪いからと言つたね。」

「神經質で知らない人を訪ねるのはいやだつたのです。神經質と言へば、佐藤さんも僕が知つたころは、今よりもつと、むづかしい顔してゐたよ。僕の妻、あなたを見てさう言つた。――さうだ、僕が玉川へ行つたのは、あの日です。あなたの所へちよつと寄つて、それから序だから、行つてみた」

「春の終りごろ――いや、まだ春になつたばかりのころではなかつたかね」

「さうです。曇つてゐた日だつた」

「そら、そら……そこに今見える。この坂を下りて行つたところだから」

「へえ？」村松が言ふ「君がこんなところにゐたことがあるのかい」

「あ、見えて來た。あの小高いところ、大きな松のある下の屋根」

「草葺の家はない」

「瓦に變つてゐる」

話のわからぬ雷も私が指さすので皆、首をまげてのぞいた。程近く、小高く、丘の上の家は、その光つた瓦屋根が、私にはしばらく見えてゐたが、木のなかへかくれてしまつた。村松は進んで行く路の竹林を喜んだ。

玉川の遊びは、しかし、少しも面白くなかつた。空が曇つて來て、舟の上では風は初夏らしくない。涼しすぎる。食ふものは少ししかない。うまくない。

「みよ子、かぜを引くよ。元氣がないが寒くはないの」

みよ子は首をふつた。

「寒くはないんですけれど」たみ子が答へた「きつとお腹が空いたのでせう」

冷い川風のなかでビールを飲んでゐるうちに、肴はすぐに無くなつてしまつたし、漁に行つた筈の男はなかなか歸つて來ない。船は鮎漁をするところまでは行かないで上の方で待つてゐるのである。多分、ほんとうにとるのではなく捉つてあるのがどこか川下に生けてあるんだらうから、それにしてはおそい。十二時に家を出て舟に乘つた頃には二時だつた。今に來るかと思つた伊藤を待つてゐたせいで、家では午飯を食ふひまもなかつた。空腹なのはみよ子ばかりではなかつた。さうして滿足に食ふものはないのだ。それでなくてさへも客は大食を習慣にする支那の人々である。

よく諸方のかういふ場所にあるやうに寫眞屋が川原に出張して來てゐて、寫眞をとれと言つてすすめる。田や雷へのおみやげのつもりで撮影して貰ふことにした。

びくを持つて男は歸つて來たが、鮎は數へるほどしかなかつた。みんな鯊ばかりだつた。それをてんぷらにしたが誰も大して食ふ氣にもならなかつた。それでも子供は少しづつはしやいで來た。けれどもたうとう雨がふり出した。五月雨のつづき見たやうな小降りだけれども。

こんなつまらない所だけれども、それでも日曜だけに外にも出かけて來た人もいくらかはあつた。川原には小役人か何かの親子づれらしいのが竿を持つて出かけて來てゐた。來る時にはそこで辨當を食べてゐるのを見かけたが、かへりには父親は竿をかついでうしろ向きに小便をしてゐたし、少年は風呂敷を頭からかぶつてその小雨をふせいでゐた。見る目にあはれだつた。私は自分では物悲しく、外の人々にはそれぞれに氣の毒をしたやうな氣がした。

六

一　舊友

私たちは夕方家へ歸つた。田と雷とは村松が玉川からどこかへつれて行つた。田が思ひ出の多い神田のあたりを歩きたいと言つたので、村松が誘うたのだつた。

彼等も、しかし、九時前には私の家へ歸つた。

日比谷に近い山水樓といふ家で、夕飯を食つたさうだ。支那料理屋だ。

疲れてもゐたらうし、雨がふつては散歩も見物も出來るものではない。お茶を飲みながら、私たちは暫くベランだにゐた。雷は田をつかまへてしきりに話をしてゐる。私は雷に同情した。彼は一日殆んど口を利かずゐるのだから、かういふ時間にでも出來るだけ口を利きたいに違ひない。私はわざと田にも話しかけずに、夜になると足を洗つて家のなかへ入れてやることにしてある狆を相手にしてゐた。菓子皿の上にある揚げたかき餅に目をくれて、金太郎といふ名をつけられたこの狆はいろいろた藝をする。兩手を合して拜む眞似をする。座れと言へば座る。眠れといふと腹這ひになる。食べよと言はなければ鼻の尖へ食ひものを置いても食べない。たゞ、食べたいのでぢれてしきりに吠える。

私は何かの拍子で目を上げてみると、雷はしきりに金太郎に見入つてゐた。

彼は田に何か言つた。

「可愛いといふのかい。犬は好きなのかね、ナイさんは」

「え。犬は大好き。さつきから可愛い可愛いと言つてゐる」

雷はまた一しきり、長く話し出した。一たい支那人は多少舊式な又身分のいい人ほど豐富な表情をしてみせる上に、手眞似もする。雷の話ぶりで私は彼が中流以上のさうして、新教育は受けない人物だといふことに氣がついた。

田は雷の話は殆んど默つて聞いてから、ほんの手短かな返事を一つして置いて、私に言ふのだ、

「ナイさん、もうノスタルヂヤをおこしてゐる。出發する時に猫が三匹子を産んだが、大分大きくなつてゐるだらうと言

つてゐる。それにこの人の長女、許嫁(いひなづけ)の夫と來月の四日には結婚する。もう早く國へ歸らうと言つてゐるのです――來てからまだ一週間とはならないのに。ハ、ハ、ハ」

「この人の長女ていくつぐらゐ」

田は一度、雷にそれを確めてから答へた。

「十九になる――日本流にいふと二十だね」

「で、一たいナイさんは幾つだね」

「三十九か。四十だ」

「へえ！とてもそうは見えないね。僕は三十二三と思つた」

「ハ、ハ、ハ」田は笑ひながら雷に私の言葉を通譯する。

「………」雷は無言で私の顔を大きな眼で見上げて、ちよつと慚羞を帶びた表情をしてから「ハッハッハッハ」その笑ひ聲は腹の底からひびき出て、ベランダ中に反響する程である。私はこの人物が相撲取か何かのやうに愛嬌があると思つてゐたのだが、全く、猫の子が大きくなつたらうといふ話を聞いてから、一さう親しみを覺えた。田は私の雷に對する感情を直覺したらしく、

「面白い人です。ナイさん、坊さんにもなつた事かあるよ。僕のおぢいさん、ナイさん大へん好いてゐた」

「それで君のおぢさんは、幾つだつたのだね、殺された時には」

「殺された！」田はうなづいて「四十八だつた。今から六年前。僕が國へ歸つた年の冬だから。十二月二十七日だ」

「そのころ君から手紙を貰つたつけね」

田は默つて強くうなづいた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

田の叔父は湖南省の督軍の秘書をしてゐた。この叔父は田にとつては父も同じものであつた。三歳の時に父を失つた田は、それからずつとこの叔父に育てられた。叔父には男の子がなかつたので、格別に彼を愛した。そればかりではない、田漢は後にこの叔父のたゞひとりの子である娘と結婚したのである。この從兄弟同志は相思の間柄で日本留學中にも一緒に來てゐた。留學中の學資や何かも無論、田はこの叔父から受けてゐたのであつた。田は從妹に日本語を敎へるために私の「田園の憂鬱」を讀んで講義したりした。田は六年間、東京にゐた。この娘の方は後れて來たからそれほど永くはゐなかつた。田は學校を卒業するとその年の六月に歸國したが、途中で愛人たちは手を携へて奈良、京都のあたりを歩いた。上海に歸つた時には、海男（イナン）はもう彼女の胎内にあつた。田は上海の或る出版書肆で職業を見出して同時に文士として舞臺のまた映畫の創作家の生活を始めた。フランス租界の一隅に彼は母とまだ若い弟とを迎へていい家庭をつくつた。私が上海へ遊びに行かうと彼に約束をして果さなかつたのは、この時分の事である。

彼の妻の胎内にある子供は、その間にもだんだん大きくなつてもう二十日もすれば生れるといふ時期になつてゐた。不意に、彼女の父が殺されたといふ報知に愕かされた。

彼女の父、また田の叔父であり同時に岳父である人は、或る新聞に或る人物を批難する文章を發表したのだ。それは相當な高官で、彼等は互に面識のある間柄ではあつたが、それでも事は行政上の問題で、重大な不正は默視し出來なかつたのだ。

十二月二十七日の夜明け前一時間ほどであつたが、彼の叔父の家の門扉を敲く者が、早急な公用があると叫んだ。家僕が扉を開けると數人の暴漢が闖入した。さうしてこの家の主人を寢床のなかで捉へると、やつと衣物を着換へるだけの猶豫を與へてから、彼等は彼を雪のふり出した戸外へ連れ出した。近くの林の中の道には、別に二三人の男たちが待つてゐ

た。不意に彼は銃殺された。屍は紅い雪のなかに降り埋められてゐた。

この報知に接した田の妻は、それから殆んどものを言ふのも厭ふほど沈みきつてしまつた。けれども子供だけは産んだ。さうしてその後一月ほど生きてゐたが産後の白體で支へるにはその悲しみはあまり大きすぎた。彼の女は日毎に衰弱して行つて、瀕死の枕もとへ夫を呼んだ。

「生れたのは幸に男の子だつたから、あれを私の父の子にして、そのあとを繼がして下さい。海男はあなたの叔父の血を受けたたつたひとりの係なのだから。あなたには今に新らしい奥さんをもらつて、御自分の子供は外にも出來るに違ひないから。どうぞ私のこの願ひを聞いて下さい。さうして　いつかは私たちの敵をとつて下さい」

これが彼女の臨終の言葉であつた。

要するに彼女の父は或る小さな政爭の犧牲になつたのだ、間接には彼女自身も。しかし彼等を殺した當の人間は判つてゐて、しかし判つてゐない。といふのはこんな無法な殺人を犯したのは、攻撃せられたあの政敵の配下の者には違ひなかつたけれども、それは彼等自身の意志から出たもので、その高官その人は少しも關知しなかつたといふのである。さうしてそ人からはわざわざ鄭重な弔ひの使が遣された。さうして下手人の一團はすばやく行方が知れなくなつてしまつた。

彼の叔父を殺させたといふ疑を免れることの出來ない人は、（田は名を避けて言はなかつたけれども）今は武漢の政府にゐて或る樞要な椅子を占めてゐる。武漢の政綱に對して田は必ずしも不贊成ではない。彼の親しい友達の幾人か、例へば彼の藝術上の畏友、郭若沫の如きもそこの政府に身を寄せてゐる。さうして南京政府が北軍討伐の事を忘れて武漢と對峙するのを田は不本意に思はないではない。しかし一度、その武漢に、彼の妻を死なしめ彼の父ともいふべき叔父を殺した人物がゐるのを考へ出すと、田は劍を拔い武漢を討つ軍隊に身を投じてもいいと感ぜずにはゐられない。

吃りながら、氣ぜはしく語りつゞける田の日本語の亂れがちなのは、必ずしも彼が言語に熟しないからではないのである

私は田の話を聞き、またいつか自分の寓居の門の前でちよつと會つたことのある田の妻の臨終を想像して、この夫妻が、由來熱情的な地方として知られてゐる湖南の民であることを思ひ出さずにはゐられなかつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

田は外から歸つて來て、お茶を運んで行つたたみ子を見るなり、

「あゝ、僕の妻、生きてゐるとよかつたのに！」

とさう言つたさうである。事情を知らないたみ子は女中たちと一緒に、田の感傷と日本語としては端的すぎるその表現とを笑つた。私が說明をしてやると、彼女たちはもう笑はなかつた。たみ子は言つた。

「支那つて、そんなところ。怖ろしいわね。まるで野蠻人ね」

七

一體、田はつひ一ケ月ばかり前から、南京の國民政府に用ゐられることになつたのであつた。この政府では、藝術を利用して、民心を啓發させようと試みた。さうして宣傳部に屬する藝術部を、美術、演藝、電影の三股に分つた。電影といふのは活動寫眞の事である。その電影股の股長であつた。日本流に言へば活動寫眞課長なので、少將相當の待遇を受ける事になつた。以前から、上海で活動寫眞製作を獨力で企てて物質的には苦しい算段ばかりつづけてゐた彼にとつては、好きな仕事が心配なく出來さうなこの役目が渡りに舟であつた。田はいろ〳〵の空想を描いた。日本から諸方面の技術者を傭ふことを思ひついた。彼は十日間の休暇を願ふて海を渡つて來た。彼が紹介して革命軍日報の主幹に任用された張は、田に賴んで日本の新聞社を視察して來てくれと言つた。それから田はまた愛好してゐる演劇に關しても日本の新らしい傾向

を知りたいと思つた。

私は田の心持を聞いてゐるうちに、田やまた革命軍日報の新主幹が、どうやらあまり多きな期待を彼等自身に抱きすぎてゐるのではないかといふ氣がしてならなかつた。私は數年前、陳啓明が漳州で建設しつつあつた新政府なるものを見て來た事があつた。さうしてその根柢のない規模と短い運命とを知つてゐた。無論、南京政府は陳啓明の漳州のものなどとは比べものにはならないだらうが、田や張がついでゐるやうなそんな希望が到達するまで、果して南京政府が今日のやうな勢であるだらうかと、人ごとながら不安に感ぜずにはゐなかつたからである。でも彼等の夢に對してそんな事は口に出して言ふべきではなかつた。それに、何しろ日本では蔣介石の人氣は當時大したものであつた。田が南京政府の電影股長と名告つて、日本の土を踏むことは、彼の第二の故郷ともいふべき東京へ、錦衣して歸るやうな氣持もあるに違ひない。田は今まで知つてゐる人や、まだ知らない人や、いろんな人物に會つて見たがつた。

玉川の旗亭で、舟を引き上げた我々が雨を見ながらつくつた田の日程といふものは、どうしても二日や三日の滯在では無理なものであつた。田は田舍の文學青年見たやうに、無暗と所謂有名な人に遇つて見たがる。その人選には彼の個性的な標準らしいものよりも、支那でどんな日本の文學者が重ぜられてゐるかを知るに適當なものである。さうしてこの意味でも、支那の日本語讀書界は日本の田舍と大差ないらしかつた。また田は好機會だからといふので、面識のある限りの人には皆會つて歸りたがつてゐる。

日程表によると、第一日目の朝は、八時から「文藝戰線」同人が迎へに來て、その日初日を開ける前衛座の舞台稽古を見物することになつてゐた。それは田が昨日到着早々、驛頭で同人たちと約束してたのださうである。

私たちは朝のベランダに煙草を吹かしながら、迎へに來る人々を待つてゐた。昨日の雨はすぐ晴れて、強い光線が新しい葉をつけて垂れた凌霄花の枝から洩れてゐた。田はベランダの片隅にあつた支那の水煙の煙管をとり上げて、笑顔で

それを弄んでゐたが、田を通じて私に言つた。

「この土地で、こんないい友達があらうとは思ひがけなかつたものだから、何の土産の用意もなくつて殘念です。あなたは我國のものがお好きださうだから、今度一つ、繡で出來た額を進呈したい。私の故郷の方の名産だから。それにはどんな畫題がいいか。山水か、花鳥か。また水墨風なのがいいか着彩風に色々な糸で繡つてあるのがいいだらうか」

「有難う」私は答へた「もし頂けるなら、花鳥で華やかな色彩のあるのがいい。繡といふものは一たいが綺羅なものだのだから、絢爛な畫題で綺麗な色があつた方がいい」

雷は何か言つた。田は通譯した。

「あなたの趣味はよくわかりました。そしてそれはどの部屋へかけますか、食堂だらうか。又は客間にしますか」

「さあ、どこがいゝか知ら」

雷はベランダから客間を見て居た。そこの一番大きな壁を指しながら何か言つた。あそこがいいといふやうに見える。

「さう、あの壁へかけてもいゝが」

田が私の通譯をし、また雷の返事を私に教へた。「花鳥にはさう大きなものはないから、しかし花鳥がいゝならその兩側に、あなたの名とまた私の名とを書き入れて、わたしくからあなたに贈つたことを記念しませう」

「有難う」

私はふと思ひ出した事があつたので立ち上つた。客間の隅にかくれてゐた支那製の鳥籠を出して來たのである。まるい形で、赤く塗つてある。面白いし、それに値段が安かつたから物好きに買つてみたが、さてそれに入れるに適當な小鳥は考へられなかつた。籠そのものはさう大きくない。だから大きな鳥は飼へない。ところでそのへうは粗く出來てゐる。だから小さな鳥なら拔けて行つてしまふ。で、私はその籠は少くとも日本では實用には間に合はないのに氣がついた。さう

して値段もその爲めにやすいらしい。で、一體支那ではそれに何を飼ふだらうかを私は疑問にしてゐた。幸に思ひ出して、私はそれを持ち上げて示しながら言つた。

「この籠には、一たい、支那ではどんな鳥を飼ひますかね」

田が雷に相談した。雷は言下に答へた。田が日本語に直した。

「白燕といふ鳥がいい」

「どんな鳥。大きさは？」

田はその鳥は知らないと見える。雷に尋ねてゐる。雷はベランダの隅に積んである私の小鳥を指しながら。

「あの一番下のと下のの間ぐらゐ。人の眞似をする、鸚鵡のやうに。眞白い鳥だから赤い籠には似合ふだらう」

「それは珍らしい」私は通譯を聞いて答へた「日本にはそんな鳥はゐない、聞いた事もない。きつと高價な鳥だらう」

「さうだ。つがひで三四十圓するだらう。支那でも珍らしい、白燕のいいのは資のうちだといふ程だから。でも、もし欲しいなら私が搜して贈つて上げろ」さう通譯して置てから、田は言つた「ナイさんは、僕などと違つて、いろんなそんな趣味的のこと、知つてゐる。この人の家にはさまざまのものがある」

私は今度は田に南京政府の話を聞いた。そこには女の士官がゐて男と同じ軍服を來てゐる事、活動寫眞の女優も士官待遇で、やはりふだん軍裝してゐる有樣などを田は話し出した。私は前から上海へは一度行きたいと思つてゐて、まだ一度も行けない。ふと今度、田について行かうかと思ひ出した。私は一たい動亂といふものに興味を感じてゐた。物情の騷然たるところが見たいやうな氣がするのだ。私は一個の頽廢者で單に刺戟を追ふのかも知れない。それとも漸々としたものを求めて、沈滯を嫌ふのだらうか……

「僕も行つて見ようかな」

「行かう。行きませう――面白いから。あなたにはきつと氣に入るよ」

「僕は今までに二度、上海行きを企てて二度とも駄目になつた。一度など神戸まで出かけてゐて弟が重病になつたので歸つて來た――そら、君と約束したあの時だけれど。僕は上海には緣がないかと思ふ。いつも故障がおこるのだものね」

「だから、今度は一つ一緒に行きませう。今度、上海行きでなく南京行きならば故障は起らない」

田が來たといふことを谷崎から聞いた時から私は、そんな氣もあつたのだが、いろ〳〵話を聞き、その上、田に誘はれるとすつかりその氣になつてしまつた。田は言ふ――來月の二日に出る船がある。それに乘れば雷は、來月の四日に擧行する娘の結婚式には間に合ふ。しかし、二日と言へば一週間しか間がない。私はそれだけではどうやら約束をしてある雜誌の仕事を片づけることはおぼつかない。だが出來るだけやつて見てもいいと考へた。

そんな話をしてゐるうちに十一時もすぎたが八時に田たちを迎へに來る筈の人はたうとう來ないらしい。正午には、山水樓で村松は待合してゐる筈である。そこには私も行くことになつてゐる。さうして私と村松とで、田に新聞社の見學をさせなければならない。

村松はもう山水樓に來てゐた。我々は晝の食事を始めた。村松は頼まれてゐるからといふので、讀賣新聞へ電話を掛けた。文藝記者が直ぐにやつて來て、食卓にゐる一同の寫眞をとつた。さうして田に原稿を頼んだ。食事が終るとこの店の主人が名刺をくれるために私のところへ來た。山水樓主の宮田武義はたゞの支那料理屋のあるじではなく、東亞同文書院出身の支那親愛家だといふことは村松からも聞いてゐたが、彼は困つた事に手に畫帖を持つてゐて、私にもそこへ一筆書けといふのである。

「田漢さんにも昨晩記念に書いていただきました」

と言ひながら、帙を外して畫帖をひろげ出した。田は酒氣を帶びた筆で長い文章を記してある――

民國十六年六月二十六日、予由京都、重來東京。舊友佐藤村松諸氏、遠道相迎、握手驛頭、歡悅無量。佐藤氏偕其夫人女公子、邀遊玉川、紅燈畫舫、綠波容與、擧網得鮎魚若干、烹而食之、其味至永。村松氏謂予曰、君昨晚在京都、豈料今日與吾輩網鮎魚於玉川耶。予慨然曰、予六年前、居東京時、曾偕予妻易漱瑜女士、同遊玉川、水邊雙影、髣髴鴛鴦、豈料及五年後、重遊玉川、獨向水中、悼孤影耶。好事不常、舊遊如夢、思之思之、令人泣下。晚與村松氏、飲於有樂町之山水樓、樓主宮田先生、請留數字、因書今日所感如此。讀吾文者、勿以爲田某又發感傷病也。

つまり、彼が昨日の日記である。

醫學博士 藤本武平二先生發明

日米政府專賣特許

肺結核

治癒促進

石灰吸入療法

小酒井不木先生推奬

小酒井先生は「實業之日本」九月號紙上で藤本博士の肺結核新療法に對する予の實驗と題せられ本療法の有効なるを推奬された

尙東京近藤內科療院（近藤博士主任）にても實驗の結果を日本結核病學會の結核第四卷第十一號に發表せられ本療法の卓越せるを證明さる

◆石灰工場に結核なき理由

カルシウムが人體の保健上又治病上大切なものである事は何人も知る處であります。此カルシウムが初めて醫療上に用ひられる樣になつたのは石灰燒場やセメント工場等には不思議にも結核が無いと云ふ事實に其源を發して居るのであります。普通に考へるとセメントや石灰工場の樣な塵埃の渦卷く工場には呼吸器病患者が多いであらうと想像されるが事實は夫れと正反對で皆普通以上に健康で結核などに罹る者は一人も無いのみならず既に罹つて居る者もそこに居れば治つて仕舞ふのであります

それは石灰の煙の中で働く勞働者は絶えず、之を吸込みます。すると氣道の中には水蒸氣と炭酸瓦斯とが多量に有るから初め吸ひ込む時は生石灰であつても水蒸氣の爲めに消石灰となり次で炭酸瓦斯の爲に炭酸石灰となり更に重炭酸石灰となり溶解され吸收されて仕舞ひます、そしていくら多量に吸入しても吸收力の旺盛な肺氣胞內では忽ち吸收されますから肺の中へ蓄積される事は有りません、かくして吸收された石灰はカルシウム特有の有効な治療作用を局部並に全房に發揮します石灰工場に結核患者の無い理由は實に玆にあるのであります、斯樣に確實有効な石灰粉カルシウムを吸入するに必要の吸入器も醫學博士藤本先生が御發明に成り、日米政府の專賣特許を得ました此のカルシウム石灰粉吸入器を使用すれば濃くも薄くも思ひのまゝに誰れでも自宅で簡易に使用する事が出來ます、本器が如何に權威ある結核治療促進療法であるかは先づ說明書を請求して其の内容を一讀御承認あらん事を希望致す次第であります

■適應症■

▽初期肺結核　▽慢性肺結核

▽肺結核の恢復期　▽腺病質の人

●御用命の各大病院

官立 東京帝國醫科大學病院殿
同 金澤醫科大學病院殿
同 東北醫科大學病院殿
同 東京鐵道病院殿
同 臺北醫院殿
同 八幡製鐵所殿
同 南滿鐵道病院殿
公立 仁川病院殿
同 東京市結核療養所殿
同 福島縣立回春園療院殿

文献贈呈

一、藤本內科療院　實驗報告
二、近藤內科療院
　　東京衛生試驗所永見圀次郎先生
　　「肺結核の治療と豫防」
三、小酒井博士、體驗報告
四、藤本博士著、石灰吸入療法（二種）
五、吸入器使用法（全六部）

◎雜誌名記入申込を乞ふ

●粉末吸入器一具箱入（小瓶付）
粉末カルシウム
改正定價金拾參圓送料共（但 領土三十錢）
●粉末カルシウム（吸入用）
十日分一圓、廿五日分二圓、五十日分三圓半

凸形體溫計本舖 フエバー

東京市神田區和泉町一番地

三田村商店

電話下谷（二五四〇番・四一八七番）

振替東京二〇六四二番

定價	送料
一冊 八十錢	参錢
六冊 四圓八十錢	送料共
十二冊 九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一册に付十六錢申受けます
△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい 郵券代用は一割増の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料
△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和二年九月十八日印刷
昭和二年十月一日發行 （禁轉載）

編輯兼發行人 島中雄作
印刷人 高木鳥三
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 株式會社 秀英舍

東京市丸ノ内ビルヂング七七六區
中央公論社
電話丸ノ内二〇六番
振替東京三四番
同 長野三二〇五番


・滋強飲料・
カルピス
CALPIS
カルピス
CALPIS
カルピス
CALPIS
カルピス
CALPIS
カルピス
CALPIS
カルピス

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co. Published Monthly.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.